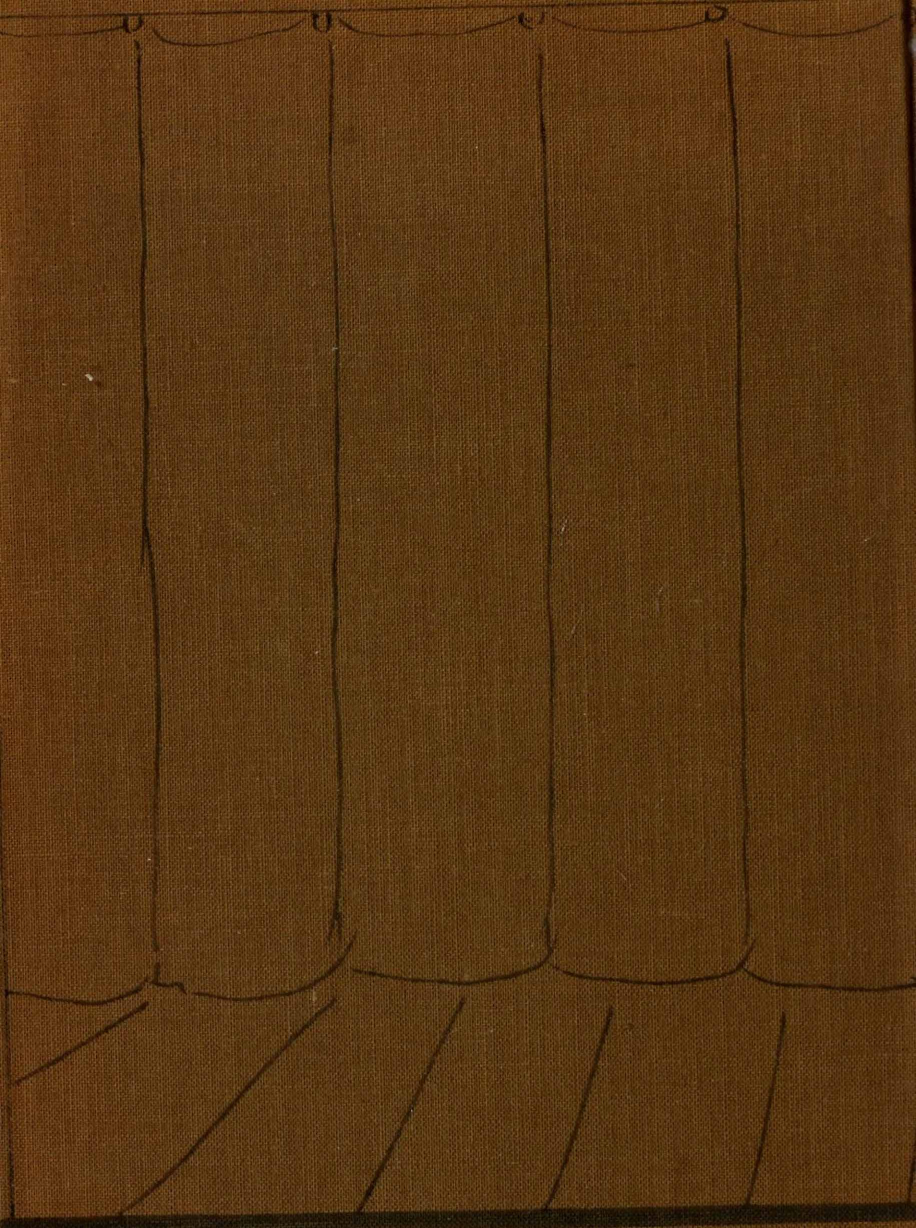
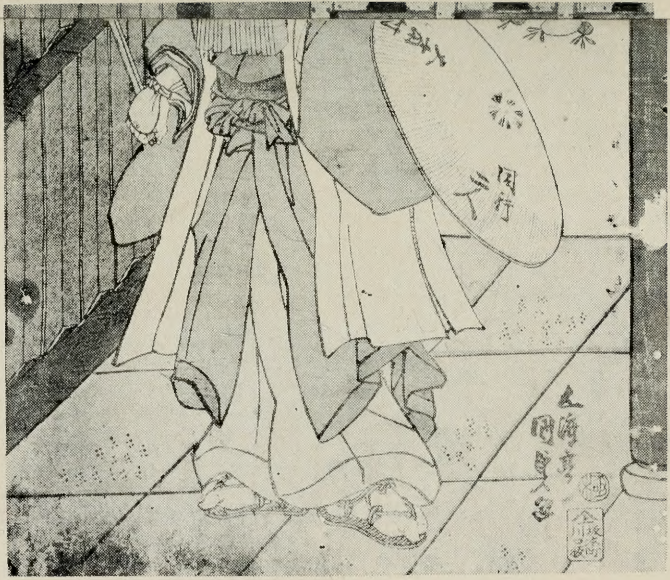


日本戯曲全集
第三巻

石川五右衛門狂言集

東京
春陽堂版



七代目市川海老藏の石川五右衞門
三代目尾上菊五郎の眞柴久吉



七代目市川海老蔵の石川五右衛門
三代目尾上菊五郎の眞柴久吉

日本戯曲全集 第三巻 目次

石川五右衛門狂言篇

金(きん)門(もん)五(ご)山(さんの)桐(きり)



三世坂東三津五郎の石川五右衛門

金門五山桐

序幕

玄海ヶ島の場
島原揚屋の場
御殿折檻の場

役名――早川高景。傾城、六花。亭主、才兵衞。遣り手、すぎ。別木軍藏。宇津木五百右衞門。吉川隼人。傾城、花町。同、櫻木。名和内記。傾城、九重。同、花橘。久吉御臺、蘭生の方。太鼓持ち、友齋。稲見平馬。筒井順慶。眞柴久次。眞柴久秋。岸田民部。此村大炊之助。瀨川釆女。靈山國師實ハ石川五右衞門。

ト序の觸れ入る。大ドロ〳〵。大雷、雨車、風波の音隨分すさまじく、幕明く。

造り物、見附け、浪幕。三間の間、岩山。橋がゝりの方、打寄せにて、兵船打揚げられ、砕けたる體。水主、船頭並びに軍兵大勢、方々に倒れ居る。眞中に早川高景、籠手、臑當、陣羽織、隨分凛々しき形にて、岩に腰打掛け、弓を杖に突いて、彼方をキッと見てゐる。臆病口の方、嶮岨なる岩山。よき所に異風なる石碑あり。吉川隼人、別木軍藏、同じく軍出立ちの形にて、高景に附き添ひゐる。この見得、凄まじき模樣にて幕あく。

ト浪頭打つ。

軍藏　御主人、高景さま、お心が附きましたかな。

高景　ムウ。身が朗黨、吉川隼人。別木軍藏。

兩人　ハッ。

高景　この度大領久吉公、異國征伐し給はんと、先陣は諸大名の面々、彼の地にて合戰最中、久吉公は肥前名護屋に御出陣。然るに、この早川高景、加勢の爲、彼の地へ出船の折柄、名護屋を離れて二十里餘り、海上へ出でしところ、俄かの難風、爰へ打寄せしに、見れば、人倫離れし峨々たる岩山。日本の地か。高麗のうちか。隼人、船頭どもに、尋ね見よ。

隼人　ハッ。御主人の仰せなれど、三日三夜の大風、お供

の船は破船し、相殘るはお召しの船、只一艘。水主船頭ゝは勿論、軍兵どもも、未だ人心地は附きませぬ。

軍藏　イヤモウ、山とも海とも分らぬ難風、我れ〳〵御主人の御先途見屆けんと、覺悟いたせし折に臨んで、爰に打揚がりしは、御主人の御運の強さ。名護屋を出てから、凡そ三百里も參つたと存ずれば、この島は高麗のうちかと存じられます。

高景　誠に、不思議に命長らへしは、これ弓矢神の加護。併し難風の次第、島の樣子、とくと見屆けねば、後日に我が君への申し譯。先づ兩人、島の樣子を、とくと見屆けよ。

隼人　ハツ。畏まりました。

ト兩人立つて臆病口の方へ行かうとする。此うち始終、浪頭。隼人、軍藏、右の石碑を見て、高景の前へ來て

軍藏　人里離れしこの島に、心得ぬこの石碑がござります。

高景　ナニ、石碑が、

ト側へ行き

ムウ。何やら碑の銘はあれども、汐風にしやれ、文字も分らず。

隼人　何にもせよ、不思議の石碑。

高景　島の樣子も、これにて相知れん。

ト思ひ入れあるうち、橋がゝりより仕掛けにて雁飛んで來る。高景キツと見て、弓を取つて、枯木の枝をへし折り、矢に番うて切つて放す。雁仕掛けにてバツタり落ちる。高景取上げ、雁を引裂き、右の石碑に雁の血を塗り附け、隼人に陣羽織を脱がせ、といふこなし。隼人心得、陣羽織を脱がす。この陣羽織の裏を右の石碑に當て、石摺りの心にて文字を摺つて取り、軍藏、隼人引ッ張り見せる。高景こなしあつて

高景　ムウ。江南一株の枳、江北二株の橘、都掛二金鈴一繋二扶桑一、大明宋蘇卿手判。ムウ。江南一株の枳、江北二株の橘、都て金鈴を掛けて、扶桑に繋る。大明……宋蘇卿。

隼人　ムウ。その銘に大明とあれば

軍藏　すりや爰は、唐土の出島でござりますかな。

高景　イヽヤ、爰は矢張り日本の内。

兩人　それに、その碑は、

高景　されば、江南一株の枳とは、唐土に一つ子を遺し、日本へ渡り、江北二株の橘は、和國に住んで二人の倅を儲く。都て金鈴を掛けて扶桑に繋るとは、日本を覆し、

唐と日本を、三人の子供に、世を治めさせんといふ叛逆の張本、大明の宋蘇卿といふ毛唐人、先達て日本へ渡り、叛逆を企つるか。ハヽ、ハテナア。

トこなしある。

隼人　すりや、宋蘇卿といふ唐人、日本へ渡り

軍藏　謀叛を企つるとな。

高景　遠き慮りなき時は、必らず近き憂ひあり。高麗へ加勢よりは、一旦立歸り、久吉公へこの趣きを。

隼人　いやと申して、方角知れぬこの島より、

高景　誠に計られぬ海上の案內。

ト此うち少しドロ／＼にて、臆病口より鳩五六羽飛んで來る。高景の上にて二三度舞うて、橋がゝりの上へ飛んで入る。

高景　あれ見よ、兩人。何處ともなく多くの鳩、飛び來つて飛ぶは、日本の地を敎へ給ふ。正八幡のお告げなるか。エヽ、有り難やなア。

ト禮拜する。ト船頭、軍兵皆々、ウンと心附き、起き上がる。

軍藏　ヤア、皆の者、心が附いたか。

皆々　やうやく、人心地が附きました。

船頭　ヤレ／＼、恐ろしや。三日の難風で、命をしまはうとした。

水主　ヤア、今朝方、眞ッ暗で打寄せた爰は、玄海が島。

隼人　ナニ、玄海が島とな。

船頭　さうでござります。あの岩を目印に、異國へ乘込みまする。

高景　すりや、未だ日本の地は離れず。神のお告げと石碑の銘。かゝる不思議に遭ふも、久吉公の武威の德。某が弓矢の規模。船をしつらひ、出船の用意を急げ。

軍藏　すりや、これより直ぐに、

高景　引ッ返して名護屋の凱陣。某はじめ爰へ打寄せしは水主船頭の働き。褒美は着次第。先づ先づ、出船。

皆々　ハア、畏まりました、

高景　いさられ、者ども。

皆々　ハア。

トよろしく。

ト直ぐに口上出で、「と申しまするが狂言の發端でござります。左やうに」と入る。と、テントンシヤンと騷ぎ唄にて、早幕開く。

造り物、平舞臺、見附け一面に塗り骨障子。橋がゝり、臆病口、筋違ひに、同じく障子屋體、隨分綺麗に。右騷ぎのうち、才兵衛、亭主にて、奥より出で

才兵　ソレ、仲居ども、今日は久さまの約束の大寄せ。太夫さま方はまだか。これはしたり、何時でも隙がいる。久さまのお出でないうち、ちよつと行て呼びまして來うか。……ヤア、皆、向うから、風流な道中姿で、見えるワ／＼／＼。

ト渡り拍子になり、向うより六花、花町、九重、櫻木、萩の戸、花橘、傾城の形にて、桃の花の長柄さし掛け、道中にて出る。萬代、八千代、吉野、富彌、禿にて、めい／＼桃の折り枝を持ち、すぎ、遣り手にて、皆に附き出る。本舞臺へ來て、並よく並ぶ。矢張り桃の花傘をさし掛ける。此うち始終渡り拍子。と向うより眞柴久秋、廣袖の衣裳、羽織。瀬川采女、衣裳、羽織。名和内記、宇津木五百右衛門、稲見平馬。友齋、太鼓持ち、皆々、衣裳、羽織にて、花道より本舞臺を眺め

久秋　なんと、采女、皆の者、斯う見渡したところは、何と劣らぬ梅櫻、櫻の腰附き。どうも云へぬおやないか。

采女　イヤモウ、昔から大將の息子どもが、親仁にせこめられて、斯ういふ面白い廓の味も知らずに、朽ち果てるは、如何にしても不便さに、それでこの久大盡にも、瀬川采女といふ粹の骨頂が勸め込んで、花やかなる揚屋の騷ぎ。まんまと現他愛に仕上げたは、ア、我れながら、天晴れの大忠臣ぢやよなア。

久秋　成る程、采女が云ふ通り、其方が勸めて面白い廓の遊び。併しこの久秋は、あの九重たつた一人。アレ、あゝ並んだうち、一人として、采女、其方が

采女　オツと、君の御諚、禁制々々。それ／＼、そこらあたりへ目をきかして、物を云はぬと、雲行きが變るぞ。

久秋　でも、采女、あんまり惡性なぞや。

内記　そこで某も、采女どのゝ上がり膳を、せしめ姿と出掛けたぢや。

采女　どうもおれも、助けを入れねば續くまいと思うて、さす敵と定まるは、彼の花車の勝負次第。

内記　それは有り難いぢや。

五百　我れ／＼も相伴いたす。

友齋　イヤモウ、所詮お前方も、一通りでは誰れも得心はあるまい。どうぞ花車に勝つて、相方のお敵を極めたがようござります。

釆女　それで思ひついたる花軍の趣向。
久秋　兎角親仁の留守を幸ひに
平馬　晝夜分かたぬ里通ひ。
釆女　兎角浮世は色と酒との樂しみ合せ。
皆々　トチチン〳〵。
ト皆々浮いて本舞臺へ來る。久秋、釆女並よく並ぶ。内記、無性に踊つてこける。五百右衛門、友齋、平馬引き起し
友齋　アヽ、これは。今からこの腰のなさでは、スワといふ時、心元ない。
内記　イヤ〳〵、いま、腰骨を打つて置くのは、彼の時の心當ぢやて。
友齋　ハテ、きつい負け惜しみぢやなア。
皆々　ハヽヽヽヽ。
ト皆々納まる。花橘こなしあつて
花橘　釆女さま、先刻にから、お前は、味ィな物の云ひやうぢやが、また例の悪性ぢやな。
釆女　氣もない事〳〵。左やうの事は、夢にも御座なく候ふ。
花橘　イエ〳〵。合點がゆかぬ。申し、花町さま。櫻木さま。六花さま。お前方は、アノ、釆女さまに逢はんしたか。
櫻木　サア、それはナ。
釆女　シイ〳〵。
二人　イヽエ。
花橘　エヽ、また氣がもだ〳〵して來た。九重さま、お前は、大方知つてゞあらうがな。
九重　なんのわしが知らうぞいなア。知らぬわいなア。
花橘　よい〳〵。所詮、あの釆女さまの悪性面を、どのやうに政道しても甲斐がない。腹は立たぬ程に、云うて聞かして下さんせ。
九重　なんのマア、瀨川釆女さまと橘さま。深いと知つて居る二人の仲、悪性なというて、誰れが逢ふものがあらうぞいな。
花町　さうでござんす。
九重　アレ、あの通りぢや。儘にして置かしやんせ。橘さま、癇の種ぢやぞえ。
釆女　ハヽア、流石は我が君に、風味を奉る九重さまのお詞。今の執成し、發明の粋さといふものか。エヽ、我が君の、とばしりがなくばなア。

久秋　九重もかいやい。
釆女　南無三、口がすべつた。
内記　ても、きつい好きぢやぞ。
花町　橘さま、必らず疑うて下さんすなえ。
櫻木　ほんに、側へも寄つた事はないぞえ。そりや、わしが證據ぢやわいなア。
花橘　證據人も證據人ぢや。合點のゆかぬ事ぢや。
富彌　申し、今日の趣向ぢやと云うて、わたしらに桃の花を持たせさんしたは、こりや何の事ぢやえ。
皆々　雛祭りでもして下さんすであらうぞいな。
すぎ　ア、、コレ〳〵。雛祭りではない、花軍ぢやわいの。
八千　花軍とは、何の事ぢやえ。
すぎ　ハテ、花で軍をして、勝つか、負けるか、見るのぢやわいの。
皆々　こりや面白からうわいの。
内記　なんであらうと、一人づゝおれにかゝれ。持つてゐる花の散つた者が負けぢや。
女連　負けると、どうするえ。
内記　ハテ、負けた者を、めい〳〵抱くのサ。

女連　そりや、どうしていなア。
友齋　その譯は私しが申しませう。
ト仔細らしく行司のやうにして
東西〳〵。この花軍の濫觴を尋ぬるに、昔唐土玄宗皇帝といふ王樣の思ひ附きにて、三千人の后を集め、花軍の勝負を試みて、負けると直ぐに床入りの遺縁り。四十八手の曲取りに、互ひに汗を流して合戰す。鼻のいきりの花軍、鼻の高いは丈夫の看板。我れらが鼻は、紙ばなを戴き山の時鳥、ホウ法華經の趣向の花軍、謂はれはあらあら、斯くの通りでござりまする。
五百　それで我れ〳〵も、花軍をはずみ切つてゐるサ。
女連　なんの事ぢやいなア。
九重　これはどうぞ、やかましさうな事ぢや。いつその事に、云うてしまはうかえ。
久秋　一度は云うて、得心させねばならぬ事ぢや。云うて聞かしや〳〵。
九重　皆樣、今日の花軍の趣向は、お前方の花を極め、子供に持たせて、負けた者が、あのお方々のお相方になるのぢやといなア。
皆々　エ、。

平馬　なんと、けうといものであらうがな。

花橘　釆女さま、お前も滅相な。人の得心もせぬ事を。

釆女　コリヤ、云ふな／＼。汝一人は除けてある。得心しても、せいでも、軍の勝負が床入りの始まり。

内記　さうぢや。思ふ存分にするわサ。

ト櫻木、釆女の胸倉を取つて

櫻木　コレ、釆女さま、なんぞわしに意趣があるかえ。一度でも云ひ交した仲ぢや。憎いなら憎いと、なぜ殺しては下さんせぬ。あの人さんと逢はせるとは、お前、胴慾でござんすぞえ。

釆女　サア、惣々が嫌ふに依つて、それで花軍の思ひつきぢや。

ト花町、九重を捉へ

花町　九重さん、お前、わたしと釆女さまとの事知つて居ながら、花軍さして濟むかいなア。

櫻木　イヤ／＼、所詮心意氣を、直にせりふせねばならぬわいなア。

花町　さうでござんす。

ト皆々釆女を捕まへ

お前はわたしを、嫌めんしたのかえ。

花町　云はんした事は、皆嘘か。

皆々　サア、返事さしやんせ／＼。

トゆさぶる。花橘皆々を突き退け、腹の立つこなしにて

花橘　何の事ぢや、どうでこんな事であらうと思うた。人の見る前をも憚らず、あんまりであらうがな。

釆女　そりや見たかな。

花橘　黙らしやんせ。一體お前がお好きさんぢやわいなア。九重さま、これはどうでござんすぞいな。互ひに嚴御づ張り番して、外の者に目も見合せまいと云うたのに、先刻のやうに執成し云うて、又わたしを嫌めるのかえ。如何にお前の殿樣がおとなしいと云うて、人の事もちつとは思ひやつて、下さんしたがよいわいなア。

九重　その恨みを受けるであらうと、覺悟して居たわいな。云うても告げんでも、後の祭りぢやに依つて、斯ういふ事を幸ひに、一時に腹立てさして、釆女さまを懲らさうと、隱して居たのぢや程に、なんぼなりと、云はんせ云はんせ。

久秋　それは、けしかけるやうなものぢや。

九重　仰しやんな。お前も油斷がならぬ。

久秋　オツと、側杖の來ぬうち、無言〳〵。

采女　ア、、悪事千里ぢやなア。もうフツ〳〵、これに懲りぬものはない。

花橘　知らぬわいな〳〵。

ト無性に腹を立ち、采女を叩く。

九重　こりや、わしが仲直しをせうわいなア。

采女　申し、もう化けの皮を顯はして下さりませ。

久秋　コレ、好い加減に腹立てさしたら、云うてしまや。

九重　そんなら、皆樣、もうよいわいなア。

女連　もうよいかえ。

九重　よいとも〳〵。此やうに味よう行た事はないわいな。

女達　オヽ、をかし。

久秋　イヤモウ、近年の慰みであつたわいの。

女連　あの、腹立ちさうな顔を見やしやんせいなア。

内記　イヤ、近年の大出來でござりまする。ハヽヽ、ヽヽ。

友齋　けうとい趣向でござりました。ハヽヽ、ヽヽ。

花橘　人の腹立てるのが、なんでをかしいぞいなア。

九重　これがをかしうあるまいかなア。お前に腹立てさゝうと思うて、態々寄つて

女連　騙したのぢやわいなア。

久秋　あんまり其方が、采女を大事がるに依つて、皆の者が采女と相談して、悋氣をさせたのぢやが、なんと、腹が立つか。

花橘　エヽ、そんなら、皆騙かえ。

女連　騙されて、好い氣味の。

花橘　こりや又あんまり、むごうござりますわいなア。

ト久秋へ云ふ。

九重　サア、これから采女さまに、詫び事させにやならぬぞえ。

久秋　それ〳〵、采女が、怖い顔ぢやぞや。

花橘　つんと悪い事ばつかりしてから、

ト思ひ入れあつて

申し、采女さま、もう堪忍して下さんせ。

ト采女こなしあつて

采女　知らぬ〳〵。ようおれを叩いたなア。

花橘　それでも殿樣は上り、腹が立つたに依つて。お前もまた此やうに騙してから、つんと、エヽ、堪忍して下さんせいナア。

采女　申し、我が君樣、どう致しませう。

久秋　もう堪忍してやつたがよい、
采女　イエ〱、もつと懲らしませう。
九重　橘さま、ちやつと抱きつかしやんせいなア。
花橘　それでも、拍子が抜けて。
女連　エヽ、鈍な橘さま。
　ト皆々花橘の手を取つて
九重　サア、采女さま、いま抱きつかす程に、手を廣げさんせ。
采女　イエ〱、よしに致しませう。
九重　アレ、申し、否ぢやと云うてゞござりまする。
久秋　采女、抱きつけ。
采女　ハアヽ。
久秋　これでよいか。
九重　イエ〱。手を廣げにや、勝手が惡うござりまする。
久秋　采女、手を廣げい。
采女　ハアヽ。
　ト手を廣げる。
久秋　ツツと側へ寄れ。
采女　ハアヽヽ。

　、側へ寄る。
九重　ソレ、抱きつかしやんせ。
　ト花橘を突きやり、抱きつかす。
皆々　ワアイ。
　ト笑ふ。
采女　ヤイ〱、皆いま笑ひ居つた代り、これから花軍して寢さするぞ。
内記　誰れ彼れのといふ遠慮はないぞ。
平馬　此方は寢刃を合せ、待つて居るぞ。
五百　りうこつ、車輪の鎗先。
友齋　サア、兩方立合うて、お敵を定める、結びの花軍。
皆　かゝれ〱。
　ト白囃子になり、子供皆々内記、平馬、五百右衞門にかゝり、少し模樣取りになり、好き所にて内より
内方　筒井順慶さま、お入り。
久秋　皆、待て〱。筒井順慶が來た〱。
采女　ハテ、順慶でも、博勞町でも大事ござりませぬ。この面白い花軍が止められるものか。構はずと、勝負せい勝負せい。
久秋　それでも、騷ぎの體を見せては惡い。鎭まつてくれ

鎮まつてくれ。

ト久秋、氣を採む。采女構はず。橋がゝりより筒井順慶、侍衣、長袴にて、家來、車に金箱を積み、引き出る。采女、顔見合せ

采女　ヤア、順慶どの。

順慶　采女。我が君久秋公、御機嫌の體を拜しまして、大悦至極に存ずる。

久秋　筒井順慶、この間は逢はぬが、母上樣にも御機嫌は、

順慶　ます／＼よくござりまする。

内記　して、筒井順慶どのには、この所へ、何用あつて、お越しなされしか。

順慶　拙者この所へ參つたは、殿の御機嫌伺はん爲。同じ御遊技とは申しながら、兄君久次公には、心猛々しく、久吉公の御機嫌に叶はず。御舍弟なれども久秋公は、兼ねて四海の跡目と、久吉公思し召さるゝ段、順慶推量いたし罷りある。追ツつけ四海の武將。どのやうなにたへを遊ばされても、苦しうござりませぬゆゑに。

久秋　何と云ふ、順慶。すりや身が遊び事も

順慶　ハテ、天下晴れてサ。

采女　いよ／＼、順慶どの、アノ久秋公が、この廓に於てお騒ぎあつても、苦しうござらぬとな。

順慶　その廓通ひも、瀬川采女、其方が勸めとあるが、オオ、出かした／＼。追ツつけ四海の主、この位な事は些細な遊び。采女、皆の者も、なぜ、もそつと華やかにおいさめ申さぬ。

内記　イヤ、なんぼ采女どのがお勸め申されても、久秋公には、我が君久吉公、異國征伐にて、肥前名護屋に御對陣のお留守といひ、

平馬　御舍兄久次公への聞え、まつた御母公樣への御遠慮。

五百　それゆゑ、我が君樣の御遊興も、おのづと穩便に。

順慶　なんの穩便。追ツつけ四海の武將と仰ぐ久秋公、誰れに遠慮があるものぞ。どうぞ殿樣や采女が遠慮、初心な遊びと存じて、拙者が參つた。ナニ、家來ども、引かせし物をこれへ。

侍ひ　ハア、。

ト右の車を前へ引出す。

采女　順慶どの、この金子は、

順慶　御用金の詰め替へ、身共が計らひ。我が君の廓の入用、隨分カツ／＼と庭鳥さばき。

平馬　控れあらう、京都の留守居、筒井順慶さまの仰せ。

我が君御遊興のお供は、冥加に叶うた役目。
五百　この上は、氣に入つたお敵は、直ぐに根引き。
内記　イヤモウ、筒井順慶どのゝ仰せ。これがほんの、天井抜けての遊びといふのでござらう。
ト釆女、こなしあつて
釆女　ハア、、誠に龜の甲より年の功と、身共が殿を勸め込んだは、天晴れの粹と思うて居たに、また上々は順慶どの、御用金まで牽かして、追ツつけ四海の主に、おなりなさるゝ久秋公、遊びが小さいとは、イヤモウ、けうとい〳〵。これからは誰れに遠慮を投げ節で、死なざ止むまい廓の騷ぎ。どうせうとまゝ。殿にも、さぞお喜び。
久秋　喜びの段か、筒井が來たは、一番意見する所を、せぬは、きつい粹ぢや。
花橘　ほんに、順慶さまといふ名も怖し、顏も怖い顏ぢやが、きつい粹樣ぢやなア。
釆女　粹の段か、大骨頂ぢやわいの。
順慶　ムウ、釆女、こなたの相方、聞き及ぶ花橘とやらぢやの。
釆女　我れらが二世までと云ひ交した、可愛い戀女ぢや。どうでござる。
順慶　なか〳〵聞いたよりは、好い器量ぢやて。
久秋　時に、兄上、久次公の御機嫌は。
釆女　ハテ、惡黨な久次公の儀は、お構ひなされまするな。
久秋　イヤ〳〵、どうぞ父上の御機嫌に叶ひ、四海の跡目は久次公へ。
順慶　なんの〳〵、子を見る事親に如かずと。我が君、久吉公、跡目の御沙汰のないは、常から惡黨の久次公、それゆゑ久秋公を、四海の跡目になさるゝ御器量。
久秋　イヤ〳〵、兄久次公を差措き、この久秋が、なんと四海の跡目を繼がれうぞ。
順慶　イヤモウ、兎角久吉公の、御上意次第でござりまする。
友齋　ア、、これはきつく滅入つて來たぞ。
平馬　それ〳〵。きほひかゝつた花軍の腰が折れた。
順慶　オ、、こりや身が誤まつた。年寄つては、早く立つがよい。
釆女　イヤ、立たずと、振り袖でもあてがはうかい。
順慶　お座敷の興になるならば、如何やうとも致さうかい。

采女　こりや、持てるわいの〳〵。

順慶　そんなら身共も、寄せてもらはうかい。

内記　サア、粹な親仁が、降つて來たぞ。

久秋　皆の者、順慶へのもてなし。騷げ〳〵。

采女　ヤア、千代の始めの一踊り、これを來て見よかァしのべ。

皆々　行て見よかァしのべ踊りは、アリヤ〳〵、よいやさ。

ト踊り三味線になり、皆々よき所へ、向うより侍ひ一人走り出て

侍ひ　ハア、、申し上げまする、久秋公へ御母公樣よりの仰せに依つて、南禪寺の靈山國師、これへお入りでござりまする。

久秋　待て〳〵、皆の者。

皆々　ハア、。

ト鎭まる。

久秋　母人樣の仰せとあつて、南禪寺の國師、これへ來るとあるが。

平馬　ハ、ア、知れた事、この間より居續け、御臺樣の御案じで、お迎への爲の使僧と見えまする。

順慶　イヤ〳〵、御母公樣よりとあれば、打捨て置かれますまい。

友齋　なんでも堅い禪坊主めを、この座敷へ呼び寄せ、色酒で盛り潰さうではござりますまいか。

采女　こりやよからう。酒肉山門に入れぬ禪坊主。この美なる色どもに盛り潰さしたら、面白からう。

久秋　そんなら對面してくれう。此方へ通せ〳〵。

五百　南禪寺の靈山國師、我が君のお召し。これへ通らつしやれ。

ト鳥屋の内より

靈山　ハア、。

ト紫の僧衣に、拂子を持ち、靜々と出て來る。後より上下侍ひ大勢、供に附き、出る。靈山國師、花道にてこなしあつて

武將の若君、金吾久秋公は、何れにお渡りなさるゝな。

順慶　さては貴僧が、靈山國師かな。即ち、我が君久秋公はあれにまします。

靈山　ハッ〳〵。

ト平伏する。ト此うち始終靈山は花道、皆々は本舞臺なり。

久秋　ムウ、南禪寺の國師、母上より久秋への使僧とは。

靈山　ハツ。その趣きと申すは、君、この所に御座を定められ、晝夜の御遊興、御歸館なきゆゑ、御母公のお心遣ひ、且は御身の障りも計られず。武將久吉公には肥前名護屋に御對陣なれば、君のお身持ち惰弱の次第、上聞に達しなば、父君のお怒り、そこを察して、御母公より拙僧への仰せ、武士に命じてお迎へも御機嫌を計らせ、世を離れたる靈山がお迎ひ。早々御歸館あられ、然るべう存じ奉りまする。

久秋　大方そんな事であらうと思うた。釆女、どうせうぞ。

釆女　どうと申して、この面白い廓を振り捨て、堅い屋形へ歸つては、ほんの花壇を取措いて、茨を植ゑるやうなもの。

九重　イエ／＼、御母公様の御機嫌のそこねぬうち、一先づ御歸館遊ばしたが、よろしうござりませう。ナア、橘さま。

花橘　さうでござんす。ひよつとお首尾が損ねては、釆女さまにも逢はれぬやうにならうかと、案じられるわいなア。

順慶　なんの／＼。先程より拙者が申す通り、武將の御意に叶ひし久秋公、御母公のお使ひは、御前の思し召しを計つて、女の小さいお心からでござる。

内記　左やうでござりまする。女儀の事なれば、御尤もには存じますれど、追ッつけ四海の跡目、武將におなりなされば、又と來られぬこの廓。

平馬　十日や二十日の御遊興は、苦しうもござりますまい。

三人　矢張り、構はず、お騒ぎあられませう。

靈山　イヤ／＼、いづれも。君々たらねど、臣々たり。我が君、酒色に溺れ、御歸館あらずとも、各々お諫め申すこそ大道。それに、共に踊り狂ふとは、何事でござる。まつた、君にも、父母在す時は遠く遊ばず。一刻も早く御歸館は孝の道。サア、久秋公、靈山、御誘引申し奉りまする。

久秋　なんぢや知らぬが、堅いぞ／＼。

靈山　良藥口に苦しの譬へ。却つて御身の幸ひたるべし。うろたへ武士にお構ひなく、片時も早く、お館へ。

順慶　ヤア、うろたへ武士とは、出過ぎた一言。何を以て雜言過言。

内記　三界無緣の捨坊主、我れ／＼に向つて慮外の舌の根。

平馬　今一言吐かすが最期、切つて／＼切り下げるぞ。

靈山　ハヽヽヽヽ。出家、侍ひ、義は一つ。君を諫め奉るこそ臣下の役。それになんぞや、我が君に御放埓を勧むるは、人畜生、人でなし。三界を家となす出家の身、かゝる遊里へ足踏み込むも本意ならねど、天下の御母公の仰せゆゑ。

順慶　ヤア、云はせて置けば重なる雑言。人でなし、畜生とは、この順慶を畜生と云ふのか。

五百　我れ／＼も畜生にするのか。

内記　武士を捉へて畜生とは。

靈山　畜生であるまいか。三度諫めて身退くが本意。それになんぞや、淫酒を勧むる知行盗人ぢやに依つて、人畜生と云ひしが、靈山が誤りかな。

平馬　さいふ汝も、畜生のうちぢやわい。

靈山　五戒を保つ大道心、何を以て畜生とは。

友齋　ハテ、出家、侍ひ、犬畜生といふではないか。

靈山　ハヽヽヽ。文盲愚痴の汝等に、詞交すもこの身の穢れ。久秋公には疾く御歸館。

順慶　ヤア、ならぬ／＼。お供してよくば、この順慶がお供する。無駄言云はずと、とつとゝ歸れ。

靈山　イヽヤ、お供せぬうちは、いつかな歸らぬ。

順慶　某が歸して見せう。

靈山　アノ其許が、この國師を。

順慶　おんでもない事。

靈山　歸してお見やれ。

順慶　歸して見せう。

ト順慶、平馬、五百右衛門、内記、皆々靈山へ反り打たせて詰めかくる。釆女、皆々を留めて

釆女　順慶どの。お三人も、先づ／＼、お待ちなされい。

三人　イヤ、只今の雑言。

釆女　サア／＼、御尤もでござりますれども、國師は御母公よりのお使ひなれば、

皆々　でも、久秋公を。

釆女　サア、御歸館させねば濟みませぬ。ナ、コレ、御母公の仰せ、私しもお供仕りまする。

花橘　申し、釆女さま、それではお前、

釆女　ハテサテ、なんのほんまに。イヤ、ほんまにお供仕りまする。ナ、左やうにないと、使僧の役目も立ちませず、久秋公のお身の上。それぢやに依つて、マア一先づ、御歸館を、ナア、一寸遁がれにナ、こりや、我が君、御歸館遊ばされませう。

久秋　トいろ／＼皆々に呑み込ます。久秋も心得
成る程、采女が云ふ通り、母上の仰せとあれば、一先づ歸館せうわいの。
ト皆々采女と顏見合せ
皆々　左やうなれば、我れ／＼もお供仕りませう。
采女　アレ／＼、聞かれたか國師。我が君御歸館とあれば、使僧の役目も立つと申すもの。併し采女が存ずるには、久秋公の御意、只今にても御歸館はなさるれども、それでは又、そこらあたりの思惑。今お歸りになつたら、もうこれぎりに殿樣に逢はれまいかと、ハッと思うて、ひよつと癪が取詰めて、死んでしまうたら、これ無益の殺生。人を助けるが、アノ出家の役とやら。今宵一夜さ、とつくりと得心さして、名殘りの杯事も濟んだ上、夜明けなば、拙者がキッとお供申すが、何卒今宵一夜さは、國師のお執成しにて御母公へ。
靈山　ムウ、すりや、なんと御意なさるゝ。今宵一夜を廓にて名殘りを惜しみ、夜明けなば御歸館とな。
采女　サア、一夜を、千夜と思うて、拙者が計らひ。
靈山　成る程、それも禪家の悟り、御尤もに存じまする。
采女　すりや、國師には御承知かな。

靈山　如何にも、待ちませうが、一旦御母公に受合ひし靈山、今宵一夜の御遊興、その間、拙僧これにて相待ち、夜明けなばお供仕りませう。
順慶　ハテねちくさい靈山國師、殿の御遊興夜明けまで、アノこれに
五百　待つてゐるとな。
靈山　例へ夜が明けうが、日が暮れうが、久秋公御遊興果てるまで、相待つてお供仕る。
友齋　ほんに、きつい腰附けやうぢやなア。
采女　サア／＼、國師の得心の上は、殿には今宵一夜を千夜との騷ぎ。彼の盧生が夢の樂しみ、五十年を一時に致す趣向。
久秋　こりや氣が變つて面白からう。
順慶　拙者も打交り、この牽かせし品を撒き散らし、廓の座敷を井手の玉川、山吹色の盛りを見せん。亭主、この金を與へ牽け。
才兵　ハイ／＼、畏りました。
内記　サア、これよりは奧での大騷ぎ。
友齋　飲めや、謠へや、この山吹を戴きたい。
花橘　申し、九重さま、今宵ばかりと思へば、どうやら辛

氣で。
九重　わたしもそれで、心が濟まぬわいなア。
釆女　ハテ、濟むやうには、また拙者が計らひ、諸事は釆女が胸中に。然らば國師は、御苦勞ながら
靈山　これにてお待ち受け申しまする。
女達　そんなら、殿様。
久秋　皆もおぢや。
皆々　先づ、お入りなされませい。
ト唄になり、皆々奥へ入る。友齋、才兵衛、すぎは車を牽いて入る。この時、靈山國師、靜々本舞臺へ來て
靈山　家來、曲彔これへ。
侍ひ　ハア。
ト朱塗りの曲彔を上の方へ直す。
靈山　今宵はこの所に相待ち、我が君を誘はん。其方達も次へ行て、休息せい。
侍ひ　ハア。
ト皆々橋がゝりへ入る。靈山一人殘り、こなしあつて
靈山　絃歌耳に滿ち、美色眼に滿つ。腰間の利劍凡夫を切る。ア、、恐るべし／＼。
ト合ひ方になり、拂子を構へ、曲彔に直る。ト奥より六花、萬代、富彌出て來て、靈山を見て
富彌　アレ、見やしやんせ、最前見えた坊様、とんと掛け地に畫いてある達磨さまのやうなわいな。物も云はず、默つて坐つておやわいなア
萬代　ほんになう。あの坊様を起上がり小法師にしたらよいわいの。申し、お前も物云はずに、默つて何をして居やしやんす。
富彌　ほんに、辛氣な顏ではあるぞ。
三人　ちつと物を云はしやんせいなア。
靈山　本來の面目云はざるにあり。
萬代　申し、奥では、今、久さまが騒ぎの最中。ほんにお前も奥へ來て、酒などあがらぬかいなア。
靈山　酒を名附けて般若湯といへど、般若却つて般若を破る。面壁には如かじ。
三人　オ、笑止。なんのこつちやぞいなア。ホ、、、、。
ト笑うて奥へ入る。
靈山　少々の優婆夷、破顔微笑して如來禪を得たるや。
ト始終此うち合ひ方。ト奥より櫻木、花町出て
花町　申し、櫻木さま、アレ、見やしやんせ。最前の國師さまが、殿様を迎ひに來て、夜明けまで待つてゐると云

うて、あのやうにして居やしやんすわいなア。
櫻木　ほんに、夜明けまでも餘ッぽどの間、あゝして居たら退屈で堪るまいぞいなア。
花町　申し、お前も、ちつと奥へ來て、殿樣の騷がしやんす、取持ちでもさしやんせいなア。
ト靈山の手を取る。振り切つて
靈山　寒嚴の枯木、三冬に暖氣なし。
花町　オ、、笑止。つんと、なんの事ぢやぞいなア。
ト此うち櫻木、煙草盆を取つて來て
櫻木　イエ〳〵、申し、花町さま、あのお方は、矢ッ張り、あゝして居やんすのが、よいのぢやわいなア。ドレ〳〵、わたしが煙草をつけてあげう。
ト吸ひつけて
サア、御出家樣。
ト靈山に吸ひつけて出す。靈山キッとなつて
靈山　汝、大俗、未だ火宅を出でず。火宅を以て僧に施すは如何。
櫻木　オ、怖。その顏はなんぢやぞいなア。定めて退屈にあらうと思うて、折角わたしが志しで、煙草を附けて上げるのに、きつう腹を立てゝから。
花町　コレイナア、櫻木さま、構はしやんすな。何を云うても、ちんぷんかんで、怒つてぢやわいなア。
櫻木　ほんに、素氣ない坊樣ではある。爰に居やうより、ちやつと奥へ行かうぢやあるまいかいなア。
花町　さうせうわいなア。
櫻木　サア、花町さま、
花町　櫻木さま、
櫻木　ござんせ。
ト兩人、奥へ入る。靈山、始終構はず正面向いてゐる。
ト奥より友齋出で、靈山を見てこなしあり、杯を取つて來て、靈山が側へツカ〳〵と行つて
友齋　これは如何。
ト見せる。靈山チッと見て
靈山　轉法輪。
ト友齋、菓子盆にある饅頭を一つ取つて
友齋　これは如何。
トまた見せる。
靈山　大白見明星。
ト拋る。
友齋　これ卽ちくだなり。

ト取つて喰ふ。靈山チッとうなだれ、拂子にて撫で

靈山　色即是空、煩惱即菩提。

ト指一つ出す。

友齋　ばんどうそくがれん。

ト片手を廣げ出す。

靈山　一見卒塔婆、永離三惡道。

ト拂子を振る。

友齋　いつけんとんちき、すてんつ、持ちこめア〱。

ト手を叩く。

靈山　汝、隻手の聲を知るや。

友齋　知るも知らぬも逢坂の關。

靈山　これは無門關。

ト拂子にて散々に叩く。友齋、犬の眞似して

友齋　わん〱。

トなく。

靈山　狗子に佛性なし。

ト手ひどう叩く。

友齋　きやん〱。

トないて逃げて入る。ト合ひ方になる。ト靈山また正面へ居直る。ト奥より花橘、小袖を持ち出で來て、靈山の側へヂッと行て

花橘　申し、國師さま、ちつとあなたにお頼み申したい事がござんすが。

ト靈山ヂッと顏を見る。花橘、こなしあつて

イヤ、外の事でもござんせぬが、どうぞ御回向なされて下さんせぬかえ。

靈山　ハテ、殊勝な。色を含み、情を賣る女の身にて、佛に誓ひを立てるとは。

花橘　女に五つの障りありとやら。殊に、罪深く、憂きふし繁き川竹の流れの身。未來の程も恐ろしさに。

靈山　半點の朱の脣は萬人甞め、一片の玉の臂は千人の枕とする、淺ましき境界。これ皆過去の惡業に引かるゝ苦しみ。未來を頼むは、尤も〱。

花町　ほんに、世に淺ましいは、わたしが身の上。勤めの習ひに女の操も立てられぬ、この世からなる畜生道。せめて身の上を懺悔して、心ばかりの布施物とても、よごれしから衣、未來を頼む身のしろ衣、御回向なされて下さりませい。

靈山　懺悔に罪も滅ぶといふ。殊に、女の身、即得成佛といへども、八才の龍女は佛に玉を捧げて、南方無垢世界

へ生じたと說かれたれば、女人成佛疑ひなし。

ト小袖を取り、裏を返し見て

ムウ、殘し置く涙の雨や漏りぬらん、身のしろ衣袖せばき身は。ハテ、優しい古歌の心。

トまた裏をとくと見る。橘の紋附いてある小切れ縫ひ附けてあり。

合點のゆかぬ。この裏衣に、橘の紋を縫ひ附けし小切れを繼ぎ合せたは。

花橘　それこそわしが九つの年、死なしやんした母樣の贈はりし、父樣のお形見と、乳母が渡したこの衣も、今は親の形見となつた。橘の昔の人の袖の香ぞすると、兩親に添ふ心にて、肌着の裏に縫ひつけて、朝夕肌を離さずに、起伏しゝたる形見の小袖。わたしが名も花橘。戒名とも思うて下さりませ。

靈山　ハテ、女に稀れなる孝心。して、父御は、いつ死去せられしな。

花橘　サイナア。いま云ふ通り、母樣は、わたしが九つの年に死別れ、乳母が話しに、父樣はわたしが胎内にあるうち、國遠とやらで、お行くへが知れませぬ。

靈山　ムウ、すりや又、親の生死の程も

花橘　アイ、しつかりと存じませぬ。……幼ない時に孤兒となり、乳母が養育で人となつたこの年月。

靈山　して、親の苗字、母の由緒も知つて居るか。

花橘　イヽエ、お名は愚か。父母ともにお顏を知らず。只世に樂しみは、親の形見のこの名香。

ト香盆に香爐を乘せ、取つて來て、守り袋より香を少しついで

この香が卽ち父母でござんす。

ト靈山取つて、聞く事あつて

靈山　ウム、この香は未だ日本に聞き馴れぬ名香。

トいろ〳〵あつて

ハテ、思ひ掛けない。ムウ、この香は往春、大明十二代神宗皇帝、萬曆年中、海南より始めて獻ぜし蘭奢木といふ名香。卽ち明朝の帝の御寶なれど、臣下宋氏、勳功に依つて、これを頒ちたまふ。それより宋氏これを重寶とする。正しくこの香は蘭奢木。これを親の形見と所持する婦人は、國を隔てし我が

ト顏をキツと見る。

花橘　エヽ。

靈山　イヤサ、ハテ、世に稀れな名香。親の形見ぢやよな

ア。
花橘　合點のゆかぬ。この香を蘭奢木と知つて居やんす、
あなたは。
ト靈山こなしあつて、我が懷中より香包みを取出し、
内なる香を出し、外の火入れに注ぎ、二つながら花橘
に渡し
靈山　それを聞いて見やれ。
ト花橘もこなしあつて、兩方の香を聞きて
花橘　こりやコレ一體の
靈山　蘭奢木の名香。
ト花橘、思ひ入れあつて
花橘　それ、乳母がかねての話し。わたしに一人の兄様あ
り、これも幼少にて別れしたれば、兄弟の名乘りはこの
名香。父様は、何處やら遠い國の人、生死の程も知れね
ば、この香を證據に、
ト靈山をキツと見て
蘭奢木と御存じといひ、この香を所持して居やしやんす
からは、小さい折に別れた
靈山　イ、ヤ、同胞ではない。
花橘　エ、。

靈山　その香は愚僧へ布施物、寄附の名香。
花橘　エ、、なんと。
靈山　サア、丁度、婦人のやうな施主あつて、親の形見に
持つては居れど、生死も知れず、親も知らず、何卒命の
うちに、親子の對面と思へど、不定の世の中、もし相果
てなば無益の形見、愚僧に施し、現當二世の施物の一品。
花橘　して、その施主は、何人でござんすえ。
靈山　無縁の者。
花橘　エ、。
靈山　本來無東西、何處有南北、何れも當、何處を出所
に尋ね得ん。
花橘　そんなら、兄様の行くへも、親の生死も
靈山　知れぬが浮世。三界火宅。行く月の廻り逢ふまで。
婦人、その身を大切に、損ひ破らざるが孝の道とする。
ハテ、不便の心根ぢやなア。
ト唄になり、靈山こなしあつて、橋がゝりの方の障子
屋體へ入る。跡に花橘殘り、尺八入り合ひ方になり
花橘　今の御出家様のお詞の端、どうやら合點のゆかぬ。
とは思へども、何を斯うとの證據もなく、
トこの間に虚無僧岸田民部出る。

これにつけても乳母が便り、今は大佛前に居ると、委しい文。どうぞ乳母に逢うて、とつくりとした事を。

ト思案する。此うち始終合ひ方。奥より采女、少し醉ひたる體にて

采女　イヤ／＼、ちよつとぢや／＼。

ト云ひつゝ出で、花橘を見て、こなしあつて、何にも云はずに側へ行て、ヂッと顔を見て

太夫、何をむづかるぞ。

花橘　采女さま、悲しうござんすわいなア。

ト泣く。

采女　悲しいと、何が。エヽ聞えた、最前、坊主が殿樣を迎ひに來て、その時おれがお供して去ぬると云うたゆゑか。コレ、氣遣ひしやんな。例へ明日の朝去ぬると云うても、殿樣をそゝのかして來いで詰まるものかいの。殊に、今宵一夜を千夜の契り、唐にも粹があるやらんの歌の心ぢや。どうぢや／＼。

花橘　お前は好い機嫌ぢやなア。

采女　好い機嫌がお氣に入らぬか。

花橘　エヽ、なんぢややら面白さうに。知らぬわいなア。

采女　ハテ、きつい不機嫌。ハア、こりやそもじは、こりや立ち上戸ぢやな。我れら笑ひ上戸ぢやになア。

花橘　何が面白うて笑はうぞいな。

采女　どうで間夫に逢うて、閨漏る月を詠めるやうにはあるまいわい。

花橘　間夫に逢ふとは、そりや何云はんす。間夫とやら、色とやら、わしやそんな事知らぬわいなア。

采女　知らぬ者が、わしに隱して、なぜ泣いた。

花橘　何をお前に隱したぞいな。

采女　云ふないやい／＼。先刻にから泣いて居るに依て、わしが殿樣のお供して、館へ去ぬると云うたに依て、それで心も浮かず、それでじめ／＼かと思うたに、何處ぞで、くつすりと啜りあげて、泣き草臥れた、泣き餘りの涙ぢやな。

花橘　まだそんな無理ばかり。お前を除けて、誰れに涙を流さうぞいなア。

采女　そんなら、その涙は、誰れに流したのぢや。

花橘　イヽエ、そんな事ぢやない。こりや外に、ちつと悲しい事がござんすわいなア。

采女　サア、その外にちつとが、好かぬわいやい。いつそ、泣きくされ／＼。その涙が加茂川へ流れて、……ソレ、

泥鰌が吸はうぞいやい。

花橋　仇口云はずと、わしが云ひ譯とつくとり聞いて、疑ひ晴らして下さんせいの。

采女　ナウ、恐ろしや〳〵。深味へ吸ひ込む泥鰌女郎。人をすつぽんと騙さうとは、甲の剥げた泥坊めに、吸はれぬ先に、去にませう〳〵。

ト行くを留めて

花橋　コレ、待たしやんせ。まだたんと話す事もあり。殊に、逢ふ瀬も今宵限り。明日は殿様のお供して去なしやんしたら、また近々に顔見る事もなるまい。どうか斯うかと胸を痛めて居る、人の心も知らずに、エヽ、憎い男ではあるわいの。

ト叩く。

采女　アイタヽヽヽ。ハア、こりや又、素を飾り替へて、騙し掛ける古骨頂。梅花の油揚げが鼻の先へプン〳〵と、笑窪よりその壺で行水せぬ先に、我が住家へ、歸ろやれ歸ろやれ。ちつと又、小宿へも行たがよい。間夫にさんしよ。よい間で申そ〳〵。

トまた行かうとするを留めて

花橋　エヽ、あんまりぢやわいなア〳〵。わしが心を知らぬかなんぞのやうに、今宵一夜を千夜とも樂しんで、しつぽりと樂しまうと思うて居るものを。

采女　サア、それで間夫にさんしよ。よい間で申す。

トまた振り切るを、チツと引寄せ

花橋　エヽ、辛氣な。お前こそ白藏主の骨頂。假初めにも間夫の、色のと、お前より外の男に、目を見合した事もないわいなア。それにつれない心ぢやなア。

ト泣く。

采女　それが定なら、先刻の涙は何の涙ぢや。

花橋　先刻にわたしが泣いたのは、父樣や母樣の事を思ひ出し、思はず悲しくなつたのでござんすわいなア。

采女　ムウ、そんならさうであつたか。

ト云はうとして

あの白々しい嘘わいの。親の事で泣いた涙も、間夫に溢す涙も、涙に變つた事はない。落ちては同じ谷川の水、深味へは滅多に參らぬぢやて。

花橋　アレ、まだそんな惡口。かねてお前に話した通り、便り少ないわたしが身の上、杖柱ともお前一人を、頼みに思うて居るものを。

ト泣く。

采女　ハテナア、この男を杖柱にするとは、追ツつけ我れらが身代を棒に振らうといふ前置きぢやな。藪から棒を突き出したやうに、間夫の涙を親へこかすは、嘘をつく棒、刺股ではない、外れまたぢやわいやい〱。

ト蹴る。花橘、泣いて

花橘　エヽ、聞えぬわいな〱。朝夕お前の側に居れば、勿體ないが兩親の事も忘れて居るけれど、明日の別れの悲しさに、取交ぜて、便りないから、思ひ出すは女子の愚痴。それに、今更つれないお前の心。生きて居ても詮ない事。さうぢや。

ト采女が刀を拔き、死なうとする。

采女　ヤレ、待て。

ト止めようとして、思ひ入れあつて

どうなとせい。

ト突き放す。

花橘　そんなら、南無阿彌。

トまた死なうとする。采女留めぬゆゑ、花橘、いろいろこなしあつて

采女さま、わたしやお前を恨み死に、いま死ぬるぞえ。アノ刃にかゝつて、しかもお前のこの刀で、狂ひ死に死ぬわいなア。

ト采女あちら向く。花橘、采女の前の方へ行て

これから死んで幽靈になつて、お前を取殺す。アノ斯うして。

ト采女に抱きつく。采女こなしあつて

采女　ハテ、幽靈といふものは、嫌らしいものぢやなア。

ト振り放す。

花橘　もう好い加減に、機嫌直したがよいわいな。

采女　そんなら、あやまつたか。

花橘　アイ、さうぢやさうな。

采女　今度から、おれが見ぬ所で泣く事はならぬぞ。合點か。

花橘　アイ、疾から合點して居るわいなア。

采女　そんなら堪忍してやるぞ。

ト抱く。いろ〱あつて

花橘　仲直りは小座敷で

采女　おぢや。

ト行かうとする。最前より岸田民部、虚無僧形にて門口に窺ひ居て、この途端にズツと入り、采女と顏見合せる。

采女　ヤア、これは岸田民部さま。
民部　瀬川采女、珍らしい對面。
花橘　そんなら、あなたが
　ト寄るを、采女、後に圍ひ
采女　して、此お姿は。
民部　面を包むは、忍びの目附け。
采女　この所へお越しありし樣子は。
民部　洛中洛外の政道を預かる岸田民部、姿をやつして遊里へ入込むは、久秋公の隱し目附け、御母公陰生の方の御内意。久秋公へお取次。
　ト采女、思ひ入れあつて
采女　ハツ。これは存じ寄らぬ民部さまの御入來。久秋公には先刻御歸館。
民部　ムウ、すりや、この所には。
　トこなしあつて
　さうありさうなものぢや。
采女　主人久秋公に成り代つて、御母公よりの御内意、承はつても苦しうござるまいかな。
民部　如何にも。
　ト民部、三衣袋より箱を出だし
　御母公より御内意の趣き、思案を極めて拜見いたせ。
采女　ハツ。
　ト箱の蓋を取らうとする。民部押へて
民部　御母公より久秋公へ、送り給はる賜物の玉手箱、明けて悔むか悔まぬの、善惡二つは浦島が
采女　人間の浮き沈みは、七世の孫に逢うたる例し。
民部　天蓋取らぬは、虚無僧の掟。天界、人界、地獄界、合せて三界、四海の内。
　ト采女、思案して
采女　その四海を治むるは、即ち人界。
民部　地獄界の苦しみ受けるか。
采女　天界の榮華を受けるか。
民部　返答次第が生死の境。
花橘　そんなら、
　ト寄るを押へて、采女
采女　思案のうちは奥の間で、
民部　案内しやれ。
　ト唄になり、民部こなしあつて奥へ入る。采女、箱を持ち、花橘を連れて同じく入る。唄の後、合ひ方になる。奥より内記、お袖例を盗み出で

内記　今夜限りと久秋が、現他愛の折を幸ひ、かねて所持するお袖判を、まんまと首尾よう。エヽ、忝ない。

ト戴く。こちらより霊山、東の屋體より窺ひ居る。ト奥より

内方　内記さま／＼。殿様が召しまする。内記さま／＼。

ト内記、悄りして

内記　合點ぢや／＼。今そこへ參るぞ／＼。ア、コレ、折悪う。此まゝ座敷へ持つて行ては危ないもの。暫らく何處ぞへ、隠したいものぢやが。

トあたりを窺ひ、花活けへお袖判を隠し、形を繕ろふうち

内方　内記さま／＼。どうでござりまする。早うお出でなされい早うお出でなされい。

内記　いま參る／＼。ドリヤ、行かうか。

ト奥へ入る。ト霊山、最前より見て居て、この時ソロソロ出で、右花活けの中のお袖判を出し、押戴き、懐へ入れ、物をも云はず、笑みを含んで、元の障子屋體へ入る。障子しやんとさす。ト奥バタ／＼にて、久秋、九重、揉み合ひながら出で

久秋　イヤ／＼、きかぬ／＼。

九重　マア／＼、譯を聞かせて下さんせ。橘さま、ちやつと來ていなア。

ト花橘出で

花橘　あわたゞしい。何事でござんすぞいなア。

ト二人を引分ける。

久秋　花橘、聞いてくれ。夜が明けると、去なねばならぬ譯は知つて居ながら、今宵中に身請けしられて、外へ行くと云ふに依つて、それできかぬのぢや。

花橘　そりやお道理でござんす。コレ、九重さま、こりやマア、どういふ事ぢやぞいなア。

九重　ナンノイナ、わたしもどういふ事ぢや知らぬけれど、いま、親方さんが、花橘も、九重も、俄かに身請けの客があつて、談合極めて身の代受取つた。今宵中に先様へやりまするると、殿様へ、附け答へしに來たのを、わしが何ぞ知つた事のやうに、わしやどうせうぞいなア。

ト泣く。

花橘　ムウ、そんならお前も、わたしも、一緒に請け出すと云うて、……こりやマア、なんの事ぢやぞいなア。

久秋　なんのいやい。皆彼奴が拵らへ事ぢや。嘘ぢや／＼。

ト才兵衛、出て

才兵　ホウ、花橘、爰にか。先刻から尋ねて居た。さるお大盡様が、二人ともに身請けして、今宵中に連れて行くと、談合も極まり、お金も受取つた。お客様へ断わり云うて、支度さつしやれ〳〵。早う〳〵。

花橘　アヽコレ、親方様。そりやマア、なんの事でござんす。本人に得心もさせず、なんぼ親方の高下でも、こればかりは、滅多に氣儘にもなるまいわいな。

九重　例へ其方へ行くにしてからが、今宵中は、揚げのお客に任した身。夜が明けぬうちは、行く事はならぬわいの。

才兵　エヽ、どう云や斯う云ふと、そんなら夜が明けると、其まゝ引揚げるが合點か。

花橘　そりやその時の事いな。

才兵　エヽ、世話を掛ける。そんなら夜明けまで待つてやる。その時、いじむじは云はさぬぞよ。ヤレ、忙がしや忙がしや。

ト才兵衛、奥へ入る。

花橘　一寸遁がれに云うてはやつたが、こりやマア、どうしたものであらうぞいなア。

久秋　そんなら身請けは、ほんまの事か。

九重　ほんまの段ではない。いま、聞かしやんす通りの事。どうぞ好い思案を、出して下さんせいな。

久秋　サア、好い思案といふては、最前順慶が持つて來た金を親方へ渡し、此方へ貰ふより外はない。

九重　そんなら早うその金を、親方へ渡して、花橘さまも一緒に

兩人　どうぞ身請けして下さんせいなア。

ト奥より侍ひ一人出で

侍ひ　申し上げまする。小座敷に積み置きました最前の金箱、何者やら盗み取りましてござりまする。只今、詮議最中。それゆゑお屆け申し上げまする。

ト云ひ捨て、侍ひ入る。

三人　ヤア、。

ト恟りする。

久秋　ナニ、最前の金箱が。ホイ。

トどつかりと座る。

兩人　九重さん。

九重　橘さん。

三人　こりやマア、どうしたものであらうなア。

ト奥より

久次　その思案、貸してやらう。
ト久次、壺折にて出る。
花九　ヤア〳〵、お前は。
久秋　思ひも依らぬ久次公。いつの間に御入來なされたなア。
花九　して、その御思案は。
久次　二人ながら、身共が今宵中に、身請けしてやらう。
三人　エヽ。
久次　氣遣ひするな。どつちへも遣りはせぬ。身が身請けして取らすわやい。
兩人　そんなら、眞實あなたが。
久秋　エヽ、忝ない、兄上樣。二人ともに、ちやつとお禮を。
二人　エヽ、有り難うござりまする。
久次　喜べ〳〵。二人ながら、今宵のうちに身請けして、抱いて寢る。
兩人　エヽ、そんなら、二人を請け出して、矢ッ張りお前が。
久次　ハテ、知れた事。有丈積んで身請けして、外へ遣つてよいものか。久次と聞いたら二人とも又、逃げをるであらうと思うて、忍んで來た廓の內。否でも應でも身請けしたれば、もう叶はぬ。今日向二人ながら、身が心に隨へ〳〵。
久秋　そりや兄上、あんまり御無體。
久次　何が無體。今宵中に請け出されて行かにやならぬと、二人がとこ吠えるが笑止さに、見ず知らぬ所へ遣るも不便と思ひ、身が請け出して抱いて寢るに、何が不足ぢや。
九重　どのやうに仰しやつても、否でござんす。
久次　否でも應でも、この久次が目にとまつた二人は果報者。張りのある程猶惚れた。
ト二人が手を取る。花橘、九重、振り切つて
二人　エヽ、うるさい。側へ寄つて下さりまするな。
久次　久秋、九重と緣を切り、身が心に隨はせい。
久秋　その儀は。
久次　兄の詞を背くか。
花九　そりやあんまり
久次　是非隨はずば、二人ともに、いつそ。
トずばと拔いて切りかける。釆女ズッと出で、その手を取り
釆女　久次公。こりや何事。

ト突き放す。少々立廻りあつて、トヾ久次が切りつけるを、釆女、最前の箱にてシャンと留める。箱割れて中より金の鷹と阿波草履と出る。

皆々 これは。

ト釆女、鷹と草履を両手に持つ。

釆女 久吉公の御内意を蒙むり、御母公よりの御賜物。この二品は御両人の御公達の品定め。

久次 金の鷹にて、天が下を治めるか。

久秋 匹夫下郎の草履を掴むか。

釆女 貴賤の二つは、二人の御公達。とくと御思案なされませう。

久次 ハヽヽヽヽ。思案するまでもない。金の鷹を持つがこの久次サ。

釆女 イヽヤ、金の鷹を持つは久秋公。非道非義の久次公には、よく似合うたこの草履。

久次 ヤア、奇怪な雑言。兄たる久次を差措き、弟の久秋に、四海の跡目を継がせんとは、謀叛の兆しか。

釆女 例へ兄君にもせよ、悪人なればぽッ下せとある、我が君の御内意。

久次 イヤ、どうあつても、この久次が跡目ぢやぞ。

順慶 イヤ、さらはなりますまい。久次公、先づお待ちなされませ。

ト順慶中で、二人の中へ入る。

憚りながら、順慶が存ずるには、兄御を跡目にお立てなさるのが順道なれども、我が君のお心に入らぬ久次公。それゆゑにこそ、この二品はお心を引き見る謎々。幾重にも四海の跡目は久秋公へ、お譲りあつて、然るべう存じ奉る。

久次 ヤア、差出過ぎた順慶が裁配。われ、その筈ぢやあるまいかな。

ト順慶、久次に目配せして

順慶 ハテサテ、武将宣下はお袖判と国行の御剣。一種欠けても宣下は叶はぬ。ナ。ぢやに依つて、久秋公のお預かりはお袖判、久次公には国行の御剣。定めて御所持でございませうな。

久次 如何にも。預かりの不動国行、片時も離さす帯せしは、即ちこれ。

ト抜いて見せる。順慶見て

順慶 成る程、紛ふ所もない御剣。して、久秋公にはお預かりのお袖判、定めて御大切に。

久秋　ホヽウ、順慶が申す通り、肌身離さず、即ちこれに。
　ト懐中を探して
　イヤアヽ、最前まで肌に附けしお袖判が
順慶　お袖判が、どう致したな。
久秋　サア、その御判が
　トいろ〳〵探すこなし。
采女　申し〳〵、久秋公、其お袖判が何となりました。
花九　それがどうぞ致しましたかえ。
久秋　サア、その御判が紛失したわいの。
皆々　エヽ。
　ト恟りする。采女、氣を急いて側へ寄り
采女　久秋さま、紛失したで濟むのでござりますかいなア。
　そりやマア、何時の間に、處は何處。
　トうろたへるこなし。
久秋　サア、最前まで肌に附けて居たが。
　トうろ〳〵する。ト采女、花橘、九重も袂をいろ〳〵探す事あつて、久秋「ソレ」と奥へ行かうとするを、久次ズッと寄つて久秋を引きつける。三人「これは」と寄るを、久次「なんと」ときめる。三人顔見合せ、「ホイ」と差俯向く。

久次　ヤイ、兹た大盜人。父上より預かりたる大切のお袖判、紛失したで事が濟むか。サア、何處へ隠した。有りやうに、吐かせ〳〵。
　ト草履にて散々に叩く。
采女　マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。今一應とくと吟味を遂げまして。
　ト寄るを、順慶遮つて
順慶　ハヽヽヽヽ。同じ穴の狐侍ひ、そろ〳〵尾が出るので、跪くワ〳〵。四人ともに縛し上げ、お袖判の行くへを詮議。先づ、カウ〳〵。
　ト久次、順慶に目配せして、順慶、采女、久秋を引きつける。花橘、九重寄るを、久次引きつけ、散々に打ち叩く。ト民部ツカ〳〵と出で、久次を突き廻し、順慶を見事に投げる。
皆々　ヤアヽ。
　ト順慶起きて、民部を見て
順慶　ヤアヽ、こなたは
久次　岸田民部。
順慶　何ゆゑ身共を
民部　洛中洛外の政道を預かる岸田民部、非法を糺すに云

ひ分あるか。
順慶　何がなんと。
民部　久秋公をなぜ打擲召された。臣として君に手向ふ大悪人。
順慶　それでぶつたが、何とした。
久次　そりや、お袖判が紛失ゆゑサ。
民部　お袖判が紛失すれば、主人をぶつて苦しくないとある、御詮議でも受け召されたか。
順慶　サア、それは。
民部　但し、其許が、お袖判詮議の役目かな。
順慶　サア、その儀は。
民部　上聞に達し、逆臣の罪を糺さうか。弟を恵むべき兄の身として、無體の戀慕。不義不仁の罪を糺しませうか。
久順　サア、それは。
民部　サア。
久順　サア。
民部　サア〳〵、なんとでござる。
順慶　ムウ。
久次　ヤイ、民部、餘り義者ばるな。なんぼう久秋が肩持つても、肝心の預かり物、大切なお袖判を紛失させ、落したの、取られたのと、子供たらし云つても済むまい。二人ともに引ッ縛つて拷問せい。
順慶　洛中洛外の政道を預かるゝ、民部どのゝお仕置を見物いたさう。
ト民部、久秋の側へ行て
民部　申し、久秋公、我が君名護屋御發向の折柄、二品の御寶を、御連枝に預け給ひし、その一品紛失とばかりでは相濟まぬ。側に附き添ふ瀬川釆女、とも〳〵思案の極めて、返答なされましてようござらう。
九重　申し、ちやつと申し譯をなされて下さりませいなア。
久秋　肌身離さぬお袖判、奪ひ取られしは武運の盡き。
花九　ハア、。
ト泣く。
順慶　大将の身を忘れ、踊り狂ふ放埓ゆゑ、猶も實否を糺さんと、最前持参したる御用金。
久秋　サア、その金も
花九　紛失したわいなア。
久次　我が身を疑ふ父への潔白。弟が身持ち放埓、露顯に

かけん謀り事。
順慶　この順慶が御用金を持參して、同じやうに踊り狂うたは、皆久次公の嚴命ぢやわい。
花九　エ、。
　ト泣く。
久次　いづれも、さらば。
　ト死なうとする。釆女、花橘、九重、留めて
釆女　御短慮千萬な。こりや何事でござりまする。
花橘　マア〳〵、お待ちなされませいなア。
久次　イヤ〳〵、放して殺してたもいなう。
　ト揉み合ふ。久次こなしあつて
久次　ハ、、、、、。盜人猛々しい。同類どもが人そばえ。民部、この場の捌きが、見たい〳〵。
　ト此うち民部、始終思案のこなし、いろ〳〵あつて
民部　久秋公は追放。
花九　エ、。
釆女　ナニ、久秋公には御追放とな。然らば拙者は。
　ト切腹せうとする。民部チッと留めて
民部　死んで寶が手に入るか。
釆女　なんと。

民部　命全うして、大切なお袖判を尋ね出し、久秋公を再び御代に出だし奉らずば、汝が忠義は立つまいがな。これ程の事に心が附かぬか。うつけ者。
　トきめる。釆女こなしあつて、鎭まる。
久次　ヤイ、民部、釆女を助けては、政道が立つまい。
順慶　用金紛失といひ、お袖判の紛失、側にへちまふ瀬川釆女。彼奴が業に極まつた。
久次　輕うても縛り首。釆女に繩打て。
内記　ハア、。
　ト内記、五百右衞門、奥より出で、釆女にかゝる。釆女、二人を見事に投げる。順慶「うぬを」と行くを、民部、突き廻し、兩方見得よく、しやんととまり
民部　瀬川釆女も共に追放。
順慶　追放とは贔屓の沙汰。
民部　釆女が命を取り、お袖判の行くへ、何者を捉へて詮議するのぢや。横合ひから差出すと、すッ込んでお居やれ。
内記　科極まりし瀬川釆女、我まゝに追放申しつけ
五百　後日の咎めは、何となさるゝな。
民部　陪臣の分として、大老職を勤むる民部に對し、緩怠

千萬、控へて居れサ。

　トきめる。二人控へる。

久次　コリヤ〳〵、兩人の者、打ッちやつて置け〳〵。瀬川釆女が五疋や三疋、生かしたとて、殺したとて何程の事。民部、久秋を追放した跡で、四海の跡目、誰れが繼ぎさうなものぢやと思ふ。

民部　サア、その儀は、我れ〳〵が心に測られませぬ。兎角我が君の御詮次第。

久次　ハヽヽヽヽ。佞人めらが勸めに依つて、父母の分け隔て。天よりこれを憎んで久秋が放埒。自然とこの久次に跡目を讓らねばならぬやうになるといふは、爭はれぬものぢやなア。

　トこなしあつて

ヤイ、久秋、釆女。

　ト兩人、思ひ入れあつて、そろ〳〵側へ行き、俯向く。久次、兩人を引きつける。花橘、九重「それは」と寄るを順慶、内記、兩方へ引留める。民部チッと見て居る。

久次　親兄の禮を忘れ、今までは、ようも〳〵、父母へ惡しざまに執成したなア。また釆女にも戀の意趣。なんと、この久次が恨めしいか。

釆女　何しに左やうに存じませう。

久次　幸ひの戀の阻りに、此奴二人を叩きのめせ。

内五　ハッ。

　ト五百右衞門、内記。釆女、久秋を引きつける。花橘、九重、寄らうとするを、民部「コリヤ」と兩人を引きつけ、ヂッと押へる。

順慶　ヤイ、女。いま、目の前に二人が憂き目。あれでも隨ふ氣はないか。

内記　應と云へば、直ぐに極樂。

五百　否と云へば、地獄の苦しみ。

内記　否か、應か、二人の女。返事は

皆々　どうぢや。

花九　否ぢや〳〵。否でござりますわいなア。

順慶　追放の百杖、久次公の御上意ぢや。

　ト背打ちに兩人をぶち据ゑて

最早御主人ではないぞ。追放に遭はさしやつたれば、素町人も同然。御主人ではないぞ〳〵。

　ト民部の方へ當てつけて云ふ。

九重　そりや、申し、久次さま。

花橘　順慶さま。
兩人　あんまりむごうござりまするわいなア。
久次　最前は情で口說き、今は又仇で口說く。幾度も〳〵、品を變へ、手を變へて、口說き負ふせにやきかぬ。
花橘　如何に戀の意趣ぢやというて、こりやあんまり
九重　いつそ殺して下さんせ。
久次　殺さぬ〳〵。口說いて聞かねば、無理無體、手も足も引ツ縛つて抱いて寢る。順慶、兩人の女を、桃山の御殿へ連れ歸れ。
順慶　ハツ。身請けしたれば二人の女、早く立て。
花橘　エ、。そんなら先刻、わたしらが身請けの客といふは
九重　久次さまか。
久次　なんぼ吠えてももう叶はぬ。內記、この女を桃山の御殿へ連れ行き、キッと番を致せ。
內記　ハツ。
花九　否ぢや〳〵。なんぼでも行きはせぬ。
ト意地張るを、無理に引ッ立て、橋がゝりへ入る。ト向うバタ〳〵にて、平馬、上下、股立ちにて、白木の文箱を持ち、走り出で
平馬　御內意。
久次　印南平馬、何事ぢや。
平馬　名護屋表よりの御內意。
ト白木の文箱を出す。順慶取つて、狀を出し開き見て
順慶　ナニ〳〵。「金吾久秋、放埒露顯の上、追放いたすに於ては、外に跡目これなきゆゑ、諸大名評議の上、久次を一刻も早く四海の跡目たるべきものなり。大領久吉判。」
釆女　すりや
平馬　名護屋よりの早飛脚到來いたし、桃山に於て諸大名評議極まり、明卯の刻、武將宣下とある御諚意。
順慶　して〳〵、彼のお綸判、不動國行の御劍なくても、苦しくないか。
平馬　お綸判紛失とあれば、後日の沙汰。先づ久次公に、御所持の不動國行の御劍を以て、宣下の儀式執り行へとの儀でござります。
民部　いよ〳〵明卯の刻に、久次公には四海の跡目、武將の宣下とな。ホイ。
久次　ハテ、心地よやなア。
平馬　この上は、御劍桃山へ持參し、諸大名に見せ、跡目

の儀式、一時も早く執り行ひませう。
久次　この劍を早く桃山へ持參し、明卯の刻に、諸大名、身が館へ迎ひに來いと云へ。
ト劍を平馬に渡す。
平馬　畏まつてござりまする。
順慶　平馬、大切な儀ぢや。急げ。
平馬　ハツ。
ト平馬、劍を持ち、向うへ走り入る。
久次　民部、ちと當惑であらう。其方は洛中洛外の支配なれば、武將宣下に立合はねばならぬ役目。刻限は卯の上刻ぢやが、合點か。
ト民部こなしあつて「ハツ」と齒ぎしみして、ツイと入る。
久次　もがく〳〵。
順慶　兩人の奴等は國境より叩き出し、五百右衛門、我が君の守護いたせ。
五百　ハツ。
順慶　よい態〳〵。なんぼ諸大名が贔屓しても、名護屋よりの早飛脚、爭はれぬ世の順道、扶持離れの久秋主從。見苦しい。早く出てうせい。者ども、あれ叩き出せ。

ト唄になり、久次、順慶こなしあつて、奥へ入る。ト跡に、采女、久秋殘り、體の痛むこなし、いろ〳〵あつて、庭を拂ひ、互ひに介抱して采女、あたりを窺ひ、思ひ入れある。此うち始終合ひ方。采女、久秋の側へソツと寄り、小聲になり
采女　久秋公、お願ひの通り、まんまと追放にお遭ひなされましたの。
久秋　采女、其方が世話で、やう〳〵と追放せられ、兄久次どのを、四海の跡目に立てるも、みな其方の庇。エ、忝なうござるぞや。
采女　これは御勿體ない御仰せ。御舍兄久次公は、心黒黨に依つて、久吉公の御機嫌に叶はず、御勘當同然。それゆゑ四海の跡目は、久秋公とかねての御内意なれど、兄を差措き、弟の身で、跡目は繼がれぬと思し召しても、我が君の仰せ、御内意も背かれず、それゆゑお身持ち放埒。世の譏りを受け、追放に遭ひ、四海の跡目を久次公に繼がすとは、天晴れの御孝行。
久秋　兄久次公の望みを叶へれば、お心も飜らんと思うて、かねて其方と云ひ合せ
采女　其お心が通じたらば、久次公のお心も直り、あなた

も追ツつけ召し返されませう。併し、大切なお袖判の儀は。

久秋　最前奥にて、何者とも知れず、まどろむうち、盗み取られたわいなう。

采女　すりや、誠に紛失。それも大方、久次公の計らひでござりませう。

久秋　あの方にある事ならば、誰れを恨むる事もない。

采女　申し、これにござつては、却つてお身の障り。これより直ぐに。

久秋　采女、何處を當に立退くのぢや。

采女　何處と申して當はなけれど、一先づ都を開いて。

ト久秋を見て、思ひ入れあつて

如何に兄御に御孝行とは申しながら、四海の主、大領久吉公の若君久秋公が、都を立退き

久秋　さすらひの身となる事も、いとひはせぬ。

トこなしあつて

さはいへ、采女、

采女　久秋公。

久秋　變り果てた

兩人　身の上ぢやなア。

と泣く。ト向う障子一面に開く。ト眞中に蘭生の方、衣裳、襠にて御臺の形。民部、衣裳改め、長上下。五百右衞門、平馬、衣裳、上下、その外諸大名、大勢並び居る。

民部　久秋公の御本心承はり

皆々　有り難う存じ奉りまする。

久秋　ヤア、これは。

蘭生　明卯の上刻には武將宣下、久秋公は、いよ〳〵四海の跡目。我が子ながらも久吉公の諚意、蘭生これまで迎ひに來たわいなう。

久秋　エヽ、なんと。

民部　某、最前、歸つたる體は、久次公を跡目に附けんと云ひしも、皆云ひ合はしての御母公の計らひ。

蘭生　我が君久吉公より、跡目の御内意あるより身持ち放埒、これ正しく我が身に科を拵らへ、久次に世を讓らん爲と、民部が推量。諸侯が疑ひ。本心を聞くからは、久吉公の仰せ通り、直ぐに四海の跡目。

民部　御辭退あつても、我が君の御諚意。久秋公

皆々　推して跡目に極まりしたぞ。

平馬　某は龍造寺帶刀と申し、西國大名、人に面を知られ

ぬを幸ひ、平馬となつて入込み、久次、順慶に與みし、奪ひ取りましてござりまする。
放埒の目附けになつたるゆゑ、安々不動國行の劍は、

五百　我れ〳〵とても、お指圖を受け、久秋公に附き隨ひしも、四海の跡目に立てん爲。

蘭生　我が君の仰せ、久次へは國行の御劍、久秋へはお袖判、分けて預け給ひしなれども、武將宣下に用ふる國行の御劍、それゆゑ手段を以て取返したわいなう。

久秋　でも、大切なお袖判は、

民部　その詮議に瀬川采女、先程預けし二品の返答は。

采女　ハツ。

　トこなしあつて、最前の金の麾と草履を取つて來て

久秋公の御心底顯はれ、四海の跡目と定まり給ふ上からは、この麾は久秋公。

　ト久秋の前に置く

又、この阿波草履は、某が御放埒をお勸め申せし身の云ひ譯に。

民部　出來した采女。其方は勘當。

久秋　ナニ、采女を勘當とは。

民部　彼のお袖判の詮議、仕負ふせて立歸らば、元の主從。

采女　エヽ、忝ない。然らば、これより直ぐに。

久秋　采女、これまでの心遣ひ。……隨分無事で。

民部　一時後れば一時の不忠。

采女　まことに。

　ト思ひ入れあつて

おさらば。

　ト七ツの鐘打つ。と橋がゝりへ走り入る。久秋、跡見送りて居る。民部こなしあつて

民部　武將宣下の時移る、用意の乘り物、これへ。

内方　ハア、。

　ト橋がゝりより本陸尺、乘り物舁いて出る。

五百　イザ、久秋公、桃山御殿へお入りあられませう。

久秋　それでも、

民部　ハテ。

　ト民部、無理に久秋を乘り物へ入れ

お乘り物、立てい。

駕舁　ハア。

　ト舁き上げる。トこの前より西の障子屋體より、順慶、出掛け居て

順慶　民部。これは。

民部　順慶が企み、邪曲非道の久次公に、四海の跡目を繼がせてよいものか。生れ變つてござれと云へ。
皆々　人でなしめが。
民部　イザ、御臺様。
薗生　皆の者、供せい。
皆々　ハア。
民部　お先へ參れ。
内右　ハア。
ト内より、先づ、挾み箱、本行列の人數出て、一樣に振り出す。所知入りになり、花道にて陸尺、皆々次第を作り、向うへ入る。跡に順慶一人殘る所へ、内記走り出で
内記　コレ〳〵、順慶どの、委細は承りましたが、此方の身方は皆彼方の廻し者。企んだ事はぐりはま。こりやマア、どうしたものでござる。
順慶　云ひ附け置いたお袖判は。
内記　最前盜んで、この花活けへ。
ト花活けを明けて見て
ヤア、面妖な。慥かこの内へ隱し置いたが。
順慶　それも取られたなア。

内記　こりやマア、なんの事ぢや。
順慶　この上は破れかぶれ。事の樣子を久次公へ申し上げい。
内記　合點でござる。
順慶　早く行け。
内記　ハツ。
ト向うへ走り入る。ト橋がゝり黒裝束の忍び一人出で
忍び　ハツ、順慶どの、仰せつけられました千鳥の香爐を。
順慶　出かした、出かした。
ト受取る。この前より、東の方障子屋體より、以前の形にて、靈山、出掛け見て居る。
この香爐を久次公へ差上げ、追ッつけ四海は久次公の手に入る。エ、忝ない。
ト戴く。靈山、ツカ〳〵と出で、右の香爐を引ッたくる。順慶「ヤアうぬは」と見る。ポンと當てる。倒れる。忍び切つてかゝる。靈山、刀を引ッたくり、一刀にこれも切る。ト奥より最前の靈山の供大勢、面々に最前の金箱をかたげ、出る。
皆々　お頭。仕事は、まぶでごんす。

靈山　ムウ。三上の百助。足柄金藏。その金箱を我が隱れ家へ。
皆々　して、お頭は。
靈山　後から去なう。
皆々　そんなら、先へ。
ト皆々向うへ入る。靈山、跡にこなしあつて、最前のお袖判と香爐を見て
靈山　武將久吉が重寶、お袖判、千鳥の香爐。ヘエ、、うまいなア。
ト懷中へ入れる。此うち順慶起き上がり
順慶　さては、うぬ。
ト切つてかゝる。刀をもぎ取り、直ぐに切り殺し、靈山、花道の角へ悠々と行つて、拂子を持つて、順慶の死骸をヂロリと見て、片頰で笑ひ
靈山　へ、、南無あみだぶ／＼。
ト向うへ靜々と入る。返し。
石の障子兩面へ引いて取り、舞臺一面の御殿を突き出す。一樣に高欄、眞中に階、總半御簾。一面に金襖。二重舞臺の上に、久次、壺折の袖を脫ぎかけ、太刀を振り上げて居る。その下に久秋、恐れて居る。平馬、五百右衞門、久次を控へて居る。この見得にて押し出す。道具とまる。
久次　邪魔せずと、そこ退け／＼。
平馬　こは御短慮なる御振舞ひ。何事のお怒りでござりまする。
久次　默れ、平馬。この久次を欺き、追放せし久秋を四海の跡目と、諸大名の評議、聞くと等しく、我が無念。兄を騙かる弟久秋、ぶち放したその上で、汝等も眞ッ二つ。爰離せ。
五百　全くその儀は、私しならぬ御母公の仰せ。
久次　ヤア、聞かぬ／＼。そこのけ。
トいろ／＼揉み合ふ立廻りの中へ、蘭生の方、裲襠、衣裳にて、弓を持ち出で、久次を散々に打ち据ゑる。
平馬　ヤア、御臺所、蘭生の御方。
久次　母人、ナ、なんでこの久次を、打ち叩きなさるゝな。
トきつとなる。蘭生、思ひ入れあつて
蘭生　エ、、おのれは／＼なア。日頃から淺ましいその性根ゆゑ、我が君久吉公の御機嫌に叶はず、名護屋御在陣の其うちより、自らへ御內意。兄久次は大將の器量にあ

らず、詞を背けば勘當せよとある御諚意。今、この折檻の弓杖は、母が打擲するではない。弓矢正八幡宮の御折檻と思うて、土性骨に覺えて居よ。

久次　エヽ、八まんでも、九萬でも、親の身で子をぶちのめすといふ事があるかいの。老いては子に隨へといふ事を知らつしやらぬか。胴慾な人ぢやなう。

薗生　胴慾とはおのれが事ぢやわい。隨身公助はな、右近の馬場で蟇目を射損じたとあつて、親の武則がまッこのやうに、打ち懲らせしを、逃げ走りなば、老人の追ひかけんとして躓き轉び給はんと、思ふまゝに打たれしと聞く。それ程にあらずとも、親を親と思へやい。邪ま非道を働いて、我が君の跡目相續とは、この顏で云うたかやい。これで云うたか。おのれは〳〵。

ト打擲して

コリヤヤイ、母はな、久秋の放埓と聞くより、心ならず。岸田民部と云ひ合せ、金の麾と阿波草履持たせ遣り、おのれが心を矯め直し、金の麾を持ちかねぬ大將にせんものと、思ふに違ふ久秋の心底。兄に跡目を繼がせんと、わざと放埓惰弱の科を拵らへ、親兄の禮儀を思ふ志し。これ即ち金の麾を持つべき大將。さるに依つて、久秋を跡目に立てんと諸侯の評議。その中へ暴れ込む不孝者。母が折檻、なんと骨身に、こたへたか〳〵。

トまた散々に打ち据ゑる。久秋その手に縋りて

久秋　ア、勿體ない。この久秋、如何やうな目に遭ふとも、さら〳〵お恨みとも存じませぬ。お心を翻され、母人へお詫び言。

久次　なんの詫び言。今の折檻で、猶も心が鐵石。

トまた久秋に切りつける。皆々「これは」と支へるを、振り切り、久秋を追うて花道中程まで行く。ト戸屋の内より大炊之助

大炊　待つた〳〵。

ト大炊之助、衣裳、上下、ズッと出で、久秋を圍ひ、久次が刀を持つ手を取り、ヂッと顏を見合せ、どつかと座る。久次キッと見て

久次　此村大炊之助。なぜ妨げる。

大炊　君辱めらるゝ時は臣死す。久秋公の御名代、イザ、大炊之助めがこの首を。

ト久次が刀の下へ直る。

久次　猪口才な奴の。

ト久次、大炊之助に切りつける。かい潜り、利腕をし

つかり取る。

手向ひか。

大炊　一人貧民なれば一國亂を起す。眞柴大領久吉公の御公達。自らお手を下ろされんとは見苦しい。イザ、先つあれへ。イザ／＼／＼、上座遊ばされませう。

ト　つか／＼と本舞臺へ來てとまる。

久次　コリヤ、久次を手籠めにするか。

平馬　此村大炊之助どの。この體は。

大炊　蘭生の方さまへ、一つのお願ひ。

ト　民部、衣裳、長上下にて、ズッと出で

民部　久次公の乳人役、此村大炊之助どの、さこそあるべき事。身不肖ながら、岸田民部、お取次申しませう。お願ひの筋、心措きなう申し上げられい。

大炊　恐れながら。

ト　久次、久秋を切らうとするゆゑ、大炊之助、鯉口をキッと留めて居る。

五百　お願ひの筋、申し上げられい。

大炊　ハッ。

平五　早く申し上げられい。

大炊　ハッ。

ト　平馬、五百右衞門、サア／＼と聲を掛ける。大炊之助「ハッ／＼」と、じり／＼と鯉口を留めながら、廻り、此うち思案して久次が小さ刀をもぎ取り、ハッと下へ下がる。久次、久秋を睨みつけ、つか／＼と寄らうとする。平馬、五百右衞門押し隔て、上座へ直し

大炊　久次公には、先づ／＼、お鎮まり遊ばされませう。

民部　して、大炊之助どの、お願ひの仔細はな。

ト　大炊之助、こなしあつて

大炊　恐れながら、主君久次公のお身の上、幼少の時分より生得の御短慮、何卒お心を矯め直し、四海の武將になし奉らんものをと、二六時中の御諫言は耳に逆らひ、順處如き佞人の巧言に惑はされ、日々に長ずる惡逆無道。御母公のお怒り、諸大名の歎き、聞く度毎に、この大炊が腸を、ズタ／＼に裂かるゝ苦しみ。とあつて、身退くべき心底ならねば、今一應のお願ひ。あはれ、久次公のお身の上、暫しが間、此村めにお預け置かれ下さりませうならば、我が一命に替へて善心になし奉らん。生々世々のこの身の面目、偏へに願ひ奉りまする。

ト　いろ／＼ある。民部こなしあつて、蘭生の方に向ひ

民部　蘭生の方さまのお怒り、我が君久吉公へ一旦の申し

譯、殊に、義理ある仲の御親子、大炊之助が願ひの筋、定めてお聞屆け遣はされまするでござりませうな。

蘭生　我が君の御機嫌を計らふは如何なれども、助命を願ふ大炊之助の心底、憎い奴とは思へども、下世話に云ふ片輪な子程可愛いと、心さへ直りなば、母が喜びはどのやうにあらうと思ふ。大炊之助、いよ〳〵心を矯め直すか。

大炊　すりや、お聞き屆け下さりまするとな。

民部　五十日がその間、此村大炊之助に久次公はお預け。

大炊　エヽ、有り難う存じ奉りまする。

蘭生　頼みも綱も切れ果てしに、よう預つてくれて嬉しい。一旦の怒りは君への恐れ。自らが心の喜び、推量して、サア、其方の心を推量して預ける程に、キツと矯め直して、眞の人にしてくれい。其方を頼んだぞよ。

久次　大炊之助、預かり立てして後悔すな。

ト大炊之助、こなしあつて

大炊　お乘り物、參れ。

内方　ハア、。

ト乘り物を舞臺の眞中へ舁き据ゑろ。

民部　長居は恐れ、大炊どの。

大炊　イザ、召しませい。

久秋　何卒、この上ながら、お心を。

久次　見るも中々奇ッ怪な。先づ、其方から

ト また立ちかゝるを、大炊之助始め家來皆々寄つて、無理に久次を乘り物へへし込む。出ようとする所を大炊之助、乘り物へサツと綱を掛ける。久次、中にて跪くこなし。

然らば預かり、罷り歸る。

蘭生　必らず心の直るやうに

大炊　仕負ふせて一意見。

民部　もしも心の直らぬ時は

大炊　細工は流々、仕上げた上。

民部　日限りのうちは毎日吟味。

大炊　善と惡とは

民部　久次公の生死の境。

蘭生　しつかりと

皆々　預けたぞよ。

大炊　ハツ。

ト乘り物舁き上げる。皆々思ひ入れ。大炊之助こなしあつて

乘り物、やれ。

トよろしく、

幕

二幕目

大炊之助館の場
南禪寺山門の場

役名――眞柴大領久吉。眞柴久次。眞柴久秋。奴、關内。同、可内。非人、蛇骨婆ア。大炊女房、吳竹。奴、岩内。同角内。奴、八田平。此村大炊之助實ハ大明の宋蘇卿。傾城、九重。腰元、柳葉。傾城、花橘。早川高景。石川五右衞門。

造り物、二重舞臺。見付け金襖。東西塗り骨障子屋體。臆病口の方、植込みに橘の木を植ゑてある。すべて大炊之助屋形の模樣。幕の内より花橘、九重、傾城の形にて、差俯向いて居る。兩脇に關内、角内、岩内、可内、何れも編子奴、隨分綺麗なる對の形、割り竹にて花橘、九重を現責めにして居る體。八田平、同じ奴にて、二重舞臺に、手桶を枕に居睡つて居る。この見得よろしく、琴唄にて幕明く。

關内　九重どの。

角内　橘どの。

四人　目を覺まされい。

ト一時に割り竹にてトンと叩く。花橘、九重、目を開き

花橘　申し、吳女さま、どこへ行かしやんすぞいなア。

九重　殿樣、待つて下さんせいなア。

關内　なんぢや。吳女ぢやの、殿樣のと、ちつと目を

皆々　覺まされい。

ト花橘、九重、あたりを見て

花橘　うたゝ寢に、戀しき人を見てしより、夢てふものを驚ろかず。日頃ゆかしい、懷かしいと思ふゆゑ、とろとろとまどろむうち、夢ともなく、現ともなく、吳女さまに逢うたと思うたは、さては夢であつたか。

九重　わたしも同じ戀しさの、夢に見たのは確かに殿樣。覺めては元の折檻の庭。夢は五臓の煩らひと、常々聞けど、幻しに、久秋さまのお姿を、目に見た上はいとゞ猶、逢ひたいわいなア。

花橘　何事も夢の浮世、わしや諦らめて居るわいなア。



岩井粂三郎の傾城九重

角内　なんの事だ。この二三日先から、夜も晝も寢ずに責めいと、お頭の云ひ附けゆゑ、眠たい目をおッ開いて、白状せいと云へば、イヤ、穴女ぢやの、久秋ぢやのと、よだれもないたわ言ばかり。エヽ、けたいの惡い。

可内　イヤモウ、八の字組の頭の云ひ附けゆゑ、責めは責むるものゝ、この頃はお傾城より、こちとらが、責めらるゝやうなものぢや。見りやアお頭も、疲れが出たやら、とろ／＼とやらるゝ。我れらも少しとろめかす程に、頼むぞ／＼。

岩内　イヤ又、此奴程、よく眠たがる奴はない。シタガ、可内が云ふ通り、もうこちとらも、引き入る程眠たい。こりや又、代る／＼に、ちつと休んでも、大事ありそむないものだ。

關内　ソレイヤイ。また此お傾城も、好い加減に得心して、云ふ事を聞いて寢たがよいになア。

岩内　サイヤイ、蓼喰ふ蟲も好き／＼と、おいらなら、寢る方がよいがなア。

關内　ちつとの間、寢轉べ／＼。

岩内　イヤ、大事の御用を云ひ附けられ、暫らくでも油斷するうち、取逃がしては、此方の笠の蠅が飛ぶ。眠たくも、辛抱せい。

角内　こりや、岩内が云ふ通り、大事の云ひ附け、心を許しふけらせたりや、おいらが扶持が上がつたりぢや。

岩内　さうだ／＼。サア、二人ともに、目を

四人　覺まさつしやれ。

　ト此うち可内眠り居て、この時恟りして

可内　ハイ／＼。御免なされて下さりませ。餘り眠むたさに、昨夜も外出して、代りを雇ひましてござりまする。モウ／＼眠りは致しませぬ。お免されて下さりませいお免され下さりませい。

關内　何吐かす。その寢ぼけた態を、お頭が見さつしやつたなら、大抵な事ではあるまい。コリヤ、性根を附け性根を附け。

　ト割り竹にて叩く。

可内　アイ／＼。申しまする／＼。この間の丁半の時、四五十手味噌をしたより外に、覺えはござりませぬ。

岩内　エヽ、性根を附けろ。何もおのれに白状せいとは云はぬわいやい。

　ト可内あたりを見て

可内　今のはわいらであつたか。おらは又、お頭と思うて、

これまでの惡事を既に漏らさうとしたわい。
關内　何を馬鹿めが。
角内　サア、お傾城。殿樣のお心に隨ふと云はしやれ。
四人　目を覺まさつしやれ。
ト また叩く。兩人恟りして
花九　ア、痛いわいなア。
ト 此うち八田平、目を覺まし、背伸びして
八田　ぐつすりとやつてのけた。コリヤ、四人の者ども。まだ色よい返事はせぬか。おらが旦那大炊之助さまが、預かつて戻らしやつた久次さま、その二人の傾城に心を掛け、口說いても得心せぬゆゑ、怪我のないやうに、その現責め。この間から、責めても／＼得心せぬ、死太い性根。この上はおらが代つて、一責め責めて得心さす。わいらは、ちつとの間暇をやる程に、皆部屋へ行つて、休め休め。
角内　何と云はるゝ。そんならちつとの間、とろ／＼とやつても、大事ないか。
八田　おらが呑み込んで居る。早く行け／＼。
皆々　エヽ、有り難い。
可内　ハアヽ、人は氣のものだ。この間から、夜も晝も寢ぬと思へば、睡たうでならんだが、今お頭が行て休めといふ詞を聞くと、猶睡たい。
角内　何を吐かすやら。そんなら、お頭、頼みましたぞや。
八田　オヽ、サ、早う行け。
皆々　サア、皆、來をらう／＼。
ト 四人、割り竹かたげ、橋がゝりへ入る。跡は合ひ方になり
八田　コリヤ、長うはならぬぞ。ちつとの間ちやよぞよ。
ト 見送り、兩人の側へ行て
九重どの。橋どの。この間からの責苦、定めて疲れでもあらうが、主命なれば是非がない。彼奴等を部屋へやつたは、ちつとお二人に休まさう爲。サア、大事ない。二人とも少しの間なりと。
ト 兩人睡り居て、フッと目を開き
花橋　八田平どのゝ志し、忝なうござんす。思はぬ事にお前方までに苦勞を掛け、氣の毒にござんすわいなア。
九重　只胴慾なは久次さま。現在弟御の久秋さまと、云ひ交したこの九重へ、無體の戀慕。剩さへ、久秋さまに逢はれぬやうになるといふは、ほんに辛氣な身の上ちやわいなア。

花橘　わたしも同じ思ひ。釆女さまには、お行くへ知れず、久次さまに思はれ、この憂き目。いつそ死んだがましでござんすわいなア。
八田　二人ともに尤もな悔みぢやが、死んで花實も咲かず。身を捨てゝこそ、浮む瀬もあれと云へば、又とくと思案して見たよいわいなう。
トこなしあつて、此うち奥より久次、衣裳、壺折にて、太刀を提げ
久次　八田平。二人の女の返事はどうぢや。
ト出て來り、褥へ直る。八田平、ちやつと割り竹を構へ
八田　イヤサ、いろ〳〵と口說けども、この間からの責苦に弱り、他愛もない寢言ばかり。一向絲體もない儀でござりまする。
久次　ハテ、死太い女郎めらぢやよな。
八田　イヤモウ、情の剛い女郎め。この上は縛しあげて
久次　イヤ〳〵、荒立てゝは猶ゆかぬ。ヤイ、兩人。
ト花橘、九重、睡り居る。
八田　御意ぢや。目を覺まさう。
ト割り竹にて舞臺を叩く。と目を開き

兩人　お前の情で、思はずとろ〳〵と。
ト云はうとする。八田平、ちやつと割り竹にて紛らし
八田　コリヤ〳〵。また寢言か。アレ、久次公は、あれにお渡りなさるゝぞ。氣を慥かに持て、兩人。
ト兩人、久次を慥かに見て
花橘　ほんに、久次さま。
九重　いつの間にござんしたえ。
久次　花橘。九重。胴慾な者ぢやぞよ。情を表とする傾城が、斯くまで心を盡す久次に、一度の情も掛けぬとは、エヽ、つれないぞよ。
花橘　浮川竹の賤しいこの身、淺からぬお志し、有り難うはござんすが、どういふ緣ぢやゝら、釆女さまとは、そも突出しの初めより、云ひ交した深い仲、それ御存じでありながら、口說かしやんすは、つれないとはお前の事。どうぞ釆女さまに逢はるゝやうに、お前の情で、ナア、九重さん。
九重　サア、わたしも同じ願ひ。二世とかけたる久秋さま、それに無理なお前の戀路。ふッつりと思ひ切つて、久秋さまに添はして下さんせいなア。
八田　ハア、傾城に誠はないものぢやと聞いたが、これ

を思へば四角な玉子も、あるまいとも云はれぬわいやい。

久次　役にも立たぬ心中。その張りの強いに猶惚れた。否でも應でも抱いて寢る。サア、兩人、返事はどうぢや。

花橘　例へどのやうな憂目に遭うても、この戀ばかりは、

九重　否でござんすわいなア。

久次　否というて、其まゝで置かうか。八田平、打ち据ゑて返事をさせい。それを肴に一獻酌まん。誰れかある。銚子をこれへ。

呉竹　ハア、。

ト奥より呉竹、衣裳、裲襠にて杯持ち出る。柳葉、長柄の銚子持ち出る。

呉竹　夫大炊之助、今日は風邪にて、暫らく保養の間、憚りながら、妻の呉竹、御機嫌伺ひまする。

柳葉　仰せつけられました九獻。イザ、召上がられませう。

久次　出かした、呉竹。柳葉。サア、八田平、打ち据ゑて返事をさせい。

八田　畏まつてござりまする。

久次　サア、酌せい。

柳葉　アイ。

ト柳葉、酌する。此うち八田平、花橘、九重が眞中へ入る。

八田　コレサ、二人ながら、惡い合點ぢや。行くへの知れぬ采女どのや、また心の變つた久秋さまに、心中立てするは大きな野暮。それより、久次公のお心に隨はゞ、活計歡樂、榮耀の有り條。その時は、八田平めも御褒美にあづかるといふもの。すりや、そこら中が好い事だらけ。思ひ替へて見る氣はないか。どうぢや／＼。

九重　流れの身とはいひながら、貞女兩夫に見えぬ心中。

久次　忠臣二君に仕へぬ道理。あつたら口に風引かさずと、八田平どの、もうこの上はふッつりと、構うてばし下さんすしないなア。

八田　イヽヤ、構はにやならぬ、久次公の御諚意。金輪奈落の底まで、口説き落してお寢間の伽。オツと、得心あれば玉の輿、否とあれば火水の責め。善惡の返事は生死の境。

九重　ハテ、命はさら／＼惜しまねば

花橘　責めなりと、殺すなりと

兩人　勝手にさしやんせいなア。

八田　お聞きの通りの返答。この上は如何計らひませうな。

久次　ハテ、死にたい女郎め、情を以て現責めも、可愛さ

餘つて憎さが百倍。この上は、水責め、火責めの用意せい。

八田　成る程、左やう。手短かに、いつそ拙者が。

ト立たうとする。呉竹、留めて

呉竹　待つた。久次公も、それはあんまりお氣が短かいと申すもの。もし其やうな恐ろしい責苦を見せ、ひよつと二人の衆に、怪我でもあつた時には、ほんの、一も取らず二も取らずとやら。ナア、柳葉。

柳葉　ハイ、木折りにゆかぬが戀の道。兎角お心長う、幾重にも義理にせまれば、ツイずる〳〵と御得心あるが女の癖。

久次　すりや其方達が

呉竹　しつかりと預かりました。

久次　兩人が色よい返事を。

花九　どうでもわたしらを。

ト二人こなしあつて

呉竹　ハテ、何事もこの呉竹が、惡いやうにはせぬ程に、マア、奥へ。八田平も休息しや。

八田　エイ。

呉竹　イザ、久次公。

柳葉　先づ、お入りあられませう。

ト唄になり、久次を先に呉竹、花橘、九重、柳葉、皆皆こなしあつて奥へ入る。八田平は橋がゝりへ入る。

ト向うより久秋、衣裳、壺折の上へ、簑笠にて横笛を吹き、出て來て、本舞臺栞門の側へ佇み、矢張り笛を吹く。奥より呉竹出で、笛を聞く。

呉竹　あの唱歌は妻を慕ふ相夫戀。ハテ、しをらしい笛の音ぢやなア。

ト久秋、笛をやめ

久秋　その聲は、大炊が妻、呉竹ではないか。

呉竹　ヤア、あなたは久秋さま。其お姿は。

久秋　忍んで來たは、九重に逢ひたさ。この久秋が秋に寄る、妻乞ふ笛に恥かしいこの姿。

呉竹　一天の君さへ、戀ゆゑに、草刈り山路とならせたまふ。なんのお恥かしい事はござりませぬ。これへお入り遊ばされませう。

久秋　入つても大事はないかや。

呉竹　なんの大事ござりませう。九重さまには、首尾を見合せ、お逢はせ申しませう。

久秋　それは嬉しいが、兄上のお目にかゝらば、この身の

爲になるまい。
吳竹　そこを知らさぬ、わたしが計らひ
　トこなしあつて
腰元柳葉、預かりの九重どのを、これへ伴へ。
柳葉　畏まりました。
　ト九重を内より連れて出る。久秋見て
久秋　ヤア、九重か。
九重　殿樣、逢ひたうござんしたわいなア。
　ト取りつく。
吳竹　アヽ、コレ、密かに〱。ソレ、早う。
　ト皆々こなしあつて
柳葉　そんなら、あなたは
吳竹　久秋さまぢやわいの。
柳葉　エヽイ。
九重　申し、殿樣、よう來て下さんしたなア。久次さまの無得心に、引離された二人が仲、逢ふ事もならぬと、泣いてばつかり居りましたわいなア。
久秋　この久秋も、逢ひたいは飛び立つやうに思へども、館の人目、大殿が思惑を計らひ、姿をやつして來たも、其方に逢ひたいばかりぢやわいなう。

柳葉　申し、奥樣、あのお二人の睦ましさを見ては、久次公がどのやうにお口說きなされても、九重さまが御得心のないのは、御尤もでござりまする。
吳竹　イヤモウ、鴛鴦の思ひに比翼の契り。久次公の戀路は、上見ぬ鷲の我まゝ。お目にかゝらばお二人のお身の上。どうぞ密かに積る話しを。ナウ、柳葉。
柳葉　それはわたしが計らひで、人目にかゝらぬ次の一間で、しつぽりと、申し、九重さま。
九重　そんなら、殿樣。
　ト手を取る。
久秋　滅相な。爰は大炊が屋形。もし聞えなば
柳葉　ハテ、わたしらや奥樣が、呑み込んで居りますれば、滅多に氣遣ひはござりませぬわいなア。
吳竹　それ〱。早うお二人さま、お越しなされませう。
　ト此うち向うより非人蛇骨婆ア、襤褸を着、乞食婆アにて、尻を搔きながら出で
蛇骨　嬉しや〱。やう〱門は入つたぞ。爰が庭先の枝折り門ぢやな。よし〱。
　ト内へ入り
サア、娘を出して下さりませ。娘に逢はう〱。

トヾッと通ると、皆々こなしあつて

呉竹　見れば、さもしい形をして、娘に逢はうとは合點のゆかぬ。そちは何者ぢや。

蛇骨　此村大炊之助さまの屋敷と、知つて來たのぢや。早う娘に逢はして下さんせ。娘に逢うたら譯が知れる。當はなくても、ぢらしてもらはにやならぬ、アヽ、ごろさがせぶるかして、身内がぞろ／＼痒うて、堪らぬ／＼。

ト身内をかさ／＼と掻く。

柳葉　エヽ、むさい。早う門前へ出ぬか。意地張ると、侍ひ衆に云ひ附けて、叩き出さうか。

蛇骨　コレ、女中樣、お前も美しい顏をして、其やうに叱らぬものぢや。

柳葉　まだ／＼、慮外な、早う出をらぬか。

蛇骨　出をれ／＼と、試し者とは違ふワ。

柳葉　こま言云はずと、早う出をらぬか。

蛇骨　ハテ、よう出したがる女中、どうでも屋敷で不自由なの。

柳葉　よい／＼。意地張らば、仕樣がある。コレ／＼、八田平どの、この女を。

呉竹　アヽ、待ちや／＼、柳葉。あれが詞に、此村が館と知つて、娘に逢ひに來たといふ。先づ、樣子を尋ねた上の事にしたがよい。

蛇骨　ハアヽ、お前はこの家の奥樣ぢやな。また女中でも、上に立つといふ者は、違うたものぢやわいなア。

呉竹　さうして、其方の娘といふは、何者ぢや。

蛇骨　わたしの娘は、久次さまとやらに請け出されて、この家へ來て居る、傾城の九重でござんす。

久秋　ナニ、すりや、九重が母樣。

九重　わしが母樣とはえ。

蛇骨　ムウ。さては其方が九重か。オヽ、懷かしや／＼。

ト九重へ行かうとする。柳葉、突き廻して

柳葉　慮外な。九重さまは、誰れあらう、久秋さまの云ひ交してござる

蛇骨　その久秋どのはおれが聟。コレ、九重、何を餘所餘所しい。おりや現在、其方の母ぢやわいなア。

呉竹　申し、九重さま、あの者を親とは、覺えござりまするか。

九重　サア、わたしも幼ない時から廓に育ち、母樣あるとは聞きながら、お行くへとても知れず、日頃逢ひたいとは思うて居たれど、あの姿を見ては

久秋　親といふのは合點がゆかぬ。

柳葉　成る程、幼ない折に、お別れなされたれば、親御とあれば、何ぞ慥かな證據が

蛇骨　なうて堪るものか。現在の娘を産んだ年號月日。

柳葉　して、その年號、誕生日は。

蛇骨　年號は天正元年己辰十二月十日、卯の刻の誕生。稚名は、そのと云うたであらうがの。

九重　ほんに、それに違ひはござんせぬわいなア。

呉竹　そんなら、九重さまの

久秋　親はあの者。

ト二人顔見合せ

蛇骨　親は寒いにこの態。これから世話にならねばならぬ。聞きや、四海の大將の御簾中になりやるげな。そんなら結構な小袖も、たんとあるであらう。母が貰うて着ねばならぬ。伊達な物でも大事ない。先づ色品を見せて下され。大方眞綿であらう。包みぢやあるまい。

呉竹　柳葉、こりや何としたものであらうぞ。

柳葉　大殿樣の御目にかゝらば、大抵な事ぢやござりませぬ。九重さま、御對面が濟んだら、あの親御は、とつとゝお歸しなされませ。

蛇骨　イヤ、歸るまい。九重に繋がれば、久秋どのゝ爲にも親。その親に逆らふ女郎め、見苦しい。下がれ。

ト蛇骨婆、柳葉を引きのけ、ズツと二重舞臺へ行つて、立て膝にて座る。此うち障子を明け、久次、見て居る。

コレ、久秋どの、あの九重が母ぢや。この上は、孝行にしてもらはにやならぬぞや。

九重　コレイナア、母様。お前は〱。そんなお方とは知らなんだわいなア。勿體ない、コレ、申し、下へ下りさんせぬかいなア。

蛇骨　賣女め、默れ。おのれ、三つ四つまでは手鹽にかゝり、五つの年から人手に渡り、君傾城の勤めをして、久秋どのに馴れなじみ、氏なうて玉の輿。その母が上座が、なんで勿體ない。これからは聟どのに無心がある。親の願ひぢや、聞いて下され。

久秋　ウム、その無心とは。

蛇骨　金が欲しい。悔りさしやんすな。大きな事でもない、二箱か三箱、爰へ出した。大將を聟に取つて不足ながら、そこは大目に見る。初めての無心。聟どの、綾錦の巻き物に、金なら、たつた三千兩。いま爰へ出して下され。

オヽ、取つてもつかぬ、あの顔わいの。ホヽヽヽヽ。

ト皆々こなしあり、久次、障子屋體より出で

久次　久秋、そちや乞食の娘と、云ひ交したなア。

久秋　ヤア、兄上。

九重　久次さま。

柳葉　すりや、最前からの

久次　様子は聞いた。五人の奴等、これへ參れ。

内方　ハア、。

ト橋がゝりより岩内、關内、角内、可内、八田平、皆皆下に居て

八田　久次公

皆々　御用でござりますかな。

久次　如何にも。久秋、九重、この婆めに繩ぶて。

四人　ハア、。

ト四人、バタ／＼と久秋、九重、蛇骨婆を圍ふ。八田平は矢張り橋がゝりの方に殘り居る。

サア、御意ぢや。腕廻した。

ト取卷く。呉竹、柳葉。九重、久秋を圍ひ

呉竹　こりや久秋さま。

柳葉　九重さまには、

兩人　何ゆゑに。

久次　繩掛けるは、傾城の素性。武將の悴、身が弟が乞食娘と云ひ交した科、繩かけて桃山へ引かせ、家老どもの計らひを見る。

關内　サア、久次公の御意。

岩内　乞食に縁組む久秋どの。

可内　繩掛けて桃山へ引く。

呉竹　イヤ、滅多に繩掛けられぬ。傾城は賤しい者と知れてあれば、久秋公の科でもござりますまい。

柳葉　殊に、戀には上下の隔てがないとある、世の習ひ。

呉竹　さほど賤しき九重どのに、久次公も心掛けたまへば

柳葉　滅多に、久秋さまばかりに、繩は掛けられませぬ。

久次　イ、ヤ、身が横戀慕といひしも、斯ういふ事を見出さん爲。

八田　殊に、久次公は、旦那大炊之助さまに、お預けなれば日蔭の御身。

角内　久秋公は、四海の跡目と定まりあれば

關内　非人に縁組まれても、苦しうないか。

呉柳　サア、それは。

四人　サア。

呉柳　サア。
皆々　サア／＼。
久次　面倒な。ソレ、縄ぶて。
四人　ハツ。
ト二人づゝ、呉竹、柳葉にかゝり、立廻りあつて、しやんと見得にてとまり
柳葉　すりや、どうあつても、
關内　久次公の御意
三人　ぢやに依つて。
ト又かゝるを
八田　四人の者ども、待て。
四人　待てとは。
八田　ハテ、九重さまの阿母は、あの乞食婆、それを科にて久秋さまへ縄掛けるなら、とくと實否を糺した上の事。
四人　でも、久次公の御意。
八田　久次公の御意にても、部屋頭のおらが、待てと云はば、マア、待て。
四人　それでも
八田　ハテ、控へて居れ。
ト前へ出る。

久次　八田平、身が詞を背き、其方が實否を糺すとは。
八田　今一應下郎めが、とつくりと承はつた上、縄掛けなりと、首刎ねなりと、遊ばしたがようござりませう。
久次　すりや、其方がこの實否を
八田　蛇の目を灰汁で洗うたやうに
久次　糺して見るか。
八田　お目にかけませう。
呉竹　八田平、どうぞ久秋さまの。
八田　ハテ、ようござりまする。下郎めが糺してお目にかけませう。イヤ、ナニ、九重どのゝ阿母。ちよつとお目にかゝりたい。
蛇骨　アノわしにか。
八田　如何にも。
ト右へこなしあつて、八田平の側へ行つて
蛇骨　奴どの、なんでござる。
八田　ハテ、其方様が、九重さまの阿母ぢやよな。
蛇骨　アイ、實の母でござる。
八田　して、そりや何を證據に、親子の名乘りなされたな。
蛇骨　それはなア、娘を産んだ年號、月日、誕生の刻限までで

八田　知つてござらば、今一度承はりたい。
蛇骨　オヽ、云うて聞かしませう。年號は天正元年己辰十二月十日、卯の刻の誕生。しかも、あれが父御の手で、しつかりと書いてござるわいなア。
八田　九重どの、あの通り覺えがござりまするか。
九重　サイナ、常々肌身はなさぬ守り袋に、書いてござんすわいなア。
八田　ウム、すりやいよ／＼違ひはない。して、その父御の手で書いたといふ、誕生日の書き物が拜見いたしたい。
蛇骨　オヽ、心安い事。見せやんしよ。
ト出さうとして
イヤ／＼、それを出したら、取上げて、後に知らぬと云はれたら、どうもならぬ。
八田　ハテ、疑ひ深い女中ぢや。ちよつと見さへすりやよいわいなう。お出しなされい。
蛇骨　イヤ、滅多に出されぬ。なんぞ其方からも、慥かな物を取らにや、見せる事はなりませぬ。
八田　ハテ、堅苦しい。えいワ／＼。書いて進ぜう。
ト硯箱を取つて來て
サア、なんと書くのぢや。
蛇骨　マア、書いて下さんせい。一札の事。
八田　一札の事。
ト書く。
蛇骨　九重どの誕生日の一通、慥かに受取り申し候ふ、吟味の上相違これなく候はゞ、其許に遣ひ料として一ケ月に三千兩づゝ出し申すべく候ふ、仍つて件の如し。年號、月日。
ト八田平、書きじまひ
八田　これでよいか。
ト婆、取つて見て
蛇骨　オヽ、ようござんす。
ト懐へ入れ
サア、此方の書附け。
ト書附けを出す。八田平見て
八田　して、父御は御健勝かな。
蛇骨　サア、これも廿年以前に死なれました。
八田　ハテ、殘り多い事の。若後家ぢやの。さぞ便りなう暮らしやつたであらう。
蛇骨　推量しておくれ。廿年この方、閨も淋しう暮らすわ

いな。
八田　して、その亭主は後連れか。但しは幼な馴染かな。
蛇骨　幼な馴染の段かいな。廿年先に死なしやつた人より外、ついに外に殿御の肌知らず。本腹ぢやわいな。
八田　九重の誕生日は、この書附けに相違ないぢやの。
蛇骨　なんの違ひがあらうぞいなア。書いた物が證據ぢやわいな。
八田　父御の死なしやつたも、二十年以前に違ひないのぢやの。
蛇骨　幼な馴染の男の死んだ年月、忘れてよいものかいな。しかも廿年以前、正月の十日であつたわいなア。
八田　すりや、兩方ともに
蛇骨　少しも違ひはないわいな。
八田　アノ大騙りめが。
蛇骨　ヤア。
八田　天正元年己辰の年から、今年まで繰つて見れば十九年、すりや九重どのは十九歳。
蛇骨　九重が十九歳なれば、なんで騙りぢや。
八田　父御の死なれたは廿年以前、九重どのゝ年は十九、父御の死なれた明くる年に、出生したか。
蛇骨　サア、それはなア、それ〳〵、あの子を腹に持つて居るうちに、父御は死なれた。その明くる年に産れたあの子。それで娘は十九、父御は廿年になる。それがなんで騙りぢや。
八田　吐かすな。ヤイ〳〵。たつた今云うた、おのれが男の死んだは、廿年以前の正月の十日、九重どのゝ誕生は十九年以前の極月十月。死んだ月は留つても、廿四ケ月目に産んだか。
蛇骨　サアそれはナ。オヽ、それ〳〵。辨慶は三年も腹に居た。廿四ケ月が滅多に珍らしい事でないわいの。
八田　アノ大盜人め。まだその上に、この書附けの墨色といひ、紙の色、こりやたつた今書いたものぢや。それを、廿年以前に死んだ父親の手跡ぢやと吐かすので、騙りは知れてあれど、おのれが口から年月の手目を上げれば、頤をきゝあがるに依つて、先刻から口車に乘せたのぢや。なんと得心がいたか。
蛇骨　まだ〳〵得心せぬ。どうやらどき〳〵して、算用がとんと知れぬ。なんでもあれは子でなけりやならぬ筈ぢやが。オヽ。ありや後連れの子ぢや。親仁に別れ、明くる年嫁入りした、後の男に出來た子ぢや。

八田　吐かすな。それも先刻に、その男より外の男に肌ふれた事はない、本腹ぢやと吐かしたではないか。アノ、玆なむく犬婆めが。

蛇骨　エヽ、しまうた。よう覺えてけつかる奴めぢやなア。

久秋　そんなら九重が

呉竹　母と云うたは

九重　噓でござんしたかいなア。

八田　噓も噓、尻の割れた、これがほんの、赤噓でござりまする。

呉竹　それに又、あの九重さまの誕生年月を

八田　知つたる元は、懷中に。

ト蛇骨婆が懷より最前の守り袋を引き出す。

蛇骨　それを。

ト蛇骨婆寄るを振り拂ひ

八田　お覺えがござるか。

ト九重が傍へ抛る。九重、取つて

九重　ほんに、こりやわたしが守り袋ぢやわいなア。

八田　さてこそ。いつの間にやらちよろまかし、九重どのの母御とは、よつく拵らへ事ひろいだな。玆な大騙りめが。

ト蛇骨婆しよげる。久次、思ひ入れあつて

久次　うぬ。

ト八田平に切りつける。よろしく留める。

八田　こりや、久次公、下郞めを何となさるゝな。

久次　憎くき女め、ぶち放さうと思うて。

八田　彼れら風情に、我が君の、お手を下ろさるゝには及びませぬ。

久次　でも。

八田　下郞め、好きに計らひます。先づ／＼、お控へ下さりませい。

ト刀の手を突き放す。

久次　ムウ。

トこなしあつて、刀を鞘に納める。

四人　して、この老ぼれめはな。

八田　門前から追ッ拂へ。

蛇骨　エヽ、忌々しい。骨折つて、高見からまぢ／＼見て居るやつサ。

ト久次へ掛けて云ふ。

八田　うぬ、此やうな仕事ひろいだは、久秋公と九重どのの、緣を切らす云ひ合せとは知つて居れど、逢うて詮議す



三世坂東三津五郎の早川高景

る時は、血で血を洗ふが氣の毒さに、此まゝにて生けて返すぞ。有り難いと思うて、とつとゝうせう。

四人　老ぼれめ、立ちをらう。

ト割り竹にて叩く。

蛇骨　エヽ、立つて居るわいなう。

四人　サア、歩め。

八田　ドリヤ、おれも送つてやるべいか。

蛇骨　お頭様、なんのそれに及ばぬわいな。

四人　キリ〱歩め。

ト割り竹にて叩き立てる。

蛇骨　アヽ、コレイナア。荒々しくておくれな。姫御前は癪がのぼるわいなア。

四人　こま言云はずと、早くうせい。

ト唄になる。蛇骨婆を先に、角内、關内、岩内、割り竹にて追ッ立てる。八田平後より割り竹をかたげ、手を振つて向うへ入る。九重、奥へ入る。久次、始終口惜しき思ひ入れ。久秋、こなしあつて

久秋　八田平が働らきにて、事故なう治まる上は、暫らく一間へ、ナウ呉竹。

呉竹　左やうでござりまする。一間には、ソレ、今のナ。早うお越しなされませい。

久次　イヤ、久秋、待て。

久秋　ハツ、御用かな。

久次　兄弟のよしみ、其方が口說き、九重を抱かして寢かせい。

久秋　エヽ。

久次　兄への孝行、早く取持て。

久秋　サア、それは。

久次　但しは成らぬか。

久秋　成らぬではなけれど、どうもその儀は。

久次　成らずばいつそ。

呉竹　マア〱〱。

ト呉竹、柳葉よろしく立廻りあつて留める。ト「御上使」と云ふ。太鼓、謠にて、向うより、早川高景、衣裳、長上下にて、侍ひ附き來る。

高景　御上使。

久次　思ひも寄らぬ上使とは。

高景　御上使なれば、罷り通りまする。

ト立廻り、とめる。

柳葉　イザ、先づ。あれへ

呉竹　お通りあられませう。

ト高景、上座へ通り、床几にかゝる。久次、呉竹、柳葉、並よく並び居る。

久次　早川高景、改まつた上使の趣きは。

呉竹　委細承はりたう存じまする。

高景　最前持たせし品々、一々これへ。

柳葉　ハア、。

ト柳葉、呉竹、最前の臺の物を向うへ並べる。高景こなしあつて

高景　改めて久次公へ、この五節句の品を以て、久吉公より五ケ條のお尋ね。

久次　高景、その仔細は。

高景　先づ、一番の臺に据ゑたは、初春の造り物、梅は諸木の兄として、弟になぞらへし櫻花、落花微塵に踏み散らし、若枝銳き鎗梅の狼藉。

呉竹　イヤ、憚りながら、私しが存じまするには、兄君たる久次公、四海の跡目を接き木の梅花。四方に馨るが順道かと存じまする。

久次　呉竹が云ふ通り、兄を差措き、弟を立てうといふが、そりや無理といふもの。これにても身共が狼藉か。

高景　桃の節句は雛祭り、即ち桃山の御遊興。内裏を恐れぬ内裏雛、前代未聞の奢りの沙汰。

呉竹　成る程、御尤ものお尋ね。奢ると申せば上はなけれど、憚りながら若氣の至り。

高景　五月を祝する菖蒲刀になぞらへし、不動國行の御劍、一應で渡されぬは、跡目を奪はん御所存でござらうがな。

呉竹　サア、それは。

高景　竹に括りしこの短冊、年に一度の天の川、渡り得がたき日本へ、押渡りたる毛唐人と、心を合はす叛逆とのお疑ひ。

呉竹　して、この栗の一枝に、お尋ねはな。

高景　栗の名所は丹波の國、父打ち栗のこの一枝、親に刃向ふ不孝の振舞ひ。右五ケ條の御不審、キツと糺し參れよとの仰せを受け、罷り越した早川高景。とくと御思案あつて、有無の御返答承はりたう存じまする。御返答がござるか。

ト障子屋體の内より

大炊　その五ケ條の申し開き、此村大炊之助、それへ參つて仕りませう。

ト大炊之助、衣裳、上下にて出る。

夜前より風邪に冒され、暫らく保養の間、久次公へ何か御不審の條々。高景どのには御上使の役目、御苦勞千萬に存じまする。

久次　すりや、其方が身共に代つて、この五ヶ條の

吳竹　申し開きがございますかえ。

大炊　如何にも。某、以前は下郎たりしを、久吉公のお目立ちにあづかり、久次公の乳人役、莫大の恩祿、御寮様より預かり奉り、立歸るその日より、心を碎く大炊之助。これ皆久吉公への恩報じ。その上、今日、御上使五ヶ條の御不審、愚案ながらも、逐一に、申し開きが、これ又、久次公への恩進。御苦勞ながら高景どの、今一應御使者の趣き、承りたう存じまする。

高景　第一、君たる久秋公を追ひ退け、非道に跡目を繼がんとせられし、第一の箇條。

大炊　ハッ、憚りながら、大炊之助めが存じまするは、實生えの花の弟君を差措き、繼穗の兄君を跡目に立てるが義理順道。此方よりは其方へ疑ひの數々、と申せば、詞に角が立つ。そこを察して久次公、わざと身持ち放埓は、愛想を盡かされ、追ひ出され、義理ある久秋公に、跡目を繼がせんといふ御所存。と申したらば、なんと、この申し開きは立つではござらぬか。

高景　又、この紙雛の送り物は、桃山の御遊興。これ二ヶ條の御不審。

大炊　只今申す通り、奢りの沙汰は四海の跡目、久秋公へ讓らんと思し召す御仁心から。

高景　して、菖蒲刀に譬へし國行の御劍。御不審の三ヶ條。

大炊　その儀は久吉公御發向の折柄、久次公へお預け、餘人が渡せと申したとて、迂濶にお渡しあらうか。

高景　先達て唐土より、この土へ渡りし謀叛人と、心を合はすと、御不審の四ヶ條。

大炊　ハテ、仰々しきお疑ひ。その又、謀叛といふ、なんぞ慥かな證據ばしござるかな。

高景　證據といふは世の取沙汰。

大炊　世の取沙汰は證據にはなりますまい。

高景　天に口なし、人をして云はしむる、周南、召南、十五の國風、皆證跡になるまいか。

大炊　ハヽヽヽヽ。それこそ今、貴殿が云つた唐人の世迷言。なんぞ慥かな證據がなくては、謀叛人とは申されまい。

高景　然らば又、この父打ち栗の一枝。不孝の罪の第五ヶ條。

大炊　不孝と見せしは、身退かん一つの手段。

高景　イヽヤ、その云ひ譯は暗い／＼。誠に身退かんと思し召さば、仕様模様もあらん。それに何ぞや、親を親とも思はぬ惡心、刑罰。その罪不孝より大いなるはなし。その刑罰を糺す武將ともなるべき御身を以て、道に背きし御振舞ひ。この申し開きは、あるまい／＼。

大炊　すりや、如何やうに申しても

高景　不孝の罪遁がれがたき五ヶ條の申し開き、非を理に曲げても久次公の、お命助けうと思はるゝ、貴殿の忠心感じ入る。さりながら、御母公を始め、諸氏の面々、毎日の評定にも、例へ諫言仕り候ふとて、一旦の得心にて、又ぞろや、惡心や奢りを始めん。所詮助け置いては萬民の歎き、切腹させいとある、久吉公の嚴命。

久次　ヤア、奇ッ怪な高景。最前より蟲を殺して聞いて居れば、さま／＼のたわ言。もうこの上は、四も五もいらぬ。四海の跡目はこの久次と、立歸つて言上せい。見るもなか／＼、穢らはしい。

ト三方を蹴散らして、奥へツイと入る。

高景　ヤア、法外なる振舞ひ。久吉公の諚意なれば、我が君も同然。引ッ縛つて御殿へ引け。

トついと立つ。大炊之助、高景が鐺を捉へてとめる。皆々こなしあつて

大炊　待つた、高景どの。御立腹は御尤もながら、大炊之助お願ひあり。先づ／＼、お控へ下されい。

高景　ムヽ。願ひとあるを、聞き屆けぬも如何。して、その仔細は。

大炊　暫らく。

ト高景を宥め

イヤ、ナニ、奥呉竹。柳葉もろとも、奥へ行て、御短慮な久次公の、お側を離れるな。

呉竹　畏まりました。サア、柳葉、おぢや。

柳葉　アイ。

ト唄になり、兩人こなしあつて奥へ入る。大炊之助、思ひ入れあつて、右の梅の木、立木の三方の前に置き

大炊　大炊之助がお願ひ申し候ふ。何卒久次公の御助命。預かり歸りしその日より、種々樣々に心を碎く諫言も、丁度今日が五十日。この大炊之助が身を粉に碎いても、何卒久次公のお命、助くる仕様は、この花の、今を春邊

と咲き返る、御上使の情の室咲き。

高景　オヽ、天晴れの御心底、憚りながら、高景感心仕る。して、大炊どのの御思案は。

　ト大炊之助、梅の枝を持つて

大炊　爰を切れ、と云はぬばかりの梅の花。

高景　ムウ。云はぬばかりの梅の花。

大炊　サア、子々を切れ、と云はぬばかりの梅に譬へし、久次公の、お身變り。

高景　かゝる例は、源の滿仲公、家臣たる仲光に、美女御前の首討てと以ての外の怒り。

大炊　討てとあるも、お主なり、

高景　討ち奉るも、お主なり、

大炊　如何はせんと當惑の、折に幸ひ我が子の幸壽丸、美女御前のお身替りに、討つてこの世に名を殘す。

高景　心は同じ忠義の道、その仲光は幸壽といふ、悴が爲に名を揚げる。久次公のお身替りに立つべき悴は

大炊　サア、其お身替りはこの梅の幹。花の身替り、老木のこの、サア、爰を切れと、云はぬ心を推量あれ。

　ト大炊之助、いろ〳〵こなしあつて

高景　ハテ、面白き花の身替り。造り花と知りながら、打ち折つて歸るも武士の情。御臺所の御心底、汲んで知れとのこの短册は。

　ト竹に括りし短册を出す。大炊之助見て

大炊　忘れても、汲みやしつらん旅人の、高野の奥の玉川の水。

高景　六玉川のその中に、高野の奥の玉川の水、人誤まつて汲まん事を恐れ、忘れても汲みやしつらんと、毒あるを戒めのこの一首。

大炊　ムウ。毒を汲むなとあるその歌の心。切腹せよと久吉公の嚴命。それに却つて和らかな、園生の方の情の歌。

高景　高野の奥へも身退き、剃髪染衣の姿ともなすならば、それこそ優曇華の花、七寶の玉の臺の玉川の水。

大炊　流れは同じ忠義と情。

高景　染める衣の玉川や。

大炊　二つの思案は奥の一間。

高景　梅の返事。

大炊　短册の謎と。

　ト立ち上がり、こなしあつて

高景　爰を切れ、と云はぬばかりの梅の花。

大炊　高野の奥の玉川の水。

高景　とつくりと、御思案召され。

ト唄になる。高景こなしあつて、障子屋體へ入る。大炊之助、一人殘り、いろ〳〵思案して居る。橋がゝりより八田平出で、しか〳〵あつて

八田　申し、お旦那樣〳〵。

大炊　ムウ。八田平。

八田　只今の樣子、殘らずあれにて承はりましてござります。久次公の御首討つて、お渡しなされては、これまでの

大炊　ヤイ〳〵、下郎め、何を小差出た。控へて居らう。

八田　膝とも談合。時の用には、鼻缺けの猿智慧でも、お役に立つ事もごわりませう。是非、久次さまのお身の上は

大炊　まだ〳〵。奥には高景が居召さる。

八田　どうあつても、久次公のお首を

大炊　イヽヤ、久次公のお首は討たぬ。

八田　して、御上使へ申し譯は。

大炊　久次公の、お首を渡すと

ト大炊之助、物云はずと、最前の梅の花の枝を出し

久次公の、お首はこれ。

ト八田平思案して、大炊之助が前へ座る、首さしのべ

八田　お切りなされませ。

大炊　なんと。

八田　最前高景どのへ、お詞を番はれし花の身替り。大將人形と下司奴の一文首。奴めが首を切つて、憚りながら、久次公のお身替り。

大炊　ハテ、幼少より側近う召仕うた者ほどあつて、エヽしほらしい健氣な覺悟。併し、最早身替りにも及ばぬ。

八田　久次公の、お首をも討たず、身替りにも及ばぬとは。

大炊　死ぬばかりを、忠義とは云はぬぞよ。

ト大炊之助、胸を敎へる。

八田　すりや、お旦那の胸中に、

ト大炊之助、八田平、顏見合せ

大炊　花も實もある

橘の盛りぢやよなア。

ト唄になる。大炊之助こなしあつて、奥へ入る。八田平一人殘り

八田　お旦那の今のお詞、ハテ、どうぢやなア。まゝよ、ドリヤ、部屋へ行て休まうか。

ト行かうとする。障子を開き、高景、床几にかゝり居る

て

高景　名を聞いて、また見直すや草の花。

ト八田平立ちとまり、こなしあつて行かうとする。

コリヤ、下郎。

八田　ネイ。あなたは御上使高景さま。御用がござりまするか。

高景　顔を上げい。ハテ、健やかな男ぢやな。して、名は何と云ふ。

八田　下郎めは、八田平と申しまする。

高景　用はない。次へ立て。

八田　ネイ。

ト行かうとする。

高景　コリヤ、待て。

八田　ネイイ。

ト戻る。

高景　名はなんと。

八田　下郎の名は八田平。

高景　ハテ、八田平ぢやよな。

ト障子さす。唄になる。トこなしあつて奥へ入る。ト久次、一間を出で、呼子を吹くと、橋がゝりより関内、角内、可内、岩内出で

四人　久次公、御用かな。

久次　如何にも。久秋に科を拵らへ、追ひ拂はうと、九重が落せし守の證據に、非人の娘と僞はりし事も、八田平めに見出だされ、最前の仕儀。殊に、高景上使となつて、我が積悪露顕の上は、其方達に云ひ附け置いた通り、後程、コリヤ。

ト岩内に囁く。岩内、段々囁く。

岩内　すりや、かねての手配り。

三人　番手を定めて。

久次　必らず

四人　ハア。

トばら／＼と橋がゝりへ入る。始終此うち合ひ方にて、久次こなしあつて、この前より呉竹、久秋、奥より出かけ、見て居る。三人フツと顔見合せ、こなしあつて

久秋　兄上様。

呉竹　久次公。

久次　久秋。呉竹。すりや、今の様子を

久秋　矢ツ張り四海の跡目を、お望みなさるゝ今のお詞。

久次　それ見た久秋。うぬ。

ト切りかくる。吳竹の留めるを引退け、久秋を引きつけるを、高景、ツカ〳〵と出で、久次を引き廻し、久秋を圍ふ。「うぬ」と又寄るを、高景、最前の梅の枝にて、散々に打ち据ゑる。久次その手をグツと取る。

久次　高景、そちや主をなぜ打つた。

高景　イヤ、家來ではござらぬぞ。

久次　ナニ、家來ではないとは。

高景　久吉公の上使に立ちたるこの高景、今日一日は久吉公。花物云はぬ梅の折り枝の折檻。その短慮が御身の禍ひ。四海の跡目治むべき大將が、輕々しい御振舞ひ、非道の働らき、奢りの條々。剩さへ、第一若君久秋公を、お手討ちとは、非道を以て四海の繼目、なか〳〵繼ぐこと思ひも寄らず。大惡無道を矯め直す梅の打擲、父御の御意見、なんと骨身にこたへたるか。

ト散々に打つ。久次こなしあつて

久次　ヤア、諫言聞かぬ。主に刃向ふ高景。うぬ。

ト太刀振り上げる。この時、大炊之助、無紋の上下、白小袖にて、三寶に九寸五分、最前の短册を載せて、ツカ〳〵と出る。久次をこれにて留め、チリ〳〵と隔てゝ、よき所にて

吳竹　ヤア、この姿は。

大炊　梅の身替り、只今、お目にかける、高景どの。

吳竹　エヽ、そんならお前が切腹か。

高景　久次公に成り替り、申し譯の切腹とは、ハテ、天晴れの忠臣ぢやよな。

久次　すりや其方が、我れに替つて。

ト大炊之助、久次をキツと見て、身を顫はし

大炊　エヽ、こなたはなう。その心を改めん爲、歸るその日より色を替へ、品を替への諫言。火を以て火を鎭める道理。身請けせられし傾城どもまで、大炊が屋形へ引入れしも、少しは心が和らがうかと、思ふに違ふこなたの惡心。その傾城も、一人は久次公の思ひ者。今一人は御家來の瀨川釆女が相方とやら。これとて道ならぬ横戀慕。心に隨はぬとて責め折檻。傾城遊女でさへ、筋なき人には肌觸れず、操を破らぬ健氣な兩人。それには替へて、こなたはなア。誰れあらう、我が國無双の名將と云はるゝ、眞柴大領久吉公の、御名跡たる御身を以て、傾城遊女に劣りし魂ひ。久秋公には親兄の禮を重んじ、わざと放埓に身を持つて、愛想を盡かされ、身退き、こなたに跡目繼がせんとのお心遣ひ。御母公には憐れみ深く、

所詮直らぬ性根を見込み、高野の奥へ身を遁がれ、出家遁世の身になられよと、殺して生かすお情の仰せも背き、この大炊めも、こなたゆゑ命を捨てゝの御諫言。親、弟、御家來まで、身を捨てゝの御諫言。心を碎き泣き悲しむは、これ皆こなた一人の心から。これ程までも心を盡すが、こなたの目には見えませぬか。耳へは入りませぬか。今まで近習、外様、町人、百姓に至るまで、科なき者をお手討ち。それに繋がる親兄弟、こなたに怨みのかゝるまいか。あるまいか。その罪科を我が身に受けてのこの切腹。斯く云へばとて、大炊之助、さら〱命を惜しまねど、同じ捨つる命ならば、こなたを眞の大將に仕立てて捨つるならば、切腹は戰場の討死、ニッと笑うて死にますわいなう。某この儘相果てなば、誰れあつて諫むる者なく、一旦は大炊之助めが、忠義に免じて助け置かれても、遂には君のお怒り、母御の情の綱も切れ果て、切腹ならまだしも、六條河原の敷皮に、屍は犬狼、鳶烏の餌食にならしやらうかと、思ひ廻せば大炊之助、死んでも眼は、えい閉ぢませぬ。何卒母御の詞に隨ひ、剃髮染衣の姿となり、親兄弟やこの大炊めが、心を休めて下さりませいなう。

呉竹　忠義とは申しながら、切腹をなされずとも、外に御思案はござりませぬか。これと申すも、久次公、お前のお心一つにて、夫の命、生死の境。心直して下さりませいなア。

　ト泣く、久秋も悄れて

久秋　この久秋がないならば、跡目は極まる久次公、かゝる歎きもあるまいに、儘ならぬ世の盛衰ぢやよなア。

　ト呉竹ソッと立ち、高景の側へ行き

呉竹　申し、高景さま、御上使のお情で、久次さまの、お身にも障りなう、夫の命も恙ない、御思案はござりませぬか。

　ト高景の袖を扣へる。高景、物云はず顔を背ける。呉竹またツッと立ち、大炊之助の側へ行き

コレ、申し、大炊之助どの。如何に武士の習ひぢやとて、切腹とはあんまり思ひ切り、外に御思案はござりませぬか。思案しかへて下さりませいなア。

　ト大炊之助に取りつき、大泣き。大炊之助、呉竹を取つて、突き退け

大炊　ヤア、未練な奴の。おのれも武士の女房でないか。めろ〱と何吠える。御上使の思し召し、控へて居らう。

呉竹　それでもあんまり

大炊　まだ〳〵。未來の緣を切らうか。

呉竹　サア、それは。

大炊　控へいと云はゞ、控へて居らう。

呉竹　アイ。

ト呉竹、泣く〳〵扣へる。大炊之助、呉竹、しか〳〵あり。

大炊　サア、久次公、この大炊之助めが死後の願ひ、御臺所のお情、親の御恩を忘れても、汲みやしつらん旅人の、高野の山へ先づお登りあり、御先祖の問ひ弔ひ、その次に、憚りながら、某への御囘向、千部萬部の經よりも、有り難う成佛いたしますわいなう。

ト久次、まじ〳〵して居る。

久次　成佛、嫌ひぢや。出家、否ぢや。

ト呉竹、久次が顏を眺め、思ひ入れあつて、側へツッと寄り

呉竹　エヽ、玆な大惡人さま。云ふまいと思へども、大事の大事の夫を殺すのはなア、皆、お前の心から起る事。ちつとは聞入れて、善心になつて下さりませ。なんぼう家來の罰ぢやというて、當るまいとも云はれませぬ。エヽ恨めしや、お主さまの、あんまり胴慾でござりますわいなア。

ト取りつき、大泣き。

久次　ヤア、主に向うて雜言過言。詞が過ぎると手は見せぬぞ。

ト呉竹、久次へ詰め掛け

呉竹　お手討が怖いとて、云ふこと云はずに居やうか。いつそ手討ちに遭うて死にたいわいなう。サア、切つた切つた。エヽ、玆な惡人、大惡人。サア。

ト膝にて詰め掛け、身を顚はし、いろ〳〵あつて

久次　さう吐かすと、いつそ。

ト呉竹の首をポンと切る。

久秋　ヤア、呉竹を。

大炊　こりや、あんまり。

ト久次、大炊之助を引きつけ、三方にて散々に打ち据ゑ

久次　うぬが。サア、眞の忠義と思はゞ、某を四海の跡目に立つる筈。この久次が短氣は、母の胎内を出るより產みつけた氣質。附け燒刃で直らうか。時に依り、折に依り、短慮の諫言ばかりにて、跡目の事はどこへやら。剩

さへ、高野へ登り、出家せよとは穢らはしい。
ト散々に打ち据ゑる。大炊之助、髮も亂れ、打ち据ゑられ、ヂッと堪へる。

大炊　大炊之助を打擲して、こなたの心が直るなら、ぶたつしやれ。現在の女房を目の前に殺されて、この身をズタ／＼に切り刻まれても、さら／＼無念には思はねど、只無念なはこなたの魂ひ。善心になつてさへ下されば、大將にしたい、天晴れ武將と呼ばせたい。その氣質が直らないでは、四海の武將にはなられぬ。その短氣が直らねば、大將にはして置けぬが、愛の所をお氣が附かぬか。お心が附きませぬか。情ない。神佛にも合はさぬ手を、こなたに合はす。コレ、大炊之助が拜みまする。何卒御本心になつて下されい。
トいろ／＼あり。

久次　これより館へ踏み込み、母を始め諸大名、我れに背ける奴原は、一々蹴殺し、四海の跡目を繼いで見せう。

大炊　詞を盡し、理を盡し、如何やうに御諫言申しても

久次　いつかな／＼、飜へさぬ。

大炊　すりや、どのやうに申しても。

久次　くどい。

大炊　ムウ。
ト大炊之助、思案を極め
さう性根が定まれば、是非に及ばぬ。
ト九寸五分を取上げ、久次が腹へ突ッ込む。久次ウンと苦しむ。

久秋　ヤア、兄上には、心がらとは云ひながら、是非もないこの有樣。
ト久次、苦しきこなしあり。

久次　エヽ、口惜しや。大炊之助、主を殺す大惡人。追ッつけ思ひ知らすぞよ。
ト大炊之助、こなしあつて

大炊　主を殺す大惡人と、お心が附いたらば、なぜ親御に刃向ふ心を直しては下されぬ。御臺樣のお情の、高野の奧の玉川の水、流泡となつたる惡心。歌に准へし高野の山も、切腹の場所となつたか。最前も申す通り、こなたを生け置くは、大炊が未來の迷ひの種。六條河原の敷皮に乘らうよりは、某が手に掛けたるは、この上の仕合せ。なんと思ひ知られしか。

久秋　大炊之助が心底、久次公を眞の大將になさん爲、千變萬化に心を碎きての忠義。不便なは呉竹が無慘の最期。

大炊　女房が最期は悔むに足らず。惡人と云ひなし、御主人を手に掛けし申し譯は、大炊之助が切腹

ト大炊之助、差添へ手をかける。

高景　ヤレ、早まるな、大炊之助。久次公の切腹は、おのれが罪おのれを責むる天命。さりながら、惡人なれども久吉公の御惣領、立歸つてこの通りを言上申し、善惡ともに我が君の御諚次第。久次公の切腹を見屆けし上は、最早高景、お暇申す。

久秋　大炊之助には兄上の介錯し、御亡骸は高野山へ取納めい。兄上といひ、吳竹まで、果敢なき最期も、何れとも

高景　植ゑて見よ、花の育たぬ里もなし。

大炊　心からこそ、身も賤しけれ。

高景　然らば此まゝ。

大炊　御上使、御苦勞。

高景　お暇申す。

ト合ひ方になる。高景、久秋を先に立て、侍ひ皆々付き添ひ、靜かに向うへ入る。大炊之助、跡見送り、思ひ入れあり。

大炊　四海の武將久次公、千秋萬歲、おめでたう存じ奉りまする。

久次　心得ぬ大炊之助、この久次を武將といさめ、初めに似ず恐悅の體は。

大炊　四海を奪ふ反逆の企て。

久次　すりや、某が謀叛の存念を、達する所存よな。

大炊　恐れながら、忠義の道に二つはなし。

久次　然らば何ゆゑ、某を手にかけしぞ。

大炊　高景を欺かん爲。

久次　ヤア、なんと。

大炊　心入れあつて突ッ込みし九寸五分、養生は家に傳はる良藥あり。切腹を見屆け歸りし上は、猶も心の油斷を幸ひ、臍を固むる君の大望。

久次　オヽ、頼もしき忠義の臣。久秋は手に足らず、父久吉を討ち亡ぼし、四海の武將はこの久次。

大炊　オヽ、天晴れなる御一言。君一戰に及ばゞ、敵何萬人あるとても

久次　物の數にもならず。麾押取つて下知なさば

大炊　勝利あらんは日のあたり。旗本に隨ふ勇士の面々。併し、御旗は。

久次　心安かれ、大炊之助、我れ多年盜み置きし、瓢の旗。

大炊　ドレ。

ト旗を取り、思ひ入れあつて

今日只今、四海の武將、此村大炊之助。

久次　汝四海の武將とは、して、予の身の上は、

大炊　元來、某は、異國の者なりしが、眞柴大領久吉に我が領地を切り取られ、無念骨髓に徹して、止む事を得ず。何卒恨みを散ぜんと、心を盡すに暇なし。我れ唐土に於て、蘇友といへる一人の子を儲く。乳人に預け、この土に渡り、筑前博多の浦に世を忍ぶうち、又もや兄弟の倅を生ず。唐土日本に三人の倅、又逢ふべきの印にと、蘭奢の一本を形見に殘し別れしが、蘇友、いま、日本に來りしと聞く。彼れを守り立て、四海の武將になさんは目のあたり。我れに仕へし順喜觀といへる臣、又、この土に於て石川五右衞門といへる隨身の者、心を合せ、事を計る。疾にも汝を切つて捨つるは易けれども、瓢の旗を手に入れる僞、媚び諂らひし忠義も計略なり。とくと我が謀計に陷つたよな。

久次　エヽ。

ト無念の思ひ入れ。

大炊　さぞ、無念か。殘念か。ハヽヽヽヽ。さこそ〳〵。

久次　して、その倅は何所にある。

大炊　庭に植ゑしその橘。

久次　あの橘を倅とは。

大炊　江北一株の枳、江南二株の橘。

トどんちやんとなる。大炊之助キッとなり、合點のゆかぬこなしにて

高景　江北一株の枳、江南二株の橘。

ト障子屋體の内にて

都て金鈴を掛け、扶桑に繋る。謀叛の張本、大明の宋蘇卿、最早遁がれぬ。覺悟々々。

ト障子を開き、高景、床几にかゝり居る。久次、むつくと起き上がり

久次　最前よりの仔細、とくと聞きしか、高景。

高景　ハア、。久次公の御孝心ゆゑ、此村大炊之助謀叛の底、高景とくと見屆けた。

ト大炊之助、こなしあつて

大炊　最前歸りし高景といひ、久次どのの今の詞。すりや、こなたの本心は。

久次　この日頃、非道に依つて、其方に預けとなりしその日より、僞りの諫言も、この身にひしと當りしゆゑ、猶

も惡心增長させしは、汝が心底を計らん爲。かねて高景に我が本心を明かし、大炊之助が手段を顯はす計略も、これまでの非道も、不孝も、久次がせめては父君への今際の際の孝行。なんと、大炊之助、思ひ知つたか。
大炊　ハテ、合點のゆかぬ高景。我が本名を宋蘇卿と呼び上げ、今の語りを合はせしは。
高景　ホヽ、不審は尤も。某異國征伐の加勢の爲、出船なせし時、難風に吹き流され、某始め士卒の面々、とある出島に吹き寄せられ、數多の命を助かりしに、不思議なるはその島に、一つの石碑を据ゑたるは、合點行かずと、我が着せしこの羽織に寫し、よく〳〵見れば、「江北一株の枳、江南二株の橘、都て金鈴を掛け、扶桑に繋る、大明の宋蘇卿」と記せし石碑の表に、江北一株の枳とは、唐土に一人の伜を殘す、
久次　江南二株の橘とは、日本に二人の伜あるべし。
高景　都て金鈴を掛け、扶桑に繋るとは、唐土よりこの土へ渡り、日本を覆し、唐と日本の伜をば、世に立てんとする謀叛の張本、此村大炊、素性は唐土の宋蘇卿、今一人の荷擔人の、順喜觀といふは汝が召仕ふ下郎の八田平。
大炊　アヽラ、心得ぬ高景。我れを宋蘇卿とは包むに及ばぬ。下郎の八田平存じたは。
久次　最前汝が物語り、觀喜順といへる隨身の臣。
大炊　又その順喜觀を八田平とは。
　　ト内にて
蛇柳　その證據は、我れ〳〵ぢやわいのう。
　　ト蛇骨婆、柳葉、裲襠、衣裳にて、長刀を持ち、奥よりズッと出る。
大炊　ヤア、わりや腰元の柳葉。最前の
蛇骨　非人となつて入込みしは、八田平を見出ださん爲の謀り事。
柳葉　岸田民部が女房わくら葉、
蛇骨　同じく母ぢやわいなう。
大炊　ヤア、その證據は。
　　ト民部の母、最前の證文を出し
蛇骨　コレ、この筆法は、いま大明に流行する徵明が流儀、未だ日本へ渡らぬ流儀。
柳葉　これを以て八田平を唐人と見顯はした、皆夫民部どのが計らひぢやわいなう。
蛇骨　最早遁がれぬ。尋常に
柳葉　覺悟々々。



澤村源之助の眞柴久次



七世市川團十郎の此村大炊之助

大炊　かねて企みし我が大望、斯く露顕の元はこの久次。我が手に掛けしが、せめての本望。
久次　悪を以て悪を見出だす我が計略。者ども、参れ。
内方　ハッ。
ト可内、岩内、角内、関内、凛々しき形にて、バラバラと出で
岩内　下知に随ひ、八田平は、大勢の組子を以て、取囲ませ置きたれば、籠の鳥も同然。最早遁がれぬ宋蘇卿。
皆々　動くな。
大炊　さては疾より伏勢あつて、我が家の四方を取巻きしよな。宋蘇卿が絶體絶命。唐土の刀の切れ味、日本人に風味させん。先づ血祭りは、久次、其方を。
ト刀を抜き、久次の首をポンと切る。
高景　者ども、かゝれ。
四人　ハア、。
ト取巻く。
柳葉　但しは、長刀に掛けうか。
ト大炊之助にかゝる。少し立廻りあつて、大炊之助かかるを切る。パッタリ落ちて、焔硝パッと燃える。
皆々　ヤア、。

ト返し襖にて、大炊之助の姿隠れる。
高景　かねてしつらひ置きし返し襖、案内知つたるわくら葉どの。
柳葉　合点でござんす。
高景　者ども、続け。
蛇骨　踏込め。
皆々　ハア、。
ト捕つた／＼と、わくら葉もろとも奥へ入る。高景こなしあつて、続いて入る。バタ／＼にて、九重、花橘走り出で、互ひに行き当り、悄りして
花橘　九重さまぢやないか。
九重　橘さま、こりやマア、なんの事でござんすぞいなア。
花橘　なんの事とは屋形の騒動。わたしやこれを幸ひに、釆女さまの行くへを、尋ねに行かうと思ふわいなア。
九重　わたしもどうぞ、殿様に逢ひたうござんすわいなア。
ト両人ウロ／＼こなしある所へ、橋がゝりよりバタバタ。八田平出て
八田　コレ、両人、屋形の騒動とは心元ない。何事ぢや。

花橘　サア、なんぢや知らぬが、大炊之助さまの謀り事とやらが顯はれて、上を下へとまぜ返すわいなア。
八田　ナニ、すりや大炊どのの謀叛が顯はれたとな。
花橘　さういふ隙に、九重さま、ちやつとござんせ。
九重　合點でござんす。
ト兩人、向うへ走ろ、橋がゝりより可内、角内、關内、岩内、皆々脱ぎかけにて出で
關内　謀叛の餘類、宋蘇卿が家臣、順喜觀。
三人　繩かゝれ。
八田　なんと。
トきつとなる。
四人　其方、順喜觀と露顯の上
角内　繩かける我れ〳〵は
岩内　久吉公の御内にて
關内　いろは組の捕り手の面々。
角内　サア、遁がれぬ所、順喜觀。
皆々　繩かゝれ。
八田　ハテ、しほらしい。大領久吉の猿に遣はるゝ犬侍ひ。ならば手柄に、順喜觀を捕つて見よ。
四人　ソリヤ。

トこれより八田平、四人を相手に、烈しきタテにて、よろしく、此うち始終遠攻め早めて打ち立て、よろしく見得にて、チョン〳〵返し。
右の道具、東へ引き、跡一間半の亭屋體。見附けに白斑の鷹の掛け物を掛けて、前に青貝の卓、香爐卓の下、花活けに橘を投入れにして、虎の皮を敷き、臺に琴を載せ、大炊之助、腰掛けに腰掛け、右の亭屋體の模樣唐造りにして、唐冠、唐衣裳にて、この琴を彈いて居る見得にて、この屋體、前へ突き出す。と此うち始終遠攻めかすめて打ち、道具とまる。大炊之助、いろ〳〵思ひ入れあつて
大炊　時は三月姑洗の律、忽ち變じて大簇の調べとなりしか。ハテ怪しや。易に取つては地雷復。陰陽相打つて、再び久吉が手に返るべき命數ぢやよな。
トこなしあつて、琴を彈く。
我れ大明に在りし時、宋蘇友といひし一人の悴あり、生得萬人に秀づべき人相あり、乳人に托して唐土に殘し置きしが、我れを慕うてこの土へ渡りしと聞く。未だ對面せぬも殘念。

トこなしあつて琴を彈く。此うち始終遠攻めかすめて打つなり。

また我れ筑前箱崎に身を忍ぶ時、又も二人の子を設く。兄は三歳にて北野の森に捨て置き、妹は小野播津守に預け置きしも、指折りて、はや二十年の春秋。生涯に廻り逢はんその時の形見にと、三人の同胞に添へし名香は蘭奢木。この年月いづくの浦に育ちしぞ。アヽ、生死の程も覺束なし。

ト情れながら

又かねて心を合はせたる石川五右衞門に、この趣きを告げ知らせ、蘇友が事をも賴み、我が志しを傳へんに、密書の使ひ、ハテ、何としたものであらうなア。

ト思案して

思ひ出だせし事こそあれ、蘇武が胡國の雁の便り。

ト掛け地の鷹に心得たる體にて

それは都に歸る雁、これは先帝徽宗皇帝が名畫の譽れ、鷹の勢ひ。それは有情、これは非情。

ト卓の下の橘の枝を持ち

江南一株の枳、一子蘇友に譬へしこの身。黃鶴仙人は橘の實を以て鶴を畫きしに、この鶴自然と拔け出で、靈魂備はり、仙人これに跨つて飛び去りし例しあり。一心とどまるこの名畫に、一心込めし人間の靈魂を止めなば、非常有常の隔てはあらじ。それは名畫、これは名木。

ト香爐を取つて香を焚くと、いろ／＼にて、掛け地の鷹動く。大炊之助、思ひ入れあつて

いま、名香の德に依つて、この繪の動く。

トこなしあつて

天武天皇、吉野山にて、名香を焚き、琴を彈き給ひしかば、天人降つて、五度袖を飜す、これを五節の舞ひの始めとす。その一曲は。

ト琴を引き寄せ、急な手を彈く。ドロ／＼、鷹の眞拔け出で、大炊之助が拳にとまる。キッとなつて

ハア、。名畫、名香、名絃に、我が心を込めしゆゑ、稀代の珍事目のあたり、見るも運命盡きざるしるし。石川が在所我れは知らねど、都のうち、靈魂傳はる名譽の鷹、早く達して望みを叶へよ。

ト緒を切る。鷹一散に飛んで向うの戸屋の内へ入る。

大炊之助、鷹の行くへをキッと見て

ハア、揚るワ／＼。雲井に掛けて逸物の羽遣ひ。ハテ、心安や、喜ばしやなア。

ト ばた〳〵にて、八田平、大童、拔き身を持ち、走り出で

八田　大炊どの、斯く八方を取卷かれたれば、最早叶はぬ絕體絕命。この順喜觀が命限り、一方を切り破らん。後に續いて、一先づこの場を落ちてたべ。

ト 大炊之助こなしあつて

大炊　ハテ、しほらしい順喜觀。我が事は氣遣はずと、早くこの場を切り拔け、汝が命を、助かれ〳〵

八田　イヽヤ、一旦契約、貴殿と死を共に決するが武士の本意。是非とも、お供〳〵。

大炊　その志しの過分さに、一つの賴み。我れ唐土に殘せし一子、蘇友といふ者、この土に渡り居るとの事。彼れに我が心を傳へたく、いま放ちたる徽宗の名畫。日當はいづこ白斑の鷹、靈魂備はり飛び行きしが、再び返す古巢の掛け軸。

ト 掛け物を取つて

これをしるしに巡り合ひ、共に力を合はせよ、喜觀。

ト 掛け地をサッと下へ流す。八田平、掛け地の軸を取つて

八田　すりや、この掛け軸の白斑の鷹、自づと拔けて此方の大事を知らせしとは。ハヽ、奇妙々々。かゝる不思議を見るも、盡きせぬ奇緣。

ト 掛け地を卷いて、腰に差し

大炊どの、お氣遣ひあるな。これより直ぐに。

大炊　身も切り拔けて、また再會。

八田　必らず命全う。

大炊　云ふにや及ぶ。

八田　然らば、おさらば。

大炊　早く。

八田　ハア、。

ト 行かうとする。組子バタ〳〵と出で、八田平を取卷く。ちよつと立廻りあつて、八田平、皆々を追つて橋がゝりへ入る。大炊之助、跡見送り

大炊　ハテ、天晴れの若者。首尾よく圍みを切り拔くればよいが。

ト 此うち東西より高景、久秋出で

高景　ヤア〳〵、宋蘇卿。櫓の上にて琴を彈ぜし諸葛孔明が智略、汝が手段なれども、最早叶はぬ、繩かゝれ。

久秋　但し降參すれば、父に言上し、高祿を與へん。

二人　宋蘇卿、返答なんと。

大景　ヤア、穢らはしい降參呼はり。梢にかけしなり瓢の、嵐に音のかしましくと、取捨てたる隱者の淸心。これも瓢の益なきこの旗。引裂き捨つる。

ト最前の旗を出して、引裂き捨てる。

高景　愚かや、宋蘇卿、その旗こそは似せ物。誠の御旗は先達て、久次公より受取り、これにあるわいやい。

大炊　ヤア、口惜しい。斯くまでおのれらに計られし、宗蘇卿の運の盡き。この上は、日本人の胤を絶やす。

ト久秋へ切つてかゝる。高景、引ッ取つてちよつと立廻り、大炊之助、眞中に大暴れ。高景、久秋、三人よろしく見得になり、チヨン／＼にて、返し。

この所へ黑幕おりると、一面の高塀セリ下げにて下りる。始終此うち遠攻め早めて打つと、橋がゝりよりわくら葉、凛々しき形にて、組子大勢連れて出で

わく　大炊之助が屋形の廻り、斯く取卷くも、謀叛の餘類の者を討ち取らん爲、夫民部どのゝ云ひ附け、其方達も隨分油斷いたすな。

皆々　ハア、。

ト内渡りの塀、切り破る音する。わくら葉キッとなつて、皆々目くばせして、囁くこなしにて、皆々忍ぶ。八田平、出る。

わく　ソリヤ。

ト聲かける。組子バタ／＼と取卷く。これより八田平、凄まじき大立廻りあつて、よろしく皆々追ひ込み

八田　大炊どののお賴み、一刻も早う、さらぢや。

ト身拵らへして行かうとする。わくら葉かゝる。ちよつとあつて當てる。この前組子二人出掛け「うぬ」とかゝるを、ポン／＼と切り殺して向うへ入る。わくら葉、うんと起き上がりて、あたりを見廻す。組子大勢出る。

わく　今のが大明の順喜觀。皆の者、續け。

ト向うへわくら葉、組子連れて走り入る。と又返し。

右の高塀、東へ引いて取ると、黑幕切つて落す。造り物、山門の二重、扉、前高欄、たる木、桝形よろしく、右三の兩脇に、一面の櫻の花、前の踏み込みの前、霞にて、下は隱れてある。この椽先に五右衛門、高欄にもたれ、太き煙管にて煙草をのみ、四方の風景を見て居る見得にて、この道具、前へ突き出

す。かすかに禪のツトメ、木魚にて、これを合ひ方になると、五右衛門、方々見廻し

五右　春の詠めを價千金とは小さい譬へ。五右衛門が爲にはこの價萬兩。最早日も西に傾き、誠に春の夕暮の櫻も、一入一入。ハテ、麗らかな、詠めぢやなア。

ト煙草を喞へ、腹這ひになつて見ると、鳥屋の上より少々ドロ〳〵にて、最前大炊之助が放せし白斑の鷹飛んで來て、山門の高欄にとまる。五右衛門キツと見て

ハテ、心得ぬ。我れを恐れず、この鷹の羽を休めるは。

トとつくり見て

この鳥は正しく畫ける名畫の筆勢。しかも白斑。殊に、羽表に記せし文字は

トこなしあつて、鷹を拳に据ゑ、讀み下し

こりや、コレ、慥か此村大炊之助が手跡。

トよく〳〵見て

ナニ〳〵「其方、某、かねて申し合はせし通り、久次を囮に四海を掌に握らんと計りしところ、却つて久次、高景が計略に依つて、年來の大望空しく露顯なすものなり。」ムウ、すりや、此村が反逆は顯はれしとな。

ト向うをキツと見て

ナニ「頼み置き候ふ一儀、某、元は大明十二代神宗皇帝が臣下、宋蘇卿と云ひしもの、本國に一子を殘し、日本を覆さんとこの土に渡り、謀叛の企て。今日只今、露顯なし、例へ空しく相果てるとも、彼の地に殘せし悴、我れを慕うて日本へ渡りしと、ほゞ聞けど、未だ對面は遂げず。この悴强猛不敵の生れつき、形見に添へし蘭奢木といふ名香を證據に、何卒尋ね出だし我が無念を語り、力を合はせ、久吉を討取るべきものなり。」

ト讀むうち、いろ〳〵思ひ入れあつて

ヤア、すりや、此村大炊之助と云ひしは、我が父宋蘇卿にてありしか。知らぬ事とはいひながら、生死の程も氣遣はしく、我れ幼なき時、風波を凌ぎ、この土へ渡りしも、別れし父に對面遂げん爲。方々さまよふ其うちに、竹地光秀どのに養育に預り、成長して、名も惟任左馬五郎と呼ばる。竹地氏、仇信長父子を討取り、武將となつて都の地祭を許す。これに町人、百姓、諸大名も歸伏をなすも、僅かの日數たゝざるうち、大領久吉の爲に滅ぼされ、無念の最期。その恩を受けし我れなれば、光秀どのの吊ひ軍、久吉を討取とんと、討死を止まり、いま、石川五右衛門と名乘り、徘徊なすも、人を語らひ、久吉

を討取る手段。所々國々へ別れし、父宋蘇卿も、久次高景が計らひにて、大望顯はれ生死の程も覺束なし。無念なは、これまで心を合はせし此村、父とも又、我れを忰とも、互ひに知らぬ親子の心外。鷹の知らせも、無念の密書。何卒存命あるならば、心一致に亡ぼす計略。おのれ久吉、父の無念に、光秀の恨み。例へ事顯はれ、この身を油で煮られ、肉がとろけ、骨は碎かるゝとも、この無念、晴らさで置かうか。

トきつとなつて思ひ入れあり。よろしく見得。チョンチョンにて、この道具段々セリ上げてくる。山門の下の石段、久吉、大炊之助と早替り、木綿やつしにて、順禮の形にて、笈摺を掛け、笠こしに携へ、杖の先に筆をくゝりつけ、山門の柱に樂書きをして居る見得。東西、殘らず、櫻の幹あらはれ、道具見事にとまる。久吉、書きじまひ、花道の角へ來る。五右衛門「心得ぬーと下を見る。振返つて

久吉 石川や、濱の眞砂は盡くるとも

ト讀み上ぐる。

五右 ヤ、なんと。

久吉 世に盜人の種は盡きまじ。

トきつと見上げる。見下ろす。互ひに顏を見て

五右 さては。うぬ。

ト手裏劍を打つ。久吉、柄杓にてクワッシと受け

久吉 順禮に御報謝。

ト兩方、途端の見得にて

幕

三幕目　大手並木松原の場

役名——世續寺中納言。五右衛門手下、大坂の伴。同、塚の八。同、釣鐘の權。同、片山の小雀。同、小鮒源五郎。松田勇助。高菜妹、政木。順喜觀。石川五右衛門。

造り物、黑幕、大手並木の松原。すべて廣小路の模樣。幕内より小鮒源五郎、塚の八、釣鐘の權、この三人、盜賊の形にて、方々に別れ居る。幕の内より本釣り鐘にて備へ、在郷唄にて幕開く。

源五 なんと、二人の者。お頭の云ひ附けで、この廣小路へ出張つて居るは、今度大領久吉、異國征伐して凱陣の

喜びに、公家どもが進物を貰ふ。その歸るさに、せしめてこまそと、此やうに待つて居るが、さて〳〵戻り居らぬなア。

八　サア、その久吉凱陣の喜びで、京中が上を下へともてかへす。その紛れにおいらが働き、金儲けの壺といふは今ぢや。

權　それはさうと、二人の奴原は、東を働らくと云うて出をつたが、まだ戻り居らぬか。

源五　彼奴等は、面妖、仕事をかこつけて、油ばかり取り居る。お頭に云うて一成敗せねばならぬわい。

兩人　さうぢや〳〵。

ト此うち向うより大阪の伴、錢叺をかたげ、片田の小雀、何やら懷を大きうして出て來る。

小雀　オヽ、三人の者、早う出掛けたなア。さうして、お頭はまだか。

伴　おいらは、やう〳〵仕事しまうて、いま戻つた。

源五　わいらも仕事に事寄せて、のらばつかりかわく。今も小鮒がお頭に告げると云うて居る。戻つてちつと商賣に氣を附けい。エヽ、不精な奴ではあるわい。

小雀　イヤ、氣遣ひしてくれな。わいらに云はれいでも、商賣は精出して居る。ナア、伴よ。

伴　オヽ、さうぢや。なんでも仕事は本望といふのぢやわいやい。

源五　こりや珍らしい。わいらが働らきを見ようわい。

小雀　オヽ、見せうとも〳〵。伴よ、それも爰へおこせ。

伴　合點ぢや。

ト大阪の伴、右の叺を前へ出す。

源五　ヤア、こりやかまげの苞ぢやな。

八　二人で大方十貫。こりや出來し居つたわい。

小雀　皆、聞いてくれ。今日、伴と連れ立つて、三條通りを通つたりや、宿屋の門口に繋いである馬に附いてあつたこの叺、なんでもえらいと引ッ掛けて來て、明けて見たところが、こりや見い、斯ういふ銅脈酒の粕であつた。

伴　おれが、道理で、輕い叺ぢやと思うて居た。これがほんに、酒の粕働らきぢや。

源五　ほんに、碌な事は得さらさぬ。二人ともに、きつい極道ぢや。

八　お頭に云うて成敗さす。待つて居れよ。

小雀　コリヤ〳〵。お頭に云うて堪るものか。わいらが情

で、大目に見てくれ〳〵。

源五　そんなら、お頭へは云はぬが、その代りに酒買はすぞ。

小雀　ハテ、そりやどうなとするわい。

ト此うち源五郎、向うを見て

源五　コリヤ〳〵、皆の者。何やら白いもの着て來るワ。大内の仕丁か。御靈の禰宜か。なんでも彼奴等を〆めかけい〆めかけい。

皆々　合點ぢや。

ト此うち向うより葬禮灰寄せの形にて、町人二人、白無垢、淺黄の上下にて、編笠を着て、骨桶を臺に乘せ、しほ〳〵と出て來る。五人、兩方より挾み

五人　コリヤ、待て。

町人　エヽ。

ト悄りする。

八　二人の奴等、キリ〳〵と脫いで行け。

町一　エヽ、滅相な。わしは相國寺へ火葬に行た灰寄せの戾り。何にも脫ぐ物ござりませぬ。

町二　この白無垢や上下は、色屋の借り物。どうも脫がれませぬ。どうぞお免しなされて下さりませ。

ト慄うて云ふ。

源五　コリヤ、皆の者、白無垢や上下より、錢になるは、二人のどす。それをたくつて、早う追ッ放せ、追ッ放せ。

皆々　合點ぢや。

ト二人が脇差を無理に引ッたくろ。

町人　アヽ、それは。

ト寄るを、何をと脇差を拔く

ヤレ、悲しやの〳〵。

ト橋がゝりへ逃げて入る。

小雀　ハヽヽヽヽヽ。二人の奴等が逃げ態、とんと白鷺ぢや。

源五　なんでも葬禮のどすをいがめるは、はか行きがして、よいぞ〳〵。

小雀　待て〳〵。向うから來るはおやまか。藝子か。なんでも代物は、おらが手に合ふであろ。あれをいけ〳〵。

皆々　合點ぢや。

ト此うち橋がゝりより、舞ひ子、男を連れ、出で來る。

皆々　コリヤ、待ち居れ。

舞子　エヽ。わしの事かえ。

伴　オヽ、われが事ぢや。酒手置いて行け。

舞子　滅相な。わしや三本木の舞ひ子。御所へ呼ばれ、その去にしな。合の手なら、ちつとは知つて居るが、酒手とやらは知らぬわいなア。

ト逃げようとするを、小雀捕へて

小雀　野太い女郎め、こま言云はずと、キリ〱脱ぎ居らう。

ト帯をくろ〱と解く。

舞子　アレ、姫御前の帯を解いて

八　なにを。頭の道具が代物ぢや。

ト立ちかゝり、剥ぐ。

男　申し、それは。

ト寄る男も舞ひ子も着物を脱がせ、裸にして

小雀　二人とも、着物を剥いだら、用はない。キリ〱うせう。

ト向うへ突き放す。

舞子　あられもない姫御前を、此やうに丸裸にして、わたしや鐵漿附けのお客にも、此やうに雪の膚を見せた事はないわいなア。この形でどう去なれうぞ。わしや耻かしい恥かしい。

ト いろ〱泣く。

男　サア〱、ようござります。此やうにして居る程、人目に立てば、外聞が悪い。親方さんへは、よいやうに申しまする。サア〱、去になませ〱。

舞子　必らずこの事は、沙汰なしにしてたもや。

男　合點でござります。マア〱、ござりませ〱。

ト舞ひ子を肩に掛け、向うへ連れて入る。皆々、着物を取り上げて

小雀　皆の者、これを見い。餘ッぽどの値打がある。どうでも、こりや、しまひと見えるわいの。

ト在郷唄、皆々右の衣裳を持ち、臆病口へ入る。ト向うより松田勇助、飛脚の形、急ぎ足にて出て來る。後より高景妹、政木、抜け參りの形、柄杓を向つて出る。

勇助　急ぎの御用ぢや。附くな〱。

ト本舞臺へ來る。

政木　抜け參りの者でござります。足を痛め、難儀いたしまする。どうぞお志しを。

勇助　ハテ、サテ、しつこい。附くなと云ふに。

ト振り返り、顔見合せ

政木　勇助ぢやないか。
勇助　高景さまのお妹御、政木さま。
兩人　これはしたり。
　ト兩人思ひ入れ、あたりを見て
政木　不思議な處で逢ふなう。して、何も手掛りはないか。
勇助　ハッ、御主人樣の仰せに依つて、所々方々と相尋ねますところ、紀州根來の塔にかゝると聞き、直さま駈けつけましたるところ、最早あの地も立退き、この京都へ罷り越したるとの事ゆゑ。
政木　成る程。その風聞あるゆゑに、女の身で自らも、此やうに姿をやつし、折々の詮議も、兄上への孝行ぢやわいなう。
勇助　殊に以て、明日は、中納言さま、大佛殿へお勅使との儀。主人高景さまにお取持ちせよとの事。
政木　何かにつけて、大事の役目。委細の談合。
勇助　爰は人目。
政木　向うの水茶屋で、とつくりと。
勇助　政木さま。
政木　勇助、おぢや。
　トこの前より小雀、源五郎、八、伴、權、出で、囁き合ひ、兩方に立ち塞がり
三人　合點ぢや。
　ト勇助、政木の胸倉を取る。
勇助　こりや、うぬらは、何ひろぐ。
政木　何とするのぢや。
小雀　何ともせぬ。剝ぐのぢや。
勇助　さてはうぬらは盜賊よな。五右衞門が詮議の手がゝり。うぬら、引ッ縛つて主人へ引く。覺悟せい。
源五　小癪云はさず、引ッ剝げ〱。
三人　合點ぢや。
　ト皆々かゝる。政木、勇助よろしく立廻りあつて、伴、八、權を政木追うて入る。勇助、行かうとする。小雀、源五郎引留める。これより少々立廻りあつて、兩人橋がゝりへ逃げて入るを、勇助、追うて入る。伴、八、權走り出で
伴　コリヤ〱、皆、怪我はなかつたか。
八　さて〱、女に似合はぬ、えらい奴であつたわい。
權　折角仕掛けた仕事、惜しい事ぢやわい。
　ト源五郎、小雀走り出で
小雀　皆、そこに居るか。さて〱面に似合はぬ、手ひど

い奴であつたわい。

源五　それは抛つて置いて、お頭の云ひ附け、世尊寺中納言とやらいふ公家が、明日大佛へ勅使に立つに就いて、今夜、天奏へ行て、戻りは、この廣小路を通る程に、公家の衣裳が要る。主從ともに剝げと云はるゝ。必らずともに、ぬかるな〳〵。

八　待てよ。公家なら大勢の供廻り。こりや餘ッぽどえらい仕事ぢやわい。

小雀　何を吐かす。公家侍ひは破れ傘も同然ぢや。

皆々　破れ傘とは。

小雀　ハテ、さいたもさゝぬも同じ事ぢや。

皆々　こいつはよいわい。

源五　もし手に餘らば、この種が島で嚇してこますが、どうぢやどうぢや。

ト種が島を見せる。

小雀　アレ〳〵、向うへ見ゆるは、慥かにそれぢや。必らずぬかるな。

皆々　呑み込んでゐる。

ト橋がゝりより世尊寺中納言、公家にて乘り物に乘り、供廻り大勢連れ、出で來る。この供廻りのうちに中納言家來一二、皆々、操り仕立ての侍ひにて附き出で、花道へ行きかゝる。

源五　カウレ、酒手を貰はう。

皆々　ヤア、なんと。

小雀　大内より歸館、大方、酒手はあるまい。身に引ッ張つた白無垢衣裳、供の上下小袖、奴が臺無しも、殘らず脱いで置いて行け。

臣一　ムウ、さてはわいらは、いま噂のある追剝ぎよな。置いて行けとはケチぶとい。この同勢を剝がうとは、身の程知らぬ大盜人め。

臣二　すべて追剝ぎといふものは、山中に居るもの。それに爰を何處ぢやと思ふ。大内の廣小路、俗に追剝ぎの樂屋は稻村といへど、見れば稻村やうなものもなく、この往還で剝がうとは、叶はぬ事、及ばぬ事。

臣一　それ〳〵。明日は大佛勅使のお役目、大切なる中納言さま、惡い者は除けて通るが此方の勝ち。イザ、何れも、お越しなされい。

皆々　左やうでござる。

ト皆々行かうとする。

源五　コリヤ、待て。うぬら脱がぬが最期、身が手練の種

が島にて、どん腹に風穴明けて、皆殺しにするが、どうぢや。

皆々　エヽ。

源五　但し、火蓋を切らうか。

皆々　サア。

小雀　脱ぐか。

皆々　サア〳〵。

小雀　どうぢや。

ト皆々こなしあつて

臣一　こりや、何れも、なんと思し召す。

臣二　なんというて、惡う意地張ると、どん腹へ風穴を明けられまする。

臣三　名さへ風穴と申すものを腹へ明けられたら、定めて風が行き拔けて寒からうと存ずるゆゑ、此やうにガタガタと顫へまする。

臣四　ヤア、腑甲斐ない何れも。相手は鬼神でもなく、高で人間の盜人、何程の事がござらう。刀の目釘の續くだけは、切つて〳〵切りこなげる、腕に覺えは有明櫻、チリチリパツと逃げ散らし、主人のお供仕る。これ見られよ、我が帶せし刀は宇田の國光、拔けば玉散る大燒刃、腕切る、股切る、首を切る。

臣五　さうぢや、貴殿の云ふ通り、手を叩いて齒を拔くの、とんぼう返りして首が落ちるのと云ふではないか。

臣六　日本一流、錢がなければ、只でも直す、鼻たれめが。

小雀　ヤア、仇口たゝかせずと、皆引ッ剝げ〳〵。

三人　合點ぢや。

ト皆々かゝる。よろしく立廻りありて、供廻り、乘り物を捨て、臆病口へ逃げて行く。ト合ひ方、小雀、源五郎、八、伴、權、これを追うて入る。ト乘り物動き、慄ふこなし。始終合ひ方。ト向うより順喜觀、六部にて笈を負ひ、松蟲を鳴らし、出て來る。本舞臺へ出で

喜觀　さて〳〵、長の日を、そこ爰と、當なし旅のせうどなく、尋ね廻るこの姿。ほつと草臥れてのけた。幸ひ幸ひ。この並木で一服せう。ヤレ〳〵、しんどや〳〵。

ト笈を下ろし、火打ちを出し、煙草のむ。此うち小雀源五郎、出かけ居て、囁き合ひ

小雀　六部どの、火を一つ貸してもらはうがい。

喜觀　オヽ、これは幸ひ、今打つた所ぢや。サア〳〵、のまんせのまんせ。

源五　イヤ、火ばかりの無心ぢやない。外にちつと貰ひた

いものがある。
喜観　外に貰ひたいものとは、なんでごんすぞ。
源五　酒手が欲しい。
小雀　酒手を貰はうかい。
喜観　ハヽヽヽヽ。なんの事かと思へば、酒手が欲しいとは。エヽ聞えた。この松原で酒手と云はんすは、働らきさんすお方と見えるが、玄いに似合はぬ、きつい目利違ひぢやぞえ。わしはコレ諸國修行の六十六部。或ひは野に伏し、山に伏し、一錢二錢の合力で、その日を通る修行の身。酒手は此方へ貰ふ筈。おどけた事云はずとも、持ち合せがあるならば、此方へ合力して下んせ。頼みまするぞえ。頼みますぞえ。
小雀　イヽヤ、さうはとぼけさせぬ。斯う見たところが、只の六部とは見えぬ形恰好。
源五　得て、此やうなのが、持つて居るものぢやて。
小雀　先づ、何よりも
兩人　この笈の內。
ト兩方より笈に手を掛ける。順喜観、兩方を振り拂ひ
喜観　コリヤ、なんとするのぢや。
源五　なんともせぬ、その笈の內を改めて
小雀　酒手を貰ふ。そこ退け。
ト兩方よりかゝる。順喜観よろしくめつて、小雀、源五郎を捻ぢ上げる。
兩人　アイタヽヽヽヽ。こりや、どうする／＼。
喜観　イヤ、どうもせぬ。この笈はわしが一世帶、お侍ひなら城廓同然。その笈を見ようとは、家探し同然。理不盡の若い衆ゆゑ、ちよつと斯うしたものでごんす。
ト捻ぢ上げる。
兩人　アイタヽヽヽヽ。さう吐かしや、いつそ。
ト振り放し、兩方より切りつける。よろしく立廻りあつて、順喜観、刀を引ッたくり、振り上げる。これにて、小雀、源五郎、橋がゝりへ逃げて入る。中納言、乘り物を明けて見て、ちやつと戸をさし、隱れる。
喜観　ハテサテ、役にも立たぬ腕立て。
トあたりを見廻し、笈の內より掛け地を出して
この掛け地を證據に、彼のお方に廻り逢ひたいものぢやがなア。
トこの前より政木、勇助出掛け居て、この時、政木、順喜観が向うへ廻り、柄杓を出す。順喜観、恟りして掛け地を隱す。勇助、政木、兩方より順喜観を挾み

政木　投げ參りの者でござりまする。お志しを頼み上げまする。
勇助　同行二人、連れの者、草鞋錢を頼みまする。
ト順喜觀こなしあつて
喜觀　見れば、二人ともに、伊勢參宮の投げ參りと見えるが、この修行者へ志しとは、こりや大きな間違ひ。目を明いて、杓振らんせ。麁相な人ではあるわいの。
政木　イヽヤ、麁相ぢやない。六十六部と姿をやつすは
勇助　即ち六十六ヶ國を、只一呑みに、
喜觀　ヤ、なんと。
勇助　サア、只一日に六十六ヶ國、照らしまします御神、太神宮の御利生。
政木　出つた事はいつかな〳〵、只正直の頭に宿る神風に靡き隨ふ天が下、こた皆神德のお庇ゆゑ。
兩人　有り難い事ぢやござりませぬかいなア。
喜觀　有り難いとも、忝ないとも、その神國の六十六國、廻り歩く修行の身。
兩人　イヽヤ、修行者でない。
喜觀　修行者でないとは。
勇助　身方を集むる大炊が家來。

政木　順喜觀であらうがな。
喜觀　ハヽヽヽヽ。順喜觀とは何を以て。
政木　寸分違はぬこの繪姿。
ト繪姿を出す。順喜觀思ひ入れ。
勇助　殊に、最前の掛け地といひ
政木　下郎と姿やつしたる、八田平であらうがな。
喜觀　イヽヤ、知らぬ。この廣い日本、似た人もないとも云はれぬ。又この掛け地は彌陀の尊像。この修行者は存ぜぬ、知らぬ。
勇助　知らぬとあらば、その尊像、ちよつと拜ませてもらひたい。
ト掛け地を引き出す。
喜觀　コリヤ、何とする。
兩人　その掛け地を。
ト勇助、政木、掛け地を取らうとする。少し立廻りあつて、當てる。勇助、政木ウンとこける。
喜觀　ハテ、危ない事の。
ト掛け地をしまひ、笈を脊負うて
最早黄昏。ドリヤ、道を急がうか。
ト唄、合ひ方になり、順喜觀、思ひ入れあつて、鉦を鳴

らし、靜かに花道へ入る。勇助心附き、思ひ入れあつて

勇助　慥かにこの道。さうぢや。

ト尻引ツからげ、花道へ走り入る。この前より五右衞門、盜賊の形にて、松の間より窺ふ。此うち政木、心附いて起き上がり

政木　慥かに今のは順喜觀。勇助が見えぬからは、さては跡を追うて行たか。何にもせよ、この趣きを、兄高景どのへ、さうぢや。

ト行かうとする。この時、五右衞門、後より出で、刀を引き拔き、政木に浴びせる。政木ムンとこける。五右衞門、物をも云はず、政木を弄り殺しにする。此うち乘り物を明け、中納言これを見て恟りして、また戸を閉し、慄うて居る。

物をも云はず弄り殺しは、最前の盜賊ぢやよな。エヽ卑怯な。さもしい。ア、コレ、今の樣子、兄上に知らせたい。此まゝ死ぬるは口惜しい。いつそおのれを。

トそこにある刀を拾ひ、よろぼひながら切りつける。五右衞門、刀を打ち落し、抉る。政木、苦しみながら

エヽ口惜しい。死にともない〳〵わいやい。

ト五右衞門、物をも云はず、抉る。政木、いろ〳〵あり、死ぬる。五右衞門、これでよいといふ思ひ入れにて、うなづき、其まゝ乘り物の側へ行き、戸を開き、中納言を引き出す。中納言恟り、慄へ〳〵引出され

世幹　コリヤ、麿を何とするのぢや。

ト五右衞門、中納言の冠、衣裳を剝ぎ取り、突き放す。中納言、此まゝバツタリこける。この途端に小雀、源五郎、供の衣裳を剝ぎ取り、持つて出で

兩人　お頭。

小雀　まんまと首尾よう。

源五　供廻りは我れ〳〵。

兩人　お頭、いよ〳〵。

五右　萬事の手配り。皆の者、參れ。

ト唄になる。五右衞門、冠、裝束を持ち、源五郎、小雀、皆の衣裳を大小に括り附け、かたげ、五右衞門に附いて、悠々と向うへ入る。トあと合ひ方。バタ〳〵にて橋がゝりより供の家來、丸裸にて走つて出で

臣一　何れも、我が君樣は。

臣二　誠に、御主人のお行くへ。

ト皆々探す。

世尊　ヤア〳〵、者ども。中納言はこれにあるわいやい。
　トすつくと立つ。
臣二　ヤア、我が君さま。御安泰の樣子。
臣五　千萬喜ばしう存じ奉りまする。
世尊　して、其方達も。
臣一　斯くの如くに、引ツ剝ぎ、最早この處は立退きました。
臣二　見れば、我が君さまも、お丸裸。
世尊　皆の者と同格に、剝がれたわいやい。
　ト泣く。
臣二　盜賊とは云ひながら、情を知らぬ今の奴等、まだ春ながら寒さも強く、身に沁む風の冷やかさ。
臣一　春寒いと秋ひだるいは、堪へられぬと申すもの。御主人のお心根、察し入つて、さぞと存じられまする。
世尊　推量せよや、方々。
臣一　吹く風さへも身に沁みて
臣二　雲の上人といはるゝものが、今は雲助同然に
世尊　主も裸。
兩人　家來も裸。
世尊　裸で運御がなるものか。
三人　思へば〳〵。
　ト中納言、家來、手に手を取つて、互ひに顏見合せ、ヂツと泣いて手を離し、向うを見詰め、三人一緒に
三人　ハア、。
　ト泣き落す。この途端によろしく　　幕

四幕目　大佛餅屋の場

役名――別木軍藏。吉川藏人、仲人、藤兵衞。下女、おみよ。金貸、小次兵衞。妹、お菊。姉、お律。早川高景。瀨川采女。順喜觀。惣右衞門女房お幸。大佛餅惣右衞門　本名海田新吾。石川五右衞門。

造り物、平舞臺、赤壁、納戸口、佛壇。西の方、折り廻り、二重舞臺附きの障子屋體。橋がゝり餅店。よき處に門口。すべて本舞臺を敷き、幕の內よりおみよ、下女の形、前垂れ、お律、お菊、同じ形にて、これも餅を丸めて居る。在鄕唄にて幕明く。
みよ　サア〳〵、お律さま、これで三日目でござんす。ち

つと休ましやんせいナ。
りつ　オヽ〳〵。今日はいから精が出たわいの。
きく　申し、姉様、わたしも、この間から、お前方のさしやんすを見て、あもを丸める事を、どうやら斯うやら覺えたわいな。
りつ　イヤモウ、習ふより馴れと、お菊さまの手つきが、大分ようなつたわいなア。
きく　また妹を樣づけにさしやんすかいなア。
りつ　それでも、お前は、母樣の育て君なりや、わたしの爲にもお主樣。なんぼ今、斯うして此方の內へ來てござつても、お菊とは、どうやら云ひ憎いわいなア。
きく　ほんに緣といふものは變つたもの。お前は惣右衞門さまのお子、後連れの、あの乳母をしるべに尋ねて來た、父樣の手前は乳母の娘にして、連れ子のわたし、眞實の父さんには生き別れ、母さんには死別れ、便りないわたしが身の上。惣右衞門さまやあの乳母を、ほんまの父さん母さんとも、お前を眞實の姉さんぢやと思うて居る程に、矢張り、妹、どうしやと云うて可愛がつて下さんせ。
りつ　可愛がるの、なんのと、勿體ない事。ホヽヽヽヽ。
みよ　ほんに、このマア、かみさんは、なぜ遲いぞいなア。
りつ　遲い次手に、こちの人次郎作どのは、どこへ行てゐやしやんすやら。女房の案じを、ちつとは思ひやつて、下んしたがよいわいなア。
みよ　あの次郎作さまは、惡い癖で、ちよつと內を出ると、戾らしやんせんが、お律さま、外で惡性でもさしやんせんかいな。
りつ　なんのいの。さういふ樣子も見えぬが、兎角ちよこちよこ出ては戾らず、今日で十日の餘にもなる。それで辛氣でならぬわいな。
きく　わたしはまだ、お前のお連合ひの次郎作さまにお目にかゝりませぬ。どうぞ早う戾らしやんしたら、近附きになりたうござんすわいな。
りつ　サア、早う戾つて下さんすりや、ようござんすわいな。
ト在鄕唄。ト此うち向うより惣右衞門、親仁の形。金貸し小次兵衞、仲人藤兵衞、やつし、羽織にて、一緒に連れ立ち、出で來て
藤兵　コレ、惣右衞門どの、こなたは滅多に請合うたが、よいかや。
惣右　ハテ、ようなうて何とせう。女房の連れ子でも、お

れが娘のお菊、どうせうと、おれ次第ぢや。

小次　それで、あの藤兵衞どのを頼んで、敷金持つてお菊の聟にならうといふ相談。早う埒が明けてもらひたい。

藤兵　惣右衞門どのより頼みゆゑ、小次兵衞どのに話して、こちらの相談は極つたが、水心の内儀やお菊が

惣右　サア／＼、よいてや。何分、娘と杯さしや、濟むぢやないか。

小次　それを此方が、急ぐのぢや。

藤兵　今日中に極つて、祝言をさしたがよいわいの。

惣右　成る程、さうしませう。マア、二人とも、門口に待つてゐて、娘や女房にとつくりと話してから呼ぶ程に、その時、内へ入つたがよい。

藤小　そりや合點ぢや。

ト云ひ／＼、本舞臺へ來て、小次兵衞、藤兵衞、門口に居る。惣右衞門内へ入る。

惣右　お婆。娘。今戻つた／＼。

りつ　父さん。今日は、お前、どこへ行かしやんしたえ。

惣右　どこへというて、ちつと差當つて金の工面。……アヽ、イヤ、誂らへの餅どもはどうした。

みよ　アイ、そりや、お菊さんやお律さんに手傳うてもろて、皆持たしてやりましたわいな。

惣右　オヽ、そりや、大分精が出た。して、この婆は何處へ行た。

きく　アイ。今日は墓參りしてござんしたわいな。

惣右　なんぢや。墓參り。エヽ、忙がしいのに。アヽ、カウツ。今日は、オヽ、ソレ、墓參りする筈ぢや。婆が先の連合ひ、お菊が實の父親の命日ぢやが、アヽ、早う戻つてくれりやよいが。そりやさうと、お菊、其方にちつと話したい事がある。

きく　そりやマア、何事でござんすぞいな。

惣右　外の事でもないが、其方にちつと無心がある。

きく　改まつた、父さんの無心とは、マア、どんな事でござんすぞいな。

惣右　その無心といふは、其方、男を持つてたもらぬか。

きく　エヽ。

りつ　アヽ、コレナア、父さん。あの子には深う云ひ交した、殿御のあるといふ事は、お前も知つて居やしやんすぢやないかいな。

惣右　サア／＼、知つて居る／＼。定めて膽が潰れやう。否ぢやあらうが、ちつと急に金が要る。幸ひと敷金持つ

て來る男、どうぞ持つてたも、お菊。
きく　そりやマア、誰れでござんすぞいな。
惣右　云うても、其方は知るまい。金貸しの小次兵衞といふ者ぢや。其方には、まだ何とも云はぬ先に、もう約束して、返事が早う聞きたいと云うて、口入れの藤兵衞と連れ立つて、門口へ來て、待つて居るわいの。
りつ　エヽ。
きく　サア、義理ある父さんのお頼みなれど、これぼつかりは
惣右　云ひ交した男へ、義理が立たぬと云ふのか。
きく　エイ。
惣右　フウ。男への義理は立てゝ、この親へは義理は立ていでも大事ないか。
きく　勿體ない。さうではなけれど、
惣右　さうでなけりや、持つてくれ。ハテ、勤めしたやうにもない。口先でちよぼくさ。抱かれて寢いでも大事ない。杯さへしまうたら、それで濟む。わしが何もかも呑み込んで居るわいやい。
りつ　父さんがあのやうに、呑み込んでゐると云うてぢや程に、杯ばかりなら、マア、アイと云うて居やしやんせいな。
きく　そんならマア、アイでござんすが、抱いて寢ようと云うたら。
惣右　ハテ、そりやおれが呑み込んで居る。マア〳〵、早速得心してくれて、過分な〳〵。イヤ、コレ、小次兵衞どの。藤兵衞どのも、なぜ入らしやらんぞいの。
ト此うち小次兵衞、藤兵衞、「もうよいかい」といふ事、いろ〳〵こなしあつて
藤兵　オヽ、惣右衞門。首尾はよいか。
惣右　やうなうて詰まるものかいな。悪けりや、初手から請合ひはせぬわいなう。
小次　ヤレ、嬉しや。藤兵衞、有り難い〳〵。
藤兵　サア〳〵、早う内へ入らしやれ〳〵。
ト小次兵衞、藤兵衞、内へ入る。
みよ　小次兵衞さん。ようござんしたなア。
小次　おみよ。二人の娘達。この間は逢ひませぬ。
りつ　ほんに、小次兵衞さん。二人ともに、ようござんしたなア。
藤兵　コレ、小次兵衞どの。そんなら爰な内の衆は、皆近附きぢやの。

小次　ハテ、近附きなりやこそ、命から二番目の物を出して、こちらの相談ぢやわいの。

藤兵　互ひに知り逢うて居る仲なら、こりや早う相談が出來た筈ぢや。

小次　サア、この間から、爰の内へ戻つて居るあのお菊、ても美しいものぢやと思うて居る所へ、今の相談、ほんの、明いた口へ、大佛餅の娘といふは、この事ぢや。

藤兵　イヤモウ、兎角双方得心の上、早う埒さへ明けば、此方はよいぢやてや。

小次　併し惣右衛門どの、此方は大枚の敷金持つて來る事。お菊がなま得心では、どうもならぬぞや。

惣右　ハテ、知れた事。祝言さすからは、いつまでも變らぬ女夫。ナウ、お菊。

きく　アイ、なんぢや知らぬけれど、父さんが呑み込んで居ると云はしやんすに依つて、マア、アイでござんす。

次兵　エ、、そりや忝ない。

小藤　めでたい〳〵。

惣右　お律、ソレ、二人の衆を奥へ連れまして行て、お菊も一緒に杯さしやいの。

りつ　アイ〳〵、心得ました。杯ばかり……ア、、大事の祝言の杯。サア、奥へござんせ。

藤兵　オ、、それがようござる。おれも仲人役ぢや。奥へ行て杯事。

小次　早速杯とは有り難い。

りつ　サア、ござんせいな。

ト唄になる。お律、お菊、小次兵衛、藤兵衛を連れ、おみよも奥へ入る。惣右衛門こなしあつて入る。ト向うより釆女、風呂敷にて脇差を包み、着流しにて出て來て、いろ〳〵あつて

釆女　爰が正面の大佛餅、廓で云ひ交した花魁が親里。内での名はお菊とやら。どうぞ來てくれいと云うて寄越したが、ついに知らぬ處。マア、何んと云うて入つたものであらう。

ト門口へ來て、内の樣子を見て、内に人がないゆゑ、そろ〳〵と入る。うそ〳〵あたりを見廻す。ト橋がゝりより大工、道具箱をかたげ、内へ入る。釆女、慄りする。

大工　ハイ、内方にござりまするか。

釆女　ハイ、内方にござりまするが。

大工　今日はお人下さりましたれど、外へ參つて居りまし

た。中の間の棚を吊るのぢやとござります。今日は日端下。明日の朝、疾から參ります。お世話ながら、この道具箱、持つて去ぬるは面倒にござりまする。內方に置かしやつて下さりませい。

采女　成る程、中の間へ棚を吊らねば勝手が悪い。そんなら。明日の朝、疾に來て下され。箱は預かりました。

大工　お世話でござります。そんなら、明日參ります。

ト橋がゝりへ入る。

采女　ようござりました。とんと肝を引ッくり返さし居つた。アヽ、どうぞ太夫に逢ひたいものぢやが。

ト思案して居る所へ、小次兵衛、藤兵衛出で

藤兵　小次兵衛さま、うまいものになつたぞえ。

小次　うまいものゝ段ではない。まものになつた。

藤兵　あのやうに靡くとは、どうでも男がよいかいな。

小次　又おだてるわいの。

ト采女を見て

貴樣は誰れぢや。

采女　エヽ、わしかえ。

小次　爰の內には見馴れぬ若い者ぢや。何處から來た。

采女　アイ、わしや、アノ、オ、ソレ、大工でござります。コレ、大工の證據には、道具の箱の中には錐や鑿、鋸や才槌がござります。なんと、けうといものか。

小次　その大工が、何しに來たのぢや。

采女　わしは仕事に。オ、それよ。中の間の棚吊りに參りました。なんと、大工は棚吊りに來ぬものでござりますか。

小次　オヽ、成る程。大工なら棚吊る筈ぢやが、今日はコレ、日端下。今頃來ては

藤兵　ヨウ〳〵。婿になつたと思ふて、きまり方〳〵。

小次　イヤモ、女房持つて世帯すると、何かに心を附けねばならぬワ。

藤兵　金貸しほどあつて、きつう目をせゝるなう。

小次　算用詰めにしても、得て喰込みがある。イヤ、大工、貴樣も今日は日端下。明日朝から來てもらはうかい。

采女　イエ〳〵、明日は餘所へ、仕事に行かねばなりませぬ。今日中に吊つてしまひます。

小次　成る程。棚一枚位で、一日雇ふ事はない。そんなら、ツイ吊つてやつたがよい。ソレ、そこに板がある。大方それであらう。隨分綺麗に削つたがよいぞや。

采女　心得ましてござります。

ト云ひ〳〵、道具箱より單衣物を出し、引要りにして
袖を取り出す。此うちこちらにて、
藤兵　イヤ、小次兵衛さま、あの美しいお娘が、あのやう
に聞くとは、どうしたものぢや。とんと合點が參りませ
ぬ。
小次　なんの合點のゆかぬ事がある。道具の沙汰も、それ
次第ぢや。
藤兵　イヤ、時に、あの 非 娘は、様子を聞けば、島原で
傾城ぢやあつたげにござりまする。
小次　そりやおれも聞いて居る。それで貰ッた仕置つたも
のぢやて。
采女　嬉しう〳〵。その傾城といふのは、妾の内の娘でござ
りますか。
小次　成る程、さうぢや。島原に居た時の名は、花橘とい
うたげな。
采女　エヽ、そりや、今の名は、お菊と云はうかな。
小次　そのお菊といふが、貰れたお女房ぢや。
采女　アノ、お前の女房かえ。
ト恟りする。
藤兵　コリヤ〳〵、大工、おりや、なんで、其やうに恟り
する。
采女　エヽ、何も恟りはせねど、聞き傳へて居る妾の娘の
事。あんまり思ひ掛けないゆゑ。
藤兵　イヤさや、小次兵衛さまがめうとは、おれも思ひ
掛けなかつたてや。
小次　思ひ掛けなうても、コレ、結ぶの神の引合せぢや。
藤兵衛、貴様を頼む。ちよつと奥へ行て、お菊を爰へ、
おこしてくれまいか。
藤兵　アノ、奥には、母親や娘が、居るとつて、お菊を爰
へ呼び出して、なんとするのかえ。
小次　イヤ、さうではなけれど、とつくりとあれが心も聞
かうし、おれもまた爰やかや話しをしたし。コリヤ、頼
む頼む。
藤兵　合點ぢや。そんなら爺を爰へおこす替に、親方を合
はして、合點か。
小次　早う、頼む〳〵。
藤兵　成る程。今おこすわいの。
ト　しぶ〳〵あつて、藤兵衛、奥へ這入る。小次兵衛、襖
を閉ろうし、いろ〳〵あつて、此うち新兵衛、最前の方つ
思ひ入れにて、本舞臺にて小次兵衛をくらはさうとする。

小次兵衛、見て

小次　コリヤ〳〵、大工。そりや、何をするのぢや。

釆女　サア、こりやア聞いた樣子が、爰な娘を〆める彦樣なりや、大方祝言があらうに依つて、槌で庭を掃かうと思うて。

小次　何を吐かすやら。日の暮れぬうちに、ちやつと板を削つてしまへ。

釆女　削らいで。削らうと思うて來たもの、削らいでぢや。阿房らしい。

ト板を打ちつける。小次兵衛、悔りして

小次　こりや仰山な。何するのぢや。

釆女　何をせうぞい。板削るのぢや。アタ忌々しい。折角おれが尋ねて來たのに、こんなけたいな板を削らうとは、思ひ掛けがなうて、エヽ、思へば〳〵、こんな奴の女房に

小次　ヤ。

釆女　イヤ、美しい娘ぢやげな。それを女房にするとは、玆なあやかり者め。

小次　ほんに、あのお菊を、おれが女房にするとは、男冥加に叶うたのぢや。

釆女　エヽ、けたいな。こたんと祝言する。聞けば聞くほど羨やましい。どういふ顔で、こたんと祝言する。そのお菊めの顔が見たいものぢやが。

小次　コリヤ、氣遣ひすな。我れらが北の方、美しい顔を見せる。もう爰へ來る程に、貴樣も氣を通してくれやい。

釆女　なんの罰に、こなさまが癡話喰や、おれが火を飲む筈があらうぞい。おりや爰で板を削らにやならぬ。ドリヤ、削つてこまさうか。

ト滅多無性に板を削る。

小次　ヤイ〳〵。そりや逆木ぢやわいやい。

釆女　逆木でも山木でも構ふまい。高でこの板は削り屑にすりやよいわいの。エヽ、胸がぐら〳〵するわいの。

ト釆女、起ちたり居たりして、鑿に錐を持つて、小次兵衛を突かうとする。

小次　ヤイ〳〵、待て。そりや、なんぢや。

釆女　オヽ、こりや鑿ぢや。

小次　鑿で、どうするのぢや。

釆女　サア、これは呑み込んだといふのぢや。

小次　そちらの錐は。

采女　こりや錐を廻すといふ事ぢや。
小次　アヽ、こいつはよいわいの。
采女　こいつは惡いわいの。
トいろ〳〵腹立て、また仕事にかゝる。ト奥よりお菊出で
きく　申し、小次兵衞さま、お前、いま、籐兵衞さまを、呼びにおこさしやんしたかえ。
小次　オヽ、呼びにやつたワ。其方が得心の上は、おれもちつと話しでもせうと思つて。
きく　ハテ、父樣の云ひ附けぢやに依つて、マア得心したわいな。
ト此うち采女、板をバタ〳〵振り廻す。
小次　コリヤ〳〵、もそつと靜かにせい。
采女　素人の思ふやうに、なるものでは、ごんせぬわいの。
きく　ほんに、仰山なお人では
ト采女を見て
ヤア、お前は。
采女　アヽ、コレ〳〵、わしや大工。ナ、大工ぢやに依つて、この板を削らうと思うて。

きく　アノ、お前は大工。
采女　アイ、大工々々々々。大工のまびきぢやない、板引きぢや。ナ、お前は、爰な娘御ぢや。わしや大工。それで今日爰へ、棚を吊りに來たのぢやわいの。
きく　そんなら、コレ、大工さん。
采女　なんでごんす。
ト大きな聲する。
きく　オヽ、慳貪な物の云ひやうぢやな。
采女　こりや産れつき。癖ぢや。
きく　ほんに、よう來て下さんした。
小次　コレ〳〵、其方、あの大工、近附きか。
きく　イヽエ。
小次　それでも、よう來て下さんしたなとは。
きく　サア、わしが櫛箱を、直してもらはうと思うて、それでよう來て下さんしたと、云ふのぢやわいな。
小次　イヤ〳〵、あんな手荒い大工は、ようせまい。
采女　オヽ、そりや好い推量、おりや仕附けぬ事はようせぬわいの。エヽ、打ち碎いてこましたいな。
トお菊、鋸を取りあげる。
きく　大工さん、こりや何といふ物ぢやえ。

釆女　そりや鋸といふて、何でも引ッ切るものぢや。オ、人の首でも切るものぢや。損ねる。此方へ返してもらひませう。

ト引ッたくる。

小次　ヤイ／＼、ひつしよない。ちよつと持ちやつたとて、なんの損ねるものぞ。

釆女　イエ／＼、損ね切つてある。おれは鑿壺から三つ目錐ぢや。ようも／＼手斧の指し金ぢやな。どうぞして鋸とせうと思うて、その舌を釘抜きで引き抜き、才槌で叩きみじやいてこましたいと云ふたら、心の内で鉋々からと、笑ひけつかるであらうな。エヽ、削れる板ではないわいの。

ト腹立て、無性に削る。

小次　コレ、お菊、わが身が得心の上は、おれも爰な聟になつて、親仁や母ぢやに孝行にする相談せう。爰へおぢや／＼。エヽ、ソレ／＼、埃がかゝるわいの。

きく　わしや、埃がかゝつても大事ないわいな。

釆女　申し／＼、鉋屑がかゝります。この鉋屑といふものは、人の體へ引ッ附くと、離れませぬ。エエ、どこもかも鉋屑だらけぢや。拂うて上げませう。これは／＼。

ト釆女、腹を立て、お菊を拂ふこなしにて振り廻し、くらはし、いろ／＼あつて突き倒す。小次兵衛、お菊を抱き起し

小次　ヤイ／＼、何とするのぢや。

釆女　イヤ、爰にござると、埃がかゝるゆゑ、其方へござれと、突きのけたのでござります。

小次　可哀さうに、お菊、痛みはせぬか。ア、痛さうな。ドレ／＼、擦つてやらう。おれは擦りが、きつい上手ぢや。

トお菊の脊中を擦る。

釆女　ハア、機嫌を取るワ／＼。なんぼう取つても、びくともせぬ。アタ胸の悪い。

ト小次兵衛、お菊の手を取り、袖から手を入れうとするを、釆女手斧にて手を引ッ掛け、脇へのける。

小次　コリヤ／＼。こりやどうするのぢやぞいやい。

釆女　これは、オヽ、人を擦ると、こなさまも肩がつかへるものぢやあらうと思うて、南蠻流の療治してやるのぢや。

小次　エヽ、いろ／＼の事を世話やく奴ぢや。われの構ふ事はない。構ふな／＼。

ト また揉りにかゝる。

きく　コレイナ、もう否ぢやわいの。

小次　イヤ、とつくりと揉らんと、後が悪い。ヂツとして居や〳〵。

ト 無理に揉る。采女腹立て、板を打ちつけたり、錐もみしたり、鑿にて切つたり、いろ〳〵あつて、鑿、才槌にて、バタ〳〵叩く。

小次　ヤイ〳〵、それは。物音が聞えぬ。静かにせいやい。

采女　静かにしたら、其方の勝手はよからうが、此方の仕事が錢にならぬわいの。

小次　此奴が〳〵。先刻から默つて居れば、あんまりぢやあらうがな。

采女　あんまりとは、貴様があんまりぢや。

小次　おれが、どうして、あんまりぢや。

采女　無遠慮千萬な。男と女子が女夫になるが、けたいが悪いわい。

小次　おりや、女房に持つ筋があつて持つが、おのれがそれを法界悋氣する事はない。

采女　イ、ヤ、せにやならぬ。

小次　そりや、なんで。

采女　仕事の邪魔になるわい。

小次　邪魔になるなら、おきやアがれ。

采女　オ、おきたうて〳〵ならぬ。けたいが悪い。

ト 板や道具を打ちつける。小次兵衛も打ちつける。お菊、取りさへる。奥より藤兵衛出で

藤兵　小次兵衛さま〳〵。先刻にから惣右衛門どのが、逢ひたいと云ふて、尋ねて居られる。

小次　イヤ〳〵、あの大工めが、あんまり口が過ぎる。もう料簡がならぬ。

ト 行かうとするを留めて

藤兵　コレイナア、何やら急な事ぢやげな。今ござりませい。

小次　イヤ〳〵、彼奴を。

藤兵　ハテ、マア、ござりませい。

ト 無性に引摺つて入る。お菊、采女に取りつき

きく　采女さま、逢ひたかつた〳〵。

ト 抱きつく。采女、お菊の胸倉を取つて

采女　ヤイ、茲た賣女面め。これまでお定まりの仕組み、古いせりふづけ措いてくれ。エ、おのれは〳〵と恨み

を云ふも愚痴の至り。口舌するのは廓での事。コレ、花橘、今の名はお菊、其方も、よう無事で居てたもつたなう。

きく　エヽ、そんなら久し振りで逢うたわたし、アノ、疑ひはさしやんせぬかえ。

采女　なんの疑はう。例へ五年、十年逢はずに居ても、心の變る其方なら、初めから云ひ交しはせぬわいの。

きく　エヽ、嬉しうござんす、采女さま。さうして、見れば、お前の此お姿はえ。

采女　サア、この形になつたは、いつぞや廓で紛失した、イヤ、この譯はとつくりと。

きく　わたしも今の身の上、何かの樣子も話したけれど。

采女　爰ではどうも。

きく　幸ひわたしが部屋で。

采女　行ても大事ないか。

きく　なんの大事がござんせう。久し振りでの積る事を。

采女　前は太夫、今はお菊、素人になつた其方の身の上、

きく　廓と違うて、ツイ酒事も、わたしが酌で。

采女　たべつけた風味、久し振りで賞翫せう。サア、おぢや。

きく　ちやつと、ござんせいな。

ト唄になり、お菊、采女を連れ、奥へ入る。ト奥より惣右衛門出て來て、あたりを窺ひ、疊を上げる。ト下より下才三人、榮螺に火をともし、鶴嘴を持つて出る。

惣右　三人の者、かねて頼み置いたる通り、この下の普請は。

下一　惣右衛門どの、こなたの頼みの通り、この大佛より伏見まで拔け道を。

三人　海田新吾どの。

惣右　コリヤ、シイ。……我が本名は女房、娘にも包む大事。

三人　とつくりと掘り拔きました。

惣右　オヽ、大儀々々。

ト懷より金百五十兩出し、三つに分け

ソレ、約束の金。普請成就後金の都合。

二人　エヽ、忝ない。

ト惣右衛門、一人の下才を呼び

惣右　其方は跡に殘り、スワと云はば、明りを合圖に、これへ出よ。

下一　畏まりました。
惣右　三人ともに、ぬかるな。
三人　ハア。
ト　また疊を上げ、三人とも下家へ入る。惣右衛門、元の通り疊を敷く。この途端、女房お幸、婆の形にて橋がゝりより出で、フツと奥へ入る。
かう　親仁どの、今戻りました。
ト　惣右衛門、憫りすることなし。
惣右　ホウ、お婆、この忙がしいに、早う戻つたがよいわいの。
かう　オヽ、とが／＼しい。生き通しにする身ぢやなし、年寄り相應の寺參り。ちつと後生も願はにやなりませぬわいの。
惣右　今日は、其方の先の連合ひの命日ぢやと思うて、さつぱりと着る物も着替へて、一張羅の鹿の子の襦袢、作り立つて參らつしやつたの。
かう　なにを。作つたとて、どうしたとて、襦袢よりは皺の寄つた襟縮緬、鹿の子まだらの雪のつむり、この白髪を塗らうと思や、大佛樣の釣り鐘と同じ事で、京中釜の墨をこそげて來ねば、黑むまいぞいの。
惣右　それでも、きつう隙が入つたぞや。
かう　さればいの。水向けて戻らうと思うたら、講頭の重右衛門どのに呼び込まれて、本堂の銅瓦の奉加、商賣柄の餅屋で、どつさりと搗いてもらはにやならぬと、おどけ交りの勸め、ごつごつ有り難話しがしゆんで、それで隙が入つたのでござるわいなう。
惣右　イヤモウ、あの和尚も、好い人ぢやが、兎角金を欲しがると、後家をえじめたがるには困る。お婆も、此方の奉加より、あつちからついてもらやせなんだか。
かう　何を云はしやるやら。おじやら悋氣も二昔。アヽ、女子程早う年の寄るものはござらぬ。
惣右　イカサマ。其方の來た時分は、まだ三十になるならず。アヽ、好い女房ぢやあつたになア。
かう　フウ。人の事ばかり云うて、こなたもわしの來た時分は、立派な好い男。餅屋の亭主にするは、惜しいやうな恰腹であつたが、アヽ、前の形はないぞいの。
惣右　イヤモウ、渡世に斯う揉まれて、おれもめつきり年が寄つた。それでもまだ、滅多に後へ寄らぬ所があらうがの。
かう　なにを、口ばつかり達者で、……ほんに、提灯屋へ

も嫁が入つたといの。
惣右　フウ。
かう　おいの。
惣右　なんぼ餘所のは……お婆、汁が出來たら、飯くはうか。
　ト二人、額見合せて
兩人　ハ、、、。
　ト此うち橋がゝりより、宿老、袴、羽織にて出ろ。
宿老　惣右衞門どの、內に居やしやるが。惣右衞門どの惣右衞門どの。
　トやかましう云うて、內へ入ろ、
惣右　これは宿老どの、けたゝましい。
かう　何事でござるぞいなう。
宿老　何事どころぢやない。お成りぢや／＼。
かう　お成りとは、何が成つたぞいの。
宿老　お成りといふは、今日大佛へ勅使にお出でなされた中納言が、大佛餅屋の惣右衞門が宅へ寄る程に、その通り云ひ渡せと、お供の侍ひ衆が、おれを呼びつけて、云ひつけぢや。
かう　フウ。なんと云はつしやる。そんなら勅使の中納言樣とやらが、……親仁どん、こりやマアなんでござるぞいの。
惣右　何事ぢややらおれも知らぬ。宿老どの、ア、、こなたも譯は知るまい。マア／＼、なんぢやあらうと、逢うたら知れる。掃除でもして待つて居よう。
宿老　さうぢや／＼。鹽水でも打つて、綺麗にして置かつしやれ。婆樣、麁相のないやうに頼むぞや。おりやこの通り申し上げる。麁末にしてお目玉の出ぬやうにさつしやれや。
　トこんな事云ひ／＼、橋がゝりへ入る。
惣右　お婆、忙がしうなつて來た。娘にも云ひつけて、共共、そこらを方附けて置きや。
かう　アイ／＼。お律。何處にぞ。ちやつとおぢや／＼。
りつ　アイ／＼。
　トお律出で
母さん、今戻らしやんしたかえ。して、呼ばしやんしたは、何の用ぢやえ。
かう　何どころか。お公家樣のお成りぢやと云うて來た。そこらを共々方附けてたも。
りつ　そりや、どうしな譯でござんすぞいな。

惣右　どうしたやら、斯うしたやら、それが知れりや、此やうにあわてはせぬ。マア〳〵、なんぢやあらうと、掃除せい〳〵。

ト三人そこらを方附けたり、掃いたりする事、しかしかあり。ト此うち橋がかりより乘り物、家來大勢附き添ひ、門口に下ろす。侍ひ、乘り物の側へ行て

侍ひ　申し上げます。これが即ち大佛餅、惣右衛門宅でござりまする。

ト乘り物の内より

五右　ホヽウ。聞いた〳〵。

ト出で

皆の者、この家にとくと休息すれば、其方達はこの家を遠ざけ、歸りを待て。

侍ひ　ハア、。

ト侍ひ皆々橋がゝりへ入る。五右衛門、静々内へ入り、上座へ通る。三人、平伏して居る。

五右　惣右衛門どの、御夫婦。律。

三人　ハア、。

五右　これはしたり。

ト惣右衛門、摺り寄つて

惣右　限りある殿上人が、この町人の惣右衛門に、慇懃の御挨拶。して、御用とは。

ト顏を見て

ヤア、こなたは聟の次郎作どの。

ト悄りする。トお幸こなしあつて側へ寄り

かう　コレ、滅相な親仁どの、お公家様を捕へて、聟どのとは勿體ない。ハイ、お免されて下さりませ。年寄られまして、目かどが悪うて

ト又顏を見て

ヤア、次郎作どのぢやないかいの。

トまた悄りする。トお律また出で、お幸を引退け

りつ　滅相な。母さんまでが同じやうに、なんのあなたが

ト顏見て

ほんに、矢ッ張りこちの人ぢや。

惣右　次郎作であらうがの。

トお幸、側へ行て

かう　どう見ても、聟どのぢや。

りつ　こちの人に違ひはない。

惣右　中納言といふは、聟の次郎作。

かう　次郎作といふは、お公家様。

りつ　思ひがけないこの姿といひ、こりやマア
　ト三人顔見合せ
三人　どうしたものぢやぞいなア。
五右　御不審は御尤も。私し今日中納言となつて、大佛へ勅使に立ちましたは、ちと仔細ある事。その儀は追つて。
　ト惣右衛門、お幸を上座へ直し、お律と一所に下へ下がり
五右　舅どの、これまで私しが節々の家出、女房は元よりお二人様、さぞかし憎い奴と思し召しませうが、これ〳〵ちと望みあつての事。その仔細もとくと申し上げませう。先づ先づ、これまでの不調法、女房ども、共に、お詫び申してたも。
りつ　エヽ、そんなら、申し、こちの人。
　ト五右衛門を見て、こなしあつて
　お公家さまでも矢ッ張りこちの人ぢや。アノ其やうな形をして、今日戻つてござんしたも、父様や母様に、詫び言をせうと思うてかえ。
五右　サア、フッと出て、一日立ち、二日立ち、戻りそゝくれる程、閾が高くなつて、其方の手前も、どうやら異なものなれど。

りつ　なんのわたしは女房の事、構やせねど、父様の思惑。殊に、この間より忙しうて、方々の誂らへのあもを渡さねばならず、人手はなし、お年寄りや女子ばかりで手は廻らず、わたしぢやても、一日あたふたして、夜さりはたつた一人寝るし、トツトモウ大抵、辛氣な事ぢやなかつたわいなア。
五右　さうであらう〳〵、母者人も共々に、舅どのへよきにやう、お執成しを頼みまする。
かう　イヤモウ、娘が云ふ通り、わしらに如才はなけれど、堅くろしい親仁どのゝ氣質、どうあらうやら知れぬけれども、格別の不調法でもなし、日泊り夜泊りも若者のある習ひ。殊には望みのある事とやら、その譯も話したらツイ機嫌も直らうぞいの。
五右　イヤモウ、機嫌さへ直して下されば、これから随分精出しまするて。
りつ　さうでござんす。お前さへ、ヂッとして精出して下さんすと、父様の機嫌は、おのづと直るといふものでござんす。ナア、母様。
かう　オヽ、それ〳〵。親仁どの。
りつ　もう料簡して下さんせいな。

惣右　ト此うち惣右衛門、煙草をのんで居る。成る程、家出した聟の次郎作、料簡してやらうが、小豆のやうに、大納言ぢやの、なんのと、餅屋の聟に中納言は、ちつと仰山過ぎる。

五右　イヽヤ、中納言は装束にあつて、身には請けぬ官位、この装束を脱げば矢ッ張り、元の聟の次郎作。

かう　そんなら、その装束は。

惣右　贋の官位の假公家、大佛へ勅使に立つたも。

五右　風吹けば沖津白浪龍田山。

惣右　唐土にては綠の林。フウ。

ト思案して

どうやら、面白い公家の謎どの。

かう　様子ありげた、中納言の次郎作どの。

りつ　矢ッ張り變らぬ、こちの人。

五右　委細は奥で。舅どの。母者人。女房どもゝ、奥へおぢや。

ト唄になり、五右衛門、お幸、お律、惣右衛門、皆々こなしあつて奥へ入る。橋がゝりより代官、捕り手大勢連れ、しと／＼出で、門口へ来て、内を窺ひ、呼子を吹く。ト奥より小次兵衛、藤兵衛出で

小次　今の呼子は。

ト見て

二人　お代官様。

代官　シイ。

ト押へ

合點の行かぬこの家の體。様子を知らんと、大工に身をやつし、入込む所存。して其方ども、先達て申し附けたこの家の様子は。

小次　ハア、成る程、仰せの通り、これなる藤兵衛と申し合せ、敷金を持つてこの家の聟となり、先刻よりこれへ參つて、様子を窺ひ居りまする。

藤兵　小次兵衛が申す通り、合點の行かぬ惣右衛門が住居。俗姓といひ

小次　いま歸りし聟の次郎作、折々家出する由。仔細ある親子の者。

代官　この上は萬事に氣を附け、兩人ともに、ぬかるな。

藤兵　委細畏まりましたが、イヤ、小次兵衛どの、あなたが大工になつて入込むと仰しやるに、また最前の大工めは。

小次　イカサマ、彼奴も合點の行かぬ曲者。一通りの奴で

藤兵　はない事、見据ゑて置いた。
　　禁の次郎作といひ、惣右衛門といひ、あの大工め。
小次　なんでも合點の行かぬ奴等の寄合ひ。貴樣は向ひの大佛に控へて居や。もしもの事があつたら、早速代官樣へ行て、捕り手の案を。
代官　その儀はちつとも氣遣ひ致すな。我れ／＼も人數を分けて、七條河原より五條のあたりに控へて居らう。用事あらば、早速に相知らせよ。
藤兵　畏まりました。ちつともぬかりは致しませぬ。そんなら小次兵衛、大佛に待つて居るぞ。
小次　もし急な事があつたら、呼子を吹くワ。
藤兵　合點ぢや。そんなら、お代官樣
代官　兩人とも、必らずぬかるな。
小藤　畏まりました。
代官　家來、參れ。
　ト代官、藤兵衛、橋がゝりへ入る。合ひ方になり、小次兵衛一人殘り、いろ／＼あつて
小次　巧いワ／＼。なんでも彼奴等が様子を嗅ぎ出して、引ツ縛ると褒美はせしめる。もしさうでなけりや、代官に金出さして、お菊めをいがめるワ。どちらへ行ても雁木鑓。此やうな巧い事は又あるまい。なんでもあのお菊を囮にして、カウツ。
　トいろ／＼思案して
よいワ／＼。シタガ、それより前に、お娘を、マア一ちやう、いがめたいものぢやが。
　ト唄になり、小次兵衛、しか／＼あつて奥へ入る。トどろ／＼、トヒヨ／＼の笛にて、二つ目の鷹、向う鳥屋の内より飛んで出で、本舞臺の上にて二三遍舞うて居る。此うち向うより別木軍藏、吉川隼人、一様の鷹匠の形、早川高景も同じぶッ裂き、股引の形にて、鷹杖を持ち、この鷹の行くへチッと見入りながら、花道中程まで來て
高景　紀の關守がたつか弓、白鳥と化して飛去りし例しもある。古き白鳥の關、身より尊き遺物の羽づかひ。正しく名畫の
軍隼　すりや
　ト三人キッと目を附け、思案する。鷹、橋がゝりの上へツツと入る。高景等三人、本舞臺門口へ來て
高景　誰ぞ、頼みたい。
軍隼　頼まう／＼。

ト奥より

五右　ハイ〳〵。どなたでござりますな。

ト装束を脱ぎ、着流し、やつしにて出で

御用があるなら、お入りなされませ。

高景　然らば、許し召され。

ト三人ながら入る。並みよく並ぶ。五右衛門こなしあつて

五右　見ますれば、お三人とも、同じ出立ちのお侍ひ様。エ、、聞えた。こりや、鷹野にお出でなされましたな。

高景　成る程、今日は、小野深草山を志し、鷹野の歸るさ。

軍藏　して、大佛餅屋の聟、次郎作とは、御自分よな。

五右　ハイ、この家の聟、次郎作は、私しでござりますが、して、あなた方さまは。

隼人　我れ〳〵は四海の執權

三人　早川高景といふ者。

五右　ヘエ。

トこなしあつて

そのお侍ひ様が。

軍藏　その仔細といふは、先達て謀叛を思ひ立ちし此村大炊、本名は大明の宋蘇卿、事成らずして最期の砌り

隼人　徽宗皇帝が畫きし、白斑の鷹を以て、心を合はせし曲者に、仔細を吿ぐる、

高景　それゆゑ、宋蘇卿が最期の念にて、繪絹を離れし白斑の鷹、この鷹の止まる所が、即ち謀叛の餘類と思ふゆゑ

軍藏　毎日の鷹野も、白斑の鷹の詮議せん爲。

隼人　早川高景、洛中洛外

高景　淀、伏見、近邊は云ふに及ばず、五畿、七道まで尋ね求むる鷹の行くへ。

五右　ヘエ。それは御苦勞でござりますが、尤も鷹野にお出でなさるゝには、一樣に同じ出立ちと承はりましたが、白斑の鷹とやらの御詮議ならば、その姿は御尤もでござりますが、お三人樣、共に、早川高景と仰しやる。とんと私し、合點が參りませぬ。

三人　これも即ち詮議の手段。

五右　白斑にもせよ、赤斑にもせよ、鷹とあれば、高で鳥類、その御詮議に手段とやらが要りまするかな。

軍藏　イヤ、まだ外に詮議がある。

五右　その詮議とはナ。

隼人　盗賊の張本、石川五右衛門。
軍藏　大明の毛唐人、宋蘇卿が餘類の者。
高景　まつた、先年亡びし竹地光秀が殘黨、爰彼處に徘徊すれば、尋ね出して縄ぶたん爲。
五右　へエ。さてはこの間から、ちら〳〵噂のある石川五右衛門、此奴盗賊ながら、大抵手ひどい奴ではないげにござります。
高景　ハテ、それゆゑ、其方を頼み、謀叛の餘類、盗賊の詮議も、白斑の鷹の行くへも、次郎作、其方ならであるまいと存じ、それゆゑ。
五右　ハテ、思ひがけない。高で大佛餅屋の聟の私しが、むづかしい大切な儀を。
隼人　商賣に依つて、多くの人の入込み。
軍藏　手廣く致す、商ひの次手。
高景　何かの事を聞き出す其方。繪絹を離れし名畫の鷹も、拳へ返す手練は、次郎作、其方が工風で。
五右　行くか、行かぬか知らねども、お歴々様のお頼み、雁は八百、矢は二筋、ほんの盲蛇に怖ぢずといへば、及ばずながら、力一杯、働らいて見ませう。
高景　早速の得心。

三人　高景も滿足。
軍藏　いよ〳〵白斑の鷹の行くへ。
隼人　宋蘇卿が餘類、竹地が殘黨も。
高右　詮議いたしてくれるぢやまで。
五右　もしも首尾よう、詮議しおほせたらば。
軍藏　一國一城を宛て行ふ。
隼人　その上は、望み次第。
五右　へヽ、大名になつて、米の有る無いを聞かずに、餅屋をしたら面白い事でござりませう。
高景　右の詮議相濟むまで、この家を暫らく無心申さう。
五右　むさうても苦しうござりませねば、御ゆるりと奥の離れ座敷で。
高景　然らば次郎作。
五右　御馳走は、商賣の大佛餅。
高景　心遣ひは必らず無用。
五右　お三人の高景さま。
三人　次郎作、後ほど。
五右　マア、奥へござりませ。
ト唄になり、高景、軍藏、隼人こなしあつて、奥へ入る。跡に五右衛門一人殘り、こなしあつて

白斑の鷹の行くへとは、いつぞや南禪寺の山門へ、親人の最期を告げし徽宗皇帝が名畫の鷹。竹地が餘類に、五右衞門が詮議、三人の高景、ハテナア。

ト手を組み、思案する。ト奥より惣右衞門出で

惣右　コレ、弟どの。

五右　ヤア、親仁樣。

惣右　コレ。

ト佛壇を開き、内より引ッそぎの竹鎗の切尖を取出し

こなた、これを知つて居るか。

ト差出す。五右衞門チッと取つて

五右　こりや竹地光秀公を突きとめし竹鎗。切尖には御無念の血汐。

惣右　その光秀公の恩義を受けたこなた、惟任左馬五郎。

五右　コレ。東福寺へ詣らへの僞は、行きましたか。

惣右　イヤ、左馬五郎どの。

五右　なんぢや。最前やつた。そりや早う方附きました。

惣右　奥に居る高景が怖うて、其やうに本名を隱し包むのか。

ト五右衞門こなしあつて

五右　この左馬五郎、日本に恐るゝ者は、一人もない。

惣右　それに又、いま、高景が賴み、一々請合うたは。

五右　水は方圓の器に入つて、器を腐らす。父が無念、光秀公が修羅の妄執、散ずるは大領久吉。草履摑みの猿冠者が、首取るまでは大切な我が體。久吉が家來とあれば、一人でも生けては歸さぬ我が計らひ。

惣右　イヤ、そりや僞はり。こなたには金銀に目を掛け、生れ附いたる大慾心。この濱田新吾はナ、何卒光秀公の恨みを散ぜんと、心を碎き、忍び入つて、久吉の首取らんと、この家より桃山の御殿まで拔け道を

ト思ひ入れあつて

しつらひ置いたも、主君の仇を晴らさん爲。それにこなたは、云ひ甲斐なき御所存でござるなう。

五右　イヽヤ、我が心底、この通り。

ト懷中より連判狀を出し、見せる。

惣右　そりや一味連判。

五右　人を語らひ、久吉が餘類を皆殺し、時日を移さず四海を掌握。金銀を掠めるも、まさかの軍用。

惣右　それに又、高景に諂ふは。

五右　龍も泥中に蟠まれば、蚯蚓同然の高景に、詞を交すもこの家の釜次郎作、手段を以て入込みしは、彼奴が自滅。

袋の鼠。
惣右　すりや高景を
五右　生けては歸さぬ。
惣右　ホヽオ、天晴れ、左馬五郎どの。
五右　コレ。
ト唄になり、五右衛門、障子屋體へ入る。ト惣右衛門こなしあつて奥へ入る。とバタ〳〵にて、小次兵衞、釆女、お菊を引ッ立て出る。お律、取りさへながら出る。
小次　サア、うせう〳〵。野太い奴の。
釆女　コレ〳〵、必らず聊爾せまい。覺えはないぞ。
きく　滅多な事云はしやんしたら、わたしが聞かぬぞえ。
りつ　コレ、小次兵衞どの、見馴れぬ若いお方とお菊を、手籠めにさしやんすは、譯がござんせう。その譯を云はしやんせ。
小次　譯を云ふ事も、聞く事もない。最前の不思議、大工ぢやと吐かすから、おれが合點がゆかぬと思うて居た。コレ、惣右衛門どの。内儀。この二才めとお菊が、間男したわいの。
りつ　ナニ、あの子が、間男とは。
小次　オヽ、證據は、あの二才めとお菊が、奥で寢て居たを、慥かに見附けた。
りつ　合點のゆかぬ。お菊さまとあのお人と寢て居たとは、そんならお菊さま、あのお人は。
きく　アイ、わたしが云ひ交して、かね〴〵お前を頼んで置いた
りつ　釆女さまといふのか。
きく　アイ、それで。
釆女　アヽ、コレ〳〵。お菊、滅多な事を云ふまい。わしや、最前爰へ來た、ソレ、ナア、大工の
きく　イエ〳〵、大事ござんせぬ。母樣には、樣子を打明けて、お話し申して、添はしてもらふ筈でござんすわいなア。
小次　イヤ、けちぶとい女郎め。百五十兩といふ敷金持つて嫁に來たこの小次兵衞。間男しられては立たぬ。但し、蟲附きの娘をおれに冠せて、金儲けする目論見か。太郎にかけるのか。
りつ　コレ、小次兵衞さま、娘と云ひ交したあの人は、お前と約束せぬその先の事。その樣子を知らしやんせぬうちの人。それに目論見ぢやの、太郎ぢやのとは、なんの

事でござんす。

小次　ハテ、太郎であるまいか。太郎も／＼も大騙りぢや。なんぢやあらうと、あの二才めを。

ト釆女にかゝるを、お律、引き分けて

りつ　敷金戻しや、間男ぢやあるまいがな。

小次　オヽ、金さへ戻しや、縁切つた娘。お菊に云ひ分はない。サア、その金を。

りつ　サア、その金は今無いに依つて、後まで待つて下さんせ。

小次　金がなけりや、お菊は間男、代官所へ連れて行く。

りつ　さうはならぬ。

小次　ならずば、金戻すか。

りつ　サア、それは。

小次　サア。

りつ　サア。

小次　サア／＼／＼、どうぢや。いつそ。

トまた釆女にかゝる。お菊、お律支へる。よき所へお幸ズツと出で、小次兵衛を突き廻し、「これは」と寄るを、「ソレ」と金を抛り出す。

小次　ヤア、こりや金ぢや。

かう　敷金の百五十兩。

皆々　それは。

かう　金戻しや、云ひ分あるまい。

律菊　母さん、この金は。

かう　聟の次郎作どのが、小姑のお菊へ土産。

りつ　そんなら、こちの人の

きく　エヽ、忝なうござんす。

かう　金受取つたら、とつとゝ去なしやれ。

小次　エヽ、忌々しい。折角〆めかけたあのお菊を、二才めが。

ト釆女の方へ行くを、お律引き分けて

りつ　云ひ分がなけりや、早う去なしやんせ。

小次　オヽ、去ないでぢや。なんの別に。アタ忌々しい。けたいの悪い。

トいろ／＼あつて、橋がゝりへ入る。

きく　申し、母さん、斯うなつた上は、父樣に云うて、どうぞ女夫にして下さんせいなア。

りつ　ハテ、そりやモウ氣遣ひなさんすな。わたしも共々に、ナア、母樣。

かう　フウ。そんならかね／＼話しに聞いた、あなたが瀬

川采女さまでござりますか。
采女　如何にも。面目もない御對面。
かう　お菊さまを、たんと、いとしほがつて下さりまする樣子も、聞いて居りまする。この上ながら
采女　イヤ、お賴み申すは此方から。
きく　そんなら、女夫にして下さんすか。
かう　女夫にせいで何とせう。
きく　エヽ、嬉しうござんす。
りつ　そんなら、母さん、お二人を連れまして
采女　何かの樣子も、
かう　マア、奥へござりませ。
　ト唄になり、皆々思ひ入れあつて奥へ入る。ト橋がゝりより小次兵衞、そろ／＼戻つて來て、身拵らへして、內へ忍び込む。
小次　エヽ、忌々しい。する程の事は皆へこたこ。折角うまうして置いたものを、あの二才めに引ッ掛けられて、けたいの悪い。
　トいろ／＼あつて
よいワ／＼。その代りに追ッつけ、何奴も此奴も縛し上げ、憂目を見せてくれう。待つてけつかれ。

　ト奥を覗いて見て
なんぢや。二才めとお菊めが杯してけつかる。エヽ、業腹な。あの嬉しさうな面わい。婆やお律めが同じやうに。その笑ひ顏を、今の間に吠え面に變へてこまさう。
　トいろ／＼をかしみあつて、さし足にて奥へ忍び込む。
　ト最前の鷹を鳩十羽程寄つて追つて來る。薄ドロ／＼にて、鷹と鳩の爭ひあつて、喰ひ合ふ。ト五右衞門、障子を開き、ヂッと見て居る。ト向うより順喜觀、六部の形にて出て、二つの掛け地を持ち、右の鷹にキッと目を附ける。橋がゝりの方の中二階の障子を明けて、高景これを見る、三方一緖にこなしあつて
五右　ハテ、心得ぬ。鷹は三國に通傳して、その來る事久し。
喜觀　それ中春には鷹化して鳩と成ると、月令に見えたり。七月あつて元の鷹に歸る。
高景　日本鷹狩りの始めに、仁德帝四十三年、依網の阿弭古といふもの、怪しき鳥を奉る。百濟の王、酒の君、始めてこの鳥を泉州百舌鳥野の御狩に据ゑて、多くの雉を捕る。
五右　これ正しく、我れに大事を告げ知られし、徽宗皇帝

の白斑の鷹。

喜觀　蘇卿官人最期の砌り、無念の心魂を籠められし、縮絹を離れし、名畫の筆勢。

高景　今このあたりに飛びめぐるは、宋蘇卿の骨肉の忰、このほとりに隱れ住むに相違はない。

五右　群がる鳩は諸國の大名、鷹は即ち左馬五郎、時來つて、四海に羽を伸す前表か。

喜觀　心を碎いて尋ね巡る、我が忠心を感應あつて、在所を知らす天の惠みか。

高景　謀叛の族を、搦め捕る吉左右か。

五右　何にもせよ。

三人　ハテ、怪しやなア。

ト鷹、鳩を皆々蹴落し、西の方の松へとまる。三人顏見合す。障子ぴつしやり。皆一時なり。順喜觀こなしあつて

喜觀　鷹のとまるこの家の内に、尋ぬる人は、ソレ。

ト思案して門口へ來る。ト捕り手、最前より附いて出で、此の時、双方より「やらぬ」とかゝるを、よろしく立廻りあつて、順喜觀こなしあつて

廻國の修業者、お宿の御無心。

ト又かゝるを皆々橋がゝりへ追ひ込む。ト五右衞門、障子を開き、ズッと出で

五右　大明の順喜觀。

ト順喜觀ズッと内へ入り、こなしあつて

喜觀　某の本名を知つたる汝は。

五右　惟任左馬五郎。

ト順喜觀、五右衞門が顏をキッと見て

喜觀　只ならぬこなたの人相。

ト思ひ入れあつて

面重棗の如く、天庭廣く、眉秀で、眼中淸く、烏晴漆を點じ、しかも重瞳。これ正しく日本の產れにあらず。すりや疑ふ所もなき宋蘇卿の御一子、蘇友どのでござるよな。

五右　ホヽウ、我が人相を見て、明朝の產れと知つたる汝、越鳥南枝に巢ふ例し。天晴れ〳〵。

喜觀　エヽ、有り難や、忝なや。蘇卿官人の遺命を受け、尋ね廻りし蘇友どの、お目にかゝるも三世の奇緣。して又、我れを順喜觀と、御存じ知られしその仔細は。

五右　不審は尤も。昨夜、廣小路に於て、窺ひ聞いたる汝が本名、親人の形見の、掛け地を所持する其方ゆゑ。

喜観　して、こなた様の假の名は。
五右　日本強盗の張本、石川五右衛門。
　ト奥より釆女
釆女　すりやお袖判の盗賊。五右衛門、其方を。
　ト切つてかゝるを、順喜観、引き廻し
五右　瀬川釆女。我れに刃向ふは、雲雀の鶴を覘ふも同然。
　叶はぬ事ぢや。
釆女　お袖判を奪ひ返し、繩かけてこの身の云ひ譯。
　ト又かゝるを、順喜観、支へて、ポンと當てる。釆女
　ウンとのる。
五右　出かした。
喜観　久吉方の瀬川釆女。いつそ。
　ト切らうとする。
五右　殺すは無益。矢張り其まゝ。
喜観　して又、あの鷹を、この掛け地へ
五右　戻すも即ち父の形見。
　ト懐中より香包みを出し
　この香の徳に依つて、元の繪絹へ返して見せう。
　ト火入れに右の香を焚く。順喜観、掛け地を廣げる。
　鷹、仕掛けにて五右衛門の拳に乗る。

　名畫は名木に依つて動く。この薫りにて戻りし鷹は、元
　の繪絹へ。
　ト目を小柄にてくり、絹の上に置くと、パツと掛け焔
　硝にて鷹消える。順喜観、掛け地を取り上げる。吹替
　へにて鷹の畫に成る。
喜観　ハテ、爭はれぬ親子の心、魂ひ通じて返りしこの
　畫。
五右　佛間に直して父の孝養。
　ト此うち釆女、心附き、右の香を、フツと聞く事あつ
　て
釆女　ハテ、合點のゆかぬ。この家に薫る名香は、正しく
　蘭奢木。
五右　この香を蘭奢木と知つたる汝は。
釆女　親の形見のこの守。
　ト出し
　中には即ち蘭奢木の名香。某が親人瀬川帶刀どのを養父
　と知りしは、母人のかねてのお物語り。この名香を添へ、
　北野の松原に捨子となつてさまよひしを、帶刀どの北野
　詣での歸るさに、拾ひ上げられ、養育にあひしこの釆
　女。

五右　すりや其方は我が弟。
粂女　エヽ、なんと。
五右　親の形見の蘭奢木、父宋蘇卿といふ大明の臣下、我れを殘して日本を覆さん爲、この土に渡つて、筑前箱崎に住居して、妻を迎へて二人の子を儲くる。
喜觀　それぞ江南二株の橘。
五右　形見に殘す蘭奢木は、親子、兄弟の印。
粂女　すりや、こなたは、眞實の兄者人か。
五右　腹は變れど、胤は一つの、其方とは兄弟。
喜觀　して、今一人の妹御は。
五右　この家の娘お菊といふが、即ち妹。
粂女　ナニ、お菊を、妹とは。
五右　いつぞや廓へ、南禪寺の靈山國師となつて、久秋迎ひの節、これも所持する蘭奢木の名香にて、さては妹と知つたれど、名乘らぬも大望あるゆゑ。
粂女　ヤアヽ。すりや云ひ交したるお菊は妹。兄者人は寶の盜賊。ホヽ、ホイ。
ト思ひ入れある。
喜觀　御兄、弟御とあるからは、我れ〳〵と共に、久吉を討ち取るが、親、兄御への御孝心。
五右　イヤ、順喜觀、生得虛弱な粂女、身方に取つて何の益なき弟。兄に刃向ひ、瀬川の家を引き興さねば、義父へ立つまいぞよ。
粂女　ちやと云うても、現在の
五右　兄弟は他人の始まり。後の親を眞とする本文。
粂女　ハア。
喜觀　でも、この粂女どのを
五右　ハテ、構はずと、奥へ參れ。
喜觀　ハツ。
ト唄になり、五右衞門、掛け地を持ち、順喜觀を連れ、奥へ入る。トあと粂女一人殘りて、いろ〳〵こなしあつて
粂女　ハテ、思ひ掛けない兄弟の名乘り。親、兄は四海を奪ふ謀叛人。云ひ交したお菊は現在の妹。知らぬ事とは云ひながら、同胞思はず契るは畜生。因果と云はうか、武運に盡きたと云はうか。思ひ廻せば廻す程、瀬川粂女が
ト內より
高景　武士道は、最早立てられまい。
ト出る。

采女　ヤア、貴殿は早川高景どの。

高景　采女、思ひ掛けなき兄弟の名乘りも、其方には重なる惡緣ぢやな。

采女　そんなら、最前からの

高景　樣子は殘らず聞き屆けた。

采女　面目ない。

ト奥へツイと走り入る。ト高景こなしあつて、捕り繩出し、繩捌きして、奥へ行かうとする。惣右衛門出で、立ち塞がり

惣右　こりやお侍ひ樣、捕り繩持つて、何處へござります。

高景　そちや、何者。

惣右　私しはこの家の主、大佛餅屋の惣右衛門。

高景　さては、石川五右衛門が舅。

惣右　石川五右衛門とは。

高景　この家の聟次郎作といふは、石川五右衛門といふ盜賊の張本サ。

惣右　ハテ、合點の行かぬ。聟の次郎作を、盜賊の張本とは。

高景　訴人あつて、明白に相知れたわい。

惣右　して、その訴人は。

高景　現在の女房。參れ。

ト　お律、出て

りつ　盜賊と知つたに依つて、高景さまには、わしが訴人をしたのでござんす。

惣右　ナ、、なんと吐かす。現在の夫の訴人を、女房のおのれがするとは、おのれは〳〵。

トきつと寄るを、高景留めて

高景　斯く證人出れば、惣右衛門、其方もあらがふ事はあるまいがな。

惣右　ムウ。また聟が五右衛門なれば、どういふ盜賊としての詮議でござるぞ。

高景　石川五右衛門、夜前、廣小路に於て、世尊寺中納言俊忠公を剝ぎ取り、今日大佛へ勅使となつて入込む趣き。多くの金銀を奪ひ取つたる、重罪の盜賊。

りつ　最前、その裝束を掛けて、戻らしやんしたこちの人、すりや石川五右衛門といふ盜賊に違ひがないゆゑ、高景さまへ、わたしが訴人をしましてござんすわいな。

惣右　まだ〳〵利口らしくその頰桁きく。女に似合はぬ夫を訴人する惡鬼、惡魔め。娘なれども聟への云ひ譯、お

のれを、ずた／＼に刻んでなりとも。
トまた行かうとする。高景睨む。
りつ　申し、高景さま、こちの人が盗賊五右衛門に極まつたれば、奥で仰しやつた約束の褒美を下さりませぬか。
高景　如何にも、褒美は一廉。金銀なりとも、衣服なりとも。
りつ　イ、エ、そりや望みにはござんせぬ。
高景　して、其方は、何が望みぢや。
りつ　夫の命を。
高景　ヤ、なんと。
りつ　サア、奥にて仰しやつた折、石川五右衛門といふ盗賊の行くへを訴人したれば、褒美は望み次第とあるゆゑ、現在の夫なれど、女房の身で訴人したは、望み次第の褒美に夫の命を貰ひ、五右衛門どのが助けたいばつかり。
惣右　そんなら娘、聟を其方が訴人したは、
りつ　望み次第の褒美の當。天知る、地知ると、ひよつと脇より夫の身の上、訴人のあつた時には、悲しい別れ。それが嫌さに、わたしより訴人。望み次第とある御褒美に、夫の命を助けてもらひますわいな。
惣右　オ、、出かした、娘。それでこそ夫に貞女。さうとは知らず、今の悪口、免してくれ。……この上は、娘が訴人の褒美、
りつ　望み次第とあるからは
惣右　高景さまのお詞に
りつ　よもや違ひはござんすまい。
高景　如何にも、娘が訴人の褒美に、夫の命を望むからは、この高景、一旦の詞反古にはせぬ。
惣右　エ、、忝ない。
ト高景、捕り縄を出し、お律に渡す。
りつ　これは。
高景　左馬五郎に縄打つて渡せ。
惣律　エ、、。
高景　イヤサ、訴人の褒美、五右衛門は助ける。謀叛人は助けられぬ。盗賊の五右衛門は助けて、謀叛人の左馬五郎に縄を打て。
惣右　すりや、矢ッ張り聟の次郎作に。
りつ　アノこちの人に。
高景　如何にも、謀叛の餘類は、縁の搦むその捕り縄。
りつ　結ぶか、解くか。
惣右　後までに、キッとお返事を。

高景　預けた、兩人。
惣右　慥かなお返事。
高景　待つて居るぞよ。
ト唄に成り、高景こなしあつて奧へ入る。跡にお律、惣右衞門殘り、心々の思ひ入れ、こなしあつて、フツと互ひに顏見合せ
惣右　娘。
りつ　父樣、この捕り繩の
惣右　思案をせう。來い。
ト唄。兩人奧へ入る。始終此うち合ひ方。トじやんじやんと暮れ六ツの鐘鳴る。ト奧より釆女、しほ〳〵と出で、こなしあつて
釆女　天晴れ形は人と產みつけられ、養父の養育にて瀨川釆女と、武士の數に入りながら、思はず同胞云ひ交せしは、四つ違ひに違ふ、尾の生えぬばかりの畜生。所詮存らへ、人に面は合はされず。死ぬる覺悟のこの身の上。
ト脇差をチツと見て
この差添は養父帶刀さまのお讓り、銘は安宅藤四郎。仇な契りに畜生の、腹切れとて、お讓りはなされまいもの。テエ、。

ト身を顫はして泣く。トお菊、奧より行燈を持つて出で
きく　釆女さま。爰に居やしやんすかいな。
釆女　ヤア、お菊か。
ト顏を見て、ちやつと身を背け、こなしある。
きく　わしやお前を、一遍諦ねて居たわいな。最前父樣や母樣の側で、お前と祝言の杯したれば、世間晴れて二世までの女夫でござんすなア。
ト袖を顏に當てる。
釆女　その祝言の杯が因果の種。可哀や、何にも知らず。
きく　エ、なんぢやえ。
釆女　サア、なんにも知らぬ所へ來て、其方と夫婦の杯までするとは、思ひ掛けがなかつたといふ事いなう。
きく　なんの思ひ掛けがない事がござんす。わたしはお前に、廓で別れてから、今日まで每日々々、どうぞお前に逢はせて下さんせと、ほんに、神佛さまを、大抵祈つた事ぢやござんせぬわいな。
釆女　現在畜生になる事を、神佛に祈るとは、………サア、祈つた甲斐で、此やうになつたわいの。
きく　サイナア、お前と世間晴れて、女夫になつたと思へ

ば、此やうな嬉しい事はござんせぬわいな。

采女　此やうな悲しい事が、何處にあらう。これまで互ひの逢瀬に、枕を交した睦言を、思ひ廻せば廻す程、どうもこの顏が合はされぬ。

トあちら向く。お菊こなしあつて

きく　采女さま。なぜに其やうにさしやんすぞいなア。こちやモウ日が暮れたに依つて、早うお前と

ト脊中を合す。

采女　チエヽ、情ない。

ト身を縮める。

きく　これはしたり。何とさしやんした。さうして情ないとは、何が情ないえ。

采女　サア、それはの。

きく　わしが斯うするのが、情ないかえ。

トむつとして

コレイナア、廓で云ひ交したお前、わたしや二世も三世もと思うて居るものを、今さら其やうにさしやんすは。聞えた。遠ざかるものは日々に疎しとやらで、久しう逢はぬうち、誰れぞとお前、云ひ交したかいな。そりや聞えませぬ、采女さま。久し振りで逢うたわたし、ちつとは親しうして下さんしても、まんざら罰が當りますまいぞいなア。

采女　サア、なんの罰か、報いか知らねども、互ひに思ひ合つた仲、定めて同胞と云うたら、……サア、今日廻り逢うた其方なれど

きく　なんぢやえ、そんならわしが嫌になつたかえ。

ト思ひ入れあつて、采女、お菊を突きのけ

采女　オヽ、お菊、嫌ぢや／＼、とんと嫌になつた。フツツリと縁切つたぞ。

きく　エヽ。

ト大きに恟りして

采女さま、そりや、なんでいなア／＼。

トおろ／＼して取りつくを

采女　サア、云ひ交した其方、この世は是非に及ばねど、せめて未來は畜生の、サア、ちつとぢやない、たんと嫌になつたに依つて

きく　二世も三世も、互ひに云ひ交した二人が仲、今さら嫌になつた譯がござんせう。その譯を聞かして下さんせ。こちや譯を聞かぬうちは、なんぼうでも離りやせぬ／＼。

トしがみついて泣く。

釆女　オヽ、道理ぢや〳〵。譯を知らねばその筈ぢや。と云うても、この樣子が、なんと打明けて。
きく　云はれねば、矢ッ張り元の通りに、女夫になつて下さんせ。コレ、申し、拜みますわいな。
ト釆女に取りつく。釆女こなしあつて片側へ寄る。また附いて、よろしくあつて
わたしやお前に嫌はれては、片時もよう生きては居りませぬ。この世で添はれぬ譯あるならば、死んで未來で添うて下さんせ。
ト釆女が脇差に手を掛くるを、「コレ」と留めて
釆女　コレ、逸まるまいぞ、お菊。
きく　イエ〳〵、放して殺して下さんせ、お前に嫌はれ、何樂しみに。
釆女　その樂しみは苦しみと、心のうちは熱鐵を吞む同然。其方と緣切るも、せめては最期は人間らしう、人に笑はれぬやうに、死にたい釆女が願ひ。
きく　そんならお前は、死ぬる覺悟でござんすかえ。
釆女　どう生き存らへて、人に面が合はされうぞ。
きく　そりや、どうしてゞござんすえ。
釆女　お菊。

ト　お菊を引寄せ、顏をキッと見て
其方とおれとは、現在血を分けた同胞ぢやわいなう。
ト突き放し、身を背け、泣く。
きく　エヽ。
ト大きに悕りして
お前とわたしと同胞とはえ。
釆女　その證據は、親の形見の蘭奢木の名香。
きく　エヽ〳〵〳〵。そんならわたしも、肌身も離さず大事にして持つて居る。
ト懐より出し
この名香が、同胞の印でござんすか。
釆女　コレ。
ト釆女も出して
これと一體。親子同胞巡り合ふ證據は
トお菊のと一つに寄せ、火入れへくべ
この名香が同胞の印。
きく　香も替らぬ蘭奢木。そんならお前は。
釆女　現在の同胞。其方は妹。
きく　アノ同胞とも知らず。
釆女　云ひ交したは畜生。それぢやに依つて死ぬる覺悟。

ト腹切らうとするを、お菊留めて

きく　コレ、待つて下さんせ。

釆女　イヤ、生き存らへる程、罪の罪。この身は元より親兄弟まで、畜生の眷族といはれ、なんと憂世に存らへられう。其方は跡に殘つて、兄弟、夫婦のよしみ、釆女が菩提を弔うてたも。

きく　エヽ、聞えませぬ。コレ、申し。畜生にたつたは、お前の科でも、わたしの科でもござんせぬ。これが大方、互ひの因果づくとやら。お前一人死なしやんしても、一旦云ひ交した畜生の惡名は脫けませぬ。同胸なれば猶の事、現在、妹を、人に笑はす心でござんすかいな。

釆女　そんなら其方も

きく　一緖に死にたうござんす。

釆女　ヤヽ、出かしやつた。ほんに思へば、耻かしい事のありたけ、打解けてしまうたその後にて、同胞の知合ひくつたとて詮ない事。

きく　そんなら得心して、一緖に死んで下さんすか。

釆女　ハテ、死なば一緖と、互ひに云うたぢやないか。

きく　エヽ、忝なうござんす。

ト手を合はす、釆女、行燈の灯をフツと吹き消す。

これは。

釆女　今までの思ひ、同胞と知れる上は、どうも顏が。

きく　わたしも共に。

ト互ひに探り合ひ、手を取り交し

釆女　この世からさへ、戀路の闇の暗がりに

きく　迷うて居れば、

釆女　未來もさぞと思はるゝわいの。

ト思ひ入れあつてヂツと泣く。ト内にてコツケコウと鷄鳴く。

ヤア、あの鳥は。

きく　ありや鷄の告鳴きでござんす。大方、わたしら二人が死ぬる知らせかいな。

釆女　イヤ〳〵、飛鳥にあらざれば、飛鳥の心を知らず。それは人間。鳥類はその氣を知つて、我れ〳〵を友とするか。エヽ、是非もない事ぢやなア。

きく　申し、釆女さま、わたしや夫、鳥と云はれても、矢ツ張りお前と、夫婦になりたいわいなア〳〵。

ト取りつき泣く。釆女、突き退け

釆女　未練な事を。

きく　サア、死ぬるは覺悟でござんすれど、死んで未來へ

行た時には、矢ッ張りお前と
粂女　ヤ。
きく　サア、同胞でござんすかい。
粂女　所詮、畜生道へ落ちたこの身、未來は女夫に。
きく　アノ合點して
粂女　因果と因果。是非がない。
きく　エヽ、嬉しうござんす。
　ト兩人こなしある。この時後へお幸、お律、手燭を袖に蔽ひ、出掛け、窺うて居る。
粂女　お菊、この家で死ぬれば跡の思惑。せめては三條中島の瑞泉寺へ行て、二人が最期。さすれば畜生寺とも、畜生塚とも呼び習はさば、二人が菩提。
きく　そんなら、一時も早う
粂女　サア、おぢや。
　ト手を引き合うて、出ようとする。この時
かう　コレ、待つた。
　ト手燭を上げる。
きく　ヤア、母樣。
粂女　お律どの。面目ないこの身の上。
　ト振り切る。
かう　イヤ、殺しませぬぞ。
粂女　イヤ、放して。
　ト四人よろ／＼立廻りあつて、無理にお菊をお律、粂女をお幸留めて、
かう　コレ、必らず逸まるまい、お二人。
りつ　お菊さま、マア／＼、待つて下さんせ。
きく　イエ／＼、離して下さんせ。
粂女　存らへ居れば畜生。それぢやに依つて
　トまた行かうとするを、「ハテ」と無理に留めて
かう　コレお二人樣、畜生ではござりませぬ。すりや、死ぬるには及びますまいがな。
粂女　現在同胞と云ひ交せしに
きく　畜生でないとはえ。
かう　サア、お前方お二人は、同胞子ではござりませぬわいの。
粂女　ヤ、なんと。
きく　アレ、母樣が同胞でないといな。
粂女　親の形見の蘭奢木の證據あるに、お菊とこの粂女、同胞でないとは。
りつ　申し、母樣。

きく　その樣子はえ。
かう　その樣子は斯う。
　ト懐劍を咽喉へ突ッ込む。皆々驚ろき
皆々　ヤア、こりやお前は、何ゆゑの自害でござんす。
かう　わしが自害するは、同胞子でないといふ云ひ譯。
粂女　云ひ譯の最期とは。
かう　コレ、お菊、其方をお主の娘御と云うたは嘘。誠はわしが眞實の娘ぢやわいの。
きく　エ、。
粂女　して、その樣子は〳〵。
かう　粂女どの、親御大炊さまが、筑前の箱崎にござつた時、わたしもあのお菊を產んだ乳のあるを幸ひに、大炊さまへ乳母奉公。人知れず兩者木諸ともに取替へて、娘のお菊をお主の娘御として、又お主の娘御は、小野攝津守どの、御門前へ捨て置きしが、いま、久吉の養子と成つて成人したる、お通姫といふのが、大炊さまの娘御。お菊といふは、わしが眞實の娘でござるわいなう。
粂女　フウ。すりや某が妹と思うたお菊は、其方の娘で、我が眞實の妹といふは、久吉公の御息女お通姫。
かう　サア、それぢやに依つて、お二人とも、死ぬるには及びますまいがな。
きく　すりや、わたしが爲には、眞實の母さん。
りつ　それに又、お前はなんで、死んで下さんすぞいな。
かう　サア、いま云ふ通りの譯。わたしが惡心から、勿體ない、お主の娘御と、氏もなきわしが娘と、取替へた誤まり。定めて憎い奴と思し召されませう。粂女さま、お前樣への申し譯のこの自害。わたしが死ぬれば、便りのないあのお菊、必らず見捨てゝやつて下さりますなえ。
　トうんと反り、死する。
りつ　ア、、コレ。
　ト取りつく。此うち小次兵衞、出掛け居て、
小次　謀叛人の餘類、瀬川粂女、腕廻せ。
　トかゝる。粂女、立廻りあつて
粂女　この粂女を謀叛人とは。
小次　吐かすまい、五右衞門の弟。われに繩かけ、褒美にする。
　トかゝるを、順喜觀ズッと出で、小次兵衞を引廻し、
　ポンと當てる。
きく　ヤア、八田平どの。
喜觀　サア、粂女さま、五右衞門どのに一味して、倶に天

お歎かぬ、御無念晴らす所存はないか。
りつ　そんなら、お前は。
釆女　兄者人の一味。
喜觀　大明の順喜觀。サア、釆女どの、兄に一味か。但し
は敵對ふ御所存か。
釆女　どちらへどう廻つても、所詮、存らへられぬこの釆
女。いつそ。
ト腹切らうとする。お律、お菊留めて
りつ　コレ、待つた。
きく　なんでお前は死なしやんす。
釆女　サア、實父と兄とへ孝を立つれば、養父と主人へは
不忠不孝。おやに依つて。
トまた死なうとする。奥より高景出で
高景　釆女、犬死して名を穢すか。
釆女　ちやと云うて。
高景　急く所であるまいがな。
喜觀　早川高景、珍らしい對面。
高景　そちや八田平。本名は大明の順喜觀。
喜觀　五右衞門どのに合體せし上は、龍に翅の勢ひ、追ツ
つけ其方にも泡吹かす。サア、釆女どの、一味するか。
高景　釆女、養父の家を立てずば、武士が立つまい。
りつ　釆女さま、お前の思案は。
喜觀　敵と身方と。
高景　忠と不忠と。
りつ　生死の境。
皆々　サア／＼。
きく　ちやつと好い思案して、下さんせいな。
釆女　すりや、死ぬるにも死なれず。ホイ。
ト小次兵衞、起き上がり、かゝるを、順喜觀、引き廻
し
喜觀　早川高景、謀叛の手始め、只一打ち。
ト種ケ島を構へる。
高景　小癪な事を。
ト疊を蹴上げる。下より下才ヌツと出て、高景にかゝ
る。突き廻す。順喜觀ポンと種ケ島放す。ト下才にて
受ける。釆女に小次兵衞かゝるを引き廻し、順喜觀、
小次兵衞をポンと切る。
釆女　是非この身は。
ト釆女、死なうとするを、お律留めて、切り穴へ落す。
「これは」とお菊も續いて、飛び込む。

喜觀　こりや采女どのを。
りつ　この場を無事に歸すのは、こちの人の由縁だけ。
喜觀　して、この下家の拔け道は。
りつ　桃山の御殿まで切り拔きあれば、氣遣ひはござんせぬ。
ト奧にてバタ〳〵と、家を毀す仕掛け。壁、障子一樣に碎ける。ト奧にて捕り手大勢、馳せ進ふ事ある。お律、順喜觀、見て驚ろき
喜律　ヤア、あれは。
高景　石川五右衞門を搦め捕る組子の面々。
りつ　すりや、こちの人を
高景　高景が生捕つて、久吉公へ手柄にする。
喜觀　この上は、順喜觀が加勢をして皆殺し。
ト駈け込まうとする。
高景　ソリヤ。
ト聲かける。ト橋がゝりより組子四人、バラ〳〵と出で。
侍ひ　腕まはせ。
ト順喜觀を取卷く。「どつこい」と見得になる。ト奧よりバタ〳〵にて、隼人、走り出る。

高景　吉川隼人。して、五右衞門を召捕つたか。
隼人　ハッ、組子の面々番手を定め、家内は勿論、天井、簀子も引きはなし、詮議を致しますれど、石川五右衞門、風を喰ひしか、かいくれ行くへが知れませぬ。
りつ　すりや、こちの人は
喜觀　行くへが知れぬとは。エヽ、忝ない。
高景　知れぬと云うて高で破ら家。また、八方を取圍めば、蟻の這ひ出る所もない。裏は一方、廣見の藪。人數を分けて探せ。
隼人　ハッ、畏まりました。
ト奧へ走り入る。
高景　組子ども、順喜觀を搦め捕れ。
喜觀　惡く寄つたら、撫切りちやぞ。
捕手　うぬ。
トたてになつて、順喜觀、皆々を橋がゝりへ追つて入る。此うち奧にて「アリヤ〳〵」と聲して、提灯、松明にて組子馳せ違ふ。お律も奧へ入る。こなしあつて
高景　この上は五右衞門を。
ト行かうとする。
惣右　待つた。

高景　待てとは。

ト惣右衛門、奥より出る。

惣右　最前の捕り繩の御返事、五右衛門に繩かけてお渡し申す。

高景　惣右衛門、見事、其方が。

惣右　彦に繩かけるは、斯う。

ト諸肌脱ぐ。切腹して居る。

高景　フウ。汝が最期は彦が代り、この場を見遁がしくれとの頼みか。

惣右　如何にも。我が本名、竹地が家來、海田新吾、謀叛人の餘類。我が首取つてこの場の功を立て、彦の命を。

高景　ハテ、敵ながら天晴れの忠臣。

ト奥より隼人、捕り手皆々出で

隼人　如何やうに詮議いたしても、五右衛門が在所相知れません。

高景　すりや、取逃がしたか。

惣右　エヽ、忝ない、サア。

ト首を差延べる。高景、首をボンと切る。

隼人　して、五右衛門は。

ト高景、思案して、片木を取つて來て、惣右衛門が血汐にて書きつけ、花道際へ、制札のやうにして立てる。

その制札は。

高景　「早川高景、汝が實父、此村大炊之助並びに舅、海田新吾を、手に掛くるものなり。舅の敵無念に思はゞ、何時なりとも勝負を遂ぐるものなり。早川高景。」

隼人　すりや、この高札にて

高景　五右衛門が行くへも知れん。

ト高景、隼人こなしあつて向うへ入る。舞臺しんとなり、五右衛門、冠り裝束にて出て、こなしある、トお律、順喜觀も橋がゝりより走り出で、兩人、五右衛門を見て、合ひ方。

りつ　ヤア、こちの人。

喜觀　御主人。

五右　高景が計略にて、我れを召捕らんと、百萬騎を以て取卷くとも、物の數とも思はぬ某。女房は術を以て桃山へ入り込め。まつた順喜觀は、洛中の手下を語らひ、聚樂の御所へ忍び入り、久秋、御臺をぶち殺せ。

りつ　そんならわたしは桃山へ。

喜觀　某は聚樂の御所へ。

五右　兩人ともに、ぬかるな。
兩人　ハア。
りつ　して、お前は。
五右　我が事は氣遣はずと、兩人ともに、合點かな。
兩人　すりや、我れ／＼は
五右　早く行け。
二人　ハツ。
ト順禮、お律こなしあつて、橋がゝりへ走り入る。五右衛門、いろ／＼あつて、最前の片木に書きし高札を讀み下し
五右　役にも立たぬ、ほてゝんがう。
ト取つて懐へ入れ
最早子の刻、陰の兆し、内裏へ忍ぶ刻限。
トしづ／＼花道の中程まで行く。トどんちやん。靜かなる遠攻めになる。五右衛門、チリ／＼後へ戻り
思ひ掛けなき貝鉦、太鼓。
ト空をキツと見て
今宵の星の分野。
ト指を繰り
虚宿、室壁は南方の宿星、井鬼、柳星、張翼軫は北に手拱す。
ト此うち空を見い／＼、チリ／＼と廻り
火星、金星を剋するは……すりや高景が我れを出し拔き、搦め捕らんと計るか。ハテ、しほらしい奴ばらやなア。
トこなしある。此うち花道より隼人、軍藏、橋がゝりより部屋中、殘らずバタ／＼と出で、五右衛門を取卷く。
皆々　やらぬぞ。
ト五右衛門キツと見て、手裏劍を看板へハツと打つ、舞臺へ一面の網かゝる。
これは。
ト五右衛門こなしあつて、よろしく　ひやうし幕

大切　桃山御殿の場

役名　腰元、あゆ葉。同あげ葉。大明太子。照崎彌藤二。小西妹、千束。お通姫。傾城、九重。篠井熊太郎。傾城、花橘。御臺、蘭生の方。五右

衞門女房、お律。早川高景。石川五右衞門 本名惟任左馬五郎。小西女房、唐織。高景女房、岩浪。眞柴金吾久秋。順喜觀 本名加藤虎之助。瀨川采女。眞柴久吉。

造り物、見附け一面の網代垣。方々に桃の幹花盛り、隨分見事に。舞臺前、井戶に井筒掛け、すべて桃山の御殿、庭の內の模樣。方々に毛氈掛け、床几直しある。幕明く。

ト三味線入りの壬生囃子になる。ト向うよりお通姬、衣裳、裲襠、病ひ鉢卷にて、千束、あゆ葉、あげ葉、その他腰元大勢附き出る。皆々本舞臺へ來る。

皆々　申し、お姬樣、この前栽の桃の花盛り、御覽遊ばして、ちと浮き〳〵なされませいなア。

千束　ほんに、いつぞやから、お姬樣のお物案じ、お氣もじも勝れぬ樣子。今日はちつとお慰みの爲、岩浪さまのお勸めに依つて、この前栽の桃の花盛りを御覽に入れんと、わたしらまでお供いたしたに、矢ッ張りお勝れなさらぬ樣子。申し、岩浪さま、こりやどうしたら、ようござりませうぞいなア。

岩浪　サア、お姬樣の御病氣は、只うつら〳〵と物思ひ、父君久吉公にも、めでたう御凱陣遊ばしたれば、夫高景どのに勸めて、お姬樣のお願ひの叶ふやうにと、思うて居りまするわいなア。

あげ　お姬樣のおむづかりで、共にわたしらまでも物案じ。世上は春でも心は秋の夕暮れ、どこやらが物淋しうござりまするわいなア。

あゆ　申し、お姬樣、其やうにお案じなさらずと、花でも御覽じて、お心をお慰めなされませいなア。

ト お通姬、始終物案じのこなし。

皆々　申し、お姬樣、矢ッ張りお心は勝れませぬかえ。

お通　忍ぶれど、色に出にけり我が戀は、物や思ふと人の問ふまで。自らをいさめんと、岩浪、千束、皆の志しは嬉しいけれど、存らへ居ても、所詮浮世に樂しみのない自ら。いつそ死にたうござるわいの。

岩浪　また其やうな事を御意遊ばす。併し、お道理でもあり、なんぼう四海の主久吉公の姬君でも、任せぬものは戀の道。

あけ　ほんに、心に任せぬものは、双六の賽と加茂川の水、思ふ戀路と、帝さまも仰しやつたではござりませぬか。

千束　そしてマア、お姫樣の戀路とは、戀人はどなたでござりますぞいなア。

あげ　それを今まで、あなたは、お知りなされぬかえ。

千束　サア、誰れでござりませうぞいなア。

岩浪　お姫樣の戀人は誰れあらう、今の世の業平と呼ばれる、久秋さまの御家人、瀬川采女さまぢやわいなア。

皆々　エ、、お姫樣の戀人は、瀬川采女さまでござりまするか。

千束　申し、その瀬川采女さまは、お袖判の紛失、その御詮議でお行くへが、知れぬぢやござりませぬか。

あゆ　ほんに、瀬川采女さまなりや、わたしらでも戀煩らひをするわいなア。采女さまも、辛氣な。お袖判とやらの詮議は抛つて置いて、早う戻つて、お姫樣の戀路を叶へたがよいわいなア。

あげ　それが自由になるものかいの。

お通　采女の行くへが知れぬが、自らが病氣の種。いつぞや櫻のお花の時、誓願寺の太皷の役、その折見染めた初戀。なんと云ひ寄るよすがもなく、思ひはかた〳〵、自らばかり。どうぞ采女に逢ひたい。顏が見たいわいなア。

皆々　そりやお道理でござりまする。

岩浪　これはしたり、皆樣。そりや道理でござりますると、お姫樣をお諫め申さうとはせず、共々に其やうに云うては、却つてお心が結ぼれる。サア〳〵、これから、ちとお庭をお拾ひなされて、泉水のお茶屋で、持たせしさゝへを開きませう。

千束　それ〳〵。わたしが、拙ない琴の組でもお聽かせ申しませう。

あげ　こりや、ようござりませうわいな。

皆々　サア〳〵、お姫樣、お越し遊ばしませい。

ト いろ〳〵勸める。お通姫、始終すまぬ思ひ入れあつて

お通　傳へ聞く、官女采女は、奈良の帝に焦れ、叶はぬ戀路を諦らめて、猿澤の池へ身を沈めしとか聞く。自らも、所詮及ばぬ戀路、この井戸へ身を沈め、死なば、思ひはあるまい。さうぢや。

ト 井戸へかゝらうとする。皆々留めて

千束　滅相な、お姫樣。如何に戀路が叶はぬというて、お果て遊ばしては、父君、御臺樣のお歎き。必らず其やうな事を思し召されまするな。

岩浪　兎角縁と月日を待て、と申しまするぢやござりませぬか。
お通　イヤ〳〵、存らへてゐても、所詮、采女に逢ふ事は叶はず。自らは疾から覺悟極めて居るわいの。
皆々　それでも、申し、
お通　イヽヤ、放して。
皆々　お待ち遊ばせ。
ト皆々いろ〳〵立廻りあつて留め、よろしくお通姫、「南無阿彌陀佛」と前の井戸へ飛び込む。
皆々　ヤア、お姫樣は入水。
ト驚ろく。岩浪こなしあつて、井戸を見て
岩浪　ハテ、心得ぬ。今お姫樣の入水、井の内に水音もせず。樣子を見るに、水のあいろも見えぬ闇まぎれ。こりや正しく空井戸。
皆々　そんなら、この井の内は。
岩浪　何にもせよ、詰所の武士はどなたでござる。お姫樣の一大事。これへお出でなされ。
熊太　ハアヽ。
ト橋がゝりより筒井熊太郎、上下にて出る。
詰所の當番は、筒井熊太郎でござる。

岩浪　熊太郎どの、只今、お姫樣には、覺悟を極めて、この井戸へ入水なされました。
熊太　エヽ。
ト愕りする
岩浪　井の内の樣子合點がゆかぬ。正しく空井戸。この内へ入つて、お姫樣の御安否を。
熊太　成る程、心得ました。
ト上を剝れ、股立ち取つて井の内を見て、
あいろも見えぬ闇まぎれ。ムウ。
トこなしあつて、榮螺の火をとぼしたを取つて來てこれを以てお姫樣の御安否を。
千束　オヽ、出かしました、熊太郎さま。それよ、海士の謠に倣うて、お前の腰に繩を。
あげ　オヽ、それ〳〵。
ト簇の綱を皆々外し、繼ぎ合はして熊太郎の帶に附ける。
熊太　天晴れ女中方の氣轉。拙者は井の内へ。
ト飛び込む。皆々右の繩をたぐり下ろす。それなり後じさりをして、橋がゝりへ入る。ちよん〳〵にて返し

ト上より黒幕下りる。柴垣廻る。舞臺眞暗がりになる。ト向うより采女、探り〳〵出る。ト橋がゝりより下才一人、紫蠋に火をともして出て來て、花道にて采女と行き合ひ、互ひに合點の行かぬこなし。

下才　わりや誰れぢや。

采女　わりや誰れぢや。

下才　おりやおれぢやが、合點の行かぬ。わりや爰へどうして來たぞ。

采女　サア、不思議なはこの身の上。死ぬる命をお律どのの情にて、思はず爰へ來たが、ても面妖な。

トこなし。

下才　爰へ來るとは、なんでも敵の廻し者。われを。

ト鶴嘴にて打つてかゝる。采女、摺り抜け留めて

采女　こりや滅相な。何とする。

下才　この抜け道を知られては、海田新吾どのや、おいらが身の上。それで。

トまた打つてかゝる。采女よろしく立廻りあつて、右の鶴嘴をもぎ取り、鶴嘴にて下才を殺し、こなしあつて紫蠋を取り上げ、死骸を見て、惣右衛門が遺つた五十兩の金を取り

采女　ても、ひやいな。大佛より爰までもう十四五町も來たであらうが、矢ッ張り行く先の出所も知れず。こりやマア、どうしたものであらうぞ。

ト思案する。ト此うち向うよりお菊、そろ〳〵探り出で、采女を見て

きく　ヤア、采女さん。

ト取りつく。采女、紫蠋にてお菊を見て

采女　其方はお菊。爰へはどうして。

きく　サア、抜け道ぢやと聞くと、お前の跡を慕うて、爰まで來ましてござんすわいなア。

采女　ハテ、そりや、ようおぢやつたなう。併し、其方と同胞でない様子は知れたれど、紛失のお袖判は、大方兄者人の手にあれど、弟の身で刃向はれず。所詮、存らへられぬこの采女。

トしいをりとなる。

きく　なんのいなア。もう斯うなつたれば、お袖判も何も要りませぬ。幸ひ人の來る氣遣ひのないこの抜け道、爰らでお前と女夫になつて、暮らして居たうござんすわいなア。

采女　滅相な。なんぼ女夫になりたいと云うて、土龍のやうにこの土の中で、どう女夫になられるものぞ。幸ひのこの榮螺、この明りで出る所を尋ねて見よう。おぢや。

ト此うち橋がゝりより、また下才、榮螺を持たず、探り／＼出て

下才　コレ、道で榮螺の火を消して、難儀をする。大佛までは余ッぽどの道ぢやが。

ト采女この聲を聞いて、こなしあつて、お菊が手を引き、榮螺を隱し行く。下才、行き當り

誰れぢや。何者ぢや。

トきつとなつて、探る。采女、探り寄つて、何やら囁やく。

ムウ。貴殿は海田新吾どのか。

ト采女こなしあつて、袖を口に當て

采女　如何にも海田新吾ぢや。コリヤ、手下の下才。

下才　ハア、。

采女　最前、此方の家から、この拔け道へ出て來たが、出る所がとんと知れにくいが、定めて其方が知つて居るであらうが、どうぞ迷はぬやうに教へてくれ。

下才　ムウ。すりや、かねて申し合はした通り、桃山の御殿へござつて、御本望をお遂げなさるゝのか。

采女　本望でも、八品でも、不受、不施でも大事ない。早うお經の功力で明りが見たい。

下才　お氣遣ひあられな。桃山へはこれより程近し。それに附いて、先達て、仰せられし桃山へ忍び込み、御殿細見の繪圖。

ト采女に渡す。采女、取つて

采女　そんならこれが、桃山の御殿の繪圖か。

下才　ハツ。又この劍は大功丸。先達て久次が奪ひ取りしを取返し、寶藏へ籠めありしを、某やす／＼奪ひ取りましてござります。

采女　ヤア。

ト恟りしながら、引ツたくり

出かした。其方に褒美は、ソリヤ。

トいま取つた金をやる。

下才　エヽ、忝ない。

采女　コリヤ、其方は早う内へ行て、おれが去ぬるまで待つて居てくれ。

下才　然らば拙者は大佛へ。

采女　早う。

下才　ハツ。
　ト探り〳〵、向うへ入る。釆女、とつくりと透し見て
釆女　アヽ、嬉しや。もうよい。
きく　助りを見せても大事ござんせぬかえ。
　ト榮螺を出す。
釆女　コレ、お菊。思ひ掛けなうこの劍、御殿の繪圖まで手に入つた。
きく　これを手柄に、どうぞお前の身の上を。
釆女　イヤ、どうあつてもお袖判を取戻さねば、云ひ譯は立たぬわいの。
　ト此うち橋がゝりより、お通姫出掛け、釆女を見て
お通　ヤア、其方は、瀬川釆女。
釆女　お前は。
お通　コレ、其方に年月焦れた、小野の通ぢやわいなう。
きく　申し、小野のお通さまとあれば、乳母の物語り、お前の
釆女　コレ、なんにも云ふまい。
お通　釆女、逢ひたかつたわいなう。
　ト取りつく。釆女ちやつと榮螺の火を吹き消し、逃げようとして暗いゆゑ「申し」とお菊、お通、釆女を尋ねる。三人よろしくあると、よき所にて熊太郎、榮螺に火をともし、橋がゝりより出て來る。ト矢ツ張り切り幕の内より綱出で、熊太郎の帶に附けてある。右榮螺の明りにて皆々顏見合せ
熊太　瀬川釆女。お姫様。
お通　こなたは熊太郎。爰へはどうして。
熊太　何にもせよ、お袖判紛失の科人釆女。
　ト釆女にかゝる。釆女、これと立廻りになる。お菊とお通姫、熊太郎を支へる。右四人よろしく立廻り、いろ〳〵あつて、トヾ釆女逃げようとするを、その帶にお菊とりつく。又お菊の帶にお通姫取りつき、お通に熊太郎取りつく。右四人並んで花道の方へ行く。ト橋がかりの内より熊太郎の綱を引く、これにて四人いろいろあつて、段々後じさりにて本舞臺へ戻つて來て、橋がゝりの内へ四人ともに引ツ込む。返し。

　道具、元の前栽へ戻る。
　ト初手の人物岩浪、千束、あげ葉、あゐ葉、子供、侍ひ大勢、右井戸の綱を引いて居る。ト前の井戸より熊太郎、お通姫、お菊、釆女、段々に上がつて來る。ト

皆々こなしあつて

岩浪　ヤア、お姫樣。御安泰にござりましたか。

千束　お前は、瀬川釆女さま。

皆々　こりやどうぢや。

釆女　早川の奥方。何れも。

ト驚ろく。

お通　覺悟極めし自ら、不思議に存らへ、釆女に巡り逢うたわいなう。

きく　そんなら、申し、爰は桃山の御殿でござりまするか。

熊太　何にもせよ、詮議のある瀬川釆女。ソレ、侍ひども、繩かけい。

侍ひ　ハツ。

ト皆々取巻く。釆女、お菊を圍ひ、岩浪はお通姫を圍ふ。

岩浪　コリヤ、熊太郎どの、理不盡な。何召さるゝ。

お通　釆女に過ちがあると、自らは生きて居ぬぞや。

熊太　お袖判紛失に依つて、行くへの知れぬ釆女が、この御殿へ掘り拔きし拔け道に、忍びしは仔細あらん。繩掛けて久吉公の御前にて、詮議する。ソリヤ。

侍ひ　腕廻せ。

釆女　必らず聊爾せまいぞ。

岩浪　釆女どのに詮議あらば、及ばずながら、高景が妻岩浪。

熊太　然らば、釆女を次の間へ。

千束　お姫樣も、御一緒に。

熊太　サア、釆女、歩め。

釆女　サア。

皆々　サア〳〵。

ト皆々よろしく見得、こなしあつて、橋がゝりへ熊太郎附け廻し、チリ〳〵と皆々入る。

右の桃、柴垣、殘らず引いて取る。

ト二重舞臺、一面の御殿、簾を下ろしある。東西、塗り骨障子屋體。飾り附け見事に、天王立ち打ちかける。ト西の方より大名一、二、東より三、四、何れも素袍、掛け烏帽子にて出で、東西の障子屋體の前へ直る。ト橋がゝりより唐織、赤前垂れに置き手拭にて、豆腐箱を持ち、臆病口より黒崎彌藤二、衣裳、麻上下、爼に鯛を載せ、庖丁、眞名箸を添へ出で、兩人よろしく直る。

ろ。始終此うち天王だち。ト眞中の簾巻き上げろ。ト久秋、冠り装束。九重、天冠、十二一重にて、兩人二疊臺に直り居る。この後に立雛の形にて立つて居る。腰元、官女にて、別れて直り居る。この見得、皆々よろしく、天王立ちを微める。

唐織　今日彌生の節句を幸ひ、我が君久吉公、異國征伐めでたう御凱陣遊ばしてお喜びにつき、若君金吾久秋公には、今日より攝政關白の御位に昇進あり、即ちお装束附けも雛祭に表し、九重さまは女雛、久秋さまは男雛、御近習の面々は立雛、隨身、或ひは仕丁、又は御家臣のおかもじは、官女、端下の女に出立つも、君を祝する彌生の御祝儀。憚りながら、おめでたう存じまする。

久秋　ホウ、小西與十郎が妻の唐織、其方の今日のその姿。どうも云へぬ。父君の仰せに依つて、關白形の装束附けも、雛祭りとは、時候に叶うた好い思ひ附き。九重が女雛、あの窮屈さうな顔見や。それよりは黒崎彌藤二が料理人の妻、とんと正眞の雛の料理人。近習の者が爰を大事と勤め居る皆の顔、どうも云へぬ〳〵。

彌藤　誰れあらう、久吉公の家臣、黒崎彌藤二と云はるゝ武士が、雛の料理人になるも、我が君の御凱陣といひ、久秋公の關白形の御祝儀なればこそと、斜に構へて居りまする。

九重　ほんに、あられもない。わたしまでが同じやうに、如何に我が君様の御意ぢやと云うて、この十二一重に天冠、二疊臺の上に居るも、勿體ないやら、耻かしいやらで、胸がどき〳〵致しますわいなア。

皆々　今日の御祝儀、我れ〳〵は立雛の役目。

大三　また守護の役目はこの四人。晝夜勤番怠りなく、相勤めまする。

大一　我が君大領久吉公には、日本は愚か、異國まで、切り隨へ給ふ天晴れの名將。

大二　かゝる名君に隨ふは、武士の冥加に叶ひしと申すもの。當時、草もゆるがぬ眞柴の御威勢。

大四　民百姓は泰平を謳ひ、御代穏かに祝しまするも

彌藤　我が君の武威の徳。追ッつけ久秋公の御代ともならば

大二　猶も榮える君が代の、四海安全。

一四　五穀豐人。

三二　今日の吉例。

彌藤　凱陣の喜び。

皆々　千秋萬歳、只々おめでたう存じまする。

ト在郷唄になり、向うより順喜觀、木綿やつし、麻上下、三方に菱餅を載せ、お律も同じく木綿やつし、三方に菱餅を載せ、兩人とも在郷者の形にて出て

りつ　コレ／＼、霧畑村の與茂九どの。其やうにまんがちには、行かぬものぢやわいの。

喜觀　何を岡村のおべくが云ふやら。毎年の御嘉例、十月の亥の子と三月節句に、津の國能勢郡霧畑村から、内裏樣と四海の武將樣へ、草のかちんを差上げるが、此方の村の規模ぢやに依つて。

りつ　そりや岡村も同じ事。それで毎年爭ひ合はして、連れ立つて上るぢやないかいの。

喜觀　上るに依つて、斯う連れ立つて來た事ぢや。このかちんを早う差上げねばならぬ。

りつ　サア／＼、それがこなさまの、まんがちといふものぢやわいの。

喜觀　まんがちでも、まん直しでも大事ない。自體、男より女子が先へ行くといふ事はない事ぢや。

りつ　イヤ、あるわいの。男より女子が先へ行く證據は、この草のかちん。此やうに菱に取つたが女子の體。また男の體をしたは五月の粽。五月より三月は早い菱のあも。それで女子が先へ行く。ぢやに依つて、わしが先へ納めにやならぬ。

喜觀　イヤ／＼、この餅の菱にして、三角なは女子ではない、こりや男の體ぢや。

りつ　三角が、どうして男の體ぢや。

喜觀　ハテマア、とつくり考へたがよい。丸いやうでも三角なが男の物ぢや。それで男のおれが、先へ行くといふが誤まりか。

りつ　イヤ／＼、どう云はつしやつても、女子が先へ行く。

喜觀　これはしつこい。女子は遲う行くものぢや。

りつ　イ、ヤ、先ぢやわいの。

ト此うち始終入れ替つて、せり合うて居て

りつ　ハテ、わしが先ぢや。

喜觀　イヤ、おれぢや。

ト兩人やかましういふ。

大四　ヤイ／＼、騷がしいが、何事ぢや。

兩人　ハア。

ト兩人本舞臺へ來て、辭儀して

喜觀　ハイ〳〵、私しは津の國能勢郡霧畑村の百姓でござりまする。
りつ　私しも同じ郡、岡村の者でござりまする。
喜觀　毎年の御嘉例、蕈のかちんを納めに上りましてござりまする。
唐織　成る程、毎年の吉例、津の國、岡、霧畑の兩村より、蕈のかちんを差上げるとは、自らも聞き傳へて居るが、二人ともに、奇特に、よう上りやつたなう。
喜觀　ハイ〳〵、よう上りましてござりまする。……コリヤ、おべく、あれ聞いたか。あの通りぢや。あなた方でさへ、おれには、よう上つたと仰しやるわいやい。
りつ　なんの、こなさんの事ぢやない。ありやわしが事ぢやわいなう。ハイ〳〵、あなたの仰しやる通り、よう上りましてござりまする。いつも父樣が上られますけれど、今年はどういふ事にや、疝氣が起りまして、樒を煎じて飲ますやら、茅花の穗を取り歩くやら、家内はその事ばつかりにかゝつて居ります。ところに、三月の節句、毎年の捧げ物、蕈のかちんを搗かねばならず、蓬を引くか、篩へるか、上々樣へ獻じる大事のあも、母さまもあつたふた、芥でもあつては惡いと、汲み立ての水ですゝいだ上、夜に日に繼いで、より出したわらしべの、揃れ切らして京上り。霧畑村へも誘ひ合はせ、禁裏樣から此お館へ、蕈のかちんの初物、毎年の嘉例、外してはならぬと、あつたふた。鼈の居計らひ。父樣に早う〳〵とせつかれ、髮もはらげず、ツイくる〳〵と、澁の川瀬の、水車も見ようし、大佛さまも拜まうと存じまして、父樣の名代に上りましたわいな。
喜觀　ても、よう口のはしやいだ女子ぢや。誰れが聞かうとも云はぬに、ぺり〳〵ぺり〳〵と女子だてら、發才にしやべると、猿に顏かゝれて、イヤ、猿は、爰では差合ひぢや。ハ、、、、、。必らず久吉さまの事ではござりませぬ。

ト彌藤二を見る。彌藤二、睨む。

なんの云うても、云はいでも大事ない事を云うて。あなたを見たがよい。怖い顏してござる。とんとあなたのお顏は

ト云はうとして

どつこい。また顏相云はうとした。

ト口を我が手に捻り上げる。

彌藤　ヤイ〳〵、百姓の仇口きかずと、あれに久秋公もご

ざる。そのかちんをちやつと差上げ、次へ立つて嘉例の通り、御酒を戴き居らう。

喜觀　ハイ〳〵、それを待つて居りました。あれへ差上げませうか。

ト三方を持ち、行かうとするを、お律、引き留め

りつ　コレ〳〵、わしが先へ差上げる。

ト行かうとするを、順喜觀留めて

喜觀　コリヤ、どう云うても、霧畑村が先ぢや。

りつ　イヤ、岡村が先ぢや。

喜觀　イヤ〳〵、おれぢや。

りつ　イヤ、こちぢや。

ト又せり合ふ。

大三　ヤイ〳〵、騒がしい。又せり合ふか。控へ居らう。

岩浪　コレ〳〵、二人とも、其やうにせり合はずと、一緒に差上げたがよいわいの。

喜觀　ハイ〳〵、左やう致しませう。……ソレ見たかな。おれが一緒に行かうと云ふものを。

りつ　なにを。めんめが先へ、行かうと云うてから。

ト兩人、互ひに口の内で、ぼやき〳〵、二重舞臺へ三方を直し

喜觀　ハア、。毎年の御嘉例、津の國能勢郡霧畑村の百姓。

りつ　同じく岡村の百姓。

兩人　草のかちんを差上げまする。

久秋　ホ、オ、例年の式、父上にも滿足に思し召さるであらう。

兩人　ハア。

ト爰にて顔見合ひ

久秋　ヤア、其方は。

喜觀　エ、。

久秋　大炊の館で逢うた、下郎の八田平。

九重　申し、久秋さま、最前からこれにて聞いて居りましたが、氣の輕い二人の衆、あの衆達は夫婦でござりますかいな。

久秋　イヤ〳〵、あのせり合うた樣子では、女夫とは見えぬわいの。

九重　それでも好い仲の戀いさかひと、睦まじ過ぎると痴話喧嘩とやら、矢ッ張り女夫でござりませうぞいな。

久秋　イ、ヤ、女夫ではあるまい。

九重　イヤ、女夫でござります。

久秋　イヤさうぢやない。

ト兩人せり合ふ。

喜觀　ハア、。こりやこちらの喧嘩が傳染つて、生きた雛様が、せり合うてござる。

りつ　ありや、こな様とわしが、女夫ではないかと仰しやるのぢやわいの。

喜觀　そりやおれも知つて居る。おれが自慢する筈ぢや。どうでも男は男だけ、智惠がぶんぢや。

りつ　そりや、どうしてえ。

喜觀　ハテ、こちらのひら／＼の附いてある女子様は、貴様とおれとを、女夫ぢやと云はしやる。又あちらの天神さまは、イヤ、さうでないとのせり合ひ。

りつ　ほんに、來る道すがらも、其方とわしを女夫ぢやと思うて、なんのかのと囃てたが、わしや煩うてならなんだわいな。

喜觀　コリヤ、云ふな。既に以て、お花半七の道行に「見れば、アレ／＼、乘合ひの船に、女夫か」と語つた「か」といふのが、淨瑠璃の性根ぢや。「か」の字が疑ひの心で、か。

りつ　か。

喜觀　か、か。

りつ　エ、否な。また嬶といふのか。わしや、こなさまの女房ではないぞや。

喜觀　どこに、女房ぢやと云うた。

りつ　それでも、嬶と云はしやんした。

喜觀　嬶と云うたは、今の女夫か、か、かのかぢやわいやい。

りつ　なんの事ぢや。

彌藤　ハ、、、、。默つて聞いて居れば、なか／＼阿房らしい、面白い奴等ぢやわい。

岩浪　ほんに、二人とも、氣さくな衆でござりまする。

久秋　目通りに置いたら、好い慰みぢやなう、九重。

九重　サイナア、廓の幇間さま方よりは、嫌味がなうて面白うござりますわいな。

喜觀　先づ、お氣に入つて、嬉しう、有り難う、忝なうござります。

ト慇懃に云ふ。皆々顏見て

皆々　ハ、、、、、、。

ト笑ふ。臆病口バタ／＼にて、釆女、お菊、お通姫、岩浪、千束、子供皆々、熊太郎、侍ひ出で

熊太　ソリヤ。
侍ひ　動くな。
　ト取卷く。順喜觀、お律、悧りして
兩人　こりや爰には居られぬ。
　ト兩人、橋がゝりへ逃げて入る。
彌藤　熊太郎どの、こりや何事でござるな。
岩浪　こりや何事でござります。あれに久秋公もお渡りなされまするが。
　ト采女こなしあつて
采女　ナニ、久秋公とは。
　ト見て
　誠に若君。
久秋　ヤア、瀨川采女。
九重　ほんに、采女さま。花橘さま。
きく　九重さま。殿樣。お久しうございます。
采女　先づ、久秋公には、御安泰の御樣子、恐悦至極に存じまする。
熊太　サア、采女、あらがはずと繩かゝれ。
久秋　待て、熊太郎。何ゆゑに采女に繩かけるぞ。
お通　采女に繩かきやるなら、自らが

岩浪　先づ、お待ちなされませ。あれに兄君もお渡りなれば、事の樣子をとくと糺した上。
千束　お姬樣、必らず短氣をお出しなされますな。
岩浪　熊太郎さま、久秋公のお詞、何ゆゑ采女さまには、繩をおかけなさるゝな。
熊太　瀨川采女は謀叛の餘類、殊に、お袖判の紛失詮議と云うて、行くへ知れぬところ、奧庭の空井戸より拔け道をしつらへ、穩で仕掛けて、お姬樣を囮にして、我君久吉公を討たんといふ手段。
采女　全く采女、左やうな儀はござらぬぞ。
岩浪　お姬樣は入水の覺悟。不思議に采女さまに、お逢ひなされて右の仕儀。
熊太　すりや又、なんで、奧庭の拔け道に采女が居つた。
采女　サア、その儀は。
熊太　久吉公を討つといふ企みか。
采女　イヤ、全く。
熊太　すりや、云ひ譯あるか。
采女　サ、それは。
熊采　サア〳〵。
久秋　コレ、采女、どういふ譯ぢや。ちやつと云ひ譯を。

九重　橘さまも、共々に。
きく　サア、その申し譯は
唐織　どうでござります。
采女　この身の潔白は、水晶輪なれど、この場にては、あからさまに、どうも、申し譯が
熊太　立たずば、ソリヤ。
侍ひ　ハッ。
ト　かゝる。ト岩波、唐織支へて突き廻す。熊太郎行くを、お通姫を囲うて千束留める。雛の形四人。
四人　我れ／＼が縄ぶたうか。
ト采女を取巻く。皆々よろしくある。ト向うより
呼び　御臺樣のお入り。
久秋　ナニ、母上。
采女　すりや御臺所の。
皆々　お入りとな。
采女　ホイ。
ト　こなしある。四人「うぬ」と、皆々もキッとなるを
岩浪　待つた。
久秋　皆の者、出迎へ。
皆々　ハアヽ。

ト太鼓、謠になり、向うより蘭生の方、衣裳、裲襠にて、侍ひ大勢連れ、出て來て、花道の角へ來る。
皆々　御臺樣、お入りあられましたか。
蘭生　皆の者、出迎ひ大儀。瀨川采女。
采女　ハッ。御臺樣には御勇健にて。
蘭生　姫が戀路より拔け道の樣子、其方の身の上、先達て岩浪よりの火急の知らせゆゑ、あらまし聞きましたわいの。
采女　面目ない御對面を申し上げます。
ト　こなしある。
皆々　イザ、あれへお通りあられませう。
ト蘭生の方、二重舞臺へ直る。
蘭生　久秋。九重。我が君樣の御機嫌よく、今日の吉例、其方の關白形、雛の次手に打晴れての祝言、取結ぶは母の役。
九重　何と申し上げませうやら、有り難うござります。
久秋　父上久吉公、異國征伐めでたう御凱陣の上、この桃山の御殿にお入り。母上にはまた聚樂の御所より、日每のお見舞ひ、御苦勞に存じまする。
お通　申し、母樣、今日の樣子、御存じの上なれば、どう

ぞ采女と
蘭生　添はしてくれと云やるのか。
お通　ハイ。
熊太　ヤア、ならぬ〱。采女は謀叛の餘類、詮議あれば縄ぶつて、白狀せねば火水の拷問。
蘭生　それには及ばぬ。
熊太　エ、。
蘭生　采女、勘當の身を以て、拔け道よりこの館へ來たは
采女　一つのお願ひ。
蘭生　我が君へ取次ぎして、くれいと云ふのか。
采女　ハツ、憚りながらその仔細は、
ト拔け道にて腰に差いた鶴嘴を持つて、思ひ入れあつて蘭生の側へ行き
我が君久吉公へお願ひとは、この通りでござります。
熊太　そりや、金山の下才の用ふる、鶴嘴といふ物を
蘭生　ムウ、すりやこの品は、下才が用ふる鶴嘴とやらいふ物な。
トじつと見て、こなしあり。
采女　その鶴嘴にて、我が君へ御臺所のお取次は、餘の人よりは鶴の一聲。御勘當の身を顧みず、女を連れて推參いたせしも、何卒拙者が願ひ、お聞き届け下さらば、生々世々の御厚恩と、如何ばかりか有り難う存じます。
蘭生　それ鶴は枯木に巣を組まず、諸鳥に勝れて心素直な鳥とやら。又、我が子を愛しみ深く、巣籠りと云うて、子を思ふ唱歌もあり。ムウ。何にもせよ、氣遣ひしやんな。采女、我が君久吉公へは、自らが、とくと取次しませうわいの。
采女　エ、、有り難うござります。
熊太　すりや詮議のある采女を
蘭生　縄掛けるに及ばぬ。自らが預かつた。番人は采女が連れのその女。
きく　エ、、そんならわたしを。
蘭生　傾城の花橘、よう知つて居る。
久秋　すりや花橘を
蘭生　采女が番人、姫は添へ人。
お通　エ、、有り難うござります。
蘭生　久秋、九重は、その姿にて我が君様へ、自らと一緒に
九重　お目見得いたしましても、大事ござりませぬかえ。
蘭生　なんの大事があらう。

唐織　私しらも、お取持ち致しませう。
熊太　なんの事ぢやい。折角人に骨折らして。
彌藤　御臺樣のお執成し。
熊太　殘念な、うぬ。
蘭生　姫。花橘。采女を伴へ。
通菊　アイ。
蘭生　サア、皆の者、奥へ。
皆々　先づ〳〵、お入りあられませう。
ト唄になり、蘭生、采女、お菊、九重、岩浪、お通姫、千束、皆々こなしあつて、奥へ入る。ト跡に熊太郎、彌藤二殘り、こなしあつて
彌藤　熊太郎、かねて云ひ合はしたのに、今の御臺の贔屓口、ありやマアなんの事ぢや。
蘭太　なんの事やら、あんまり阿房らしいのは拙者。あの姫にうツ惚れ、これまでちよこ〳〵口說けども、とんと得心せぬ。又せぬも道理か。瀨川采女に、あの通りうツ惚れ居るもの。
彌藤　采女と其方なら、見替へさうなものぢや。併しこの上は、何かの手番ひを、急に取計らつて、久吉も、御臺も
熊太　コレ。人が聞けば、互ひの身の上。
彌藤　然らば、萬事は密かに。
熊太　彌藤二どの。
彌藤　熊太郎。
熊太　何かはとくと。ござれ。
ト唄になり、兩人、奥へ入る。ト橋がゝりより順喜觀、そろ〳〵出で來て、こなしあつて
喜觀　今日この所へ、百姓となつて、お律どの諸ども、入込んだも、五右衞門どのゝ大望、成就させん爲の計略。
ト思案する。ト奥より蘭生の方出で、二重舞臺より順喜觀に目を附け、窺うて居る。順喜觀こなしあつて
久吉が居間は、慥かに時雨の間と聞く。ソレ。
ト奥へ駈け込まうとする。蘭生の方、向うへ立つ。ト太鼓、謠。
蘭生　そちや見馴れぬ者、殊に、下ざま。奥を目掛けて駈け込まうとするは、どれへ行くのぢや。
喜觀　ハ、、、、。イヤ、私しは霧畑村の百姓でござりますが、毎年御嘉例の草のかちん、この彌生に差上げますゆゑ、持つて參じました、ハイ、百姓でござります。

蘭生　その百姓が、何ゆゑ、我が君様の寝所へ行かうとした。

喜觀　サア、これは。ハイ、何でもござりませぬ。先刻に天神様のやうなお方が、勝手へ行て酒を飲んで來い、と仰しやつてでござりましたゆゑ、お臺所であんまり酒を下さりましたゆゑ、えらう醉ひまして、さうしてから、あんまり術なうござりまするゆゑ、どこやかや歩いて、醉を醒ましませうと思うて、ハイ、それでの事でござりますわい。ハイ、もう料簡なされて下さりませ。

蘭生　ムウ。そんなら、あんまり酒に醉うたに依つて、醉を醒まさうと思うて。

喜觀　ハイ、左やうでござります。

蘭生　ムウ。それで我が君様を害するのか。

喜觀　エヽ。

蘭生　茲な曲者めが。下ざまと身をやつし、我が君様の寝所へ忍ばんとするは、謀叛人の餘類。自らが繩かける。覺悟せい。

喜觀　それ知つたら、もう。

ト切りかける。これより少々立廻りあつて、蘭生の方を殺し、止めを刺し、死骸を柴垣のれきへ蹴込み、あたりを見て、袂より呼子を出し、吹く。ト橋がゝりより（蘭生二役早替り）、お律出で

りつ　順喜觀どの、云ひ合はした呼子。

喜觀　コレ、其方の面體恰好に、寸分違はぬ御臺蘭生の方、いま打ち殺してこの通り。

りつ　そんなら、いよ／＼わたしが。

ト順喜觀、此うち裲襠を脱がし、この折、何やら守もある、それも一緒にお律に渡し

喜觀　何かはとつくりと、申し含めん。ござれ。

ト兩人、奥へ入る。ト暮れ六ツの時計鳴る。簾一面に卷き下ろす。ト東の方の障子屋體にて

侍ひ　これは、早川高景どの、今宵の勤番、御苦勞に存じます。

高景　御近習方は寢ずの番、拙者は又この所に相詰め罷りあれば、氣遣ひな儀はござりませぬ。

侍ひ　それで我れ／＼も安堵仕ります。

高景　何れもは、お下がりあつて、御休息あられませう。

侍ひ　左やう仕りませう。

トこれをキッカケに、花道、鳥屋の内より、本鐵砲打ち、障子へパッと掛け焔硝あがる。高景倒れる。皆々

立戻り、始終蔭にて
ヤア、こりや高景どのを、飛び道具にて仕止めました。
何れも、曲者を御詮議なされ。
トばた／＼にて騒ぐ。

唐織　先づ／＼、お控へなされませう。諸士の御評定、高景が最期を深く包み、奥殿の式終るまで、必らず沙汰なきやう、キッと穏便に仕れとの儀。

侍ひ　すりや穏便に。畏まりました。

トこれより琴唄、合ひ方になる。ト花道より五右衛門、兜頭巾、忍びの姿にて、種ヶ島を持ち、そろ／＼出て来て、本舞臺にてこなしあつて

五右　高景めは仕止める。これからは、目指すは大領久吉。

ト種ヶ島を捨て、いろ／＼思ひ入れある。ト此うち簾残らず巻き上げる。ト二重舞臺に、大名四人の者、衣裳、上下にて、寝ず番の心にて座し、皆々居眠つてゐる。五右衛門、二重舞臺へそろ／＼と上がり、四人を一人々々蹴散らし、西の方障子屋體へ入る。
ちよん／＼にて、この道具東へ段々に引く。
ト西より廊下附きの緞張り障子屋體出て来る。此うち五右衛門、廊下へかゝる。段々引いて来る。よき程にて道具とまる。トこの緞張りの内に久吉、衣裳、壷折りにて、褥の上に脇息に凭れ、眠つて居る。この屋體の後、廣大寺時雨の間通りにて、風に柳の絵の襖よろしくある。五右衛門、廊下を傳ひ、内を窺ひ、ズッと入る、ト障子引きぬきにて開く。久吉矢ッ張り眠り居る。五右衛門こなしあつて、久吉を既に刺し殺さうとする。ト五右衛門の懐の内にて千鳥の香爐、音を出す。五右衛門こなし。

久吉　思ひかね、妹許ゆけば、小夜更けて、川風寒み千鳥鳴くなり。

五右　なんと。

ト大名四人、彌藤二、熊太郎、皆々十手にて、パラパラと出で

皆々　さてこそ曲者。

ト取卷く。

久吉　コリヤ、我れを討たんと忍び入りし、其方は。

五右　日本強盗の張本、石川五右衛門。

皆々　腕廻せ。

久吉　待て、近習の者。石川五右衛門ならば、尋ぬべき仔

細あり。繩掛くるには及ばぬ。

皆々　ぢやと申して、不敵の五右衛門。

久吉　ハテ、苦しうない。控へて居よ。

皆々　ハツ。

ト皆々チッとなる。五右衛門こなしあつて、久吉が側へ行つて、下に居て

五右　ハテ、運强き大領久吉。數年心掛けし汝が首、盜まん爲に今宵忍び入りしに、思ひ掛けなき千鳥の鳴く音にて、大領、其方が首を胴に附けて置くが殘念。

久吉　ホヽウ、いま音を出だせしは千鳥の香爐、汝が懷中に隱し持つ事、この時雨の間の、風に柳の筆勢が、汝忍び入ると、冬を誘うて、音を出だせし名器の香爐。なんと汝が所持いたさうがや。

五右　如何にも。先達て、我が手に入りし千鳥の香爐、今宵時雨の間に入つて、音を出だす事を存じたらば、蜀紅の錦の袋を掛け、聲を止めんに、これ五右衛門が一つの過失。

久吉　ハテ、盜賊に似合はぬ。名物は名錦を以て音を止めんとは、天晴れ驚ろき入つたる鍛錬ぢやよな。

五右　まだ／＼斯やうな事ぢやない。それは怖ろしい程智惠がある。

熊太　この盜賊を拷問し、同類手下を白狀いたさせい。

彌藤　召捕らば、四海も穩か。

大一　まだ外に荷擔人もあらん。

大二　その筋より謀叛の詮議。

大三　大切な囚人。

皆々　繩掛けぬも、あまり御油斷に存じます。

五右　ハテ、小雀どもが囀るワ。例へ身共に千筋の繩はおろか、不動の縛の索を掛けたりとも、引ッ切つて立退くは此方の勝手。また況んや、諸國の手下は我が家來、如何やうに拷問すればとて、白狀せうか。馬鹿な奴の。

久吉　さほど仁心ある五右衛門、なぜ盜賊を渡世に致し、無益の金銀を、なぜ貯へる。

五右　無益でない、まさかの時の軍用。

久吉　すりや、四海を奪ふ謀叛の企てか。

五右　謀叛でない、四海の爲。

久吉　四海の爲とは。

五右　上は理に暗うて、異國征伐ぢやの、大佛供養ぢやのと金銀を費し、民を苦しめ、又それを見習うて諸大名は、舌頭を以て主を欺むき、奸佞を專らにして出頭をなす。

その辨まへもなき大領久吉、四海を保つ事覺束ない。それゆゑ五右衛門、種々に心を盡し、惡を討つて善に飜へし、四海を治むる企て。

久吉　それ應仁の頃より、四海穏かならず、やゝともすれば諸國大名、蜂の如く群がり、合戰するを、一一切り隨へ、いま異國まで征伐し、凱陣したるこの久吉。理に暗いとは。

五右　政道が行き屆かぬ。

久吉　なんと。

五右　されば、證據はこの五右衛門、南禪寺の靈山國師となつて、久秋の迎へに廓へ赴き、筒井順慶が持參なせし、多くの金銀を奪ひ取り、剩さへ、その場にて順慶を手に掛け、千鳥の香爐を盜み、また町町小路に手下の者を分け、往來を騷がせ、或ひは世尊寺中納言が裝束を剝ぎ、某、中納言となつて大佛へ勅使に立ち、武士どもに多くの金銀を賄ひさせ、又ぞろや、その裝束を掛け、内裏へ忍び入らんと計りしなれど、大位を恐れ、空しく歸る。まだ／＼我が盜み騙りせしは、擧げて數へられず。かゝる事を夢にも知らず、今日まで詮議もせず、執權、家老、代官、日附けに至るまで、皆おのが強慾に眼眩みしも、久吉が政道屆かぬ明盲目武將。これでも四海を保つとは、心元ない。

彌藤　云はして置けば、我が君に向うて、無益の問答。

皆々　雜言過言。

熊太　さては、いつぞや廓にて、親人を手に掛けしは、五右衛門、うぬであつたよな。身共が爲には親の敵。

大一　我が君の居間へ、忍び入りたる不敵の盜賊、是非繩ぶつて

皆々　御成敗のあられませう。

久吉　苦しうない。控へて居い。

皆々　おやと申して。

久吉　ハテ、如何やらに惡口しても、ほんの下世話に云ふ、曳かれ者の小唄、すべて武士をさみするは、盜賊の最期の慣ひ。

五右　すりや、久吉、この五右衛門は、其方が眼にも盜賊と見ゆるか。

久吉　汝が今の白狀、盜賊ではあるまいか。

五右　さいふ汝も盜賊の張本。

久吉　なんと。

皆々　又々、慮外な。四海の主、大領久吉公を、盜賊の張

本とは。
久吉　この久吉を盜賊とは。
五右　その身は小田春永の恩を蒙むる、草履摑みより大名に經昇りながら、春忠の一子春隆を害し、春雄、春秀を幕下となし、春永の四海を盜み、その上、關白は春日大明神の御末、五攝家ならでは昇らざる位を、匹夫より出で、保つ。これ王位を侮り、位を盜み、六十餘州を盜み取つたる大領久吉。五右衞門よりは拔群まさりし盜賊。我れを成敗するならば、先づその身を成敗して刃向へ。但し返答あるか。ぶつて見よ。ハヽヽヽヽヽ。茲な猿冠者めが。
久吉　愚人に向うて論は無益。さりながら、我れを惡口せし器量の五右衞門、褒美くれう。
五右　褒美とは。
久吉　エイ。
ト手裏劍打つ。五右衞門、中にて握り
五右　ハテ、古いやつ。
ト小柄を見て
この小柄は。
久吉　後藤が細工の唐子角力。

五右　こりや身が所持の小柄。すりや、いつぞや。
久吉　南禪寺の山門にて、汝が俗姓、白斑の鷹の知らせまで。
五右　さては、その時の巡禮は
久吉　石川や、濱の眞砂は盡くるとも
五右　世に盜人の、種はと詠みし
久吉　石川五右衞門。
五右　同氣求めて、同じ稼業の汝と某
久吉　今夜は夜とゝも
五右　こりや話せるわい。
ト兩人こなしある。
熊太　忌はしき盜賊の五右衞門に
彌藤　大將のお詞。我れ〳〵が縛ぶつて。
ト又かゝる。五右衞門引き廻す。久吉押へて
久吉　ハテ、ざわ〳〵と控へて居れ。今宵の珍客、稀れのお入り。
五右　久吉、夜と共に話す。馳走を云ひ附けい。
皆々　その馳走には、我れ〳〵が。
トきつとなるを
久吉　ハテ、献立は、身が指圖する。

五右　四海の吸ひ物、六十餘州を取り肴。

久吉　後段には唐土、天竺まで

五右　五右衛門が服する。大領へ配膳は其方。節略があると身は立歸る。さすれば、天照大神が岩戸へ籠つたも同然、世は常闇ぢやぞよ。

ト皆々キッとなる。

奥殿へ行て相待たう。身は大切な四海の上客。わいらも隨分、もてなせ〳〵。

久吉　心を附けて案内せい。

ト唄になり、五右衛門こなしあつて立ち上がる。六人の者、前後を圍ふ。久吉「コリヤ」と額にて押へる。五右衛門、悠々と奥へ入る。六人も續いて入る。久吉一人殘り、こなしある。トお律、衣裳補襠にて奥より出で

りつ　申し、我が君樣、今宵も益々御機嫌よう、お渡り遊ばしましてござりまするか。

久吉　ホウ、御臺、蘭生の方。最前は久秋、九重がもてなし、さぞ其方も、心遣ひであつたであらうなう。

りつ　ハイ〳〵、大抵心遣ひぢやござりませなんだ。アノ、久秋が俄の大熱、鍼や藥よりは、マア、九重の守を戴かして、やう〳〵と、今すや〳〵と寐ましてござりまする。

久吉　久秋、九重、今日の祝儀を幸ひ、祝言の杯。それに病氣とは。

りつ　ほんに、左やうでござります。久秋と九重。オヽオオ、九重といふは傾城の事。それと久秋と祝言の杯をさしまして、今、新枕の床を取らして寐さしましたを、病氣と申しましたは、あなたのお案じなさるゝかと存じまして。ホヽヽヽヽ。わたしとした事が、傾城の名と守りの名と、同じ事ぢやに依つて、ツイ。

ト久吉の額を見る。久吉こなしあつて、お律も思ひ入れあつて

申し、我が君さま、アノあなたは、異國征伐なされて、この頃御凱陣、聚樂の御所にばかりお入りまして、まだ君と打解けてお物語りも致しませねば、どうやら。

ト寄り添うて、こなしある。此うち橋がゝりの屋體より、順喜觀、障子を明けて聞いて居る。

久吉　なんの打解けぬといふ事はない。昨夜も聚樂にて、其方と二人、酒宴を催ふし、打解けたではないか。

りつ　ほんに、左やうでござりますわいなア。

久吉　それに又、物語りもせぬとは。
りつ　エ、。
ト悃りして、ちやつと
ホ、、、、。昨夜お物語りしましたを、わざと今のやうに申しましたは、どうぞ今宵も又お伽がしたさ。
久吉　と云ふは。
りつ　サア、改めてしつぽりと。
ト懐劍を出して突かうとするを、久吉見る。ちやつと隱す。
久吉　ハテ、ナウ。
トこなし。
りつ　サア、もう夜も深更に及びましたれば、もう御寢所へお入りなされませぬかいな。
トいろ／＼こなしあつて
久吉　茲な、紛れ者め。
りつ　エ、、なんと。
久吉　昨日は二日、春永公の御命日、閉ち籠つて勤行讀誦。
それに、聚樂などへ參つてよいものか。
りつ　エ、。
久吉　面體似たるを幸ひに、入り込んだる、茲な似せ者めが。
ト順喜觀の方をキッと見る。障子ぴつしやり閉す。
りつ　そんなら。
トきつとなる。
久吉　イヤサ、二世とかけたる薗生、さう云やるは理り。
今宵はとつくりと打解けうか。
りつ　アイ、自からも、それをどうぞ。
久吉　謀叛の餘類、久吉を討たうといふのか。
りつ　すりや、私しを。
久吉　イヤ、瀨川采女を。
りつ　エ、。
久吉　ハテ、其方は身が御臺薗生、なんの謀叛の餘類であらうぞ。
りつ　ハイ、さうでござります。
トこなし。
久吉　その謀叛の身を顧みず、この館へ入り込んだ
ト思ひ入れある。
サア、瀨川采女が最前の願ひは。
りつ　采女が、なんぞお願ひに、出ましたかえ。
久吉　ハテ、其方より、最前、身に取次ぎをしたではない

か。

りつ　ほんに、さうでござりました。大方、勘當のお詫び。

久吉　如何にも。釆女に對面いたし、願ひの樣子聞き屆けてくれうか。

りつ　それより先へ。

ト懷劍にて突きかゝる。

久吉　蘭生、こりや、何する。

りつ　サ、これは。サア、瀬川釆女は謀叛の餘類、もし君に刃向はゞ、女ながらも自らが

久吉　出かす／＼。流石は四海の主、久吉が御臺ほどある。瀬川釆女が身の上よりも、まだ外に謀叛の餘類は。

ト懷劍を取つて、突き放す。

りつ　エヽ。

久吉　虎の斑は目に見えて、人の斑は目に見えぬ。我れは計ると思へども、天眼通を以て四海の隅々、久吉の眼にかゝらぬ處もない。

りつ　すりや、自らも。

久吉　蘭生の前、寢所へ入つて、待つて居るぞや。

ト唄になり、久吉、何氣なう入る。お律、後にこなしあつて

りつ　合點の行かぬ久吉の詞。わしを似せ者と知りながら、免し置く心底。ムウ。どうしたものであらうなア。

ト思案する。ト奥より久秋、着附け、長袴にて出で

久秋　母上樣、これにござりまするか。

りつ　ヤア、こなたは久秋。

久秋　今宵は深更に及びましたれば、聚樂へ御歸館は、御無用に遊ばされたがようござりませう。

りつ　成る程、其方の云やる通り、さうしませうわいなう。

ト お律、思ひ入れあつて

ナニ、久秋、母が其方に、ちつと願ひがあるが、なんと聞き屆ける心底か。

久秋　これは改まりました母上のお詞。現在、悴の久秋、お願ひの樣子を

りつ　聞き屆けてたもるか。

久秋　ハツ。

りつ　嬉しうござる。

ト抱きつく。久秋驚ろき、突きのけ

久秋　こりや母人、何となされます。

りつ　何をなさるとは、久秋、恥かしながら、自らは、其方に惚れたわいなう。

久秋　エヽ、アノ、現在の

りつ　親子合點ぢや。畜生になつても、こちや構やせぬ。

久秋　見ますれば、御酒興とも見えず。常に物堅い母上、殊に餘人でもある事か、現在我が子の

りつ　久秋、母が思ひを叶へてたも。

久秋　餘り呆れて、物も申されませぬわいの。

ト此うち奥より、九重出掛け、様子を聞いて居て、この時、ツカ／＼と出で、久秋の手を取り

九重　申し、殿様、爰には置かれぬ。ちやつとござんせ。

久秋　ヤア、九重。そんなら今の様子を。

九重　追ツつけ四海の主の久秋さま、母御は格別、畜生の惡名は取らさせませぬ。ちやつとござんせ。

ト引き立て、行かうとするを、お律留めて

りつ　待つた、九重。久秋が返事聞かねば、母が離さぬ。

九重　ほんに、あらう事か、あるまい事か。

久秋　母上の戀路とは。

りつ　惚れたが因果、夫の久吉公のお聞きに達しなば、死ぬる覺悟。所詮、存らへぬ母が願ひ聞き屆けて、どうぞ色よい返事を。

九重　なりませぬ。久秋さまは親甲斐に口說かしやんしても、わたしが居れば、そんな事は滅多にさせませぬわいな。

りつ　慮外な、九重。其方は自らが嫁、姑去りに久秋と緣を切らしても、苦しうない。

九重　イヽエ、我が君樣のお許し受けた、久秋さまとの夫婦。祝言も濟んだ上は、滅多にお前の自由にはなりませぬわいな。

りつ　自由にするが、親の高下。

九重　イヤ、それでは私しが。

りつ　ハテ、大事ない。

ト手を取る。

九重　イヽヤ、なりませぬ。

ト振り離す。いろ／＼よろしくある。この前より岩浪出掛け、様子を見て、出で、眞中へ入り、お律を引き分ける。

りつ　ヤア、其方は何者。

九重　高景が妻の岩浪。

りつ　ほんに、それ、岩浪。

九重　よい所へ、よう來て下さりました。申し、御臺樣が久秋さまに。

岩浪　サア、樣子は見屆けました。御兩所とも氣遣ひはござりませぬ。ちやつと奥へ。

久秋　そんなら岩浪、母上さまを。

九重　抛つて置いて、ちやつとござんせいな。

ト手を取つて行かうとするを

りつ　イヽヤ、久秋はやる事ならぬ。

ト留めるを、岩浪、振り離し

岩浪　爰構はずと、早う。

久秋　サア、九重、おちや。

ト奥へツイと入る。お律「それは」と行くを、岩浪引きとめ

岩浪　申し、御臺樣。

りつ　岩浪、諫言するのか。聞き入れぬぞ。

岩浪　ほんに、どうした天魔が、あなたには入れ替りましたぞ。

りつ　我が子に惚れるは、覺悟の前。

岩浪　四海の主、久吉公の御臺樣ともあらう御身が、現在、我が子の久秋さまに戀路とは、なんと申し上げうやら。國を滅ぼし、家を亂す、唐土の妲妃とやらには、まさつた御狼藉。君の思惑、世の人口を思し召されて、申し、御臺樣。

りつ　聞かぬと云ふに。慮外な奴の。

ト振り離し、行くを留めて

岩浪　すりや、如何やうに申しても。

りつ　其方には構はぬ。久秋に。

ト振り切つて、奥へツイと走り入る。

岩浪　エヽ、是非もない、御臺さま。この上は四海の御爲。さうぢや。

ト唄、ツイと奥へ入る。ト奥より采女、白無垢、淺黄上下、お菊、お通姫も、同じく白無垢。彌藤二、常の形にて出で、彌藤二は上へ直る。三人は下へ直り

彌藤　瀨川采女、まつたお菊、姫君にも、お願ひの通りの御最期。我が君、聞き屆けあつて、黒崎彌藤二、檢使の役目に立つてござるぞ。

采女　彌藤二どの、御苦勞千萬。最前、鶴嘴を以て、お願ひ申せしは、唐土の惠遠禪師は、狩人なりしかば、親子の鶴を擊つて世を捨て、出家を遂ぐる。それは悟りの道。この采女が、親子兄弟は、君に敵對ふ謀叛の企て。親、

兄弟の緣を斷ち切る印。殊に、紛失のお袖判は取返さず、不思議に手に入つた大功丸、それを功に差上げ、某がお願ひ申したこの切腹。

きく　どのやうに、わたしがお留め申しても、武士道が立てられぬと、聞き入れて下さんせぬお前、わたしも一緒と、覺悟を極めましたわいな。

お通　殊に、果敢ないは自ら。折角焦れ慕うた釆女は、眞實の兄樣。すりや自らは、謀叛人宋蘇卿とやらの眞實の娘ぢやと、奥にて詳しう聞いたる物語り。戀の叶はぬのみか、同胞といひ、謀叛の由緣。それで、共にお願ひ申して、最期を一緒に。

彌藤　三人ともに好い覺悟。なんのかのと隙どらずと、早く最期を遂げさつしやれ。

お通　この世に思ひ置く事は

きく　ござりませぬわいな。

釆女　時移れば、檢使の彌藤二どのへ無禮。君への不忠。サア、二人ともに、覺悟はよいか。

お通　覺悟は、疾から致して居りまする。

釆女　そんなら、一緒に。

ト三人身拵らへする。ト奥より

熊太　待つた、釆女。切腹は久秋公と一緒に。

ト出る。

彌藤　熊太郎どの、合點の行かぬ。久秋公と釆女、切腹一緒とはな。

熊太　久秋公も不義の科、切腹とあるゆゑ、拙者檢使を仕る。

釆女　すりや、若君には。

熊太　御臺所腹生の方と不義の科。

つう　エヽ、そんなら親と子。

熊太　云ひ交したは畜生。その科に依つて切腹。九重も一緒と願ふゆゑ、身が情で許し置いた。ヤアヤア、久秋公。九重も共に、これへ。

久秋　用意は疾くより致してある。

ト奥より久秋、白無垢、淺黃上下、九重、白無垢にて出る。

釆女　久秋公、すりや君にも不義の科にて。

久秋　釆女、母人の戀路、戲れと思ひの外。

九重　御眞實に久秋さまへの戀路、それで存らへ居ては、我が君樣へ云ひ譯立たぬとの、御切腹でござりまするわいなア。

彌藤　さうなうては叶はぬところ。畜生の久秋どの、三人の相伴に切腹して、云ひ譯を立てるとは、お出かしなされた。早く切腹、見たい〳〵。

熊太　御臺、若君、不義あつては、久吉公の恥辱。そこを存じて某が、切腹をお勸め申したは、事穩便に濟ます料簡。

久秋　四海の跡目に立つ身なれば、世上への見せしめ、父上への云ひ譯。

九重　久秋さまお果てなされば、浮世に樂しみのないわたし、未來のお供を致しますわいなア。

お通　そんなら、わたしらと一緒に。

久秋　釆女。主從は三世の奇緣。未來も一緒に。

釆女　某もお供仕ります。

彌藤　五人共に、早く死んでしまひ召され。

五人　身を捨てゝこそ、浮む我れ〳〵。

熊太　時刻延ばさず、最期を早う。

五人　南無阿彌陀佛。

ト五人死なうとする。ト奥より

久吉　五人の者、待て。

ト出る。

皆々　ヤア、我が君樣。

久吉　釆女を始め、久秋、三人の女も、存らへ居られぬ浮世の義理、最期を望むは理りなれど、久吉が思案あれば、今暫らく事を延ばしてくれろ。

釆女　エヽ、アノ、謀叛人に緣ある、この釆女。

久秋　不義の科ある、この久秋。

つう　わたしらの最期まで。

久吉　科の重さは輕くする久吉が計らひ。其方達の願ひ、聞き屆けての切腹なれど、今は叶はぬ。

彌藤　すりや、助ける御所存かな。

久吉　イヽヤ、助けぬ。

熊太　それに又、最期を待てとは。

久吉　すべて成敗とは、五刑の法ありといへど、掟を亂し、人を損はぬを元とするのぢや。と云うても、罪極まりたる五人の者、助け置かねど、暫しの猶豫。

熊太　もしまた其うちに、五人の者が逐電いたさば。

久吉　イヽヤ逃がさぬ。五人の者は愚か、謀叛のやから、何千人あつて身を忍ぶとも、いはゞ生洲に躍る魚同然。いつでも成敗は久吉が勝手。

彌藤　して、五人の者どもは、此まゝ猶豫あられますかな。

久吉　侍ひども、申し附けし物、これへ。
侍ひ　ハツ。
　ト侍ひ二人、手錠を持つて出る。
久吉　云ひ附けた通り、五人の者にその手錠を打て。
侍ひ　ハツ。
　トお菊、采女、お通、久秋、九重とを繋ぎ合せ、平がれを打ち
皆々　これは。
久吉　お菊、采女、お通、久秋、九重と、皆しがらんだ繋ぎ手錠の猶豫。久吉が心あつての儀なれど、一人でもも し過ちあつては、我が心が無足になる。それゆゑ、云ひ附け置いたるあの縛しめ。逃ぐるも死ぬるも、五人一緒。夫婦、主從、妹背と奇縁。
熊太　なんの事ぢや。悉皆澤邊に友呼ぶ白鷺同然。
彌藤　その鷺を烏と爭はさぬぞ。
きく　我が君様のお情か。
久秋　但しは、矢ツ張りこの身の罪を。
久吉　善惡二つは、黑白の、色を分けたる五人が最期。明け六ツまでは猶豫の手がね。死ぬるばかりを忠義とも、云ひ譯とも、云はぬぞよ。
五人　すりや、我れ〳〵が身の上の
久吉　云ひ譯立てる思案をせい。
　ト唄になり、久吉こなしあつて、奧へ入る。熊太郎、彌藤二も奧へ入る。後に五人こなしある。トこれより彈き流し、合ひ方になる。
采女　我が君久吉公の今の御意、一旦切腹と、願ひの叶うたこの采女を。
きく　殺しては、わたしが添はれぬと思うて
つう　それでわざと、この手がねは
九重　事を延ばして、久秋さまも
久秋　助けるといふ親人のお情か。采女、其方はどう思やる。
采女　サア、四海を計る我が君さまの御賢慮。久秋さまの御身の上、
つう　わたしらが身の上。
采女　ハテ、どうであらうぞ。
　ト手を組み、思案せうとする。皆々引ツ張られ
つう　ア、コレ、申し、痛いわいな〳〵。
　トよろしくある。
采女　イヤ〳〵、我が君様のお情でも、一旦覺悟極めたこの

釆女。謀叛の餘類、君への不忠、存らへ居ては、兄者人へ敵對はねばならず。

はヽ　母上の難儀が誠なら、この久秋もどうも。

きく　そんなら、お二人ともに、矢ツ張り死ぬるお心かえ。

ト此うち釆女、久秋、思案して

釆女　さうぢや。

ト奥へ駈け込まうとする。皆々一所に引ツ張られ

九重　こりや、どうさしやんすぞいな〳〵。

ト釆女こなしあつて「エヽ」と元の處へ戻る。皆々も一緒に戻る。

釆女　エヽ、邪魔な手がねではあるぞ。

ト下に居る。皆々も下に居る。

きく　ほんに、こりや又、辛氣な

つう　思ふやうにならぬ

九重　手かねぢやわいな。

久秋　とんと、一人前の思案も、出來る事ぢやない。

釆女　何にもせよ、

ト立つ。皆々も立つ。

久秋　明け六ツまでの猶豫とある。それまでの云ひ譯は。

ト又下に居る。ト皆々も下に居る。

きく　こりやマア、どうするのぢやいなア。

釆女　どうというて、立つにも、居るにも、斯う五人がつるんでは、とんと祇園坊のしつけ逢うたやうなもので、離れいで、どうもならぬ。

久秋　釆女、こりやマアどうしたらよからうぞ。

ト此うち橋がゝりより順喜觀出掛け

順喜　その思案貸してやらう。

ト前へ出る。皆々見て

皆々　ヤア、其方は。

釆女　大佛で出會ひし順喜觀。

きく　この館へ入り込ましやんしたは

喜觀　望みを叶へる爲。

ト皆々の手がねをはづす。

皆々　これは。

喜觀　釆女どのはお頭の由縁、お菊どのを連れて、入り込んで居られる。お頭に願うて、お袖判を貰うたがよい。

釆女　ぢやというて。

喜觀　ハテ、大義をなす者、小事には拘らず。理を盡しでいうたら、情あるお頭、お袖判を戻してくれまいもので

もない。
釆女　誠に。して、兄者人は。
喜観　奥の間に。
釆女　ムウ。
　トこなしある。
お通　さうぢや。
　トお通、順喜観の脇差にて自害する。
きく　ヤア、お姫様。
お通　釆女さまとは同胞、所詮、存らへぬ最期。
喜観　オヽ、出かした。誠はお頭の妹。斯うありさうなもの。
釆女　年月焦れた釆女を、兄と知つて不便の最期。
喜観　コレ、隙取つては、久吉に云ひ譯があるまい。早う。
釆女　ムウ、さうぢや。お菊、おぢや。
　トお菊を連れ、奥へツイと入る。
九重　ほんに、思ひ掛けない、お姫様の最期。
久秋　誠の妹ぢやと思うたお通は
喜観　謀叛人の妹。その由緣で、おれが苦痛を助けてやらう。
　ト脇差を突き拔き、お通を殺す。
久秋　さては、最前、百姓ぢやというて、入り込んだ其方も
喜観　謀叛人の荷擔人ぢや。久吉が血筋の久秋。其方には斯う。
　ト一かせ切る。
九重　ヤア、久秋さまを。
　ト驚ろき、寄るを、引き寄せ、突ツ込み、えぐりてやる。
喜観　九重、われも久秋と一緒に、未來へやつて夫婦にしてやる。
　ト柴垣のねきへ連れて行て切り込む。久秋、いろ／＼苦しみ
久秋　エヽ、コレ、切腹は覺悟なれど、謀叛の餘類の手にかゝり、口惜しいわいやい。
喜観　なんの口惜しい事。久吉を討つ血祭り。今日から關白になつた久秋、順喜観が手に掛けるを、有り難いと思ひ、くたばれ。
　トいろ／＼よろしくあつて、トゞ順喜観、久秋が首をポンと切る。此うち五右衛門出掛け、これを見て居る。
　ト奥バタ／＼にて彌藤二、大明の太子を小脇に搔い込

み、出で

彌藤　大明の捕虜、順南太子、やす〳〵奪ひ取つた上は、唐土へ返し、加勢を乞ひ、久吉を滅ぼし、日本はこの黒崎が治める。さうぢや。

ト行かうとする。順喜觀、彌藤二を突き倒し、大明の太子を引ッたくる。

ヤア、うぬは最前の百姓。

喜觀　黒崎、おのれも、身共が手に掛ける。觀念ひろがう。

彌藤　なんでも曲者。うぬ。

ト順喜觀に切つてかゝるを、立廻りあつて、彌藤二をポンと切り殺し、刀を納めて、大明の太子を連れて出で

喜觀　ちやう〳〵にもたいそんろけいしゆ〳〵。

太子　きまんるいつうはろきてい〳〵。

喜觀　かうはいらんもんし、ゑいじやくふうせいしこれいこれい。

太子　ほうはつとこかしうむのたきよ〳〵に。

喜觀　氣遣ひあるな。同國の臣下、順喜觀、太子の身の上は、よろしく計らひまする。

五右　順喜觀。

喜觀　ヤア、五右衛門どの。捕はれの身となられしと承はつて、

五右　大事ない。事仕損じたが、すべて此方の手段。其方は太子を奪ひ取つたるこそ幸ひ、コリヤ。

ト千鳥の香爐を出し

この千鳥の香爐は日本の名器。太子もろとも唐土へ渡し、スワと云はゞ、加勢を乞へ。

喜觀　心得ました。

ト香爐を受取り

然らば拙者は、書翰を以て。

五右　筑前箱崎には、我が手下。とくと云ひ附け、合點か。

喜觀　して、こなた樣の身の上は。

五右　後氣遣はずと、早く〳〵。

喜觀　ハッ。

ト香爐を持ち、太子を連れ、向うへ走り入る。ト五右衛門一人殘り、こなしあつて、植込みの竹を切つて來て、ひつそぎにして燭臺のともし火にて焼き、しごき見て

五右　竹地光秀公を、竹鎗を以て害せし久吉。その鬱憤は
この竹鎗にて、今宵中に、うぬ。
ト竹を掻い込み、キツとなる。とバタ〳〵にて、お律
出で
りつ　申し、こちの人、面體似たるを幸ひに、久吉に近寄
つて
五右　其方が心底残らず見屆けた。こりや、連判。
ト連判を出し
この連判を以て、鳥羽、竹田に伏せ置きたる手下の面々
に、合圖を知らさば、この所へ駈け附けよと、申し渡
せ。
りつ　そんなら、わたしは、一時も早う、手下の人數を。
五右　この所へ、早う。
りつ　合點でござります。
ト連判を持つて、橋がゝりへ走り入る。トこれより遠
攻めになる。五右衛門こなしある。ト奥よりお菊出で
きく　申し、五右衛門さま、釆女さまの願ひ、わたしの頼
み、どうぞ、お前が持つて居やしやんす
五右　お菊、身が所持するお袖判を、返してくれいと云ふ
のか。

きく　アイ、どうぞ戻して下さんすると、釆女さまの云ひ
譯も立ち、さうすると、わたしも女夫になつて、ようご
ざりますわいなア。
五右　あの鉦太皷は久吉が計らひ、我れを召し捕らんと人
數を寄せるか。
きく　ちやつと戻して下さんせいな〳〵。
五右　日本國が押寄せるとも、何程の事があらう。
ト云ひ〳〵、着込みの袖を返し、紐をする。お菊、始
終附いて居て
きく　どうぞお袖判を、戻して下さんせいな。
五右　久吉が首取り、四海の主になつた上、同胞のよしみ、
戻してくれう。
トまた臑當の紐する。
きく　そりや、いつの事やら知れもせぬもの。
ト同じやうに臑當の紐するを、五右衛門「エ、邪魔な」
と突きのける。
サア、お前の爲にも、現在の弟御ぢやござりませぬかい
な。それぢやに依つて
五右　エヽ、耳かしましい。この上は、久吉が首。さうぢ
や。

ト　お菊を引きのけ、竹鑓を掻い込み、奥へツイと走り入る。お菊もこなしあつて、続いて入る。これより遠攻め早める。ト熊太郎を、唐織、岩浪、追つて出で

岩浪　謀叛人の順慶が倅、熊太郎。

唐織　我が君様の仰せを受け、我れ〳〵搦め捕る。

熊太　何を、ちよこざいな。親の謀叛を受け継いで、敵なからも五右衛門と合體して、久吉の首取る。うぬらも観念。

岩浪　なにを。

ト三人いろ〳〵面白きタテあつて、両人、熊太郎を橋がゝりへ追つて入る。返し。

右の亭屋臺、廊下を、今度は西へ引込む。

ト後ろ打抜きの桃山。五右衛門を中通り四人闘うて、見得よろしくあつて、少々立廻りあつて、中通りを追ひ込む。ト橋がゝりより久秋、高景、陣羽織にて、九重も一緒に出る。

高景　石川五右衛門、動くな。

五右　ヤア、そちや高景。久秋。最前、最期を遂げしが、うぬも、順喜観に。

高景　ホヽ、種が島を以て、高景といふ名を汝に討たしたも舅が頼み。

久秋　順喜観に殺されし久秋は、松田勇助といふ高景が家來。

五右　さては。

高景　まだ驚く事あり。加藤虎之助、來やれ。

ト花道より順喜観、半切り、籠手、臑當にて、凛々しき形にて、鎗を持つて出で

虎之　五右衛門、待て。

五右　ヤア、うぬは順喜観。

虎之　ホヽ、大明の毛唐人順喜観を手にかけ、その順喜観になつて汝に附き歩き、種々の手段をなしたも、紛失の千鳥の香爐を、無事に取返さん爲。我れは誠は久吉公の御内、唐土にては鬼上官とおぢ恐れた、加藤虎之助政清ぢやわやい。

五右　して、最前の太子は。

虎之　久吉公の弟の若君、捨丸君。

蘭生　自らが倅ぢやわいなう。

ト蘭生、捨丸を抱いて出る。唐織も附いて出る。

五右　そちや女房の。

菌生　お律とは双子、海田新吾へ養子に行た妹、最前我れに代つて命を捨てしも、何卒其方を助けてくれいとの願ひ。お律になつて連判を取り、手下の者は殘らず討ち滅ぼした。
高景　この上は、最早遁がれぬ、石川五右衛門。
虎之　本名は竹地左馬五郎。
皆々　尋常に縄かゝれ。
ト皆々取巻く。
久吉　皆の者、待て。
ト久吉出る。
五右　ヤア、久吉、うぬを。
トきつとなるを皆々圍ふ。
久吉　汝、盗賊なれども、義を専らに、主親の仇を討たんと切なる志しを感じ、久吉が情にて、一旦この場は助けてくれる。
虎之　器量ある五右衛門、心を飜へし、我が君の幕下に附け。
五右　ヤア、幕下に附けとは、存外な一言。久吉情立てして某を助け歸さば、龍を淵に躍らせ、虎を千里の野に放つも同然。却つて四海の害になるぞよ。

采女　ホヽ、その代りにはこの采女。
トお菊を連れて出で
兄と君への孝と忠を立てる切腹。
ト死なうとするを、お菊留めて
きく　そんなら、どうでも、お前は
采女　この場の納まり、采女が命を。
五右　弟、死ぬるに及ばぬ。
采女　ぢやと云うても。
五右　返してくれる、此お袖判。
ト抛り出す。
采女　すりや、これを。
ト取上げる。
五右　兄弟のよしみ。
采女　エヽ、忝ない。
きく　そんなら、お前の身の上は。
菌生　瀬川を改め、此村大炊が血筋なれば、三浦之助と名乘り、この捨丸が家臣
久吉　五右衛門、一旦の久吉が詞、早くこの場を遁げ歸れ。
五右　久吉が本丸へ切り入つたからは、本望達したも同然。

この上は大明の勢を集め、花々しく軍せん。

五右　勝負は後日。

久吉　先づ、それまでは。

皆々　さらば。

ト打出し。

幕

金門五山桐（終り）

高麗大和皇白浪

（こま やまと くもゐのしらなみ）



尾上榮三郎の小對の源五郎

高麗大和皇白浪

第一番目三建目

聚樂第の場
七條河原の場
淀川堤の場

役名――鈴木田隼人。岩木兵部。同一子、當馬之丞。早野彌藤次。五右衛門一子、五郎市。奥女中、あやめ。同、皐月。同、霧島。此村鳴戸之助。岩木若黨、林平。石川五右衛門。

本舞臺、三間の間、正面、二重舞臺、向う金襖附き。幕の内より上の方に鳴門之助、着附け、袴の形。あやめ、皐月、霧島、着流し、奥女中の形にて、めいめい黒塗り蒔繪の文箱を持つてゐる。序の舞にて幕明く。

あや　玉鉾の、道のしるべの庚申、今宵御殿の庚申待にて、お夜詰めのお慰み。

皐月　艶書合せの御遊にて、御殿は元より、諸侯方の姫君、奥方。

霧島　貴賤に限らず、みな差上ぐる艶書の文章。

あや　恐れ多い事ながら、私し事は、主人道芝が艶書の使ひ。

鳴戸　これは〳〵、女中方にも、御苦勞千萬に存ずる。我が君久次公の思し召し附きにて、庚申待で、艶書合せの御遊。各々の心々に認めし文章、さぞ面白い事でござらう。この鳴戸之助、取次ぎ仕るも、冥加に叶ふと思ふは、内見がこの身の仕合せ。

あや　憚りながら、皆それ〳〵に、心をお籠めなされし艶書合せ。まだ久次公へ差上げぬうち、あなたが御内見なさる事は

鳴戸　罷りならぬか。

あや　先づお使ひに立ちました

皐月　私しどもが

三人　越度となりますゆゑ。

鳴戸　成る程、それ程相成らぬ事なれば、無理にとも申すまい。シタガ、常々御心荒々しき久次公、もしやお心に

違ふ手爾波もあらば、後で後悔と存ずるゆゑ。

ト皆々、思ひ入れあつて

三人　左樣ならば。

トめい／＼、文箱を出す。鳴戸之助、取つて、一々中より書き物を出す、讀む事あつて

鳴戸　成る程、面白い。此やうにも文章が書かれるか。オヽ、感心々々。それよりは、この文箱、中にも高臺寺好みにて菊桐の蒔繪。

あや　其お文箱は、利久存生のうち、久次公より拜領と、承りましてござります。

鳴戸　成る程、こりや他家に用ひぬ貴財。この上は拙者、直さま久次公へ、この文章を差上げ、御添削出來の上、この文箱へ入れ置く間、お女中方、箱はこれへ差置かるるがよからう。

三人　畏まりました。

鳴戸　コレ／＼、斯樣に心覺えを致して。

ト二重舞臺にて文箱を並べ

御添削の上、この文箱へ入れ置く間、後刻受取り、歸られたがよい。

あや　左樣なれば

三人　鳴戸之助さま。

鳴戸　後刻。

ト唄になり、鳴戸之助、めい／＼の書き物を持つて、下座へ入る。

あや　なんと、今のをお聞きなされましたか。あの文箱のまゝ、持つて行つてもよい事を、讀めもせぬに讀みこなした顏で、笑止な事でござんしたわいなア。

皐月　左樣でござります。何が書いてあつても、あのむくつけな鳴戸之助、どうして解るものでござりませう。あれがほんの、論語讀みの論語知らずでござりますわいな。

露島　それでも、何か、いつそ感心ぢやのなんのと、褒めてゐましたぞえ。

皐月　それが、利いた風とやらでござりませうわいな。

あや　ほんに、斯うして居りませうより、宇治の方さまもお入りとあれば、お目見得いたさうではござりませぬか。

皐月　サア、私しも左樣は存じましたが、又あの意地惡が、これに居りませずば、なんのかのと申しませうぞえ。

あや　ハテ、まだ御添削までは、間もござりませうわい

な。

霧島　成る程、左様なれば、お供いたしませうか。

皐月　どうぞ、わたしも御一緒に。

あや　サア、お出でなされませ。

ト合ひ方になり、あやめ先に、皐月、霧島附いて、下座へ入る。バタ〳〵になり、奥より鳴戸之助、一巻の箱を持つて、窺ひ〳〵出て来り

鳴戸　この程より、寳蔵に祕めあるところの、この一巻は、先達て盗賊の張本、石川五右衛門が隠れ家にて、見出したる三韓地理八道の一巻、首尾よく奪ひ取つた上は、朝鮮に滞陣ある、小西どのへ渡せば、この身の出世。うまい〳〵……併し、今にも紛失となれば、詮議は必定。幸ひとこの艶書を、巻きあげて置いたが、どこへ飛ッちりがかゝらうも知れぬ。又この一巻は、この文箱へちつとのうち忍ばせて置き、折を見合せ、一味の者に持たせて、早飛脚にて小西どのへ。

トあやめの持つて来た文箱へ一巻を入れ、また一巻の箱へ、右の書き物を入れ

斯う入れかへて置けば、詮議になつても、気遣ひはない。この上は、この一巻の箱を、元の寳蔵へ

トこなしあつて、奥へ入る。下座より、あやめ、出て来て

あや　最前あの文箱を、これへ殘しては置いたれど、大切な文箱といひ、もしも紛失しては、申し譯も立たずと思へば

ト文箱を取上げ

ほんに、心知れざる鳴戸之助。まづ文箱にちうちうは無い。此まゝ持つて……それ〳〵。

ト文箱を持つて行かうとする。この時、奥より鳴戸之助、出て来り、惘りして

鳴戸　これさ、女中、その文箱を、どうするのだ。

あや　ホヽ、この文箱は、私しの持つて参りました物ゆゑ、持つて居りますのでござりまする。

鳴戸　これサ〳〵、まだ御添削の済まぬうちと申し、その文箱が、どうして渡されるものだ。

あや　御添削の事は明日と、御内意を承りましたゆゑ、持つて歸りますのでござりまする。そこお放しなされませ。

鳴戸　これサ、とんだ事を云つたものだ。どうもこの文箱は渡されない。

あや　ハテ、わたしが持つて參りましたを、持つて歸るのでござります。エ、、阿房らしい。

ト鳴戸之助を突きのけ、あやめ、文箱を持つて行かうとする。鳴戸之助、あやめをやるまいとする。立廻り。此うち皐月、出て來り、また鳴戸之助を留める事よろしくあつて、トゞ、あやめ、文箱を持つて向うへ入る。鳴戸之助、追ひかけ行かうとする。皐月、取りつくを、當てゝ、鳴戸之助、向うへ入る。これにて、チョンチョンと道具廻る。

本舞臺、三間の間、うしろ一面の竹矢來を結び廻し、舞臺見附け、よき所に、大釜を直し、これに紺看板の中間二人、凄まじく火を焚いてゐる。幕の内より上の方に彌藤次、麻上下、大小の形にて、床几にかかり居る。この側に五郎市、やつしの形にて、繩にかゝり、泣いてゐる。これを侍ひ、繩を持つて引据ゑゐる。下の方に捕り手大勢、十手を持ち、その外、中間、抜き身の槍を持つて、嚴重に扣へゐる。時の太鼓にて道具とまる。

中間　先刻より御覽の如く、最早油も沸え立ちましてござります。

彌藤　成る程、最早刻限。今さら申したとて、詮なき事ながら、コリヤ、五郎市、よく承れ。先達て聚樂の御所に忍び入り、大切なる千鳥の香爐を奪ひ、立退きし曲者こそ、五畿内は申すに及ばず西國四國中仙道に、徘徊したる强盗のあぶれ者、石川五右衞門に相違なし。その證據こそ千鳥の香爐、紛失のその夜、聚樂の御所へ、蜀紅の錦にて仕立てし、唐装束の片袖、その場に落ちありしより、正に三韓の末葉たる、强盗石川五右衞門の所持に疑ひなし。さるに依つて、いよ／＼香爐の盗賊こそ、五右衞門と相極まり、既に河内の國、石川村の隱れ家へ、召捕りに遣はしたるところ、はや五右衞門夫婦は、風をくらひ、逃げ失せしその跡に、如何なる事にや一子五郎市、其方を殘し置きつるが、其方とても、かねて親五右衞門、申しつけ置いたる事にや、徒黨の連判と覺しき一卷、既に火中なさんと致せしところ、早速捕り手の者、その一卷と、其方を召捕り、この程より獄屋の住居。まつた、その一卷こそ、三韓地理八道、金羅道の間道より、大明案内の一書なり。彼れこれ以て、いよ／＼五右衞門の仕業と一決なし、右の一卷は、聚樂の御所へ差上げた

り。この上は、科なき其方なれども、盜賊の一子たるゆゑ、例し少なき釜煮の刑罰に仰せつけらるゝ。如何なる強盜の五右衛門たりとも、我が子の嚴しき刑罰の、樣子を聞かば、もしや恩愛に引かれ、便り來る事もやあらんと、それゆゑにこそ斯くの成敗。申し置く事あらば、聞き屆けくれん。不便ながらも、用意いたせ。

五市　有り難うござりまする。あの父樣が恐ろしい、盜みをさつしやるやら知られねど、常々から大事にかけてござつた卷き物、知らぬ人に渡しても惡からうと思うて、燒いてしまはうとしましたより外に何にも知りませぬ。今爰で、釜煎りとやらになつて死にまするは、せう事もなけれど、ならう事なら、どうぞ父樣母樣に、ま一度逢うて死にたうござりまする。

ト泣き落す。彌藤次、こなしあつて

彌藤　オヽ、尤も……なれども、叶はぬ事ぢや。時刻移れば、用意いたせ。

皆々　ハヽア。

ト時の太鼓になり、中間三人ほど、襷をかけ、大釜の前へ段を直し、釜の蓋を取つてのけ

中間　然らば直さま刑罰に。

彌藤　決していたはる事は相成らぬぞ。

中間　ハッ……五郎市

皆々　立ちませい。

ト五郎市を引立てにかゝる。向うバタ／＼になり、林平、旅の形、胸當て、手甲、脚絆、草鞋の形にて

林平　御成敗、待つた／＼。暫らく／＼。

ト云ひながら走り出て來て

それに御座なさるゝは、早野彌藤次さまでござりまするか。

ト彌藤次、見て

彌藤　其方は、岩木兵部どのゝ家來。何ゆゑあつて刑罰を止めしぞ。

林平　ハツ、某主人岩木兵部、この程より尾張の國、熱田明神、武將家より御再建につき、その普請奉行の役儀、首尾よく相濟み、今日只今歸りがけ、大津札の辻にて承るところ、盜賊の張本、石川五右衛門が一子、今日七條河原に於て、釜煎りの刑に行はるゝ事、主人兵部承ると等しく、大きに驚ろき、何か所存あるゆゑ、武將の御成敗ながら、一刻も早く走りつき、お止め申せとござるゆゑ、斯くの仕合せ。まづ／＼お止まり下さりませう。

ト大息ついて此せりふを云ふ。彌藤次、心得ぬこなしあつて

彌藤　聚樂の御所にても老分たる、岩木兵部どの〻止めゆゑ、様子相分るまで、延引は致せど、武將家より行はるる成敗を、如何いたして止め召さるゝか。兵部どの〻心底こそ心得ぬ。

林平　その御不審は御尤も。最早只今主人兵部、これまで罷り越しますれば、何れとも相分りませう。先づそれまで延引の儀、何卒幾重にも

ト彌藤次、こなしあつて

彌藤　成る程、然らば少々の猶豫……コリヤ／＼、者ども、五郎市が刑罰、暫らく相待て。

皆々　ハツ。

ト扣へる。此うち又、時の太鼓になり、先徒士二人、旅の形。後より旅形の陸尺四人、旅乗り物を擔ぎ「エイサツサ／＼」と懸け聲にて出て來る。後より旅形の供廻り、出て來る。直ぐに舞臺下の方へ乗り物を下ろす。林平、中ぬき草履を直し、乗り物の戸を明ける。内より兵部、老けたる拵らへ、ぶツ裂き羽織、野袴、大小にて、紫の細にて腹を巻き、刀を持つて出る。彌藤次、兵部を見て

彌藤　これは／＼、岩木兵部どの、まづ／＼これへ。

兵部　これは早野彌藤次どの、今日のお役目、さぞ御心配でござらう。

ト云ひながら上へ通る。彌藤次、思ひ入れあつて

彌藤　先づ／＼、何は差措き、早速申さうには、只今承れば、尾張熱田へ御普請のお係りの由、首尾よくお役儀も相濟み、御安心にござりませう。

兵部　これは／＼。それは私し事。只今先走りに、家來へ申し遣はしてござるが、途中にて刑罰の儀を承り、驚きましたるゆゑ、旅勞れと申し、老體の拙者、早駕籠にて罷り越したるは、貴殿のお役儀に對して、申し分はござらねど、少々その意を得ませぬ儀がござるゆゑ、刑罰お止め申してござる。

彌藤　成る程、拙者も餘人の詞にござらば、取り用ひも仕らねど、一人の妹を遣はし置きます貴殿の事、申さば媼同士の義理もござれば、お詞ゆゑに刑罰延期は、仕つてござれど、何を申すも武將家より出たる刑罰、お止めなされし御所存はな。

兵部　一通りお話し申さう。石川五右衛門が倅、五郎市こ

と、親五右衛門を誘き寄せる手段とござつて、この所に於て、釜煎りの刑罰、御尤ものやうなれど、よく／＼委細を承るに、大切なる千鳥の香爐を、奪ひし五右衛門、その悴を虜となしての刑罰は、理の當然とは申しながら、强惡不敵の五右衛門、ナニ悴の一人や二人、刑罰にあへばとて、おめ／＼と誘き寄せられうや。何を申すも千鳥の香爐、五右衛門が手にあれば、もしや一子の刑罰と聞かば、恩愛に溺れ、大切なる香爐、破却なすは目のあたり。憚りながら、この御成敗は、再應武將家へお願ひあつて、その一子を助命いたさせ、仁心を加へ、兎角香爐を取戻す計らひが、よろしからんと存ずるゆゑ、推して某、お止め申してござる。

彌藤　成る程、岩木氏のお詞、御尤もには存ずれども、私しならぬ上意の刑罰。助命いたさせたきなど申し出さば、天下の掟を背く道理。

兵部　サ、そこが役儀の第一。只一筋の成敗ではござるまい。まして大切なる寶紛失の、折柄ではござらぬか。兎角、仁を以て事を計らば、情に刃向ふ刃はなく、萬一寶の戻るまいものでもござらぬて。

彌藤　でも、一旦仰せ出されし刑罰は

兵部　止められぬと御意あるか。

彌藤　只今まで、その例とてもござらねば。

兵部　そりや氣が小さい。この度の成敗は、例もなき熱湯の釜煎り。こりや五右衛門なれば、かゝる罪科もあるべきが、取るに足らざる小兒を召捕り、手柄さうに釜煎りの刑罰。如何いたしたお裁きでござる。これしきの儀を押し返して、願はるゝ御策略はござらぬか。

彌藤　イヤ、左樣御意なされても、面々の役儀にも依りますれば、岩木どのゝ御批判は受け申さぬ。

兵部　こりや面白い。拙者がお止め申すからは、直さま武將家へ言上いたす所存でござる。兎角、上を學ぶ下でござれば、仁心無ければ相叶はぬ。悴當馬之丞へ、貴殿の妹呉竹を、嫁に致した拙者が心も、可愛がるゝこそ、其許の心も、嬉しいと存ずる。心に二つはござらぬ。世俗に申す、子を持つて知る親心。この五郎市とやらにも、母親がありさうなもの。又、親があれば目前に、釜煎り責めに殺さるゝ、憂き目も苦勞も、如何程の事でござらう……ハヽ、こりや要らぬ繰り言ながら、下々で申さば斯樣なもの。もしや拙者、この五郎市が助命を願ひ出して、お咎めござらば、其許のお腹は借り申さぬ。

ト此うち彌藤次、こなしあつて

彌藤　成る程、岩木どのゝ御仁心、驚ろき入つてござる。貴所の御胸中、相知れませぬゆゑ、只今の如く、面を赤め申してはござるが、拙者とても幼なき者を、殺したうも存じ申さぬ。この上は、貴所の思し召しを以て

兵部　千鳥の香爐は申すに及ばず、五右衞門が落着まで、申し達して、この五郎市は、岩木兵部が預かるでござらう。

彌藤　誠に、風前の燈火に近き一命、助かりしも兵部どののお情。五郎市、必らず仇に存ずるな。

五市　エヽ、有り難う存じまする。

兵部　然らば直さま、武將家へ申し達し

彌藤　御沙汰次第で、兵部どの

兵部　彌藤次どの

兩人　申し談ずるでござらう。

ト時の太鼓になり、兩人よろしく、この道具廻る。

本舞臺、三間の間、高二重、一面の土手。うしろ藪疊。平舞臺は殘らず川にて、舞臺前浪板。土手の眞中、下り口の鴈木、すべて八幡堤淀川の體。この鴈木に當馬之丞、やつし形にて、鉢卷をし、魚たごを側に置き、川の鮒を掬ひゐる見得にて道具とまる。

ト時の鐘、合ひ方になり、當馬之丞、鮒を掬ひながら

當馬　ハテ、浮世といふものは、變つたものだ。岩木兵部の忰當馬之丞と、聚樂の御所に仕官の身であつたれど、御寳藏宿直の夜に、大切なる千鳥の香爐、奪はれしその越度によつて、親人よりは御勘當。此やうに姿を變へ、夜のうちより小鮒を取つて商ふも、一つには千鳥の香爐詮議の爲。ハテ、町人の世渡りといふものは、埒の明かぬ事なア。

ト思ひ入れ。禪のツトメになり、土手の上、バタ／＼にて、あやめ、文箱を持つて走り出て來る。後より鳴戸之助、追ひかけ出て、引ツ捕へる。此うち當馬之丞、身をひそめて樣子を窺ひゐる。

あや　こりや、この文箱に心をかけて、なんとするのぢや。

鳴戸　なんとするとは、此方にちつと入用なその文箱。うぬらに取られてつまるものか。

あや　イヤ／＼、どうあつてもこの文箱、滅多に渡してよいものか。

鳴戸　面倒な。渡せ。

ト争ふ。立廻りあつて、鳴り物になり、兩人、見事に
メテある。此うち、當馬之丞、窺ひ寄つて、文箱を取
らうとする。三人、立廻り。始終暗がりのこなし。此
うち鳴戸之助、あめやを引敷く。時の鐘誂らへの合ひ
方になり、藪疊の内より白刃を出して、鳴戸之助を一
太刀切る。鳴戸之助、苦しみ、倒れる。藪疊より五右
衞門、好みの形にて、白刃を持つて出る。此うちに上
の方より、苫を掛けし三十石の船、出てくる。土手に
は四人、立廻りあつて、トゞ、五右衞門は、あやめを
切り殺す。當馬之丞、文箱を取らうとする。五右衞門、
これへ手をかけ、立廻りにて文箱を落す。文箱、船へ
入る。この物音に苫を明け、隼人、田舎座頭の形にて
出て、この文箱を手に取りあげ

隼人　ヤ、こりやコレ文箱。

トこの聲にて土手の兩人、ホツと思ひ入れ。立廻りあ
つて、當馬之丞はベツタリと下にゐる。五右衞門は白
刃をヒラリと出す。木の頭。この途端よろしく、

ひやうし幕

あとシャギリ。

第一番目四建目　大津追分の場　岩木兵部屋敷の場　裏手樋の口の場

役名＝奥女中、瀧川。同、紅葉。同若黨、勘六。
岩木兵部。同女房、濱町。同娘、敷島。乳人、秋
篠。筒井惡五郎國景。天狗武者官八。奴、沼平。
堀越治太夫。福島典膳 實ハ三上の佐渡助。修行者、
覺運。佐竹左五郎。南禪寺龍山國師 實ハ盜賊石川
五右衞門。

本舞臺。三間の間、後ろ黒幕、正面に枝葉茂りし一
里塚の榎、その下に一間二枚開きの庚申堂、鰐口を
掛け、緣の前に覺運、黒衣の坊主、禪宗の修行者に
て、木魚を打ち、薦の上に物乞うて居る。上の方に
葭簀張りの茶屋、亭主、前垂れの形にて茶を運び居
る。仕出し二人床几にかゝり、まん丸、追分の百、
どぶ六、駕籠舁きにて、四つ手駕籠を直し立ちかゝ
り居る。すべてこの模樣、大津追分庚申塚の景色、

てんつゝ、葛西念佛にて幕明く。

仕一　さて庚申さまは、きついお流行りでござりやす。

仕二　左樣でござる。毎日々々參詣は絶えませぬ。

百　モシ〳〵お前方、お駕籠は要りませぬか。

どぶ　歸り駕籠、お泊りまで參りませう。

萬九　酒手で擔がせてござりませ。

仕一　イヤ、おらア旅商ひに歩くから、駕籠に乘つて商賣になるものか。

仕二　それ〳〵、五十三驛は、うぬが内も同然に思ふ旅人だ。駕籠で歩いて合ふものか。

どぶ　ハテ、さう云はずと乘つてござりませ。今に暮れますぞえ。

萬九　膳所の町を、日のうちに通らしやればよいが。

百　瀬田までやうやく、暮れ六ツまでに行けまい。

仕田　そんなら、そろ〳〵やりませうか。

茶屋　草津が丁度好いお泊りでござりまする。

仕田　コレ〳〵、茶代は爰へ置きましたぞ。

百　モシ〳〵、親方、乘つてござりまし。酒手でようござります。

仕一　ドリヤ、急ぎませうか。

ト念佛太鼓になり、皆々下座へ入る。直ぐにこの鳴物にて、向うより治太夫、老けたる拵らへにて、羽織袴大小、中間一人連れ、後より筒井惡五郎、深編笠野袴羽織大小、中間一人付いて出で來り、花道よき所にて

惡五　コリヤ〳〵、それへ參るは、治太夫ではないか。

治太　ヤ、さう仰しやるは、筒井惡五郎さまでござりますか。

惡五　如何にも。好き折から逢ひ申した。其方に申しつけたい一儀。先づ〳〵あれへ。

治太　イザ、お越し遊ばされませう。

ト入れ替り、惡五郎先に本舞臺へ來り、床几にかゝり

惡五　コリヤ下部、用事あらば呼ばん。暫らくあの森の内へ。

中間　畏まりました。

治太　然らば拙者も……コリヤ、家來はあなたの御家來と、同道いたして遠ざかれ。

中間　ハッ。

ト二人とも下座へ入る。

治太　御家來を遠ざけられ、私しへの御用とは

惡五　コリヤ、とぼけるな。岩木屋敷の奥を預かる其方。常々身共が物取らするは何の爲。兵部の娘敷島を、身が手に入れてもらひたさ。折々の心遣ひ。心得ましたと請合ひ、今日まで返事いたさぬは、こりや、其方は、身共をたわけに致すのか。返答のぶち方に依つて、其まゝには致されぬ。

ト きつと云ふ。

治太　ヘイ〱、御尤もでござります。あなた樣より度々のお頼み。この爺めも後生こそ願はずとも、慾には目のない生れ。主人娘に度々申し聞かせましたが、あなたへ返事を致さぬ譯は、あの近習役の佐竹左五郎と、疾から馴れ合つて居りまする。

惡五　すりや、あの左五郎めと敷島は、不義いたして罷りあるか。

治太　左樣でござります。これからは拙者があなたへ、打捨て置かぬ念晴らし。左五郎めが屋敷を駈落ち仕る、命生害に及ぶ程の、咎めを拵らへお目に懸けよう。それが拙者が申し譯でござる。

惡五　こりや面白い。して、どう云ふ咎めを拵らへて、あの左五郎めを。

治太　外でもござりませぬ。御存じの通り、盗賊石川五右衞門が伜五郎市を、手前主人兵部預かり、その牢門の鍵預かりは左五郎め。折を窺ひその鍵を。

ト 惡五郎に囁く思ひ入れ

惡五　成る程、その鍵を失へば、左五郎めは、兵部が手前不首尾だら〱。イカサマ、こりや好い所へ氣が付いた。必らずともに、ぬかるまいぞ。

治太　首尾よくやつてお目に掛けませう。殊さら敷島どのには、今日この庚申さまへ參詣。拙者も付き添ひに參つた。アレ、向うへ參るは、慥かに敷島どの。

ト 惡五郎も向うを見て

惡五　身共は暫らくこの場を退き、好い時分に面談いたさう。

治太　暫らく木蔭へ。惡五郎さま。

惡五　ドリヤ、影を隱さうか。

ト ぬめりになり、惡五郎、思ひ入れあり、笠を冠り、下座へ入る、暫らくこの鳴り物にて敷島、振り袖、屋敷者の拵らへ。秋篠、帽子介添へ。佐竹左五郎、袴股立ち、羽織大小、侍ひ、挾み箱。鋲打ちの女乘り物、陸尺擔ぎ出で來り、直ぐに本舞臺へ來る。皆々床几に

かゝる。乘り物は東の方よき所へ立てる。治太夫迎へ

治太　これは〱敷島さま。お早う入らつしやりました。左五郎どの、大儀々々。

左五　イヤモウ、拙者などは大儀とも存じませぬが、敷島さまは餘程の處を、步行路の御步行。さぞかしお草臥れでござりませう。イヤ、ナニ秋篠どの、その外のお供廻りも大儀々々。

秋篠　イヤモウ、私しどもは今出川のお屋敷より、この所までは餘程の道程。さりながら、天氣の好いので、一入お慰みでござりますわいなア。サ、、敷島さま、これにて御休息遊ばされませう。

敷島　サイナウ。この間洛中の噂に、この所の庚申さまは、何に依らずお願ひを、お聞きなさるとの事承はり、次手ながらの三井寺詣り。さりながら、庚申さまへ、お詣り申したその上にて、觀音へ參詣しても、大事あるまいかいの。

秋篠　なんの大事ござりませう。決してお氣遣ひなされますな。

敷島　大事なくば、コレ秋篠、あの駕籠の內に、用意いたさせた品、これへ持たせい。

秋篠　畏まりました。

ト乘り物の內より硯箱と、さらしの鰐口の紐を持ち來り

ハイ〱、これが鉦の緒でござりまするか。

敷島　その品これへ。

ト秋篠、硯箱を床几の上へ持ち行く。鉦の緒の布を好き程に持ち添へる。敷島これへ奉納願主岩木氏敷島と書く。

コレ左五郎、この鉦の緒を納めてたもいの。

左五　畏まりました。

ト願主奉納岩木氏敷島と讀み

コリヤ〱、それに居るは、この庚申塚の堂守りか。

覺連　左樣でござります。

左五　然らば、この鉦の緒を、直さまお堂へ奉納してくりやれ。

覺連　ハイ〱、畏まりました。

ト受取り、鰐口へかけ

御奉納の鉦の緒は、御覽の通り、早速掛けましてござりまする。

左五　大儀々々。

秋篠　コレ御出家、こりや僅かなれどもこなさんへの志し、請けて置かしやんせ。

ト銀を出して遣る。

覺連　これは有り難うござります。よろしうお禮を。ハイハイ、お頼み申します。なんのお願ひかは存じませぬが、御利生尊き庚申さま、さぞや納受もござりませう。

敷島　コレ左五郎や、この神樣をお祈り申せば、わしが願ひが叶ふかいな。

左五　どうでござりませうか。隨分叶ひませうでござります。

秋篠　左樣でござりまする。御利生のある庚申さま。あなたのお願ひ隨分と、叶ひませうわいなア。

トこれを治太夫、聞いて

治太　コレサ〳〵秋篠どの、あなたのお願ひ、何事か存ぜねども、利生々々と申しても、高が道の端の庚申塚。殊に定めし惚れた男に……アイヤ、浮氣がてらのあなたの大願、あんまり利生も、ア、、合點が參らぬ。

左五　イヤモウ、短日にござりますれば、急ぎ御佛參あられませう。

敷島　然らば左五郎、其方も共々、參詣しやいなう。

ト左五郎が方へ立ち寄る。左五郎こなしあつて

左五　ア、モシ。

ト思ひ入れ。この時、惡五郎、ツカ〳〵と寄つて

惡五　敷島どの、近習の武士を捉へてあじやら事。見苦しうござる。嗜なまつしやい。

敷島　ヤア、あなた樣は。

左五　筒井惡五郎さま。こりや何時の間に。

惡五　見苦しいは佐竹左五郎、あの敷島は身が執心、岩木兵部申し出し、宿の妻と存じ、度々の催促いたせども、返答延引。これで讀めた。今にも身共が貰ひ受くれば、惡五郎が奥樣だが、陪臣の左五郎、側へ寄つても其方が身分、其まゝには差置かぬ。この上心を付けて奉公いたせ。

左五　これはハヤ、珍らしい儀を承はりました。近習役のこの左五郎、敷島さまのお側へ叶はぬと、あなたのお詞。併し、道の小石に躓づいて、危ふい事もござりませうが、主人の見す〳〵こけまするを、まじ〳〵見て居られませうか。

惡五　ヤ。

左五　お怪我なされる處を、御介抱申し上げるが近習役。

主人のお叱り受ける時、悪五郎さまが斯やう仰しやるゆゑ、捨て置きましたと、申し上げて濟みませうか。

悪五 サア、それは。

左五 要らぬあなたが色目から、餘り御心勞なされぬが、よろしうござります。

治太 イカサマ、左五郎どのゝお云ひやる通り、女儀ぢやと申して、お怪我のあるのを其まゝに、見捨ては置かれまい。左樣思し召すも御尤もぢやが、何事も〳〵、拙者が付き申して罷りあれば、指でも附けさる事ぢやござりませぬ。必らず〳〵御苦勞は

ト思ひ入れ

アイヤ、暮れぬうち、早く佛參遊ばされませう。

敷島 然らば觀世音へ詣で、暮れぬうち立歸らん。秋篠、案内しや。

秋篠 畏まりました。左五郎どの、お供の用意。

左五 心得てござる。

悪五 然らば屋敷へ推參、親御へ面談いたした上。

敷島 そりや、父上のお指圖次第。

悪五 キツと詞を番つたぞ。

秋篠 サア、敷島さま。

左五 イザ、お急ぎ遊ばされませう。

ト唄になり、悪五郎、治太夫、顔見合せ思ひ入れあり、敷島、秋篠、左五郎、治太夫付いて下座へ入る。七ツの鐘鳴る。合ひ方、悪五郎殘り、後見送り

悪五 さてはいよ〳〵、あの左五郎に馴れ合つて居るあの敷島。エヽ、コレ、腹が立つわえ。氣が揉める。エヽ、コレ、どうぞ身共が願ひを、叶へる仕樣がありさうなものだわえ。

ト此うち百、半鐵、千平、萬九、窺ひ出て

四人 悪五郎さま。

悪五 そんならわいらは。

百 お頼みの仕事にかゝり、彼の娘を引ツ拂はうと、この海道を手分けして、

半鐵 頑張つて居ましたが。

千平 三井寺詣りのお屋敷が、あなたの思惑、いよ〳〵あれでは

四人 ござりませぬかえ。

悪五 成る程、如何にも頼んだ、引ツ拂はうと云ふ敷島は、あの娘。供に付いて居る若侍ひ。ならう事なら彼奴を、打ち殺してはくれまいか。

百　御褒美次第で
四人　働らきませう。
惡五　すりや、娘を引ッ攫ふ、次手に左五郎めも。
官八　おッ片付けて上げませう。その請合はない間は、且
那、お金から先へお目にかゝりませう。
ト庚申塚の蔭より、非人の形にて出る。惡五郎見て
惡五　わりやア追分の野伏り官八か。われが云はずとも、
身共が承知いたして罷り在る。コレ、敷島を引ッ攫ひ、
左五郎めを殺らしてくれゝば、身が所持した
ト懐中より、金子三十兩取出し
僅かなれども三十兩。
ト見せる。此うち覺連坊、まじ〳〵見て居る。
そんなら仕事の骨折りが、三十兩でござりまするか。皆
見たか。なんと、あの金では働らいて見る氣か。
半鐵　併し、三十兩では
官八　廉くはねえかえ。
覺連　廉くば愚僧が落札と行かう。且那、私しに仰しやり
つけて下さりまし。
惡五　ナニ、われが身共が頼んだ大事を。
官八　コレ、エヽ、づく入め、人の仕事の邪魔をするな。

イヤハヤ、とつけもない坊主だわえ。
皆々　此奴は太い奴めだ。
覺連　何が太いのだ。太いと云ふはうぬらが事だ。コリヤ
ヤイ、愚僧を只の坊主だと思ふか。この庚申堂の堂守り、
京都南禪寺の覺連坊だぞ。うぬ、爰で大それた、飛んだ
仕事を受取つたな。何もかも聞いた。いま參詣した娘を
侍ひに頼まれて、引ッ攫ふ相談だな。おれが聞いたぞ。
それとも愚僧にも、一人前を寄越せば物は相談。太ッ腹
で寄越さぬと、宿役人へ屆けて、うぬら、この海道を拂
つてしまふぞ。サア、分け口を寄越しやアがれ。
ト大聲に喚く。皆々呆れて
半鐵　コレエ、此奴は太い坊主ではないか。ナニ、うぬに
遣るものか。口をきき廻ると、ぶち殺すぞ。
覺連　ナニぶち殺す、このよい〳〵め。大風な事を吐かし
やアがるな。エヽ、同心坊主に成り下がつても、以前は
役僧。その時分は、小口もきいた御出家樣だぞ。不調法
を申すな。符牒を分けて寄越さぬと、うぬら一々、手は
見せぬぞ。
官八　さう吐かせば、うぬ、助けては置かれぬわえ。
惡五　コレ〳〵、彼奴が聞いたか、いゝかえ〳〵。

官八　お氣遣ひなされますな。ソレ、づく入めをぶッ挫け。
皆々　合點だ〳〵。
ト念佛太鼓になり、皆々息杖割木なぞにて、覺連坊をくらはす。覺連坊、息杖を引ッ奪り撲り廻る。官八後より、鰐口の鉦の緒を取つて、覺連坊が首へ引ッかけ引く拍子に、覺連坊首を締められ、ぎく〳〵して倒れる。
惡五　どうした〳〵、死んだか〳〵。
四人　此奴は、ごねたワ〳〵。
惡五　コレ〳〵、爰に死骸があつても、よいか〳〵。
官八　お氣遣ひなされまするな。人目にかゝらぬうちに、コレ。
五人　呑み込みました〳〵。
ト覺連坊の死骸を皆々寄つて、上の方にある乘り物の内へ入れ、戸を立てる
皆々　これでちつとは落ちついた。
官八　修行者でも宿無しでも、人を殺せば此方の首にかゝります。旦那、お約束のお金を。
惡五　成る程、約束の三十兩、コレ、必らず身共が家名を出すな。

官八　心得ました。
惡五　ソレ、約束の。
ト三十兩を官八に渡す
官八　しつかりと受取りました。ソレ。
ト五人を招ぎ、銘々へ割り渡す
惡五　この上、必らず敷島を。
皆々　呑み込みました。
トばた〳〵と音する。
惡五　あの人音は。
官八　モシ。
ト思ひ入れあり
お旦那、急いで。
惡五　心得た。
ト捨て鉦、合ひ方にて、惡五郎、足早に向うへ入る。官八付いて入る。四人は囁き、一里塚の蔭へ忍び入る。矢張り合ひ方にて敷島、秋篠、治太夫、左五郎その外、供廻り殘らず出て來る。
秋篠　最早暮れに間近うござりますれば、急ぎお屋敷へ、お歸り遊ばされませう。
敷島　成る程、屋敷へ歸るまでは、夜道を步行するであら

う。草葉にすだく虫の音に、まだ消え殘る篝火も、また一入の好い眺め。こりや矢張り、歩行路を行かうわいの。

左五 アイヤ／＼、お待ち遊ばされませう。大切の御身、夜に入りましての御歩行如何。矢張りお駕籠に、お召し遊ばさるゝがようござりませう。お乘り物これへ。

ト乘り物を好き所へ舁いて出る。

イザ、お乘り物にお召し遊ばされませう。

ト駕籠の戸を開き、內を見て

ヤ、お乘り物の內に何者やら、他愛なう臥り在るは、慮外者。出居らぬか。

治太 ナニ、お駕籠の內に何奴が、どぶさつて居るとや。憎い奴の。引き出し召されい。アヽ、手ぬるうござる。退かつしやい。身共が、

ト左五郎を引退け、駕籠の內の覺連坊を引ッ捉へ

無禮千萬、憎い奴の。サヽ、出居らぬか。此奴、どぶさつて居るな。

ト引き出す。覺連坊、死人の思ひ入れ。治太夫、悧りして

此奴、くたばつて臥り在るワ。

皆々 エヽ。

ト驚ろく。

左五 なんとお云やる。駕籠の內は死人とな。ドレ。

ト見て

ヤア、こりやコレ、最前奉納の鉦の緒を渡せし修行者、何奴が斯やうの儀を。

治太 コレサ、左五郎どの、見ますれば刀疵とてもござらず、布を持つて咽喉を縊りし樣子。こりや藥なりと含ませ、呼び生けたら、心の付かぬと申す事はござるまい。

左五 イカサマ、然らば拙者の。

ト印籠を取り、思ひ入れあつて

ハテ、折惡しう氣付けを切らしました。

治太 イヤ、身共も持ち合せの藥がござらぬ。こりやいつそ呼び生けませう。水を持て／＼。

侍ひ へイ／＼。

ト手桶、柄杓を持ち來る。治太夫、覺連坊が顏へ水を掛け

皆々 出家やアい／＼。

ト立ちかゝつて呼ぶ。この時、三味線入り、禪のツトメになり、南禪寺龍山國師、實は五右衞門、鼠衣、禪

僧の形、如意を持ち、後より今の官八、紹羽織、袴大小、寺侍ひの拵らへになり、禅僧の所化、その外草履取り、挾み箱持ち、中間付き添ひ出て来る。舞臺の皆々捨ぜりふにて介抱して居る。右の人數、本舞臺へ来り、五右衛門これを見て

五右　小源次、見れば出家と見えて急病の様子。如何仕つたのぢや。承はつて參れ。

官八　畏まりました。

ト側へ寄り

イヤ、見ますれば急病の體と見受けまする。如何の儀でござるか。承はり參れと、主人申しつけでござります。

左五　これは〳〵、何れのお方か存じませぬが、お心に掛けられまして、よくもお尋ね。この出家は急病にてもござりませぬ。意趣ござつてやら、何者か殺して立退きましたと見えまする。

官八　それは珍事。お聞きなされましたか。

五右　成る程、承はつたが、見受け申せば出家と見える。ハテ氣の毒。用意の良薬もござれば、不躾ながら進ぜませうかな。

左五　これは忝なう存じまする。

ト覺連が口に含ませ、介抱する。五右衛門、よく〳〵、見て

五右　ヤ、、その出家は

トこなし

小源次。あの出家は、愚僧が院内。

ト官八、見て

官八　成る程、納所役を勤めました、覺連でござりまする覺連でござりまする。

供男　左様でござります〳〵。

ト供廻り、立騒ぐ。

五右　コリヤ〳〵、しかと様子も承らず、聲高に立騒ぐまい。扣へて居れ〳〵。

供男　ヘイ〳〵。

ト扣へる。

五右　イヤナニ、お若いの。愚僧ことは、京都南禅寺の役僧でござるが、この出家は、即ち手前寺の納所でござるて。

左五　エ、、この出家がな。

五右　如何の儀をもちまして、手前院内の僧を、あなた方には、斯様に御介抱下さるな。

治太　イカサマ、こりや御尤ものお尋ねでござりまする。手前ことは岩木兵部が家來。即ちあれなるは主人の娘、敷島どの。今日、三井寺へ參詣の供待ち、この所に乘り物を差置きましたるところ、お立ちの砌り、この駕籠の内に、首に白布をまとひまして、この出家が、相果て罷りありました。

五右　すりや、この乘り物の内に、この出家が……して、其許の御主人は、岩木兵部どのゝお娘御とな。

治太　左樣でござるて。

五右　小源次、覺運が死骸、とくと改めて見やれ。

官八　心得ました。

ト死骸を改め見て、鉦の書附けを見て

御覽なされませ。縊りましたる白布に、願主岩木氏、敷島と記してござりまする。

敷島　自らが手づから認め

秋條　お納めありし、彼の鉦の緒。

治太　ハテサテ、憎い奴でござるて。

五右　ア、、これで解りました。近習役の御兩所、こりや、氣の毒ながら、お屋敷のお名も出ませう。殊に、それなる敷島どのとやらも、樣子によつては、お役へも屆けまして、御同道仕らねば相成りませぬぞ。

左五　イヤ／＼、その儀は何分不承知にござる。今日、この所への御參詣は、極内にて、忍びの御供。路次にて斯樣の珍事ござつて、大殿樣のお耳に入り、敷島さまを代官所へ、御同道ござりましては、御主人に對し、我れ我れどもの

五右　越度とも罷り成りませう。なれども、氣の毒ながら、檢視沙汰と罷り成れば、人殺しは、あれなる敷島。磔刑とやらへかゝりまする。

左五　ヤ、、何と仰せらるゝ。手前主人の娘御が、なんで人殺しの

五右　申し譯のござらぬは、アレ、あの白布の鉦の緒。

左五　どう致したとな。

五右　小源次、あの鉦の緒に、なんと書きつけてある。

官八　ヘイ。

ト擴げ見せ

御覽なされませ、この白布に、願主岩木氏、敷島とござりまする。

五右　サ、あの通りでござる。院内の所化を殺せし手がゝりは、あの鉦の緒。愚僧とても出家の事。人を助けるが

役でござるゆゑ、いづれとも申し開きも、致して遣はしませうほどに、何分娘御を、愚僧にお渡しなされいサ。

左五 成る程、こりや御尤もなるお詞でござれども、我れ我れがお供いたしながら、女儀を獨り、其許樣へ、お渡し申すも如何。こりや、身共をお連れなされまして

五右 アヽ、イヤ〳〵、仰せも御尤もなれど、この白布に、願主は敷島と記しござれば、餘人を召連れましたとて、役に立たぬ儀でござる。氣遣はれずとも、それなる女儀を

左五 左樣ではござりませうが、こりや何分、拙者を御同道なされて

ト爭ふ。官八、聞きかれて

官八 これはしたり、此お人は、聞分けの惡いお侍ひだ。此方の旦那も御出家でござるワ。ナニ僞はりを申さるゝもので。それに、べん〳〵と聞分け無いは、アヽ、聞えた、こりやア彼の出家を、おてまへが殺しめされたな。

左五 ヤヽ、なんと。

官八 あれほどの證據があつても、これなりに捨て置かつしやる御所存か。イヤハヤ、厚かましい侍ひだ。如何に人を助けるが出家とは申すものゝ、譯の解らぬ事は拙者、嫌ひでござる。サア、寺役へござれ。

ト左五郎が胸づくしを取る。

左五 こりや何しやる。不作法千萬な。爰放さぬか。

ト取つて突き放す。官八、轉んで

官八 こりやアこの侍ひは、身を投げたぞよ。出家を殺したその上に、身共を投げては、もう料簡が相成らぬ。この二本棒めが。

ト床几にある莨盆を取つて左五郎を打つ。

左五 こりやおのれ、身共に

ト立ちかゝる。

五右 コリヤ〳〵、小源次、不調法千萬。鎭まらぬか〳〵。

官八 イエ〳〵、料簡ならぬ〳〵。

五右 コレ、鎭まれと申すに。

皆々 鎭まらつしやい〳〵。

治太 左五郎どのも、お扣へなされい。

秋篠 鎭まつてござりませ〳〵。

官八 おのれ、侍ひめ。

ト拔討ちに左五郎へ切つてかゝる。皆々入亂れになり、双方なだめる。五右衞門、心遣ひしながら床几に腰をかけてゐる。この時、入相の鐘、出の唄になり、向

うより紅葉、帽子、屋敷者の拵らへ。瀧川、同じく椎茸髷の奥女中、高からげ。後より勘六、やつし木綿の形、一本差し、革文箱と青傘を二本持ち、供をして出て來り、直ぐに舞臺へ來る。皆々入亂れの中へ交つて、官八、莨盆を振りあげる。兩方の供、引ッたくる。この時、來かゝりし勘六の持つた日傘を取つて、持つてかゝる。勘六、取りつくを官八、したゝかに打つ。これにて勘六の眉間へ疵つく。勘六、直ぐに官八を引ッ捕へ

勘六　紅葉さま、瀧川さま、お待ちなされまし。行き通りの者へ無法千萬。御覽なされませ、私しが面へ疵を附けました。相手はしつかり、捕へて置きました〳〵。

紅葉　ほんに、勘六どのゝ眉間から、血が流れまする。瀧川さん、お前、血留めは無いかえ。

瀧川　血留めはあらうわいな。サア〳〵、勘六どの、これを附けて見さんせ〳〵。

ト箱せこより血留めを出し、勘六の疵へ附けんとする。

勘六　アヽ、モシ〳〵、必らずお構ひなされまするな。譯も無い私しへ、疵を附けましたを、生なか藥を附けるのは、いらぬ事でござりまする。相手は捕まへて置きました。

官八　コリヤヤイ、相手も糸瓜もいるものか。おのれらは人殺しではないか。うぬ、今に酷い目に遭ひ居らうに。

勘六　なんだ、人殺しだ。イヤ、この侍ひは狂人か。とんだ事を云ひ出したな。

紅葉　コレ〳〵、勘六どの、見さんせ。向うもお屋敷のお歴々樣、殊にお寺樣も交つてお出で遊ばすが、こりや何か、譯があらうわいな。

瀧川　こりや憚りながら、樣子を一通り承るがようござりませう。して、こなさんが、捕へてゐさんすお方は。

五右　アイヤ、その者は、愚僧が供でござるて。見ますれば、間違ひまして、あの人の面へ、疵を附けましたは、如何に致しても氣の毒に存ずるが、決して逃げ走る儀もござるまい。即ち愚僧は、南禪寺の役僧でござる。苦しうござらぬ。拙僧にお預けなされいサ。

勘六　ヘイ、あなたは南禪寺のお役僧樣。預からうと仰しやるからは、ようござります、この相手は、あなたへお預け申しませう。

瀧紅　コレ、後で難儀のかゝらぬやうに、さしやんせや、

さしやんせや。

勘六　あゝ仰しやれば、ようござります。ヘイ、御出家様、然らば此お人は、あなたへお預け申しました。

五右　慥かに預かりました。

ト官八を放し

勘六　して、あなた方にも、お係りあひでござりまするか。

左五　左様でござる。拙者ども主人は、岩木兵部。即ち家來、佐竹左五郎と申す者。斯様の騒動、起りましたる最初は、あれなる主人の娘御、三井寺へ參詣の間、この所に乘り物を殘し、お立ちなさるゝ只今に相成り、その乘り物の内に、出家一人、手前主人が廟中塚へ納めましたる、鉦の緒を以て、咽喉を縊り、横死の様子。その折から、南禪寺の役僧の通りかゝられ、即ち死人は南禪寺の納所。縊りましたる鉦の緒に、數島とござるゆゑ、それゆゑ申し募りに罷り成り、間違ひまして其許の怪我。近頃氣の毒千萬に存ずる。

勘六　御様子詳しく承りました。モシ、お二人様、只今の譯合ひでござりまする。

紅葉　成る程。さう聞けば、瀧川さん、氣の毒なものぢやござんせぬか。

瀧川　左様でござりまするが、私しどもゝお非番の今日、この人ぢやと申して、面々の使ひまする召仕ひと申すではなし、面へ疵の附きました人を、お屋敷へ連れ歸りまして、お尋ねの節、なんとマア、申し譯を致したらよからうやら。

勘六　モシ〳〵、あなた方は、どうお濟ましなさるゝか存じませぬが、私しへ疵を附けましたは、お寺様のお供でござりまする。こりや矢張り、お寺へかゝるがようござりまする。

五右　そりやモウ、如何やうとも致すがよい。此方は出家の事ゆゑ、さのみお上沙汰を願ひも仕らぬが、何を申すも、氣の毒なは死人でござるて。

紅葉　その死人は、どれにござりまするえ。

五右　即ち、これでござる。

ト死骸を見せる。

瀧川　エヽ、坊さんでござりまするな。

五右　愚僧が寺の納所でござる。

勘六　エヽ、縊り殺しましたのかえ。モシ、マア、御覧じませ。太い奴もあるものでござりまする。この布に……

ほんに、岩木氏、敷島と……エヽ、あのお姫様の事でござりまするね。
官八　サ、それゆゑに、あのお女中様に、疑ひがかゝりましてからの騒動。なんと、斯うした慥かな證據があるからは、あの娘御を、役所へ連れて行かねばなりませぬよ。
紅葉　成る程、書いてあるわいな。瀧川さん、ちよつと來て御覽。
瀧川　どうやら氣味が惡うござりまするわいな。
勘六　何をお前、怖い事はござりませぬ。爰へ寄つて、御覽じませ〳〵。
瀧川　勘六どの、しつかりと、捕へてゐて下さんせ。
勘六　ハテ、臆病な。
ト鉦の緒を擴げて見せる。瀧川、怖々立ちよる拍子に、懐より封印ある金の包みをツッと出し、死骸の側へ置く。
治太　モシ〳〵、最早日も暮れますに、こりや如何仕りませうな。ハテ、難儀な儀でござる。
左五　此方は、係りあひの儀でござれば、難儀はいとひ申さねど、行き違ひのあの人の疵、これが第一氣の毒に存ずるて。
五右　イヤ〳〵、疵を附けましたはこの身の家來。即ち愚僧が預かり置いてござれば、あの人の儀は、手前方より、如何やうとも詫びませうほどに、貴殿方も聞分けられて、あの娘御を、寺役までお渡しされサ。
官八　モシ〳〵、何に致せ、道端に死骸を置きまするも往來の難儀。こりや片寄せませうかな。
五右　愚僧承知の上は大事ない。片寄せて置きやれ。
官八　畏まりました。御家來中、これへござれ。
供男　心得ました。
ト皆々立ちかゝり、死骸を片寄せんとする。死骸より包み金落ちる。皆々見て
それ〳〵、何か落ちました〳〵。
官八　ほんに、何か落ちました。
ト包み金を取上げ
ア、これは金子でござります。
五右　ナニ、金子が落ちた。そりや、その非人の金子か。
官八　イエ〳〵、これは、あなた樣のお金でござります。ナ、モシ、最前、ソレ、御普請金のうち、職人中へお拂ひとござつて、先程御封印なされ、私しへお預けなされ

ました金子でござりますを、私しが懐中から取落しました。これはハヤ、不調法千萬な。

トいろ／＼吞みこまる。

五右　エヽ、先刻其方へ渡し置いたる、金子百兩。

官八　イエ／＼、百兩ではござりませぬ。

五右　成る程、百兩ではないと存じた。慥か、その金子の高は●

官八　モシ／＼、その金の高は

ト懐より出して高を見る事あり

慥か五十兩ぐらゐな量でござりました。

五右　左やう／＼、あの量は五十兩位な量でござつた。其方、キツと懐中いたして居れ。取落すとは、麁相千萬な。

瀧川　イヤナニ、御出家様。なんと仰せられまする。只今

ト兩人、顔見合せて思ひ入れ。

それへ落ちました金子は、あなた様の金子でござりまするか。

官八　如何にも左様でござりまする。

瀧川　これはハヤ、近頃無理なお願ひでござりまするが、只今あなたの懐中なされましたる、金子の包みを、ちよつとお見せ下さりませ。

官八　エヽ、この金子の包みかな。

瀧川　左様でござりまする。

官八　そりや又、なぜでござるな。

瀧川　ちと拜見仕りたうござりまするゆゑ。

官八　エヽ、どうかこの金子の儀は、見せ申すは

トうぢ／＼する。

五右　これはしたり、どう致したものだ。此方の金子を、あれなる女中が、拜見を願はるゝなら、早速お目にかけいサ。

官八　ヘイ／＼、畏まりました。イヤナニ、これはお屋敷様、拜見と仰せらるゝゆゑ、早速お目にかけまするが、只今落しましたは、この金子でござりまする。

ト出す。瀧川、取つて

瀧川　エヽ、この包みでござりまするな。

トよく／＼見て

憚りながら、この封印の御印形は、あなた様の御判でござりまするかな。

トこれにて五右衛門、どうか氣味惡き思ひ入れにて

五右　イヤ、印形は愚僧のではござらぬ。その印形は

瀧川　御印形は。
五右　なんでござる。あの者の印形でござる。
官八　エ。
五右　イヤサ、コリヤ、其方が印形であらうな。
官八　ヘイ〳〵、成る程、私しの印形でござりまするが、その印形が、どうしましたな。
瀧川　イヤ、別しての事でもござりませぬが、私しは御所方に、御奉公いたす者でござりまするが、何をお隱し申しませう、主人の奥へ、盜人が入りました。
官八　エ。
瀧川　サ、その節、お納戸金が餘程紛失。内々御詮議なされまするが、手懸りは金子の印形、即ち、この包みの印形は、紛失の金子の內。證據と申すは包みの印形。こなさんの御判とあれば、こりやその手蔓から、用金を奪ひし盜賊の、詮議いたさにやなりませぬ。
トきつと云ふ。五右衞門、官八と顏見合せ、思ひ入れあつて
五右　すりや、その金の印形は、おてまへ屋敷で、紛失いたした、金子の判ぢやとお云やるのか。
瀧川　左樣でござりまする。申さば南禪寺のお役僧、あなたに決して間違ひは、ござりますまいなれど只今のお詞に、これなる御家來の衆の印形と、仰せられましたが、主人の金子へ家來の印形、据ゑやう譯もござりませねど、そりやモウ、御所方と違ひ、寺方にては、左樣な儀もござりまするやら。そりやそれにも致しませうが、いづれ御家來は私し屋敷へ、同道仕りまして、この印形調べを致さにやなりませぬ。左やう思し召して下さりませ。
官八　ア、コレ〳〵、ナニわしが判では、ござらぬ〳〵。こりや、アノ
五右　コリヤ〳〵、その判は其方の判であらう。……サ、其方の印形ぢやぞ〳〵。
ト思ひ入れあつて
コレ、女中、イヤサ、其許は、いづれの屋敷方かは存ぜぬが、女だてらに印形の調べ。手前家來を同道いたさるる儀は、罷りなりませぬぞ。
瀧川　左やう御意なされますれば、金子の儀は、外へ廻しまして、あの者の面へ、疵を附けましたる私しどもの申し譯。いづれ屋敷へ、同道いたさにやなりませぬ。
五右　すりや、金子は外にして、送りの者の、面體の疵ゆゑ

瀧川　ハイ、同道いたしたうござりまする。

五右　サ、さう云はれては、否とも愚僧は申されず。コリヤ、其方、あの女中と同道いたして、お屋敷へ參るがよからう。

官八　これはしたり〳〵、何やら一物ありさうなその屋敷へ、どうマア拙者が……イヤ〳〵、それは決して參りませぬ。

瀧川　そりやこなさんの勝手といふもの。行く事ならぬとあれば是非がない。又この金の印形の詮議。お寺も名におふ南禪寺さまとあれば、手前屋敷より迎ひの人を差越しまして、寺役をなさるゝあなた樣、此方屋敷へ、お招ぎ申すまでの事。その節は御苦勞ながら、お係り合ひゆゑ。

五右　イヤ、參るまい。ハテ、その金が、手前金子と申してこそ、疑ひもかゝりませうが、その金は。コリヤヤイ、小源次、わりやア間違ひであらうな。其方が所持の金子ではあるまい。只今のモヤモヤに、こりや外からこれへ、ナ、それ、あの金は、其方に預けた金子ではあるまいぞよ。

ト目顏で知らす。

官八　成る程〳〵、左樣でござります。お預かりの金は、慥か出入りの職人へ、ほんに、それ〳〵、渡して參りました〳〵。

瀧川　すりや、只今になりまして、御所持された金子でなうて　この金は、どれから出ましたな。

官八　サ、大方その金は……オ、、それ〳〵、相果てたこの出家の、懐から出た。身共は存ぜぬ。この死人の懐から落ちました。

瀧川　左樣ならば、死人の懐より、出ました金とな。左樣ござりましては、矢張りあなた方は、お係り合ひでござりまする。

五右　そりや又、なぜでござる。

瀧川　ハテ、相果てましたるも、矢張りお寺の納所役。死人に口無し。相手どりまするは、御苦勞ながら、あなた樣。

五右　イヤ、この僧は、南禪寺を驅落ち致し、手前寺の者ではござらぬ。

瀧川　お寺内の出家でないとあれば、あなた方に、お係り合ひはござりますまい。左樣ぢやござりませぬか。

左五　成る程左やう。院内に居らぬ出家、相果て居らうが、

五右　其方に係り合ひはござらぬ筈。

五右　イヤ、駈落ちは致したが、寺中に人別、印形の据つた出家でござれば。

瀧川　矢張り寺中の御出家なれば、この死骸、申し請けたうございまする。

五右　出家の死骸、在家に置いて、何におしやる。

瀧川　ハテ、死人なれども、金子を奪ひし盗賊の手がゝり、詮議いたすそれまでは、葬むる事も相成りますまい、と申してからが、死人を長うも

勘六　詮議の相済むまでは、この死人は、鹽漬に致してなりと、落着までは、葬むる事は叶ひませぬ。

ト　これを聞いて、死骸、そろ／＼動き出す。

紅葉　成る程、弔ふ事はさておいて、鹽漬の樽詰めに致しても、こりや詮議を致すがようござりませう

ト　又死骸動く。

瀧川　左樣なれば、その死人は、詮議の濟みまするまで、私しどもへお預け下さりませ。

五右　サ、それは。

瀧川　相成りませぬかな。

五右　アイヤ、承知いたした。隨分と預けませう。

瀧川　しつかりと、お預かり申しました。

勘六　左樣なれば、その死骸は、當所の非人に申しつけ、鹽漬に致して、お屋敷へ持たせて參りませう。ドレ、この死骸を

ト　立ちかゝる。ビク／＼したる覺連、起きあがつて

覺連　ア、、コレ／＼、鹽漬にされて、堪るものか／＼。

皆々　イヤア、死人が活きたワ／＼。

左五　さては、こりや、根强う仕込みし騙りだな。

覺連　ア、、モシ／＼、お侍ひ樣／＼、私しは騙りではござりませぬが、ちつとのうち、死んだ眞似をしてゐろと、頼まれましたゆゑ、錢が欲しさに、死んだ風を致したが、ナニちよつとのうちで濟む事か、腹はへる、手水には行きたくなる、苦しくつてならぬものを、イヤ駈落ち者だの、盗人だの、揚句の果に、鹽漬にしようとは、瓜や茄子ではあるまいし。エ、、この人は、情ない人だわえ。

ト　五右衞門に向ひ、思ひ入れ。皆々見て

左五　さてこそ彼奴等が騙りだな。

瀧川　御用先のこの封金、持ち合せたを幸ひに、金の事から仕掛けた詮議。危ない事。この金は、早う納めて置きませうわいなア。

ト懐へ入れる。五右衛門、無念の思ひ入れ。

左五　サ、御出家。そろ／＼拵らへ事の化けの皮、もう好い加減に、顕はしてしまへサ。

五右　サ、そりやア。

皆々　サア／＼／＼、どうだ。

ト詰めよる。五右衛門、思ひ入れあつて

五右　そりやア。

ト聲かけ、ズイと下座へ入る。禪のツトメになり、後に窺ふ五人の手下、割り木を持つて打つてかゝる。供廻りうろたへ、箱提灯を持つて、向うへ逃げて入る。

一同、紅葉を捕へ

百　敷島か。

秋篠　ナニ、敷島さまを。

ト支へる。一同は紅葉を敷島と思ひ、引ツ立てゝ向うへ入る。秋篠は敷島と思ひ、追ひかけて入る。

勘六　お二人ながら、お危なうござりまする／＼。

トこれも下座へ入る。五人の惡者、東の方へ逃げんとするを、治太夫、追ひかけて、東の口へ入る。五人は東より歩みを廻り、花道へかゝり、再び舞臺へ來る。瀧川は敷島を介抱して下座へ入る。官八逃げんとするを、左五郎、引ツ捕へる。この中へ覺連、ウロ／＼して來り、兩方より突き廻され、ブル／＼して倒れる。官八、左五郎を當て、下座へ逃げて入る。この時、五人の者、左五郎へ打つてかゝる。左五郎、抜いて切り散らし、立廻りあつて、五人、手を負ひて逃げる。覺連、心附き、摑みかかる。左五郎、一刀切る。覺連、倒れる。その間に左五郎、向うへかゝり

左五　敷島さまの御身の上、心元ない。さうぢや。

ト矢張り禪のツトメにて、向うへ一散に入る。下座より敷島、駈けて出る。後より官八、追ひかけ出る。

敷島　左五郎やアい／＼。

官八　見附けたぞ。

ト敷島を引ツ捕へ、向うへ行かうとする。瀧川、出て、官八を引留め

瀧川　あなたは慥かに

敷島　敷島ぢやわいの。

官八　先刻の女め。

ト割り木にて打つてかゝる。瀧川、立ちあがり、懷劍を抜いて、突きかける。官八、うろたへ、下座へ逃げて入る。瀧川、敷島を介抱して

瀧川　お氣遣ひなされますな。どうぞあなたを

ト乘り物へ探り當り

幸ひ爰にお乘り物。マア／＼、この内へお忍びなされて

ト乘り物へ敷島を押し入れ、戸を閉し、思ひ入れあつて

ア、コレ、お供廻りはござらぬかいの。コレ、敷島さまのお駕籠の衆は、居やらぬかいなう。

トあちこちするうち、覺連、呻き出す。瀧川、駈けより、覺連が手を取つて引起し

コレ／＼、あの乘り物を、早うお屋敷へ、舁いてござんせ。コレ／＼

ト覺連を見て、膽を潰す。覺連、又ベツタリとして呻る。この時、勘六、駈けて出て來り、瀧川を見て、

勘六　瀧川さまでござりますか。

瀧川　勘六どの、この駕籠に、先刻の娘御。今出川の屋敷とあれば、送り屆けて。

勘六　心得ました。

トうろたへ、駕籠の棒を上げようとして、一人ゆゑ

モシ／＼、私しばかりではいけませぬ。棒組みが居りませぬ／＼。

瀧川　ハテ、其方ばかりでは行かぬかいの。

勘六　どうして一人で行けませう。モシ／＼、瀧川さま、ちよつと後棒を、お頼み申します／＼。

瀧川　どうして、わしが

勘六　ハテマア、やらつしやりませ。

ト無理やりに後棒を擔がせ、勘六は先を擔ぎ上げる。瀧川、意氣地なく、重たさうに、一足二足行きかけて、ベツタリと膝を突く。木の頭。瀧川、駕籠へ手をかけ、立ち上がらうとする。キザミにて、よろしく、　ひやうし幕

時の鐘にてツナギ、引返す。

幕の外へ、花道より、奴四人、提灯を持ち、六尺棒を突き、鉦と太鼓を打ち、四人連れにて出る。この中に沼平、奴の形にて、六尺棒を持つて、スタ／＼と出て來り、本舞臺へ來て

奴一　コレ／＼、皆の衆、マア、敷島さまは、どちらへござつたであらうの。

皆々　どうぞ早く、お目にかゝりたいものだの。

沼平　これサ／＼、こなた衆は、何も其やうに案じる事ぢ

やアない。年頃なお娘御、こいつはてつきり色事の果が附かぬから、駈落ちと見えるわいの。

奴二　成る程、それも知れませぬが、主命なれば、捨ても置かれず、夜の明けぬうち、もう一遍尋ねませう。

奴三　さうしませう。これから嵯峨のあたり、桂川の方を尋ねませう。

沼平　これサ、この人は、お半ぢやアあるまいし、ナニ桂川まで行くものか。大方、駈落ちの敷島さまは

皆々　どこであらう。

沼平　築地であらう。

皆々　何を云はつしやる……敷島さまイなう〳〵。

ト捨ぜりふにて幕の内へ入る。捨て鐘打ちあげる。時の太鼓になる。

本舞臺、三間の間、二重舞臺。襖。よき所に誂らへの公家の装束を衣桁に掛け、冠を三方に飾り、その前に、三方に神酒、燈明を供へ、すべて岩木兵部屋敷の體。爰に濱町、裲襠、衣裳の形にて立ち身。惡五郎、麻上下、大小にて立ちかゝりゐる。治太夫、秋篠、前幕の越度にて訴訟の見得にて幕明く。

濱町　コリヤ〳〵、秋篠、すりや其方が、いま申せしに違はず、敷島を見失ひ、何者にか奪ひ取られしとな。

秋篠　申しあぐるも、面目なき事ながら、只今申すに僞はりなく、夜前の騒動、敷島さまを

治太　惡黨どもに奪ひ取られしは、拙者が越度。申し譯なき仕合せでござりまする。

惡五　して、警固いたせし左五郎は、如何いたした。

治太　サ、これが合點が參りませぬ。暗さは暗し、向うは無法の惡者ども、白刃を拔いて向ふゆゑ、爰ぞ一生懸命と、日頃の手練に十倍して、寄せ來る奴ばら、切り立て切り立て、縦横無盡に働らけども

濱町　娘敷島、奪ひ取られしと申すのか。コリヤ、治太夫、其方も存じの通り、常から父御を大切に、孝行盡すあの敷島、親の許さぬ、よもや戀路が

治太　イヤ〳〵、無いとも申されぬ。敷島さまは、慥かに近習役の左五郎が、お手を引いたと存じたが、今以てお歸りなきは、もしや二人は、あれなりに。

惡五　イカサマ、左五郎が敷島を連れて、逃げたかも知れぬぞ。

秋篠　イエ〳〵、なんの左樣な事がござりませう。治太夫

さまこそ、惡者どもに取卷かれ、こけつまろびつ逃げさんしたを
治太　コリヤ〳〵、滅多な事を申すな、身共、左樣な覺えは無いぞ。
秋篠　でも、大勢に取卷かれ
治太　サア、その時の身共が働らきを、お目にかけたいなお目にかけたいな。
濱町　默れ、治太夫、さほどの働らきありながら、なぜ敷島を見失うた。暗うて黑白が判らねばこそよけれ、定めて卑怯を働らいたであらうな。
治太　イエ〳〵、どう仰しやつても、拙者、大きに働らきました。
濱町　コリヤヤイ、それ程働らきながら、娘を伴ひ歸らねば、矢張り其方の越度ならずや。
治太　サ、その儀は。
濱町　茲な卑怯者めが。
トきつと思ひ入れ。治太夫、惡五郎、顏見合せ、こなし。向うバタ〳〵にて、左五郎、大童にて出て來るを、秋篠、見附けて
秋篠　左五郎さま、戻らしやんしたか。して、敷島さまは、お供なされたかいな。
左五　ヤ、、、今以て敷島さま、御歸宅なされぬとや。濱町さま、お聞きもあらん、昨夜の體裁。惡黨どもに取卷かれ、切り散らす其うちに、敷島さまは秋篠どの、お供せしと思ひしに、今までもお歸りなきは心得ぬ。主人の供先、かゝる大事、皆拙者めが越度。申し譯には、腹搔き切つて
濱町　ソレ、秋篠、止めい。
秋篠　ハツ。コレ、待つた。
左五　イ、ヤ、主人へ申し譯。
トまた腹を切らうとする。濱町、こなしあつて
濱町　コリヤヤイ、左五郎のうろたへ者。この濱町が止めさせるに、止まらぬか。
左五　ハツ。
ト思ひ入れ。
濱町　主の娘を路次にて奪はれ、云ひ譯なきの切腹か。コリヤ、其方が腹搔き切つて相果つれば、行くへ知れざる敷島が戻るか。死ぬる命を全うなし、在所を尋ねる心は無いか。茲な、うろたへ者めが。
トきつとなる。この時、向うより沼平、一散に走り出

て來て

沼平　奧樣、これにおわたりなされまするか。昨夜より手分けして、大津のほとりより、醍醐山科、村々を尋ねしに、お行くへ知れぬ敷島さまを、お駕籠に召させ、御所の端下女中と相見え、只今これへ御同道。サヽ、御安堵なされませ。

濱町　ヤヽ、敷島を同道の者ありとや。皆も聞いたか。

左五　エヽ、忝ない。お在所知れしか、秋篠どの。

秋篠　さぞお喜びでござりませう。私しも安堵仕りましたわいな。

治太　モシ〳〵、惡五郎さま、敷島さまは、お歸りぢやと申しまするワ。

惡五　成る程、歸る筈がないと思ふが、そんなら昨日坊主めが、首尾よくやつたが、また跡で、てつきり彼方へ

左五　ヤ、なんと。

惡五　アイヤ、敷島の行くへが知れて、拙者も大慶。兵部どのも、さぞお喜びでござらうと、存じての儀でござる。

左五　アノ、其許までが……ハテ、お氣の毒な儀でござりまする。

ト思ひ入れ。

濱町　兵部どの、お聞きなされましたか。

兵部　委細、これにて承つた。

ト合ひ方になり、兵部、袴の形にて出て來る。

惡五　これは兵部どの、敷島どのゝ行くへ、知れぬと承りしに、早速に在所知れたで、身共も滿足。其許にも、さぞお喜びでござらう。

兵部　惡五郎どの、御推量下されい。一人の娘。行くへ知れぬと承り、心苦しき折に幸ひ、これにて少しは安堵の思ひ。して、敷島を同道の

沼平　女中は即ち御門内へ。下部が運びに。

ト向うを見て

アレ〳〵、最早お乘り物が

ト時の太鼓になり、向うより、前幕の乘り物を、勘六と紅葉、擔いで出て來る。後より瀧川、駕籠に引添ひ、出て來り、乘り物は舞臺下の方へ下ろす。瀧川は、花道に扣へる。

紅葉　ヤレ〳〵、しんどやの〳〵。大汗になりましたわいな。

勘六　モシ〳〵、どうぞお水を一つ下さりませ。

ト沼平、手桶の水を汲んで出す。

兵部　すりや、その乘り物が

瀧川　即ち此方の御息女、敷島さま、御別條なう、お送り申しましてござります。

秋篠　お女中樣。

兵部　その女中が、秋篠が話しに聞きし、昨日娘が難儀の場所に

濱町　ほんに、よう深切ないつくしみ。御所方と聞きしが、そんなら、あの女中であつたかいの。サ、これへ／＼。

瀧川　ハイ／＼、左樣に御叮嚀に御意遊ばしましては、お請けの致しやうもござりませぬ。さりながら、昨夜より御難儀遊ばしました、御息女樣は、イザ

ト乘り物の戸を明け、敷島の手を取り、兵部の側へ連れて行く。

敷島　ヤ、父上樣。

濱町　敷島、戻つたかいなう。

兵部　承れば、昨夜、大津の追分にて、思ひがけなき狼藉者に出合ひしとの訴へ。行くへ知れぬと思ひしに、無事に屋敷へ歸る事、兵部が安堵、この上があらうか。

敷島　それと申すも、あの女中の、いろ／＼との心遣ひ。ようお禮を仰しやつて下さりませいな。

左五　誠に、申しやうもなき、命の親と申さうか。拙者も手を突き、御禮申すでござる。

秋篠　殊に、皆々樣まで、身に引受けてのお世話の段。サア／＼、そこは端近。

ト勘六、紅葉が手を取り、よき所へ敬ひ

秋左　エ、有り難う存じまする。

勘六　これは／＼、其やうになされましては、却つて迷惑に存じまする。

紅葉　サ、お手をお上げ下さりませ／＼。

濱町　これはしたり、命の親も同然なお女中。マア／＼、あれへお通し申した上。

兵部　左やう／＼、先走りの者共が訴へにて、驚ろくまいか、屋敷の騷動。一家中評議の上、所々へ手分けして、人を走らせ、諸神諸佛へ加持祈禱。その佛神の應護にや、其許の情を以て、恙なう送り下さる段、岩木兵部、生涯この恩は忘れ申さぬ。エ、忝ない。サ、先づこれへこれへ。

ト皆々敬ふ。瀧川、迷惑なるこなし

娘を始め、其方ども、この恩義を忘るゝな。

左治　誠に、この度の御恩の程、忝なう存じまする。
ト皆々辭儀する。
瀧川　これはしたり、何をマア、其やうに、御意なされましては、却つて迷惑いたしまするわいな。何を申すも、御息女數島さま、御難儀の場所へ、折よく參り合せて、私しどもの連れましたる、供の者へも、疵が附きましたばつかりに、私しどもゝ係り合ひになりまして、女子だてらに、兎や斯う申しました。其うちに、お屋敷のお名も知れましたゆゑ、打捨て置かれず、これまでお供いたしましてござります。マア〱、あなたを始め、附き附きのお方様に至るまで、お怪我もござりませず、此やうなお嬉しい事はござりませぬ。
兵部　イヤモウ、それと申すも、比類なき其許達の頓智。先程、詳しう承つたが、して、いづれの御所に勤めらるゝや。
瀧川　これはマア、有り難いお尋ね。主人の家名も、申し上げたうは存じますれど、その儀ばかりは、御免なされて下さりませ。併しながら、御所を勤めますると申すもの、陪臣の私し、名は瀧川と申しまして、親どもは、江州守山の郷士、お非番のお暇戴き、通りかゝりし道すがら、様子は知らねど禪僧と相見え、御息女へ無禮の有様。外に荷擔の輩もあり、その素振りでは、どうやら人に頼まれし様子。もしや常々、御息女様を、戀ひ慕ふ者があつて、その戀の叶はぬを根葉に持つて、無法慮外も又ある習ひ。随分、お心をお附け遊ばし、この後とても憚りながら、飼ひ犬にも御油斷なさらぬがよろしうござりまする。
トこれにて惡五郎、治太夫、顔見合せ、思ひ入れあつて
惡五　イヤハヤ、油斷のならぬ儀でござる。併しながら、數島どのには、かね〲身共、心ござれば、どうやら耳にかゝりまする、と申したところが、左様あつては何とやら、下世話に申す、臑に疵持つとやら。兵部どの、いづれ申し出したる御息女の儀は、申し請けたう存じまするて。
兵部　その儀も、倅當馬之丞、香爐の詮議も仕り、拙者が勘當、免りましたる上の事。云はゞ倅は、久次公よりのお咎め。その妹の、この數島。祝言なぞとは思ひもよらぬ。
惡五　すりや、當馬之丞どのへ、勘當が免りないうちは、この返事はならぬとな。

兵部　なか〱左樣。

惡五　然らば御子息當馬之丞、越度となつたる香爐の在所、相知れ御歸參あつた上では、否でも應でも申し請けまする。兵部どの、先程より、何かとお心遣ひ、最早拙者は罷り歸らう。

兵部　最早御歸宅なさるゝか。

濱町　惡五郎さま、娘が難儀を、お心におかけ遊ばし、忝なう存じまする。

惡五　なんの〱、御息女を申し請くれば、身共が女房、心にかけいで、なんと致さう。左五郎、さうではないか。

ト左五郎に目を附ける。

左五　こりや、さうありさうな儀でござりまする。

兵部　然らば、惡五郎どの。

惡五　兵部御夫婦、瀧川どのとやら、いかい御苦勞……ドリヤ、歸宅仕らうか。

ト治太夫と沼平へ目顏にて思ひ入れあつて、唄になり、惡五郎、向うへ入る。

左五　合點のゆかぬ惡五郎どのゝ今の素振り。もしやこれなり敷島さまを、路次に於ての騷動も

瀧川　ハテ、意趣も遺恨も、みな戀路より起る習ひ。この上ともに敷島さま、隨分お心をお附けなされまして、ナ、モシ、御合點が參りましたか。

敷島　思ひがけない御恩の程、お禮もなか〱詞には。

瀧川　なんのマア、わけもない事御意なされまする。此やうに、めでたうお見送り申しあげました上からは、私しは、もうお暇申したう存じまする。

兵部　イヤ〱、瀧川どのとやら、御多用でもござらうが、申さば娘が命の親。せめて今宵一夜なりとも、お泊め申し、娘は勿論、某夫婦も、右の一禮。

濱町　不思議な緣にて、かゝる世話、定めし御多用ではござりませうなれど、妾が願ひ、瀧川どの、今宵は夜とともに話しませうわいの。

瀧川　左樣に厚う仰せ下さりまするを、無下に致すも却つて無禮。左樣なれば、お勸めに任せまして、今宵はお館に、殘りまするでござりませう。併しながら、路次の騷動、親どもが承りましたなれば、さぞや案じるでござりませう。

勘六　そりやお氣遣ひなされまするな。御前樣があの通りの御意。こりやア矢張りお二人とも、お殘りなさるがよ

ろしうござりまする。お館へは私しが、一走り歸りまして、右の樣子を、申しあぐるでござりませう。

瀧川　成る程、其方は先へ歸り、お知らせ申してたも。

勘六　ハイ〳〵、畏まりました。

紅葉　そんならわたしが、跡に殘つて、瀧川どのと一緒に、御馳走になるのかいな。

秋篠　それがようござりまする。瀧川どのは大事のお客。

濱町　必らず、お館に御案じなきやう

勘六　私しが、申し上ぐるでござりませう。

濱町　其方は、瀧川どのへの、お杯の用意しや。

三人　畏まりました。

瀧川　左樣なら、どなた樣にも、御免なされませ。

ト時の鐘、唄になり、勘六、向うへ入る。左五郎、治太夫、紅葉、秋篠、沼平、思ひ入れあつて奧へ入る。跡に兵部、濱町、敷島、瀧川、殘る。

濱町　イヤナニ、兵部どの、この家に預かるあの五郎市、幼なけれども盗賊の悴、親五右衛門が在所知れざる其うちは、當馬之丞が越度となりし、千鳥の香爐の詮議もならず。

兵部　悴が勘當も、みな五右衛門が爲せる業、岩木の家の大事には替へられぬ。申し譯なきその時は、預かり置いたる悴五郎市、もう助けて置かれまい。

瀧川　すりや、お噂に違ひなく、その五郎市とやら申す、盗賊の悴、當お屋敷に、お預かりでござりまするか。

兵部　如何にも左樣……遠慮に及ばぬ、瀧川どのとやら。サ、これへ〳〵。

瀧川　ハイ〳〵、必らずお心遣ひは、御無用に遊ばしませ。それはさうと、憚りながら、ちとあなた樣へ、お尋ね申したい事がござりまする。と申して、外の事でもござりませぬ。見ますれば、お武家方に、冠、裝束、うや〳〵しうお飾り遊ばしましたは、何か樣子のありさうな事。兵部さま、あのお裝束は、何ゆゑ斯樣に、御尊敬なされまするぞ。

兵部　オヽ、成る程、尤ものお尋ね。この兵部が先祖は、もと公家の家柄、裏葉中將俊豐といはれし大内人。時移り、代替り、内裏を守護の武門となり、この兵部まで四代に相成り、暫らく某浪人なし、弓矢、物の具、朝夕の、煙りの代になしたれども、先祖の冠裝束は、一命にかへても離さじと、持ち傳へしが身の幸ひ。

濱町　お召出しのその砌り、先祖の由緒お尋ねゆゑ、右の

裝束差上げしに、御賞美あつて、再び岩木の家再興。今月今日が忌日ゆゑ、先祖夫婦の裝束を、さてこそ床に飾り置きましてござんす。

瀧川　サア、定めし左樣な事もあらうと、數ならぬ私しも、推量いたしました。すりや、あなたの御先祖は、呉葉中將さま。筋目正しき岩木のお家。して、御子息當馬之丞さまには、何ゆゑ御勘當なされましたぞ。

兵部　定めし聞きも及ばれん。聚樂の御所にて、千鳥の香爐、紛失のその砌り、宿直は倅當馬之丞、殊さら香爐紛失のその席に、蜀紅の錦の唐の裝束、その片袖の落ちありしを、證據となして盜賊詮議に、倅は直さま館を立退き、兵部は卽ち久次公へ、申し譯に倅を勘當。

瀧川　すりや、御子息當馬之丞さまとやらは、親御樣の御勘當にて、このお館にお出でもなう

濱町　香爐詮議に國遠なし、殘るは娘敷島一人、それに昨夜の難儀と聞き、心も心ならざるに、伴ひ來られし瀧川どの。

兵部　娘敷島、この上ともに瀧川どのを、姉とも賴み、今の恩義を忘るゝな。

瀧川　そのお詞では私しも、却つて迷惑いたしまする。

トこの時、向うにて

呼び　お使者。

ト呼ぶ。皆々思ひ入れあつて

兵部　はや暮れ方に及んで、いづれよりのお使者なるか。コリヤ、娘、其方は、お裝束を取片附け、納めてよからう。

敷島　畏まりました。

ト裝束を廣蓋へ載せ、片付ける。

瀧川　お使者のお入りとござりますれば、私しは、暫らくこの場を。

濱町　成る程、そんなら案内いたしませう。

瀧川　左樣なれば、兵部さま。

兵部　瀧川どの。

瀧川　後刻お目にかゝりませう。

ト唄になり、濱町先に、瀧川が手を取る。瀧川、會釋あつて、敷島は裝束を持ち、奧へ入る。兵部殘る。

呼び　お使者。

ト呼ぶ。太鼓謠ひになり、向うより典膳、剃立て、上下、大小にて、出て來る。奧より左五郎、上下大小にて、手燭を持ち出る。典膳は、花道よき所にとまり

典膳　世尊寺中納言兼則よりの使者。お取次ぎ頼み存ずる。

左五　これは〳〵、兼則卿よりのお使者。夜陰と申し、御苦勞千萬。先づ〳〵、これへお通りあられませう。

典膳　許しめされい。

ト鳴り物の切れ。典膳、上座へ通る。兵部、思ひ入れあつて

兵部　世尊寺中納言どのよりのお使者、御苦勞千萬に存じまする。拙者は即ち當家の主、岩木兵部、火急の御入來、麁服の段、御容赦なし下さりませう。

典膳　さては其許が、岩木兵部どのとな。拙者ことは、世尊寺中納言兼則よりの使者、福島典膳と申す者。主人兼則、申し越せしは、別儀でござらぬ、先達て聚樂の御所にて、千鳥の香爐紛失、その砌り、落しあつたる蜀紅の錦の片袖、當家の御子息當馬之丞どの、預かりにて御持參あつて、盜賊詮議に立越えられしとも、まつた館に御所持とも承る。さるに依つて、主人兼則、內々拜見いたしたく、其方參つて暫しが間、その蜀紅の錦の片袖を、借り受け來れと、指圖を受け、わざ〳〵參つた使者のあらまし、段々斯くの通りでござる。

兵部　すりや、蜀紅の錦の片袖、兼則卿、內々御覽なされたいとのお使者とな。

典膳　如何にも左樣。

兵部　御內意とござれば、如何にも錦の片袖、御內見に入れませう。

左五　アイヤ、御主人樣、その片袖は當馬之丞さま、御所持あつて、このお館には。

兵部　イヤ〳〵、氣遣ひ致すな。斯樣な事もあらんかと、錦は即ち座敷の內に。ヤア〳〵、濱町、錦の片袖、持參いたせ。

濱町　畏まりました。

ト合ひ方になり、濱町、三方に袱紗を掛けし錦の片袖を持ち、裲襠姿にて出て來り、典膳の前へ差置き、下へ下がり、思ひ入れあつて

蜀紅の錦の片袖、イザ、御內見下さりませう。

典膳　これが錦の片袖、唐裝束、香爐紛失のその場所に、落ちてあつたる片袖とな。

濱町　如何にも。

典膳　ドレ。

トいろ〳〵改め、思ひ入れあつて

成る程、世にも稀れなる錦の片袖。イヤ、また格別、然らば、この品持参仕つても、苦しうはござるまいかな。

兵部　兼則卿より御内見とござらば、苦しうござらぬ、御持参なされい。

左五　アヽイヤ、千鳥の香爐詮議の手がゝり。當屋敷に預かり置く、五右衛門が悴五郎市、彼れが罪科も、主人よりの日延べを以て

濱町　奥座敷に牢をしつらひ、出入りの鍵は左五郎が預かり。かゝる罪人、お預かりの上なれば、片袖の御内見も

兵部　苦しうない。お使者には、御持參あつて

典膳　内見の上、直さまお返し申すでござらう。然らば、岩木兵部どの

兵部　お使者御苦勞。

左五　お見送り仕りませう。

典膳　ドリヤ、立ちませうか。

ト合ひ方、三方のまゝ持つて、花道へかゝる。この時、瀧川、出かゝりゐて

瀧川　イヤ、お使者には、暫らくお待ちなされませ。

典膳　使者に待てとは、身共が事か。

瀧川　如何にも左樣でござりまする。

ト典膳、立歸り、思ひ入れあつて

典膳　女中、身共に待てとは、用事ばしあるか。

瀧川　左樣でござりまする。承れば、蜀紅の錦の證據の片袖、お受取りのお役目。御家名を承れば、福島典膳さまと仰せあるが、して、いづれよりのお使者でござりまするぞ。

典膳　ハテ、くどうも根問ひする女中。身共は即ち、世尊寺中納言兼則卿よりの使者でござる。

瀧川　すりや、兼則卿よりのお使者とな。

典膳　なか〳〵左やう。

瀧川　中納言さまよりのお使者とあれば、御内見のその品、私しへお渡しなされ、とく〳〵お歸りなされませ。

ト典膳、思ひ入れあつて

典膳　待て、女。合點のゆかぬ今の一言。兼則卿よりの使者なれば、なぜこの品をお身に渡して、立歸らねばならぬのぢや。

瀧川　胡亂者ゆゑ。

典膳　そりや、何者か。

瀧川　お使者にお立ちなされた典膳さまが。

典膳　ヤア、黙れ、女め、この典膳を胡亂者とは、なんで胡亂だ。その譯云へ、吐かせ。返答に依つては女とて容赦はせぬ。兵部どの、して、この女は、おてまへの身寄りか、但しは召仕へか。
兵部　アイヤ、その女中は、御所方より
濱町　仔細ござつて參つた女中。
典膳　して、御所方とは、いづれよりの
瀧川　御主人樣は誰れあらう、世尊寺中納言兼則さま、その奥勤めの、瀧川と申す者。
典膳　ヤ。
ト悄りこなし。
兵部　すりや。瀧川どのには、兼則卿の
濱町　奥勤めの女中とな。
瀧川　主君の館に見馴れませぬ、お使者のお面。殊に福島典膳とは、承らぬあなたの御家名。察するところ紛れ者。その品騭はんその爲に、入込みしか、但し又餘人に賴まれ參りしか。惡い所へこの瀧川、參り合せてあつたゆゑ、僞はり騙りのお使者の素性、もう好い加減に、取措かんせいなア。
典膳　すりや、女めは世尊寺の
瀧川　奥を勤めるこの瀧川が、見知らいでよいものかいなア。
左五　紛れ者なら、繩打つ曲者。
典膳　ア、コレ、全く以て。
左五　但しは、賴まれ參つたか。
典膳　サ、それは。
左五　白狀いたすか。
典膳　サ、それは。
瀧川　サア
典膳　サア
皆々　サア／＼／＼
瀧川　なんとでござんす。
典膳　エ、、いま／＼しい、破れかぶれだ。この片袖を
ト錦を抱へ、三方を捨て、逃げんとする。左五郎、寄つてかゝるを、突き廻し、瀧川へかゝつて、ちよつと立廻りあつて、叶はじと思ひ、錦を瀧川へ打ちつけ、上の方にある手水鉢へ上がり、萩垣を越えて逃げる。皆々、思ひ入れあつて
左五　今の曲者、取逃がせしか。
兵部　門々堅め、詮議いたせ。

左五　ハツ。
ト一散に奥へ入る。瀧川、錦を取つて
瀧川　今の曲者が、捨て置いたるこの片袖。イザ
ト兵部の前へ持つて行く。兵部、取つて
兵部　オヽ、それこそ誠の品ならず、眞赤な似せ物。
瀧川　ヤヽ、すりや、この品は、似せ物でござりまするか。
兵部　斯樣な事もあらんかと、拵らへ置いたる錦の袖に、心をかくるは、必定香爐の盜賊の餘類。
濱町　誠の錦の片袖は、當馬之丞が所持なし、香爐の行くへ、詮議の手蔓。
瀧川　さては、これこそ似せ物とな。流石は岩木兵部さま、お心附かれしお計らひ。誠の錦は、御勘當なされし
兵部　悴が所持して
瀧川　アノ、對紅の
兵部　コレ。
ト思ひ入れ。時の鐘、唄になり、三人よき見得にて、道具廻る。
本舞臺、三間の間、誂らへの庭先。屋體よき所に、五郎市を押籠めし牢屋の格子を見せ、座敷には燭臺を灯し、爰に敷島、誂らへの葛籠の紐を解き、右の冠と裝束を、葛籠の中へ納めてゐる見得にて、道具とまる。
ト矢張り時の鐘、合ひ方にて、敷島、裝束を葛籠に納め
敷島　父上の仰せの通り、お裝束は殘らず、この葛籠の内へ、早う納めて、あの瀧川どのへ。
ト蓋をしようとする時、風の音烈しく、燭臺の灯、消える。
アヽコレ、灯火が消えたわいの。灯を持ちや／＼。
ト手を打つ。矢張り捨て鐘、蟲の音。忍び三重。この聲をしるべに、下の萩垣を押しわけ、惡五郎、窺ふ。奥より沼平、治太夫、窺ひ／＼出て來て
沼平　治太夫さま／＼、五郎市めが牢の鑰は、モシ、この通り盜みました。
ト暗がりにて、探り／＼渡す。
治太　出かした沼平。鑰は身共が預かつた。それにつけても、惡五郎さまは、お忍びなされたかしらぬ。
ト惡五郎、この聲を聞いて

惡五　コレ〳〵、治太夫、沼平。惡五郎は爰に居るワ。
兩人　ヤア、お忍びなされましたか。
惡五　して、引ツ浚ふ敷島姫は。
ト敷島、これを聞いて
敷島　エヽ、アノ、わたしは。
惡五　今のは正しく
治太　敷島どの。
沼平　逃がしはせぬぞ。
ト探り〳〵追び廻し、三人寄つて、敷島を捕へ
惡五　コレ、縛るがよい〳〵。繩は無いか。
治太　心得ました。沼平、繩を持て〳〵。
沼平　繩も即ち用意仕りました。
ト繩を出して縛らうとする。敷島、逃げんとするを、三人、探り寄つて捕へるはずみに、葛籠に行きあたり
コレ〳〵、爰に葛籠がござります。この中へぶちこみませうか。
惡五　何にしろ、縛れ〳〵。
ト暗がりにてあせる。この時、濱町、紅葉、探り〳〵奥より出る。敷島、逃げんとして、濱町に行きあたり、濱町、その手を取つて、そろ〳〵と奥の方へ行く。紅葉、何心なく出かゝるを治太夫、捕へ
治太　ドッコイ、逃がさぬ。
惡五　捕まへたか。聲立てさすな。
沼平　心得ました。
ト沼平、手拭を取つて紅葉に猿轡をはませる。此うち濱町、敷島の手を引いて奥へ入る。
惡五　コレ〳〵、敷島は身共が受取つた。裏門口の塀を越え、片時も早く立退く手段。
沼平　奴が案内いたしませう。
治太　少しも早く。
惡五　合點だ。
ト矢張り忍び三重、捨て鐘、蟲の聲。惡五郎、紅葉を引ツ抱へ、沼平附いて駈け出し、桜垣を破つて逃げる。治太夫、捨ぜりふにて跡に殘る。この時、左五郎、手燭を隱し、窺ふ。瀧川、この後へ、窺ひ〳〵出てくる。
治太　南無三、心急くまゝ、五郎市めが牢の鍵。コレ〳〵、惡五郎さま〳〵…………アヽ、イヤ〳〵、何もあなた方に渡さずとも、失つてしまふか、五郎市を逃がしさへすれば、左五郎めが難儀。マア、この鍵を

ト思ひ入れ。此うち瀧川、後に心遣ひ。左五郎、思ひ入れあつて

左五　ナニ、身が預かりし鍵とや。

ト治太夫を捕へる。この灯にて、膽を潰し

治太　ヤア、左五郎だな。そんなら様子を

左五　何もかも皆聞いた。大切な囚人を、預かりの牢の鍵、失はうとは野太い治太夫。その鍵、渡せ。

治太　それ聞かれては、この身の大事。左五郎、くたばれ。

ト抜いて切りつける。左五郎、立廻つて、この手を捕へ

左五　その鍵、渡せ。

治太　イヽヤ、ならねえ。おのれ、くたばれ。

ト切つてかゝる。立廻りあつて、鍵をよき所へ捨てる。左五郎、取らんと駈けよる。治太夫、切つて行くゆゑ、是非なく抜き合せ、立廻り烈しく、合ひ方になり、立廻りのうち、瀧川、窺ひよつて右の鍵を取上げ、牢の口へ探り寄る。この間に二人は相討ちになる。瀧川、心急く思ひ入れにて、錠に鍵を合せる。兩人、深手を負ひ、よろ／＼して

左五　おのれ治太夫。

治太　左五郎、覺悟。

ト立廻りのうち、瀧川、以前の鍵を持つて、探り寄り、錠を明ける。錠の音、きびしく聞える。

兩人　ヤヽ、あの音は。

ト瀧川、これにて驚ろき、たぢろぐはずみに、思はず明けたる葛籠に行きあたり、探り見て、キツと思ひ入れ。左五郎、立廻つて治太夫を捕へ

左五　動くな。

ト思ひ入れ。時の鐘にて、よろしく、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、正面、練り塀。見越しの松。よき所に用水桶。塀の内に障子を閉てたる二階を見せ、上の方に水門、下の方に井筒。すべて岩木兵部屋敷、裏門口のあたり。爰に惡五郎と沼平、紅葉を引附けゐる見得。時の鐘だらに、蛙の聲夥しく、道具とまる。

沼平　モシ／＼、惡五郎さま、敷島さまは、首尾よくお手に入りまして、おめでたうござりまする。

悪五　これといふのも、治太夫と其方が働らき。出かいた出かいた。その代りに、褒美はしつかり遣はすぞ。
沼平　エヽ、有り難うございます。もう爰は屋敷内と違ひ、外濠の水門口。なんと、爰らで日頃の思ひを、お晴らしなされませぬか。
悪五　身共も左様は存ずるが、何を申すも其方が、見張つてゐるうちは。
沼平　ハテサテ、奴めも、通り者でござりまする。あなたの思ひをお晴らしなさる其うちは、下郎は此方で、後向きの地蔵々々。
ト下の方にあちら向く。
悪五　流石は沼平、通り者め／＼。コレ／＼、敷島、奴めは、あの通りの大通だ。なんと、この門先で日頃の思ひをかのへ申、庚申待とは、どうだ／＼。ほんに、それにしても、縄を解いてやらう。
ト紅葉が縄を解き
ヤレ／＼、手が痛んだであらうな。サア／＼、爰で思ひを晴らさせ給へ。
ト紅葉に抱きつく。
紅葉　エヽ、好かねえなう。
ト悪五郎を突きとばす。沼平、聞きつけ
沼平　ヤア、どうやら敷島さまでは
ト立ちよるを
紅葉　折助め、覚えてゐろよ。
ト横ツ面をくらはし、東の口へ駈けて入る。両人、跡を見送り
悪五　コレ／＼、沼平、彼奴は、なんであらう。
沼平　なんだか一圓、合點が參りませぬ。
悪五　べら坊め、とんだ棒へ玉を授けたな。この上は治太夫めに逢つて、いま一詮議せねばならぬ。
沼平　左様でござります。この奴めも附いて參り、今夜中に敷島どのを盗み出し、今度は幸ひ、治太夫さまと奴めが、拵らへ置いたるお庭の井筒へ飛びこめば、御門外のこの井戸へ、通路の抜け道。
悪五　併し、覚えし見越しの松。いま出た爰から忍ぶが近道。沼平、ぬかるな。
沼平　心得ました。
ト時の鐘、蛙の聲になり、悪五郎と沼平、用水桶へ上がり、見越しの松へ取りつき、内へ忍ぶ。この時向うより五右衛門、前幕の坊主形、頭巾、衣にて、ウツ／＼

出て來り

五右　昨日大津の追分で、仕事をしかけた娘が、屋敷はこれなる岩木兵部。妨げひろいだ女めが、惑つてうせた上からは、あの女めも、この屋敷に。ア、コレ、今夜は忍び込んで、昨日の娘を引ッ淺ふ工面。ハテ、何處から忍んで、入らうな。

ト窺ひゐる。水門口の方、バッタリと音して、蛙の聲一度に啼きやむ。五右衞門、目を附け

今の物音。蛙の啼く音一時にやみしは。ハテナ

ト又バッタリと物音する。五右衞門、窺ふ。合ひ方になり、正面の水門を上げ、内より、件の葛籠を、水に浮して瀧川、扱帶を附け、これを扣へて出る。後より沼平、窺ひ〳〵附いて出る。五右衞門、さてはト思ひ入れ。瀧川、やう〳〵と舞臺よき所へ葛籠を置き、ホッと息をする。五右衞門、窺ひ見て

五右　ヤ、わりやァ昨日の

瀧川　エ。

ト驚ろき、行かうとする。五右衞門、葛籠に手をかけ、紐を枷に立廻りあり、紐解ける。瀧川、蓋へ手をかけ、兩人よろしく立廻りのうち、葛籠の中より五郎市出かかり

五市　ヤ、父様。

五右　五郎市か。

瀧川　モシ。

ト思ひ入れ。五右衞門、五郎市の顏を見て、思ひ入れあつて

五右　石川や、濱の眞砂は盡きるとも

瀧川　世に盜人の

ト兩人、思ひ入れあつて、蓋をシヤンとして

兩人　種は盡きまじ。

沼平　曲者、

ト五右衞門に取りつく。着たる衣と頭巾脫げる。立廻りに五右衞門、下は誂らへの形になる。沼平、葛籠へかゝる。五右衞門、沼平を投げる。この時、下の非常の内より、以前の典膳、大小上下、股立ちにて、龕燈を持ち、窺ひ出る。沼平、典膳へかゝるを、見事に當てる。五右衞門、葛籠へ腰をかける。沼平、下手の方へ倒れると、途端一度に捨て鐘の頭を打ちこむ。典膳、大小を取つて、五右衞門へ差出す。これを取つて、こなしあつて

五右　三上の佐渡助。
典膳　お頭、お内儀、手筈を違へず
瀧川　氣遣ひさんすな。上首尾々々々。
典膳　めでたうごんした。
五右　して、失ひし蜀紅の錦の片袖、正しくこの家に。
典膳　頭の指圖に入込む佐渡助。最前見せしは似せ物にて、
　　　倅當馬がその片袖、持參いたして、香爐の詮議に。
五右　されども、もしや、岩木の館に。
　　　ト此うち沼平、心附き、起きあがつて
沼平　さては香爐を奪ひし盜賊。
典膳　それ聞かれたら
　　　ト引附ける。立廻りにて沼平、振りほどき、一散に向
　　　うへ走り入る。典膳、忍び入れあつて
　　　後日の妨げ。
五右　行け。
典膳　合點だ。
　　　ト捨て鐘の送りにて、向うへ追ひ駈け入る。五右衞門、
　　　東の方を見て、典膳が殘せし龕燈を取つて、東の方へ
　　　灯を見せる。捨て鐘入り、誂らへの鳴り物にて、勘六、
　　　官八、外十人、いづれも忍び頭巾、黑の股引、手甲、
　　　黑四天の形、一本差し、草鞋。めい／＼龕燈を照らし、
　　　東の口より中の歩みを通り花道へかゝり、本舞臺へ來
　　　る。瀧川、此うち五右衞門へ重ね草鞋を穿かす。十二
　　　人、上下に立ち別れて、忍び入れあつて
皆々　お頭。
五右　コレ。
勘六　虜となつたる五郎市どのを
官八　取戻してか、但しはまだか。
勘六　樣子次第で
皆々　わしらが共々。
五右　氣遣ひ致すな。女房が働らきで、これなる葛籠へ。
瀧川　わたしが身腹は痛めねど、お前の爲には先妻の、義
　　　理ある倅の五郎市どの、今からわたしが大事の獨り子。
五右　其方はこれより南都へ赴むき、實名包む、我が隱れ
　　　家。
皆々　送りは、わしらが。
五右　コリヤ、音高し。裏門より
　　　ト屋敷の内を龕燈にてキッと見る。この時、二階の内
　　　にて、兵部「エイ」と懸け聲して、割り笄に書き物
　　　を卷き、龕燈日當てに打ちつける。五右衞門、打ち落

し、嘲笑つて
・ナニちよこ才な。古手な手裏劍。
ト見て
されども添へし、この書き物。
ト取つて見る。皆々、龕燈をさし向ける。
ヤ、、、、この笄は覺えある、女房、其方が捨て子の砌り、添へてあつたる形見ぞと、我れに渡せし笄と、一對揃ふ割り笄。ドレ
ト差したる笄を合せろ。
瀧川　そんならもしや親の形見と、五郎兵衞どのが日頃の話し。
五右　一對揃ひし笄の、模樣は卽ち千疋猿。
瀧川　この書き物の
ト覗き、五右衞門へ向ける。皆々、龕燈を照らす。五右衞門、見て
五右　「今宵娘を同道せし、女が振舞ひ彼れは正しく我が家に預かる、五郎市を奪はん爲、恩義を見せて屋敷の案內知らんと、入込みし盜賊の餘類ならん、先年我れら浪人の砌り、庚申の夜に誕生の女子一人、母は產後に病死なし、四つの歲まで養育なせしが、仕官の妨げ是非なくも、割り笄を形見に添へ、堅田の浦へ捨て子となす、今さら思へば今宵の女、それと推量いたせしゆゑ、知らぬ顏にてこの家を見遁がし、申し譯には身が皺腹、後の證據と割り笄、心を附けて披見なし、憎くき女の、末々見屆けくれるべきものなり、月日、岩木兵部」……宛名を憚るこの文言。すりや、我れ〳〵が計略を
ト書き物を瀧川に渡す。
瀧川　覺り知つたるこの文體。憎くき女を末々まで、賴むとお書きなされしは
勘六　さてはこの家の
皆々　主たる
五右　岩木兵部は其方が
瀧川　實の父さん。
五右　舅であつたか。
瀧川　絕えて久しき娘とも
五右　知つたもわざと白浪に
瀧川　連れ添ふのみか現在の
五右　親を僞はるその上に
瀧川　お命捨てさす不孝の罪。
五右　堪えよ女房。

瀧川　こちの人。

五右　知らぬ事とて

皆々　變つた縁で。

五右　コリヤ。

瀧川　これが形見の、この御手跡。

五右　コリヤ、鬼の女房に

　トきつとなる。瀧川、思ひ入れあつて

瀧川　鬼神の譬へ。

五右　それ忘るゝな。

瀧川　アイ…………雜喉はとゝ皿。

五右　夫に附くが

瀧川　女房の習ひ。

　ト兩人顔見合せ

五右　滿足。

　トにつたりと思ひ入れ。夜明けの鐘鳴る。諸所にて鷄の聲する。松の枝より惡五郎、窺ふ。

皆々　最早鷄明。

五右　今宵は此まゝ。

瀧川　皆さん達も

皆々　そんなら、お頭。

　トこの時、二階の障子を明け、濱町、出かゝり

濱町　ヤ、、兵部どのには、何ゆゑ切腹。

瀧川　すりや、書置に違ひなら

　ト駈けよる。五右衞門、隔て

五右　コレ、そちや五右衞門が女房でないか。

　トきつと思ひ入れ。

惡五　さてこそ五右衞門。

　トこの聲に五右衞門、礫を打つ。惡五郎、苦しみ、松より舞臺へ落ちて氣絶する。この音に二階は障子をシヤンと閉す。瀧川、ツカ〳〵と葛籠の方へ立ちかゝり、思ひ入れあつて、皆々一緒に、後向きにて龕燈を照らし、二階を見上げる。惡五郎、心附き、五右衞門へかゝるを、五右衞門、拔討ちに切り倒す。瀧川、二階の方を見て思ひ入れ。五右衞門、拔き身をヒラリと出す。瀧川、手拭にてこれを押へる。木の頭。血刀を拭ふ。

　キザミにて、よろしく

ひやうし幕

第一番目五建目　小西是齋宅の場

役名――小西是齋。同娘、綾女 實ハ大明の芙蓉皇女。番頭、新作。手代、與助。庄屋、頓兵衛。下女、お露。同、おりん。醫者、是輪道庵。下男、杢助。丁稚、與惣吉。百姓、作左衛門。同、戸平。盜賊、筑紫の權六。

本舞臺、三間の間、一面の二重舞臺。上の方に障子屋體。見附け、唐紙の襖。下の方、大臣柱の外、二間の屋體。これに是齋の看板、藥店の飾りつけ。眞中に銅壺、鑵子を直し、新作、手代にて、仕出しへ藥を振舞つてゐる。與助、藥を振舞つてゐる。東西二重舞臺の間、中庭、植込み。ズッと奥に土藏を見せ、すべて是齋の内。二重舞臺に是齋、澁紙の上に小判小粒を並べ、金盥にて金を洗ひゐる。お露、腰元の形。おりん、下女の形。歌がるたを取つてゐる。下の方に頓兵衛、庄屋の形。百姓二人、願ひの體。琴唄にて幕明く。

新作　本家和中散、是齋でござい〳〵

仕出　爰の和中散は、近江の梅の木村よりは好うござる。

ト云ひ〳〵藥を服む。

頓百　どうぞお願ひ申しまする。

是齋　これはアタやかましい。叶はぬ事ぢや。

つゆ　天津風、雲の通ひ路吹きとぢよ。

りん　乙女の姿しばしとゞめん。

トそこらを尋ね、お露、下の句を取る。

オ、好かん。また取られたわいな。

仕出　大包みを五服下されまし。

與助　百七十二文でござりまする。

ト藥をやる。仕出し、取つて、向うへ入る。

新作　道修町の近藤からのこの書附け。トウヤクが八斤、クワッコウが十二斤。

ト書附けを見て、破り

みな刻んで置いたか。

與助　昨夜、藥研にかけて置きました。

つゆ　おほけなく、浮世の民におほふかな。

りん　坊さんの歌といふと、わしが取るほどにの。

是齋　ヤイ、女ども、役にも立たぬ慰みをする手間で、絲

を紡ぐか、苧を績むか、仕事しをらぬか。何奴も、此奴も、始末をして、金銀を貯めい。コレ、見をれ、この如き洗ひ清め、藏の內へ取入れ取入れ、天下茶屋の是齋は、萬福長者と云はるゝやうに稼げやい。

新作　みな聞きましたか。旦那は、この海道での大身代。

與助　金が金を儲けるとは、此方の事。

新作　その身より、まだ結構な、このお家の子寶といふはこちの綾女さま。御器量なら氣立てなら、どこに一つ云ひ分なしのお生れつき。シタガ、唖ころとは、あつたらお孃樣を、唖で置くとは惜しいものなア。

つや　人もおし、人も恨めし味氣なく。

りん　それはさうと、京のお客人は、どこへお越しなされたしらぬ。

新作　居候ふどのは、神參りすると云うて、今朝早う出られたが、もう戻られさうなものぢや。

りん　早う戻りはなされいで。待たるゝとも待つ身になるなとは、よう云うた事ぢやなア。

頓兵　是でも非でも、聞いてもらはにや措かん。

百姓　さうとも〳〵。

新作　モシ、旦那、この衆達は、何ややかましく云はれまする。

ト新作、與助、此方へ來る。

頓兵　イヤ、この住吉海道近在、三ケ村の庄屋。この領分が、近年の洪水で、川筋の破損。

百一　村の年貢、先納の御免下さるやうにと、御地頭の土屋郷左衞門さまへ願ひますれば、元〆め是齋さまの、奥印が無ければ、取上げはならぬとの事。

百二　そこで、この通り、願書を認め、是齋さまへ、印形頼みに來ました。

三人　どうぞお願ひ申しまする。

ト願書を出す。

是齋　これは、やかましい事ぢや。この是齋は、藥屋なれど、久吉さまのお腰をお掛けなされてから、天下茶屋といふお名を貰ひ、殊に世尊寺中納言さまへ御用を足せば、他行の節は帶刀御免、常の藥屋と思うたら當てが違ふぞ。その願書お取上げあると、此方の利得にならぬ。奥印する事は、マア、よしませうかい。

新作　旦那があのやうに云はつしやれば、今日はマア歸らつしやい。手代が寄つて願うて、奥印の出るやうにしませうほどに、明日にも來て見たがよい。

頓兵　コレ、一日違いと、一日だけ咽喉が干上がりますわいの。
百一　妻子眷屬が飢ゑて死にまする。
百二　一人の心で、大勢を殺す氣か。
三人　どうでござるわいの。
是齋　まだ〳〵云ふか。土ほぜりどもが、飢えやうが、のたれ死しやうが、情を知つては金が貯らぬ。この願書も反古同然。役にも立たぬ事を。
ト引裂く。
三人　ヤア。
是齋　達て吐かさば此方から、池頭へ訴へて、繩を打つて、牢へぶちこまうか。
ト三人、悧りして、花道へ逃げ行き
頓兵　コレ〳〵、なんと詰まらぬものではないか。
百一　この上は、村々が寄り合うて
百二　一騎千騎の切端する。
三人　必らず後で、後悔さつしやるな。
是齋　どうなりと勝手にひろげ。
頓兵　オヽ、勝手にする。
トつか〳〵と跡へ戻る。

百姓　コレ、一番云ふ氣か。
頓兵　イヤ、草履を忘れた。
ト合ひ方になり、草履を取つて、三人、向うへ入る。
是齋　ハヽヽヽヽ、役にも立たぬ事を……時に、貸し金の方の勘定は、大抵片附いたか。
新作　左樣でござりまする。
是齋　與助、其方は、利限の催促。寄越さぬ奴があるなら、鍋釜でも疊でも、まくつて戻れ。
與助　ハイ〳〵、行て參りませう。
是齋　女子どもは、仕事にかゝれ。
りん　アヽ、西を見ても、東を見ても、嫁入りせぬのはわし一人。ドレ、飯なと炊かうか。
新作　さらば爰らを片附けて
與助　利限の催促。
是齋　洗うた小判を、ドリヤ、土藏へ納めようか。
ト唄になり、是齋、金箱を持ち、お露おりん附いて奥へ入る。與助は向うへ入る。新作、そこらを片附けてゐる。始終合ひ方。綾女、振り袖衣裳にて出て來り、歸りを待つ心。
新作　お孃樣、モシ〳〵、お孃樣。

ト脊中を叩く。綾女、新作を見て、奥へ行かうとする。

コレ〳〵、それはつれない。マアお坐り。ハテマア、下に居なさいな。

ト無理に下に居させる。綾女、奥を指さして、琴を弾く眞似する。新作も、同じやうに仕方して

エ、、奥へ行つて、琴を稽古すると仰しやるのかえ。

ト綾女うなづく。

そりやモウ、琴を弾くとも、跛を引くとも、勝手になされたがよいが、そりやお前、あんまり胴慾ぢやぞえ。そも内方へ奉公に來た、その日から、濡衣ぢやないが、可愛らしいと思うたが、縁と因果の初めにて、お主樣ともお孃樣とも、辨まへ知らぬ、コレ〳〵、この通り、拙ない筆に書き認めた濡れ文を、せめてお前の肌へなりとも

ト手紙を懷へ入れるを綾女、取つて投る。新作、取つて

コレ、そりやあんまり情ないぞえ。お前が讀まずば、わしが讀む。先づ、この封を押切つて、和らかな文句を聞いたら……ちよつとしめしよう〳〵、わしが思ひは深草の

ト綾女の向うへ廻り

いつそ身も世も堪らず候ふ。

ト綾女、文を取つて、寸々に裂く。

オヤ〳〵、お前、大事の文を破つたの。ようござります。お前がさうなりや、此方も破れかぶれ。押へつけても、云ふ事をきかすぞよ。

ト嫌がる綾女を追ひ廻すと、奥よりお露出て

つゆ　お孃樣、旦那樣がお呼びでござります。

新作　エ、、氣のきかぬ。これが旦那どころかえ。

ト追ひ廻す。お露、新作を押へ

つゆ　ちやつとお出でなされませいなア。

ト綾女、新作を打つ眞似して、奥へ入る。お露、新作を突き放し、奥へ行かうとする。新作、とめて

新作　ドツコイ、お孃樣はつれなくも、情深いはお露の君。今の代りに

つゆ　エ、、トツトモウ、誰れ彼れなしに、アタ嫌らしい。嫌ぢやわいなア。

新作　其方は嫌でも、おれは戀ぢや。

ト抱きつく。

つゆ　あれえ。

ト逃げ廻る所へ、おりん出て、引分ける。

りん　番頭さん〳〵、旦那が今、内藏で呼んでぢやわいなア。
新作　内藏どころか。
　ト お露の方へ行きにかゝる。おりん、留める。
つゆ　エヽ、アタ嫌らしい。髪も頭も、臺なしになつたわいなア。
　ト お露、ピンシヤンして奥へ入る。
新作　エヽ、いま〳〵しい。肝心の所で旦那が呼ばつしやるゆゑ。ほんに、爰の内にも、旦那が無くばよからうなア。
　ト 呟き〳〵、奥へ入る。おりん殘つて
りん　なんの事ぢや、色事の稽古所のやうぢやわいなア。これにつけても、後の月から、逗留してござる京のお客、あのお孃樣がきつい惚れやう。啞ごろの悲しさには、直直にも口說かれず、どうぞ取持つてくれと、此りんを頼ましやんす。成る程、取持つてと、受合つたわしが心は、お孃樣をだしに使うて、わしが口說いて見たい心。此やうに辛苦をするも、みな男ゆゑ。戀すれば人は心のなからまじとは、よう云うた文句ぢやなア。
　ト 謠らへの琴唄になり、おりん、鏡臺を持つて來て、髪など撫でつけてゐる。
〽白雪の、初音は樹々にありやせん、色のなまりは見る目の癖か。
　ト 此うちおりん、いろ〳〵思ひ入れあつて、そこらに落ちてある濡れ文、註文書、最前の願書など拾ひ集め、いろ〳〵こなしあつて
さうぢや。これを斯うして、斯うやつて、跡は斯うして斯うなれば、わしが思ひはズル〳〵ベツタリ。遠い思案をしようより、これが近道。燈臺は元暗しぢやなア。
〽されば其の事今さらに、花の科ぞと知るは初瀨よ、又も吉野の古里さむく。
　ト 此うちおりん、こなしあつて、あたりを片附け、奥へ入る。向うより權六、五十日鬘、浪人者の拵らへにて、杜若を持ち、出て來る。後より與惣吉、丁稚の形にて、附きそひ出てくる。
權六　與惣吉どの、今日はこなたの案内で、好い慰みをしましたわいの。
與惣　天氣はようござりまするし、私しも、好い慰みでござりました。
權六　是齋どのも、さぞ待ちかねてござらう。サア、ござ

れ〳〵。
ヘ衣かたしく又打ちきせて、起きてゐなんせ明日の夜もあるに。
トこの唄にて本舞臺へ來る。奥より是齋、新作出てくる。
是齋 藏の締りはよいかな。
新作 ぬかりがあつてよいものでござりませうか。
ト權六、内へ來り
權六 只今歸りました。
是齋 これは〳〵お客人、今日はどれへ行かつしやりました。サヽ、これへ〳〵。
權六 御存じの通り、夜に入れば鳥眼の惱み。それゆゑに晝なども、背氣いたすゆゑ、今日は未明から出かけまして、住吉の近邊、委かしこと見廻り、住吉の社へも參詣いたし、何卒眼病平癒あるやうにと、祈誓をかけまして、境内の池に咲きありし、この杜若、四季咲きと見えまするを、一本所望いたし、御亭主へ土産、お床の間へ、お活けなされて下さりませう。
是齋 イヤモウ、手前は杜若より、正直の山吹が好物でござる。ハヽヽヽヽ。與惣吉よ、床の間へ活けて置けよ。
與惣 畏まりました。
ト花活けを取つて來て活けてゐる。
是齋 時に、新作や、お客人も御時分であらう。御膳をあげぬかいの。
新作 ひだるくば、臺所へ行つて食ふがようござりまする。お客おややら、居候ふぢややら、目まぐるしくてなるものぢやない。眼の養生が出來たら、キリ〳〵京へ行つてもらひませう。きなかにもならぬ事に、お客樣お客樣と、とんだ福の神を引込んで、嬉しがる者はお嬢樣ばかり。道理こそ、この番頭が云ふ事をきかぬ筈。
ト是齋を見て
イヤモ、番頭は、迷惑でござる。
權六 ハヽヽヽヽ、番頭どのは、いかう御機嫌が惡い。イヤ又、云はつしやるに相違はない。元來、京都の堂上方を勤めし身、仔細あつて浪人いたしたれど、親どもより内福でござるから、再び仕官の望みもなく、元より妻子を持たねば、この身一つ。國々の名所古跡を一見の爲、先づこの津の國へ參つてござる。ところに、フト眼病を煩らひまして、お見世を御無心申したが、緣の端か

手前に養生を致すやうにと、御深切に仰せらるゝ、其お詞に甘へまして、彼れこれと早二月あまり、初めは內障のやうにござつたが、お醫者を世話して下されてより、服藥した所爲か、この頃では鳥眼になりまして、夜は皆目見えねど、日のうちを助かりましたが、まだしも仕合せ。これと申すも、御亭主の恩義、忘れは措きませぬ、忝なう存じまする。

是齋　イヤ〳〵、禮には及びませぬ、初めからの約束で、旅宿の飯代、一日を一兩づゝと極めて、一ケ月に三十兩、それも先取り、二月分は受取りましたが、もう來月に間もござらぬ。今日は算用して下さるまいか。

權六　成る程、拙者も左樣に存じた。ナニ、與惣吉どの、床の間に、身共の革文庫がござる。これへ持つて來て下され。

與惣　ハイ〳〵。

ト花を活けてしまひ、革文庫を取つて來て

これでござりまするか。

權六　御苦勞々々々。イヤモウ、朝晩は香の物、晝は干物に搔立て汁の風味合ひ。一兩づつでは、廉いものでござる。

ト云ひ〳〵、鼻紙袋より鍵を出し、文庫を明け、金を出し、數へ

サア、三十兩、來月分の飯代、お受取り下されい。

是齋　これは御きんとうぢや。この調子では、一年に三百六十兩。兎角氣を長う、ゆるりと逗留なされたがようござる。

權六　それは忝なう存ずる。イヤ、お番頭。

新作　なんでござる。

ト腹の立つ思ひ入れ。

權六　イヤ、外の事でもござらぬが、慥か昨日の事でござつた。莨を切らしましたゆゑ、貴殿のを御無心申したれど、不承々々に、わづか二三服ほど下されたが、それも只貰ひましては心が濟まぬ。莨の代金五兩、お受取り下されい。

新作　ナニ、アノたつた二三服やつた莨の代が、小判で五兩。

權六　あまり少しなれども志し。

新作　ハ、、、、、これは〳〵、折角のお志し、左樣なれば申し請けませう。

ト氣を替へ

ハヽヽヽヽ今のやうに、口穢なく申しましたは、ありやア、なんでござりまする。男どもを叱りまする、番頭の口癖でござります。ハヽヽヽ必らず氣にさへて下さりますな。時に、御時分でござりませう。コレ〳〵、御膳をあげろ〳〵。

權六　イヤ〳〵、まだ空腹にもござらぬ。

新作　左樣なら御酒を。

權六　これはしたり、眼の養生に、酒は第一の禁物。構はつしやると、結句迷惑に存じまする。

與惣　お勞れでござりませう。お風呂でも焚かしませうかな。

權六　それは何よりの御馳走でござりまする。

是齋　成る程、風呂とは、よう氣が附いた。早う焚かしたがよい。

與惣　ハイ〳〵、おりんどのに左樣申しませう。

權六　風呂は飯代の外ぢや。水の代、薪の代、三兩ばかりでよからうの。

　トまた金をやる。

是齋　エヽ、又お金。これは妙ぢや。ハヽヽヽヽ。左樣なら、頂戴いたしませう。

　ト金を紙入れへ入れる。

權六　イヤ、是齋どの、この頃は世間が騷々しく、彼の盜賊なども徘徊いたすさうな。御大家の儀でござれば、隨分御用心なされたがよい。

是齋　それをぬかつてよいものでござらうか。內藏に二重底をしつらひ、鴨居、垂木、或ひは天井などに隱し置けば、氣の附く者は一人もござらぬ。

新作　殊に又、中庭の松ケ枝に、鉦を吊つて、もし盜人でも入ると、彼の鉦を打ちまする。それを合圖に、出入りの者が馳けつける、旦那の要害。ぬかる事ぢやござりませぬ。

是齋　イヤ、新作、飯代から風呂代、受取にしてあげませいやい。

新作　ハイ〳〵、私しが五兩の受取も、一緒に認めませう。

　ト硯箱を取つて來る。

權六　これはしたり、それには及びませぬわいの。

是齋　イヤ〳〵、几帳面にして置かぬと、後日に物が云はれませぬ。

新作　左やう〳〵。

　ト云ひ〳〵、一札を書く。この時、奧より綾女、出て

來て、權六を見て、いろ〳〵とこなしある。新作認め
しまひ
旦那の名代、番頭が自筆の書き判。サヽ、取つて置いて
下さりませ。
權六　達てとござらば、兎も角も仕らう。
トこの時、お露、茶を持つて出る。綾女、これを取つ
て、こなしあつて、お露を奥へやり、權六の側へ行
き、茶を出す。
これは〳〵、娘御のお手づから。忝なうござる。
ト茶碗を取る。綾女、こなし。
新作　お孃樣、折角書いた物を、お破りなされたな。
是齋　破つたとは、そりや何を。
新作　イヤ、そりやアノ、酸漿を根吹きにせうと思つた
を、ツイ破りましたと申す事サ。
是齋　何を吐かす。先づこの金を、神棚へ上げて、風呂が
沸いたら、新湯にはおれが入る。娘、其方は爰に居てお
客人の草臥れ休め、肩でも揉んであげませい。
ト綾女、嬉しがる。
これも只はならぬ。肩揉み賃が金子二兩。
權六　後刻算用を仕らう。

ト此うち新作、綾女にこなし。
是齋　新作〳〵。コリヤ、新作。
ト悄りして
新作　ハイ〳〵。
是齋　コリヤ、臺所へ行つて、風呂を手傳へ。
新作　アヽ、なんとせう。思ふ事、まゝならぬこそ浮世な
り。
是齋　これにつけても、金ぞ欲しけれ。
權六　是齋どのには、きついお好き。
是齋　ハヽヽヽヽ。イヤ、後に逢ひませう。
ト唄になり、是齋、思ひ入れ。新作、綾女の側へ行か
うとする。綾女、ピンとする。新作、ムツとしたるこ
なし。兩人、奥へ入る。あと合ひ方。
權六　イヤ〳〵、よく思へば、年若な娘御。斯樣にして居
つては人目が悪い。サヽ、奥へ行かつしやれ。身共が相
手は、この莨盆。あれへ行つて、鬱氣を晴らしませう。
ト脇へ行つて座る。綾女も側へ行つて座つてゐる。權
六、これを知らず
あの娘も、はや十六七でもあらうか。嫁入り頃を啞ころ
とは、ハテサテ、不便千萬な。

ト綾女、纖穗ないゆゑ、後に廻り、肩揉む。
誰れぢや〳〵……オヽ、綾女どの、まだ行かつしやらぬか。
ト後より綾女、手を伸ばし、權六の膝へ書く。
父さまが肩を揉めと云はしやんしたゆゑ。
ト讀み
イヤ〳〵、結句氣が張つて、つかへます。もうようござる。御苦勞々々々々。
トまた此方へ來る。綾女、また附いて來る。
この間から、下女のりんに賴んで置いた事、なぜ返事して下さんせぬ。
ト書くのを又讀み
成る程、承りましたが、おりんどのゝ云はるゝを聞けば、こなたが身共へ戀を仕掛けて、取持つやうにもあり又あの人が仕掛けるやうにもあり、とんと解りませぬ。
ト此うち在郷めきたる誂らへの合ひ方になる。
ホヽ、仕事が始まつた。町家に居る者に田畑を作らせる。百姓の業もさせるとは、イカサマ、斯う稼がねば、金銀も殖えまい。
ト莨をのむ。綾女、いろ〳〵こなしある。この唄のうち、向うより道庵、好みの醫者の拵らへにて出て來り
道庵　ものもう。
ト此うち綾女、いろ〳〵權六へ書いて見せる事あり、權六、手で、イヤ〳〵とする。それでもトいふこなしにて、いろ〳〵あり
ものもう。
トきつと云つても、返事せぬゆゑ
ものもう。
ト大聲にて云ふ。兩人、恟りする。奥より、おりん出て
りん　どうれ。
ト返事して出る。
道庵　是輪道庵、お見舞ひ。
ト權六、見て
權六　オヽ、道庵老。サヽ、これへ〳〵。
道庵　御病人には、大分端近うござる。
ト上へ通る。綾女、莨盆を持ち行く。
これは〳〵、當家の深窓に生ひたつ御息女。容顏美麗。
アヽ、たをやか〳〵。
りん　お茶あげませう。

ト持つて行く。

道庵　これは見事。美人かな〳〵。

ト茶碗を取る。

りん　道庵さま、こちや嫌いなア。

ト嫌らしく云つて、あちらへ行く。

權六　今日は近邊を歩行いたして、只今歸りましてござるが、のぼせまするゆゑか、少し痛むやうに覺えまする。

道庵　さうあらう。併しながら、少しでも歩行の成るは、これ拙者が藥の驗目。なんと名醫でござらうがの。

權六　イヤモウ、結構なお醫者にかゝり合せましたは、私しが仕合せでござりまする。

道庵　仕合せ〳〵。拙者元來、長崎の眼醫者でござつたが、さる如月上旬、當所へ引ッ越してござるに、早速數多の病家。鷄明より黄昏に至るまで、頗る多忙。檢脈配劑に暇がござらぬ。ドレ〳〵、眼病を伺ひませう。

權六　夜に入ると、一向に見えませぬ。

ト道庵、天眼鏡を出し、眼の中を見る事あつて

道庵　至つてむづかしき生來の内障であつたが、今では鳥眼になつた。コレ、もと心の臟と腎の臟との勞れより起る事。信心が肝腎でござる。ドレ、調合仕らうか。女子衆、昨日の藥を持たつしやい。

りん　ハイ〳〵。

ト藥を持ちゆく。懷より箱を出し、調合する。綾女、早う去なせと、權六へ、いろ〳〵仕方する。

道庵　先づさんぎしを用ひませう。又、爪づき轉んでも怪我のないやう、ほうきを一味加へまする。

權六　ハテ、ほうきを加へまするると、轉んでも怪我は致さぬかな。

道庵　ハテ、ほうき轉んでも地につかずでござる。

權六　これは御尤も。

道庵　又、さんれうを目方五兩ばかり用ひますと、夜分よく寢られまする。

權六　とは、どういふ儀で。

道庵　ハテ、爰にさんれう、かしこに五兩、これは夢かや現かや。

權六　ハヽヽヽヽ。

道庵　さて、洗ひ藥もなさるがよい。先づ黄連、山査子、明礬、これは洗ひ藥でござる。黄連は即ち法華經の黒燒でござるて。

りん　エヽ、黄連が、法華經の黒燒でござりまするかえ。

道庵　ハテ、南無妙わうれんげ經と申すではないか。
りん　成る程、左樣でござりまするな。
道庵　黄藥は禪寺の細末、黄金は閻魔の鐘撞き。
りん　ヱヽ、閻魔が鐘を撞きまする藥種がござりますかえ。
道庵　ハテ、わうごん。
りん　成る程。
道庵　山ひゝと申すは、山猿の劫を經たを猅々と申す。卽ち、猿が藥種へ入りまする。藥種と申して、茅場町とは違ひまする。明礬と申すは、本草にては講釋の打出し。
りん　モシ〱、講釋の打出しが、藥になりまするかえ。
道庵　これは不通な女郎かな。講釋の打出しは、ソレ、面白い所になると、この後はめうばん。ハヽ、
りん　何を仰しやりまする。
道庵　イヤ、女中、いつもの通り、二杯入れて一杯に煎じつめさつしやい。
ト調合して藥包みを渡す。
りん　ハイ〱、左樣なら、爰で煎じてあげませう。
ト七輪と藥罐を取つて來て煎じる。
權六　これは、いつもながら、お世話になりまする。

りん　オヽ、あなたゆゑなら、どんな辛苦もいとはぬわいなア。
ト此うち綾女、道庵を歸したいこなし。思はず道庵を叩く。道庵、恟りして
道庵　オヽ、御息女、それにござつたか。
ト綾女、權六へ仕方する。道庵、キョロ〱して
聞えたものはこの少女。愛着執心、戀慕れゝつの志しを結んだと見える。イヤ、客人、戀愛の道は、眼病には第一の差合ひ。恐るべし〱。
權六　左やう存じて、一向に愼しんで居りまする。
道庵　それがよい〱。
ト綾女、仕方してゐる。おりん、見て
りん　何ぢややら、人の見てゐる側で、アタ好かん。ヱヽ、エヽ。
ト腹を立てゝ、七輪をバタ〱あふぐ。
道庵　これは、靜かにさつしやい。埃が立ちますわいの。
トこの時、綾女、歌がるたを取つて來て、道庵が側へ置き、袖を引く。
なんぢや。なんでござる。
ト綾女、書いて見せる。

御病人のお氣晴らし、かるたを取つて、お慰め申したうござんす……か。
ト顏を見る。綾女、うなづく。
權六　歌がるたは、女中の持遊び。眼の養生にはならずとも、また志しの捨て難い。
道庵　愚老はさしづめ、上の句を讀まうかい。
りん　わたしにも取らしておくれ。
ト此うち綾女、嬉しさうにかるたを並べて、上の句を道庵へ渡す。
道庵　よいぞ〳〵。さらば、これから讀みかけるぞ。
ト大小、誂らへの合ひ方になり、おりんは藥を煎じながら、四人立向ふ。道庵は上の句を讀む。
「心あてに折らばや折らん初霜の
ト下の句を取る
おき惑はせる白菊の花」。男の味ひは、まだ白菊の時に……なんおや。「これやこの、行くも歸るも別れては
權六　知るも知らぬも逢坂の關」。
ト下の句を取る。
道庵　貴公も眼病。
權六　蟬丸の歌は、相應でござる。

道庵　「忍ぶれど色に出にけり我が戀は
りん　物や思ふと人の問ふまで」。
ト下の句を取る。
道庵　「筑波根の峰より落つるみなの川」。
ト綾女取つて、書いて見せる。
この下の句がわたしの心……ムウ、さては、この客人に、戀ぞつもりて淵となりぬるぢやなア。
ト綾女、袖を抑へる。おりん、腹を立てる。
娘と思ふは油斷大敵。伊勢の大輔と來てゐる。客人、貴公はお娘をパッチリと
ト下の句を取つて
われても末に逢はんとぞ思ふぢやな。
權六　イヤ〳〵、拙者が心は、ずんど淸い淸少納言。
道庵　「夜をこめて鷄の空音をはかるとも
權六　世に逢坂の關はゆるさじ」。ナ、御親父のお叱り、世間の思惑もござれば、嫁入りの極まるまでは、コレ
ト下の句を取つて
衣かたしきひとりかもねん」。獨り寢をめさるがよい。
ト綾女、頭を振つて泣く。
りん　アイ、獨り寢とは、よからうわいな。そこで、わた

しはナ、器量はお嬢様に劣つたれ、それはそれは好い所が、中納言時平。

道庵「立別れ因幡の山の峯に生ふる

りん　松としきかば今歸りこん」。

ト下の句を取つて

サ、松訥子きかば、ナ、どうやら源之助に、よう似た男。

トおりん、かるたを懐へ入れる。綾女、下の句を取つて道庵に見せる。

道庵　身のいたづらになりぬべきかな」。

ト讀む。綾女、書いて見せる。

例へ、いたづらになつたとて、あなたゆゑなら、いとはぬわいなア……ハテサテ、困つた奴。さては貴公

ト下の句を取つて

さしも知らじな燃ゆる思ひを」ぢやなア。

權六　左様なつてはコレ、この如く

ト下の句を取つて

名こそ流れて猶聞えけれ」。世間へ聞えては惡うござるて。

りん　こちや又、やもめぢやに依つて、あなたさへ得心なら

ト下の句を取り

末の松山浪越さじとは」。

道庵　ヤア／＼、さては汝も

ト權六を見て

紀の貫之ぢやなア。

ト下の句を取つて

「人はいさ心も知らず故郷は

權六　花ぞ昔の香に匂ひけり。」

道庵　何さまハヤ、香に匂ひけりぢや。

トおりんを見て、鼻をつまむ

りん　オヽ好かん。

ト腹を立てる。綾女、書いて見せる。

道庵　わたしや外へ嫁入りするのは否。

ト綾女、下の句を取つて見せる。

かひなく立たん名こそ惜しけれ」。ムウ、尤も。イヤ、客人、あまり切ない戀なれば、ちよつと坂の上の是則になつても、後徳大寺もござるまい。

權六　イヤ／＼、いつまでも拙者は

ト下の句を取つて

戀に朽ちなん名こそ惜しけれ」。

道庵　ト綾女、書いて見せろ。
それ程にお云やるなら、是非に及ばぬ。
ト綾女、また下の句を見せる。
今日を限りの命ともかな」。
ト道庵の合口を抜きにかゝる。
權六　これは危ない。待たつしやれ〳〵。必らず短氣を出さつしやるな。拙者とても岩木ならねば、お志しは無下にも致さぬ。
トおりん、眞中へ入つて
りん　それで濟むかえ〳〵。濟むかいなア。
ト權六を振り廻す。
道庵　これは歌がるたが臺なしになるわい。
ト片附ける。綾女、書いて見せろ。
聞入れなければ、死ぬる〳〵、死ぬるわいなア〳〵。
權六　それでは拙者が
りん　わたしへの返事は。
權六　サア、その儀は。
ト綾女、また書く。
道庵　望みを叶へて下さんすか。
權六　サア、それは。

りん　嫌はしやんすか。
權六　サア
ト綾女、書く。
道庵　矢ッ張り死にませうか。
權六　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
りん　お返事は
道り　どうぢやぞいなア。
ト此うち始終、綾女が書くを、道庵、見い〳〵、云うて、トゞ女の身振りにて、おりんと一時に權六へもたれかゝる。二人を突きのけ
權六　不承知と申すが拙者の返事。ドリヤ、奥へ參らうか。
ト立ちあがる。綾女、道庵を突きのけ、裾を持つて留める。おりんは奥の方へ立ちふさがり、綾女書くを道庵、此方から讀む。
道庵　どうあつてもお否かえ。
權六　サア、否ではないが。
トおりんを見て
今はどうも。

ト　おりん縋りつき

りん　胴慾ぢや〳〵、胴慾ぢやわいなア。

ト綾女また書く。

道庵　エ、、つッともう、辛氣な。

ト綾女泣く。

權六　さりとては、放さつしやれ。

りん　放さぬ〳〵。

ト綾女も取りつく。

權六　これはしつこい。

ト突きのける拍子に、おりん、藥鍋を打ちかへす。

ドリヤ、參らうか。

ト兩人、また取りつくを、摺りぬけて、權六、奧へ入る。兩人、取違へて道庵を兩方より引ッ張る。綾女、顏を見て、なんの事ぢやといふ思ひ入れにて、道庵の頭を叩く。おりん、道庵を突きとばし、藥鍋を打ちつけ、綾女も一緒に奧へ入る。

道庵　ヤレ〳〵、怪しからぬ側杖、狂人狂へば不狂人と云ふ如く、眼醫者を揉みくちやにしをつた。ドレ、愚老も眼の療治を……ほんに、この藥鍋も、病ひ切り〳〵。

ト唄になり、道庵、藥鍋を打ちつけ、奧へ入る。引違へて新作出て

新作　いろ〳〵にして見ても、あのお娘の啞ごろは手に入らぬか。なんでも口說き落して、本意を達して見たいもの。

ト思ひ入れ。此うち、おりん、窺ひ出て

りん　不義者、動くな。

新作　エ、。

ト惘りして

なにを、飯炊きの癖に、人を惘りさせた。不義者とは、なんぢや。

りん　お孃樣に惚れてゐて、人の戀まで邪魔をする不義者め。

新作　どこでおれが、お孃樣と不義をした。

りん　最前のこの文。

ト拾ひし文を出す。新作、引ッたくらうとする。やるまいと爭ふ所へ、道庵出て、兩人を止めて

道庵　これはどうぢや〳〵。番頭どのといひ、おまんま炊きの女中どの、この喧嘩、これはどうぢや〳〵。是論道庵、挨拶を仕る。

トなだめるを構はず

兩人　エヽ、なにを。
ト叩きあふ拍子に、道庵の目鼻の間をくらはす。道庵グル／＼舞ひして、「ウン」と目を廻す。兩人、怖りして
りん　ヤア／＼、目を廻したわいな／＼。
ト水を飲ませる。
是齋　ヤイ／＼、やかましい。何を喧嘩するのぢや。
ト這ひ／＼出て來る。
新作　これは旦那樣。
りん　お聞きなされませ。番頭の新作どのは、不義者でござりまする。
新作　ヤイ／＼、なんでおれが不義者ぢや。
りん　マアお聞きなされませ。新作どのが、お孃樣に不義を仕掛けた、この濡れ文。
是齋　こりや聞捨てにはならぬ。
ト道庵「ムウ」と反る。
兩人　アレ、唸つたワ。道庵さまいなう。
ト呼び生ける。
是齋　その文、これへ。
りん　破れてあれど、濡れ文に相違ござりませぬ。
ト持つて行く。是齋、取つて
是齋　こりや、ひどう破つたな。
ト一枚づゝ並べ
恐れながら、お願ひ申しあげ候ふ……イカサマ、主の娘に附け文、恐れながらとは、これも尤も……わしが思ひは深草の、少將ぢやない、たんと／＼……唐藥八斤、かつこう十二斤……三ヶ年の上納御免に與かりたく候ふ……それにお前は胴慾な、一度が嫌なら半分でも……小西是齋さま、道修町近江屋藤兵衞……なんの事ぢや。とんと譯が解らぬ。
ト此うち障子屋體より權六、出て、聞いてゐる。
新作　あれが證據か。
りん　なんの事ぢや。とんと解らぬ。
新作　大べら坊め。
ト叱りつける。道庵「ウン」と反る。
りん　こりや、をかしい顏で、蟹のやうに泡を吹かれます。
是齋　聞えた。そりや癲癇病みと見える。好い時分に正氣が附くであらう。捨てゝ置け／＼。
ト向うより與助、走り出て來て

與助　サア〳〵、大事だ〳〵。阿部野村の百姓どもが、大勢集まつて、この小西の内を、ぶち毀すといつて押し寄せて來ますわいなう〳〵。

皆々　ヤア〳〵〳〵。

ト悧りする。向う揚げ幕にて

百姓　アリヤ〳〵〳〵〳〵。

ト鯨波の聲、ドンチヤン。

新作　モシ、旦那、大事でござります〳〵。

是齋　何も騒ぐ事は無いわいや。

ト云ひながら、心ならぬ思ひ入れ。道庵「ウン」と反る。

りん　擣て ゝ 加へて、邪魔な癲癇病みぢや。

ト道庵の帶を解き、裸にして

爰へなと入つて居やしやんせ。

ト表の用水桶へ投げこむ。ドンチヤン、鯨波の聲にて向うより頓兵衛、蓆の腹卷、小手臑あて、百姓大勢簑笠にて、めい〳〵鋤鍬、鳶口、竹槍を持つて出て來て

頓兵　サア〳〵、おれに續いて、みんなござれ〳〵。

百姓　合點だ〳〵。

頓兵　ヤア〳〵、小西是齋の慾張りめ、藥の是齋を振舞ふはよけれども、強慾非道の振舞ひに、下をせたげて、年貢金や川普請、一つも云ふ事きかぬゆゑ、是齋の藥もきくまいかえ。ナウ、皆の衆。

百一　そこで阿部野の百姓が、皆一つになつて、子別れの憂き目見ても是非がない。

百二　恨みを晴らしに來たのだワ。

皆々　サア、尋常に覺悟しろ。アリヤ〳〵〳〵。

ト鯨波の聲して本舞臺へ來る。

新作　さてはうぬら、徒黨したのぢやな。

皆々　其奴から、突き殺せ〳〵。

新作　イヤア。

ト悧りする。

片ツ端から、ぶッ挫け〳〵。

ト駈けこまうとする。皆々うろたへろ。權六、ツカツカと出て

權六　待つた。いづれも、待たつしやれ〳〵。

頓兵　此奴も同類。

皆々　疊め〳〵。

ト突きかけるを、權六「待つた〳〵」と留める。皆々

入れちがひ、こみ入るを、權六、百姓の竹槍を取つて
キツと構へる。

皆々　イヤア。

ト恐れて後へ寄る。

權六　裁人の詞を立てず、理不盡な事めさるゝゆゑ、是非に及ばずこの手向ひ。此方より事は好まぬ。この家に旅宿して世話になる浪人者。騷動を見かね、挨拶仕る、とあつて非義非道に極まらば、全く荷擔は仕らぬ。事の仔細を聞き糺し、その上で理非分、明らかに立てゝ進ぜう。それとも聞入れなくば、刀の手前、扣へては居らぬ。幾人あつても竹槍の切尖、生けては歸さぬ。サア、各々の返答、如何でござる。

百一　返答も辨當もいらぬわえ。

皆々　突き殺せ／＼。

ト突きかゝる。頓兵衞とめて

頓兵　待て／＼。

皆々　イヽヤ、待たぬ／＼。

頓兵　待て／＼／＼。待てと云つたら待たぬか。阿部野村の庄屋、頓兵衞が留めた／＼。マア／＼／＼、待て待て。

皆々　待てと云つて、どうするのだ。

頓兵　今あの人が云はれる詞を、つく／″＼考へて見れば、此方の云ひ條を立てゝやらうと云はつしやるワ。ハテ、喧嘩と腫れ物は所嫌はず、挨拶は時の氏神。おれに任せて、マア／＼、鎭まれ／＼。

トなだめる。權六、竹槍を捨てる。頓兵衞、側へ來て

申し、お侍ひ樣。

ト慄へ／＼。

どうやら怖いやうで、恐ろしいやうでござるが、云ふ事は云はにやなりませぬ。百姓どもが云ひ條、立てゝ下さりますか。

權六　こなたは庄屋どのでござるか。流石は一村の長ほどあつて、神妙に存ずる。是齋どの、存じがけない騷動、さぞ御心配でござらう。

是齋　高の知れた蛆蟲とは思へども、多勢に無勢、よろしく頼みます。

權六　承知いたしした。八ケ村の扱ひ、又は不義者とやらも、糺してお目にかけませう……さて、是齋どの、八ケ村の知行高は。

是齋　三萬二千石でござる。
權六　三萬二千石と……手代衆、算盤扣へさつしやい。
與助　心得ました。
　ト算盤を置く。
權六　右の石高六十目、金にて三萬二千兩。
頓兵　お待ち。此方の譯は、どうして下さる。元、この騷動の始まりは。
權六　ハテ、ようござる。あらましは承り及んだ。して阿部野の後より、大和橋へ落ちる、その川上は、如何程ござる。
頓兵　大和の二丈ケ嶽より流れて、川の尺は凡そ十九町あまり。
權六　して、川巾は。
頓兵　それはどうぢや。作左どの、戸平どの。
百一　ハテ、廣い所で一丁半。
百二　狹い所で、三十間あまりもござりませう。
權六　破損の場所は、川上か川下か。
頓兵　はるか下の方でござりまする。
權六　ナニ、川下とや。ムウ。
　ト思案する。

百一　これサ、思案どころか、挨拶が遲いと
皆々　いつそ毀しかけるぞ。
權六　サ、ようござる。これまで在り來つた隣り在、利分の所に違ひなくば、云ひ分はござるまいがな。
皆々　サア、それが出來ぬに依つて。
權六　サア、そこが工風。川筋破損の繕ひも成就の上、無事に耕作が出來さへすれば、年貢も事なく納まるであらう。
頓兵　仰しやれば、そんなものかえ。
權六　川筋の普請人夫の費え、一日を一人前、銀二匁づゝと積つて凡そ八百貫目あまり。なんと、これでは、無難に納まらうと存ずる。
　トおりん、茶を持ち出して
りん　モシ、息つぎにお茶一つ。
權六　これは〳〵。
　ト茶碗を取つて飲む。
是齋　して、その金の出所は。
權六　拙者が爰で湧き出しまする。
　ト胸を叩く。
是齋　ハテ、大束に、呑氣なものぢやな。

權六　斯うばかり申しては、各々に合點が參るまい。ソレ、そこにある衣類をこれへ。

りん　アイ〳〵。

　ト道庵の着物を持つて出る。權六、舞臺へひろげ

權六　先づ、この衣類を、川の形に致して……いづれも、近うござれ。

皆々　ドレ〳〵、見よう〳〵。

　トこぞる。

權六　これは川筋、左右の袖は砂地荒れ地。これへ、彼の八ケ村の畠、手桶、すべて平目なる物を

　ト茶碗を取つて

これを器に譬へ、その中へ砂を八分目ばかり明け、水に浮めて、これを流しまする。

皆々　ハテナウ。

權六　山川の一得には、矢を射る如く、下へ〳〵と流るゝところを、破損の堤へ集まる人夫が、蔦口、又は手頃の竹に釘を打ち、彼の器に引ッかけ〳〵、堤を段々に築きあげまする。

皆々　イカサマナア。

權六　器が多くなりまする時は、竹を筏に組んで、これに積んで元へ戻す。また川上より砂を積んで、何度も取替へて流す時は、人夫も使はず、苦勞を助け、土砂は殘らず掃けて、堤も成就いたすではござらぬか。

皆々　こりや尤もの事。

權六　さうして、水入り地面は、流れこむ塵埃が、即ち養ひになつて、過分の豐作、微塵不納の憂ひもなく、民百姓はいよ〳〵榮え、當家の身代も益々潤ふの道理。工風と申すは斯くの通り。各々、とくと、呑みこましやつたか。

　ト頓兵衞、手を打つて

頓兵　なんと皆、聞かしやつたか。

百一　聞いたとも〳〵。辯舌といひ、工風といひ、その通りにさへすれば、忽ち普請も出來るといふもの。

權六　百姓ども、云ひ分ないか。

頓兵　なんの云ひ分がござりませう。さうすれば八ケ村は

皆々　十分々々。

頓兵　これで村々のめでたい納まり。

百一　畢竟それも、あのお侍ひのお庇と申すもの。コレ、この着物を、川の形に譬へて見せしやつたゆゑ、解りました。これから八ケ村の者へも、合點のゆくやうに、こ

の着物を借りて行きませう。

皆々　さうさつしやい〳〵。

百一　時に、お骨折られた庄屋どの、御恩送りに、皆がお宿へ送りませう。

頓兵　幸ひ、おれがこの蓆の具足。シタガ、風の神と取違へて下さるな。

百皆　それでもお宿へ、おゝくれ送れ。

ト鉦太鼓にて、頓兵衛先に立ち、踊りながら、皆々向うへ入る。おりん與助は奥へ入る。權六、是齋殘り

是齋　ハテ、いろ〳〵な事で騒がす。ドレ、奥へ行つて暫らく寝ようか。

ト行かうとする。

權六　イヤ、是齋どの、暫らく。

ト合ひ方になる。

是齋　御用がござるか。

權六　ちよつとお待ちなされい。御家内の騒動、事無難に納まり、さぞかし御安心でござらう。長者、富に飽かずとは世上の譬へ。およそ貴殿の御身代は。

是齋　されば、當時の有り金、十萬兩ばかりにも及ぶか。富裕の身になつたも、日頃信心する神の御利生。

權六　奥の小庭に勸請の、祠は八百萬神の、外に洩れて、明朝と、額を打ちしは、何か怪しい

是齋　なんと。

權六　ハテ、位あれば徳ありぢやよなア。

ト暮れ六ツの鐘鳴る。

是齋　もう暮れ六ツか。ドリヤ、處々へ燈明を上げさゝうか。

ト唄になり、是齋、こなしあつて、奥へ入る。

權六　暮れゝば鳥眼。是齋どの〳〵。

トそこらを探り

奥へ行かれたか。何を云うてもこの難病。毒の驗くのは早けれど、薬の驗目は、ハテ、遲いものぢやなア。

ト與惣吉、行燈をともし、持ち出て

與惣　お客様、これにござりますか。

權六　さう云ふは、與惣吉どのか。

與惣　左樣でござります。お嬢樣が御寢所にたつた一人、話しの相手が無さに、あなたを呼び申してくれいとの、私しへの御意でござりまする。

權六　綾女どのゝ、寢所へ、わしを。

與惣　サア、お出でなされまし。

權六　ナニサマ、話しの伽には眼病みが相應。然らば、これへ。

與惣　お手を取りませう。

權六　これは御苦勞

與惣　サア、お召し物を召しませう。

ト介抱して、權六に駒下駄を穿かせ

お危なうござりまする。

ト兩人、少し行きかゝり

權六　關寺小町にあらねども

與惣　頼む物には竹の杖。

權六　その杖よりは、與惣吉どの。

與惣　ソレ、小石が

權六　オッと承知。

ト越えるこなし。

與惣　サア／＼、お出でなされまし。

ト唄になり、下座へ入る。「こなた百まで」の合ひ方になり、用水桶より道庵、首を出し、平氣にて桶の縁へもたれ

道庵　ぬるい湯ぢや。もそつと焚かせろやい。三助は居ぬか。糠袋を持つて來いやい。

ト云ひながら、氣の附くこなし。

ヤア／＼、風呂かと思へば、こりや用水桶ぢや。ヤレヤレ、怪しからぬ。

ト桶より、襦袢、ばつちの形にて出て

なんの爲に、こんな所へ入つてゐたか。待てしばし。ムウ……オヽ、思ひ出した。番頭と飯炊き女が、喧嘩をして、その扱ひに入つたところを、血氣に逸る振り拳、目鼻の間をぶたれたと思つたが、それから後は夢現。

トまた思案して

さては其はずみに、持病の癲癇が發つたと見えるわえ。アヽ、浮世ぢやなア。醫者が病を起すとは、米屋が飯炊いて、呉服屋が小袖を着たがり、女郎屋の亭主が内の女郎を占むる類。悔むな、泣くな。廣い世界にある習ひ。先づ今日は出直して參らう。併し、此やうな形では行かれまい。コレ、愚老が着物や腰の物は、何處にござるぞ。コレ、女中衆々々々。若い衆はござらぬか／＼。

ト捨ぜりふにて着物を尋ねる。捨て鐘にて、向うより杢助、紺看板にて、スタ／＼と出て來り

杢助　旦那は何をなされてござるやら。ハテサテ、遊び好きにも困つたものだ。

ト云ひ〳〵、道庵を見附けて

旦那でござりまするか。

道庵　杢助か。何しに來た。

杢助　モシ〳〵、何しにどころか、お聞きなされませ。富田屋のおかみ樣が、たつた今、産の氣が附いて、ウ、ウウと大騷ぎでござりまする。サア〳〵、お出でなされませ〳〵。

ト無性に急いて引ッ張る。

道庵　ナニ、富田屋のかみ樣が、子を産みかけてござる。

杢助　左樣でござります。サア、お出でなされまし〳〵。

道庵　サア〳〵〳〵、それはとんだ事だ。して、その産は難産か。

杢助　難産々々。難産拾得。

道庵　何をたわけた。サア〳〵、それは怪しからぬ事だ。大事の病家ぢや。直ぐに參らう。急げ〳〵。

杢助　サア、お出でなされまし〳〵。

ト提灯を持ちそへ、先へ立ち、道庵、行かうとして、手前を見て

道庵　ア丶、待て〳〵。

杢助　ヘイ〳〵。

道庵　如何に急な病家ぢやとて、此やうな形で、道庵お見舞ひと行かれるものか。

杢助　成る程、お召し物は、どうなされました。

道庵　どうしたやら。一向益體ぢや。ハレ、益體もないとは、醫者には禁物ぢや。

杢助　ハテ、早くお出でなされませ。

道庵　それでも、この形では行かれぬワ。小袖脇差を尋ねて居ては、間に合ふまいし。

杢助　成る程、其お形では行かれますまい。ハテ、とんだ所で湯屋泥坊にお遭ひなされました。

道庵　コレ〳〵、杢助々々。

杢助　ヘイ〳〵。

道庵　コリヤ、見る通り、醫者が裸で、病家へ見舞はれもしまい。少しのうちぢやが、われが着物を、愚老に貸せ。

杢助　それは何よりお易い事でござります。旦那のお爲なら、サア〳〵、召しませ〳〵。

ト看板を脱いで丸裸になり、道庵へ着せる。

道庵　ア丶、われは忠義なものぢや。病家へさへ參れば、どうでも話しが出來やう。

杢助　左様でござりまする。どうか附き馬に會つたやうでござります。

ト捨ぜりふ云ひながら看板を着て

道庵　コレ〳〵、濡れた襦袢は、お主、持つて來やれ。

杢助　畏まりました。サア〳〵、急病だ。早く參りませう。

道庵　急げ〳〵。

ト杢助、裸にて、提灯を持つて先へ立つ。

待て〳〵。

杢助　ヘイ〳〵。

道庵　これでも行かれぬわい。家來は裸、醫者は看板、折助の形でも參れまい。これは、てまへが着ろ。てまへが着ろ。

杢助　ヘイ〳〵。

トまた道庵脱いで、杢助に着せ、先へ立ち、兩人、思ひ入れあつて

道庵　ア、待て〳〵。どうも裸でも行かれぬわえ。

杢助　左様なら、また脱ぎませうか。

ト看板を脱ぎ、差出す。道庵、思ひ入れあつて

道庵　われが脱いだといつて、おれも着られず、おれが脱いだといつて、われも着られず。

杢助　家來が脱いでも、旦那が着られず、旦那が脱いでも、家來は着られず、いつまで云つても、同じ事でござります。

道庵　今では一枚の褞袍が、有つて無きが如し。急病人より、この看板が、ハテ、大病人ぢやわえ。

ト手を組み、思案する。

杢助　成る程、一枚の褞袍で、いかい御苦勞なされまする。

ト思案する。

道庵　あるぞ〳〵。思案が出た〳〵。

杢助　出ましたか〳〵。

道庵　あるぞ〳〵。急いで參るには、屈竟の思案が出た。その提灯を消せ。

杢助　畏まりました。

ト提灯を消す。

道庵　コレ、どうで顔を出しては行かれまい。この看板へ、斯う提灯を持ち添へてナ

ト提灯を疊み、看板へ持ち添へ、これをかぶろ。

杢助　モシ〳〵、私しは、お先へ參りませうか。

道庵　ハテ、杢助、待てと云ふに。
杢助　隙がとれるならお先へ參る。
道庵　これはしたり、杢助、待てといふのに。コレ、杢助
待つたり／＼。
杢助　杢助待つたぞ／＼。
トこれより摺り鉦入りの太神樂の囃子になり、道庵、提灯を獅子の頭にして、看板をかぶり、杢助この後へ入り、兩人、獅子舞ひになり。鳴り物早めにて、兩人、獅子を舞ひながら、向うへ入る。これにて道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、金襖。上の方に板塀、見越しの松の樹。この枝に鉦を吊し、下の方、同じく板塀。引下げて植込み。雪見燈籠、手水鉢、枝折り門。すべて奥座敷寢所の體。爰に綾女、寢衣の形、扱帶を〆め、蒲團の上に虎の皮を敷き、上に脇息にもたれ、歌書を讀んでゐる。側に異風の燭臺、誂らへの緞帳に眞紅の紐を附けて、好き所へ吊り、お露、片脇に香をついでゐる見得。道具とまる。
ト胡弓入りの合ひ方。諸所に鈴の音する。お露、香爐を好き所へ直し

つゆ　申し、今宵は風も烈しうござりますゆゑ、緞帳を吊りましてござります。御寢になる時に、この紐をお引き遊ばせ。
ト綾女、うなづく。
お床を取りませうかえ。
ト綾女、書いて見せる。
左樣なら、好い時分に、お知らせ遊ばせ。
ト又書く。
わたしは、お次へ。
ト又書く。
成る程、誰れも參りませぬやうに、申しつけませう。
トお露、入る。始終合ひ方。下の切り戸口より與惣吉、權六を連れて出る。
與惣　申し、お危なうござりまする。
ト綾女見て、片脇へ寄り、爰へ連れて來いと仕方する。
サア、お蒲團の上へござりませ。
ト手を取つて座らせる。
權六　綾女どの、それにござるか。お寢間へ來るは、近頃失禮にはござれど、お招ぎゆゑ、よんどころなく。

ト綾女、與惣吉に書いて見せる。

與惣　大事ない、此方へお寄りなされとの儀でございます。

權六　左樣なら、暫時お話しを

ト側へ寄る。綾女、本を與惣吉にやり、權六に讀んで聞かせろと仕方する。

與惣　「つれ〴〵草」を讀めとでございます。

權六　吉田の法師が、よく綴りましてござるよな。

ト與惣吉、本をひろげ

與惣　「淺茅ケ宿に昔忍ぶこそ、色好みとはいはめ、色好まざる男子は、玉の杯に底無きが如し」

權六　ナニサマ、ハヤ、夫婦愛情の道あればこそ、子を儲けて子孫も續く。その水上は色の一字。

ト綾女書く。與惣吉讀む。

與惣　サア〳〵、それぢやに依つて、わたしが願ひを。

權六　とは存ずれども、許さぬ戀は不義いたづら。

ト綾女、紙に書いて與惣吉に渡す。

與惣　「鷄鳴同枕、爲君何惜命。」……自筆に遊ばされてござります。

ト權六、取つて

權六　卽席の文といひ、手蹟もさぞや

トこなし。懷中する。綾女、喜び、寄り添はうとして、與惣吉を見て、こなし。

與惣　イヤ、私しは、旦那の御用、道修町まで行て參りませう。

ト小提灯をともす。

權六　この頃は、物騷がしうもある。明日の事にさつしやれたがよい。

與惣　イエ〳〵、急な御用さうな。ツイ一走り行て參りませう。

ト提灯を持つて向うへ入る。あと合ひ方。この時、上の見越しの松へ、新作出て窺ふ。下の植込みの中より、おりん窺ふ。綾女、こなしあつて、權六の手を取つて膝へ引きつける。權六、こなしあつて

權六　いま書かしやれた詩の心。枕を同じうして、君が爲になんぞ命を惜しまんや。いよ〳〵その心に違ひはないか、とサア、問うてからが片便り、書かせて見ようにも、手前は鳥眼。吉野の花も、暗夜に見ては興がない。啞の病も、鳥眼の不自由も、本腹した上で、成るか成らぬか、返事を致さう。

ト引きのけ、行かうとする。綾女、留めて

綾女　たいみんちんしん、にやうろきみけいたからんかんきうけんさい。ばいらうとらヤア／＼。

ト權六、ギヨッとして

權六　今の五音は、正しく異國の……唖にして物云はぬは……これも一物……和音通へる證據には、この土地の詞を聞き分け、問答の自然と出來るは、ハテ心得ぬ。して又、和言で物が云へるか。

綾女　サア、日本の文にも馴れ、和音も通じる自らなれど、五音の調子が唐土人。本國に知人あつて、うつろ舟に乘せられ、八重の汐路へ押流され、この日の本へさまよひ來りし、憂き身の末。ソッとこの家へ、お出でなされたその日より、見染めた戀路に、この身の素性も一大事も、忘れ果ててのこの願ひ。ちぎりんたい／＼。

ト膝にもたれる。新作おりん、こなし。權六、ちよつと思ひ入れあつて

權六　二世かけて夫婦にならう。

綾女　エ、。

權六　エ、とは否か。マア、ちよつと手附けに

ト懐へ手を入れる。綾女、恥かしき思ひ入れ。

唐の女も、矢ッ張りこそばかる。これちや／＼。これを何と云ふぞ。

綾女　ちゝ。

權六　爰は。

綾女　むね。

權六　爰は。

綾女　ちうくわん。

權六　爰は。

綾女　はい。

ト思ひ入れあつて

もう寢ようわいなア。

權六　寢てしつぼりと。

綾女　つもる睦言。

權六　夢でも見ようか。

トこなし。綾女、紐を引く。緞帳落ちる。新作おりん、いろ／＼思ひ入れあつて、新作は松の木より落ちる。

新作　アイタヽヽヽ。でも、ひどい目に遭つた。イヤ、そこに居るは、おりんぢやないか。

りん　さう云ふ聲は、番頭さんか。

新作　われも聞いたか。

りん　聞いた段か。腹が立つやら口惜しいやら。ほんに、どうしたらよからうなア。

新作　物は相談ぢや。われに乘りかへようか。

りん　わしも、もう自棄ぢや。

新作　忍ぶ戀路は

りん　闇こそよけれ。

新作　おりん。

りん　番頭さん。

新作　斯うおぢや。

ト唄になり、兩人、下の方へ入る。時の鐘、誂らへの凄き合ひ方になり、向うより唐丸、九郎、入道、乞食の形。後より盜賊十人、思ひ〳〵の形にて得物を持ち、出て來て、呼子を吹くと、簾上がる。權六、掻卷の形にて立ちあがり、思ひ入れあつて

權六　みんな、揃つたか。

唐丸　今夜の首尾にと、指圖を受けて、道庵が知らせ。皆打揃うて、なんの事なく裏口から

皆々　忍びました。

ト權六、平舞臺へ下りろ。皆々、本舞臺へ來て、左右へ別れ、思ひ入れ。此うち綾女、手燭を持ち、この體を見て驚ろき、手燭を隱して窺ふ。

權六　二三百兩、是齋めに摑ませて、後の月から捻ぢ込んだも、大きな仕事を目論まうため。

入道　合圖違へず、宵から仕掛けた今夜の働らき。

唐丸　頭、金の在所を

皆々　頑張つて置かつしやつたか。

權六　五ケ所の藏のうち、裏通りは皆雜物。內藏が此方の仕事。鷲摑み入道は、合圖の鉦を切つて落せ。

入道　心得ました。

權六　桂の唐丸、荒武者九郎は、逃げ出す奴輩を討つて捨てろ。

兩人　合點だ。

權六　サア、そろ〳〵と

皆々　仕掛けようか。

ト皆々、大刀を拔く。

綾女　そんなら

ト惘りする。入道、手燭を叩き落す。九郎、綾女を引きつけて

九郎　聲を立てると、芋刺しだぞ。

權六　イヤ、その女は。

ト綾女を取つて引き廻す。

入道　エヽ、お頭の食ひ物かえ。

權六　皆行け／＼。

ト皆々、東西へ別れて入る。簾下りる。入道、殘り、合圖の鉦を切つて落す。この時、奥にて

大勢　イヤア、盗人が入つた／＼。泥坊々々。

トやかましく騷ぎ立てる。これにて家内の仕出し「泥坊々々」と云ひ／＼、逃げて出て、あちこちして入る。これにて入道も奥へ入る。新作、おりん、逃げて出て

新作　盗人は、何處ぢや／＼。

りん　こちや怖いわいなア。

新作　それどころか、近所を集める、鉦だ／＼。

ト見て

イヤア、こりや鉦も撥もないわえ。こりや堪らぬ／＼。

ト行かうとするを、おりん、取りつき

りん　コレ、待たしやんせ。

ト捕へる。この見得、ゴン／＼にて、道具廻る。

本舞臺、高臺、見越しに藏の横手を三棟ほど見せ、よき所に祠、切り戸、よろしく、是齋、手槍を構へ、唐丸と九郎、詰め寄せてゐる。これにて道具とまる。

是齋　年こそ寄つたれ小西是齋、金藏へ踏んごむと、胴腹へ風穴だぞ。

兩人　面倒な。老ぼれ、覺悟。

ト三人ちよつと立廻り、鳴り物にて追ひ込む。時の鐘になり、切り戸口より、盗賊皆々、千兩箱を手に持ち出て、本舞臺へ積みあげる。また是齋、兩人を追ひ出て、立廻りあつて、是齋の槍を叩き落し

兩人　今が最期だ。

ト拔き身を振りあげる。この時、切り戸口より權六、誂らへの形。綾女を引立て出て

權六　ヤレ待て、是齋めには問ふ事あり。命を取らずに引据ゑい。

兩人　心得ました。

是齋　ムウ。

ト跪くを、皆々押へて、繩かける。

盗人めらが手籠めの繩目。エヽ、口惜しい。

ト思ひ入れ。權六、金箱へ腰を掛け

權六　家内の奴等は、皆引ッ縛つて猿轡。

入道　合圖の鉦は切つて置いたれば、駈けつける奴等は無い。
唐丸　お頭は、筑紫の權六と云つて、器量すぐれてござるゆゑ、我れ〳〵が仲間の棟梁。
九郎　それとも知らず、手盛りを食つた、あの是齋の
皆々　大べら坊め。
　ト此うち綾女、心遣ひする。
是齋　さては、うぬらは盜賊よな。エヽ、口惜しい。コリヤ、娘、うろたへるな。女童に聊爾はあるまい。爰構はずと、落ちよ〳〵。
權六　明朝と額を打つた、あの祠、ぶち毀して吟味しろ。
入道　合點だ。
是齋　勿體ない。それを
　ト立ちあがるを、皆々引据ゑる。入道、社の錠を捻ぢ切り、蒔繪の箱を出し
入道　こんな箱がごんした。
權六　ドレ。
　ト蓋を明ける。唐裝束、天冠を取出す。是齋、跪く。
　これ見ろ。祠の神體は、この裝束。
皆々　ハテナア。

權六　娘は唐女、唖にして置く是齋が心底。うぬも異國の、紛れ者であらうな。
是齋　身が俗性を、盜人めらに明かさうか。併し、うぬらも人間、情を知らば、娘ばかりは助けてくれい。云ふ事は無ければ、サヽ、首を打て。
綾女　コレ、吳才官、堪忍してたも。あなたに一夜の添寐して、自らは、もう唐土へ去ぬ事は嫌。盜賊でも、なんでも構やせぬ。あなたと女夫になりたいわいなう。
　ト是齋、恟りして
是齋　ナニ、盜賊と枕を交したとや。
　ト繩附きながら綾女に詰め寄り
　大明大王の姬君、芙蓉皇女のこなた樣が、日本人と深き契り。我れは臣下の吳才官。御父王には先年、久吉が計略にかゝり給ひ、敢へない御最期。今日までも娘と呼んで、人目を忍び、强慾非道の金を貯めしも、大義を計る軍用金。臣が忠義を無足になしたる、不所存とや云はん、御父王へ不孝とや云はん。エヽ、こなたはなう。
　トきつと思ひ入れ。權六、せゝら笑ひゐる。
綾女　サア、さう云やるも尤もぢやが、唐も倭も、惚れた因果は、どうも仕樣は無いわいなう。

是齋　イヤサ、それでは濟まぬ。思ひ切らしやれ。
綾女　サア、それは。
是齋　サア
兩人　サア／＼／＼。
綾女　堪忍してたもいなう。
　ト權六の方へ行く。
是齋　イヽヤ、それでは
　ト寄らうとする。
權六　エヽ、面倒な。
　ト拔打ちに是齋をボンと切る。綾女、慄ふ。
　家來を殺され、腹が立つか。
綾女　不便なれども、殿御ゆゑなら
權六　添ふか。
綾女　アイ。
　ト側へ寄り添ふ。
權六　エヽ、可愛い奴の。
　ト引寄せる。
皆々　頭、うまいなア。
　ト皆々、思ひ入れ。權六、綾女を引きつけ、思ひ入れあつて、入道と顏見合せる。チョンと木の頭。權六、頭へ手をあげる。皆々、よろしく思ひ入れ。キザミにて　ひやうし幕

第一番目大詰　根來山三重の塔の場

役名――筑紫の權六　實ハ瀨川采女。早野彌藤次。荒武者九郎。狩人、長兵衞。同、紀次兵衞。下女、おりん。是齋娘、綾女　實ハ芙蓉皇女。石川五右衞門。

本舞臺、三間の間、向う黑幕、一面の薄原。眞中に鹿小屋。これより鳴子繩を引ッ張り、爰に長兵衞、紀次兵衞、狩人、山裁附けの形にて、鐵砲を擔ぎゐる。山颪し、てんつゝにて幕明く。

長兵　コレ／＼、紀次兵衞どの、この冬枯れに向ふと、每年々々、鹿が荒れるので、マア、こちの商賣が出來るといふもの。
紀次　それ／＼、此やうに根來山からかゝつて、荒川の百姓衆から、番人の鹿小屋。

長兵　この鹿番の小屋に、荒川から附けて置くは、何處から迷つて來たか女の狂人。

紀次　それに、小鳴子を引かせて、鹿追ひ番とは、錢いらずに好い思ひつきでござる。

長兵　シタガ、腐つても鯛ではない、窶れても女の事。

兩人　ほんに、可哀さうな事でござるなア。

ト鹿小屋の方を見ると、誂らへ文彌節のやうなる合ひ方にて、鹿小屋の菰垂れを上げて、おりん、以前の下女、少し窶れた拵らへ、杖を持ち出る。兩人、見て

ほんに、哀れを止めしこなた。

りん　あそこや爰に座します、此おきちが身の上。是齋の内よりお別れ申した、いとし殿御の、京のお客に離れ宿、實にや昔の下女にてあらば、鹿とも小屋とも知るまじきに

紀次　今は憂き目に荒川の、百姓衆に賴まれて、鹿追ふ小屋に只一人。

長兵　賤が手業の苦しみの、目さへ淚に肉薄く、泣いて焦れしこの狂人。鹿でも人でも構はずに、滅多無性に鳴子曳く。

りん　新作なつかし、ほうやれほ、お客戀しや、ほうやれほ、ほうやれ穗浪の薄原、駈け行く鹿の恨めしや。

ト泣いて思ひ入れ。

紀次　アレ、長兵衞どの、いつもの狂人が、晝でも構はず鹿を追ふ。コリヤ〳〵、女、面白く鹿を追へ。

長兵　戀しい男に逢はせてやらう。

りん　あら心なの人々や、我れは思ひのあるゆゑに、戀しきとばかり歎くぞや。いつぞは逢うてと、書いて置いたるこの文。

ト懷より文を出し

京のお客へこの文あげて、どうぞ枕が交したい。それより外の樂しみは、この酒樽。

ト一升樽を取出し

一口飲んで面白う、鹿を追ふ、鳴子曳く。かも鹿、猪、山鯨。ころ煎りか吸ひ物か。牡丹紅葉、いろ〳〵。

ト鼓の合ひ方にて、おりん、節を附けて語りながら、出鱈目に踊る。

長兵　コリヤ〳〵、その戀しき人は、此方の

兩人　ほうやれほ。それ〳〵、其方の、ほうやれほ。

ト兩人、手を叩き、おりんを弄る。おりん、追ひかけ廻る。てんつゝになり、向うより彌藤次、やつし、染

を脊負ひ、出て來る。これを知らずに、おりん、彌藤次を捕へ

りん　ヤア、なつかしかつた〳〵。モシ、京のお客人樣。

ト彌藤次、愕りして

彌藤　これはしたり、わしはそんな者ぢやござらぬ。新米の山樵でござる。

りん　なんぢや、新作のやつし男ぢや。そんなら矢ツ張り、假の契りを

ト彌藤次に寄り添ふゆゑ

彌藤　エヽ、知らぬわいの。

トおりんを突きとばす。

りん　エヽ、胴慾な人ぢやなう。ハアヽ。

ト泣き落し、伏してゐる。長兵衛、紀次兵衛。彌藤次を見て

長兵　ムウ、この荒川に見馴れぬ山樵。

兩人　何處から來たのだ。

彌藤　この程、他所より、紀州路への山稼ぎ。

紀次　イヽヤ、怪しい、見馴れぬ男。

長兵　山働らきの、仲間の見せしめ。

兩人　この鐵砲で

ト取巻くを、彌藤次、脊負ひし柴を打ちつける。立廻り。山颪しにて、彌藤次、兩人を追ひこみ、行かうとする。鹿小屋にて

九郎　山働らきどの、待たつしやれ。

彌藤　ヤ、なんと。

ト谺の合ひ方にて、小屋の内より九郎、出る。彌藤次、見て

この山樵に、待てと云ふは。

九郎　置いて行きやれ。

彌藤　置いて行けとは。

九郎　知れた事、酒手を。

彌藤　さては盗賊、山賊よな。

九郎　如何に山樵木樵でも、少しはあらう働らき代。又そればかりぢやアない、慥かに姿をやつせし男。

彌藤　この山樵、姿をやつせば、なんとする。

九郎　都方より盗賊の、詮議たんどゝいふ者なら、邪魔になるゆゑ此方から、スッパリ殺らして

ト抜打ちに切りつける。彌藤次、斧を持つて立廻り、ちよつと鳴り物になり、よろしくあつて、彌藤次、懐より文を落す。九郎、拾ひ見て

瀬川采女へ、宇治の方より。
ト彌藤次、驚ろき

彌藤　それを。
ト引ッたくろ、立廻り。この時、おりん、起き上がり、眞中にて兩人を捕へ

りん　文とあるか。モシ、わしが京のお方へあげたいと、焦れて書いた色文。ドレ
ト文を取らうとする。兩人、やろまいと立廻り。おりん、ちよつと文を見ようとして
エ、、腹の立つ。文も見られぬ、この逆上やう。

兩人　何を此奴が。
トおりんを突きのける。おりん、懐より以前の文を出して

りん　よし〳〵。戀しいお方へあげる文は、矢ッ張り爰にあつた。

九郎　この文、此方へ。

彌藤　そこ放すまいか。

九郎　エ、、面倒な。
ト彌藤次の文を又引ッたくらうとする中に、おりん入ろ。この立廻りにて兩人、爭ひ、文と心得て、おりんの文を引ッたくろ。おりん、恟りして

りん　その文を。
ト取らうとして、三人の立廻りにて、二通の文を爭ふ。風の音、トヒヨにて、日覆より雁一羽、舞うて來て、彌藤次の文を浚つて空へ上がる。これにて三人、恟りして、また立廻り。おりん、尋ねろ思ひ入れ。彌藤次、九郎を當て、持つたる文を見て

彌藤　ナニ〳〵……とても見初めし戀路にて、氣もとりのぼせし心根を……エ、、こりや、どう狂人めが嫌らしい文。すりや、大切なる宇治の御方の御書を、折しも雁の……ムウ。
ト空の雁をキッと見て
いつぞや聚樂の御所にて、紛失の御用金十萬兩を、岸田民部が惡事に依つて、叛逆の軍用金を奪ひしと、讒言を以て、久次公を罪に落し、高野山に御身退き給ひしも、みな岸田が爲す業。その用金の盜賊を、瀬川采女が引受けて、お家を追放。暫らく浪々の其うちに、十萬兩の御用金を償ひしゆゑ、宇治の方より御赦免の赦し文。斯く山樵と姿を變へしも、盜賊の五右衛門を詮議、又は采女が行くへを尋ね、密かに入込むこの紀の路。この程、根

來の寶塔に、深夜に聞ゆる琴の音、塔の細工の彫り物たる迦陵頻迦の奏する樂と、專ら噂あるゆゑに、合點ゆかずと忍びし今日、思ひがけなき邪魔あつて、取落したる大切の赦し文、何にもせよ、あの雁金の、跡を慕うて

トきつと思ひ入れ。この時、雁は空へ飛び去る。此うち九郎、心附き

九郎　その文、此方へ。

ト彌藤次へかゝる。立廻り。おりんも交るを突きのけ、九郎、文を持つて、石の酒樽を腰に附けて

この酒持つて、それ。

ト向うへ走り入る。彌藤次、思ひ入れあつて

彌藤　身共は今の雁の跡、何處までも。

ト山颪しにて、彌藤次、下座へ入る。おりん、起き上がり

りん　エヽ、胴慾な二人の男。人に恨みがあるものか、ないものか。憎くい二人。可愛いは京の客人。どうぞいとしい男さんに

ト下座にて

〽逢ひたさ見たさは飛び立つばかり、籠の鳥かや恨めしや。さりとは、騙さんしたの。

〽ちよと〳〵逢ひたい事ぢやになア。

トこの唄にて、おりん、浮かれ〳〵て、カケリになり、向うへ入る。チヨン〳〵にて、鹿小屋を引いて取る。音樂に琴唄をかぶせ、正面の黒幕を切つて落す。

本舞臺、眞中に二間の二重、舞臺前へ出して飾りつけ、兩柱、高欄とも惣朱塗りの組み物。彩色のあしらひ。前は隨分低き高欄造りの瓦屋根。眞中に九輪あつて、二重の寶塔。上の寶塔の道具、見附け金葉り附き、佛畫の彩色よろしく、前通りに高欄、下は二重目の屋根、その下は霞で見切り、一面見事に紅葉の梢ばかり見ゆる心。すべて紀州根來の寶塔。上の一重目に綾女、誂らへの形にて、琴を調べてゐる。權六、五十日、廣袖の形にて、琴の唄の本を見て、煙草をのみながら、寢ころんでゐる。音樂、琴唄にて道具とまる。

ト日覆より月出る。權六、思ひ入れあつて

權六　綾女が今の唱歌は、何とやらぢやな。

綾女　朧月夜の内侍の髮、光る源氏の大將。

權六　ムウ、花の宴の夜、源氏の君、醉ひ心地に弘徽殿の、

細殿に立ち寄り給ひ
綾女　内侍の君只一人、朧月夜に似たるものぞなきと口ずさみて
権六　此方へ來られし小袖を捕へ給ひて、源氏、深き夜の余を知るも入る月の
綾女　朧氣ならぬ契りこそ思ふ。
権六　斯く詠みて抱き下ろして、戸を押立てられし心を云へり。
綾女　丁度いつぞや、わたしがお前に
権六　戀せし夜半を、思ひ出して
綾女　オヽ、嬉し。
ト権六に寄り添ふ。
権六　それより筑紫の権六といふ事も
綾女　わたしが身の上も、互ひに知れて浪花を立退き
権六　人も心を附けぬ山家、根來の寶塔、この一重目を住居となして、夫婦の世帶。
綾女　人目を憚り、夜も更けて、塔の扉を開いての月の宴。
権六　酒も肴も調うて、器は名におふ根來椀。
ト側にある根來椀を出す。

綾女　酒の器も根來の湯つぎ。
ト同じく根來の湯つぎを出す。
権六　オヽ、一つ注ぎやれ。
ト始終琴入りの合ひ方にて、綾女、酒をつぐ思ひ入れ。
綾女　ほんに思へば今の身の
権六　不義の富貴は浮べる雲、霞と共に天井住ひ、これが筑紫の権六の一國一城。
綾女　筑紫といへば、この琴の、雲井響かし、星を亂し
権六　目に見えぬ鬼神さへも、耳を驚ろかし、哀れを催ふすその例し。コレ、綾女、其方は哀れを催ふして、故郷の大明が戀しいか。
綾女　なんのマア、あなたに心が引かされて
権六　ヤ。
綾女　風吹けば、浪津白浪龍田山、夜半にや君が獨り行くらん今の身の上。
権六　その白浪と、云へば浮名の龍田山。
綾女　唐土にては優しくも
権六　緑の林と賊の一名。すりや、この白浪と末かけて。
綾女　疑ひ深い。この琴の

ト琴を出して

〽長生殿の內には春秋をとめり。

權六　不老門の前には

ト空を見て

今宵最中の月の照り。ハテ、快き眺めぢやなア。

ト山颪し、鎖の音、シヤリ〳〵として、切り穴より九郎、鎖に取りつき、酒樽を腰につけ、上がり來る。

九郎　申し、お頭。

權六　荒武者九郎、火急の知らせか。

九郎　されば候ふ、寶塔の上一重へ、通路の不自由。かねてお好みの御酒一樽。

權六　ヤア〳〵。

九郎　荒川村の野山の鹿番、狂女が持つてゐたこの酒を、奪ひ取つて參つてござる。

ト腰に附けたる一升樽を差出す。權六、受取り

權六　喰ひ醉ふには不自由な寶塔。もう酒も切れ目であつた。

九郎　まだ〳〵、それにつき、お頭へ、申さねばならぬ一大事。

權六　ナニ、一大事とは。

九郎　最前、荒川の鹿小屋にて、怪しい山樵に出會ひしが、何か詮議の忍びの者と見たゆゑに、ぶッちめんとなしたるに、その山樵が懷より、落したるはこの一通。心急きゆゑ讀みませねど、お頭の働らきの手蔓にならうと、その山樵と爭つて、奪ひ取つた怪しい書面。

權六　月あかりで讀んで見ろ。

ト右の一通を出し、見せ、九郎、讀む。

九郎　ナニ〳〵……とても見初めし戀路にて、心も亂れし心根を思ひやつて、何卒一夜の枕を御交し下さらば、嬉しうて〳〵、こんな嬉しが唐にもあらうか。

ト心得ぬ思ひ入れ。權六、驚ろき

權六　ナニ、これが密書か。

九郎　さては最前、狂女が持ちし文と取違へたか。いまいましい。

トこの時トヒヨになり、以前の雁、文を咬へしまゝ日覆より下りる。三人、これを見て

綾女　アレ〳〵、月に遊べる雁金の

權六　文の言傳、蘇武が例し。

九郎　あの文こそ、取違へし文。

ト權六、思ひ入れあつて、手裏劍を打つ。これにて雁、

權六　權六の前へ落ちる。これを取つて
過ぎし頃なる聚樂にて、思はず不義の
ト云はうとして
この御手蹟は、慥かに宇治どの。

九郎　しかも名宛は、瀨川采女。

權六　ヤ。

九郎　さては、頭は。
ト云ふを權六、手早く拔討ちに九郎を切る。誂らへの合ひ方。綾女、驚ろく。

權六　佛へ恐れ。綾女、血汐の穢れを拂へ。

綾女　アイ。
ト下の方へ來て、香を焚く。九郎、起きあがり

九郎　その一通を
トかゝる。又切りつけ

權六　荒武者九郎は云はゞ匹夫。口さがなきが破れの原。
ト止めを刺す。誂らへの鳴り物になり、チョンと一面に紫の幕落ちる。誂らへの三味線入り、禪のツトメやうなる鳴り物になり、知らせにつき、右の寶塔を、隨分靜かに引きあげる。この庇の下に花の吊り枝、これに紅葉の枒、下は霞と淺黃幕附いてセリあげやうに段々と上がる。よき程に淺黃幕を切つて落すと、二重舞臺は矢張り寶塔の下の所、二重目の體。正面に鼠木綿の帳を掛け、その前に机、花活け、佛器を直しあり、見附けは矢張り金張り附き。この塔の椽側に五右衞門、百日さらげ、鼠の廣袖、世話の六部にて、側に笈を置き、錫杖を杖に突き、眠りゐる。東西、紅葉の吊り枝。右の禪のツトメにて、道具とまる。五右衞門、目を見開き、思ひ入れあつて

五右　六十六國へ納經の、大乘妙典、この根來寺に行き暮れて、いま寶塔の下に、暫らくまどろむうちに、フッと目覺ます香のかをり。
ト香をきくこなしあつて
この香こそ、正に大明帝の御祕藏ありし、深契親の名香。この寶塔に薫るとは
ト上より滴る血汐を見て
心得ざるは生血の滴り。さては、この寶塔に住ひなす者。
ト思ひ入れあつて
聞き及んだる根來の寶塔。慥かに賊の棲家ならん。ハテ、心憎き事ぢやなア。

ト この時、正面の戸帳の内にて

權六　この深更に物云ふは、廻國の修行者よな。

五右　ヤ、、なんと。

權六　それへ參つて、一服のまうか。

ト時の鐘にて、戸帳の內より權六、出て來る。

五右　ハテ、合點のゆかぬ。この寶塔に安置の佛は、五智の如來。その佛前より出でたる男子は。

權六　心願の旨あつて、通夜の者。

五右　すりや、こなたが

權六　あまり讀つたる般若心經、廻國のこなたと見たゆゑ、話しかけて、一服のまうと

五右　それで爰へ、通夜のこなたが

權六　六十六國の奇妙珍說。

五右　そんなら、一服のみながら

權六　互ひに話しを、しませうか。

ト これより三味線入り、衔の合ひ方にて、兩人、思ひ入れあつて

五右　マア、わしも六部の事なれば、日本國を步きましたが、眞柴の天下一統に治まり、誠に草木も靡く時節。ハテ、久吉どのは、有り難い天下樣だ。

ト 權六、こなしあつて

權六　イ、ヤ、そりや六部どのゝ料簡違ひ。わしも諸國を、山稼ぎに步きましたが、下々下郞より成り上がりの久吉、天下を治めたとはいふものゝ、誠に草木も靡かぬ時節だ。

五右　そりやアなぜに。

權六　ハテ、靡かねばこそ、盜賊のはびこり。

五右　ヤ。

權六　イヤサ、國に盜賊、家に鼠、いま石川五右衞門といふ、誠に大盜賊の張本人。

ト 五右衞門へ思ひ入れあつて

その盜賊のはびこるといふが、眞柴の天下の不德といふもの。

五右　イヤ、久吉どのゝ御威勢には、なか〳〵歯の立つ盜賊はない。

權六　その五右衞門は、武將家ばかりか大內へも、躍りこんだる大盜人。五右衞門どのが、久吉よりも賴もしいかと、わしやア思つて居ますて。

五右　アノ、こなさんが、その五右衞門を

權六　如何にも。

五右　眞柴へ對して及ばぬ事だ。

權六　イヽヤ、盜賊でも本望達する。

　ト立ちあがる。

五右　ナニ五右衞門がはびこるとも、眞柴の威勢で召捕るワ。

權六　そりや、どうして。

五右　ちよつと、斯うして。

　ト權六へかゝる。立廻り。權六、振り拂ひ

權六　小癪な眞柴の詮議立て。

　ト兩人、ちよつと立廻りあつて

五右　その五右衞門より、筑紫の權六。

權六　ヤ。

　ト思ひ入れ。

五右　心盡しの今宵の通夜。塔はいづれも五智如來。せめて六部が、拜をとげて

　ト正面の戸帳の側へ行かうとする。權六、捕へて

權六　ハテサテ、五智如來より、愚智なこなたの拜み立て。

五右　それでも、六部の治むる妙典。

　トまた行かうとする。立廻りにて五右衞門、權六、戸帳へ手をかけ、引きちぎる。内に綾女、唐子髷唐女の拵らへにて立つてゐる。五右衞門、悄りして

五右　これは。

　ト三味線入りの靜かなる唐樂になる。

權六　この根來寺の寶塔に、安置は五智の如來なれど、無體に拜をなさんとは狼藉。熊野權現の天童子が、目前しるしを、よつく見よ。

五右　イヽヤ、心得ぬ權現の天童子、安藝守清盛は、嚴島明神を戀ひて利生を受くる。建長寺の何某は、吉祥天の夢想ある。いま四國の天童子へ

　トつか〳〵と行つて、綾女の手を取る。

權六　こりや狼藉な。何とする。

五右　ハテ、心得ぬこの手の筋。自然と顯はす乾坤震巽離艮兌乾の、四神の備はり。殊に五本の指に、五行を卷きたる乾爲天。正に王位のこの手相。慥かに倭國の女に非ず。ハヽア、恐れあり。

權六　ヤ、なんと。

綾女　合點のゆかぬ。自らを、さほど敬ひかしづくは。

五右　隱しめさるな、こなたこそ、明朝の姫君、芙蓉皇女でござらうがや。

綾女　サア、それは。

五右　渠魁觀の香の薫り。

綾女　すりや、自らがくゆらせし、あの香の薫りにて

權六　それと知つたるこなたこそ

五右　如何にも、明朝の臣下の末なる、吳才官が落し胤。この倭朝にて出生なしたる、石川五右衛門。

權六　さてこそ、それと察せしゆゑ、わざと眞柴をさみせしが

五右　この五右衛門は、眞柴を褒めて世を忍ぶ。最前これへ血汐の滴り。この寶塔の階上に、人の住ふと察したは、筑紫の權六、ありと聞きしゆゑ。

權六　すりや、某を

五右　なんと違ひはあるまいが。

權六　アノ、こなたが五右衛門。

五右　其方が權六。

權六　如何にも。筑紫の權六といふ、ずんど初心の小泥坊サ。

トこなしあつて、チッとなつてゐる。

綾女　雲に衣裳を思ひ、花に頭を思ふ。三千里彼方なる、唐土にて生れし身が、うつろ舟にて吹き流され、この日の本の、若狹の國に漂ひ着き、不思議にも吳才官に巡り逢ひ、娘よ父よと世を忍び、養育の其うちに、思ひも依らぬ戀の道。これなる筑紫の權六さまと、契りを籠めてこの所に、忍び隱れて睦まじう、暮らす二人が仲なれば、必らず叱つてたもんなや。

五右　先づは芙蓉皇女の尊顏を拜して、身の喜び。眞柴久吉公、冬より肥前の國に滯陣あつて、三韓と數度の戰ひ。河湯關、酒泉縣の要害は、殘らず切り取れども、未だ大明へ入る事叶はず。小西加藤も長の滯陣。然るに先年、明朝に於て、私しの爭亂、その折から、大明王は御落命。こなた樣には流浪に依つて、この日の本に漂着と聞き及ぶ。いま久吉が目ざすは大明。一刻も早く軍勢を集め、密かに大明國へ歸らせ給ひ、恨みある眞柴の奴ばら、討ち滅ぼさん大望には、明朝の御胤たる、こなた樣の御手形なければ、軍勢催促相叶はず。元より御手の相は、類稀れなる皇女の筋。御行くへを尋ぬるうち、思はずも巡り逢つたる我が本懷。イザ〳〵姬君、歸唐の御用意、あられませう。

綾女　すりや、どうあつても。

五右　如何にも。

權六　誠に、皇女は故郷へ、歸るめでたき門出。
綾女　して、權六さまには。
權六　倭國の生れゆゑ、渡唐は叶はぬ。
綾女　ヤ、。
ト驚ろき、思ひ入れあつて
唐土の、山の彼方に立つ雲は、爰に焚く火の烟りなるらん。
ト愁ひのこなし。
五右　其お嘆きは。
綾女　權六さまに、お別れ申すが悲しいわいなう。
五右　御尤もなる事なれど、偕老同穴の御語らひをなせし御仲、權六どの諸共に、急ぎ御歸唐あられませう。
綾女　すりや、權六さまと共々に。
權六　イヤ、この權六は、日本の神祇を以て、誓ひなしたる二世の緣。道ならねども誓詞を破り、皇女と緣を斷ち切る某。
五右　ヤ、、なんと。
ト綾女、口惜しき思ひ入れにて
綾女　エ、、お胴慾でござりまする。
ト合ひ方になり

さては最前の便りの文にて、また惡性のお心が。この日の本の女子に心引かされて、それでお前は行かれませぬか。
權六　何を女の、知らぬ事だワ。
綾女　イエ〳〵、それはつれないわいな。最前の文より、お心の變りしか。誓ひを破つて行かれぬとは、そりや、あんまりぢや〳〵。エ、、聞えませぬ。
權六　是非にとあれば、この上は、唐土へ行かれぬ。緣の切れ目。
ト一腰を拔いて
我が手にかけても相叶はぬ。
綾女　すりや、どうあつても唐土へは。
權六　如何にも。
綾女　エ、、恨めしい。
ト綾女、拔き身をグツと摑む。兩人、恟りして
權六　ヤア〳〵、白刃を摑んで
トわざと刀を引く。綾女の手、血だらけになる。
五右　すりや、姫君には早まつて、白刃を摑んで……オ、オ。
權六　これでは皇女の掌

五右　五行四神の手相も切れ果て、手形の役には相立たぬか。チエ、、口惜しい。

　ト無念のこなし。綾女、苦しみ、我が手を見て驚ろき

綾女　オ、、自らが兩手は、マア、此やうに……こりやマアどうせう、どうせうぞいなう。

　ト權六、綾女をチツと見て思ひ入れ。

五右　かねて軍勢催促に、用ゆるところの姬君の御手形、斯く掌の切れし上は、最早望みも破れし五右衞門。これといふのも筑紫の權六、われに焦れし姬君の、不運であつたか。おのれ、權六。

　ト仕込みを拔かうとする。權六、留めて

權六　コリヤ、待て五右衞門、皇女の戀は戀の愛着、兩手の筋の切れたるも、云はゞ皇女の自業自得。例へ手相の破れなきとて、この權六を殺す心であらうがや。

五右　何が、なんと。

權六　其方が父たる吳才官が、敵といふはこの權六、それを包みて、無念を堪えしも、皇女を故なく伴ひて、歸唐なしての道すがら、某を討つて捨つると睨んだゆゑ、唐土へ行くを聞入れず、種々と心を筑紫の權六、石川どのの心任せにや、罷りならぬ。ム、、ハ、、、、、、。

五右　すりや、我が父たる吳才官、敵といふ事包みしに、それと疾より知つたるか。

權六　おんでもない事。

五右　ムウ。

　ト思ひ入れ。權六、こなしあつて

權六　さはいへ、深手の皇女の疵、とても存命思ひも依らず。

皇女　エ、。

權六　長らへ居られぬ身は冥土へ、即ち一蓮托生の二世の契りは違へぬ某。

　ト綾女、これを聞いて

綾女　すりや、あの世では女夫になつて

權六　如何にも。

綾女　嬉しうござんす。

　ト權六に取りつく。はずみに權六、懷より最前の文を落す。綾女、見て

文の宛名は、瀨川采女とあるからは、そんならお前は、自らとは、アノ、敵同士であつたかいなア。

五右　さては汝は。

　ト五右衞門、思ひ入れ。權六、綾女の首をポンと切

る。五右衛門、キッとなつて
これまで無念を堪えしも、姫君を伴はん爲。それに何ぞや姫君を討ちしといひ、親吳才官が敵の權六。覺悟。
權六　ト錫杖を抜いて切りつける。權六、立廻つて
敵と呼ばれて刃向ひ立ては、かねての覺悟。とはいへ武士の義理の道、マヽ、とつくりと
ト五右衛門へヒラリと刀を見せる。五右衛門、思ひ入れ。
聞いて置かれい。
ト直ぐにその刀を差しつける。五右衛門「ムウ」と思ひ入れ。また禪のツトメになり、キッとこなしあつて
如何に五右衛門、某、筑紫の權六と名乘り、盜賊とはなつたるも、手段の一つ。誠は眞柴大領久吉公の近臣、瀬川釆女といひし者。
五右　さてこそなア。
權六　さる頃久吉公、三韓の御征伐にて御發向。朝鮮國には、小西加藤の輩、みな先陣の武功と聞く。我れ龍造寺の手にあつて、都にとゞまり、武士の道には不本意と、しばし途方に吳竹の、伏見の御所にて日毎の忠勤、先達て聚樂の御所へ盜賊入つて、千鳥の香爐紛失。その夜同じく御寶藏の御用金十萬兩と、三韓地理の一卷紛失。それゆゑ讒者の計らひにて、地理の一卷御用金は、久次公の業なりと、かねて御謀叛の思し召し、あるが如きの讒言。それと知つたるこの釆女。一卷といひ、用金の盜賊と名乘つて出て惡名を流さんと、重なる科の三つ瀬川、好色者の釆女が幸ひ、身に引受けてお家を追放。某、つくづく思ふには、我が君大領の武威强きに依つて、いま近江に武智柴田の殘黨、山林幽谷に身をひそめ、折を窺ひ旗揚げの企て。就中、明朝の臣下吳才官、この地に渡つて逆意と聞く。詮議なして功を立てんと、山賊野武士に徒黨を結び、筑紫の權六と替へ名して、或る時は海に漂ひ、又或る時は町家に交り、龍と伸び、蚯蚓と縮み、數多金銀を奪ひしは、道ならねども、十萬兩の用金を償はん爲。この程、津の國、住吉の豪家たる、小西是齋へ身を寄せて、計略をめぐらすうち、娘が戀慕は渡りに船。願ひを叶へ、財寶の、在所をとくと知つたるゆゑ、合圖を定めて奪ひし折から、主が詞に大明の、姫君と聞いて悑り。まつた皇女は某が、愛着にほだされ慕ふを見るに忍びず伴うて、この根來寺へ引籠りしが、善惡によつて顯はるゝの道理。然るに最前思はずも、皇女を尋

ね來りし五右衞門、皇女を伴ひ、歸唐なし、叛逆の企てあれば、某も討つて捨つると知つたるゆゑ、先づ斯く計らふこの場の仕儀。其方が企みし本望は、鶍の嘴か佛法僧、住ふは高野の久次公、御身替りとはかねての覺悟。明朝は今日本の敵、その血筋たる采女めと、暫らく枕交せし采女は、生きながらの畜生道と覺悟して、久次公に成り代り、最期に及ばゝ、都三條の瑞泉寺に、畜生塚と末までも、殘し置きたき武士の誡め。また最前手に入れし、この文こそ、宇治どのゝ御手蹟。久次公に成り代り、盜賊の惡名を引請けし忠義を感じて赦し文。十萬兩の償ひ金の、取次ぎなせしは古朋輩、早野彌藤次どの。さすれば文と、その取次ぎを、手下の者の手に入つたりと、我れへの訴へ。いま本心を明かす上は、二世と誓ひし皇女の命討つたるも、武士の忠義、義心の様子の一通り。世にも名高き石川五右衞門、盜賊ながらも義理の云ひ譯。なんと、その身に堪えたか。

五右　サア、それは。

トぢり〳〵と附け廻り、キッとなる。

權六　サア

兩人　サア〳〵〳〵

五右　ムウ。

トロ惜しき思ひ入れ。

權六　とは云へ、忠義と云ひながら、暫らくも賊と樣を替へ、眞柴の家へ歸參がならうか。その云ひ譯は、まッこの通り。

ト刀を腹へ突ッ込む。竹笛入りの合ひ方になり、下の方より彌藤次出かゝり

彌藤　天晴れ忠義の瀨川采女。

權六　すりや、推量の通り、彌藤次どのには。

彌藤　この度、宇治どのゝお使ひにて、姿を替へて入込みしに、最前、道にて狼藉あつて、鴈の翼に吹き散る文。

權六　さては鴈の便りにて、我が手に入つたる宇治どのゝ赦し文。それゆゑにこそ、采女が最期。

彌藤　とくと見屆け、この由注進。

權六　すりや、久次公の

彌藤　かねての忠義に今日只今、御身替りのお役に立てばこれを冥土の土產として、未來成佛。

權六　エヽ、忝ない。

トぢつと思ひ入れ。五右衞門、無念のこなし。

五右　エヽ、思へば〳〵、姫君といひ、父の仇、嬲り殺し

も飽きたらぬ。瀬川采女、うぬを。

トきつとなるを

彌藤　おのれ五右衛門。

ト行かうとするを、權六とめて

權六　皇女が縁に、何卒この場を。

彌藤　こなたに免じて。

五右　せめて仁義は。

ト彌藤次、又キツとなるを

權六　コレ。

五右　早くくたばれ。

ト仕込みを振りあげる。チヨンと木の頭、權六、首さし伸べる。彌藤次、思ひ入れ。この途端、よろしく、

トとつくり幕引きつける「エイ」と首を討ち立てる。

これにて打込み。

第二番目　浦辻隱れ家の場

役名＝＝木曾川彌九郎　實ハ鈴木田隼人照光。小鮒の源五郎　實ハ岩木當馬之丞。間者、運八。瀧川の父、三二五郎兵衛。一子、五郎市。五右衛門女房おりつ　實ハ瀧川。浪人、浦辻良助　實ハ盜賊石川五右衛門。

本舞臺、三間の間、正面、二重舞臺。塗り骨障子。向う茶壁、納戸口。下手に寒竹の藪。誂らへの門口。すべて南都大佛前、浦辻隱れ家の體。てんつゝに白囃子をあしらひ、この鳴り物にて幕明く。

ト門弟二人、やつしの形にて、五郎市を相手に竹刀打ちをして居る。門口に伊勢參り。人足の運八、立ちかかり、ヲヤ〳〵云つて居る。

伊勢　爰の内の子だ〳〵。返して下さい〳〵。

運八　ハテサテ、靜かに云へ。おれが取返してやるワ。

ト喚く。内にては五郎市、兩人をしたゝかに打つ。兩人、やう〳〵起き上がつて

兩人　アイタ、、、、。

門一　成る程、先生の仕込み程あつて、この市松どのは、餘ッぽど手利きだわえ。

門二　それ〳〵、なんぼこの頃、弟子入りをしたおいらでも、小さい子にぶたれるとは、いゝ業晒しだ。

五市　サア、小父様、もう一度立合うて見さつしやらぬか。
兩人　ア、、もう〳〵、御免だ〳〵。
伊勢　コレ〳〵、どうさつしやる〳〵。伊勢參りの物を取つてもよいか。返さつしやいな〳〵。
兩人　なんだ、この拔け參りめ。われが物を、誰れが取つた。
伊勢　ハテ、あの子が、おれが買つた墨筆を取つたから、取返しに來たのだ。返さつしやい〳〵。
五市　イヤ〳〵、わしや取つた覺えはない。知らぬ〳〵。
門一　それ見やアがれ、この子は知らぬぞ。云ひかけひろぐ拔け參りめ。
門二　ぶちのめすがよい。この餓鬼め。
ト兩人して伊勢參りを捕へ、くらはす。運八、これを留めて
運八　これサ〳〵、お前方も、餓鬼を捕へて、大概にしなさいな。今この拔け參りが、猿澤の淵で、道案内を頼むから、わしが話しをしてゐるうちに、土産に買つた油煙の墨、皆くれに見えないワ。側に遊んでゐたは、この子ばかり。そこで取返しに來たのだ。出してやらつしやい出してやらつしやい。

門一　ア、、なんと云ふ。この子が、伊勢參りの土産物を取つたといふのか。
運八　ハテ、取つたら、取返しに來たのだわな。
五市　イヤ〳〵、おりや取つた覺えはない。云ひかけすると、きかぬ〳〵。
運八　イヤハヤ、小ぽけな形をして、よく白を切る小僧だ。取つた事は、キッと見て來たわえ。出さないと、懷を詮議して
ト五郎市を捕へる。門弟兩人、捨ぜりふにて留める。この時、五郎市が内懷より、墨筆落ちる。
伊勢　それ〳〵、それが、おれがのだ〳〵。
運八　これ見ろ。これほど取つて置いて。おツかねえ小僧だ。見せしめに頭を
トぶちにかゝる。よき時分に五右衛門、浪人の形にて莨盆を提げ、出かゝり居て、この時、ツカ〳〵と出て運八を捕へ
五右　コリヤ、其方は、身が倅を、なんと致す。
運八　ア、、そんならこなたが、爰の内の
五右　浦辻良助と申す者。只今承れば、身が倅が、何やら其方達の品を

運八　サア、まんざらな事は云ひませぬ。この伊勢參りの土産物を、あの小さいのが
五右　惡てんがうか惡戯に、やゝともすれば、何の益なき品々を、斷わりなしに持ち參るも、親の血筋を
ト五郎市を見て、思ひ入れあつて
こりや、なんであらう。身が只今、墨や筆を調へてやつたが、それを、お主達が見たゆゑに
運八　エ。
五右　召仕とてもない浪人の、我が子に云ひつけ、奈良の町へ、墨筆を調へに遣はしたが、大方それの間違ひであらうぞ。
運八　モシ／＼、間違ひだと云つて、可哀さうに、あの伊勢參りの土産物を
五右　ハテ、そりや此方で存ぜぬ事ぢやが、失うて難儀とあらば、よいワ、あの拔け參りへ、合力を致してやらう。コリヤ、爰へ來い。
伊勢　ハイ／＼。
五右　コリヤ、身が大神宮への供へと存じ、又は其方が草鞋錢に遣はす程に、失うた品を、これにて買つて、早う行け／＼。

ト莨盆の抽出しより金子一兩出して、伊勢參りに渡す。
伊勢　これは有り難うござります。百か二百の土産物を取られて、此お金を下さるとは、エヽ、有り難うござりまする。
運八　アヽ、伊勢參りが土産物を、失うたを氣の毒と、小判で一兩。さて／＼、大氣な御浪人だ。どうでもこりやア、噂の通り
五右　なんと致した。
運八　イヤハヤ、大氣な旦那樣だ。モシ、お小さいの、惡口を申しましたは、私しが不調法でござります。あなたのお子樣とは存じませいで、只今のやうに、これはハヤ御免なされまし。
門一　先生のお內へ、云ひかけに來たばかりに
門二　伊勢參りは、仕合せをしたな。
五右　コリヤ／＼、其方はこの近所の者か。
運八　イエ／＼、私しは京都の者でござりまするが、この度、世尊寺中納言さまが、この奈良の春日へござると聞きまして、人足も要りませうと、そこでわざ／＼、參つたのでござりまする。

五右　すりや、世尊寺中納言には、いよ／＼當所の、春日の社へ。

運八　明日は未明に、ござるとの事サ。

五右　それぞ幸ひ。

運八　エ。

五右　オヽ、これを緣に話しに來やれ。

運八　ハイ／＼、これは好い御挨拶でござりまする。お首尾のよいうち、私しは歸りませう……コレ拔け參り、ちつと用がある。今の金を見せろ。

伊勢　合點だ／＼。貴樣にも酒手を進ぜうよ。

ト云ひ放しにして、一散に向うへ入る。

運八　コレサ／＼、拔け參り、案内はいらないか。コレエエコレ、……この拔け參りめ、おれに無駄骨を折らせたな。

トてんつゝになり、向うへ足早にかゝる。揚げ幕より五郎兵衛、菅笠、一本差し、中拔き草履にて、息せきと出て來り花道にて行きあひ

五郎　モシ／＼、運八さまぢやござりませぬか。

運八　オヽ、お主は三二五郎兵衛か。

五郎　好い所で、お目にかゝりました。

運八　お主は疾に、この奈良へと聞いたゆゑ、先へ參つたこの運八。コレ、岸田さまより頼みの御狀。

ト懐より狀を出して渡す。五郎兵衛、取つて

五郎　して、浦辻が住家と申すは

運八　向うの彼の家。

五郎　實否を糺すは今宵のうち。モシ

ト囁く。運八、呑みこみ

運八　合點だ。何かは後に。

五郎　待つてゐますぞ。

運八　ドレ、今の拔け參りを

トてんつゝになり、運八、向うへ入る。五郎兵衛、門口へ來り

五郎　ハイ、御免なされませ。浦辻良助さまは、あなたでござりまするかな。

五右　如何にも、これでござる。どれからぢや。サヽ、入らつしやりませ。

五郎　左樣なら、御免なされませ。

ト内へ入る。五右衛門、見て

五右　身共が良助でござるが、尋ねてござつた御老人。

五郎　これはしたり、良助さま、私しは、あの瀧川が親の

五右　オヽ、五郎兵衞どのとやらかな。
五郎　左樣でござりまする。
五右　ハテサテ、思ひがけなう……ア、イヤ、よう尋ねてござつたの。
ト思ひ入れあり
コレ、門弟の衆、この仁には、ちと身共、密々に内談もござれば、いづれもには奥へござつて、稽古を致さるがよいて。
兩人　左やう致しませう。
門一　然らば先生、奥で稽古を致しませう。
五右　ゆるりと致さるゝがよい。
兩人　お客、これに。
ト合ひ方になり、兩人、奥へ入る。
五右　コリヤ、悴、あなたへお茶をあげぬか。
五市　アイ〳〵。
ト五郎市、茶を酌んで來る。
五郎　アイヤ、お構ひなされますな。
五市　アイ、小父樣、お茶あがりませ。
五郎　これは〳〵、ハテサテ、溫なしい坊樣ぢや。此お子は良助さま、あなたの
五市　相果てました先妻の、腹に出來ました悴でござる。
五郎　エ、此お子が……コレ〳〵、お名は何と云ひまするな。
五市　アイ、五郎市。
ト云はうとする。
五右　ア、コレ……その悴は、市松と申しまする。
五郎　エ、此お子の名は市松……ハテサテ、好いお子でござりまする。
ト懐より五右衞門親子の繪姿をソツと出して、見比べる思ひ入れあつて
モシ、良助さま、いつぞや都島原で、娘瀧川を、連れてお退きなさるゝも、こりやハヤ、世間にまゝある事とはいふものゝ、譯は格別、この親仁へは內證で
五右　サ、これまでお知らせ申さぬは、身共が誤まり。この儀は拙者が、幾重にもお詫び申さねばなりませぬ。貴公に逢ふも、面目もない仕合せでござるて。
ト思ひ入れ。てんつゝになり、向うより瀧川、女房の拵らへにて、五合入りの樽を持ち、片手にて座頭の杖を引いて出てくる。隼人、田舍座頭、菅笠、草鞋、旅形、投げ頭巾にて、一腰を三味線と見せ小風呂敷に包

み、これを背負ひ、瀧川に杖を引かれ、出て來り、花道にて

隼人　モシ／＼、おかみ樣え。あなた樣のお宅は、もう僅かでござりまするかな。

瀧川　ハテ、向うが此方の內ぢやわいなア。

隼人　エ、、向うの內でござりまするかえ。ア、、そんなら、モウ、僅だやら、餘計だやら、目の無い私し。併し、どうやらツイ向うの所爲か、お前樣のお內の住ひが致しまするて。

瀧川　ほんに、お前は氣輕な、好い座頭さんぢや。此方の旦那どのが、いかう肩がつかへたと云はしやんすゆゑ、按摩さんを尋ねに出た所へ、ようマアござんしたなう。

隼人　ハイ／＼、私しは旅がけの座頭でござりますが、宿賃の工面に、隨分療治も致しまするて。その代り、後で、按摩宿を教へて下さりませ。

瀧川　合點ぢやわいなア。サア、來なんせ。

ト兩人、門口へ來り

モシ、旦那どのえ、座頭さんを連れて來たぞえ。

隼人　ハイ／＼、御免なされませ。

ト內へ入り、草鞋を脫ぐ。

五右　コリヤ／＼、女房、療治どころではない。都から、其方が親の五郎兵衛どのが

瀧川　エ、アノ、養ひの親の……父さん、お目にかゝるも、申し譯ないこの身の誤まり。堪忍して下さんせえ。

ト面目なき思ひ入れ。

五郎　コリヤ、娘、瀧川、わりや息災で居をつたかい。コレ

ト瀧川の側へ寄つて

いつぞや廓を駈落ちした、その日より、この親仁へも、島原より疑ひかゝつた。とは云ふものゝ、知らぬが定ゆゑ、云ひ拔けてしまうたれど、コレ、娘、與助さまは客人の事、わしとは互ひに知らぬ同士、便りなうても恨みはせぬが、三つ四つから育てあげ、四年が間育んで、末はたのしみにかゝらうと、樂しんでゐる親を捨て、逃げ走りも……サ、、まゝある事とはいふものゝ、せめて落ちついてゐる所なと、狀の便りにしたといふて

瀧川　サ、それも存じて居りまするが、常から物書く事は出來憎いお前、文をあげても、外を賴まにやならぬ父さん、それでは却つて、わたしら二人が隱れ家を、お前がそれと仰しやらいでも、他人の口から

五郎　成る程。尤も、目はあつても明き盲目。

隼人　これは不作法。側に座頭を置きながら、明き盲目とは、サテ、慇懃な御挨拶。

五郎　ほんに、座頭どのが居さしつたに、明き盲目ゆゑ、見附けなんだ。

隼人　ハテ、盲目に劣つた旦那だわえ。ハヽヽヽヽ。

五右　アヽ、座頭どのが來てか。

瀧川　お前が、肩が張つたと云はしやんしたゆゑ、旅がけの座頭さんを、同道して來たけれど、久しぶりの、父さんのお出でゆゑ。

五郎　これはしたり、おれへの遠慮はいらぬもの。肩が張つてござるなら、コレ、良助さま、わしに構はず、療治をしてもらはつしやりませ。

五右　おやと申して、あまり不躾。

瀧川　ハテ、父さんは心安い程に、ちやつと揉んでもらひなさんせ。

五右　然らば舅どの、御免を受けて

五郎　サア〳〵、療治なされませせサ。

瀧川　サ、座頭さん、爰へござんせ。

隼人　ハイ〳〵、ドリヤ、お療治を致しませうか。

ト探り寄つて、五右衛門が肩を見て

これは旦那、いかう張つて居りますぞえ……モシ、旦那様、私しは大阪に居りまするうち、國から狀が參りましたが、只今あなたの仰しやるやうなもので、私しは明き盲目と違ひ、正眞の明かず盲目。どうで人樣を、お頼み申さねばならぬ盲目。モシ、この狀を、御覽じて下さりませ。

ト懐より狀を出し、五右衛門へ頼む。

五右　ドレ、讀んで進ぜうか。

ト封を切り、讀む事。隼人、肩を揉む。

五郎　わが身も知つてゐやる、わしが煩らひ。あそこや爰に不義理な金、アヽ、どうしたら濟まされうと、思案に落ちぬ最中へ、斯う〳〵した借り金に、請けにさへ立つてくれゝば、その禮金はこれ程と、拵らへ事とも知らばこそ、惡者どもの仕事にかゝり、印形据ゑたその後に、根が僞はりの仕事ゆゑ、金受取ると其まゝに、行くへの知れぬ惡者ども。殘つた者はおれ一人。金も取らぬその上に、大枚な金の請け印。これが誠に身の災難。アヽ、どうしたらよからうと、とつおいつの思案のうち、われが事に氣がついて、どうぞ話して見ようかと、在所を尋

ねて今日が日まで、金の祟りの來ぬといふは、どうも合點の

瀧川　サ、それもわたしが聞いたゆゑ、お前には沙汰なしに、主に願うて、その金拵らへ、お前の判を拔いたのも

五右　ア、コレ

ト思ひ入れ。

五郎　すりや、その金は

ト思ひ入れ。

エヽ、忝なうござる。モウ〳〵一生。五郎兵衞、恩に着まする。

瀧川　サ、それ程までに頼もしい良助どの、今までお前に逢はしやんせねど、蔭ながら舅と思うて居やしやんす、主の氣性。義理にも女房にならないではと、廓を拔けて、わたしが駈落ち。この奈良の町へ來て、近所の衆へ劍術柔道の稽古やら、好きな茶の湯の指南。何をいうても都と違ひ、やう〳〵親子三人の

ト挨拶のうち、五郎市、そろ〳〵と五郎兵衞が側へ寄り、置いたる紙入れを取りたき思ひ入れ。五右衞門、狀を讀みしまひ

五右　コレ、座頭どの、この文言は一通り、國許に別條ないといふ知らせ。さして用事も書いてないて。

隼人　それは有り難うござりまする。

五右　この狀の文言では、こなたの生れは

隼人　ハイ、私しは、關東者でござりまするが、鍼や按摩の修行がてらに、京大阪に足を留め、これからそろ〳〵、高野山へ參りませうと、目も無い癖に、杖を力に山坂道を、この大和路へ、突入りましたて。

五右　ハテサテ、それは氣の毒な事ぢやの。して、もう國へ歸りがけか。

隼人　イエ〳〵、道連れさへござりますれば、長崎はおろか、或ひは天竺、唐、韃靼、朝鮮國へも

五右　アノ、お坊が

隼人　ハイ、盲目の癖に、とんだ座頭サ。

ト袂より一卷を出し、ソッと五右衞門が懷へ入れる。五右衞門、この手を捕へる。五郎市、この時、五郎兵衞が紙入れを取らうとする。この手を捕へる事。兩方途端、一度に思ひ入れあつて

五郎　これサ、この子は何をする。

瀧川　こりや、市松が、また他人さんのお道具を、やゝともすると

五右　ヤ。

ト思ひ入れ。瀧川、もぎ取る。

子供心の市松は、お客の道具と辨まへず、悪い病のその中に、それと變りし按摩取り。何か身共が懐中へ

トそつと一卷を見る事あつて

こりやコレ地理の

瀧川　エ。

隼人　ちりけには、お灸がござりますかえ。

五右　三里を除けて

隼人　お腰のまはりを

五右　お客へ不躾。勝手へ參つて

隼人　下のお療治。

五郎　ハテサテ怖い。すんでの事に。

ト紙入れを懐へ入れて。

瀧川　悪いたづらも時による。

ト煙管を振りあげる。

五郎　これサ、子供を仰山な。

五右　お客は、これに。

五郎　良助さま。

隼人　旦那、斯う參りますかえ。

ト唄になり、五右衛門は隼人の手を引き、五郎市附いて暖簾口へ入る。あと合ひ方。

瀧川　成る程、生さぬ仲なるあの市松。生れ附いたるあの病。ア、、末々成人した上で

五郎　ハて、そりや案じるより生むが易いと、お主が捨て子のその砌り、守り袋の書附けを、近所の衆に讀んでもらへば、庚申の夜に誕生の女子とばかり、添へてあつたは、千疋猿の割り笄、誠の親の證據にと、渡して置いたが、あの小柄

瀧川　夫に預けて、大事に持つて居りまする。庚申の夜に誕生は、世上の人の嫌ふ生れ。

五郎　サ、その日に生れたわれでさへ、七つの年まで育てたが、悪根性の無い生れ。放し鳥の五郎兵衛が、娘ぢやゆゑに小雀と、女に稀れな異名を取り、養ひ親の目を掠め、都を逃げて良助と

瀧川　忍び暮らしに添うてゐるも、今もお前に、あらはにこそは云はねども、島原に勤めのうち、お前の無心も度重なり、親方さんへ内證で、年季を書き入れ、借金して、貢いであげるその金の催促。通うてござんす良助さまを、此方からお頼み申して、廓を駈落ち。

五郎　そんなら、せびつた無心の金も、皆あの良助さまが續けた金で、この親を救うてくれたのか。アア、さうとは知らず今日までも、その譯知らぬゆゑ、この五郎兵衞、大恩になつた良助さま、連れて退くと云はれたら、よもや否とも云はれまい。シタガ、老人の後生の種になるか知らぬが、ちつと大金になる事がある。コレ、娘、われにちつと、この繪を見せて。

ト五右衛門親子の繪姿を出し

瀧川、あの良助さまは、河内の國の人ぢやないか。

瀧川　どうござんすやら。

五郎　ハテ、知らぬか。わが身、知つて居さうなものぢやが。コレ、あの良助どのと、先妻の子の市松とやらとが、この繪姿に、よう似たぢやないか。

瀧川　「河内の國の盜賊、石川五右衛門、悴五郎市、人相書。」

ト讀む。

五郎　なんと、この繪に、よう似た良助親子。おれが爲には、大恩受けた人なれば、この繪姿によう似てある程に、麁末にならぬ。役に立たぬ話しぢやが、この繪姿の五右衛門夫婦が、岩木兵部の屋敷へ忍び、虜にしたる五郎市を、奪ひ取つたといふ噂。その五右衛門が女房は、男まさりな生れつき。これも大方、女房の親が、その五右衛門の恩になつたと、いふやうな事もあらうと思うて見れば、身につまされて、ナ、娘、必らず亭主良助どのゝ恩を寢た間も忘るゝな。

ト裏問ひかけて思ひ入れ。瀧川、こなしあつて

瀧川　義理あるお前の教訓なれど、親に情をかけようとも、よし大恩になればとて、お尋ね者の女房に、一日片時も、どうマアなつて居られませうぞいなア。

五郎　すりや、アノ、われは、萬々一、あの良助に貫名あらば

瀧川　無理暇とつて、外へ縁附き、榮耀榮華が

五郎　ア、それでこそ五郎兵衞の

ト云はうとして

エヽ、情無しに生れたなア。

瀧川　父さん、お前、お燗をつけてあげうかえ。

五郎　そりやよからう。燗の出來るうち、爰でゆつくり寢ころばうかえ。

ト横になる。

瀧川　お前、奥へ來なさんせいなア。

五郎　イヤ〳〵、良助どのゝ前では、寝そべるも氣の毒。矢ツ張り爰が

瀧川　そんなら父さん。

五郎　娘。

瀧川　ドレ、燗つけて來やんせうか。

ト唄になり、酒を提げて奥へ入る。直ぐに暮れ六ツの鐘。向うより運八、ウソ〳〵と出て來り

運八　最前逢つた五郎兵衛め、途中といひ、何かの仔細

ト内を窺ふ。此うち合ひ方。

コレ〳〵、五郎兵衛々々々。

ト門口にて招く。五郎兵衛、呑みこみ、ソツと出て

五郎　運八さまか。最前は途中と申し、何かの遠慮。して、岸田さまより、仰せ越されし御用はナ。

運八　即ち御用は、渡したあの御狀、あれに詳しく記してあるワ。

五郎　すりや、此お手紙に。

ト紙入れより狀を出し、思ひ入れあつて

然らば、これに御用が書いてござりまするか。

トこの時、奥より門弟兩人、出て來り

門一　我れ〳〵とても岸田どのより

門二　五右衛門詮議の

兩人　間者の兩人。

運八　即ち委細はその御狀。

五郎　サ、御狀とは仰しやれど、何を申すも私しは、皆目の無筆でござりまする。

門一　ハテサテ、それは不自由な生れ。

運八　然らば身共が、讀んで聞かさう。

五郎　お頼み申しまする。

ト運八、狀の封を切り

運八　ア、おれにも讀めればいゝが。

ト狀を開き

なんだ……紙面を以て申し越し候ふ、先達て其方より訴へし通り、浪人浦辻良助こと、五右衛門に極まらば、騙し寄つて親子とも召捕り候ふやう、舅の汝、娘の縁にて、彼れが宅に足を止め、首尾よく搦め出すに於ては、厚く恩賞これあるべく候ふ。月日、三二五郎兵衛へ、岸田景成。

ト讀む事あつて、五郎兵衛呑みこむ。此うち、暖簾口より隼人、出かゝり、立ち聞きゐる。

五郎　すりや、この狀に、御褒美の事が書いてござります

るか。
運八　しつかりと書いてある。もし其方が手にあまらば、身共が持參の飛び道具、われにしつかり渡して置くぞ。
ト種ヶ島を渡す。
五郎　五郎兵衞、しつかりと預かりました。
ト懷中する。この時、隼人
隼人　モシ、旦那樣え／＼。
ト最前の手紙を持つて前へ出る。これにて皆々、思ひ入れあつて、運八は下の方へ隱れ、門弟兩人は下座へ入る。五郎兵衞、右の狀を持つてゐる。隼人、探り寄つて
モシ／＼、旦那々々、ちつとお頼み申しまする事がござりまするわえ。
ト云ひ／＼出る。此うち始終捨て鐘。
五郎　こりやア座頭どの、頼みたいとは、なんの事だ。
隼人　イヤ、外の事でもござりませぬが、この狀を見て下さりませ。
五郎　ドレ／＼
ト狀を受取り、持つたる密書を一つに持ち添へ
この狀が、どうしたと云ふのだ。

隼人　サア、お聞きなされませ。先刻、爰の旦那に、讀んでもらはうと見せましたら、口の内で讀ましつて、さしたる用もない、案じる事はないと云はしつたが、委細を聞かねば、矢張り案じられます。どうぞお前、その狀を、讀んで下さりませ。
五郎　ア、、この狀を、おれに讀んでくれろといふのか。
隼人　左樣でござります。
五郎　この座頭とした事が、おれは先刻、こなたの療治の場に居合せた、ソレ、明き盲目の五郎兵衞だワ。
隼人　ア、、ほんに、その明き盲目樣のお聲でござりましたわえ。明き盲目樣を見違へまするとは、本盲目と申すものは、ハテ、不自由なものでござります。ハ、、、、。左樣なら、只今の狀を下さりまし。
五郎　サ、、持つて行け。
ト渡さうとして、二通一緒に持つたるゆゑ、思ひ入れあつて
コレ／＼、座頭々々、おれが方にも狀が一本あるが、ツイうつかりと持つたゆゑ、コレ／＼、どちらが貴樣の狀か、判らぬワ。ちよつと見分けてくれまいか。
ト差出す。

隼人　これはしたり、本盲目の私しが、どうしてそれが見えませう。それが見える位なら、讀んではもらひませぬ。
五郎　ハテ、それは困つたものだ。二人寄つて、ろくな眼が一つもない。見比べて見ようにも、暗くはなる。老人の目といふものは、アヽ、自烈たいものだ。
　ト氣を揉む。
隼人　モシ／＼、そんなら良助さまに、ちよつと見てもらはつしやりませ。
五郎　エヽ、埒もない。この狀ばかりは、どうして良助に見せられるものだ。これを見せては、ちつと此方に
隼人　アヽ、モシ／＼、斯うなされませ。なんでも兩方とも、投げて見るがようございます。
五郎　イカサマ、爰らが誠に神事だて。サア／＼、こなたも念じさつしやい。おれも一心に、神樣を念じて、ソレ、投げるぞ。
隼人　南無天照大神宮さま。
五郎　ソレ、投げるワ。
　ト五郎兵衞、二本の狀を念じ投げる。密書の方、隼人へ行く。隼人の狀、五郎兵衞の方へ落ちる。この後へ
　五郎市出て、面白さうに見てゐる。
アヽ、そんならこれが、おれが大切な狀だわえ。
隼人　して、わたしが狀は、何處にござります。
五郎　それ／＼、そこにあるワ／＼。
隼人　何處にござります／＼。
　ト尋ね廻る。この時、奥にて
瀧川　父さん、お燗がついたぞえ。早う來なさんせ／＼。
五郎　オイ／＼、今行くぞ／＼。
隼人　モシ／＼、私しの狀は何處に。
五郎　ハテサテ、酒の方が肝心だ。
　ト五郎兵衞、隼人の狀を持つて奥へ入る。
隼人　これサ、わしが狀は、何處にござります。
　ト尋ね廻る。五郎市、この密書を取つて
五市　それ／＼、そこにござる／＼。
　ト中拔き草履を取つて投げる。隼人、捨ぜりふにて、草履を探り取つて
隼人　アヽ、こりや草履だものを。惡い坊さまだ。數へて下さりまし／＼。
　ト此うち五郎市、件の片足の草履の裏へ挾み、また投げる。隼人、探り寄つて、草履を取つて

これはしたり、また草履を掴ませた。惡いたづらな坊さんちや。

ト五郎市、隼人を突きこかし、手を打つて笑ひながら奧へ入る。隼人、捨ぜりふにて、狀を探してゐる。暖簾口より五右衛門、行燈を提げて出て、隼人を見て

五右　この座頭どのは、何を這ひ廻るのだ。

隼人　ア、、旦那様だね。モシ、爰の坊様も、ハテサテ、いたづら者でござりまする。先刻あなたに、お目にかけた私しが手紙を、どちらへか持つてござりましたが、そこらには見えませぬかえ。

五右　イヤ／＼、爰らには草履ばかり。又あの悴めが惡いたづら。

ト散つてある草履を、何心なく取つて、下の方へ抛り

ア、コレ、座敷内を、埃だらけにしをつた。

隼人　ア、コレ、先刻の狀を、何處へ持つてござつたやら……ア、モシ、旦那様え、私しはもう、お暇申しまするが、何も御用はござりませぬかな。

五右　オ、、大儀であつた。

隼人　ドリヤ、按摩宿を尋ねませうか。

ト門口の方へ探り行く。

五右　お坊、待ちやれ。

隼人　私しが事でござりまするか。

五右　お坊は、どうか見たやうだ。

隼人　エ、、旦那様、そりやア大方、人違ひでござりませう。これはしたり、肝心の物を忘れました。モシ、そこらに、私しが包みはござりませぬか。

五右　包みとは、淀川堤か。

隼人　エ……中は麁末な三味線の、皮は破れても四つ乳頃。

五右　主は誰れとも白川夜船。

隼人　爭ふはずみに、その箱は

五右　慥かに船へ。

隼人　さては、その時……イヤ、旦那様、お氣に入つたらお出入りに。

五右　最前其方が療治の節、揉み和らげし地理けもと。此方の腹にしつかりと。使うてくれうが、目を明けサ。

隼人　すりや、疾よりも

五右　さほどの事を辨まへずに、人の司がなるべきか。

ト此の時、下手より、門弟二、ツカ／＼と出て

門二　さては曲者。

ト隼人へかゝろ。立廻り、門弟を捕へ、締め殺す。はずみに兩眼見開く。時の鐘。

五右　いつぞや河內の石川にて、悴もろとも奪はれし、地理の一卷、最前身共が懷中へ、それと申さず納めしは、さては汝も某が、仲間の者へ、心を寄する。

隼人　世上を窺ふその時は、或ひは座頭、按摩とり、それも兩眼明らかと、見極めらるゝ上からは、わしが素性も

ト包みの中より大小を出し

脊負うた稽古三味線の、その正體は、わしが魂ひ。

五右　すりや、其方は。

隼人　木曾川彌九郎と申す者。いつぞや淀の下り船、不思議に手に入る地理の一卷、御身に手渡し申さんと、在所求めて今日只今、お目にかゝるは身の本懷。今より腹心同然に、お心措きなう、願ひまする。

五右　さこそあらんと察せし某。父吳才官をはじめ、主君の皇女も情なや、人手にかゝつて御落命。

隼人　さては津の國、天下茶屋にて、藥屋是齋と變名なし、横死なしたる老人は、御身の父たる、吳才官にてありつるか。敵は正しく筑紫の權六。

五右　その山賊も眞柴の家來、皇女のお心かけ給ふ、瀨川釆女といひし者。紛失なしたる用金を、集める爲の山賊夜盜、その身の犧牲に、切腹なしたり。

隼人　すりや、山賊と思ひの外、釆女とやらんが、忠義の爲の盜賊とな。我れも近江路、山城の、その兩國に徘徊なし、よき主取りもあらんかと、時節を窺ふ木曾川彌九郎、手に入る異國の地理繪圖面、貴殿に渡す上からは

五右　今日よりしては手下の彌九郎。

隼人　今からお頭、五右衞門どの。

五右　コリヤ……働らく心か。

隼人　仕事があらば。

五右　然らば語る、今宵の大事。

隼人　して、その仕事は。

ト五郎兵衞、門弟の一、立ち聞く。

五右　春日の社へ勅使の入來、公家は世尊寺中納言、その刻限は今宵の子の刻。我が家に有りあふ岩木の先祖、俊豐が裝束と冠、これを着して紛れ入り、勅使の世尊寺討つて捨て、春日の神寶を奪はん企み。寅の刻より一陽兆し、陽は顯はれ、陰は隱るゝ。子丑の間は、成就の刻限。

ト五郎兵衞、立ち聞きして入る。

隼人　さては公家の姿にいでたち
五右　あの東大寺の、後夜を合圖に、社を窺ふ。
門二　さてこそ五右衛門、この旨注進。
ト向うへ驅け行く。
隼人　南無三、大事を聞いたる曲者。
五右　跡追ひかけて
隼人　ソレ。
トごん／＼にて、一腰を差し、跡を追つて向うへ入る。五右衛門も奥へ入る。唄になり、向うより當馬之丞、旅の形、一本差し、小風呂敷の包みと藤行李を割掛けにして、スタ／＼と出て來り、花道にて
當馬　ア丶、秋の日は短かうなつた。もう暮れたか。いま後の辻で聞いた、良助といふ劍術の指南の女房こそ、島原の女郎あがりといふ噂。正しく浦辻といふ浪人、爰へ係つて尋ねたら
ト門口へ來り
爰の内で、灯を借りて行かうか……モシ、御無心がござります。ちとお願ひ申しませう。
ト奥にて
瀧川　アイ／＼、なんでござんすえ。
ト云ひ／＼出て來り
なんでござんすえ。
當馬　モシ、旅の者でござります。どうぞ提灯の火を、お貸しなされて下さりませ。
瀧川　それはお易い事でござりまする。サア、これへ遣はされませ。
當馬　ハイ／＼、左樣なら、お頼み申します。
ト提灯を差出す。
次手に承りませうは、この大佛前に、浦辻良助さまといふ、浪人衆がござりまするかな。
瀧川　その浦辻良助は、此方の内でござんすが
ト提灯を出し、顏見合せ
ヤ、慥かお前は、島原へ商ひにござんした、附賣りの源五郎さんぢやござんせぬかえ。
當馬　ヤ、お前は瀧川さんだね。ハテ、お久しぶりで、お目にかゝりました。マア／＼、お前さん、御盛んで、おめでたうござります。見たところが、以前の太夫職には引かへて、今は眞面目な女房風。ア丶、そんなら噂に違はず、良助どのといふ、御浪人と世帶して
瀧川　アイ、今では客人の良助どのゝ世話になり、誰が仲

立ちといふ事なく、相對づくの夫婦暮らし。以前は廓の瀧川も、今のその名は、りつと呼び

當馬　エヽ、おりつさんと云ひやすか。

瀧川　アイ。してマア、お前は旅がけに、何處へ行きなさんすえ。

當馬　アイ、わたしは、お前のござる所を尋ねにサ。

瀧川　そりや何の用でえ。

當馬　ハテ、用といふのは廓の騷動。その場よりこなさんは駈落ち、闕破り同然のお前ゆゑ、京大阪は勿論、西國筋まで、遊女屋仲間で尋ねるこなさん。何を隱しませう、わしもその詮議を頼まれて、わざ〳〵尋ねて大和路へ、踏み込んだが勿怪の調法。今日爰で逢ふからは、サア、連れて行きます。ござりませ。

ト瀧川が手を取つて引立てる。

瀧川　ア、コレ、滅相な。何をしなさんす。今までの瀧川とは違ふわいな。わたしや良助といふ夫のある身、それを捕へて、何處へ連れて行かうといふのぢやえ。

當馬　ハテ、知れた事、島原へ連れて行くのサ。コレ、お前、良助さんといふ夫があると云はつしやるが、二人ともに駈落ち者、その御亭主から綾が拔けませぬワ。お前はマア、顏に似合はぬ大膽な……コレ、お前、マア、廓にござるうち、達引のある女郎衆ゆゑ、あのゝものゝですびいても、イヤ、わしの方が年かさぢやに依つて、定めし弄つて見る氣であらうのなんのと、成るやうに、成らぬやうに散らしたを、よもやお前、忘れはさつしやるまいが。

ト手を放さずにしなだれる。

瀧川　そりやお前、その時は、勤めのうちのいたづらに、仇な事も云うては見たが、ハテ、お前にも女房のある身、殊にわたしや、お前より年かさゆゑ、姉と云うてもよい恰好。どうで末々は、老女房と飽きられて、お前の弄み物になつた上、突き出されるは知れた事。それゆゑ返事せなんだわいな。

ト手を振り切る。此うち五郎市出て來り、何心なく當馬之丞が柳行李の蓋を明け、中より袱紗に包みし、蜀紅の錦の、唐裝束の片袖出すを、不思議さうに見てゐる。

當馬　エヽ、お前も先潛りを云ふ女中だ。コレ、そりやその時云うた事だよ。姉と云うても弟と云うても、よい年配に見えるから、いつそ同胞分にならうかと、諦めて見

ても、どういふ事か、こなさんに

瀧川　どうしたえ。

當馬　屬魂惚れてゐるやつサ。

トしなだれ寄る。

瀧川　ア、コレ、惡い事しなさんすな。主が見ると惡いわいなア。

當馬　ハテ、大事ないわな。その主の良助どのからして、人の抱への女郎を盗んだ、泥坊だわな。

瀧川　エヽ。

當馬　サ、亭主からして日蔭者だよ。

トこの度々に瀧川こなし。當馬之丞、捨ぜりふにて、あちこちする。トヾ五郎市、錦の袖を引出し、見てゐるを、フト五郎市を見て

瀧川　コレ〳〵、あの子が見てゐるわいな。

當馬　ありやアお前の子か。

瀧川　アイ、先妻の子ぢやわいな。

當馬　子供だわな。打ッちやつて置きねえ。

瀧川　主に告げるわいなア。

ト逃げ歩く。五郎市、この中へ割つて入り

五市　餘所の小父様、母様をどうするのぢや。

當馬　どうもせぬが、おれは母様を迎ひに來た者だよ。コレ〳〵、其方へ退いてゐな〳〵。

瀧川　イヤ〳〵、其方、退くまいぞ、母が側に引附いてゐや。

ト五郎市が持つたる錦を見るより、手に取つて、思ひ入れあつて

コレ、市松、わが身、此やうな品を、何處から持つて來やつた。見れば、結構な錦にて、どうやら廓の俄に使ふやうな。ほんに、こりや、唐人の裝束ぢやないか。又しても〳〵、惡てんがうに。コレ、こりや、何處から持つて來やつた。

五市　こりや、この小父様の行李の内に。

當馬　わしの行李から、何が

ト錦の袖を見附け

アレ、いつの間にやら。

ト手早く取つて行李へ打込み、しやんと蓋をする。瀧川、思ひ入れあつて

瀧川　常から夫の噂ある、蜀紅の錦と聞いたばかりに……もしや今のが

ト寄るを當馬之丞、キッとなつて

當馬　こりやア廓の俄の裝束、それを常々噂ある、蜀紅の錦といふからは、さては浦辻良助こそ
瀧川　わたしが連合ひ。
當馬　ヤ。
瀧川　して又、今の片袖は
當馬　守にせうと、干見世から
瀧川　アノ、こなさんが
當馬　買うて置いたる蜀紅の
瀧川　すりや、あの裂れが
當馬　わたしが物サ。
瀧川　あの品お前の所持といひ、もしや岩木の
當馬　ヤ。
ト思ひ入れ。瀧川、さては當馬といふこなしあつて
瀧川　サ、岩木ならねばこなさんの、いま云はしやんした
當馬　今のあじやらが
瀧川　ありや眞實に云うたのかえ。
當馬　眞實なれば、こなさんは
瀧川　話して見ようと思ふから
トしなだれる思ひ入れ。

當馬　そいつは有り難いの。シタガ、以前は島原で、情を商ふ全盛の、まんざら野暮でも
ト瀧川へもたれる。
五市　ア、コレ、此方の大事の母さん、何處の人ぢや、退いて居さんせ。
ト當馬之丞を引ッ張る。
瀧川　これいなう。なんのわが身が、小さい形をして、母さん〳〵と、わしやその母さんと云はれるが、きつい嫌ひぢやわいの。わが身の母さんは、疾に死んでしまはんしたわいの。
ト五郎市を突き飛ばす。この時、障子を明けかけ、五右衞門窺ふ。
當馬　これサ、瀧川さん、子供だわな。可哀さうに。
瀧川　なんのマア、大抵ませた子ぢやござんせぬ。若いお方と、憂を晴らして見ようと思ふ、心もあれば、我が子でもない者に、母さん〳〵と、子持ちらしうて、色氣がござんせぬわいな。
トしなだれる。
當馬　ア、、俄に空の雲行きが、變りかゝつて來たのも、慥かにこの行李の中、俄の裝束。

ト蓋を取る。五右衛門、さてはト思ひ入れ。五郎市、
駈け寄り

五市　アレ、金入りのあの裂れが

ト立ち寄る。當馬之丞、行李の蓋をする。瀧川、思ひ
入れあつて

瀧川　これはしたり、又しても〳〵、人さんの物さへ見ると、斷わりなしに手を掛けて。コレ、母は此お方に話しもあり、奥へ行きやらぬか。

五市　アイ〳〵。

瀧川　返事ばかりしやつて、云ふ事きかぬか。

ト煙管を持つて、二つ三つ叩く。當馬之丞、これを留
めて

當馬　これはしたり、小さい者を、可哀さうに。

瀧川　構はんすな、源五郎さん、今夜は此方に泊りなさんせ。

當馬　泊れば、どうするな。

瀧川　ハテ、又よい相談も出來やうわいな。

ト當馬之丞の顔を突く。

當馬　アレ、あの子が見てゐるによ。

瀧川　エヽ、よいわいな。

當馬　エヽ、いつそのくされに

ト瀧川へ抱きつかうとする。五右衛門、出かゝり、こ
の時、三人、顔見合せ

瀧川　ヤ、こちの人、そこに居なさんしたかえ。

五右　最前から、これに居つたて。コリヤ、市松、そちや爰に居つたら、また母がどのやうな、折檻を致すまいものでもない。サ、奥へ行きや〳〵。

五市　アイ〳〵。

ト合ひ方になり、五郎市、奥へ入る。

五右　コレ、おりつ、あの若い人は、ありや、どれからござつた。

瀧川　サア、あのお方は

トつかへる。

五右　ありや、どれから參つた。

當馬　ハイ、私しは、何か爰の內へ、用事があつて、ナウ

ト瀧川と顔見合せ、思ひ入れ。

五右　何やら用事あつてとは。

當馬　盜みに來ました。

五右　ヤ。

瀧川　ア、コレ

ト思ひ入れ。

當馬　ハテサテ、お内儀さん、今さら悔りする事はござりませぬ。胴を据ゑてござりませ……良助さまとやら、爰にござるお内儀を、盗みに來ました。

五右　アノ、身が女房を

瀧川　アイ、成る程、主はわたしを、盗みにござんした。以前勤めの時分から、浮氣で逢うた源五郎さん、いま逢うたのを幸ひに、わたしも主に、盗まれて行く心ぢやわいな。

五右　すりや、源五郎とやらが盗みに來たれは、女房も身共を捨てゝ、盗まれて行く心ぢやな。

瀧川　アイ、急にその氣になつたわいな。

五右　道理々々、この間の繼子憎み。義理ある悴と、その節は、その身を捨てゝ、恐ろしい

ト思ひ入れあり

その深切に事變り

瀧川　今では急に、あの子が煩さうござんすわいな。子のある夫はフッツリと、此方から暇を貰ひ、子の無い、若い主さんの、世話にならうと今日の今、思ひ附いたは、ア、遲う氣の附いた事いなア。源五郎さん、怖い事はないぞえ。お前もしつかり帶締めて、わたしを女房に持ちなさんせ。

當馬　成る程、女の方から性根を据ゑてのその一言。わしも男ぢや、良助さま、お内儀樣は、わしが貰ひ申しました。

五右　如何にも遣はさう。以前は廓の傾城あがり、左樣な譯もありさうな事。如何にも女房は、貴樣に進ぜるその代り、源五郎とやら、置いて行きやれ。

當馬　置いて行けとは、この首の事かな。

五右　イヤ、間男の首、所望でない。蜀紅錦の片袖をサ。

當馬　エ。

五右　身共に渡して、女房を、連れて行きやれといふ事サ。

トきつとなり、云ふ。この時、五郎兵衞、ツカ／＼と出て、瀧川を引附けて

五郎　コリヤヤイ、娘。

瀧川　父さん、こりやお前、どうしなさんすぞいなア。

五郎　どうするとは、エヽ、おのれはなう。

五右　こりや舅どの。

當馬　すりや、雀賣りの五郎兵衞どのは、お内儀の父親。

五郎　お主は小鮒の源五郎、此おりつめはおれの娘、織子のあるのも合點で、親にも沙汰せず、良助どのと、逃げ走つたる身を以て、今さら繼子とむごたらしう。殊には親が餘所ながら、大恩受けた良助どの。

　ト思ひ入れあり

サ、愛想盡かして鮒賣りめと、夫婦にならうとは道知らずめ。人非人め。義理知らずめ。

　ト睨め廻す。

瀧川　父さん、その腹立ちは、尤もでござんすが、どうした事やら、わたしやこの子が煩さうなり、子に飽いたらば夫にも、否でも別れにやならぬ義理、源五郎さんを此方から

五郎　頼んでなりと去られたいかえ、退きたいかえ。コレエ、うぬが口から今日はじめて、良助さまの大恩受けたと、聞いた時は恥かしく、有やうは、爰へ今日來たは、われが事から附けこんで、しつかり金にする心。その横しまの根性も、恩といふ字に挫められ、一生御恩は忘れぬわい。

　ト繪姿をソツと出し

おのれは大方、この繪姿に似寄りの亭主と思ふから、家出する氣になつたであらうが。

瀧川　サ、似寄りの夫を持つてゐて、寢覺めも惡し、末々を案じて見る程

五郎　サ、それで女の操が立たうと思ふか。この繪に似るほど、行く末を見屆けいでは、今日の天道樣へ立たぬわやい。素性も知れぬ捨て子のおのれ。如何な邪慳な奴の子で、その横しまは吐かすぞやい。おれが意見に附けばよし、さもないうちは根性を、叩き直して

　ト引廻し、あたりの草履を見付け、片々を取上げ

親が意見の土草履。

　ト振りあげる。五右衛門、當馬之丞、思ひ入れ。

五郎　ア、コレ、舅のいかいお心遣ひ。さりながら、とても心の違うた女。

當馬　親の意見も、今さらどうして。

五郎　エ、、青二才め。默り居れ。そゝのかしたおのれも同類。今日向、親が娘に成り代つて、良助さまの側は離れぬ。御用は足す。殊に彼の子も、みんごと親仁が育てて見せう。

當馬　その心なら、こなたの娘を

五郎　われには遣らぬ。

當馬　ヤ。

五郎　おのれに遣るには、この女、ぶち殺した上、如何にも遣らう。

當馬　すりや、こなさんの手にかけて

瀧川　殺さにやお前、この家を

五郎　オヽ、緣切る氣なら、この親が、履き古したる草履の折檻。

ト振りあげ、草履にて瀧川を散々に打つ。この時、件の草履の裏より、以前の密書、バラ／＼と落ち瀧川が襟のあたりにかゝる。瀧川、密書に目を付け、キツとなつて、また思ひ直し、手早く密書を懷中する。

五右　女房が願ひの暇のしるし。思ふ男と一對に、揃ふ夫婦の固めの笄。片し／＼にならぬやう、其方が道具ぢや。持つて行け。

ト大小の小柄を二本取つて、瀧川が前へ置く。

瀧川　夫婦の仲も今日の今、割り笄の、別れ／＼に

當馬　引別れたる合せ物、離れ／＼の笄も、心に覺えの

ト立ち寄る。瀧川、笄を當馬之丞にさしつけ

瀧川　わたしが持參のこの笄、お前に渡すが變ぜぬしるし。

ト當馬之丞へ渡す。

當馬　模樣は正しく千疋猿。さては常々兵部さま、お噂ありし腹がはり、もしや姉の

ト瀧川と顏見合せ、思ひ入れ。

五郎　イヽヤ、娘を盜まうと、いらぬ猿智慧、猿猴の、手長なわれには遣られない。あの子はわしが養育する。

五右　性根腐つた彼のおりつ、どうで別れる心なら

瀧川　わたしへ附けた諸道具を、散らさぬやうに見集めて

當馬　荷物があるなら、何荷でも、わしが擔げて行きまする。それまで門のあの木部屋。とは云へ、正しく

ト寄るを、五郎兵衛隔てゝ

五郎　なにマアわれは

ト當馬之丞、立ちよるはずみに、五郎兵衛、懷より種ヶ島を落す。瀧川、ちよつと見て

瀧川　ハテ、父さんは

五郎　ヤ。

ト手早く懷中する。當馬之丞、行李を抱へ、門口へ出る。五右衛門、屋體へ入る。めい／＼振りかへり、四人、顏見合せ、一度に障子と門を閉す。唄になり、當馬之丞、木部屋へ入る。五郎兵衛、瀧川殘り

五郎　ヤイ、娘、わりや、どうあつても、良助どのと手を切つて、あの源五郎と連れそふ心か。
瀧川　ハテ、そりや、主に愛想は盡かさねど、この繪姿によう似た親子。もしもの事を思ふゆゑ
ト繪姿を見せる。
五郎　ありや、良助は一人兩名、お尋ね者の石川と、いよいよわれは、緣切るも。
瀧川　親が榮えを思ふから。
五郎　親が榮えを思ふとは。
瀧川　良助どのを五右衞門と、訴人したなら、お前の出世の
五郎　何がどうした。
瀧川　わたしが連れ添ふ良助どのを、五右衞門と訴人して、岸田民部へ取入るなら、お前の榮華にならうがえ。
五郎　その譯どうして、アノ、われが
瀧川　知つたはこれなる密書の文言。
ト密書を見せる。
五郎　ナニ、密書とは。
瀧川　お前は無筆の情なや、大事を書いたるこの一通。
五郎　岸田さまから內意の御狀は。

ト以前の隼人の手紙を出す。瀧川、見て
瀧川　そりや譯もなき座頭が書狀。
五郎　そんなら、われの持つたるが。
瀧川　わたしを意見の草履の皆、思はず知らず落ち散りし、草履の裏に挾みし一通。
五郎　さては最前、草履の裏へ
瀧川　あの五郎市が隱せしも、親の血筋の情なや。
五郎　素性賤しき白浪の、知らぬ事とてその密書。
瀧川　拾ひ取つたは娘のわたし。主を庇ひし父さんは、表は實意に、內心は、訴人する氣でござんせう。
五郎　それ知られたら、何もかも云うて聞かさう。あの五右衞門は、今宵春日へ神寶を、奪はん爲の公家のいでたち、世尊寺どのと僞はる企て。
瀧川　すりや、中納言の名をかりて、社へ忍ぶ刻限は。
五郎　あの東大寺の夜半を合圖に。われも小鮒に添ひたくば、親を手引きし、五右衞門を
瀧川　かね〲手練の夫ゆゑ、なか〱お前の
五郎　それこそ用意の種ケ島。
ト種ケ島を見せる。
瀧川　すりやアノ、お前は

五郎　子の刻來らば

瀧川　窺ひ寄つて

五郎　たつた一打ち。

瀧川　その時こそは

五郎　手引きは其方。

瀧川　父の最期も

五郎　五右衞門ゆゑか。

瀧川　思へば恨みの

五郎　さては岩木に

瀧川　ア、モシ。

五市　母樣。

ト走り出て取りつく。瀧川、引寄せ、以前の繪姿を取つて思ひ入れ。

五郎　わりや、その繼子が

瀧川　例へ死なうが

ト突き放す。

五郎　性根は見えた。

瀧川　モシ

ト思ひ入れ。唄になり、この道具ぶん廻す。

本舞臺、上の方に一間の大和葺きの圍ひ、これに伊豫簾かけてあり、下手、緣側附きの座敷、爰にも伊豫簾をかけ、竹の窓、植込み、柏の立ち樹あり、矢張り彈き流しの唄、時の鐘にて道具とまる。

ト知らせあつて簾を上げる。内に五右衞門、茶の湯の見得、よろしく、丸棚の上へ位牌を載せ、思ひ入れあつて

五右　思ひ廻せば痛はしき、世に亡き姫へ五右衞門が、心ばかりの茶の湯の手前。

ト矢張り唄にて、思ひ入れあり、釜の蓋を取り、湯氣の立つを見て、キッとなる。これより誂らへの合ひ方。

ハテ、心得ぬ。たぎりし釜の鳴り音に、事變つたるこの有樣。湯氣は盛んに立つべきに、次第次第に沈む樣子。もしや多年の我が陰謀、露顯なすべき時來りしか。ハテ、いまはしき、湯氣の振舞ひ。

トきつとなる。この時、捨て鐘きびしく、バタ〱にて、向うより隼人、弟子の二を引立て、立廻りながら出て來り、本舞臺へ來て

隼人　お頭〱、五右衞門どの。

五右　コリヤ。
弟二　捕つた。
ト　か〻るを見事に引敷き
五右　木曾川彌九郎、大事あつてか。
隼人　如何にも御身の
五右　ヤ、なんと。
弟二　うぬを。
ト　か〻るを、キッと留める。これより跳らへ早打ちやうなる合ひ方、時の鐘。
隼人　今日この家へ紛れ入る、男は正しく五右衛門を、召捕る爲の廻し者。岸田民部が内意を受け、搦め捕らんと向ふ曲者。即ち證據は門弟と、入込む彼奴こそ間者の一人。五郎市どのを奪はん企て。
門二　南無三。
ト　逃げんとする。立廻りにてキッと押へ
隼人　此奴が口から詳しく白狀。隱れ家の洩れたる上からは、南都の住居も、危ふし〱。
五右　ナニ些細なる彼奴等が企て。最前汝に語り置く、今宵の仕事を仕負ふせし、その上にては立退かん。首尾せぬうちは、動かぬ去らぬ。して、都より入り來る公家は。
隼人　勅使世尊寺中納言、最早入來の沙汰あつて、社は警固の辻固め。
五右　夜半に紛れて忍び入り、寶を奪はん、さりながら、もし仕損ぜば、歸りを待ちうけ、討取る手配り。
隼人　この彌九郎は間道を、先へ廻つて何かの手番ひ。
五右　我れに荷擔の山賊野武士。
隼人　お頭よりの招きと云はゞ
五右　都へ通路の口々へ、かねて手分けし置いたれども
隼人　まだ新參のこの彌九郎、面を知らぬ上からは
五右　それぞ割符の、この合ひ文。
ト　袱紗に包みし印札を渡す。
隼人　怪しき文字の印札にて
五右　集まり來る割符の印札。くらがり峠、龍田越え、爰に屯ろの手下の山賊、およそ百人あまりの人數。
隼人　今日新入りの彌九郎が、仕事の手始め、暫時のうちに。
五右　我れは春日の社へ忍び、寶を奪ふ公家のいでたち。
門二　それ聞いたれば、この由を
ト　立ち上がる。隼人、拔討ちに門弟二の首を討つ。

隼人　蟻の穴より堤の崩れ。

五右　いそふれ、彌九郎。

隼人　心得ました。

　ト刀を納め、四ツの鐘になり、隼人、向うへ入る。

五右　いま聞えるは正しく亥の刻。用意いたすも最早一時。

　ト爰にて三味線入り、かすめし天王立ちになり、五右衞門、思ひ入れあつて

ほのかに聞ゆる物音は、さては世尊寺中納言。

　ト思ひ入れ。矢張りこの鳴り物にて、正面の障子を引拔くと、内に瀧川、女房の形の上へ、以前の裝束を着て、冠を置き、藤葛籠を背負ひ、花道の方へ行く。五右衞門、フッと見付け

五右　女房、待て。

　ト瀧川、思ひ入れあつて、矢張り向うへ行きかける。

五右　去り狀濟まぬ女房おりつ、其方が道具といひながら、岩木先祖の呉葉の中將、その裝束を、女子の身にて……仔細ぞあらん、マア〳〵、待て。

瀧川　エヽ。

　トつか〳〵と舞臺へ來り

去つた女房を呼び返すは、こりや、こなさん、矢張り心が殘つてか。

五右　イヽヤ、離縁はなしても、三下り半の

瀧川　暇の狀は取らねども、親同胞も無いわたし。その去り狀は此方から、即ち爰に。

　ト五右衞門親子の繪姿を見せる。

五右　その繪姿と似たからは、訴人した上、切腹の、實の親御の敵も同然、一對揃ふ笄の、姉弟ともに

瀧川　エ。

五右　身共を恨まんその爲に、不義と僞はり、家出するのか。

瀧川　云ふにや及ぶ。素性賤しき瀧川と、思ふに相違の岩木の血筋。先祖は呉葉の中將どの、この裝束を其まゝに、女子ながらも身にまとへば、取りも直さず俊豐公。女房の縁は私し事、殊には離縁とあるからは、今より岩木の實の親、先祖は名におふ大内人、裝束を敬ふ筈。筋なきこの家に、片時も在つて益なき事。

五右　小癪な其方がその一言。離縁なしても此方より、三下り半の暇の狀、渡さぬうちは女房おりつ、夫に向つて、過言の詞。

ト　これにて瀧川、葛籠を下ろし、ツカ〳〵と五右衛門の側へ寄つて

瀧川　コレ、こちの人、良助どの……そりや、こなさん

ト女房の思ひ入れにて、また氣を替へ、キッとなつて

イヽヤ、そりや何ほどに申さうと、暇の狀は夫婦仲、この裝束を身にまとへば、いま云ふ通り、俊豐公。

五右　イヽヤ、去り狀、此方より、渡さぬうちは身が女房。

瀧川　すりや、こなさんは、いつまでも、わたしを女房と思うてかいな。良助どの、忘れは措かぬ、嬉しうござんす。

ト葛籠の中へ思ひ入れあつて、キッと氣を替へ

イヽヤ、女房なりとは慮外の一言。例へこれまで連れ添ひし、緣はあつても裝束の、官位の恐れあるべき筈。無位無官たる良助どの、去り狀取るに及ばぬ事。これまで馴染む一旦の、緣は即ち此方から、三下り半を

ト以前の繪姿を五右衛門の方へ投げやる。この繪姿、掛けたる釜の中へ落ちかゝる。五右衛門、キッと見て

五右　五右衛門親子のこの繪姿、たぎりし釜のこの中へ、落ちかゝりしは、何とやら。

ト門口へ當馬之丞、出かゝり、窺ひゐて

當馬　その身の果ては果敢なくも、罪科遁がれぬ七條河原、苛責の責めも今目前

瀧川　現はす前表。

五右　ハテ、いまはしき

トめい〳〵思ひ入れ。よき時分より運八、出かゝり、窺ひゐる。この時、風の音にて、桐の花、散りかゝる。五右衛門キッと見て

吉野山、峰の嵐は烈しくて

當馬　木の葉を殘す。

ト門より瀧川、當馬之丞に思ひ入れあつて

瀧川　後の世までも

當馬　ヤヽ、公家の形は。

瀧川　コレ。

運八　五右衛門か。

瀧川　さてこそ。

ト運八、留め、下り、五右衛門へかゝる。立廻り。當馬之丞は、五右衛門へ立ちかゝる。瀧川、支へる事。この時、人數集めの太鼓聞える。

瀧川　聞ゆる太鼓は



五世岩井半四郎のおりつ

五右　世尊寺社參の警固の供觸れ。時來りしか。
ト立ちあがる。
當馬　勅使を窺ふ不敵の五右衛門。
ト立ちかゝる。瀧川、當馬之丞を留める。立廻りにて葛籠を開くと、中より五郎市、腰衣、青坊主の形にて思はず出る。
五右　ヤ、、五郎市がこの姿。さては女房が
淀八　その餓鬼を
トかゝるを五右衛門、見事に當てる。
五市　母様。
ト立ちかゝるを、瀧川、キッと隔て
瀧川　コレ、わしは其方の母ではない。わが身の母は、この世には、なき玉垂れの奥までも、忍び入らんと企ての、五右衛門どのゝ姿を其まゝ。
五右　さては今宵の我が大望、妨げん爲、冠裝束。
當馬　それぞ御先祖、與狩の中將、岩木の家には系圖も同然。
瀧川　公家の姿は、夫五右衛門。
五當　ヤ、、なんと。
瀧川　今ぞ合圖の

ト瀧川、五郎市をキッと見詰め
あと弔うてたべ。
ト思ひ入れ。この時、筒音して、煙硝火立ち、瀧川、苦しむ。
五右　ヤ、、筒音高く、女房を
當馬　姉上、心を
ト立ちよる。五郎市、兩手に二通の文を持ち
五市　父様、叔父様。母様が
ト兩方へ差出す。兩人、取上げ、キッと見て
兩人　書置きの事。
五右　すりや、覺悟にて
當馬　打たるゝ約束。
兩人　ムウ。
ト兩方一緒に書置を開き、見る事あって
五右　悴五郎市、出家させ、高野の奥へ子供を。
當馬　後の世までも、あと懇ろに
五右　弔はする爲の
ト五郎市を引寄せ、瀧川の死骸を見て
女房にめでゝ石川が、手向け代りの門火の香爐、血筋の弟、岩木氏へ。

當馬　ト千鳥の香爐を差出す。
姉が菩提の跡弔ふは、出家なりせし五郎市へ、袈裟
ともなして。
ト錦の片袖を出す。兩人、取替へて、キッと思ひ入れ
あり
五右　錦の片袖。
當馬　千鳥の香爐。
五右　互ひにこれで
當馬　武士道も
ト兩人、懷中して
五右　この書置に女房が、心を盡せし
當馬　貞女の鑑。
五右　その神寶を奪はんと
當馬　いでたつ姿を
五右　察せし身。
當馬　夫に代つて
ト兩人、書置を見て思ひ入れ。
兩人　女に稀れなる。
ト思ひ入れ。この時、五郎兵衞、種ケ島を持ち、窺ひ
出て

五郎　仕損じたるも娘ゆゑ。五右衞門、おのれ。
運八　香爐を渡せ。
ト五郎兵衞は五右衞門、運八は當馬之丞へかゝる。立
廻つて五右衞門、五郎兵衞を引付ける。五郎兵衞、筒
先を當馬之丞へ向ける。當馬之丞、運八を捕へて差つ
ける。五郎兵衞、火蓋を切る。運八にあたり、立ち身
にて苦しむ。この筒音に瀧川「ウム」と息を吹き返し、
目を見開き、苦し氣なる思ひ入れにて
瀧川　五郎市、必らず
ト斃れる事。兩人、見て
兩人　南無阿彌陀佛。
五郎　おのれ、五右衞門。
トむしやぶりつくを、五右衞門、拔討ちに五郎兵衞を
切り伏せ、止めを刺す。瀧川、バッタリ落入る。この
途端、向うにて遠寄せの頭を打つ。五右衞門、キッと
思ひ入れあつて、五郎市を横抱きに抱へ、圍ひへ上が
つて、キッと向うを見る。
當馬　四方を圍むは都より
五右　討手の奴等と覺えたり。ハヽヽ、小癪な事を。
ト思ひ入れ。向うにて

隼人　盗賊五右衛門、そこ動くな。

五右　なんと。

ト どん／＼、カケリになり、隼人、黒捕り手の形にて、大小、凛々しく、黒四天に十手を持ちし捕り手六人を連れて出る。五右衛門、見て

汝は木曾川彌九郎ならずや。

隼人　如何にも最前其方へ、手下となつて渡せし繪圖面、似せ物なりと知つたるゆゑ、有つて益なき地理の一巻、まつた割符の印札にて、味方の賊徒を召捕る計らひ。賊なりと云ひしは僞はり、鈴木田隼人照光と申す者。張本人の石川五右衛門、尋常に腕廻せ。

當馬　待たれよ照光、聚楽の御所にて紛失せし、千鳥の香爐は、若木當馬之丞、今日只今、手に入りました。

隼人　それぞ御身の勘氣の詫び。この照光は、召捕る五右衛門。

ト 立ちかゝる。

五右　小癪な一言。この五右衛門は主君の皇女、父にて候ふ吳才官へ、供養なすには汝の細首、手向けのしるし。

ト 切つてかゝる。隼人、立廻り。この時、捕り手六人、十手を振りあげ、取巻き

捕手　五右衛門、捕つた。

五右　小癪な奴等の。

ト 立廻りあつて、よき見得。

先づ今日はこれぎり、

トめでたく打出し

ひやうし幕

高麗大和皇白浪（終り）

艶（はで）競（くらべ）石（いし）川（かは）染（ぞめ）



四世中村歌右衞門の五右衞門

艶競石川染

大序

男山八幡宮の場
山崎天王山の場

役名——眞柴久次。小田彈正。筒井順慶。山口玄蕃。佐竹左京。三輪五郎。龍造寺帶刀。上杉景遠。黑田監物。淺野左衞門。世尊寺中納言公成。石津源吾。印南平馬。熊田内記。眞柴息女、お通姬。腰元、小雪。同、早苗。同、野菊。同、霜夜。同、ぬるで。同、琴路。千利休。同娘、早枝。小鮒の源五郎 實ハ岩木東馬之丞。三浦常陸之助。仙石權平。不破伴作。早川高景。堅田の小雀。腰元、瀧川。同、早瀨。石川五右衞門。

造り物、一面、櫻の林、所々幕打ち廻し、毛氈かけし床几あり、すべて、八幡山の麓、花盛りの體。庭

ト神樂にて、幕明く。
　朝清めの仕丁三人、箒を持ち出て

仕一　なんと與助、太郎次、掃除をしまうて、櫻を眺めたところは、どうも云へぬぢやないか。

仕二　さうとも〳〵。とてもの事なら、この花を見て、一杯飲だらよからうがなア。

仕三　榮耀な事を吐かす奴ぢや。今日はこの八幡樣へ、武將久吉公の御子息、久次さまが御參詣を遊ばされ、今朝卯の刻から別當方で馳走たつぱい。

仕一　その久次さまは、年若なれども、今の世の賢人と、褒めそやす若大將。

仕二　弟御の久秋さまは、兄御に似合はぬ身持ち放埒。島原の廓に居續けして、色と酒とに暮らすとは、同じ兄弟でも、きつい違ひぢやないか。

仕三　弟の御息女、お通姬さまが、日本一の器量よし。これも追ッつけ、御參詣をなさるゝがな。

仕一　お姬樣の器量がよくば、どうぞお願ひ申して、聟入りしたいものぢやが。

仕二　途方もない事を云ふワ。お姬樣とわれとは、泥鼈とお月樣ぢや。

仕三　所をおれが見事な一物を以て、靡かせて見せるぢやて。
仕一　アレ／＼、堤の方からお姫様の御參詣ぢや。
仕二　ほんに、人事云はゞ目代置けぢや。
仕三　そのお眼玉を貰はぬうちに、神樂堂の掃除をせうわい。
仕一　サア、二人とも、ござれ／＼。

ト三人入る。三味線入りの神樂になり、向うより、お通姫、さゝぎ付きの振り袖衣裳、かつぎを着て、腰元瀧川、振り袖、抱へ帯にて、守り刀を持ち、琴路、同じく腰元にて、忍ぶ笠を持ち、霜夜、野菊、ゐるで、小雪、各々腰元にて、早苗、これも腰元の形。この後より、早川高景、衣裳上下、家老の拵らへにて、後に長刀持ち、挟み箱茶辨當持ち、付き出る。

お通　早川高景、兄上には、もうお越し遊ばしたかいなう。
高景　成る程、主人久次公には、未明よりお入りとの知らせ。幸ひあれなる設けの床几に、暫らく御休息あられませう。
お通　さうせうわいなう。

ト始終神樂。皆々本舞臺へ來て、お通姫は上の床几にかゝる。瀧川、その外腰元居並ぶ。高景、次に座る。供廻り、橋がゝりに扣へる。

イヤナウ瀧川、年毎に見る花なれども、分けて色よう咲き揃ふ、この八幡山の花盛り。また一入の眺めではないかいなう。
瀧川　お姫様の御意遊ばす通り、和光の影も著ろき、神の御前の花なれば、八重九重に咲きそへて、山路にかゝる春霞。どうとも斯うとも申されませぬわいなア。
高景　ナニ瀧川どの、こなた事は御前の出頭たる、石田の局の息女なれども、姉早瀬どの諸とも、久次公の簾中、淀町さまに傅き、お側勤めを致さるゝは、これ以てお局のお指圖。この上とも大切に、お宮仕へ致されてよからう。
瀧川　母石田さまは、お家新參とは云ひながら、淀町さまの御意に叶ひ、奥女中の司石田の局。御家中の活計。これと申すも淀町さまの御厚恩、朝夕ともに、忘るゝ隙はござりませぬ。
お通　自らが母上、そもじを御秘藏も理り。去年の秋大内にて、寄合ひのありし時、紅の瀧と云ふ題を賜はり、母

上より一首せよと仰せありしに、色紙と筆を取りあへず。
瀧川　紅葉の流るゝ時は瀧川の、緑に朱の色を添ふらんと、揃はぬてにはもお笑ひ草。
高景　彼の一首、當今の叡聞に達し、詠歌の心を以て、瀧川と云ふ名を賜はり、大内の采女司に召されんとの勅諚。母石田の局、達ての辭退に依つて、矢張り御前のお側仕へ。これとても威勢に誇らぬお局のお愼み。高景、感心仕つてござります。
琴路　それはさうとお姫樣は、この程よりお氣もじもお勝れなされず。それゆゑ母君淀町さまのお勸めに依り、この八幡樣へ、御參詣やら花見やら。お供いたしたわたしらまで、好い慰みを致しましたわいなア。
霜夜　日頃はお姫樣のお物案じで、わたしらが心も浮かず、世上は春でも、お館は秋の暮。それに今日の花見は、お氣合ひも好ささうで、此やうな嬉しい事はござりませぬ。
野菊　典藥衆の配劑でも、御病氣は癒らぬ筈。お姫樣は戀煩らひぢやとなア。
早苗　世の譬へにも、任せぬ物は双六の賽と加茂川の水。
小雪　叶はぬ戀の辛氣さもと、昔の帝樣も、仰しやつたではないかいなア。
ゐる　さうして、お姫樣の戀人と云ふは、どなたでござんすえ。
琴路　戀人と云ふは、久次さまの御家來、不破伴作さまぢやわいなう。
ゐる　なんと云はしやんす。アノ伴作さまは、小姓立ちの色男。このゐるでが首だけ惚れて居たのに、お姫樣に先を越されたか。エヽ、腹の立つ。
　トびんとする。
お通　いつぞや聚落でお能の時、伴作は誓願寺の太鼓の役。その時見染めた自らが初戀。思ひの種を、推量してたもいなう。
琴路　高景さま、お姫樣の戀の叶ふやう、御思案は
女皆　ござりませんかいなア。
高景　ハテサテ、粗忽千萬。先達て九州の探題、毛利元就の子息元春どのへ、お云ひ號け遊ばされ、聟引出とあつて、播州一國相違なき御朱印を相添へ、近うお輿入れあるお通姫さま。斯樣の作法は必らず無用。とサア、申すは表向き。御父久吉公、めでたく御凱陣ござらば、その

折を以て高景、好きに取計るでござらう。先づ今日は當社の祭禮、お勅使お成りの上、別當方にて諸大名の系圖改め。まつた我が君、勝ち軍祈願の爲、放生川にて生けるを放つ善根供養。貴賤の者ども群集いたすも、且はお慰みの、一つと下々へも、觸れさせ置きましてござりまする。

お通　成る程、氣の替つた賤の手業。

瀧川　わたしらも拜見を

皆々　致しませうわいなア。

ト在郷唄になり、向うより、小鮒源五郎、鮒賣りの拵らへ、川魚の桶を擔ひ、堅田の小雀、鳥賣りの形にて、鳥籠を擔ひ、連れ立ち出て

小雀　オ、イ〳〵、さりとて早い足ぢや。もそつと靜かに歩けいやい。

源五　イヤ〳〵、今日はこの八幡の放生川で、天下樣が放生會をなさるゝとのお觸れ。其所へ持ちかけて商ひをせにやならぬ。

小雀　八月の放生會は聞えたが、春早々に放生會とは、替つた思ひつきではないかい。

源五　ハテ、何時であらうとも、したい事をなさるゝが、天下さんの御威光ぢや。

小雀　そんなら、われも商ひがしたさに。

源五　貴樣も錢儲けがしたさに。

小雀　相も變らぬ

兩人　錢の欲しさぢやなア。

ゐる　コレ〳〵、二人とも、お姫樣が放生會をなさるゝ程に、お前へ出や〳〵。

兩人　ハイ〳〵、それは有り難い事でござりまする。

トまた在郷唄になり、兩人、本舞臺へ來て、荷を下ろし、向うへ出て

源五　私しは近江の鮒賣りでござります。殘らずお求め下されうならば、有り難う存じまする。

ト小雀、源五郎の前へ出て

小雀　私しは堅田の里の、小鳥賣りでござります。雀を殘らずお放し下されうならば、有り難う存じまする。

源五　魚を放せば、大きな功德でござります。

小雀　鳥を放つは、きつい慈悲ぢやげなとござります。

兩人　どうぞお放し下さりませう。

高景　ヤイ〳〵、姦ましうせり合はずとも、扣へ居らう。

兩人　ハイ〳〵。

ト扣へる。此うち、瀧川、源五郎に見惚れ、こなしあ
る。

お通　ほんに氣さくさうな衆達。魚も小鳥も、求めてやり
やいなう。

琴路　畏まりました。コレ、二人とも、魚も鳥も求めよと
仰しやる程に、喜んだがよいぞや。

お通　いま聞けば、近江の者と云やるが、其方衆の名は、
なんと云ふぞいなう。

源五　ハイ、私しは源五郎と申して、瀬田のほとりで新米
の鮒賣り。毎日京へ商ひに出まして、魚がよければ買ひ
手も多し、近江の源五郎鮒と、隱れのない鮒賣りでござ
ります。

小雀　秋しは堅田の里で、仁藏と云ふ鳥賣り。多くの鳥を
商ふ中にも、私しが商ふ雀は、燒鳥にしても味がよい。
彼奴は雀賣りの開山ぢやと、段々評判が高うなつて、仁
藏と云ふ名は呼ばず、堅田の小雀と異名を取つた、名物
男でござりまする。

琴路　堅田の小雀とは、替つた名ではないかいなア。

女皆　ほんに替つた名ぢやわいなア。

源五　イカサマ、雀かして、チヤワ〳〵と喧ましい奴ぢや。

イヤ、鮒をお買ひ下さらば、價を貰いて、早う歸りたう
存じます。

瀧川　申しお姫樣、聞けば聞く程、氣の輕さうな面白さう
な鮒賣り。設けの假家へ、お召しなされて酒でも飲まして、
浮世噺を聞いたが、好い慰みではござりませぬか。

お通　サア、自らもさう思ふわいなう。高景、その鮒賣り
を同道しや。

高景　畏まつてござります。ナニ、源五郎とやら、御前へ
參つて、お取持ちを仕れ。

源五　商ひをして酒を振舞ふなどゝは、マア、此方に損の
ゆかぬ事ぢや。シタガ、後から書出しおこすのぢやない
かえ。

高景　ハ、、、。ハテ、正直な奴。

琴路　見た所が、卑しからぬ褄はづれ。

霜夜　鮒賣りさせるは惜しいもの。

野菊　小袖袴に改めて

早苗　大小も差させたら

小雪　わたしらもキツと

皆々　思惑ぢやわいなア。

ト此うち、小雀、蝨づいて居て

小雀　なんぢやい〳〵。先刻にから鮒賣りばかり褒めそやして、おれが事は何とも云はぬがコレ、此奴ぢやてゝ、おれぢやてゝ、内證へ入つて見たがよい。太いか細いか、大きいか小さいかでこそあれ、味の段に落つた事はごんせぬわいなう。

ゐる　コレ、氣遣ひしやんな。其方の一分は立てゝ、わしがキツと堪能をさすわいなう。

小雀　アノお前樣が。

ゐる　オイナウ。

小雀　ホイ。こりやまだ、まんが直らぬわいやい。

高景　生けるを放つは辰の上刻。それまでは鳥賣りも休息いたせ。お姬樣にはお假家へお入りあつて、然るべう存じまする。

お通　サア、源五郎もおぢや。

瀧川　アレ、お姬樣がお召し遊ばす。ちやつとお假家へござれいなう。

源五　ドリヤ、御馳走にあづからうか。

皆々　高景さまも御一緒に。

高景　先づ、お入りあられませう。

ト唄になり、皆々臆病口へ、源五郎も荷をかたげ付いて入る。小雀、殘り、恨めしさうに後を見て

小雀　鮒めは巧い事をひろぐなア。面妖、女子と云ふと受けが惡い。イヤ〳〵、こんな拍子の惡い時は、商ひを取り外さうも知れぬ。煮賣り屋で一杯引ッかけて、ドリヤ、放生會を待たうか。

ト鳥籠をかたげ、臆病口へ入る。と唄になり、橋がゝりより、腰元早瀨、振り袖着流し、蓑を着て、竹笠をかざし、結び文の付きし狐罠を持ち、靜かに出て來て

早瀨　これは都の色里に住ひしやんす、傾城でござんす。さてもこの頃眞柴金吾久秋さまと云ふ、武將の御子息樣が、島原の居續け。浮氣を好む惡性が憎さに、この付け文の罠を以て、久秋さまを釣り寄せ、手を取らさうと存ずる。先づ爰へ罠をかけやんせう。

ト好き所へ罠を置いて隱れる。出の諷になる。

〽口舌の後のふり狐〳〵、こんたんのなんだなるらん。

ト向うより、不破伴作、衣裳羽織、焙烙頭巾、大盡の形にて出かけ、花道にて

伴作　これは眞柴金吾久秋にて候ふ。我れ色道の諸譯に迷ひ、九條の里の亂菊と申し候ふ傾城に、思ひをかけて通へども、彼れには深い馴染あり。その者の名を篩屋の宗

兵衛と申す。今日は彼の箔宗主に化けて、亂菊を手に入れうと存ずる。この頭巾を斯う致して。

ト焙烙頭巾を引抜くと、仕掛けにて、綿帽子になる。

一段とよい。先づ箔宗主に化けたりと存ずる。急いで八幡山へ參らばやと存じ候ふ。

ト唄囃子。

〽姿は嘘の皮衣、狐や我れに迷ふらん、名もしら化けの箔宗主、似せ紫の頬かむり、花色柄の一腰を、さすが名に負ふ大盡に、似たりや〳〵花菖蒲、引きぞわづらふ宗山子の影も、鳴子の音もからりから〳〵心がら、なまじ化けたでぞつとする、犬の聲にも立ち聞けば、畜生足と思はれて、ちよこ〳〵走り程もなく、爰ぞ名に負ふ男山、暫しとてこそ櫻蔭、麓の方に着きにけり。

ト花見幕の内にて

〽なんと思ひにや、焦れて燃ゆる野邊の狐火小夜更けて、思ひにや焦れて燃ゆる野邊の狐火小夜更けて。

伴作　さても彈いたり唄うたり。廓で聞くとは又格別。氣が替つて面白い。さらば一服、床几に腰を。

ト床几に掛けうとする。

幕内　クワイ。

ト大きな聲にて云ふ。伴作、悧りして飛び退くと又、内にて、トゥライ……リヤンコ……ナイハと拳をして居る體。伴作、氣を落ちつける事あつて

伴作　なんぢや。拳を打つのか。クワイと云ふので膽を潰した。先づそろ〳〵參らう……これはしたり、身共が參る途中に、何やら罠がかゝつてある。

ト見て

こりやなんぢや。樣參るの濡れ文。ア、、洒落るワ〳〵。エ、聞えた。惡性者を餌にかけ、手を取らす手管の罠か。ハ、、、、好い奴〳〵。この箔宗主で一戯れ、杖の代りにはこの脇差。先づちよつと、やぶら〳〵〳〵。ヤイ、おのれめ、濡れ文句のしこなしで、多くの客を騙し居る。覺えたか覺えたか。

ト鐺にて罠を叩き

ムウ。伽羅の香が匂ふワ〳〵。イヤ又、憎うはないもの。飛びかゝつて封を切らうか。イヤ〳〵、騙されては叶ふまい。所詮この餌、まゝにして。

〽置かばや置かん此まゝに、おき惑はせる亂菊の、花かあらぬか櫻の蔭、思ひかはるゝ菅笠を、きたゞけ派手な目關笠。

ト木影より、早瀬出る。伴作、見て
これは太夫か。久しや〳〵。
早瀬　ナアに、それはふつゝりぱつたり、生きたやら死んだやら、問うてくれたら罰が當るか。
伴作　イヤ、當るとは揚弓か置炬燵。某が放埒で、親仁の機嫌以ての外。懲らしめの座敷牢。ぶち破つてちよつと逢ひに來た。その心中に引替へて、客の浮氣を釣狐とは、迷惑なあの罠、捨てゝしまやいの。
早瀬　ホヽヽ、こりやおかしいわいな。文の罠を嫌がらんすは、矢ッ張り狐が退かぬのおやな。
伴作　オッと、ひぞりかけて乘らさうとは、コレ、そんな手管は、間夫にさんせ〳〵。お暇申さう。さらば歸らう。さらば〳〵。
早瀬　コレ、待たしやんせ。惡性な尾が出やうかと、氣味が惡さに行かぬのかえ。
伴作　ハテ、去ぬる去なぬは其方の胸。
早瀬　ソレ、まだそんな水臭い。
〽口舌しまひにわたしをば、軒の忍ぶか蔦の葉の、照るか曇るか村時雨、古い毛色で其やうに、せりふの罠をぬけ〳〵と、尾花隱れの宵の月、戀慕の闇の小夜更けて、只こなさんにうか〳〵と、迷はされては上の空、睫毛濡られせど顔見ると、可愛い澤邊の水鏡、色をうつらふ風情なり。
伴作　コレ、寄るまい〳〵。我れはこれ稲荷五社の大明神。即ち我れら末社の神。
〽色に迷ふ汝がまゝと、神も不便を思し召し、箔宗主が姿をかり、いさめて取らせ二つには、外にぬつくり澤間はないか、口說きかけて心を引けど、稲荷さんまのとんとこなり、汝知らずや、島原天神にとゞまり在します事、そも太夫はお裏の神體にて、松の位をかけまくも、梅に名高き天神の、流れに同じ白人あり、合せて色里五社明神、これ水上にて在しますなり、まつた鍵屋の遣り手をば、お玉の前とぞ申しける、時の大寄せ、大盡酒に醉ひ給へば、お玉の前の巾着より、一歩のやうなる光り物取出し奉れば、忽ち醉醒め在します、これ萬金丹と知られたり、かゝる遊びをする人は、情專らにするゆゑに、揚屋々々の座敷をば、せんしやうせきとは名付けたり、面白や、何時までも、里に稲荷のお若をば、いさめる太鼓仲居をも、末社の神とは申すなり。
早瀬　アラ、勿體なや。この罠を捨てやんせう。

〽思ひ廻せば浮氣なり、されども我れは川竹の、浮節しげき仇枕、客の思ひを獵人の、流れに沈む色の淵、深間の關守りは、宵々毎に立ち騷ぐ、遣り手の鳴子、口舌の鼠、油揚より身上りは、若をつなぎのうはうち物、心に張りも勿體も、これ傾城の手管の罠、かけてまんまと釣り狐。

伴作　化け顯はして、この文を。

　ト罠に付けし文を持つて

押戴いて我が住む里へ、歸ろやれ。

〽去なうやれ、我が色里へ歸ろやれ、我が住む里に歸りけり。

　ト唄囃子納まろ。

ハヽヽヽ、面白い〳〵。さらばこの文ちよつと拜見。ムウ。上書は、樣參る、御存じより。

　ト披き、讀んで

先づ有りふれた濡れの文句よ。奧の宛名は金吾久秋さまへ、呉羽の中將姫九重……ムウ。そんならこなたは、某へ云ひ號けの

早瀨　アイ、九重姫でござりまするわいなア。

　ト寄らうとするを退けて

伴作　待つた。その九重姫が何ゆゑに、その姿。樣子があらう。どうでござる。

早瀨　聞えませぬ久秋さま。云ひ號けはありながら、月日は經つともお呼び迎への御沙汰もなう、仇に過ぎ行く遣る瀨なさ。今日爰へお越しと聞いて、せめては余所ながらお詞なりと交さん爲、あられもないこの姿で、御遊興のお相手になつたればこそ、お詞交した嬉しさを、推量して下さりませいなア。

伴作　さてはさう云ふ心であつたか。その誠ある志しを聞く上は、今改めて夫婦の契約。其方は本妻、太夫は妾。

早瀨　エヽ、そりや御眞實でござりますかえ。

伴作　直ぐに廓へ伴うて、太夫とも近付きにせう。

早瀨　エヽ、お嬉しう存じまする。

　ト抱きつく。この時、花色幕の内より、筒井順慶、長絹長袴、鯰髭の坊主にて、熊田內記、印南平馬、石津源吾、衣裳羽織にて、付き出る。後より、侍ひ二人、一石入りの菰樽を手かきにして持ち出る。

順慶　ヨウ〳〵。濡れの開山、見付けたぞ〳〵。

伴作　ヤア、其方達は。

順慶　イヤ、お見知りない筈。拙者事は大和の領主、筒井順慶と申す者。夜前京着の上、御舍兄久次公の御供いたし、當社參籠。あれなる幕で酒宴の折柄、久秋公と承り、思ひ寄らざるこの場のお目見得。
内記　我れ〳〵は順慶老組下の侍ひ。
源吾　譜代同然に思し召され
兩人　お見知り置かれ下さりませう。
伴作　さては聞き及んだ筒井順慶とな。
順慶　主從の禮儀はこれまで。さてお二人の御仲を、祝うて、御覧なされ大和の名物あられ酒。菰樽一挺。祝言やら遊興やら、羽目を外して飲みかけうではござらぬか。
伴作　出來た。なんと順慶は、顔に似合はぬ粹ではないか。
早瀬　自らも落ちつきましたわいなア。
順慶　お杯を、早う〳〵。
三人　心得ました。
　ト内記、樽の鏡を抜く。平馬、杯。源吾、長柄を持ち出て
順慶　我が君のお杯、頂戴仕らう。
伴作　頂戴とに堅い奴。コリヤ、碎け居れ〳〵。

順慶　イカサマ、おのれが飲んで身共へさし居れ。
伴作　アノ爰な粹坊主め。
順慶　ドリヤ、酌と出かけうか。
伴作　こりや、話せるわいやい。
　トばた〳〵、侍ひ出る。と橋がゝりより、仙石權平、衣裳上下、キツとした拵らへにて、出て
權平　眞柴久次公はどれにござる。御母公よりのお使者。
伴作　ナニ、母上よりの使者とは。誰ぞお取次ぎ下されい。
順慶　これにござるは、久次公の御舍弟久秋さま、使者、樣子を申し上げい。
權平　すりや、若殿。
　ト下に居て、伴作を見て、思ひ入れあつて
ハテ、久秋さまでござるよな。
順慶　使者の趣き、早く云へサ。
權平　拙者事はお家新參の家來、仙石權平と申す者。お妹君お通さまには、毛利元春どのへ縁組に極まり、お輿入れを頻りに御催促。それゆゑ御母君淀町さまの御内意に依つて、お姫樣を迎ひの使者。この儀、久次公へ取次を頼み存ずる。

伴作　イヤ、兄上は得心でも、この久秋が、妹を歸す事はならぬ。例へ云ひ號けはあらうとも、お通姫は外に……サア、深い願ひがあるとやら。ぢやに依つて、歸さぬ歸さぬ。

内記　久秋さまの御意ぢや。

三人　權平、立ちやれ。

權平　イヤ、例へ誰方の御意にもせよ、お迎ひに參つた仙石權平。お姫様を同道するまで、爰一寸も動きや致さぬ。

三人　慮外な奴の。

ト反り打つ。この時、順慶、伴作に目配せして、ちやつとよたんぼうにせいと仕方する。伴作、呑み込む事あつて

伴作　皆の者、待て〳〵。ナニ、權平、その儀ならば、妹は歸さう。シタガ、某は主從の初見參。杯さゝう。サア、一つ呑め〳〵。

順慶　これは一興。ドレ、取次ぎ仕らうか。

ト大杯に取替へ、權平の側へ置く。

權平　イヤ、拙者めは大下戸でござります。

順慶　辭退いたすと、お姫様をお歸しないぞ。

權平　イヤ、それでも。

順慶　ハテ、斟酌いたす奴ぢや。サア、一つ呑め〳〵。

ト内記、柄杓にて注ぐ。

平源　サア〳〵、呑みやれ〳〵。

ト兩方より、無理に杯を持たす。權平、是非なく、一息に飲む。

順慶　これは見事ぢや。押へようか〳〵。

ト云ふうち、また注ぐ。

權平　モウ〳〵、御免下されい。

三人　さうは云はさぬ。マア、一つ〳〵。

ト兩方より持ち添へて、無理に飲ます。權平、めれんになり轉ける。三人して上より瀧呑みに呑ます。早瀨、氣の毒がる。

三人　性根を付けい。これサ〳〵。

トいろ〳〵蹴り突きこかす。

順慶　ハヽヽヽ。先づ御酒宴の邪魔は拂うた。

伴作　どうも云へぬ慰みであつた。シタガ、この後はどうするぞ。

順慶　幸ひ、この空樽へ入れて、其所らへぶちやつて置きやれ。

内記　奈良漬とは、ようござりませう。

ト権平を引立て、菰樽へ打込み、蓋をして片脇へやる。この時、橋がゝりより、小田彈正、衣裳上下、燕手の拵らへにて、出かけ見て居る。

伴作　この上は天下晴れた御祝言。神主方で夫婦固めの三々九度。其方達も參れ。

ト早瀬を連れ行かうとする。

彈正　イヤ、その祝言はなるまいぞ。

伴作　なんと。

ト彈正、スッと出て、二人を引分け

彈正　久秋の似せ者、化けの皮を引剝ぎ居らう。

伴作　コレ、粗相云ふまい。某は金吾久秋ぢやぞ。

彈正　默れ。此奴。當時久吉が客分となつて、都在城の小田彈正。久秋が面體知らいでならうか。察するところ久次が小姓上がりの童、不破の伴作であらうがな。

ト伴作、こなし。

早瀬　エヽ、そんなら、あなたは。

順慶　我が君ではなうて不破の伴作。

皆々　ハテナア。

ト彈正、伴作を引据ゑ

彈正　こな僞はり者めが。久秋と名乘るさへあるに、云ひ號けの姬と不義働らく二才。彈正が目に遮つたは遁がれぬ天命。云ひ譯なくば切腹ひろげ。

ト突き放す。伴作、こなしあつて

伴作　露顯の上は包むに及ばぬ。如何にも某は不破伴作。久秋さまには島原に於て、晝夜を分ぬ御放埓。今日當八幡宮にて、諸大名系圖改めとあつて、お勅使のお成りゆゑ、久次公の仰せには、其方久秋に成り替り、今日の役目を勤めよと、お指圖を以てのこの姿。申し譯なさに、明けてそれぞと申さゞりしは、御緣組みを破るまい爲。必らずお恨み下されな。彈正さま、この上に非道とも思し召さば、お手討ちは御勝手次第。サア、如何樣ともなされませう。

彈正　ハヽヽヽ、烏を鷺とあらがうても、九重姬と不義は遁がれぬ。ぶち放す。覺悟せい。

ト伴作を切らうとするを

早瀬　コレ申し。

彈正　面倒な。

ト早瀬を引退けて行く。この時、高景、ズッと出て

高景　イヤ〳〵、彈正さま、暫らく。

彈正　高景、不義働らいた伴作、ぶち放すを、なぜ留める。

高景　イヤ、伴作の不義でござらぬ。

彈正　不義でないとは。

高景　お腰元の早瀬どの、姫君の名代、もうよい、大儀。

早瀬　そんなら、もう名乘つても大事ござりませぬか。

伴作　すりや、九重姫さまと云うたは。

彈正　石田の局が娘早瀬。

順慶　どちらも似せ者。

内源　なんの事ぢや。

高景　久秋さまの御所存を試さん爲、僞はつて姫と名乘らせ、御本心を試した上で、誠の姫君と御婚禮を結ばん爲、斯く計らひし高景が指圖。彈正さま、よもや御批判はござるまい。

彈正　ムウ。

トこなしあつて

ハテ、早瀬であつたよな。

早瀬　噓が高じて誠とやら、母樣へお願ひ申して、眞實の夫婦に。ナア、申し、伴作さま。

伴作　コレ〳〵、お許しもなき妻定め。互ひの爲になりませぬぞ。

トどん〳〵と調べの太鼓になる。

彈正　最早神拜の刻限。

高景　お勅使の御前へ

順慶　同道いたさう。

彈正　何れも、來やれ。

高景　先づ、ござりませう。

ト序の舞になり、各々入る。早瀬、伴作が袂を引き、こなしあるを、伴作、振り切り續いて入る。と早瀬、もどかしさうにして、後より入る。と琴路、霜夜、野菊、早苗、小雪、ぬるで、出て、皆々囁き合ひ、木影へ隱れる。お通姫、守り刀にて死なうとするを、伴作、留めながら出る。始終序の舞。

伴作　これは御短氣な。マア〳〵、お待ちなされませ。

お通　イヤ〳〵、とても願ひが叶はぬゆゑ、生きて居る心はないわいなう。

伴作　でも、あなたは主人の姫君。殊に毛利元春さまへ云ひ號けのお身の上。なんと不義が致されませう。

お通　伴作、そりや聞えぬわいなう。例へ云ひ號けはあつても、其方に見替へる心はない。コレ、どうぞ願ひを叶

へてたもいなう。

ト伴作が手を持つて云ふ。

伴作　それ程までに思し召すお志し、有り難う存じます
れど、この儀ばかりは、どうぞ。

お通　聞入れてたもらずば、矢ッ張り。

ト また死なうとする。

伴作　コレ、聊爾なされまするな。

お通　叶へてたもるか。

伴作　サア、その儀は。

兩人　サア〳〵〳〵。

ト伴作、こなしあつて

伴作　是非に及ばぬ。お心に從ひませう。

お通　そんなら聞入れてたもるかや。伴作、エヽ、嬉しい
わいなう。

ト抱きつく。腰元、皆々向うへ出て

琴路　お姫様、戀が叶うて

皆々　さぞお嬉しうござりませう。

琴路　マア、これまでは初戀の渡り初め。

霜夜　これから後が肝心關門。

野菊　幸ひ、あの幕の内で。

早苗　積る話しを問ひつ問はれつ。

小雪　サア〳〵、ちやつと

皆々　お越し遊ばせいなア。

伴作　イヤ〳〵、今日は御主人の供先。マア、御用をしま
うた上で。

ト奥へ行かうとする。皆々立ち塞がり

琴路　イエ〳〵、さうは云はしませぬ。お姫様もおんなじ
お主。

霜夜　その主の仰しやる事、聞かいでも大事ないかえ。

伴作　全く左様では。

早苗　左様でなくば幕の内へ。

ゐる　お姫様も、ちやつといなア。

ト伴作が側へ突きやる拍子に、手を取つて

お通　サア、伴作。

伴作　これは又迷惑な。

皆々　サア〳〵、お越し遊ばせいなア。

ト立ちかゝり、二人を橋がゝりの幕の内へ入れる。皆
皆こちらへ來る。序の舞止む。

琴路　どうやら斯うやら方付いたわいなア。

ゐる　わしらもどうやら、けなりうなつたわいなア。

小雪　何を云ふのぢややら。

霜夜　爰に居てはお話しの邪魔にならう。

琴路　それ〱、お手水までは用もあるまい。それまでは機轉を利かして、皆さん、ござんせ。

皆々　ドリヤ、機轉を利かさうか。

ト連れ立ち入る。と神樂になり、橋がゝりより、千の利休、着付け、黒の十徳、好みの頭巾、茶師の拵らへ。草履、紫竹の杖を突き出る。利休の娘早枝、振り袖の町風帽子、抱へ帶にて紅梅の折り枝を持ち、男、挾み箱をかたげ付き出る。

早枝　伯父樣、少と休んでお越しなされぬかえ。

利休　オ、、休まう〱。櫻の木影に床几もあるぞ。其方も休め。

早枝　アイ〱。

ト兩人、床几にかゝる。

利休　早枝、其方は初めての都見物、さぞ草臥れたであらうなア。

早枝　イエ〱、好い慰みでござりましたわいなア。申し、この花を御覽じませ。來る道筋の茶屋の軒端に、美しう咲いてござりましたゆゑ、一枝所望して參りましたわいなア。

利休　ドレ〱。

ト取り見て

紅梅の遲れ咲き、見事ぢや。今夜は橋本に泊つて、夜陰の花も旅の一興。ムウ、至極の枝振りぢや。

ト枝をため、しか〲ある。合ひ方になる。ト奧より、源五郎、空荷をかたげ出て

源五　ヤレ〱、醉つたぞ〱。女子のひら强ひには勝てるものではないぞ。シタガ、先づ商ひはしたと云ふものぢや。

ト一貫程の錢を荷桶へ入れ、しか〲ある。此うちに利休、源五郎を見て、驚ろくこなし。早枝も見て行かうとするを、利休、押へて見ぬ顏して居る。奧より、瀧川、出てこなしある。源五郎、荷拵らへをなして

ドリヤ、去にませうか。

ト行かうとする。瀧川、向うに立ち塞がりて、あちこちと二三度摺れ違うて、源五郎、構はず行かうとする。瀧川、わざと轉けて

瀧川　ア、イタ〱。

ト苦しむ。源五郎、驚ろき

源五　何とぞなされましたか。
瀧川　いま其方の荷の端が、この胸へ當つて、ア、イタイタ。
源五　これはしたり、存じ依らぬ怪我でござりました。お免されて下さりませ。
瀧川　胸へ當つたに依つて、どうやら眩暈が來さうで、アアイタ。
源五　エ、コレ、藥の持ち合せはなし、これは氣の毒な事ぢや。
瀧川　どうで大抵の藥でなけりや癒るまい。ア、イタ。
源五　慮外ながら、擦つて進ぜませう。
　ト怖さうに脊中を擦る。
瀧川　とてもなら、直に擦つてたもいなう。
源五　どうなりと。
　ト懷へ手を入れて擦る。瀧川、懷にて、源五郎が手を持ち、源五郎が顏をちよつと見て、恥かしさうに俯向く。源五郎、ひつしよなく振り放し、こちらへ退く。
瀧川　ア、イタ／＼。
　ト胸を押へる。

源五　まだ癒りませぬかな。
瀧川　きつう術なうて、氣が引入るやうなわいなう。
源五　と云うて藥は持ち合さず、擦ると手を締められる。どうも致し方がない。
瀧川　そんなら又、ア、イタ／＼。
源五　まだ癒りませぬか。こりや餘ツぽどの痛みと見える。ドレ／＼、もそつと擦つて上げませう。
　トまた懷へ手を入れ擦ると、又その手を取つて引締める。
源五　これはしたり、さう締められては、擦られるものぢやござりませぬ。
瀧川　擦つてたもるより、外に好い藥があるわいなう。
源五　外に好い藥があるとはな。
瀧川　奥樣があるかや。
源五　さま／＼の事を問はつしやる。私しは、やもめでござりまする。
瀧川　そんならアノ
　ト源五郎が手を持つて
　夫婦になつてたもらぬかや。
源五　エ、。

瀧川　この願ひを叶へてたもるが、何よりの藥ぢやわいの。

　ト悄り。

源五　呆れて物が云はれぬ。

　トあちらへ退く。早枝、腹立てる。利休、押へて見ぬ顔して居る。

瀧川　先刻にフツと見初めてから、思ひ込んだが癪の種。心の丈を云はうにも、あたりの人目恥かしく、明けて云はうか明さずば、戀死に死ぬる命。よく／＼に思へばこそ、そもやそれぞと打ちつけに、姫御前の口から云はれさうなものかいなう。聞入れてさへたもるなら、母様へお願ひ申して、二世の固め、夫婦になろうと、たつた一言、ツイ云うてたもいなう。

源五　そりやモウ、どうなろうとゝ申したいが、その日暮らしの商人に、お歴々の女中さまが。

瀧川　思ひ込んでは忘られぬ、姫御前の因果ぢやわいなう。

　ト取りついて云ふ。

源五　どうやら後で祟りの來さうな事ぢやが、儘よ、三條小橋で出合うたが不肖。

瀧川　叶へてたもるかや。

源五　お前樣に僞はりのない事なら。

瀧川　二世も三世も

源五　見捨ては致しませぬ。

瀧川　オヽ嬉し。

　ト云ひ、二人抱きつく。利休、苦々しい顔して梅の花を取つて見て居る。奥より

ぬる　瀧川どの／＼。

　ト呼び／＼出て

ぬる　オヽ、瀧川どの、爰にか。酒の座敷を外さうでな。サアサア、ござんせ。

瀧川　追ツつけそれへ參りまする。

ぬる　イヤ／＼、連れて行かにや措かぬ。サア／＼ござんせ。

瀧川　それでも。

ぬる　ハテマア、ござんせいなア。

　ト無理に瀧川を引ツ張つて入る。始終合ひ方。源五郎、見送り

源五　なんの事ぢや。もう一段になつて邪魔が入つた。ドレドレ、去んでくりよ／＼。

ト荷を取りに行く。早枝、源五郎の方へ行くを利休、眞中へ出て立ち隔つて、源五郎へ目をやりながら、梅の花を見て

利休　悪う曲つた枝振りは、どう思うても直らぬわいやい。

トこなし。源五郎、これを聞き、振返つて見て

源五　ヤア、親仁様ぢやござりませぬか。

ト側へ寄らうとする。

利休　コレ〱、親とは誰が事。不所存者に詞は交さぬ。

ト眞中の床几にかけて

ナニ早枝、其方はまだ入組んだ様子を知るまい。この利休、元の名は與四郎と云うて、丹州亀山の町人。幼少より茶の道に志し、門弟も數多あつて、時めくうちに女房は相果て、二人の子供、惣領の娘りつは、母の骨を高野へ納めんと、五郎兵衛と云ふ下人を連れ、家を出でしは十二年以前。皆暮れに歸らず、便りもなし。まだその末に源五郎、これも町家の業を嫌ひ、親の家を駈落ち同然。都へ上り、堂上方へ仕官にありつきしとの風聞。二人が二人と因果の子に離れ、便りなう暮らすうちに、その頃は明智光秀どの丶世盛り。お茶道に召し出され、天晴れ茶道の事は、千人にも勝れしとあつて、千の利休と名を名乗れと、有り難い殿様の御意。所に思はず山崎の一戰起り、殿は討死、家來は散り〲。我れもその場を立退いて、泉州堺の町人に退き、世事を放れ閑居の身。この頃聞けばその源五郎、何やら仕落ちあつて、主人よりお疑ひが出たとも、また立退いたとも噂取り〲。親に背く不所存な心柄は、天道にも見限られ、見る影もない今の有様。この利休はな、武將久吉さまより知行を與へ、天下の茶所になれと、幾度かお召しあれど、一旦光秀どのへ仕へし身の、二君に仕へる心はなしと、段々と御辭退申し上げ、浮世を侘びの茶の手前。釜の自在に起伏しとも、次第に寄る年、老の身の、心細う思ふがゆゑ、娘の其方を呼び取つて、源五郎が暇を願ひ、夫婦となして世を樂しみに暮らさんと、サア、親は子ゆゑに迷へども、子は又親の恩を知らず、故郷の空は見向きもせぬ不孝者……とサア、今にてあれ、倅源五郎に逢つたならば、早枝、この通りを傳へてくれいよ。

ト始終、源五郎へかけて云ふ。源五郎、こなし。

早枝　親御様のお慈悲、源五郎さんが聞かしやんしたら、さぞ有り難う……サア、今にて逢ひましたら、その通り

を傳へますでござりませう。

源五　旅のお女中。現在の親人……ではないアノ、他人の源五郎が、今更の申し譯。親仁樣の詞に迷ひ、故郷を立退き、大内へ傳手を求め、瀧口の武士となり、岩木東馬之丞と名を改め、築地の内を勤むるところに、三年以前伊勢御造營の奉行を蒙むり、御用金千兩を持參いたして、彼の地に赴き、道中筋水口の驛に於て、數多の盜賊拔き連れ切り入り、追ひ拂ふ其うちに、張本と思しき奴、彼の千兩を奪ひ取つて、その場を立退く。南無三方と思へども、詮なきこの身の誤り。のめ〳〵と都へは歸られず、その節失せたる奉納の一腰、所持する者がその夜の盜賊。草を分つて詮議せんと、その場より國遠して、西近江の片里に、その日暮らしの小鮒賣り。親に背いた武家奉公。仕遂げぬも親の罰。先非を悔むにつけましても、この親仁樣はどうしてござるぞ。姉者人の行くへは知れず、朝夕の介抱、さぞ賴りなう思し召さうと、思ひ廻せば身も世もあられず、おのれやれ盜賊を尋ね出し、身の惡名を雪ぎ上げたその上では、侍ひやめて故郷へ歸り、お詫び申して元の町人。その時こそはお心を休めませうと、サア、先づ此やうに源五郎が申したと、女中樣、親仁樣に傳へて下さりませ。

　ト云ふ。利休、こなし。源五郎が手を取つて

利休　この後如何やうの憂き苦勞を致すとも、その身の短氣は親への不孝と、我が身で我が身を教訓して、コリヤ、親に歎きをかけぬやうに。

　ト顏見合せ、こなしあつて、氣を替へ

日もたけた。そろ〳〵行かう。早枝、其所らに杖があらう。取つてたもれ。

源五　イヤ、お杖はこれに。

　ト取つて出す。利休、取つて、源五郎、杖の端を持ち居る。

早枝　また逢ふ事も不定の世の中。

源五　せめては道まで。

利休　イヤ、身の惡名を雪ぐまでは、逢ひ見ぬも又、禪家の悟り。さらば。

　ト杖を振り切る。唄になり、利休の後より、早枝、右の花を持ち、向うへ入る。源五郎、見送りこなしある。

源五　現在の親人を、親とも子とも名乘られぬは、お詞を背いた誤り。お免しなされて下さりませ〳〵。

ト向うを拜みて

何を云ふも彼の盜賊の行くへ。これとても雲を目當。

ト空を見て

降つて來さうな。ドリヤ、歸らう。

ト唄になり、源五郎、荷をかたげ、橋がゝりへ入る。

奥より、瀧川、出て

瀧川　源五郎や。源五郎は何所に居やるぞいなう。

ト尋ねる。小雀、窺ひ出て

小雀　コリヤ、してやつたぞ。

ト後より抱きつく。

瀧川　アレエ、誰れぢやぞいなア。

小雀　大事ない。雀ぢや／＼。

トいろ／＼あるを振り切り

瀧川　こなさんは先刻の

小雀　鳥賣りでござんす。お前のその美しい色事を、おれがこの餌さし竿で、さいてくれうと思うて。

トうけ身になる。

瀧川　何を阿房らしい。

小雀　一つ鵯檜の木の枝に。

ト抱きつく。瀧川、振り切る。

とまりし鳥を

トまた寄るを突き飛ばす。

さいてくれうと思うて／＼。

トこの模樣幾度もあり、トゞ瀧川、小雀を引退けて奥へ逃げうとする。この時、彈正、ズツと出て、立ち塞がり

彈正　瀧川待て。

瀧川　あなたは彈正さま。

彈正　瀧川、返事が聞きたい。

瀧川　返事とはえ。

彈正　この彈正、其方へ兼ねての執心。得心いたさば、母石田へ申し入れ、表向きで妻女にする。

小雀　最前から口說いたも、彈正さまに賴まれての橋渡し。

彈正　云ひ出すからは、否とは云はさぬ。

小雀　但しは否か。

兩人　返事は、どうぢや。

ト左右より云ふ。此うち、臆病口より、高景、家來連れ、出かけ居る。瀧川、こなしあつて

瀧川　否でござんす。

兩人　なんと。
瀧川　例へ母樣が得心でも、今では淀町さまのお側仕へ。不義一統の御法度は、よう御存じでござりませう。
彈正　左程潔白な其方が、物影より窺へば、小鮒賣りと頷き囁き、慥かに密通。
瀧川　エヽ。
小雀　但し、見た事聞いた事、この小雀めが訴人せうか。
瀧川　サア、それはな。
彈正　得心いたすか。
瀧川　サア。
小雀　ぶちまかうか。
瀧川　サア。
兩人　サア〳〵。なんとぢや。
ト瀧川、逃げうとする。彈正、引留め引立てんとする。高景、ズッと出て引分ける。小雀、瀧川を目がけ行くを引き廻し、ポンと當てる。
彈正　ヤア、高景。
高景　彈正さま、こりや何事。
彈正　それなる瀧川、日頃より身共が執心。得心させて妻女にするのサ。
高景　ハヽヽ、瀧川どのは大内の釆女司になされんとある勅諚。但し、勅命をもどいても、こなたの妻女になさるゝかな。
彈正　サア、その儀は。
高景　なんとでござる。
彈正　イヽヤ、瀧川は不義の科人。この場で詮議しぬかにや置かぬ。
高景　イヤ、瀧川どのに詮議ござらば、淀町さまより直の御詮議。彈正さまの要らざるお構ひ。御無用〳〵。瀧川どの、斯樣の所に長居は無用。早く館へナ。
ト額にて敎へる。
瀧川　でも、お姬樣の、
高景　ハテ、お通さまは高景がお供いたす。家來、瀧川どのに付き添ひ參れ。
家來　ハアヽ。
瀧川　左樣ならば。
ト源五郎が事を、ちよつと心意氣あつて
おさらばでござりまする。
ト唄になり、瀧川、家來付き添ひ向うへ入る。彈正、殘念なこなし。バタ〳〵にて、橋がゝりより、侍ひ大

勢、走り出て

侍ひ　申し上げます。桃山の寶藏に籠めある千鳥の香爐、紛失仕つてござります。

高景　ナニ、千鳥の香爐紛失とな。ホイ。

侍ひ　館の騷動大方ならず。高景さまにも桃山の御所へ、お詰めあられませう。

高景　猶豫ならぬ一大事。彈正さま、お別れ申す。家來、續け。

ト侍ひ皆々連れ、橋がかりへ走り入る。と小雀起きて

小雀　今の女は。

彈正　コリヤ。

ト顏にて向うを教へ

早う。

小雀　合點ぢや。

ト向うへ走り入る。彈正、笑壺のこなしあつて

彈正　香爐の紛失、越度は久次公。よし〳〵。

ト唄になり、彈正、臆病口へ入る。と引違へに近習走り出て

近習　伴作さま、これにござるか。千鳥の香爐紛失とあつて、久次公の御前詮議最中。評定の席へお詰めなされませう。

ト云ひ捨て入る。

伴作　ナニ、千鳥の香爐紛失とな。

ト驚ろき出て行かうとする。幕の內より、お通姬、奥より、早瀨、出て

お通　コレ、伴作、伴作いなう。

早瀨　伴作さま、尋ねて居りましたわいなア。

ト兩方より取りつく。橋がゝりより、內記、平馬、源吾、その外人數大勢。水手桶、持ち出て

三人　ソリヤ。

皆々　動くな。

ト取卷き、伴作を圍ふ。

伴作　こりや、なんとするのぢや。

內記　濡れのきいた伴作へ

平馬　若水をくれるのぢや。

源吾　者ども、ソリヤ。

ト皆々かゝる。伴作、一々取つて投げる。トこの時最前の菰樽の內より、權平、副體とも眞赤になり、大肌脫ぎ、荒れの見得にて、出て、皆々を蹴り退け、すつくと立つ。

三人　ヤア、權平か。

權平　伴作どの、爰構はずと、早う〳〵。

伴作　二人とも、行かつしやれ。

ト早瀨、お通は向う、伴作は奧へ別れ入る。

權平　サア、權平が醉ひ狂ひぢや。うぬら一々生けては歸さぬ。覺悟ひろげ。

三人　面倒な。ソリヤ。

ト兩方よりかゝるを、千鳥に取つて投げ、ドッコイと見得になる。三昧線入りの神樂になる。大タテいろいろあつて、トゞ皆々向うへ逃げる。權平、追はへ入る。

ト返し。

右の道具引分け、淺黃幕切つて落す。造り物、三間の二重舞臺、向う金襖、左右落間、後ろ網代塀、八幡の別當座敷の體なり。久次、衣裳長上下。彈正、素袍、烏帽子にて、久次に反り打つてかゝる。久次、座ら留めて居る。上の方に、世尊寺中納言、勅使にて、床几にかゝる。小姓、太刀を持ち、久次の側へ扣へる。下舞臺の上に、筒井順慶、錦の陣羽織を久次へ見せて居る。この並びに、上杉景遠、三輪五郎、淺野左衞門、素袍、烏帽子の形。橋がかりの方に、龍造寺帶刀、山口玄蕃、黑田監物、佐竹左京、素袍、烏帽子、各々大名にて立ち居る。早き太鼓謠、バタ〳〵にて、この道具、向うへ突き出す。

久次　彈正さま、こりや何事でござる。

彈正　罪科極まる其方なれば、推して介錯いたさうと思うて。

久次　イヤ、例へ久次切腹に及ぶとも、こなた樣の指圖は請けぬ。勅使お成りの席と云ひ、尾籠千萬な。お扣へなされい。

ト突き放す。彈正、こなしあつて、下に居る。皆々座る。

世尊　眞柴久次。

久次　ハッ。

世尊　大領久吉には異國征伐、勝ち軍を祈りの爲、當社八幡宮に奉幣を捧げ、その次手を以て、當時桃山の城内に、參勤の諸大名、源平四姓の系圖を撿め、禁裏御文庫に納めよとの勅諚。

久次　建久の頃、右大將の治世に當り、諸大名系圖を撰み

し事、國家安全の例し。未だ部屋住みの某なれども、
父久吉が名代、お勅使とあつて世尊寺中納言どのには、
遠路の御向駕、御苦勞千萬に存ずる。
順慶　武將久吉公には名護屋在陣、留守居に殘る我れ〳〵
ども。
帶刀　采圖檢め承り
景遠　各々申し合せ
左京　未明より爰へ
皆々　相詰め居りましてござりまする。
世尊　只今聞けば、桃山寶藏へ籠めある千鳥の香爐、紛失
との事。この香爐の儀は、明智光秀、春永より拜領し、
いま久吉の寶となる。當今陽成院、深く懇望あつて、叡
覽に供へよと、勅命を下されしところ、紛失あつて事が
濟まうか。急ぎ詮議を糺してよからう。
彈正　イヤ、外を詮議いたすに及ばぬ。香爐を盜んだは久
次、其方ぢや。
久次　香爐の紛失、某が仕業とは、證據ばしあつての儀か
な。
順慶　その證據は、この陣羽織。鳳凰を織りつけし蜀紅の
錦、紛れもない武將の着用、久吉公より讓り受け、こな
たの所持でござらうがの。
彈正　千鳥の香爐に變あらんずる時は、自然と音を出す稀
代の名器。まつた蜀紅の錦を以て、これを覆へば、忽ち
にその音を止む。察するところ父久吉より、家督讓りの
なきを恨み、子として親を亡ぼす謀叛の根ざし。申し譯
は、あるまい〳〵。
帶刀　久次さまは御簾中のお胤。久秋さまは淀町さまの御
實子。この子の愛に溺れ、久秋さまへ天下を讓らん大領
の思し召し。
景遠　さるに依つて、付け家老三浦常陸、不破伴作などが
勸めに從ひ、御野心ありと巷の風說。
隱物　香爐の紛失、旁々以て不審晴れず。
五郎　御野心ござらば、主君の若君とて容赦はない。
玄蕃　勅使の目通り、久次さま。
皆々　御返答を承らう。
久次　ハヽヽヽ。こは仰々しい不審呼はり。千鳥の香爐所
望と思はゞ、父に願うて表向きより、乞ひ請けるに仔細
あらん。父に弓引く野心などゝは、存じも依らず。
順慶　さほど潔白な久次さま、香爐紛失の場所に、この陣
羽織は何ゆゑあつたな。

久次　サア、その儀は。
彈正　謀叛と云つたが誤まりか。
久次　サア。
皆々　申し譯がござるか。
久皆　サア〳〵〳〵。
彈皆　なんとでござる。
　ト この時、伴作、上下に改め、ツカ〳〵と出て
伴作　イヤ〳〵、何れも樣、暫らくお扣へ下さりませう。主人久次が申し譯。恐れながら、この伴作が仕りませう。先づ〳〵暫らく。
彈正　伴作、其方が申し譯とは。
伴作　ハツ、お勅使樣へ申し上げます。千鳥の香爐を盜み取りしは、斯く申す伴作でござります。
久次　ナニ、其方が。
伴作　四海に名高き香爐なれば、日頃望みをかけ、主人の陣羽織を密かに取出し、盜み取つてはござれども、よくよく思へば四海の重器。事露顯せばこの身が大事と思ふより、密かに香爐を相割り捨て、人は知らじと思へども、天命遁がれず御主人の難儀となり、是非に及ばず盜賊の白狀。この上は四海の成敗。サア、如何やうとも。

　ト久次、こなしあつて
久次　伴作、それへ出い。
伴作　ハツ。
　ト平伏する。
久次　不屆きな奴の。幼少より不便を加へ、我が膝元に召仕ひ、若輩ながら忠誠の者と存ぜしに、恩儀を忘れし非道の仕業。千鳥の香爐を奪ひ取りしのみならず、破却せしとは言語道斷の曲者。獅子身中の蟲とや云はん。こな人外めが。
　トきつと云ふ。伴作、下より久次を見上げ、ホロリと泣き、氣を替へて居直り
伴作　サア、御存分に遊ばされませう。
　ト覺悟の體。久次、小姓に持たせし太刀を取り血相する。とこの時向うより
常陸　待つた我が君、暫らく〳〵。
　ト三浦常陸、呼びながら、衣裳上下、家老の拵らへにて、ツカ〳〵と出て
三浦常陸之助、只今出仕。
　ト花道に平伏する。
久次　常陸之助。

常陸　ハツ〳〵。
久次　千鳥の香爐紛失の儀は。
常陸　承知仕つてござりまする。
久次　伴作が白狀、手討ちに致すを何ゆゑ留める。
常陸　罪の疑はしきを輕く行へよと古人の詞。お勅使の目通り、恐れながら常陸めが、委しく申し譯仕らう。我が君には、先づ〳〵。

ト平伏しながら云ふ。久次、こなしあつて、太刀を下に置き

久次　三浦常陸、苦しうない、近う。
常陸　ハア、。

トこの時、伴作、こなしあつて、末座へ行き扣へる。常陸、平伏しながら本舞臺へ來て、刀を橋がゝりの方へ置き、好き所へ座して、平伏する。

彈正　伴作が自分の白狀、盜賊でないとは。
常陸　伴作はお家御譜代、かゝる非道を企むべき謂れがござらぬ。差當る主人の御難儀。この場を無事に納めん爲、盜賊と名乘りしは、主人へ對して忠義の若者。久次公には餘りのお怒り。お手討ちなどとは近頃粗忽。
帶刀　然らば矢張り久次さまに。
景遠　疑ひかゝる。
皆々　香爐の紛失。
常陸　主人に疑ひとは、何を以て。
順慶　香爐紛失の場に、落ち散りしこの陣羽織。
常陸　御父久吉公より、お讓りありし錦の着用。香爐紛失の場所に、我れこそ盜賊なりと云はぬばかりに殘し置いて、我が罪を我が名乘つて出る、狼狽へ者もござるまい。
順慶　サア、その儀は。
常陸　こりや、少と、お粗相かと存ずる。
順慶　イヤ、千鳥の香爐ばかりでない。先達て眞柴の重寶、瓢の簱、紛失いたしてあらうがな。

ト久次、思ひ入れあつて

常陸　成る程、その儀も密かに詮議最中。彼れこれと思ふに付け、先年亡びし明智光秀が殘黨、兼ねて一味の者あつて、御着用の錦を奪ひ、香爐紛失の場に殘し置いて、御親子の仲を割かんと、反間の手段を構へし非道の仕業。

ト彈正へ目をやり、こなしあつて

追ツつけ詮議相糺して。

世尊　千鳥の香爐、叡覽の儀は如何いたす。
常陸　我が君異國より御凱陣あるまでに、キッと手に入れ、御叡覽に供へるでござらう。
監物　して、それまでに在所知れずば。
常陸　事を延ばせし拙者が越度。腹切る分の事サ。
順慶　すりや、其方が身に引受け、切腹を致すぢやまで。
常陸　久吉公にお目鏡を以て、附家老たる三浦常陸。貴人諸侯の方々でも、他出他門の批判は請けぬ。要らざる媒介は、御無用々々々。
ト彈正、順慶と顔見合せ
兩人　ハテナア。
トこなし。
久次　誤まつて疑へば、罪なき人を殺すとの本文。常陸之助、伴作。
常作　ハツ。
久次　この上ともに、忠勤を勵んでよからう。
兩人　ハア。
ト平伏する。
世尊　常陸が忠心にめでゝ、香爐の事は追つての御沙汰。この上は八幡宮の神前にて、諸大名の系圖を檢め、奏聞に及ぶであらう。
彈正　末代までの記錄となる氏系圖。この彈正は桓武天皇の後胤、平の清盛の末孫。兄春永まで十二代連綿たる家の系圖。
順慶　某は橘の末葉、暫らく春日の神職と相成り、運に乘じて大和一國を切り取り、四海に蔓る筒井順慶。
帶刀　拙者は藤原の秀鄉が嫡孫、九國に名高き龍造寺帶刀。
景遠　大職冠二十四代子孫、傳へし上杉景遠。
玄蕃　我が先祖は唐土の林聖太子、大内が一族にて、山口玄蕃。
五郎　武藏の國、兒玉黨を相改め、三輪五郎高秀。
監物　宇多源氏の嫡流、黑田監物。
左衞　清和の正流、淺野左衞門。
左京　新羅源氏の佐竹左京。
彈正　何れも源平藤橘の四姓を離れず、いま四海の武將と仰ぐ久吉は、此系圖なき匹夫下郎。草履摑みの眞柴大領。
伴作　イヤ〳〵、彈正さま。以前は格別、いま久吉公の客分におなりなされて、祿を貪るあなた樣。聞き憎い惡口

雜言。詞が過ぎると免しませぬぞ。
ト擬勢して云ふ。
彈正　なんぢや。何をぎしやげる。なんぼうぬらが切刃廻しても、この彈正、虚言は云はぬ。眞柴久吉は匹夫ぢや。下司ぢや。
ト久次へ當てこすり
作作　下郎を下郎と云つたが、この彈正が誤まりか。餘りと云へば。
トおこづくを、常陸之助、顏にて押へ、心意氣ある。久次もこなしある。
順慶　ナニサマ、久吉は尾州中村筑阿彌と云ふ土民のお胤。その血筋たる久次さま。系圖と云ふは、畑嚙りのうごろもち。なんと何れも、天晴れな系圖ではござらぬか。
皆々　御尤もに存じまする。
踈物　その下司下郎に膝を屈して、尊敬するも時代に連るる人の立身。これを思へば、なめくぢりが天上すまいとも申されぬ。ハ、、、ハ、、、ハ、、、、。
ト久次へかけて云ふ。
世尊　方々が申す如く、眞柴の氏は四姓のうちにも聞き及ばず。末代までの記錄に殘す系圖書。先祖は土民、父は下郎の草履摑みとも記されまい。久次、銘々の系圖を開いて、さぞ心外にあらうな。
久次　漢の高祖は、元沛縣の土民、僅か三尺の劍を引ッ提げ、漢家四百年の基を開き、高祖皇帝と仰がれ給ふ。大和唐土の例しは替らず、日の本の宗廟、天照皇太神は、父久吉が先祖の系圖と、定め置きましてござりまする。
彈正　鋸屑も云へば云はるゝ。口悧巧に云ひ拔けても、貴人は貴人、下司は下司と、相分るが天地自然。斯う云ふうちに時刻延引。お勅使には拜殿へお入りあつて、持參いたせし拙者が系圖。
順慶　我れ〳〵とも姓氏の一卷。
皆々　お撿め下さりませう。
彈正　ナニ作作、久次が草履摑みの系圖を、勅使の御前へ持參いたせ。
ト作作、おこづくを、常陸之助、押へる。
世尊　久次、後刻。
久次　ハツ。
世尊　方々、案内。
皆々　先づ、お入りあられませう。
ト唄になり、勅使先に彈正、順慶、大名皆々奥へ入る。

久次、常陸之助、伴作、殘ろ。合ひ方になる。伴作、
常陸之助と入れ替つて久次を見上げ

伴作　殿樣、さぞ御無念にござりませう。
ト久次、無念を隱す心にて、兩手を組み俯向く。伴作、
久次が顏を見詰め、こなしある。
恥辱を與へし殿樣の御鬱憤。さうぢや。
ト押取り刀にて行かうとする。袴の裾を取つて

常陸　伴作、待ちやれ。

伴作　イヤ、殿樣に成り代り、彈正始め順慶、一々にぶち放し、切腹すれば事は相濟む。其所放さつしやれ。
ト振り切る。

常陸　待て。

伴作　放さつしやれ。
ト立廻つて伴作を下へ引き廻して押へ

常陸　待て〳〵、待たうぞ。
トきつと留める。伴作、常陸之助に詰めかけ

伴作　常陸どの、いま諸大名の惡口は、こなたの耳へは入りませぬか。イヤサ、お耳へは聞えませぬか。いま日の本の武將と仰がれ、勇も智謀も兼ね備へたる久次公、何に劣りは在しまさねど、士民の胤に宿らせ給ひしは、御子孫まで系圖の恥。久次公の御無念まで、思ひやられて伴作めは、腸をズタ〳〵に、切り裂くやうにござるわいなう。
ト身を顫はして云ふ。常陸之助、伴作を見て

常陸　主人の恥辱、無念にあらう。口惜しからう。
ト伴作、ハラ〳〵と泣いて俯向く。此うち、久次、默して思案の體。常陸之助、こなしあつて
貴きも賤きも、替らぬ人界。人も無げなる只今の惡口。
ト奧を睨み
我が主君久次公を、匹夫士民の胤と思ふか。王位を出で
て遠からず、淸和源氏の正流たる、三好左京太夫勝成どのの御胤と、計り知らざる、アノうつけばらめが。
ト奧を見て云ふ。久次、この詞をフト耳に留めてこなしある。伴作も心泣かぬ體にて、にじり寄り

伴作　常陸どの、主人久次公を、淸和源氏の正流、三好家の公達とは、仔細ぞあらん。なんとでござるな。

常陸　ホヽ、仔細を知らねば不審な尤も。斯く云ふ常陸も元は三好家譜代の家來、武將久吉公、未だ筑前守たりし時、室町どのを我が古主たる、左京どのも共に、左京の昵懇を結ばん爲、未だ水子の若君を、お乳諸共に養子

となし、我れも主人の指圖に從ひ、付人となつて當家に赴き、暮れ行く月日も二十三年。古主三好は四國を切り取り、阿波の國勝端と云ふ所に、一城を相構へ、阿波の館と諸人の尊敬。久吉公は運に乘じ、討つに從ひ攻めるに靡き、遂に四海に惣追捕使と仰がれ給ふ。胤腹分けぬ御親子とお聞きあらば、もし不行跡もあらんかと、今日の今まで隱し包みし御身の俗姓。眞柴は武將、三好は臣下の列ながら、氏は正しき清和の後胤、六十餘州の大名に、ナニ恥づる所やあらん。諸侯列座の席に於て、打明けんとは思ひしが、明かさば久吉公を、蔑みする道理と、愚人原が惡口雜言。他所に聞きなす常陸が無念は、マ、どのやうにあらうと思ふ。

ト愁ひのこなしあつて

伴作が無念、久次公の心外も、さぞあらんと思ふがゆゑ、由なき常陸が問はず語り。何事もこの座ぎり。伴作、必ずともに他言は無用。

ト久次、始終を聞き、さてはと心の改まるこなし。

伴作　恥を知る者は仁を知る。諸大名の惡口より、思はざる主人の筋目。恥辱は却つて時の幸ひ。殿樣にも御安堵あつて、然るべう存じまする。

ト久次、キッとこなしある。

久次　今まで知らざる我が俗姓、實父は正しき清和源氏の正流。氏も系圖も誰れか恐れん。

ト思案を極めし體にて

父大領は名護屋本陣、折を窺ふ明智が殘黨、旗上げをなさゞるうち、一つの心の膽を固め、父を押籠め、六十餘州を、掌にせん時節到來。

ト常陸之助、伴作、ギョッとして、ツカ／＼と出て、兩方より詰めかける。

常陸　すりや、御身の系圖を聞いて

伴作　父君に敵對する

兩人　御謀叛の兆しとな。

ト久次、太刀を捨て、ズッと立つて

久次　唐の太宗、兄を殺し、武田信玄は父を排して國を保つ。諫言いたすな。所存は一決。

ト常陸之助、伴作と顏見合せ

兩人　ホイ。

ト當惑する。

内方　還御。

ト云ふ。管絃になり。奥より、勅使、彈正、順慶、大

世尊　名皆々出る。橋がゝりより仕丁出て扣へる。常陸之助、伴作、下へ行く。

世尊　常陸が演說、具さに聞いた。さては阿波の館、三好の胤にてありしよな。

彈正　さは知らずして先程の法外。

順慶　無禮は偏へに

皆々　御免にあづかりませう。

世尊　參內の上、沙汰に及ばん。方々、さらば。

ト行かうとする。

久次　お勅使、待たつしやれ。

世尊　用があるか。

久次　父久吉は武家の棟領、大領關白。この久次は三公の隨一、太政大臣に任官あれと、取次をさつしやれ。

世尊　その願ひ叶ふまい。させる功もなく、故もなきに任官の御沙汰があらうか。存じも寄らず。叶はぬ〳〵。

ト行かうとする、久次、世尊寺が首筋を引ッ摑む。皆皆驚ろく。

コリヤ〳〵、某を何とする。放さぬか〳〵。

彈正　勅使に向つて慮外千萬。

順慶　公成卿を手籠めにして、後日の祟りは如何召さるな。

久次　うぬ、青公家、取次ぎせずば無事に歸さぬ。サア、官位昇進を奏聞いたすか。

世尊　どうあつても、非道に與みする公成でない。奏聞の儀は叶はぬ〳〵。

ト笏にて振り拂はんとする。久次、その笏を引ッたくり、世尊寺が冠りを叩き落し、下舞臺へ蹴落す。常陸之助、伴作、手に汗握る。

狼藉千萬。うぬ。

ト反り打つてかゝる。久次、太刀を拔いて突きつける。彈正、氣を吞まれてとまる。

皆々　我れ〳〵が。

ト留めうとする。久次、持ち替へて白刃を突きつける。皆々血相に恐れて後へ寄る。

久次　承引せずば、生けては歸さぬ。

世尊　サア、それはな。

久次　打ち放さうか。

世尊　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

久次　どうぢや。

世尊　トまた白刃を世尊寺へ見せろ。ワツと云うて飛び退き悚ふ事あつて、それより性根を据ゑしこなし。
オ、、殺さば殺せ、和歌三神も照覧あれ。天理に背く公成でない。何れも取次ぎ、叶はぬ事ぢやぞ。
ト悚へ聲にて云ふ。久次、ズツと下りて世尊寺を切らんとする。常陸之助、世尊寺を引退けて久次が刀に縋つて留める。伴作も一緒に留めて
常陸　待つた。お勅使に凶事あつては朝敵同然。
伴作　四海の騒ぎに、お心が付きませぬか。
常陸　御短慮千萬。先づ〳〵
兩人　お待ちあられませう。
ト久次、こなしあつて、二人を引退け
久次　命冥加な青蠅め。順慶、彼れが衣裳を引剝ぎ、裸にして追ひ拂へ。
順慶　イヤ、その儀は。
久次　早く引剝げ。
順慶　ハツ。
ト當惑ながら世尊寺に向ひ
御意でござる。裝束を脱がつしやれ。
世尊　是非に及ばぬ。兎も角も致さう。
ト我が手に裝束を脱ぎ、小袖も脱ぐ。しよんぼりとなる。
仕丁　こりや、又あんまり。
ト寄るを、世尊寺、笏にて留め
世尊　ヤレ早まるな方々よ。只何事も、麿が不德のなすところ。さは去りながら公成が、諸侯滿座の席に於て、剝がれしと沙汰あつては、攝家清花の恥辱とならん。世尊寺の中納言は、歸京の道筋、白川橋のほとりにて、盜賊に剝がれしと、末代記錄にとゞめよ。斯うもあらうか。世尊寺と云へば損する習ひかや、されども肌に殘る公成。ハテ、有爲天變の世の中ぢやよなア。
トこなし。常陸之助、久次が側へ詰めかけ
常陸　久次公、こなたは何とした天魔が魅入り、非道のお振舞ひ。よも御本性ではござりますまい。御身の御先祖斯くと明かせしも、日頃の御氣性、仁義正しき名將と、見極めし常陸が眼力、相違いたせしこの場の行跡。コレ、例へ三好の胤にもせよ、一旦御養子とならせ給へば、後の親をば本とせよとの本文、お辨まへござらぬか。一人端麗ならざれば一國に亂を生ず。佞人輩が讒言の種となつては、お身の破滅。不義の汚名にその身を果し、玉を

磨きし聚樂の御所も、狐狸野干の住家となつて、父に刃向ふ惡逆とも、畜生とも呼ぶならば、常陸が無念はどのやうにござらうぞ。サヽ、お心を改められ、勅使にお詫び。善心に飜へして下されい。コレ我が君樣。

ト詰めかけて云ふ。久次、拔身を構へ、血相して居る。

彈正　ヤア、常陸、氣もせをやくな。所詮諫言は用ひぬ體。順慶、何れも、何をうつかり。朝敵謀叛の久次、生け置かば後日の祟り。踏み込んで繩ぶて。早く〳〵。

順慶　誠に。何れも、ソリヤ。

皆々　心得た。

ト素袍を刎ね退け、久次にかゝる。常陸之助、伴作、左右にてこれを宥め

兩人　聊爾せまいぞ。待つた〳〵。

トいろ〳〵留める。

久次　ホヽヽ、惡逆とも畜生とも謗らば謗れ。一心は飜へさぬ。謀叛の手始め、先づその世尊寺めを。

ト世尊寺へ切つて行く。早き序の舞になる。世尊寺、逃げ端に迯ひ狼狽する。彈正、久次を搦めよと焦る。順慶、大名、皆々久次を組みとめんとする。一々蹴り退け、世尊寺を追ふ。世尊寺、逃げ廻る。常陸之助、伴作、皆々を宥めたり久次を留めたり、いろ〳〵あり、この立廻りにて、大名皆々、片小鬢を切られたり肩先を切られたり、皆々手疵を負ふ。世尊寺、逃げ廻り、こけつ轉びつ花道へ逃げ込む。仕丁も續いて逃げる。久次、花道へ追ひかけ、伴作、續いて行く。向うへ立ち塞がり、順慶、大名皆々付いて行て組み付く。彈正は本舞臺にて焦り行かんとするを常陸之助留める。花道の人數、右の見得にて、本舞臺へ押し戻す。久次、切り拂ひ、彈正、順慶、臆病口へ逃げ込む。大名皆々橋がゝりへ逃げ込む。久次、向うを目がけて行くを、伴作、組みつき抱き留める。揉み合ふ間に、常陸之助、陣羽織を取つて片手に刀を拔き、久次へ差しつける。三人、この見得にて、後ずさりして二重舞臺までツカツカと行く。久次、キッとなつて

久次　常陸之助、こりや我れに手向ひ致すか。

常陸　イヽヤ、常陸でない。この陣羽織は御父久吉公の着用。取りも直さず久吉公の御折檻。

久次　なんと。

ト伴作を引退けこなし。常陸之助、拔身を捨て

常陸　君は船なり、臣は水なり。

伴作　水よく船を浮ぶる時は

常陸　その君を覆し。

伴作　我れ／＼が諫言は。

常陸　御身に用ゆる良薬とは

伴作　御存じなきか。

常陸　我が君。

兩人　久次公。

トきつと左右より見上げる。久次、息をおさめ、金鍔にて舌を濕し、二人をヂロリと見て、肩にて笑ふ。この見得、チョン／＼にて、この道具廻る。

造り物、山崎の景色。山の半腹に鳥居、觀音寺の屋根ばかり見せて、すべて、淀川より見渡しの體なり。麓の方、松の茂みあり、本釣り鐘にて、入相打つ。雨車になり、窓の黒幕を下ろし、樹木の後へ燒酎火多く出て一面に馳せ違ふ體。

ト向うより、五右衛門、百日鬘、着流し、大刀を差し、傘下駄にて、のさ／＼と出る。始終本釣り鐘、靜かなる合ひ方。右の陰火に目を付け、こなしあり、本舞臺へ來て

五右　あの陰火は。ムウ。すべて人の血汐沁み込みし土中、夜に入ると心火を顯はし、雨風の烈しき夜は、猶盛んなりと聞き及ぶ。

トこなしあつて

爰は山崎天王山の麓、明智光秀春永を討つて逆意を發す。眞柴久吉これをば討たんと、播州かむりが城より討つて登る。光秀爰に出張を構へ、天下分け目の晴れ軍。光秀は遂に敗北。敵味方の郎徒士卒、或ひは討たれ又は自殺。無念の魂魄爰を去らず、心火となつて戰ふ有樣。ハテ、眼前の修羅道ぢやなア。

トこなしある。此うち、雨止む。仕掛けにて月出る。舞臺明るくなる。陰火消ゆると空を見て

こりや、雨もやんで月の出汐。

ト傘を捨て、石に腰をかけ、摺火打ちを出して煙草をのむ。

今夜は八幡の神主めが所へ、諸大名の寄合ひ。なんでも金のありさうな筈ぢやに依つて、三上や足柄めに、かゝれと云ひつけて置いたが、首尾ようやり居ればよいが。

ト云ふうち、トヒョ／＼になると、臆病口の方より、

鳩四五羽飛んで出て、五右衛門が前へバツタリと落ちて死ぬる。五右衛門、鳩を兩手に摑み、こなしあり
鳩は八幡の使はしめ、時に惑うて飛び廻り、悉くくたばつたは。ムウ。
ト思ひ入れあつて、片脇へ退き、かけて居たる石に目を付けて
もしやこの下に。ムウ。なんでも金の墓ぢや。
ト傘の柄にて四方の、土を穿ち、石を兩手に抱へて引上げ、また土を穿つと、下に石櫃のある體。それより兩手にて右の蓋を引上げ、傍へに捨て又、手を突ッ込み、二尺ばかりの四方釘付きの白木の箱を引上げる。蓋の上に一の字記しあり。思ひ入れあつて、拳にて一の字の所を打つ。蓋上がると内に蒔繪の箱あり。又これを開けると卷き物二つ入れあり。一つを取上げ開き見て
明智光秀が舊臣、四王天但馬守、後年未來記を考へ書き記すものなり。
ト讀んで、思ひ入れあつて、また奥を開き
主君光秀公、山崎の一戰破れ、小栗栖の里に於て無念の御最期。但馬守壯年の節、石田と云へる女に契り、身ごもりしは庚申の日。月滿ちて出生せしは、これも替らぬ庚申の日。この日に出生すれば、その者必らず盜賊の相顯はれ、主親にも祟るとの俗說。信ずるには足らねども、乳人が勸め默し難く、藁の上より江州石川村、百姓五作方へ不通に遣はす。幼名は友市。
ト讀み、愕りして
ムウ。すりや、この五右衛門が實父は、明智の家臣、四王天但馬守であつたか。ムウン。
トきつとこなしあつて、また奥を讀む。
乙は女子にて當年七才、まつた主君の御忘れ形見、これも同じく七才にならせ給ふ。我れ討死と定めし上、女房石田を招き、汝命を生き延ばし、久吉が館へ入込み、驅し寄つて猿冠者を討取り、鬱憤を晴らせよと命ず。石田即ち主君の息女と實の娘を左右に携へ、その場を立退く。
ト讀み又、愕りして
さては今桃山の出頭、石田の局と云ふが、我が母であつたか。ハテナア。
ト思ひ入れあつて又讀む。
最期の一念この所に生を引き、倅友市を爰に導き、遺書

と共に譲り與ふる伊賀流忍術の一巻。まつた主君の息女皐月どの、肌の守りに閻浮檀金の觀世音、光秀どの最期まで所持ありし尊像、これを證據に皐月どのに巡り合ひ、主君の欝憤、父が本懐、相違すべきものなり……天正十年水無月十三日、四王天但馬守、爰に討死し終んぬ。

ト讀み、キッとこなしあつて、巻き納め、懐中して、それより一つの巻き物を開き、小口を見て

伊賀流忍術の祕書。

ト讀み、後は口の内にて、奥まで讀み、こなしあつて

すりや、この一巻を肌に付け、草臥の法を行へば、我が形を隱し、人の目を晦ます事、彼の神代の巻に記したる、隱れ蓑にも優りしと云ふ忍術の極意。ムウン。

ト思ひ入れあつて、巻き納め、これも懐中して

今日の今まで、土民の胤と思うて居たが、父は武勇の四王天、母も劣らぬ石山の局。これまで盜み貯へし、金銀は幾程。この上は眞柴の天下を奪ひ取り、久吉は君父の敵、ずだ〳〵に切り苛なみ、諸大名に沓を取らせ、兩手に摑む大日本。四海に羽を伸す天の時來つたか。ハ、、ハ、ハテ、心地よや、喜ばしやなア。

ト諸手を組み、笑壺のこなし。ト左右に人音するゆゑ隱れる。臆病口より、彈正、素袍の股立ちを取りし形にて、家來大勢、付き出で、橋がゝりより、順慶、野袴、黑羽織、忍び頭巾にて出で、兩人、行き合ひ

彈正　彈正さま。

ト彈正、家來を手にて行けとする。家來、ハッと云うて入る。あたりを見て

順慶　順慶、久次が叛逆は、この方の思うた節。

彈正　咎めの箇條は千鳥の香爐。

順慶　その香爐の儀は、先春永より明智光秀へ下され、いま久吉が家の重寶。この彈正が頼みに依つて

彈正　盜み出したはこの順慶。

順慶　して、千鳥の香爐は。

彈正　即ちこれに。

ト香爐を出す。五右衛門、思ひ入れあつて、忍術の巻き物を出し、口の中にて祕文を唱へ、戴いて懐中し、眞中へ出る。兩人、五右衛門が目にかゝらぬこなしにて

イザ、お渡し申さう。

ト差出す。五右衛門、引ッたくり懐中する。順慶、驚ろき

南無三、香爐を。

トうろ〳〵する。

彈正　如何いたした。

順慶　何者やら引ッたくりました。

彈正　何を馬鹿な。何者も人が居らぬが。

順慶　でも、引ッたくりました。

彈正　すりや、香爐を。

兩人　ハテ、面妖な。

ト五右衛門、兩人が顏を見て、我れも不思議なと云ふこなしにて、香爐をちよつと出して見せる。兩人見付けて

さてこそ。

ト取らうとする。五右衛門、ちやつと懐へ入れて、兩人、飛び退く。キッと反り打つて擬勢。五右衛門、兩人を見て、せゝら笑ふ。この見得にて、

よろしく幕

二つ目

聚樂の場
御所の場

役名——眞柴久次。淀町御前。不破伴作。早川高景。仙石權平。三浦又藏。桂右市。渡邊官兵衛。笹野才藏。奥方、常磐木。同、松ヶ枝。同、きのち。同、みどり。同、顏世。妾、浮船。同、小蝶同、東雲。同、蓬。同、夕顏。同、初音。同、陽炎。同、宿り木。同、臺。名古屋山三郎。出雲のお國。世尊寺中納言。花山中將。粟津掃部。柏手右膳。三上の百助。足柄金藏。堅田の小雀。石田娘、早瀨。同、瀧川 實ハ明智皐月姫。石田の局。石川五右衛門。

造り物、一面の二重舞臺、向う、金襖、臆病口塗り骨障子屋體。幕の内より初音、夕顏、陽炎、蓬、東雲、右五人、着附け緋縮緬に襦子の色變りに縫ひ模樣、腰白暈の染め分けにして、熨斗目仕立てにして帶は黑繻子、右は御所女中の拵らへにて、二重舞臺に座り居る。平舞臺の西の方に名古屋山三郎、着附

け空色繻子、桃色の素袍の上ばかり掛け、小結ひ烏帽子に大小差し、半弓と矢を持ち座り居る。同じく東の方に出雲のお國、着付け紫繻子の揷らへにて、小袖、桃色の素袍の上ばかり掛け、小結烏帽子に半弓に矢を持ち座り居る。この見得、太鼓謠にて幕明ける。

山三　ハッ、肥前の國より罷り越しましたる、名古屋山三郞。

くに　出雲のお國と申す者。

山三　お取次を

附人　願ひ上げまする。

夕顔　さてはそもじ達は、聞き及びました二人の衆よな。

東雲　この度大領久吉さま、肥前名護屋に御在陣の徒然をお慰め申せしとの事。

逢　それゆゑ久次さまの御覽に入れよとあつて、送り越されし遙々の上京。

初音　して、そもじ達の風流とは、どのやうな事しやるぞ。

陽炎　マア、我れ〳〵が下見の上にて、久次さまへお取次ぎしませう。

逢　マア、その一曲、今爰で

皆々　所望ぢや〳〵。

山三　ハッ、我れ〳〵兩人、この度肥前の國より參上仕り、久次公の御覽に入れ奉る今樣と申すは、そも飲酒に長じ、色深く。

くに　政り事さへ公の、不德の君と人每に。

〽名にしおふ、いざ事問はん都なる、御所にも馴れつ雛間の、櫻はまだきほんのりと、色めき渡る君心を、誑らかさんと女狐の、憎からざりし心根の、戀は曲者ございんなれ、いでや御目に狩り出し、勇ましくも又健氣なれ。

トこれより太鼓入りのギッテウになる。

山三　そも〳〵御狩の始まりは

〽武をば忘れぬ戰場の、學びてもゆる三つの狩。

くに　流鏑馬、笠懸、犬追ひ物、皆それ〴〵の例しあり、

山三　唐土にてはぶんせい王

くに　我が朝にては鳥羽の院の御時

山三　玉藻の前と身を變じ

〽容顏美麗世に勝れ、てんと堪らぬ天人も、及ばぬ雲の棧橋や、渡りに船の戀の闇、晝とも分かぬ妹脊仲、互ひに抱き月ならば、いつでも丸う添寢して、この日本も一

所に、寄る程嬉しい一つの愛と、迷ひ迷ふぞ淺ましき、
　ト又ギッチウになる。
山三　寶に神國の威德にや、安部の保名が占巫で
くに　忽ち玉藻は、九つの尾の古狐と顯はれ
山三　那須野の原へ飛び去りて
くに　往來の人を惱ませば
山三　弓矢の道に勝れたる
くに　三浦上總之助へ
山三　勅命下つて
くに　馳せ向ふ。
〽武門の晴れとたつか弓、やたけ心と引きしめて、よつぴきひようと放つ矢に、流石三國傳來の、九尾の自在も忽ちに、消えて那須野の殺生石、謂れは今に隱れなき、弓矢の威德ぞ有り難き。
　ト舞臺へ辭儀する。
向方　お成り。
東雲　皆様、久次さまのお成りとござりまする。
蓬初　山三お國も共々に
陽夕　お出迎ひ申さつしやれ。
國山　ハツ、畏まりました。

ト猩々の合ひ方に鳴り物入り、打ちかけにて、皆々出迎ふと向うより、久次、着付け、壺折り、丸絎け、小さ刀差し、左の手を早瀬に引かれ、右の手を瀧川が肩に掛け、酒に醉ひたる體にて出で來る。後より浮舟、久次が太刀を持ち、小蝶、蒔繪の脇息持ち、宿り木、錦の褥、臺、結構なる煙草盆下げ附き出る。瀧川早瀬浮舟宿り木臺は、緋縮緬の着付け、派手な黑繻子の帶、禰襠は色變りの繻子縫ひ模様、腰は白染分けにて熨斗目仕立て、右同様の姿にて、久次に着き添ひ出て來る。久次、二重舞臺へ上がる。宿り木、褥を敷き、小蝶、脇息を直す。久次、褥に上がり、脇息に靠れかる。臺、東雲、蓬、初音、陽炎右人數一面に、二重舞臺に居並ぶ。山三郎お國、平舞臺東の方に座ると、鳴り物合ひ方止め。
久次　いま向うの破れより見物すれば、父久吉肥前より送り越されし、名古屋山三、出雲のお國と云ふは、其方達よな。
山國　ハツ。
久次　苦しうない。ヅツと出い。
山國　ハア／＼。

ト兩人、向うへ出て辭儀する。

久次　若年ながら天晴れの風流。玉藻の前に現をぬかし、四海の政事を怠り給ふ鳥羽院に准へ、この久次に諫言せんと、云はぬばかりの兩人が今様。

山國　エヽ。

久次　小癪な奴等の。鉾になぞらへ、事に寄せ、久次に諫言せよと、大領の云ひつけか。但し、何奴に頼まれた。サア、眞直に白狀せい。

國山　サアそれは。

久次　云はずば拷問にかけ、白狀ささうか。

國山　サア、それは。

久次　但し、手討ちにせうか。

ト浮船が持ちたる太刀を取る。皆々留めて

女皆　マア〳〵、お免しなされませいなア。

伴作　待つた殿様。暫らくお待ち下さりませう。

ト伴作、着附け上下にて、橋がゝりよりツカ〳〵と出て久次を留め

成る程、御賢察の通り、肥前よりこの者どもを送り越し鉾に事寄せ御諫言申し上げよと、加藤小西兩臣が計らひでござりまする。

久次　ヤア、奇怪なる加藤小西が采配。かゝる小兒を以て、久次に諫言などとは、慮外な奴の。ヤア、われ達も、その分に差置かれぬ奴なれども、云はば若年者、其まゝに赦しくれる。山三は今日より久次が側小姓、お國は直に妾となし、三十餘人の列に加へくれる。喜ぶべし〳〵。

國山　イヤ、私しどもは。

伴作　ハテ、お詞を返すと直ぐにお手討ち。

兩人　ぢやと申して

伴作　ハテマア、お請け申したがよいてや。

ト顔にて呑み込ます。

久次　伴作、今朝其方に申しつけし、三浦常陸方への使者、いよ〳〵申しつけし通り承知か。

伴作　ハツ、先達て八幡にて、殿の御由緒申し出だし、却つて御心逆立て、それより閉門仰せつけられしところ、今朝拙者を使者として、三浦常陸が閉門お赦し遊ばされ、その代りとあつて、先達て御父大領様御懇望の、齋の宮の神木常磐の松、父久吉公を差措き、久次公に差上げよとの御難題。三浦常陸早速承はり、齋の神職に對面いたし、お望みの常磐の松を持ち歸り、即ち次に控へさせ置きましてござります。只今取寄せ御上覧に供へ奉り



二世中村富十郎の石田の局

ませう。ヤア〳〵、伴作が家來、常磐の松これへ。

侍ひ　ハア〳〵。

ト上下の侍ひ、黒塗りの石臺、上の松を持ち好き所に直し、直ぐに入る。久次、松を見て

久次　ヤイ伴作、見れば枝葉も枯れ〳〵の、常磐の松。さては久次を誑かるか。憎い三浦め。急ぎ常陸をこれへ呼べ。目にもの見せん。早く〳〵。

伴作　イヤ殿樣、全く以て、似せ物ではござりませぬ。

久次　でも、この如く。

久次　常磐の松は枯れにけり、おのが千歳を君に讓りて。

久次　ヤ、なんと。

伴作　有情の松も心ありて、久吉公と申し、久次公御親子御所望。もしや爭ひになりもやせんと、自然と枯れしは申し譯。さるに依つてこの如く、常磐の松は枯れにけり、おのが千歳を君に讓りて。松の枯れしは、常陸が科ではござりませぬ。

久次　ヤア、父久吉へ獻上せぬ先、久次に贈るを心外に思ひ、齋の神職と三浦が計らひに相違ない。枯れたる松は所望にない。伴作、キリ〳〵持つて立ち居らう。

ト石臺を蹴飛ばせば、仕掛けにて石臺四方へ割れる。中に常陸が切り首入れてあり。久次、皆々愕りして

皆々　これは。

伴作　三浦常陸が切腹の死首。イザ、御實驗下さりませう。

久次　ムウ、して、三浦が切腹の仔細は。

ト伴作、久次が側へ詰め寄り

伴作　久次公。エヽ、お情ない御心でござりますなア。好色亂酒に性根を蕩かし、暗君愚將と世の人々の、譏りを思し召しませぬか。只いたましきは三浦常陸。殿樣を三好のお胤と申す事、これまで深く包みしは、久吉公と御眞實の御親子と思し召されかし、久次公へ生中の事申し上げ、却つて御親子の御仲、隔たりては四海の歎きと口を閉ぢ、附添ひしところ先達て、八幡に於て御勅使を始め、諸大名の歷々銘々、氏系圖申し合せ、眞柴家は氏素性も無き匹夫下郎とさみせられ、思はず三浦常陸、久次公こそ、阿波の三好の血派と、申し上げたが害の元。久吉より遙か勝りし由緒なれば、四海を掌握せんと、日頃に變りし大惡無道、日々增長し、お目にとまりし女は、幾人となくお側へ引き入れ、放埓惰弱。さるに依つて三浦常陸、先非を悔いて切腹仕る、何卒我が首を久次公

のお目にかけ、御本心になり遊ばさるゝやうに、くれぐれ頼むと敢へなき最期。それゆゑ常磐の松と偽はり、この首をお目通りへ持参仕りしは、忠臣無二の三浦が存心、立てさせん爲。憚りながら不便と思し召され、御本心になり下されませうならば、四海一統の喜び。草葉の蔭の常陸、さぞや成佛仕りませう。お聞き届け下さりませうならば、有り難う存じまする。

久次　ヤア、伴作、忠臣無二の三浦とは、なんのたわ言。久次が附家老の身を以て、我れを偽はり、よくも今まで三好の胤と云ふ事、包み隱せし不忠不義。見るもなかなか穢らはしい。早くこの首持つて立ち居らう。

伴作　エ、、淺ましや。我が君、如何なる天魔の魅入りにて、斯くまで強惡非道のお心とはなり給ふぞ。これまでの通り先賢の敎へを守り、御座なるれば、自然と御手に入る眞柴の四海。それを何ぞや、無法無體に奪はんとは、順に向ふ逆賊同然。明智が如く叛逆の惡名がお取りなされたいか。久次公、エ、、情ない、御所存でござりますなア。

久次　ヤア、聞きたくもない諫言だて。詞を返すと、手は見せぬぞ。

伴作　三度諫めて身退くは、本意にあらず、諫言のお手討ちは望むところ。サア久次公、遊ばせ〳〵。

ト居直つて首差伸ばす。早瀨、心遣ひのこなし。

久次　好い覺悟、觀念せい。

ト太刀拔き放す。早瀨、焦る。瀧川始め皆々心遣ひのこなし。久次、伴作を手討ちにせうとする。

早瀨　ア、コレ申し。

ト取りつく。

女皆　マア〳〵、お待ちなされませいなア。

ト留めるを振り放して討たんとする。奥より、早川高景、ツカ〳〵と出て久次を留め

高景　久次公、先づ〳〵お待ち下されませう。

久次　早川高景、惡どめ立てすると、其方とても容赦はないぞ。

高景　エ、、お情ない。また御短慮が差起りましたよな。誰れかある。お藥を早く〳〵。

茶道　ハア。

ト銀の天目に金の茶碗載せ、持ち來るを高景取つて

高景　イザ、お藥召上がられませう。

皆々　マア〳〵、お心をお靜め遊ばされませい。

ト瀧川、無理に拔身を取つて鞘に納めるうち、早瀨、その外皆々、久次が顏色を見てこなし。久次、物云はず、高景が差出したる藥茶碗を取り、一口呑まうとする。ト向うより、バタ〳〵にて、上下の侍ひ、走り出て、花道に手をつかへ

侍ひ　申し上げまする。

高景　何事ぢや。

侍ひ　ハツ、石田の局さま、御簾中淀町さまのお供あつて、火急のお成りでござりまする。

ト云ひ捨て、花道へ入る。

高景　ナニ、淀町さまのお供召され

瀧早　母樣のお越しとは

皆々　また御意見にお入りなされたか。

ト久次、キッとなつて藥の茶碗打ちつけ

久次　出迎へ。

ト瀧川が持つたる太刀を引ッたくり、ツイと奥へ入る。皆々後を見て、ホッと息を吐く。

高景　好き折柄のお成り。石田の局と申し合せ、また諫言の致しやうもあらう。伴作、其方はその首片付け、山三、お國を引連れ、暫らく次の間へ。

伴作　畏まつてござります。

ト元の如く石臺へ首を包む。

山三、お國、身に付いて次へ來やれ。

ト下がり葉になり、伴作に山三お國付き添ひ橋がかりへ入る。高景、瀧川、早瀨、その外、皆々見得好く出迎ふ。ト向うより、淀町、着付け襠褊にて、靜々出て來る。後より、石田の局、石疊の着付け、襠褊にて出て來る。後より、松ケ枝、常磐木、みどり、きのぢ、顏世、右五人、諸大名の奥方、着付け襠褊にて、付き出る。皆々花道に立ちとまる。

高景　これは存じ寄りなき淀町の御方さま、石田どのを始め、何れもには御苦勞の御供。

淀町　早川高景、出迎ひ大儀。

石田　肥前名護屋より火急の早打ち、それゆゑ淀町さまのお供申し、久次さまへ申し上げませうと存じまして。

松枝　蟹江上野が妻松ケ枝。

常磐　同じく妹常磐木。

きの　南方帶刀が妻きのぢ。

顏世　澤邊武藏が妻顏世、

みど　柳川監物が妻みどり。

常磐　皆々參上。

皆々　致しましてござりまする。

高景　イザ先づこれへ

皆々　お通り下されませう。

ト矢張り下がり葉にて、淀町、靜々と二重舞臺の褥に上る。次に石田局座る。次に高景、早瀨、瀧川、浮船小蝶、東雲、蓬、夕顏、初音、陽炎、宿り木、臺、一面に二重舞臺に並ぶ。平舞臺の西の方に、松ケ枝、常磐木等座る。下がり葉打ちあげる。

高景　先づ何かは差措き、肥前名護屋より早打ちとは、承りたう存じ奉ります。その仔細憚りながら、一々に承り、安堵仕りたう存じ奉る。

淀町　成る程、高景の氣遣ふも理り。自らとても大領樣より、火急の御書到來。心ならぬ御上意の趣き。石田の局高景へ申し聞かせ、久次どのへ、演舌いたさせてよからう。

石田　畏まりましてござります。この度、大領樣よりの御上意には、久次公のお身持ち放埓惰弱と、好からぬ取沙汰。それゆゑ先づ聚樂の御所の寶藏を撿め、大領樣よりお預かりありし、御用金に相違ありや、撿めの役はこの石田に相勤めよと、大領樣より御上意でござりまする。

松枝　イヤ／＼、コレ、石田の局、今日淀町さまのお入りは、大方寶藏の御吟味と心付きましたゆゑ、御供いたして參りました。その寶藏の金子は、不足いたしてござりまするぞ。

石田　なんと仰しやる。寶藏の金子が不足いたしてあるとはな。

松枝　云ふも憂し、云はぬも辛し。久次さまの御放埓、斯う顯はれましたれば、是非に及びませぬ。成る程、寶藏の金子は久次さまが、お遣ひ捨て遊ばしましてござります。

みど　夫監物どのも、久次公に賴まれまして、拜借人の列に加はり

きの　この度出陣の軍用金と申し立て

額世　表向きをくろめう爲

常磐　人聞き惡るい金の借り主。

松枝　ほんに大抵迷惑な事では

皆々　ござりませぬ。

淀町　そんならいよ／＼、放埓の聞えあるその上に、寶藏の金子まで。ハア。

ト當惑のこなし。

石田　イヤ、憚りながら、養藏の金子不足いたしましたは、久次さまの越度ではござりませぬ。こりや皆これにござる、各々方の夫の誤りと申すもの。

松枝　イヤコレ、石田どの、イヤ、石田の局。そもじの事は淀町さまのお氣に入り、女中のうちの出頭と思うて、云はせて置けば方圖もない。銘々夫の誤まりとは、何がどうして我れ〳〵が、夫の

五人　誤まりでござりまするな。

石田　例へ久次さま、如何やうにお頼みなされうとも、後日に大領樣へ申し譯がないと思へば、初めに辭退もあるべき筈。一旦得心の上、金の拜借人とならば、如何なる詮議に遭ふと云つても、明らさまに云はぬが武士の誠。この場に及んで大領樣へ、申し譯を云ふとすれば、久次さまへ不忠となる。但し大領樣ばかりお主で、久次さまはお主ではござりませぬか。

皆々　サア、それは。

石田　如何に女中の淺はかなればとて、淀町さまのお側とも憚らず、少とお嗜なみなされませ。

松枝　成る程、こりや、誤まりましてござります。

皆々　ほんに、わたしらも不調法。

松枝　シタガ、石田どの、こなたばかり、あんまり潔白に物は云はれまいぞえ。姉妹の娘、早瀬どの瀧川どの、二人とも久次さまのお側腰元とは、大きな僞はり。三十餘人のうちで、いつち二人が御寵愛と云ふ事は、誰れ知らぬ者もないぞえ。それをチツと押默つて、御意見も申し上げず、二人の娘も取返さぬ。但し、慾に目が見えぬのか。なんと、久次公の御放埓の元はと云へば石田どの、こなた親子の仕業でござるぞや。

ト石田の局、こなしあつて氣色を替へ

石田　早瀬瀧川、これへ出や。

兩人　アイ。

ト合ひ方になり、兩人、こなしあつて、平舞臺へ下りる。石田の局、平舞臺へ下りて、早瀬、瀧川、石田の局が兩方へ分れ、三人ともに下に居て

早瀬　母樣、なんの御用でござりますえ。

石田　二人とも、今の樣子聞きやつたか。先達て久次さまより、其方姉妹二人を差上げよとの御上意。その時母が云ひ聞かせ置いた事、もう忘れたか。元この母はお端下奉公より、今お局頭とまで立身したは、これ皆淀町さまの

お情、必らず〳〵眞柴の大恩、忘れぬやうにと、くれぐれ云つたは爰の事。久次さまより召されまするこそ幸ひ、姉妹ともお側に付き添ひ、心底誠に持ち、もし御放埒と見るならば、及ばずながらも御意見申し上げ、お聞き届けなき時は、密々に知らせよ、その時はこの石田が、如何やうにもお諫め申し、大領樣のお聞きに立てぬやうに執成し、御親子ともに浪風なう、四海靜かに納めうと思ふ石田が心を、ようも無足にして、今のやうに云ひ立てられ、淀町さまにこの母が、なんと申し譯があらうぞ。女ながらも石田が娘、久次さまに御放埒を、お勸め申さぬと云ふ云ひ譯あらば、サア、あなた方の目の前で二人ともさつぱりと、申し譯しや。サア、早う〳〵。

ト氣を急いたるこなし。

早瀬　成る程、今のやうにお聞きなされましたら、お腹立ちはお道理でござりまする。なんの〳〵、誓文妹が慥かな證據。久次さまに身を任せは致しませぬ。

瀧川　姉樣の仰しやる通り、私しとても久次さまの、淺からぬお詞を下されますれど、母樣の云ひつけを守り、身を任せぬ事は姉樣が、慥かな證據でござりますわいなア。

早瀬　また久次さまの御身の上も、及ばずながら二人して、御意見を申しましても、高がわたしらが申す事、お用ひなされませぬ短慮な御氣質。

瀧川　母樣へお知らせ申しませうにも、片時もお側を放しなされず、たま〳〵の隙に文認めますれば、お心が廻り、外に云ひ交した者もあるやうに、思し召してのお怒り。

早瀬　お心が逆立ちますると、誰れ彼れのおいとひなう、御短氣のお手討ち。

瀧川　お側に居るさへ、姉樣も私しも、生きた心は

兩人　致しませぬわいなア。

石田　そんなら、いよ〳〵噂に違はず、御意見申す者、切つてお手討。

ト淀町と顏見合せ

ハア。

ト當惑のこなし。

淀町　高景、大領樣より御書の越き、お咎めの條々、先づ世尊寺中納言の裝束を剝ぎ、その上奧庭に能舞臺をしつらひ、禁廷を憚らぬ驕りの沙汰、第一のお咎め。寶藏の金子を我まゝになし、三十餘人の妾を愛し、諫言の者を

短慮の手討ち。この三ヶ條の云ひ譯立たねば、久次に切腹させよとの御上意。

高景　すりや、久次公に御切腹と……ホイ。

淀町　自らには義理ある久次どの。切腹させよとのこの御書は、ほんにお心強い久吉さま。眞實の子の久秋を世に立てんと、生さぬ仲の久次どのを、惡しざまに云ひなせしも、自らが戀しいゆゑと、世の取沙汰。と云うて久次どの丶本心を見屆けねば、大領さまへお詫びの願ひも叶ふまい。ハテ、是非に及ばぬ有樣ぢやなア。

石田　イヤ、御意見申し上げませう。

淀町　ヤ、なんと。

石田　申さば久次さまの御大切の場所。幾重にもお諫め申し、御本心に致させまするが、あなたのお爲、四海の爲。

淀町　そんなら石田どの、今一度其方が詞を盡し。

石田　お氣遣ひ遊ばしますな。

松枝　イ、ヤ、心元なうござります。例へふるなの辯とやらを以て、御意見申したとて、なんとして〳〵、あのお心は直りますまい。

石田　そこを石田がお諫め申し、御本心に致してお目にかけませう。

みど　して又、寶藏の御用金、不足いたした申し譯は。

石田　そりや、先達て拜借なされた衆中より、久次公の大事と聞き、返納あらば金子の不足は償ふ道理。

きの　ハテ滅相な。私しどもの夫が借りもせぬ、その金は皆久次さまに頼まれまして。

石田　サア、其方のとは內證事。久吉公の御上聞に達しましたれば、今さら違變は大領樣を僞はる大罪。

皆々　エ丶。

石田　こりや金子返納、なさらずばなりますまい。

常磐　そりやマアそれにもせよ、三十餘人のお妾達の、申し譯はな。

石田　殘らずお暇。

常磐　エ丶。

石田　ハテ、御本心におなり遊ばした證據。お妾達は皆親元へ、お歸しなさる丶がお身の潔白。

常磐　イ丶エ、そりや心元なうござります。日頃寵愛の女中達、なんとしてお暇は出せますまい。又お妾達も、今さら思ひ切つて歸らしやる心あらば、久次さまもあのやうな、放埓にはおなりなされますまい。石田どの、この

云ひ譯は立ちますまい。

浮船　イヤ、そりや氣遣ひさつしやるな。妾も元は中將繁秋が娘、君が一日の情に、妾が百年の命を捨つると云ふ事は、よう心得て居ますわいの。

小蝶　私しが父齋藤平右衞門、兼ね〲の御教訓にも、唐と大和の譬へを引き、女の色に溺れるは、國の亂れと申す事、よう心得て居りますわいなア。

東雲　いま久次さまのお身の上と存じながら、なんの未練な心をさげませう。わたしも唐尾彦六が娘でござりまする。

蓬　淺からぬお情は忘れませねど、久次さまのお身の大事には替へられませぬ。本間左膳が娘、心の覺悟は極めて居りまする。

宿木　久次さまのお爲と承りまして

夕顏　なんの違背を

皆々　申しませうぞいなア。

早瀨　わたしら二人は兼ねてより、お暇願ひ居りますれば

瀧川　どうぞ久次さまの、お身の明りの立ちますやうに

皆々　偏へに願ひ上げまする。

石田　オヽ、皆殿樣を思ふ志し、驚ろき入ります。なんと、これで申し譯は立ちませうがな。

松枝　ようござりまするが、第三番目のお咎め。御意見申す者をお手討ちになされた越度。この申し譯は、よもやござりますまい。

石田　イヤ、そりや見ると聞くとやら申す諺。なんぞや科なき者を理不盡に、御成敗はなされますまい。我が身に誤まりありながら、その科をくろめん爲、忠臣顏の諫言。其處を覺つてお手討ちは、天晴れ武將の久次公。

皆々　すりや、三ケ條の申し譯は。

石田　なんと、これで相立ちませうがな。

皆々　サア、それは。

石田　但し又、外に御不審がござりますか。

皆々　サア。

皆々　サア〲〲。

石田　久次公の御身に、曇り霞みはござりますまいがな。

淀町　ホヽ、オ、天晴れの石田。それで自らが義理も立つ。久次どのも安穩。これと云ふも其方の志し、嬉しうござるぞや。

ト奥より、粟津掃部、着付け上下にて、ツカ〲と出

で、高景が前に手を突き
掃部　高景どの、何卒淀町さまへ、お取次ぎ願ひまする。
高景　粟津掃部、淀町さまへお取次ぎを願ふ仔細は。
掃部　ハッ、即ち久次公の仰せには、粟津掃部にお茶を立てさせ差上げよとの御事。圍ひへ御入りあつて、恐れながら拙者が差上げうと存じ奉ります。
高景　お聞きあられましたか。
淀町　未だ三ヶ條の趣き、承知の返答聞かぬうちに、圍ひへ入つては。
高景　イヤ、憚りながら三ヶ條の趣きは、石田どのにお任せあつて、久次公の御返答遊ばさるゝまで、圍ひへお入りあつて、御休息願ひ奉ります。
淀町　そんなら石田。
石田　追ッつけ御承知の御返答、申し上げまする。
高景　何れも、圍ひへ入つてお相伴。
皆々　有り難う存じまする。
高景　イヤ、淀町さま。
淀町　皆の者。
石田　先づお入り
皆々　遊ばされませう。

ト琴唄になり、この人數皆々奥へ入る。あと合ひ方になり、橋がゝりより、伴作、出て來て、こなしある。
伴作　久吉公より三ヶ條のお咎め、一つとして申し譯の相立たぬ久次公のお身持ち。まだも頼みは石田どの、諫言何卒お用ひ下さらば、この上の喜び。どうぞ御本心に致したいものぢやなア。
ト此せりふのうち、奥より、早瀬、出て來て
早瀬　申し、伴作さま。
伴作　ヤア、早瀬どの。
早瀬　コレイナア、お前にお話し申したい事が、山々ござりますれど、根つから久次さまがお側を離れますると、御機嫌が損じまするゆゑ、もしひよつとお手討ちに遭ふかと、それが怖さに物云ふ事さへ儘ならぬ身の上。申し、私しが心に隔てはござりませぬ程に、必らず變つて下さりますなえ。
伴作　なんの／＼、一旦武士が申し交せし事、例へ何時まで逢はぬと云つて、この方に隔てはござらぬわいの。
早瀬　ア、嬉しや。そのお詞を聞いて私しも、落ちつきましてござりますわいなア。
伴作　して、こなたの母御石田どの、久次公へ御諫言申し

上げられたか。殿にもお聞入れなされたか。その樣子は如何でござるぞ。

早瀨　サア、どうでも御意見をお聞入れ遊ばしたやら、久次さまにもきつい御機嫌の樣子に見えまして、淀町さまへの御馳走に、お能が始まりまする。二三番はお能師へ仰せつけられ、次のお能は久次さまが、熊野をお舞ひ遊ばす筈。申し、囃子方は高景さま、仙石權平さま、あなたとお三人さまへ、仰せつけられましたぞえ。

伴作　ナニ、すりや、久次公がお舞ひ遊ばし、この伴作も囃子方とな。

早瀨　さうでござりますわいなア。

伴作　すりや、いよ〳〵御意見を用ひ遊ばされ、御機嫌が直つたと相見える。アヽ嬉しや。それで少しは心の安堵。併し、斯う云ふ所を、久次公に見付けられたら、また御機嫌が損じては互ひの爲に惡い。サア〳〵、ちやつと奧へ〳〵。

早瀨　アイ〳〵。云ひたい事も人目あれば、隙を見合せ認めました、この文御覽じまして、私しが心の遣る瀨なさを、御推量なされて下さりませいなア。

ト文を出し、伴作が懷へ入れうとするを、その手を捉まへ

伴作　そんなら、この文に心のたけを。

早瀨　アイ。

伴作　忝ないが、此まゝ別れるも、どうやら本意ないものでもあり。

早瀨　必らず變つて。

伴作　よいものかいなう。

ト引寄せ抱きつく。この時、奧より、常磐木、出て來て、この體を見て愕りして

常磐　早瀨どの〳〵……コレ、早瀨どの。

ト二人が後で地團太踏む。兩人、驚ろき退く。

早瀨　オヽ、常磐木さま、愕りしましたわいなア。

常磐　コレ、愕りの段ぢやない。久次さまがお召しますわいなア。遲なはつたら大抵の事ぢやござりますまい。御短氣の起らぬうち、ちやつと行かしやんせいなア。

早瀨　アイ〳〵、よう知らせて下さりました。申し、そんならちよつと

ト伴作の方を見て、こなしあつて

ドレ、參じませうか。

ト奧へ入る。ト内にて式三番の囃子になる。とう〳〵

たらり〳〵らあらりやたらり〳〵らあたらりたらりらりとう。ト此うち、常磐木、伴作に、いろ〳〵のこなしあり。

伴作　ハア、もうお能の始まり。ドレ〳〵、楽屋へ行つて、皆の衆と申し合せて置かう。

ト行かうとするを、常磐木、向うに立ち塞がり

常磐　伴作さま、お待ちなされ。

伴作　イヤ、拙者は、アノ次の能役目もござりますれば。

トまた行かうとするを引留める。此うち、始終式三番の鳴り物なり。

常磐　エヽ、聞えませぬ伴作さま。フッと見初めてそれよりは、伏見と聚楽に隔たりて、文玉章も幾度か、折々久次さまの御名代に、伏見の御館へ上がらしやんす、お顔を見るがせめての楽しみ。これ見て下さんせ。わたしがこのづげない振り袖も、どうぞお前と女夫になり、袖もとめたり眉取つて、見たり見せたり何時までも、互ひに手に手を取りもち桶。所詮放れぬ悪縁と、思うて色よいお返事を、どうぞ聞かして下さんせいなッ。

伴作　サア、成る程、度々のお文にあづかり、一度も返事いたさぬは、落ち散る事の恐れあり。不義は武家一統の御法度なれば。

常磐　イヤ〳〵、さうは云はしませぬ。不義は武家一統の御法度と云はしやんすお前が、たつた今早瀬どのと、たつた二人、何やら爰でおかしい素振り。ありや、なんでござんしたえ。

伴作　イヤ、あれは。

常磐　不義でござんせうがな。

伴作　ハテ、滅相な。ありや早瀬どのを以て、お能の儀を久次公より、仰せつけられましたゆゑ、畏まり奉ると、その返答を申して居りましたのでござります。

常磐　ムウ。そんなら久次さまより、アノ早瀬どのを以て、お能の事を。

伴作　左様でござります。

常磐　そんならマア、それにして置いて、伴作さま、どうぞわたしが願ひを。

ト取りつく。

伴作　ハテ、不義は御法度でござりますわいなう。

ト振り放す。

常磐　ハテ、誰れも知つた者はござりませぬわいなア。

トまた取りつく。

伴作　ハテサテ、お放し下されい。
　トまた振り放す。この時、奥にて、式三番の揉みの段の鳴り物になる。常磐木、取りつき、イヤアと鼓のかけ聲と共に伴作振り切る。この模様のうち、早瀬、出かけ、この體を見て、腹を立て、ツカ／＼と行き、常磐木を引退けて
早瀬　申し、伴作さま、久次公が召しまする。ちやつとお出でなされませ。
　ト伴作が手を取る。
常磐　イヤ申し、今のお返事を。
　ト同じく伴作が手を引ッ張る。
伴作　ハテ、御前のお召しでござるといなう。
　ト此うち、揉みの段の仕舞ひにて、イヤアのかけ聲と共に向うへ突き放し、早瀬が手を引きツイと奥へ入る。この時、鳴り物止む。常磐木、向うにこけたなりに
常磐　エヽ、胴慾な男づら。わしが此やうに思うて居るのに、せめて一度は聞き入れてくれたがよいわいなう。
　トこの時、奥にて、鈴の段になる。常磐木、そろ／＼起き上がりて
　今の二人が素振りでは、どうでも譯があると見える。それでわしが願ひを叶へてくれぬのぢやな。エヽ、腹の立つ。どうしたらこの恨みが晴れうぞ。なんでもアノ二人めが。
　ト云ひさま落ちてある文を見て、拾ひ取り、此うち、始終鈴の段なり。
　名宛はなけれど、こりや正しく戀の文。爰に落ちてあるは……ムウ。さては早瀬の方から伴作づらへ行く文よな。ハテ、好い物が手に入つた。久次さまのお目にかけ、二人ともに不義の越度。恨みを晴らすは今この時。さうぢや。
　ト此うち、鳴り物早め、常磐木、文を持つて、奥へ走り入る。と鈴の段終る。奥バタ／＼にて、久次、柏手右膳が首筋取つて、片手に太刀を引ッ提げ出て來る。右膳、着付け上下にて、久次に引立てられ、御免下されと云ひ／＼出て來る。後より瀧川、女形皆々付き出る。
皆々　マア／＼、お放し遊ばされませいなア。
　ト詫びながら出て來る。久次、右膳を取つて引寄せ
久次　おのれ、今日の饗應方を申しつけしに、何ゆゑ久次が能を勤めぬうち、饗膳を出せしぞ。仔細ばしあつての

右膳　事か。返答は、なんと／＼。
右膳　ハッ、その儀は石田の局の指圖に任せ、式三終つて直ぐに、饗膳を奉りましてござります。
久次　まだ／＼おのれ、久次が申しつけし、饗應方の役目を粗略に致し、石田の局が下知に從ひ、主を蔑ろに致しても苦しうないか。
右膳　イヤ、全く左樣ではござりませねど。
久次　左樣でなくば、何ゆゑ我が詞を用ひぬ。
右膳　ハッ。
久次　うぬ、憎くい奴の。
ト太刀の柄に手をかける。
右膳　ア、、お免されませ／＼。
ト云ひ／＼逃げて入る。久次、行かうとするを、瀧川、留める。奥より、掃部、出て留めて
掃部　ハッ、久次公、先づ／＼お待ちあられませう。淀町さまよりお使ひ。
久次　ムウ。してその趣きは。
掃部　ハッ、淀町さまよりの仰せには、誠に今日は慇懃のもてなし、殊の外のお喜び。さるに依つて拙者を以て、御挨拶のお使ひ。今日眞柴の威勢盛んにて、日の本は過半靜謐になりしと申せど、未だ三韓征伐のこの時節なるを以て、遊びも强いて好むはむべならず。御馳走のお能も、十番とあるを、何卒三番に遊ばされよとあつて、饗應に不足はさら／＼なしとの、御內意でござりまする。
久次　ハ、、、、誠に諺に云ふ如く、女賢しうて事を破ると、武道の意味は婦人の知るところでない。三韓征伐の中にて、遊びの業をなすも、彼の軍門に琴を調べし臥龍。同じき久次が心。思慮なき指圖は無用の舌の根。十番は愚か、百番でも久次が馳走の能、押默つて拜見召されと、申し聞かせよ。
掃部　イヤ、御意ではござれども、そりや上下分たぬお詞。すべて上つ方の舞ひ給ふを拜見と申し、同格以下の亂舞なすを見物と云ふ。淀町のお方樣は、久次公の御母君ならずや。子の身として母君に饗應の御能、拜見などゝは近頃粗忽の御一言。
ト久次、ぎつくりとなる。
そのお心ゆゑ、放埒惰弱は日夜に長じ、好色亂酒にお身を亡ぼすと御承知ないか。
久次　ヤア、粟津掃部、おのれが役目の茶の道は守らず、猪口才な諫言。取措け／＼。

掃部　如何にも、茶道を申し立てに、御奉公は仕れど、帶刀いたせば武士の身の上。道ならぬ儀は幾重にも。

ト云ふを久次、拔討ちにポンと切る。掃部、死ぬる。瀧川、皆々恟りして

皆々　ナウ情なや。また御短慮が起りましたわいなア。高景さま、伴作さまいなア。

ト云ひ〳〵橋がゝりへ逃げて入る。瀧川も共に逃げて入るを

久次　瀧川待て。

瀧川　ハイ、、、。

ト立ちとまると、合ひ方になり、久次、顔にて瀧川に水を持てと云ふこなし。瀧川、心得て怖々手水鉢の柄杓にて水を掬ひ持つて行く。久次、刀を突き出す。瀧川、刀に水をかけるこなしにて、慄へながら柄杓を思はず取落す。久次、直ぐに瀧川を討たんと振り上げる。奥より、石田の局、出て、瀧川を引退ける。久次、石田の局へ切つて行くを、よろしく留めて

石田　娘瀧川に不調法がありませうならば、幾重にも、お免しなされて下さりませう。

久次　オヽ、石田、好い所へ參つた。瀧川が詫びを致す其方、よくも久次に恥辱を與へたなア。

石田　これはマア、思ひも寄らぬ御立腹。君恥かしめを請け給へば、卽ち臣死すとや申しまする。大切なお主樣に、なんの恥辱を與へませうぞ。

久次　然らば又、我が勤むる能も始めぬうち、何ゆゑ酒宴を催ふし、饗膳を出せしは、其方が指圖と饗應方が白狀。これ全く主を輕んじ、我れに恥辱を與ふる其方が仕業。サア、この云ひ譯があらば速かに致せ。申し分に依つて、その座は立たさぬ。石田、この返答は、なんと〳〵。

石田　ハツ。すべて貴人の御招請にお能あれば、面箱と共に蕗の臺を出し、御土器を勸めまするは、これ卽ち能も饗應のうち。また續いて御配膳を出させましたは、何事も打解け給へと、御親子のお志しを通させ奉らん爲ばかり。申さばお手づから捧げられましても、恥かしからぬ御母君樣。それゆゑ石田が久次公になり代り、御配膳仕りましてござりまする。

久次　イヽヤ、久次とは生さぬ仲、政所死去の後、大領の御意に叶ひ、久秋を産み落し、淀町の御方と、諸大名の尊敬に、長ずれば伸し上がり、久次が母呼はり、奇怪千萬な事。

石田　エヽ、お情ない御所存。いつぞやより只貴きを嫉み、賤しきを好り給ふ、御氣質とおなりなされ、聊かの事にも御憤り深く、日毎に募る惡逆非道。遂には佛神のお咎め、恐ろしいとは思し召さぬか。國家の爲をお辨まへ下さりませうならば、何卒御本心におなりなされて下さらば、なんぼうか有り難う存じまする。

久次　よいワ。其方が諫言聞き届けた。が其方にも又、久次が詞、よもや違背は致すまい。

石田　何がさて、なま逆様な仰せでも、なんの違背いたしませう。

久次　オヽ、然らば次の能は熊野。其方シテの役を勤めよ。久次がワキ、即ち宗盛の役。この儀、しかと申しつけたぞ。

石田　これはマア、思ひ寄らざる御難題。なんと致して私しが。

久次　辭退はなるまい。先達て桃山に於て、父大領、其方に所望ありし時、違背なく春日龍神を舞うたではないか。大領の上意を用ひ、この久次が詞は用ひぬか。

石田　イヤ、それは。

久次　例へ如何やうの儀でも、違背はせぬと云つたでないか。

石田　サア、それは。

久次　女ながら久次に、諫言いたす其方。よもや嫌は言はれまいぞよ。

ト石田の局、キッとこなし。

石田　畏まり奉りましてござります。

ト奥バタ／＼にて、常磐木、早瀬を引立て、奥より出て

常磐　申し上げまする。この早瀬どの、久次さまのお身の上に、ある事無い事、母御の石田どのへ、内通いたされましたゆゑ、淀町さまの今日のお成り。久吉さまよりお咎めの御書が参りましたも、元はこの早瀬どのゝ仕業でござりまする。

早瀬　コレ申し、滅多な事仰しやりますな。なんのマア勿體ない、久次さまのお身の上を。

常磐　イヽエ、内通せぬとは云はさぬ。慥かな證據がござりまするぞ。

早瀬　なんぼうさうぢやと云うて。

石田　娘待ちや。久次さまのお身の上、母へ内通いたしたとある、聞捨てならぬお詞。して、その確かな證據とは

どれにござりまする。

常磐　アイ、即ち爰に。

ト最前の文を出し

この密書が確かな證據。今讀んでお聞かせ申しませうか。

ト文を抜き

人目を忍び認め參らせ候ふ。包むる事の漏れ易きは、手に結ぶ水より早しと申し候へば、斯樣に通じ參らせ候ふ事、もしや顯はれ候うては、如何なる憂き目に遭ひ候ふかと、久次さまのお側に勤め參らせ候ふも、刃を渡り候ふより、恐ろしく存じ參らせ候ふ。

早瀬　イヤ、その文は。

ト取りにかゝるを突き退け

常磐　なんと石田どの、鷺を烏と爭うても、くろめられぬはこの文。早瀨どのゝ手跡でござんせうがな。

ト石田の局の方へ文を突きつける。石田の局、早瀨が手跡ゆゑ、當惑のこなし。

この文の文章は、正しく內通に違ひないぞや。

トきつと云ふ。瀧川、常磐木が持ちたる文を取り

瀧川　イヤ、この文の主は、私しでござりまする。

常磐　ヤ。

早瀬　コレ〳〵妹、そりやマア、何を云うて下さる。その文はの。

瀧川　イエ〳〵、姉樣、妹をお庇ひなされて下さりまするは、志しは忝なうござりますれども、ナ、覺えもないお前、ハテサテ、わたしが身に覺えのあるこの文。おやに依つて有やうに、名乘つて出ましたのでござりまするわいなア。

常磐　そんなら瀧川どの、こなた樣が內通したか。

瀧川　イヽエ、內通の覺えはござりませぬ。

常磐　でも、この文、覺えがあるからは、內通でなうて、何の爲に認めたのぢや。

瀧川　戀でござります。

常磐　ヤア。

瀧川　お恥しながら、人目を忍び云ひ交しましたは、この身の災難。申し母樣、いたづら者と思し召しませうが、是非ない事で、御堪忍なされて下さりませいなア。

石田　コレ、そりや何事を云ふのぢや。姉の難儀をその身に引受けてたもる志し、出かしやつた、忝ないが、コレ、其方は大切な……イヤサ、兄弟ともに大切に、育て

上げたこの毋。何れに愚かがあらうかい。元よりこの文
に名はない。さすれば達て證據にもならぬわいなう。
久次　イヽヤ、瀧川が不義に相違ない。
石田　エヽ。
久次　さま／＼に口説けども、久次が心に從はぬは、外に
不義の相手があるに極まつた。サア、瀧川、その不義の
相手は何者ぢや。名を名乘れ。
瀧川　サア、その名は。
久次　云はぬか。
瀧川　どうも。
久次　白狀せぬか。
瀧川　どうぞお免しなされて下さりませ。
久次　不義の相手を白狀いたさずば、內通の疑ひ、姉の早
瀬を拷問せうか。
瀧川　サア、それは。
久次　但し、不義の相手を白狀するか。
瀧川　サア。
久次　早瀬、其方が內通か。
早瀬　サア。
久次　兩人ともに責苦にかけうか。

兩人　サア。
久次　白狀するか。
兩人　サア。
三人　サア／＼／＼。
久次　なんと。
　ト瀧川、早瀬、こなしあつて
兩人　ハア。
　ト差俯向く。
常磐　所詮遁がれぬ二人が科。ドレ、わたしが白狀させ
う。
久次　イヤ、この詮議は外に申しつける者がある。ヤア、
四人の女ども、これへ參れ。
四人　ハア、。
　ト松ケ枝、みどり、きのぢ、顏世、橋がかりより、ツ
カツカと出て
松枝　お次で委細の樣子、承りましてござりまする。
みど　二人の詮議は私しどもへ
きの　仰せつけれ下さりませうならば
顏世　問ひ狀にかけまして
松枝　眞直に白狀

四人　致させませう。

久次　出かした。瀧川早瀬兩人を、奥庭の能舞臺、櫻の元へ引立て、責苦にかけい。

松枝　して、その責道具は何を以て

四人　仕りませうな。

久次　オヽ、それこそ其方達が帶せし、その扇を以て。

四人　そんなら、この扇を以て。

ト銘々女扇を出す。

久次　扇の骨は凡そ十本、十度打たば百杖の數。直ぐなる竹を以て、親骨小骨締めからんだ、要際も碎くる程、打つて〳〵打ち据ゑて、白狀させい。

四人　畏まりましてござります。

久次　常磐木は次の間にて、石田に裝束させい。

常磐　畏まりました。サア、石田どの、次の間へお立ちなされ。

瀧川　そんなら、母樣。

ト兩人、ツカ〳〵と石田の局の側へ行く。石田の局、瀧川、早瀬が手を兩手に持ち、こなしあつて

石田　妹は姉を敬ひ、姉は妹を憐れみ、もしも妹がまさかの時は、早瀬、その身に替へても、ナ、不便をかけねばならぬぞや。さりながら、如何に主命なればとて、現在二人の娘が、責苦に遭ふを餘所に見て、心ならぬ扇の手。靜御前も鎌倉へ、捕はれの身の仇舞ひ。それは戀ゆゑ、これは子ゆゑと、忠義に結ぼれし母が心の苦しさを、推量せよ、二人の者。

兩人　母樣。

ト顏見合せ

石田　是非もない世の

三人　有樣ぢやなア。

トこなしあつて泣く。

久次　ムウ、是非もない世の有樣とは、久次が威を蔑みする述懷。無益の歎きに時移り、饗應の能、延引に及び、無禮などゝ久次が、恥辱を與へる所存か。

トきつと云ふに、石田の局、ぎつくりとこなしあつて、瀧川、早瀬が手を振り放し、スツと立つ。

久次　ソレ、引立てい。

四人　ハツ。立たつしやれ。

ト銘々扇を振り上げる。石田の局、ちよつと行かうとするを、常磐木、枷になると唄になり。チヨン〳〵にて、石田の局、二重舞臺に立ち、常磐木、石田の局を

次へ伴ふ見得。久次は二重舞臺より、奥の能舞臺へ行く見得にて、太刀引提げ、臆病口へ歩みかける。石田の局、常磐木、橋がゝりへ歩みかける。平舞臺に、松ヶ枝、みどり、きのぢ、顔世、四人して、瀧川、早瀬二人を前後より圍ひ、臆病口の方へ歩みかけ、この見得にて、引き道具。

右二重舞臺に金襖、段々東へ引ッ込む。西より能舞臺、橋がゝい諸とも引き出す。この舞臺の前に右近の橘、左近の櫻、これも一緒に引き出す。臆病口の方、少し小高き亭座敷に御簾かけあり、能舞臺、鏡板の前に、伴作、高景、權平、三人、着付け長上下、烏帽子にて、伴作は小鼓、高景は太鼓、權平は笛にて、伴作、高景、相引にかゝり、鼓を前に置き、キッと構へ居る。この見得にて引き道具とまる。此うち始終面白き合ひ方にて、久次、能舞臺の橋がゝりを靜々歩み來る。伴作、高景、權平は久次を見て頭を下げる。久次、靜々と能舞臺の上へ通り床几にかかり、此うちに、きのぢ、顔世、早瀬を圍うて平舞臺の上の方へ通る。松ヶ枝、みどり、瀧川を圍うて能舞臺の東の方に扣へる。伴作、早瀬が體を見て、打驚ろくこなし。

四人　サア、下に居さつしやれ。

　ト瀧川、早瀬、下に居る。

久次　ヤア、早瀬瀧川、尤も宛名はなけれども、密書の文體は、われ達兩人に相違ない。久次が側を勤めるは、劍の刃を渡るより恐ろしいと、認めしが遁がれぬ證據。內通の覺えなくば、不義の越度。不義が僞はりならば內通を以て、久次を讒言せし科。何れの道にも一人は遁がれぬ。サア、尋常に白狀せい。

　ト聞いて伴作、さては早瀬と不義顯はれしかと驚ろくこなし。早瀬、伴作と顔見合せ、こなしある。瀧川もこなしある。

瀧川　コレ〳〵、姉樣、覺えのない身を以て、もしひよつと色目に覺られ、お前までが不義の疑ひ、お受けなされますると、折角私しが心を盡しました事も水の泡。母樣と云ひ姉樣まで、これまでの御養育。その御恩を送る爲、殊に私しが願ひは、所詮叶はぬと覺悟して、死ぬる心でござりまするわいなア。

早瀬　イヤ〳〵、なんぼうでも其方は殺しませぬ。私しと

ても、所詮願ひの叶はぬこの身。申し、久次さま、どうぞ妹をお助けなされて下さりませ。その代りに早瀬が命を。

瀧川　イエ〳〵、矢ッ張りこの瀧川が命を。

早瀬　イエ〳〵、わたしを。

瀧川　イヽエ、わたしを。

兩人　お手をかけられ下さりませう。

久次　死罪極まる罪、その者の白狀せぬうちに、命を取らぬが四海の掟。われとても不義なくば、名を明かせ。內通ならば白狀せい。

兩人　どうも、それは。

久次　云はぬか。

兩人　お免されて下さりませ。

久次　死太い女め。人の爲に辛ければ、人又我れに報いんと、久次が心に從はぬ二人の女。憎さが百倍。責めて責めて責めさいなみ、白狀させて討ち放す。ソレ、打ち据い。ゑ

四人　ハア……サア、白狀さつしやれ〳〵。

ト四人、扇にて兩方より叩く。伴作、思はず行かうとする。

高景　コレ〳〵伴作、我れ〳〵はお能の役人。詮議の場所に構ひはない。ナウ仙石氏、左樣でないか。

權平　御意の通り、今日は申樂の役なれば、武の道を取措いて、猿樂の我れ〳〵。

高景　出ない所へ立合つて、疑ひ請けぬやう致されい。

伴作　成る程、御兩所のお示しの通り、承知仕つてござります。

久次　ヤア、囃子の面々、構はずと始めい。

三人　ハッ。

久次　ヤア、石田、用意よくば、早々參れ。

石田　ハア、。

ト石田の局、衣裳襠補、かつら鉢卷にて、中啓持ち、ツカ〳〵と出て、橋がゝりの眞中にて座る。

久次　石田、早く舞へ〳〵。

石田　ハッ。

〽寺はかつらの橋柱、立出て峯の雲、花やあらぬ初櫻の、祇園林下河原。

南を遙かに眺むれば。

〽大悲應護の薄霞、熊野權現のうつります、御名も同じ今熊野、稻荷の山の薄紅葉、靑かりし葉の秋、また花の

春は清水の、たゞ頼め頼もしき、春も千々の花盛り。山の名の音羽、嵐の花の雪。

〽深き情を人や知る。

ト これより舞になり、この舞のうち、瀧川、早瀬、石田の局と顔見合せこなし。松ケ枝、みどり、顔世、きのぢ、サア白狀〳〵と互ひ違ひに扇にて叩く。石田の局、舞ひながらこの體を見てこなし。瀧川、鼓打ち鳴らしながら早瀬の方へこなし。高景、權平、顔にて押へるこなし。久次、始終瀧川と石田の局に目を付けて、舞のうちに太刀に手をかけ、瀧川の方へ行かうとする。石田の局、舞にて支へる。見得よろしくあつて、三段の舞をしまふ。

石田　なう〳〵、俄に村雨のして、花を散らし候ふは如何に。

久次　實に〳〵村雨の降り來つて、花を散らし候ふよ。

石田　あら心なの村雨や。春雨の。

〽降るは涙か〳〵櫻花、散るを惜しまぬ人やある。

ト 爰にて石田の局、懐中より短册を出し、舞にて短册に歌を書き、久次へ持ち行き差出す。久次、取つて

久次　由あり氣なる詞の種、取上げ見れば、如何にせん都の春も惜しけれど

石田　馴れし東の花や散るらん。

久次　實に道理なり、哀れなり、早々暇を取らするぞ。東に下り候へ。

石田　ナニ、お暇と候ふや。

久次　オヽ、暇を。

ト この謠のうちに久次、太刀に手をかけ、瀧川の方へ行かうとするを、石田の局、舞に紛らし支へる模樣。久次、また早瀬の方へ行かうとする。石田の局、それを切れと云ふ心にて、構はず舞つて居る。久次、石田の局の舞に目を付け、二三遍も試して見るこなし。瀧川、早瀬、石田の局の舞のうちに、三人顔見合せ、石田の局の方へ行かうとする。久次、太刀に手をかけ切らうとするゆゑ、ちやつと後へ寄る。松ケ枝、みどり、きのぢ、顔世、舞の邪魔にならぬやうに、間々に、サア白狀と扇にて叩く。伴作、鼓打ちながら心遣ひのこなし。高景、鼓打ちながら、權平、笛を吹きながら、顔にて伴作を押へるこなし。右何れもこの謠のうちにて謠のとまりに四人、サア白狀〳〵と疊みかけてせりかける。石田の局、舞ひ納める。瀧川、早瀬、ハアと

泣き落す。

石田　マア、お待ち下さりませう。

久次　石田、其方は手向ひ致すか。

石田　全く手向ひは、

久次　手向ひせば、其方も。

ト石田の局へ切つて行くを、よろしくあしらふ事あり、この時、奥より、淀町、ツカ〳〵と出て、久次を引き廻し、持つたる草履にて、散々に叩き伏せる。

皆々　ヤア、淀町の御方。

ト久次、キッとなつて、淀町が持ちたる草履の手をしつかと留め

久次　ヤア、下司下郎の足下にかける藁沓を以て、久次を何ゆゑの打擲。

淀町　この草履は、御父大領久吉さま、此下藤吉のその以前、御手に觸れさせ給ふ供先の替へ草履。

久次　なんと。

淀町　この度、異國征伐御出陣の時、自らを招き、金吾久秋は生得柔弱にして、四海を知る勇將ならず、久次は器量骨柄、天晴れの大將なれども、もし阿波の三好の流れと聞き、我まゝ募らば其方、久吉に成り代り、コレこの草履を以て諫言せよとの仰せ。子を見る事父に如かずと、次第に募る我まゝ非道。忠節正しき石田の局を苦しめ、二人の娘を責苦にかけ、まだその上に手に掛けうとは何事。その惡逆無道をお怒りなされ、切腹させよとの御上意。どうぞ久吉公へ申し譯もあらうかと、自らと云ひ石田まで、千々に心を碎いて居ますわいなう〳〵。それに重なる非義非道。エヽ、情ない所存ぢやなア。

久次　ヤア、奇怪なる諫言。親たる久吉は、匹夫下郎の草履摑み。この久次は阿波の三好が嫡子。氏も系圖も親に優りし久次に、草履の折檻、慮外千萬。その返報には、久次が帶劍を以て。

ト拔身にて、淀町を打たんと振り上げる。石田の局、押へて

石田　ハテ、勿體ない。假にも御母君に劍を以ての狼藉。天の冥罰、恐ろしいとは思し召さぬか。

久次　イヤ、生さぬ仲と云ひ、養子の久次に母呼はり緩怠至極。大位に上る久次。親子の緣を斷ち切つてくれうわい。

トまた切つて行くを、石田の局、突き退け、淀町を圍ひ居る。伴作、高景、權平、久次を押取卷き

高景　淀町さまに手向ひ遊ばされますると
伴作　恐れながら我れ／＼が
權平　敵對仕りまするぞ。
久次　小癪な奴の。久次に手向ひせば、一々首を。
ト切つて行くを三人、よろしく立廻りあつて、久次が拔身を奪ひ取り、久次、三人を能舞臺より蹴落し、我れも續いて飛び下り、右近の橘に手をかけ、引拔き、この木にて、三人を討ちにかゝるを、三人搔い潜り、伴作、高景、橘の兩端を持ち、權平、眞中を久次が前へ押當て、三方より押す。久次、キッと踏みとまり、三人、エリヤ／＼と久次を右橘のゐがきへ向けて押しかける。互ひに持み合ふうち、ゐがき仕掛けにて兩方へ開く。久次、たぢ／＼と右のゐがきへこけ込む。バッタリと天井下り、駕籠なりの牢輿になる。
四人　これは。
石田　達て御諫言お用ひなき時は、押籠め奉るより外なしと、淀町さまと申し合せ、早川仙石不破の面々、密々に申しつけ置いた牢輿。何れも御大儀。
三人　ハッ。
久次　さては石田が計らひにて、久次を謀かつたよな。

淀町　日夜に募る不孝不義。久吉さまのお怒り強く、切腹させよとの御上意は、目のあたりと察せしゆゑに、石田の局と謀し合せ、眞逆の時は御出家を勸め、高野山へ落しませうと、思ふに違はず、今日切腹させよとの御書到來。
石田　是非に及ばず、恐れながら、計らひ置いたる牢輿は、法の門出の御幸の車。纖しき仲の義理を思し召し、淀町さまのさま／＼とのお心遣ひ。必らず／＼忘れても、くみやしつらん旅人の、高野の奧の玉川の水。放埒惰弱は御身の邪ま。即ち毒水となつて人を害し、その身の果は高野の奧に、朽ち果て給ふも、前世の業因と、お諦らめ下さりませう。
久次　ヤア、出家得度とは穢らはしい一言。さては生さぬ仲の久次を疎み、久秋に四海を讓らん淀町の惡心よな。それに媚び諂らふ石田の局。生き替り死に替り、この恨み晴らさいで置かうか。
淀町　エヽ、情ない。今にも本心に立返らば、直ぐに四海の主と仰ぎ、自らも久秋も、水車の下館へ、蟄居する心でござるわいなう。
石田　イヤ、所詮諫へさぬ御氣質。御切腹との御上意を、

助命のお願ひなさるゝは、廣大の御仁心。三人の樂は與
に引添ひ、高野まで御供いたされませう。
三人　畏まつてござります。
淀町　アヽ、思へば飛鳥川の浮世、昨日までも今日までも、
三十餘人の妾達も、斯くなり給ふとは夢にだに、思ひ寄
らぬ御身の果。高景、これへ呼び出し、暇乞ひ致させて
よからう。
高景　ハツ。
ト橋がゝりに向ひ
お女中達、久次公へお暇乞ひ。早く／＼。
女皆　ハアヽ。
ト橋がゝりより、浮船、小蝶、東雲、初音、宿り木、
臺、陽炎、この人數、裲襠にて出て來る。後より、名
古屋山三郎、お國、出て來る。末座に扣へる。女形皆
皆牢輿を取巻き
山三　久次さま、替り果てたるお姿でござりますなア。
山三　私しは今日、肥前名護屋より參りました、名古屋山
三郎。
くに　私しは出雲のお國。
山三　何卒久次公のお供。

くに　仰せつけられ下さりませうならば
兩人　有り難う存じ奉りまする。
淀町　神妙の願ひ。聞き屆けた。
兩人　エヽ、有り難う存じます。
女皆　何卒我れ／＼に御供を。
淀町　イヤ、久吉公への聞えも如何なれば、供は叶はぬ。
併し、三條河原まで、お見送り申さつしやれ。
女皆　そんなら、お供は
高景　ハテ、叶はぬとの御上意。
皆々　ハアヽ。
ト泣き落す。
くに　今日初めて御對面申し上げ、妾の數にお入れ下され
し身の面目。
浮舟　せめてお供は叶はずとも
宿木　冥土の御供
臺　追ツつけ後より
皆々　參上いたしませう。
ト女形皆々行儀に並び、名々懷中より短册を出し、手
に捧げ
浮舟　朝顔の日蔭待つ間の花に置く、露より脆き身をば惜

しまじ。
東雲　いづくとも知らぬ暗路に迷ふ身を、導き給へ、南無阿彌陀佛。
初音　説き置ける法の教への道なれば、一人行けども迷ふべきかな。
宿木　羅を切る彌陀の劍にかゝる身の、何か五つの障りあるべき。
小蝶　存らへば憂も憂き目を三つ瀨川、渡りを忙げ、君や待つらん。
臺　秋風に誘はれて散る露よりも、脆き命を惜しみやはせん。
夕顏　悟れども、迷ひある身も隔てなき、彌陀の教へを深く頼まん。
陽炎　草も木も皆佛ぞと聞く時は、愚かなる身も頼もしきかな。
くに　忙げたゞ御法の舟の出でぬ間に、乘り遲れなば誰れを頼まん。
浮舟　伴作さま
宿木　久次さまへ
小蝶　お取次を
皆々　願ひ上げます。
ト短册を差出す。
伴作　如何計らひませうな。
淀町　苦しうない。しほらしき詠歌。其方、預かり、高野の閑居にて、徒然のお慰み。
石田　早瀨瀧川も見送りの爲、三條川原まで。
瀧早　畏まりましてござりまする。
高景　時刻移れば、大領樣の聞え。警固の用意よくば早出立。
伴作　ハッ。
ト橋がゝりの方へ向ひ
輿舁きの武士、用意よくば、早く〳〵。
侍ひ　ハア〳〵。
ト官兵衞、右市、又藏、才藏、右四人、半素袍高股立ち、侍ひ烏帽子にて、輿臺を持ち出て好き所へ直し、この上へ右の牢輿を直し、高景伴作、權平、山三、右四人、輿の前後を圍ひ、皆々輿を舁き上げる。石田の局、輿に向ひ
石田　隨分お命全う、御發心を乞ひ願ひ奉ります。
久次　ヤア、發心とは何のたわ言。大領久吉が無成敗、追

ツッけ思ひ知らせん……故もなき罪は高野の鏡石、曇れる御代のしるしなりけり。

淀町　エヽ、淺ましい。

　ト輿の方へ行かうとするを、石田の局止めて

石田　先づ〳〵。

　トなだめるこなし。淀町、氣を替へる。

お立ち。

皆々　ハア。

　トしめやかな合ひ方になり、右の牢輿の先へ、山三郎、權平、次に牢輿、後に伴作、その次に浮舟、臺、小蝶、東雲、初音、陽炎、宿り木、夕顏、お國、後押へに高景、皆々、靜々と向うへ入る。淀町、輿を見送り、こなしあつて、松ヶ枝、みどり、きのぢ等を連れ、皆々奥へ入る。右、能舞臺の眞中に、石田の局一人殘り居て、向うを見て、しほれしこなしにて

石田　誠に權花一日の榮へと同じ。久次公の御身の上。ハテ、是非もなき世の盛衰ぢやなア。

　ト涙にくれし體にて、俯向くと、臆病口、床の下より、松ヶ枝、顏世、橋がゝりより、みどり、きのぢ、あたり窺ひ、そろ〳〵出て來て兩方より

四人　石田のお局。

　ト局、顏を上げ

石田　シイ〳〵……密かに〳〵。

松枝　兼ねて申し合せし通り、寶藏の用金盜み出させ、久次の放埓にて使ひ捨てしと、久吉公への讒言いたしましたも、お前の指圖。

みど　數多の妾を進め込む、好色亂酒の馬鹿者と、讒言したもお前のお敎へ。

きの　諫言する者を手討ちの樣子、一々名護屋へ早打ちを以て

四人　告げ知らせたも、あなたのお指圖。

松枝　思ふ壺へ持ち込んだ、久次どのゝ身の上。

きの　高野山へぼいまくれば、さしづめ四海は久秋公。

みど　お年恰好も、似合ひ相應なれば、御妹御の瀧川さまを御簾中と定め

松枝　石田さまは武將の姑御。

顏世　この上もなき、御果報と存じまする。

松枝　千秋萬歳

皆々　おめでたう存じまする。

石田　ヤア、眞柴と緣を組むとは穢らはしい。娘早瀬は我

が實の娘、姉瀧川は三代相恩の御主人。

四人　エヽ。

ト四人、下に居る。

石田　何をか包まん、この石田は、明智光秀公の身内、四王天但馬守が妻。光秀公山崎の戰ひに敗軍遊ばされ、小栗栖村にて、敢へなき御最期。その時我が夫但馬守も共に切腹。御遺言に從ひ、主君の御息女早月さまを、密々に伴ひ、人目を忍び御名を包み、我が娘と僞はり、右と左に同じ年の娘二人を引連れ、わざと下ざまの奉公を望み、桃山の御殿へ入込み、淀町へ取入り心を許させ、寶藏へ忍び入り、瓢の旗を奪ひ取り、時がな折がな久吉親子を討ち亡ぼし、お主と夫の修羅の亡執、晴らさんと思ふところに、久次阿波の三好の流れと聞き、俄に放埒惰弱となり、日夜に耽る好色亂酒。親子の禮儀も思はぬ非道。大望成就はこの時、久吉久次親子の仲を不和となし、同士討ちさせて滅亡させんと、わざと繕らふ忠義顏。今まで包みし一大事、最早事成就すべき到來。兼ね〲志しを見届けしゆゑ、大切なる早月さまのお身の上、語り聞かす。猶この上ながら、忠義を勵んで下されや。

みど　驚ろき入りました瀧川さまの御身の上。明智さまの御息女とあれば、誰れ憚からぬ氏系圖。

松枝　瀧川さまは四海の主。

顏世　閨近き習へは、右大將賴朝の簾中政子、尼將軍と云うた例しを引き

松枝　瀧川さまを守り立て、四海の固めは石田さま、我れ我れが夫を始め、諸大名一統にお味方いたさば

みど　眞柴の四海は瞬くうち

きの　滅亡させて

四人　見せませう。

石田　その詞に僞はりなくば、松ケ枝も附添ひ、きのち顏世三人は、後より追ひ駈け、久次を討つて取れ。

女三　畏まりました。

石田　みどりはコレ

ト懷中より毒藥の包みを出し

この珍藥は淀町が配膳へ仕込み、忽ちに命を取れ。

ト渡す。

みど　心得ました。

石田　一時も早く〱。

四人　ハア〱。

ト松ケ枝、きのち、顏世は向うへ走り入る。みどり、

奥へ入る。石田の局向うを見て、ニッタリ笑みを含み
こなしあると、奥より常磐木静々と出て
常磐　石田のお局へ、淀町さまより御上意。
石田　ハア〳〵。
ト居直つてこなし。
常磐　久次公の御身の上落着いたせば、久秋は眞柴の世繼
ぎ。御世を祝せし一奏で、朽ちても朽ちぬは岩舟を、石
田どのへのお望みでござります。
みど　成る程、淀町さまをお見立て申し、祝儀の御能。畏
まりましてござります。
常磐　承知の上は、ソレ、囃子方。
内方　ハア〳〵。
ト内にて直ぐに地謡にかゝる。常磐木、奥へ入る。
〽我れは又下界に住んで、神を敬ひ君を守る、秋津島根
の龍神たり、
ト物のうちに櫻、一枝ぽつきと折れて庭へ落ちる。石
田の局、窺ひながらこれを見て、ぎつくりと立ちとま
り、キッとなつて
石田　風も吹かぬに櫻の枝の、おのれと折れしは。
ト きつと目を附けると、内にて常磐木

常磐　石田どの、お能が切れます〳〵。
ト云ふに又局立ち上がり
〽八大龍王は海上に飛行し、御舟の綱手を手に繰りから
巻き、汐に引かれ浪に乘つて
ト舞のうちに櫻の元より、パッと煙り、梢へ狼火上が
ると、遠攻め打つ。石田の局、四方をキッと見て
石田　ハテ心得ぬ鉦太鼓。
ト櫻の折れしを見て
深山木のその梢とは見えざりし、櫻は茲に顯れにけり…
…さては、
ト向うをキッと見ると、バタ〳〵にて早瀬、數ケ所の
手疵を負ひ、拔身を持ち、よろぼひながら走り出てこ
ける。
ヤア、娘早瀬、この體は。
早瀬　申し母様、久次さまを高野へお供とは僞はり、三條
河原へ行くを合圖に、久次さまを輿より出し、却つてわ
たしら二人を擒にする樣子。所へ松ケ枝さまのお顔世諸と
も、早打ちを以つて妹が身の上。明智さまの息女と聞く
と共に、縄を掛けんと致しますゆゑ、支へましたれば、
コレこの通りの手疵を負はせ、皐月さまを擒に致しまし

たわいなア。
ト聞いて局、キッとしたるこなし。
申し母樣、お前の目を忍び、伴作さまと云ひ交しましたれど、明智が餘類とあれば、所詮添はれぬとの事。それでわたしや此やうに、手を負うたを幸ひに、死んで未來で夫婦の契りを待ちまする。先立つ不孝はお免しなされて下さりませ。おさらば。
ト拔身を咽喉へ突き込み死ぬる。石田の局、これを構はず、いろ／＼こなしあつて
石田　すりや久次が放埓は、我れ／＼主從が身の上を探らん爲であつたか。ホイ。
ト大きに仰天のこなし。この時、臆病口より、常磐木みどり、橋がゝりより、松ケ枝、きのぢ、顏世、紅絹の鉢卷、襷にて、銘々長刀持つて出て
松枝　ヤア／＼石田、其方に身方と見せ、今日まで附き添ひしところ、最早瀧川を明智の娘と名乘りし上は
みど　全く其方も四王天が妻と、大事を明かすも天命と云ふもの。
常磐　わざと戀の意趣と見せて、文を證據に早瀬瀧川を責苛にかけさせたも、其方の本意を見出さうばかり。

顏世　最早遁がれぬ四王天が妻石田。
きの　尋常に繩にかゝるか。
松枝　但し搦め捕らうか。
みど　サア、返答は
五人　なんと／＼。
ト長刀を構へ詰め寄る。
石田　さては其方達が訴人いたしたよな。云はゞ皐月さまの仇、娘の敵、一々助け置かぬ。覺悟せい。
ト早瀬が死骸の拔身を取つて構へる。
五人　さう云ふ其方を。
ト五人、長刀にてかゝる。局、拔身にて、タテよろしくありて、トゞ皆々を橋がゝりへ追ひ込み、キッとなる。
石田　一時も早う皐月さまを。
ト行きかけるを
久次　ヤア／＼石田、眞柴久次これにあり。暫らく待て。
ト局、ツカ／＼と本舞臺へ戻ると、奥より久次、後より皆々、橋がゝりより高景、伴作、權平、山三、官兵衞、又藏、右市、才藏、皆々凜々しき形にて走り出て局に詰めかける。

ヤア石田、其方明智四王天が仇を報ぜんと入込みしは、女ながら只者ならず、何卒汝が企みを見顯はし、瓢の旗を取返さんと、わざと淀どのゝ取立てにて、局頭と重き役目を申しつけしも、事を探る一つの手段。明智光秀山崎の戰ひの砌り、兜の內に籠めたる閻浮檀金の觀世音・光秀最期の節、皆暮れなし。察するに明智が娘皐月とやらんに、筐に讓りしと察せしゆゑ、戀に事寄せ瀧川が、肌の守りを改めんとすれば、久次を寄せつけぬは正しく明智が娘に相違ない。まつた諸大名の妻女に申し含め、疾より汝に心を合させ置きしゆゑ、今日只今明智の餘類、旗の盜賊、又は瀧川を光秀が娘と、其方が物語りしも、天命のなす所ぢやぞよ。

高景　久次公の御身持ち、御放埒の越度にて、高野山にて御出家に、なさしめんと云ひしも僞り。

伴作　勿體なくも我れ〳〵、久次公に敵對仕ると見せ、拵へ置きたる牢輿にて、この聚樂の御所を遂り出せしは其方に心をゆるさせん爲。これ皆其方が本心を見出し、瀧川が素性、光秀が娘と、其方に白狀させんと、久次公・淀町さまの御計略。

山三　久吉公の內意を請け、肥前名護屋より上りしは、汝が討手。

才藏　輿舁きと見せしは笹野才藏。

又藏　三浦又藏。

官兵　渡邊官兵衛。

右市　桂右市。

浮舟　我れ〳〵も久次公の、お妾と云ひしは僞はり。

小蝶　誠は久次公へ西國より、御下知に隨ふ印。

東雲　三十餘人は三十三が國の諸大名。

初音　二心なき誓ひの爲。

臺　お妾と云ひしは。

皆々　皆人質。

久次　明智柴田の殘黨、未だ爰彼處に徘徊する由。さるに依つて、父久吉都を明け、異國征伐に赴きしも、彼の殘黨を誘き寄せん御計略。久次が放埒惰弱も、其方を見出さん計り事。主を討つたる逆賊の明智が餘類。なんと天命、思ひ知つたか。

石田　女ながらも四王天が妻、お主の仇敵。久吉が代り、久次、其方を。

ト能舞臺へ上がり、久次へ切つてかゝる。少々立廻りありて見得よくとまると、二階の內にて



三世中村歌右衛門の石田の局



中村よしほの淀町御前

淀町　ヤア〳〵石田、早まるな。

石田　なんと。

ト二階の御簾さら〳〵と卷き上がると、淀町、側に瀧川居る。局見て

ヤア、皐月さまは、御無事でござりましたかいなう。

淀町　ヤア、粗忽なり石田。これなるは瀧川と云ふ淀町が腰元。誠明智が娘と云ふは、ソレ、その早瀬、親の惡事を頼み、相果てしは天晴れ。高景、その早瀬が首討つて逆賊の餘類討ち取りしと、禁廷へ申し上げてよからう。

高景　ハッ。委細承知仕つてござります。

ト早瀬が首を討つ。石田の局が前に置く。

淀町　この瀧川は先達て、禁廷より采女の司に差し上げよとの勅諚。自らが娘となし差し上げなば、身の上に氣遣ひ少しもない。なんとこれでも瓢の旗を隱し、眞柴家に敵對するか、石田の局。

久次　但し、瀧川も共に逆賊の、餘類なりと首を討たうか。

淀町　サア、石田、速やかに旗を渡すか。

久次　返答は

淀町　なんと。

ト兩方より詰めかけて云ふ。石田の局、持つたる拔身を腹へ突き立てる。瀧川、驚ろき、走り出て、石田に取りつき泣く。

石田　斯程に心深き眞柴の家、滅亡させんと計りしは、石田が誤まり。コレ、皐月さま。ではない、瀧川どの、必らず〳〵眞柴の恩をお忘れなされなや。サア久次公、アノお果てなされた皐月さまの首、この石田が首諸とも、禁廷へ奏聞ありて、何卒瀧川さまのお身の上、幾千代めでたう、お頼み申し上げまする。今こそ返す瓢の旗。

ト旗を久次へ渡す。

久次　オヽ、惡に强きは善心の導き。心殘さず成佛いたせ。

ト伴作、切腹せうとする。權平、留める。

權平　こりや何ゆゑの切腹。

伴作　逆賊の餘類とも知らず、早瀬と不義の越度ゆゑ。

トまた切らうとする。

久次　ヤア、その切腹をとゞまつて、紛失の千鳥の香爐、取返して立歸れ。

伴作　すりや、不義の越度を御赦免下され。

久次　一つの功の立つまでは勘當。

伴作　ハツ、併し禁廷よりの御所望の、千鳥の香爐、紛失せし申し譯。

久次　それこそ、三浦常陸が忠死の首を以て、禁廷へ日延べの願ひを立てるも、三浦が死出の一つの功。

伴作　成る程、それで常陸が忠義も立ち、さぞ滿足いたされませう。

久次　大法なれば、權平、大小を取れ。

權平　畏まつてござります。

ト權平、伴作が大小を取る。此うち、淀町、二階より下りて瀧川が手を引き。

淀町　即ち今日最上吉日、自らが直ぐに禁廷へ同道。殘りの者は皆瀧川の附き人。直ぐに大内へ供召され。

皆々　畏まりました。

石田　ア、嬉しや、瀧川さまの御安泰の、樣子を見て相果つれば、迷ひもなし。さぞ冥土の道で、娘が待ち兼ねん。

ト久次、太刀を拔き、石田が後へ座る。瀧川、見て行かうとするを、淀町ヂツと留め、こなしあつて

久次　介錯は、久次が致しくれう。

淀町　供せい。

皆々　ハア、。

ト合ひ方になり、淀町、瀧川を連れ、後より女形皆々名古屋山三郎、高景、權平、伴作、又藏、官兵衛、右市、才藏、向うへ入る。此うち、石田の局、瀧川が後を見送りながら、拔身を引き廻す。皆々向うへ入りし後に、石田の局、がつくりとこなし。好き所にて、久次、石田が首をチヨンと切る。とチヨン〱、返し。

上より淺黄幕切つて落す。能舞臺を隱す。ト又チヨン〱にて、東西より唐門築地突き出す。御所の體なり。替りし靜かな合ひ方になり、向うより、足柄金藏、盜人の形にて、龕燈提灯を持ち、向うより出る。後より、三上の百助、竹瓢箪を提げ出て來る。後より堅田の小雀、葛籠を脊負ひ出る。三人、本舞臺へ來る。此うち、始終合ひ方に本釣り鐘にて、三人舞臺をウソ〱見廻し、小雀、葛籠を下ろす。

百助　足柄よ、小雀よ、もう何時であらうなア。

小雀　今鳴つたは八ツ。聞けば明日は桃の節會とやらで、今夜七ツから公家めらが、參内ひろぐとの噂。

百助　そんなら今一時の間に、やりかけずばなるまい。

金藏　時にお頭の物好き、大内の官女を女房にしたいとは、なんと途方もない思ひ付きぢやないか。

小雀　そりや、その筈がある。聚樂の久次が手廻りの腰元、瀧川と云ふ御妻を、盜んで來いと云はれたに依つて、聚樂の館へ忍び込んだら、その御妻はこの禁廷へ官女になつてうせたに依つて、それで今夜の仕事にするのぢや。

金藏　それで譯が知れた。サア、そろ／＼とやりかけう。

百助　待て／＼。この竹瓢簞で内の樣子を窺はう。

ト築地へ伸び上がり、竹瓢簞を塀越しに差し入れ、ガラ／＼すると唐門を明け、侍ひ烏帽子、裝束のつゆを取りたる侍ひ二人、鐵棒を持つて出て

侍ひ　何者なれば、築地の内へ狼藉いたす。

ト云ひ／＼出て、三人を見て

見苦しい形をして、して其方達は何者ぢや。

三人　盜人ぢや。

侍ひ　ヤア。

三人　喧ましう吐かすと毆るぞよ。

ト銘々金挺子にて叩き廻す。

侍ひ　ソリヤ、盜人ぢや／＼／＼。

ト逃げて入るを、三人して追ひかけ入る。トまた門の内より右の通り侍ひ二人出て、

侍ひ　これはしたり、寅の一天にもならぬうちに、御門を開けて、何方へ參つた事ぢや。

ト云ひ／＼葛籠を見付け

ハテ、心得ぬ。見苦しいこの葛籠。築地の前に捨て置きしは

侍二　何にもせよ、記錄所へ持參いたさう。

侍一　左樣に仕らう。

ト兩人して葛籠を持ち、唐門の内へ入る。と、チョンチョンにて、返し。

舞臺、一面の前側、御簾かけてセリ上がる。この御殿と一面の御殿になり、半簾かけて、棧敷の前、黑塗りの高欄出し、長廊下の見得にて道具納まる。

ト正面の御簾より、世尊寺中納言、花山中將、公家にて出る。橋がゝりより右の侍ひ二人、葛籠を持ち出る。

世尊　ヤア／＼、青侍ひども、何事ぢや。

侍一　斯樣な見苦しき物が、唐門のほとりにござりました

ゆゑ、持參仕つてござります。
世尊　ムウ、これは下々にて用ゆる、藤葛籠とやら云ふ物。ソレ、歌に詠める葛籠あり。など山の形に似たるを讀む。
花山　また驛路の鈴の伊勢にも、さも見事なお葛籠馬よと詠ぜしも、この事であらう。
世尊　何にもせよ、これ置いて、下がれ〱。
侍ひ　ハア。
　ト侍ひ入る。
世尊　なんと中將どの、この葛籠の内こそ床しう存ずる。
花山　成る程、世尊寺どのゝお詞の如く、内や床しう存じまする。
世尊　檢めて見ませうか。
花山　左樣いたしませう。
兩人　ドレ〱。
　ト兩人、葛籠の蓋を取る。ト内より五右衛門、盗人の拵らへにてヌッと出る。兩人は五右衛門が忍びの術にて見えぬこなし。葛籠の内を見て
兩人　こりや、空葛籠。ハテ、替つた物が落ちてあつたなア。

　ト五右衛門、世尊寺が持つたる笏を引ッたくる。ト世尊寺恟りしてそこらを見廻す。五右衛門、取つたる笏にて花山中將の顔をくらはす。花山中將、顔を抱へて飛び退く。
花山　世尊寺どの、何ゆゑ狼藉召さるゝ。
世尊　イヤ、何も狼藉は致さぬてや。
　ト云ふうち、五右衛門、世尊寺の頭を叩く。世尊寺、驚ろき
中將どの、何ゆゑ狼藉
花山　イヤ、私しより其許が。
世尊　ハテサテこなたが。
　トせり合ふ。五右衛門、兩人の顔を笏にて撫で廻し、にこ〱笑うて居る。兩人、顔を撫でられ、氣味の惡さうに顔しかめ
兩人　矢ッ張りてんがう、さつしやるわいの〱。
　トせり合つて橋がゝりへ入る。五右衛門、頷き御簾の内へ入る。ト右の御簾屋體セリ上げる。後の淺黄幕切つて落すと、奥深う御簾かけ、廣々としたる御殿の體。この間毎々に燭臺すさまじく火を灯しあり、五右衛門、靜々御殿へ忍び込むこなし。此うち始終管絃

にて奥より、夕顔・薄、振り袖、白無垢に緋の袴、手に桃の花を持つて、しづ／＼出て來る。五右衛門、二人を見て年恰好さうでないと云ふこなし。此うち、二人は花道へ悉々入る。後より小蝶、浮舟、白無垢に緋の袴、同じく桃の枝を持ち出て來る。五右衛門、二人を引捕へ、懐中へ手を入れ、守を探す心にて、懐中に無いゆゑ突き放す。二人は五右衛門の姿見えぬゆゑ、合點の行かぬこなしにて、兩人顏見合せ、いきつき向うへ入る。これより、東雲、初音、蓬、陽炎、一人づゝ出て來るを、右の通り引ッ捉まへ、守を探す事あつて突き放す。皆々不思議さうなこなしにて、向うへ入る。トゞ後より瀧川、同じく振り袖緋の袴、白無垢、桃の枝を持ち出て來る。五右衛門、瀧川を見て、此奴ぢやと云ふこなしにて、瀧川を引ッ捕へ、懐中へ手を入れ、件の守を出し見る。瀧川、これと取りにかゝるを五右衛門、瀧川にちよつと囁く。エヽ、と驚ろく。また囁き、右の葛籠へ瀧川を入れ、蓋をして連尺をかけ脊中にしつかりと脊負ひ、花道へ行きかゝる。此うち奥御殿より世尊寺中納言、右大辨成忠、左少辨道長、衛門少將、民部宰相、左中辨治吉、その外部屋殘らず皆公家にて、いろ／＼の裝束にて出て花道の葛籠を見付けて、

世尊　アレ／＼、葛籠が宙を、歩くワ／＼。

皆々　ハヽヽヽ。

ト皆々おかしがる。五右衛門、好き所にて、振り返り見て

五右　葛籠負うたがおかしいか。怖い親仁が見えぬか。

ト詰ろこなしにて、向うへノサ／＼入る。

ひやうし幕

三つ目

伏見船場の場
千本松原の場

役名――眞柴お通姫。早川高景。山形軍藏。三二五郎兵衛。三上の百助。馬士、がらんの堂七。同、しかみ九右衛門。同、駄賃取りの權。同、げんこ取りの作。腰元、若葉。同、呉葉。五右衛門女房、お律。同一子、五郎市。八百屋作右衛門。不破伴作。

造り物、平舞臺、向う一面に船宿の門口、八百屋作右衛門、三十石の行燈かけあり、すべて伏見、船乘り場の體。下座の方に少々浪板、上がり場の模樣あるべし。幕の内にて

堂七　マア〳〵、待てと云うたら待ていやい。

權　ヤア、離せ〳〵。勘忍ならぬ〳〵。

トわや〳〵喧嘩の體にて幕明く。上手に駄賃取りの權、手を振り上げ居る。がらんの堂七、留めて居る。下手に作、手を振り上げ居る。しかみ九右衛門、留めて居る。何れも皆々馬士の姿にて、眞中にはさし錢散らしある。

堂七　最前から留めて居るに、なぜ待ちあがらんのぢや。この堂七が顏つぶすのか。

九右　堂七が止めて居るなら、なぜ待たんぞいやい。

堂七　さうぢや。臺詞は後でも出來るわい。

九右　マア〳〵、待ていやい〳〵。

權　堂七、聞いてくれ。あの、げんこ取りのべら坊めが、おれを盜人ぢやとほだきさらすに依つて、料簡がならぬわいなう。コレ、生馬の眼も拔く駄賃馬の權ぢやぞよ。ほてッ腹めが。

作　コリヤ、われが駄賃馬なら、げんごとりの作ぢやわい。强請り食ふものかい。堂七、聞いてくれ。四文のぐれの半、いらむじ吐かしてむさいにさらし、おれがかたになると二裏合つきぢやの、どうしりはわらひのひんしぢやのと、けち入れさらすに依つて、聞かんと云ふが無理でごんすかいなう。

權　あんだらつくせ。せびかゝつて半を立ち、替つて來いと吐かすゆゑ、安目値切つたが、なんでそれが盜人ぢや。

作　おどれ、わかれも渡さず、博奕の法を知りさらさんのか。

權　博奕に法が入るものかい。キヨロ〳〵吐かすと擲るぞよ。

作　イヤ、擲つて見され。

權　猪口才な。

ト兩方より摑みかゝる。堂七、眞中へ入り

堂七　エヽ、おどれ、おれが止めるに聞きさらさんかい。二人ながら高が端下錢の小皿ぢやないかい。一體この濱で喧ましいワ。げんごよ。わりやなんぼ程負けたのぢや。

作　二百八十負けやんした。

堂七　エヽ、うぬもそれ程の目くさり錢で、どうの斯うのと喧ましい。コリヤ、われが駄賃を負うて、親方へ渡す錢がないに依つて、爰に二百ある。これ取つて置け。駄賃馬も駄賃馬ぢや。仲間同志で、きやん〳〵と、こつきが廻るで喧嘩になる。ちと嗜なめ〳〵。

權　オヽイ。

九右　ソリヤ、堂七が挨拶で拔けたぞ。

作　それ〳〵、もう、いじむじなしに又後やらんかい。

堂七　ヤイ、一體わいらも惡い。この乘り場で博奕と云ふ事があるものか。今のうち、直りに立場で一杯やらう。皆來い〳〵。

作　オヽ、さうしやんしよ。權よ、今たん切つたが、蟲に觸つたら料簡せいよ。

權　なんのいやい。堂七が挨拶なら、これからも蟲なしぢやぞよ。

堂七　エヽ、知れた事。ごた〳〵さらさずと、サア、皆來い〳〵。

ト在鄕唄になり、皆々臆病口の方へ入る。橋がゝりより山形軍藏、着付け、野袴、ぶッ裂き羽織にて、家來連れ出る。八百作内より作右衞門出て來る。

作右　お下りぢやござりませぬかな。

軍藏　八百屋作右衞門ぢやないかな。如何にも下りぢやが、今日は眞柴の姫君樣、西國へ嫁入りにつき、この所をお通りとの事ぢやが、さうか。

作右　左やうでござります。所の名殘、迎へ船場御覽になつて、お出でなされませ。併し、お通りには知らせがござります。

軍藏　然らば、お通り拜見いたして歸らう。それまでは、京橋邊に用事もあるから、よい所を八人前、仕切りを置いてくりやれ。

作右　畏まりました。早うお歸りなされませ。

軍藏　オヽ、早く歸る。家來參れ。

ト在鄕唄になり、軍藏、臆病口へ入ると、上手より笹葺きし三十石、船頭、竿をさし出る。

船頭　オヽイ、八百作ぢや。

作右　どなたもお早うござります。

ト船より銘々思ひつきの仕出しにて、舟上がりの事あり

若衆　長兵衞さん、その布團を上げておくれ。

作　箱火鉢、長兵衛さん、上げておくれ。
作右　ハイ〳〵、畏まりました。
ト こんな事ゆる〳〵あつて、八百作内へ入るもあり、直ぐに橋がゝりへ入るもあると、三二五郎兵衛、くりさげの親仁、木綿やつしにて風呂敷を割りがけ、船より上がると、同じく不破伴作も旅姿にて、風呂敷包みを持ち上がる。
五郎　お侍ひ様、危なうござりますぞえ。
伴作　合點でござります……さてマア、船中不思議の御縁で、お近付きになりましてござります。私しは直ぐに參りますれば。これでお別れ申しませう。
五郎　イヤ、私しも御一緒に參りませう。
伴作　左やうならば、御同道いたしませう。
五郎　サア、先づ先へお出でなされませ。
ト五郎兵衛、伴作、橋がかりの方へ行かうとする。
百助　お侍ひ、ちよつとお待ちなされい。
ト船より三上の百助、旅の姿にて、手に風呂敷を提げ出る。
伴作　お呼びになられたは、手前の事でござるかな。
百助　如何にも、おてまへの事ぢや。見れば大小を挾みござるは、御身は武士か侍ひか。よもや侍ひでもあるまい。
ト五郎兵衛、これを聞いて居る。
伴作　ハテ、變つた事をお尋ねなされます。尤も手前は浪人ではござれども、大小を差しますれば、マア、侍ひでござりませうかい。
百助　その侍ひが、なんで武士の魂ひたる、身共が刀を足にかけて、なぜ蹴つた。
伴作　イヤ、拙者は全く
百助　吐かすな。今聞けば浪人者とある。身共は主人持ち。刀を脛にかけられては武士が立たぬ。それへ出い。眞二つにしてくれる。
ト百助、切刄廻す。五郎兵衛、中へ入り止めて
五郎　先づ〳〵お待ちなされませ。只今承はりますれば、あなたの刀を、このお侍ひが、蹴つたとの、お腹立ちは、御尤もでござります。こりや、なんでござります。大勢乘合ひの事でござりますれば、どうで少々づゝは手も觸り、足も觸りがちでござります。ほんの怪我と云ふやうな事で。ナア、お若いの、
伴作　成る程、拙者お刀を蹴りましたとは存じませぬが、

自然觸りましたならば、幾重にも御容赦下さりませう。

五郎　アレ、あのやうにあやまつて居られます。この親仁めが御挨拶いたしませう。御料簡なされて遣はされませ。

百助　黙れ、素町人めが。武士の刀を臑にかけられ、料簡とばかりで濟まうと思ふか。武士と武士の口論に、うぬら如きのうぢ蟲めが知る事でない。すッ込んで居らうてや。

ト五郎兵衛、ムッとして

五郎　イヤ、お侍ひ樣、云はして置けば、あんまりであらうぞや。あの乘合ひで少々づゝは粗相もあらうもの。切ッつはッつになるが笑止さに、挨拶は時の氏神。事なう濟まして進ぜようと思へば、素町人のうぢ蟲のと、云ひやうが悪いと料簡せぬぞや。

百助　うぬ、料簡がならんと云うて、どうひろぐ。茲なひんこ親仁のくたばりそこなひめが、

五郎　もう／＼堪忍がならぬわいなう。

ト立ちかゝる。伴作、留めて

伴作　マア／＼、待つて下され。さう大仰になりましては。

五郎　ハテこなさんは此方へ退いて居やんせ。

ト伴作を突き退け、百助が前へ坐り、肌脱がうとして、風呂敷が邪魔になるゆゑ

これ持つて居て下され。

ト伴作に渡す。伴作、風呂敷と一緒に持つて控へ、氣の毒なるこなし。五郎兵衛、肌脱ぎ

サアお侍ひ。おれも若い時は小喧嘩の一つもして來た男ぢや。侍ひ怖うないぞや。挨拶人の顔なぜ潰した。サア、料簡すればよし、さもないと、この親仁が、其まゝで置かんのぢやぞ。

百助　イヤ、此奴が／＼。もう料簡がならぬ。うぬ、眞二つに。

ト風呂敷を捨て、刀に手をかける。五郎兵衛も立ちかかる。伴作、思はず風呂敷捨てゝ兩人を止める。

伴作　マア／＼、兩方ともに待つて下さりませ。拙者から起りし事なれば、何分お侍ひには手を摺りてお詫び申しませう。幾重にも御料簡下さりませ。また親仁どのも御挨拶の段、忝ない、御禮申す。双方とも、マア／＼、鎭まつて下されいなう。

百助　すりや、何と云ふ。重々不調法ゆゑ、手を摺り詫び

ると云ふのか。

伴作　この通り、両手を突いてお詫び申しまする。

百助　えいワ。武士が手を突いて詫びる事ならば、料簡いたしてくれうか、横合ひより出しやばつた、あの親仁め。

伴作　サヽ、そこを幾重にも、御料簡にあづかりたう存じまする。

百助　料簡のならぬ奴なれども、大切なる御用先だから料簡してくれる。命冥加な蛆蟲め。

ト悪口云ひ〳〵、五郎兵衞の風呂敷と取違へ、八百作の内へ入る。

五郎　イヤ、あんまりたんきりをしやるら。相手なら、ござれい。

トいろ〳〵喚くを伴作、留めて

伴作　ハテ、もう親仁どの、ようござるわいなう。

五郎　イヤサ、如何に若いこなさんぢやとて、云ひたいがいを吐かすゆゑ、若い時のたん氣蟲がグッと差し込んで、ツイ今のやうに云うたればこそ、早う料簡しおつたと云ふものぢや。

伴作　イヤモウ、段々のお世話、忝ない。爰に居て又、喧嘩になれば悪い。參りませうぢやござるまいか。

五郎　さうしませう。イヤ、今の喧嘩で、大事の物の入つてある風呂敷を、こなた様に預け置きました。此方へ下さりませ。

伴作　ほんに、今の紛れに、わしが風呂敷も何處へやら。

トあたりを見て

オヽ、爰に二つながら、あるぞ〳〵。サア、預かつた風呂敷、渡しませう。

ト風呂敷を五郎兵衞に渡す。

五郎　ハイ〳〵、お世話でござりました。

ト風呂敷包みを見て

伴作　この風呂敷は、違うてあるやうな

五郎　オヽ、この風呂敷も違うてある。お前のは、これぢやござりませぬか。

伴作　その風呂敷は、わしがのでござる。ソレ、こなたの風呂敷。

ト風呂敷を取替へる。五郎兵衞見て

五郎　これも、おれがのでないやうなが

ト開き見ろ。内に茶入れの箱出る。

そりやこそ違つた。此方の風呂敷には、親方が死んだゆ

る、大谷さまへ納める骨箱が入つてあるのぢや。コレ、
こんな物が入れてござります。
ト伴作に見せる。伴作、箱を見てから、
伴作　こりやコレ茶入れの箱。もしや尋ねる物ではないか。
何にもせよ。
ト箱の蓋を明けて見る。中には破れた茶入れある。
こりや割れた茶入れ。さうでもなかつたさうな。
ト元の通りにして置く。百助、風呂敷持ち出て
百助　さて面白くもない。貴殿を只今咎め立て致して、腹立ち紛れに風呂敷を取違へ申した。今度は手前からあやまらねばならぬ。不調法千萬な。全く御料簡にあづかりませう。
伴作　これは〳〵御挨拶。粗相はありうち、お詫びには及びませぬ。あなたの風呂敷、これでござりますかな。
百助　如何にも、左やうでござる。この風呂敷を戻し申さう。
ト風呂敷取替へる。
伴作　親仁どの、こなたの風呂敷は、これか、
五郎　オヽ、これでござります。既の事に親方の骨を、迷子にしようとした、
ト受取り
百助　イヤ、念の為なれば改めて。
五郎　ほんに、おれも改めて見よう。
ト五郎兵衛、百助、骨箱と茶入れの箱を改めて
百助　ヤア〳〵。
五郎　サア〳〵。無いワ〳〵。
伴作　どうぞしましたか。
五郎　コレ、この中には門跡さまへ上げる、冥加金廿兩、用心が悪いと思うて、この骨の側へ入れて置いたが、無いわいなう。
百助　お侍ひ、貴殿、この箱明けさつしやつたな。
伴作　成る程、ちつと様子あつて、ちよつと拝見仕りました。
百助　お侍ひ、この茶入れ、なぜ割らつしやつた。
伴作　イヤ、それは拙者が明けぬ先から。
百助　黙らつしやれ。主人のお好みに依つて、わざ〳〵大阪表にて、代金三十兩に需め、立歸つた茶入れ。主人の御目にもかけぬうち、この如く打ち割つては、主人へ申し譯がござらぬ。
五郎　申し〳〵お侍ひ様、この中の金、失くなつたと云う

ては、どうも親方へ云ひ譯が立ちませぬ。どうぞお戻し下さりませいなう。

伴作　その風呂敷は見ての通り、このお侍ひ樣が取違へて、今直ぐに戻したを、見てゐやしやるぢやないかいなう。

五郎　でも、預けたはこなさん。おりや侍ひへ預けもせぬもの、

伴作　申し、お侍ひ樣、お聞きの通り、あの中には

百助　イヤサ、其方の儀は存ぜぬ。此方の茶入れを割らしやれた。元の通りにして返さつしやれ。

伴作　そりや、御無體と申すもの、

百助　何が無體ぢや。然らば何ゆゑ、こなた、箱を明けた。

伴作　イヤ、それは樣子が。

五郎　樣子も何もいらぬ。二十兩戻して下さりませ。

伴作　イヤ、拙者は毛頭存ぜぬ事。

五郎　コレ〳〵、お侍ひ、イヤ侍ひ。なア〳〵と云へば、つけ上がり、知らぬとはどうぢや。この中に二十兩入れてあつた金ぢや。最前貴樣に預けたのぢやないか。いま貴樣から受取つて見れば、中には無いワ。エ、聞えた。こりやなんぢやなア。おのれは船の上を働らく盜人ぢやな。いかめさらしたのぢやな。コリヤ、こんな事で行く親仁ぢやない。キリ〳〵金を出しさらせいやい。

伴作　默り居らう。廿兩や三十兩の金子に、目をかける武士と思ふか。

五郎　そんなら、金を返せいやい。

伴作　サア、その金の入つた風呂敷は、この侍ひが。

百助　然らば茶入れの代金、三十兩、これへ出せ。

伴作　サア、その金は、

五郎　サア、代官所へ引摺つて行かうか。

伴作　サア、それは。

二人　サア。

伴作　サア。

三人　サア〳〵〳〵。

五郎　マア、この大小から、

ト大小取る。これをト伴作さしかゝるを、兩人して打擲する。

皆々　喧嘩ぢや〳〵

ト棒突いて大勢出る。

五郎　エヽ、うぬら、喧ましいわい。いつそ橋へ連れて行

かうかい。
町人　コレ〳〵、今爰へお姫様がお出でなさるゝ。皆内へ入つて居やしやれ〳〵。アレ、もう其處へお出でなさるるわいなう。
五郎　いつそ代官所へ引摺つて行かうかい。
ト五郎兵衛、百助、兩人して件作を引き立て橋がかりの方へ行かうとする。と桐の紋つけたる箱提灯二張り、若黨二人、鋲乘り物、腰元若葉、呉葉、姫にて兩方につき、その外武家、供廻り、後より早川高景、野袴、ぶッ裂き羽織にて附き出る。
若黨　ヤイ〳〵、下がり居らう。
五郎　ハイ〳〵〳〵。
ト後へ戻る。町人、皆々下に居る。
若黨　久吉公の姫君、お通姫さまのお通り先。慮外な奴の。下に居らう〳〵。
件作　ナニ、お通姫さまのお通りとな。
ト逃げようとする。
百助　どつこい。うぬ、逃がしてよいものか。
五郎　さうぢや〳〵。免さつしやりますなえ。
若黨　此奴、騷しい奴等。鎭まり居らぬと許さぬぞ。

ト切刃廻す。
高景　待て〳〵。騷がしい。何事ぢや。
若黨　イヤ、この者どもがお通り先で、口論を云ひ居りますゆゑでござります。
五郎　イヤ、喧嘩でござりませぬ。わたしが金を、此奴が取りましたゆゑ、返せと申して居りますのでござります。
百助　拙者めが持參の茶器、此奴めが打ち割つてしまひましたゆゑの儀でござります。
高景　ハテサテ、それは憎い奴。して、その者は、どれに居るぞ。
五郎　此奴でござりまする。
ト兩人して件作を引き出し、顏見せる。
高景　ヤア、其方は。
件作　こなたは。
高景　コリヤ〳〵、ついぞ見馴れぬ奴。金子を掠め、人の器物を損なふは、ハテ、小癪な奴の、
ト知らぬと云ふこなしあり。此うちに若葉、件作を見て、乘り物の中へ物云ふこなし。中よりも何か云ひつけるこなしあつて、若葉、高景と囁く。

五郎　イヤモウ、大抵恐ろしい奴ぢやござりませぬ。サア、金出し居らぬか。どうぢや。
伴作　成る程、覺えはなけれど、金が欲しくば進ぜうが、何云うても持ち合はさねば、
百助　此奴、死太い奴の。一通りでは出し居るまい。えいワ。五郎兵衞、われも手傳うて、代官所へ引摺つて行てくれ。
五郎　百助さん、それがいつちよい。引摺つて行かんせ。サア、立ちあがれ。
　ト兩人して伴作を引立てる。
高景　コリヤ〱、兩人待て。代官所へ行くに及ばぬ。身共が取裁き致してくれう。
五郎　それは有り難うござりまする。
高景　自體其方達は、何國の者で、どう致したのぢや。仔細を云へ。
百助　拙者は東國の武士でござるが、手前主人、茶を好まれまするゆゑ、大阪表にて代金三十兩にて、茶入れを需め、立歸る登り船のうちに、この者と乘り合せ居りましたるところ
五郎　あのお侍ひの刀を、足にかけたが、それからの喧嘩。私しは親方の骨と金を持つて、大谷さまへ參詣のところ、乘合ひの事なれば、喧嘩の挨拶を致しました。その時、金の入つた風呂敷を、この侍ひに預けました。
伴作　サ、その風呂敷はこの侍ひが、取違へ持つて行きましたゆゑ、取戻して明けて見たれば、茶入れが割れた、金が無いと、いろ〱の難題、
百助　まだ〱吐かす。覺えない者が、風呂敷をなぜ明けた。
伴作　その風呂敷明けたは親仁どの。
五郎　知れた事。預けた風呂敷が違うたゆゑ、明けたのぢや。貴樣の手で失うたりや、貴樣の業ぢやあるまいかい。
伴作　おやと云うて、覺えもない事を、
高景　コリヤ〱待て。聞き屆けた。預かりし風呂敷の中なる金が失せたれば、預かりし者の誤まり。キッと糺明いたし、金子は身共が取替へくれう。
百助　拙者が茶入れの代金三十兩、
五郎　私しのは、二十兩でござります。
高景　すりや、都合五十兩ぢやな。僅かな金子。さりながら、其方達も定めし金を失ひ、難儀であらうな。

百助　御推量下さりませう。
高景　よいワ。その金子は身共が取替へ遣はさう。
二人　それは有り難う存じます。
高景　併しながら、身共は姫君の御供して、西國へ參らねばならぬ。身共が歸るまで、兩人とも相待ち居れ。
二人　ハイ。エヽ。
高景　イヤさ、身共が西國より歸るまで、相待ち居れと云ふ事さ。
五郎　申し〳〵、お侍ひ樣が西國から戻るまで、幾日かゝるやら知れもせぬに、誰れがべん〳〵宿取つて、待つて居るものぞ。こりや、人をきよくるのかいなう。
百助　さうだ。こりや身共を嘲弄召さるゝのか。
高景　すりや、待つ事はならぬとな。
五郎　阿房つくさしやれいなう。
高景　ムゥ、是非に及ばぬ、斯うしやれ。然らばお侍ひの金子は、親仁、其方取替へて置きやれ。また其方の金子はお侍ひ、お身樣、お取替へ下されい。
五郎　面妖な事云ふお侍ひぢやわいなう。その取替へる金があれば、わつぱさつぱは云ひませぬワ。よし又金があるにもせよ、あのお侍ひは東國の人、知りもせぬ人に、金貸してよいものかいなう。
百助　如何にもさうだ。由緒もない町人に、金取り替へる筈がないわい。
高景　ムウ。すりやお身達は、近づきでないか。
五郎　いま喧嘩の挨拶した時より、物云ふのが始めてでござりまするわい。
高景　サア、知らぬ其方どもが、最前聞けば、コリヤ五郎兵衞、手傳うて代官所へ連れて行く、如何にも百助どんそれがよいと、逢ひも見もせぬ兩人が、どうして互ひに名を知り合うて居るぞ。
百助　ヤ、それは。
高景　こな大騙りめが。うぬ、

ト五郎兵衞、百助、蹌ろ。

大勢　エヽ、そんなら此奴等は、騙りでござりまするか。どづけ〳〵。

ト棒振り上げる。

高景　コリヤ〳〵、粗相すな。控へ居れ……うぬ、詮議のある奴めなれども、免してくれる。その取上げた物、あの者へ返し居らう。

ト五郎兵衞、百助、氣味惡さうに大小風呂敷を伴作が

前へ戻す。
さうなくては叶はぬ所ぢや。コリヤ、町人ども、此奴兩人をぼッ拂へ、
大勢 畏まりました。サア、二人ながら立たう。
ト棒で退ひ立てる。
五郎 こりや又強い難ぢや。二十兩入れて置いたに相違はないけれど。
高景 違てあらがふと、名を知り合つた詮議しようか。
五郎 サ、それには及ばぬけれど。
百助 ハテサテもうよい。お身の金子は身が取り替へたらよいぢやないか。
五郎 さうはさうぢやけれど。
ト愚圖々々する。男ども、棒を突き鳴らし
大勢 サア、行かんかいなう。
五郎 エ、喧ましい、行くわいの。なんの名を云はいでもよい事をば云ひながら
ト高景が方を見る。
高景 名を知り合つた詮議しようか。
五郎 いかいお世話ぢや。
大勢 行かぬかいなう。
ト棒を鳴らすを五郎兵衛、百助引ッたくり
二人 喧ましいわい。
ト棒にて男どもを追ひ廻し、臆病口へ入る。
伴作 これは早川高景どの、思ひがけない所にて、御目にかゝりましたなア。
高景 伴作どの、して、千鳥の香爐、詮議の手がかりが相知れませぬか。
伴作 所々方々と尋ねしところ、今に於て相知れませぬゆゑ、東國へ參るところに只今の仕儀して、姫君樣には、西國へお輿入れでござりまするかな。
高景 サア、その儀について、ちと内證の話しもあれば、爰は端近。暫らくあれへ。
伴作 何かは存ぜねども、御用とあれば。
高景 御乘り物擔ぎ込め。伴作、來やれ。
ト唄になり、この一件殘らず八百作の内へ入る。臆病口より百助、五郎兵衛、連れ立ち出て
百助 埒もないものにしてしまうたわいなう。
五郎 何を云はんすやら、こなさんがあはてゝ名を云はんすに依つてぢや、
百助 なんぼう今日はしくじつても、船の中の仕事がある

てや。これ見い。

ト懐より紙入れ、財布、いろ〳〵出して見せる。

五郎　ハテ、素早い。只は返さぬの。

百助　サア、斯う云ふ結構な商賣ぢやゆゑ、おれが仲間へ入らんかと云ふのぢや。

五郎　イヤモウ、今は何になとかきつきたい所ぢや。どうぞ引き廻して教へて下んせ。

百助　隨分と教へてやらう。昨日長町でちよつと見たところが、いがみの人相ゆゑ、今日の玉に遣うたところが、先づ手初めにしくじつた。さうして、われは一體何所の者ぢや。

五郎　おりや河内の石川村で、三二五郎兵衛と云ふ博奕打ちでごんすが、娘の聟めが子忰を捨て、何所へやら行き居つたところに、娘も同じく駈落ちぢや。それから何がこなんでも引ッ捕へてと、大阪へ尋ねて來ても、行く所はなし、長町に行たところへ、こなさんが斯う〳〵ぢやと云はんしたゆゑ、今日の仕議。どうぞこれから仲間へ入れて下んせいの。

百助　オヽ、氣遣ひすな。天晴れの盜人に仕立ててやる。仲間入りの印に今日の仕事、符牒してやらうかい。

五郎　そりや忝ない。先づ商賣に有りついたと云ふものぢや。

ト唄になり、兩人、盜み物を分けて居る。花道よりお律、すつきりとした姿にて、風呂敷包みを持ち、五郎市、前髪に拵らへ、手を引かれ出る。

りつ　もう初夜でもあらうか。大阪へ行く船があると聞いたが。

五市　母さん、此やうに尋ねても、父さんの行くへが知れぬは、ひよつと死なしやんしたと云ふやうな事ではあるまいかいなア。

りつ　エヽ、この子とした事か、そんなに氣にかゝる事、云ふものぢやないわいなう。大阪の方を尋ねて見よう。サア、おぢや〳〵。

ト本舞臺へ來る。

申し、ちよつと物が尋ねたうござります。大阪へ行く船のある所は、何處でござりますえ。

五郎　こなさん船に乘らんすのか。

りつ　左やうでござります。

百助　そりや代物ぢや。手始めにやつて見い。

五郎　コレ女中、船ならばツイ爰ぢや。おれが連れて行つ

て進ぜうかい。
りつ　それは有り難う存じます。
五郎　そんならマア、この風呂敷包み、此方へおこさんせ。
ト風呂敷へ手をかける。
りつ　ア、申し、何なされますぞいなア。
トお律、五郎兵衛、顔見合せ、恟りして
ヤア、お前は
五郎　わりや娘ぢやないか。
りつ　父様か。
ト振り切り逃げうとする。五郎兵衛、捕へ
五郎　ヤイ、待ち居れ。おのれは〳〵、ようも親を捨て、駈落ちひろいだなア。おのれを方々と尋ねて居たのぢやわいやい。
五市　アレ、母様、怖いわいなア。
りつ　大事ない〳〵。ヂッとして居や〳〵。成る程、父様お前の腹立ちは道理でござんすけれど、この子が三つの時、こちの人五右衛門どのは行くへならしやんす。もう戻つて下さんすか〳〵と、一年經ち二年經ち、この子が大きうなるにつき、父様に逢ひたい〳〵とせがむゆゑ、お前に云うては得心さんせぬ事は知れてあるゆゑ、この子を連れて五右衛門どのゝ行くへを尋ねに出たのでござんす。どうぞお前もとも〳〵に、五右衛門どのの行くへを尋ねて下さんせいなア。
五郎　おどれ、それに如才はあらうかい。おのれ五右衛門めを見付けたらば、養ひおこすか、さもなくば、去り状取つて、われをま一度賣つてこまさうと思ふうち、おのれは駈落ちぢや。爰で見付けたこそ幸ひ、この五郎市も京の宮川町へ若衆奉公にやつて、博奕の元値にせにやならん。サア來い。
ト五郎市を引き立てる。
五市　申し祖父様。成る程、どんな奉公でもいたしませう程に、どうぞ一度父様に尋ね逢ふまで、堪忍して下さんせいなア。
りつ　オヽ、よう云やつた。コレ父様、五右衛門どのに廻り合うたら、お前に金は上げませう程に、マア〳〵、それまで待つて下さんせいなア。
五郎　おどれ、いつ逢ふやら知れぬ、五右衛門、べん〳〵と待たれうか。サアうせい。
ト五郎兵衛、兩人を引き立てる。百助止めて

百助　マア〳〵、五郎兵衛待て。いま聞いて居れば、河内の石川村とあるからは、尋ねさんすは、五右衛門どのと云ふのぢやないか。
りつ　ハイ、左やうでござります。
百助　ムウ。そんならこなさんは、お頭のお内儀。お律どんと云ふのぢないか。
りつ　お前は、よう御存じでござりますなア。
百助　知つて居る筈ぢや。おりや五右衛門どのの手下。ぢやない、世話うちの者でござんす。
りつ　そんなら、こちの人の居やんす所を
百助　知つて居るとも。いま五右衛門どのは、京の大佛前で、浦辻十内と云うて、茶の師匠をして居られるわいなう。
りつ　そんなら京に居られますかえ。エ、忝ない。私しが一念で、たうとう在所が知れた。コレ〳〵五郎市、追ッつけ父様に逢はすが、嬉しいか〳〵。
五市　アイ、こんな嬉しい事はござんせんわいなう。
りつ　オヽ、さうあらう〳〵。大人しう育つた其方を見せて、自慢せにゃならぬ。申し父様、行くへが知れたら、わしもこの子も、賣る事はなるまいがな。
五郎　ムウ。そんなら聟の五右衛門は、大佛前に。
百助　居る段ぢやない。今は茶の湯の弟子も大勢ある。ほんの金持ちぢや。
五郎　しめた。それ聞いたので夜が明けたやうな。サヽもう案じるな。これからわれを連れて行て、親が云ひ立て、養ひにして、もらはにゃならん。サア娘、行け行け。
百助　アヽ、コレ〳〵、待たんせ。其やうに女房の親甲斐のと云うたら當が違ふ。頭の内には美しい女子がある。滅多に行つたら、頰ばしられて戻らにゃならんぞや。
りつ　エヽ、そんならこちの人には、女房持つて居やしゃんすかえ。
百助　イヤ〳〵、あながち女房と云ふでもないさうな。マア、妾のやうなものぢや。
りつ　さうして、そりやどんな器量でござんす。
百助　イヤモウ、その美しさと云ふものが、天人をビイドロの中へ入れて見るやうな、日本一番飛切りの美しいものぢや。
りつ　エヽ、其やうに美しいかいなア。父様、美しいといなア〳〵。サア〳〵、大抵の事ぢやないわいなア。

父樣、美しいとなア。どうせうぞいなア〳〵。
五郎　どうと云うて、どうするものでいやい。
五市　母樣、其やうに腹立てずとも、マア、心を鎭めさしやんせいなア。
りつ　これが鎭めて居られうかいなう〳〵。八年この方、女房子を置去りにして、戻らしやんせぬこそ道理。そんな事ぢやもの。エヽ、胴慾ぢやわいなア〳〵。
ト泣く。
わしが又、其まゝで置かうか。
ト駈け出さうとする。五郎兵衞、止めて
五郎　エヽ、コリヤ〳〵待て。なんぼうわれが躍鬼となつても、男の高下ぢや。去るなどと云うたら、どうするぞ。
りつ　エヽ。
トぎつくりする。
五郎　サ、爰が親子ぢやわい。先づおれが先へ逢つて、かけかけでないか脈取つた後で、もしそれに極まらば、そこでわれが中へ入つて、置去りに遭つた恨みを云へ。後にはおれが控へて居れば、われに滅多に引けは取らせぬワ。併し、そのしゆみたれた姿を見せたら、アヽ、五右衞門が愛想づかしさうな事ぢやぞよ。
りつ　ほんに、そこもあるわいなア。そんなら着替へも持つて居れば、この子にも着せ替へ、隨分綺麗にして、その妥づらを見てこまさうわいなア。
五郎　オヽ、それがよい〳〵。併し、それも大佛前の茶店で着替へたがよい。百助どの、先へ行きますぞや。サア娘、孫を連れて、先へ行け〳〵。
りつ　アイ〳〵、なんでも逢うたら、とつかけ〳〵、恨みも云はうし、この子の自慢もしやうし、あれもしやうし、何から云はうやら。
五郎　ハテ喧ましい。云はずと行けいやい。
りつ　こんなアタ嬉しい、腹の立つ事はないわいなう。
ト唄になり、五郎市の手を引き、ぼやき〳〵腹立てながら花道へ、五郎兵衞連れ立ち入る。
百助　ハテ、強い腹の立てやうな。おれならば頭と喧嘩であらう。云はなんだがよかつたもの、
ト臆病口より軍藏出て
軍藏　三上百助、
百助　山形軍藏さま。
軍藏　先達て其方が所へ致せし通り、千鳥の香爐、石川五

右衛門が奪ひ取り、所持いたせし由。忍術を得たる五右衛門なれば、荒立てては手に廻らぬ。其方、折を見合せ奪ひ返してくれなば、侍ひに取立てくれんと約束いたせしが、今に香爐は手に入らんか。

百助　成る程、頭の身の上、訴人したも身が可愛さ。併し同類なれば、香爐を盗み取れば、侍ひに取立てると云ふ、主人の誓紙なくては、彈正さまへ渡した後で、笠の臺の飛んだ跡では無算用。しつかりとした彈正さまの、慥かな證據を見ぬうちは、

軍藏　そりや氣遣ひ致すな。香爐を盗み取りなば、侍ひに取立てると云ふ、主人の誓紙。

ト誓紙を百助に渡す。百助、開き見て懐へ入れ

百助　よし。これ貰うたら落ちついた。折見合せて、盗んで上げませう。

軍藏　また其方に申しつける事がある。お通姫は播磨一ケ國の朱印を持つて毛利へ嫁入り。彼奴奪ひ取れと、この所の馬方どもへ申しつけ置いたれども、心元ない。其方が忠義の手始め。

百助　皆まで云はんすな。素人の物を盗むなら、お茶の子ぢや。ツイ摑んで來て上げませう。

軍藏　然らば、ぬかるな。

百助　心得ました。

ト唄になり、兩人別れて入る。後合ひ方になり、伴作出る。

伴作　斯程に心をつくしても、行くへ知れざる千鳥の香爐。何國を當に詮議もならず。どうしたものであらうなア。

ト思案して居る。お通姫、下女の姿にて伴作に抱きつき、戀しいと云ふこなし。

お通　申し／＼、伴作さま。

ト顏隠し、恥かしさうに云ふ。

伴作　これはしたり、あたりに人はないと思うて居たれば、お女中、なんぞ御用でござるかな。

お通　ハイ、奥にござるお姫様の御用がある。お前を呼んでくれいと云うて。

伴作　姫君樣の御用ならば、追ッつけ參ると、仰せられ下さりませ。

お通　イエ／＼、私しに連れ立つて來てくれいとの事で、サア、お出でなされませいなア。

ト顏隠しながら、伴作が手をチッと握る。

伴作　これはしたり、それへ參ると云ふのに。
　ト振り離す拍子に顏見合す。
ヤア、あなたは姫君樣。ハッ／＼。
　ト飛びしさり、辭儀して、
見ますれば、卑しいお姿で、何ゆゑ爰へお越しなされましたなア。
お通　何ゆゑとは伴作、胴慾ぢやわいなう。其方を見初めいつぞやから、いろ／＼と口說いても、聞入れてたもらぬ。毛利へ輿入れ、覺悟極めて居たけれど、其方の顏を見たゆゑに、急に命も惜しうなり、端下の者と小袖を着替へ、目顏を忍んで拔けて來たも、其方と一緒に行く心。どうぞ心に隨うてたもいなう。
　トこの臺詞のうち、馬子三人、出かけ聞いて居る。
伴作　こは勿體ないお詞。誰れあらう久吉公の姫君、殊さら御緣組みもあれば。
お通　サア、その毛利へ行く事は否。覺悟は極めて居ますぞや。
伴作　それは御無體と申すもの。
お通　コレ、色よい返事をしてたもいなう。
　ト伴作の手を取る。伴作、術ながる。

權　うまいな／＼。据ゑ膳の高成り、駈落ちの相談ぢやな。
作　二人ながら、足弱馬買うてもらふぞや。
九右　おいらも馬買うてもらはうかい。
　ト四人、伴作を取卷く。
伴作　これはしたり、我れ／＼は駈落ちするやうな者ではない。入用にないぞ。
權　云はんすな。今聞けば術妻が、連れてふけつてくれとの頼み。そんな代物乘せるのが、こちらが附け目ぢや。
作　さうぢ／＼。否でも應でも乘せるのぢやぞ。
九右　愚闘々々と云ふなら、鞍に引ッ括つて置いて乘せる。
三人　合點ぢや。サア來い。
　ト三人して伴作、お通姫を引立てる。堂七走り出て、皆を蹴りこかし、兩人を庇ふ。
伴作　こなたは。
堂七　大事のない者ぢや。ヂッとして居やんせ／＼。
三人　アイタヽ。
　ト起き上がり顏顰め

作　ヤア、わりや、がらんの堂七。おいらをなんで

四人　投げたのぢや。

堂七　オヽ、投げたのぢや。おれが大事の旦那衆を、わいらに強請らす事はならんわい。

作　ソリヤ、此奴等、たゝんでしまへ。

二人　合點ぢや。

ト三人、堂七にかゝるを、出たらめの摑み合ひになるゆゑ取り直し、薪ざつぱにて打ち込み來るを引ッたくろ、皆々を叩き廻し、橋がかりへ追ひ込む。

伴作　ア、コレ、もうようござるわい。

堂七　彼奴等、大抵悪い奴等でごんせん。

お通　ほんに、好い所へ其方が來てたもつたなア。其方は誰れぢやぞいなう。

ト堂七、伴作とお通姫の手を取り、上座に直し、下へ下がり

堂七　わたしは久吉さまに、ちつと緣のある、サア、云ふに云はれぬ馬子の身の上。わざと樣子は申し上げませぬ。伴作さま、委細の譯は聞きました。あれ程に思ひ詰めてござるもの、マア、何がなしにお返事をなされませいなう。

お通　よう云うてたもつた。伴作、聞いてたもらぬと、自らは爰で死ぬるぞや。

堂七　アレ、お聞きなされませぬと、死ぬと仰しやりまする。姫君樣を生かさうと殺さうと、お前の心一つでござりますぞえ。

伴作　ぢやと云うて、どうも御返事は

お通　さうぢや。

ト伴作が刀にて死なうとする。

伴作　コレ、早まるまいぞ。

ト留める。堂七も留めて

堂七　ア、コレ、御短氣な。ソレ、ちやつと御返事をなされませいなア。

伴作　でも、御主人の姫君なれば、どうも

堂七　そんなら、御主人の姫君でない時は。

伴作　町人百姓の娘ならば、なんの否と云ひませうぞいの。

お通　そりや、ならぬ事を云うて、矢ッ張りわしを嫌がやるのぢや。放して殺してたもいなう。

堂七　イヤ、死ぬるに及ばぬ。妹、兄が許した。伴作どのと夫婦になれ。

伴作　ヤ、なんと。

　ト堂七、お通姫が御を手にて上げ

堂七　妹お通、ハテ、大きうなつたなア。

お通　そんなら、わが身は。

堂七　久吉さまの御臺様、姫君を御誕生。七夜のうちにお果てなされ、知らしては命が危ないと、高景さまの計らひにて、幸ひ生れたわが身をば、姫君の代りにして、御死骸は此方で葬むり、その御褒美として大枚のお金を頂き、それからの兩替屋。程なう兩親すぎられて、天井抜けの茶屋遊び。身代仕舞うて今この態。妹と云ふ證據は、わが身の臍の緒。天正十三年酉三月三日卯の刻の誕生と、親仁の手にて書いてある。守りの裂れは、茶地の古金襴であらうがな。

　ト お通姫、守り袋を出し

お通　成る程、覺えがござんす。この袋の裂れまで知つて居やしやんすからは、そんならお前は、兄さんかいなア。

　ト取りつき泣く。

堂七　オヽ、兄ぢやわい〳〵。云ふまいと思うたけれど、現在の妹が、死なうと云ふを見捨ては置かれぬゆゑ、斯う打明ける上からは、連れて去んで伴作どのと女夫にする。サア、伴作どの、町人百姓の娘なればとの詞。侍ひが嘘は云はない。これから直ぐに連れて去んで夫婦にする。サア、ごんせ。

　ト兩人の手を取る。伴作、當惑の體にて

伴作　おやと云うて、思ひがけない、姫君の御身の上と云ひ。

堂七　もう四の五の云ふ事はない。サア、ごんせ。

　ト引立てるを、高景、ツカ〳〵と出て、堂七を引き退け、胸打ちにりう〳〵と打ち据ゑる。

お通　ヤア、其方は高景。

高景　他言せまじと我れに神文まで認めながら、姫君の素性明かしたる不屆き者。身動きひろぐと手は見せぬぞ。

堂七　イヤ、高景さま、イヤ、高景どの。尤も云ふまいと神文は書いたれども、現在の妹が死なうと云ふを、兄の身で捨てて置かれうか。嫌がるものを、無理に嫁入らさうとは、こりやなんぢやな。姫附きの貴様ゆゑ、毛利へ嫁入らし、出世がしたさに、死なうと生けうと構はぬのか。そりやこなた、爰が穢い、汚ない。

　ト胸を叩く。

高景　默り居らう。例へ其方が妹にもせよ、今は久吉公の御息女。毛利へ是非とも輿入れさせねばならぬ。

軍藏　イヤ、その輿入れ罷りならぬ。

ト軍藏出て來る。

高景　こなたは。

軍藏　小田彈正さまの家來、山形軍藏。見え隱れに參りしところ、姫が素性聞き屆けた。

高景　お聞きの上は是非に及ばぬ。さりながら、昔は昔、今は今。

軍藏　久吉公も元土民と、主人の恥を表はすのか。この仲立ちは主人彈正。馬子の妹を、緣組みは罷りならん。

堂七　さうでごんす。妹も嫌うて居る事なれば、兄が連れて去んだと云うて下んせ。サア、妹來い。

ト行かうとする。高景、拔打ちに堂七を切り倒す。

伴作　ヤア、これは。

高景　蟻の穴より千丈の堤を崩す不敵者。成敗はこの通り。

ト刀を納める。

軍藏　何はさて措き。筆引出に遣はす播磨一國の朱印。此方へ渡せ。受取らう。

高景　姫君諸とも、毛利へ手渡しせねばならぬ。朱印渡す事はなりませぬ。

お通　達てと云やると、わしや死ぬるぞや。

軍藏　姫が無くば、何者を嫁入らす。

高景　例へ姫君のお越しなくても、朱印を持參して、まツから〳〵と申し開き、お聞入れなき時は、身が切腹する分の事サ。彈正さまの越度には致さぬわサ。

軍藏　面白い。然らば姫が身の上、立歸つて主人へ申し上げる。後日に高景あらがふな。

高景　返答は身が胸にある。

軍藏　しかと詞を番うたぞよ。

ト唄になり、橋がかりへ軍藏入る。伴作、始終俯向いて居る。

伴作　さうぢや。

ト腹切らうとする。高景、お通姫止めて

高景　ヤレ待て。何ゆゑの生害なるぞ。

伴作　よしない拙者があるゆゑに、姫君樣のお輿入れの妨げ。殊さら馬士の妹と、主人の恥を。

ト切らうとする。

高景　ヤレ待て。死ぬるに及ばぬ。堂七大儀。

堂七　もうようござりますか。

ト起きろ。

伴作　すりや、姫君の兄と云うたは。

堂七　高景さまの、お頼みゆゑ、切られて見せたも、皆狂言でござります。

伴作　そんなら矢ッ張り姫君は。

高景　眞實久吉公の御息女。然れども、其許に御心をかけられ、毛利への輿入れあらば、直ぐに自害とあるゆゑ、淀町さまのお心遣ひ、某を密かに招き、何卒姫君が思ふ夫に添はしてくれよと、餘儀なきお頼み。ハッ、畏まり奉ると、お請合ひは申したなれども、如何はせんと案じ煩らひ、爰へ參りしが

堂七　思ひがけないお前様を、お姫様が御覽になり、もう西國への事は嫌ぢやとの、やんちや最中へ、裏から參りかゝつて私しを、高景さまがお呼びになられ

高景　殊さら彈正の家來が、見え隱れに來りし事、知つたるゆゑ、堂七に申しつけ、今の計らひ。

堂七　そこでわれが兄ぢやと云うて、生れ月日を云つたのも、聞いて置いた口移し。勿體ないお姫様を、馬士の妹ぢやと云うたのも

高景　この事彈正に知らせ置かば、姫君こそ卑しき素性と、縁組みを切らん爲。また毛利への申し譯は、播磨一國の朱印を持つて、高景が命に代へてお斷わり申し上げん我が所存。伴作どの、何卒心に染むまいなれども、これも主人のお命を助くる忠義と思ひ、お通さまと御夫婦になつてくりやれ。仔細と云ふはこの通り。

お通　淀町さまのお許しなれば、よもや嫌とは云はれまいがな。

伴作　姫君様のお志し、淀町さまの仰せとあれば、何しに違背いたしませう。

高景　すりや、得心召され下さるか。

伴作　お主の命には替へられませぬ。

堂七　ソリヤ、戀がなつたワ。高景さま、首尾よう參り、さぞお喜びでござりませうなア。

高景　喜びの段ではない。これとても其方が働らいたゆゑ。當座の褒美。ソレ

ト金包み抛り出し遣る。

堂七　こりやお金。エヽ、忝ない。サア、まんが直つて來た。仕合せよしのこの馬士が、妹分のお姫様と、御祝言の三寶荒神。二世かけての通し馬。伴作さまが乘りかけて、どう〳〵〳〵どうもならぬと、早う喜ばして上げま

しなされいなア。
高景　ナニサマ、姫君の御心安め。お杯を。腰元参れ、
若葉　ハッ。
ト若葉、呉葉出る。
高景　ソレ、姫君と伴作どの、お杯を。合點か。
ト兩人を寢させと云ふこなし、
呉葉　畏まりました。
若葉　サア、お姫様、日頃のお願ひの通り
呉葉　伴作さまを連れ立て、ちやつと奥へ
二人　お出でなされませいなア。
お通　そんなら伴作。サアおぢや。
ト手を取る。
伴作　先づ／＼お先へ、
高景　ハテ、遠慮はない事。
堂七　エ、、斟酌せずと、ござりませいなア。
ト唄になり、お通姫、伴作が手を引き、腰元連れ入る。高景、脇目して居る。堂七と顔見合はせ、咳拂ひし入る。堂七、後見送り
堂七　ハテ、巧い事ぢやなア。イヤ、先づ久し振りでお金の顔を見た。いつ見ても／＼にこやかなお顔。イヤ、くつ／＼／＼。
ト金に戯れ居ると、馬士三人出て
三人　堂七、首尾は。
堂七　コリヤ。
トあたり見廻し
まぶぢや／＼。
作　軍蔵さまに、姫朱印ともに盗んでやらうと受合ひながら、また高景に頼まれた、われが心は。
堂七　サイヤイ。一應ではゆかぬ高景。彼奴が頼みを幸ひに、ちよつと立役と見知らしたも、心を許させ、してやる工面。
作　して、われが工面と云ふは。
堂七　わいらは淀堤の千本松に待ち伏せして、乗り物目當に供の奴等を切りまくれ。是非とも高景めが、どす拔いて、わいらをば追ひかけるワ。後へ、廻つて何もかも、おれがせしめる。
權　これはけうとい。えらい軍師ぢや。
堂七　サア、さう巧う行けばよいが。わいらはコリヤ。
ト三人に囁く。
三人　合點ぢや。

堂七　行け、

ト三人、橋がかりへ入る。堂七は臆病口へ入る。中より乘り物舁かせ、前の供廻り連れて、高景、伴作出る。

伴作　然らば高景どの、萬事は重ねて。

高景　いま奥にて申せし通り、姫君は淀町御前の御殿に忍ばせ置き、隨分寶詮議仕出して、歸京の吉左右待つて居るぞや。

伴作　左やうならば、姫君樣、

ト高景、乘り物の戸をさし

高景　お乘り物參り。

ト唄になり、皆々橋がかりへ入る。伴作、見送り居る

百助、臆病口より走り出て

百助　すりや、姫君は淀の館へ。こちらが近道。さうぢや、

ト行かうとする。伴作、百助を引き止めて

伴作　待て。合點のゆかぬ今の詞。先づ其方は。

百助　何者であらうと、わいらが知つた事ぢやない。

ト引き退け行かうとする。

伴作　待て。

ト立廻りのうち、百助誓紙を落す事あり、ト、伴作をちよつと當て、向うへ走り入る。

うぬ、曲者。

ト行かうとして、誓紙を開き見て、

石川五右衞門奪ひ取り所持いたし候ふ千鳥の香爐を盜み出すに於ては、新地五百石に取立て申すべく候ふ、宛名は三上の百助、小田彈正。ムウ。さては千鳥の香爐の盜賊は、石川五右衞門と云ふ奴。住所は知れねど、好い手がかり。今の曲者。さうぢや。

ト狀を口に咥へ、花道へ走り入ると、　チヨン〳〵返し

造り物、高土手、一面の黒幕に松原、舞臺の前、波板。淀堤、千本松の體。と本釣り鐘にて馬子三人、頰かむりに大刀差し出て囁き合ふ。松原へ隱れる。橋がゝりより前の乘り物、供廻り、高景、後より附き出る。三人の馬士、バラ〳〵と出て提灯切り落す。供廻りを切りまくる。皆々逃げて入る。高景、乘り物を庇うて

高景　何者なるぞ。狼藉者め

權　ソリヤ。
ト三人、高景に切つてかゝるを、高景、臆病口へ立廻りあつて追つて入る。お通姫、乘り物より朱印を持ち出て
お通　コレ高景、早う戻つてたもいなう。
トうろ〳〵して居ると、百助、橋がかりより走り出て、お通姫に行き當り、透かし見て
百助　ヤア、こりやお通姫か。
お通　アレエ。
ト逃げようとするを百助捕へ
百助　こりやしめた。おのれをせしめうと思うて、近道を來たのぢや。サア、うせう。
ト引き立てる所へ、堂七、提灯を持ち走り出て、百助を引き退け、ポンと蹴る。
お通　ヤア、其方は。
堂七　私しが參りますからは、もう氣遣ひはござりませぬ。して、朱印は持つてござりますか。
お通　大事にかけて、持つて居るわいなう。
堂七　よし〳〵。お前が持つて居ると危ない。おれに預けて置かしやりませい。
ト提灯を下に置き、朱印を取りにかゝる。
お通　ア、コレ、それを、
ト云ふを引きつけ、朱印を引ツたくり、懷へ入れる。軍藏、松蔭より出て
軍藏　堂七、首尾は。
堂七　ソレ、約束の姫ぢや。
ト突きやる。
軍藏　出かした。朱印は
堂七　おれが持つて居る。一緒にこれから。
二人　サア來い。
ト兩人して姫を引き立て行かうとする。高景、走り出て、堂七を取つて投げ、軍藏と顏見合す。
軍藏　ヤア、うぬは高景め。
ト軍藏、高景に切つてかゝるを、立廻りあると、姫の手を引き軍藏を橋がかりへ追つて入ると、この見得にて合ひ方になり、堂七、起き上がり
堂七　ても、えらい目に遭はし居つた。併し、姫は取返されても、朱印は在しますぢや。これさへあれば金儲けぢや。エヽ、忝ない。
ト云ひ〳〵頂く所を百助起き上がり、朱印を掴んで、

百助　この朱印渡せ。
堂七　何さらすのぢや。
百助　此方へおこせ。おれが金にせにやならぬわい。
堂七　猪口才すない。
ト　せり合つて居る所へ、伴作、走り出て百助を見付け
伴作　ヤア、おのれは最前の曲者め。うぬ、
ト　堂七百助が持ち合つて居る中へ切り込む。兩人、手を離して朱印を落す。この時百助、提灯を蹴落し、暗がりになると、下座より船の綱引き四人、土手の中段を綱引いて出る。この間に暗がりのタテ。百助堂七は朱印を探す。伴作は切り廻る。危ふき立廻りあつて、よき時分に、三十石の苫船、下座より出る。この時百助朱印を拾ひ、逃げうとするを堂七、やるまいとして百助を三十石の苫の中へ拋り込む。苫の中より、これはと乘合ひ、ザワ／＼で首出す。伴作は堂七目がけて切り込む刀にて船の綱切り、綱引きはづんて東へ廻つて落ちる。船は一散に後へ戻る。この刀の切尖、前なる石に當つて石火パッと出る。伴作堂七、キッと透かし見る。この途端にて

よろしく幕

四つ目

大佛前妾宅の場
大佛殿耳塚の場

役名――小餅の源五郎。森如軒 實ハ堅田の小雀。家主、太郎兵衞。神主、齋宮。禪門、一山。醫師鯛庵。腰元、おとく。同、おはつ。同、おむつ。丁稚、淸吉。桂官藏。加茂嘉十郎。古田成部。三二五郎兵衞。五右衞門女房、お律。同一子、五郎市。妾、お瀧 實ハ明智皐月姫。辻浦十內 實ハ石川五右衞門。

造り物、西の方、一間、半數寄屋、障子屋體。この次に四疊半の圍ひ、丸へ床の間、本疊を敷き、風爐を直し、釜かけてあり。この續き落間、飛び石、手水鉢。橋がゝり、高塀、竹連子の窓、この窓越しに糸柳あり、塀の前吊り寄せ、用水桶あり、門口の柱に辻浦と云ふ表札。竹暖簾をかけ、すべて大佛前妾宅の體なり。お瀧、上品なる妾の拵らへにて、風

爐前に直り、炭をして居る。平舞臺に、森如軒、角ぬき入れし頭を、醫者に仕直せし拵らへ、黒羽二重の形に差貫、沓をはき、鞠を蹴つて居る。おむつ、おはつ、おとく、上の腰元、下女おりん、丁稚清吉、見て居る。琴唄にて幕明く。

如軒　ありゝゝゝありゝゝゝありゝゝゝ。

ト掛け聲して鞠を蹴る。仕掛けにて鞠上がり下がり幾度もあり。始終不調法なる見得、二三度あつて、トヾおりんの前に蹴やり、ちやつと取る。

これは不調法。御負々々。

むつ　先刻にから見て居れば、落してばかりちやわいなア。

初徳　不器用なお方ぢやわいなア。

りん　さうして、姫御前の前へ鞠を當て、アタ不作法な。

清吉　これは、おりんどのが尤もぢや。如軒さんも鞠をたされますなら、なぜ奧のかゝりへお出でなされませぬ。

如軒　ハテサテ、愚痴な事を云ふわいの。かゝりで鞠を蹴るは人並にする事ぢや。斯う云ふ狹い庭で蹴らねば、巧者と云ふものはないてや。

皆々　それでも、今のやうに。

如軒　サア、さうぢやて。なんぼう名人の如軒でも、百に一度は外しうちぢや。先づ鞠の秘曲にとつては、うつぼ流し、七ツの足に三曲の傳まで、飛鳥井難波の兩家より印可を受けたこの男。所望ならば今一曲、お目にかけうか。

皆々　見たいわいなア。

如軒　ドレ〳〵、お目にかけう。

ト鞠を下に置き、又かゝり

あり〳〵あり〳〵。

トかけ聲して二三度蹴る。よき程にはずみを打つて蹴る。ト鞠、天井へ引ッ込む。如軒、見上げおかしき身振りになる。お瀧、ちよつと見て笑ひ、構はず炭にかかり居る。皆々笑うて

りん　アレ、何處へ飛んだいなア。

清吉　慥か隣の屋根に轉びました。

皆々　オ、笑止。

ト笑ふ。

如軒　コレ〳〵、そりや何を云ふのぢや。今のは虎の子の千里飛びと云ふ鞠の秘曲。即ち虚空を千里行て千里戻る。

ト上を見て

アレ〱、上がるワ〱。ヤア、天人の膝の上にとまつた。アレ〱、天人がなぶり物にして居る。損なうてくれたな。戻せ〱戻せいやい。

トあせる。

清吉　そんなら今の鞠は。

皆々　天まで行たかえ。

如軒　行たとも〱。アレ〱、外の天人めが取り居つた。鈍な事ぢや、戻し居ればよいが。

ト頭を掻き、いろ〱あり、と橋がゝりより、太郎兵衛、家主にて、右の鞠を持ち出て

太郎　瓦を三枚までめぎあがつた。家主は何になるものぢや。

トぼやき〱、ズツと内へ入る。

十内どの、内にござるか。

たき　オヽ、家主様、旦那さまは奥に休んで居られます。マア〱、お上がり下されなア。

太郎　イヤコレ、お妾、あんまり落ちつきしやんな。この鞠が、爰な大屋根から、此方の縁先へ落ちて、瓦が三枚めげる。連翹の枝もぶち折つて、鉢植ゑの躑躅まで微塵になりましたわいなう。

トお瀧、如軒を見て笑ふ。皆々笑止がる。如軒、眞面目になつて

如軒　これは〱、粗相な方。女子どもが鞠を踏んで、あなたのお庭先へ。これは〱。ハヽヽヽ。こりや皆、嗜なめ〱。

清吉　なにを。鞠を飛鳥井流、難波から印可を取つたと、自慢たら〱。

はつ　さうして、天まで上つたのなんのと。

りん　天は天ぢやが、これがほんの、

皆々　有頂天ぢやわいなア。

ト如軒、云ふなとあせる。

太郎　ヤア、そんならおれが内を、さゝほうさにしたは、蹴鞠ぢやの。森如軒、貴様か。

ト如軒、眞面目になる。

イヤ、貴様でも、科人はこの鞠の主ぢや。亭主に一通り云はにやならぬ。奥に居るか。ドレ、行て逢はう。

ト奥へ行くを、お瀧、留めて。

たき　成る程、御尤もでござります。皆手前の不調法。お座敷の損じましたは、皆手前から直させませう程に、モウ〱、御堪忍遊ばされませ。

太郎　なんぢや。瓦の壊れたも、植木の損じたも、元のやうにして戻さう。さうはならぬ。お妾。マア、下に居やしやれ。

ト　お瀧を座らせ、我れも下に居て

自體マア、爰な十内どのが、濟まぬ和郎ぢやわいの。なぜと云はしやれ。先づわしは、この大佛前で表家から裏家をかけて、三四十軒の家持ち。借家の者が家賃と云うては、云ひ合したやうに一軒もおこし居らぬ。そのおこさぬところを今おこせ、サアおこせと、譯かけるが、これ家主のお定まり。所にこの屋敷ぢや。去年の春まで空家であつたを、爰な十内どのがフト、おれが内に來て、この空家を當分座敷借りにしたいとの頼み。そこでおれが座敷借りになさるゝなら、一月三百匁でござると云うたら、早速承知の由で、直ぐに家移りをすると、座敷から庭廻りから、その普請の結構さ。そさまと云ふ美なる妾を取寄せて、普通はさわ山、家賃と云や一貫目程も數を入れて置きながら、來る節季も／＼、寄拂ひに三百匁。如何に氣強いと云うて、そう立派に拂はれては、家主は何になるものぞい。けれう、外の借家どもがおこさねばこそ家主も立つて行く。外の者が家賃を拂うて見やしやれ。金があり餘つて百でも吊らにやならぬわいの。それになんぢや。家主の座敷が損じたと云うて、借家から金出して普請せうとは、さう巧うは乘られぬわいの。なんぢやあらうと亭主に逢うて、せめて一貫目の數なと戻さうと思ふが、おれが無理か。尤もか。お妾、よもや無理ではあるまいがの。

ト　腹立てるこなし。

たき　サア、其やうに仰しやると、どうやら尤ものやうなれど、なんと申してようござりませうやら、とんと合點が參りませぬ。

太郎　ハテサテ、合點は行き過ぎてござるわいの。

ト　如軒、お瀧を退けて、眞中へ出て

如軒　これはお瀧さん、どうぢやぞいな。お家主はまた御料簡が強い。マアおれで見たがよい。家賃を寄拂ひなどと吐かしたら、小判をほうがまちへ打ちつけてこますわいの。

ト　家主の方に行て

ハヽヽヽ、これは／＼、段々御尤もでござります。爰はこの如軒が挨拶。斯う致しませう。挨拶の規模に、彼の一貫目の數の金は、私しが申し請けませう。

太郎　貴樣が受け取つてくれるか。

如軒　それでお腹が癒ずば、お前樣の借家へ、私しが宿替へして參ります。

太郎　幸ひ空家もあれば。

如軒　家賃を拂ふ筈もなし。

太郎　また受取らう筈もなし。

如軒　爰の內からお前へ家賃を持つて行けば。

太郎　それが辛いぢや。

如軒　その金も、おれが取るのぢや。

太郎　オヽ、さうぢや。

如軒　商賣せずに、呑んだり喰つたり、えら奢り。書出しはこなたへ遣るワ。

太郎　幾人來ても錢を拂ふワ。

如軒　博奕の切り錢、入用次第取りにやるワ。

太郎　何十貫目でも、持ち出す／＼。

如軒　借家の家賃を、家主から此方へ取るワ。

太郎　これ拂ひうちの事なり。

如軒　凡そこれ程に、損かける者はあるまい。

太郎　ない／＼。けうといものぢや。

如軒　堪能したか。去なつしやれ／＼。

太郎　イヤモウ、今のを聞いて、とんと夜が明けたやうな。

如軒　うぢ／＼さつしやると、家賃を拂ふぞや。

太郎　アヽ、滅相な。それ拂うて堪るものか。

如軒　そんなら去なつしやれ。

太郎　去なうとも／＼。

　ト門口へ出て

カウッ。どうやら臺詞が間違うたやうなが。

如軒　これはしたり、まだ去なんのか。

太郎　ハテ、忙しない。去るぬは去ぬるが、ハテ面妖な。

　ト思案しい／＼、橋がゝりへ入る。

如軒　ハヽヽヽ、彼奴、百貫目が九十五匁程足らぬさうな。時に亭主は、まだお目が覺めぬかな。

たき　コレ、其方衆は奥へ行て、旦那どのゝお目が覺めたら知らしてたも。

皆々　畏まりました。

　ト皆々入る。

如軒　先づこの鞠も片付けてしまを。

　ト鞠を箱に入れて

お瀧さん、この間にちよつとナ、どうぢやいなう／＼。

　ト杖を引く。お瀧、振り切る。
たき　エヽ、つッと又かいなア。
　トびんとする。如軒こなしある所へ、橋がゝりより、禪門一山、醫者鋼庵、神主齋宮、各々茶師にて連れ出る。
皆々　お宅にござるかな。
たき　これは、どなたもお越しなされましたか。
皆々　オヽ、御内室、今日は十内主の祥月ぢやに依つて、皆誘ひ合して參つた。
鋼庵　これは如軒主も來てござるか。
齋宮　只今お誘ひに寄りましてござる。
如軒　イヤ、私しは智鍚院に、ちと用事ござつて、それから直ぐに參つた。貴公達はお早いお出でござるな。
鋼庵　されば、御案内の通り、この節世の中物騒。夜に入ると往來を剝ぎ取るとの噂。
一山　何が辻々に番が出來て、町々は立ち番でござる。
齋宮　この頃が身が入つて、宵から剝ぐさうにござる。
一山　そこで夜を更かさぬやうに、早う出かけて參つた。十内主はどれにござるた。
たき　先程より休んで居られましたが、もう起きられる時分。マア、離れ座敷で酒一つ、上がりませ。サア〳〵、お越しなされませ。
三人　イヤ〳〵、御馳走は御無用でござる。
如軒　ハテ、内室の馳走振りぢや。マア、お越しなされ。
三人　然らば御一緒に。
如軒　手前も相伴いたさう。
たき　サア〳〵、お越し遊ばせ。
　ト唄になり、お瀧あたりを片付ける。三人とも必らずお構ひ下さるなと云ふ思ひ入れにて奥へ入る。お瀧も附いて奥へ入る。と後より如軒も、思ひ入れあつて奥へ入ると、向うより五郎兵衞、口幕の形。お律、伊達なる小袖拵へ帶、綿帽子にて、五郎市、これも小袖着替へさせ、手を引き出る。
五郎　娘よ。なんでも妾めを捉まへて、腰強う悋氣せいよ。
りつ　アイ〳〵。そりや合點でござんす。シタガ、主の機嫌がどうあらうと思うて、氣にかゝつてならぬわいなア。
五郎　エヽ、埒の明かぬ。さう云ふ性根ぢやに依つて、置き去りに遣ひくさるわい。きな〳〵思はずと、突ッ込ん

で臺詞せい。サア來い〳〵。
　ト本舞臺へ來て、門口の表札を見て
オヽ、爰ぢや〳〵。
　ト入らうとする。
五郎　申し、母さん、卒爾があつては氣の毒。マア、內方の樣子を尋ねたがようござります。
五郎　イカサマ、こりや孫めが出かし居つた。われが居ては妾の證據が知れぬ。斯うせうわい。わいらは門口に隱れて居い。おれが入つて、てかけか、妾でないか。とつくりと繰り出して、その上で存分云はす程に、合點か合點か。
りつ　申し。とてもなら、主の機嫌を損なはぬやうに、頼むぞえ。
五郎　まだいやい。マア、おれに任して、隱れて居い〳〵。
りつ　合點でござんす。
　ト五郎市を連れ、表の小間寄せへ隱れる。
五郎　頼みましよ〳〵。
　ト表より云ふ。清吉、行燈を持ち出て、門口へ行き
清吉　どなたでござります。
五郎　イヤ、この家の十內どのに用のある者ぢやが、宿に居らるゝかな。
清吉　ハイ、只今旦那は、客來を得て居ります。お家を呼びませうかな。
五郎　なんぢや。內儀。ソリヤそこな〳〵。
　トこちらへ云ふ。お律、出ようとする。
コリヤ、まだ早い〳〵。
　ト抑へる。
イヤ、その內儀にも、逢ひたいものぢや。どちらなりと呼んで下され。
清吉　ハイ〳〵、畏まりました。
　ト入る。お律出て
りつ　どんな器量ぢや。見てこましたいものぢや。
　ト入らうとするを留めて
五郎　ハテサテ、早いわいやい〳〵。おれが逐ぐるまでは、マア〳〵待て、
　ト小間寄せの方へ突きやる。
五右　イヤ〳〵、身が參つて逢はう。
　ト五右衞門、元服、黑羽二重、異樣の拵らへにて、蒔繪の煙草盆提げて出る。
どなたでござる。これへお通りなされ。

五郎　御免下され。ちと十内どのに。
ト云ひ／＼入る。十内を見て
ヤア、五右衛門ぢやないか。
五右　其許は三二五郎兵衛どのでござるか。
五郎　オヽ、五右衛門ぢや／＼。サア／＼、五右衛門ぢやぞ／＼。
ト表の方に行く。お律、五郎市を連れて入らうとする
オツと早い。まだ早いぞ／＼。
ト突きやる。お律、是非なく又隠れる。三二五郎兵衛腕捲りして上の方に行き、胡座かいて座る。
五右　さて／＼、一別以來、懐かしう存じて居つたが、先づ御健勝の體、喜ばしう存ずる。
五郎　コリヤ／＼、五右衛門、納めないやい／＼。マア、第一云はねばならぬ事を云ふワ。
五右　女房律が事でござるかな。
五郎　小しほらしい。名は覺えて居るかい。思へばもう一昔ぢや。娘が奈良の木辻で、女郎奉公勤めて居たを、フトわれに馴染んで、立て金して、女房に持つたワ。親のおれへも相應の養ひ。間もなう娘は懐胎し、五郎市と云ふ子悴をへり出した。それから間もなう女房を置去りにして、國を出てから、梨も礫もあらばこそ。せう事なしに親子とも、おれが方へ引取つた。四五年あたりは喰ひ潰さして置いたが、マア、われが行くへさへ知れたら、娘や孫めが養ひ料も取らうし、又おれへの禮もずつしりあらうと、それ樂しみに、待つても／＼便りがない。娘は堪え兼ね、親子連れで尋ねて出おる。おれも後を慕うて二年この方、尋ねたわいやい／＼。ところに今朝伏見の乘り場で、娘に逢うて、われが行くへは大佛前と、聞くと等しく尋ねて來たのぢや。知れぬこそ道理、わりやお駕を着て、ホウ、結構な普請ぢや。好い居なしぢや。斯うせうわい。今日から爰に居候ふになつて、娘も孫もこの親も、安樂に養はれやう程に、五右衛門、ちつと厄介であらうぞ。
ト腹立ち紛れ、煙草吸ひつけ、皿の方を喰へ、こなしある。お律又そろ／＼出て、門口に聞いて居ると、この時奥よりお瀧出て
たき　旦那どの、これにござりまするか。
ト五右衛門が側へ座り、三二五郎兵衛を見て
これはあなた、ようお出でなされました。

ト三二五郎兵衞、お瀧を見て

五郎　そりやこそな〳〵。

ト表の方へ云ふ。お律こなし。

五右衞門、その女中はなんぢや。何處の和郎ぢや。

五右　妾でござる。なんと美なる者でござらうがの。

五郎　ヤア。

トお律、入らうとするを、三二五郎兵衞、留めて居る。

たき　ほんに、緣と云ふものは、變つたものでござんす。てかけと申しまするも、世間體を繕らふばかり。眞實の女房。友白髮になるまで見捨てはせぬと、主も深切に仰しやるし、又わしも、いとしうて〳〵、寐た間も忘れは致しませぬ。ナア、旦那どの。

ト五右衞門に寄り添ふ。

五郎　なんぢや。いとしい。

ト表の方に向うて

いとしいといやい〳〵。

ト云ふうち、お律、入らうとしたり又出たり、いろいろあつて、この時ズツと入る。綿帽子をとり捨て、抱へ帶をキリ〳〵と、ほどいて捨て、お瀧が側へ行て、仰山に座り、お瀧の顏を尻目にちよつと見て、ピンとする。五右衞門、お律を見て脇目する。五郎市は矢張り表の方に立つて、氣の毒さうにして居る。お瀧、お律が體に驚ろき

たき　オヽ、この女中さま、なんぢやぞいなア。エヽ、聞えた。どうでも氣の狂うたお方ぢやわいなア。

トお律、泣いて

りつ　アイ、氣も狂はひでは。五右衞門どの、八年前わたしを置去りにして、國元を出やしやんしたお前。思ひがけない、都の住居、名も替へて辻浦十内どの。女房の律が尋ねて來うとは、アイ、ちつと思ひがけがござんすまい。

たき　エヽ、そんならあなたは。

ト云ふを、五右衞門抑へて

五右　これサ、瀧、構ふ事はない。默つて居やれ〳〵。

トお瀧こなし。

五郎　イヤ、其方は默つても、此方は默らぬ。娘、後には親が控へて居る。遠慮なしに云うて〳〵、云ひ捲つてやれいやい。

りつ　云はいでわいな〳〵。

ト摺り寄り。お瀧は氣の毒そうに立つて後方へ寄る。

五右衛門どの、聞えませぬ。胴慾ぢやわいなア。二人の仲には、五郎市と云うて、今年十一になる子があるぞえ。

トお瀧こなし。

その五郎市が三つの年、親子を振り捨て、家出さしやんしたお前。女房の手一つで八年の養育。並や大抵の辛苦かと思うて下さんすぞいなア。讀書算用行儀まで、立派に育つた五郎市が顔、否であらうと見てやらんせ。

トひんしょなう云うて表へ行き、五郎市を連れて入る。

五郎市、日頃から焦れて居やつた、父樣ぢやわいなう。

ト五右衛門が側へ、五郎市を座らす。五右衛門ちよつと見て、こなし。

五市　申し父樣。お別れ申しましたは、まだ私しが三歳の年。母樣の御養育で、成人するうちに、段々と智恵も附いて、わしにはなぜ父樣がござらぬと、母樣に尋ねますれば、母樣に、なに仕落ちはなけれども、子仲なしたる女房を振り捨て、家出なされしその日より、いろ〳〵と尋ねても、お行くへは知れず。日頃母樣の仰しやるには、讀書算用精を出して、今にも、父樣に巡り逢うたら、天晴れ母が育て柄ぢやと、譽められるやうにせいとのお詞。それで學問も精を入れ、商賣往來も庭訓も上がつて、この春、在所の氏神樣へ、松竹梅の大文字も上げました。とても浮世に暮らすなら、母樣父樣一緒に暮らしてこそ、浮世に住んだ甲斐もあり。申し父樣、どうぞ在所にお歸りなされて、母樣と、睦まじうお二人へ、お孝行が盡したい。機嫌直して國へ戻つて下さりませ。申し父樣、コレ、拜みまする〳〵わいなう。

ト手を合せ泣いて云ふ。五右衛門、五郎市が顔を見て、ほろりとするこなしあつて

五右　五郎市、ハテ、大人しう成人したなア。

トお律が方へ

律、八年以前別れてより、悴が養育、何かと苦勞にあらう。この五右衛門が所置は、追つて知るゝ事もあらう。先づ今日は悴を連れて歸れ。三二五郎兵衛どの、連れて歸らつしやれ。

りつ　イ、エ、去ぬまいなア。お前の心は知れてござんす。子持ちのわたしはうるさうなつて、新らしい奥樣ナ

トお瀧を尻目にかけ

ほんに〳〵、アタ美しい、奥様づらぢやわいなア。
トひんしよなう云ふ。お瀧、術ながる。五右衛門が袖を引き、様子を云うてくれと云ふこなし。五右衛門これを押へて居る。三二五郎兵衛、煙草のみ居て

五郎　五右衛門、親子とも連れて去ねとは、よう云うた。イヤ、すつぱりとよう云うた。如何にも此まゝで連れて去なう。

ト立つて硯箱を取り、五右衛門の側に置き

サア、一筆書け。

五右　何を書きませう。

五郎　知れた事。去り状書け。

りつ　アヽ、これいなア、父様、そりや何を云ふのぢやぞいなア。

五郎　何を云はうにや。なんぼう置去りに遭うても、表向きの去り状取らねば、後日に口がきかれぬ。五右衛門が譯さへ立てたら、どれぞ京のひんがまりへ奉公にやつて、五年と云ふもの養うて置いた、養ひ料を取らにやならぬ。差出ずと親任せになつて居おれ。五右衛門、どうぢや。書かぬか。去り状が否なら、五年が間の養ひ料をしようかい。

五右　尤も。

トこなしあつて半紙を取上げる。お瀧、留めて、

たき　アヽ、申し、あなたを離別さしましては、どうもわたしが済みませぬわいなア。お律さまの貞心、あの子のお孝行を聞いて、わたしは身も世もあられませぬわいなア。あなたの御得心なさるゝやうに、この身の譯を打明けて。

ト云ふを

五右　ハアテ。

ト顔にて押へる。

たき　マア、云ふに云はれぬこの身の入り譯。申し、お律さま、お子まである仲を引分け、妻よ夫よとお聞きあらば、お腹が立たいでなんとせう。今仰つしやつた恨みの數々、側で聞く身は針の莚。胸に針を刺さるゝ心地にて、泣いてばつかり居りましたわいなア。シタガ、お氣遣ひなされな。親子御ども、どつこへもやりは致しませぬ。申し、十内さま、どうぞお律さまを。

五右　留め置く事、ならぬ〳〵。

たき　それではわたしが。

五右　ハテサテ、其方は身が変でないか。例へ身が留めよ

うとまゝよ。其方が悋氣して去なさねばならぬ筈。おとなしい事に寄る。サア〳〵、退いて居や〳〵。

たき　ハイ。

　ト氣の毒さうに後へ寄る。お律、大泣き。五郎市、脊中を撫り、心遣ひのこなし。五右衛門、さら〳〵と去り狀書いて

五右　律が離緣狀、持つて歸らつしやれ。

五郎　慥かに受取つた。

　トお律の側へ行き

　サア、娘來い。

　トお律を引き立つる。振り切り、五右衛門が側へツカツカと行く。

りつ　五右衛門どの、そんならどうあつても。

五右　去つた女房に詞は交さぬ。伜を連れて、早く歸れ。

　ト素氣なう云ふ。お律こなしあつて

りつ　成る程、さう云ふ心なら去られませう。暇を取りませう。わたしは格別、この五郎市は置いて去ぬぞえ。

五右　なんと。

りつ　ハテ、男の子は男に附くが世間の大法。コレ、五郎市、母樣は去られて去ぬるわいなう。其方は父樣の側へ引ツ付いて居て、お妾さまと寐やしやんす時には、眞中へ入つて、せめて邪魔なとしてたもいなう。

　ト泣いて云ふ。五郎市、うろ〳〵して

五市　母樣、必らず去んで下さるな。申し父樣、母樣がお氣に入らずば、母樣は下女、わたしは丁稚ぢやと思うて、お氣の濟まぬ事あらば、打ちなりと、叩きなりと、わしや打たれても叩かれても、父樣母樣と一緒に居たい。父樣、頼みます。申し、小母樣、詫び事して下さりませ。祖父樣も早まつて下さんな。母樣、去んで下さるな。

　トあちこちして

父樣、頼みまする〳〵わいなう。

　ト五右衛門に取りつき泣く。

五郎　コリヤ、娘が味をやりおつた。妾に遣るに伜があつては邪魔になる。五右衛門、孫は渡したぞよ。サア、娘來い。

　ト引ツ立てる。

五市　母樣、待つて。

　ト取りつくを、三二五郎兵衛、引き退け

五郎　邪魔ひろぐな。サア、キリ〳〵と行け。

　ト引き立て門口へ突き出す。

りつ　もう、これで一生の別れ。
ト後へ戻るを
五郎　ハテ、サテ、うせ居れやい。
りつ　せめて、五郎市をま一度。
五郎　まだいやい。細言吐かさずと、うせ居れ。
ト唄になり、三二五郎兵衛、お律を引き立て橋がゝりへ入る。五郎市、後を追はうとして、五右衛門を見て座り、伸びあがり、お律が後を眺め、いろ／＼して門口の柱に、見すぼらしく俯向く。お瀧、五右衛門に氣兼ねして
たき　長の年月、お律さまの辛抱を、思ひ廻せば身につまされ、おいとしい。どうぞ思ひ直して。
五右　ハテサテ、其方が、なんにも構ふ事はない。イヤ、先程から何かと氣鬱いたしした。瀧、薄茶を一つ立てゝたもれ。
トお瀧、表の方を見て
たき　思ひ廻せば、薄い御縁の。
五右　ヤ。
たき　ドレ、薄茶を上げませうか。
ト内にて口切れの唄になる。

〽白雪の、初雪は木々にありやせん、色のなまりは見る目の癖か、されば、その事今さらに、花の科ぞと知るは初瀬よ、又もよし野の古郷寒く、衣かたしく又おり着て、置きて去なんせ、明日の夜もあるに。
ト唄のうち、お瀧、釜にかゝり、緋袱紗の手前にて薄茶を立てる。橋がゝりよりお律、走り戻り、内に入らうとして、敷居の高いこなしあつて、ためらふ。五郎市は、しく／＼泣いて居る。五右衛門、始終思案の體あつて
五右　コリヤ、五郎市よ。爰へ來い／＼。
五郎　アイ。
ト泣く／＼側へ行く。
五右　兩親ともに因縁とは云ひながら、八年この方手塩にかけた母親と、國に殘して便り音信も、胴慾なこの父と、そちや何れを大切に思ふ。
五郎　アイ、父樣なり母樣なり、どちらに愚かはなけれども、一つ取ろなら母樣に別るゝとも、お前の側に居たいわいなう。
ト五右衛門、胸にぎつくりするこなし。五郎市が顔を手にて上げ、ほろりとして

五右　つれない父を、さほどまでに。

ト　こなしあつて

コリヤ、この父はなア、人に語らぬ大切な望みがある。母やわれがあつては、その望みの邪魔になる。殊に又人間は、幼少からの躾が肝心。母を頼んで、どうぞ有徳の町人か、又は好い商人に奉公して、身の納まりを願ふが肝心。聞分けて、母の所へ、歸れ／＼。

ト　五郎市、しく／＼泣く。

〽そんな別れのその後さへも、まゝの川でも瀬は變れども、花ぞ昔の都のたつみ。

ト　唄のとまりに、お瀧は茶杓持ちながら泣く。お律、思案を極め入らうとするを、五右衛門見て

足踏み致さば、ぶち放すぞ。

ト　お律ぎつくりして控へる。五郎市、見つける。お瀧、表を見てこなしある。

どうぢや、薄茶は。

たき　アイ。

ト　柄杓にかゝる。

〽今朝の寢じめに覺めては、路次の、しほぜの音の呼ぶ子鳥。

ト　唄とまる。合ひ方彈き流し。お瀧、茶碗を緋袱紗に載せ、五右衛門へ出す。五右衛門、取つて一口呑み

五右　なか／＼の手前ぢや。

ト　お瀧、こなしあつて

たき　申し。わたしやちつと、お願ひがござんすわいなア。

五右　改まつた願ひとは。

たき　サア、その願ひとは、日頃から嬰兒が欲しいと思ふ折から、幸ひな好い捨て子。拾うて養子に致したうござんす。

五右　其方が養子に。

たき　アイ。

ト　五右衛門、こなしあつて

五右　ハテ、其方が氣に入つたら、如何やうともしやれ。

たき　エヽ、忝なう存じます。

ト　拜み、五郎市に向ひ

コレ／＼、今日からわしが眞實の子にする程に、さう思うたがよいぞや。

五郎　アイ、それは嬉しうござります。とてもの事に母樣の事も。

たき　ハテ、それもな。
　ト表のお律へかけて
　わたしが呑み込んで居るわいなア。
五右　イヤ、瀧、奥には客來もあれば、伜を連れて、其方
　は奥へ。
たき　ならう事なら、お律さまの。
五右　ハテ、叶はぬ事を。
　トお瀧、こなしあつて
たき　サア、五郎市さん、ござんせ。
　ト唄になり、お瀧、五郎市を連れ奥へ入る。五右衛門、
　こなしあつて、立つて奥へ行かうとする。お律、ツカ
　ツカと入つて、五右衛門が裾を留め泣き入る。
五右　親へ渡した離緣の一札。反古にはなるまい。
りつ　イ、エ、ありや親ぢやない。
五右　なんと。
りつ　わたしが實の父樣は、茶道に名高い、千の利休と云
　ふお人。母樣のお骨納めに、高野へ上つたその時、供に
　連れたあの五郎兵衛、わたしを騙して木辻の廓へ賣り渡
　し、親判ついて金を掠め、辛い悲しい憂き川竹の勤めの
　うちに、お前に馴れ染め、身まゝになる間もなう、塵み

落したあの五郎市。繼母にかけるのが、わたしや悲しい、
口惜しいわいなア。いま子に離れ、片時も生きて居る心
はない。五右衛門どの、さらばでござんす。
　ト剃刀を出し、死なうとするを、五右衛門とめて
五右　待て。
りつ　イヤ／＼、放して死なして下さんせいなア。
五右　死ぬるに及ばぬ。われが願ひを叶へてやらう。
　ト剃刀を取る。
りつ　エ、。
五右　科なき其方を離緣せしは、五右衛門が深い所存。
　ト五右衛門、思ひ入れあつて、側にある緋袱紗を取り
　渡す。
りつ　この袱紗を。
五右　記せし發句は。
りつ　時は今、あめが下しる皐月かな。
五右　妾と云ふも表向き。
りつ　そんなら明智の。
五右　コリヤ。
　ト押へ、こなしあつて
明けて名乘るは時節があらう。

りつ　そんなら、わたしは矢ッ張り。
五右　女房ではない。
りつ　エヽ。
五右　五郎市が爲、一季半季の乳母奉公。
ト　お律こなしあつて
りつ　成る程、お氣に入らぬか知らねども。
五右　それも緣づく。
りつ　五右衛門どの。ではない、旦那樣。
五右　目見得奉公、勤めて見いサ。
ト　唄になり、五右衛門こなしあつて奥へ入る。お律ちよつと思案の思ひ入れあつて、後より入ると、奥より
齋飼　イヤ〱、お暇申さう。
ト　三人出る。後より腰元丁稚、送り出る。
飼庵　怪しからぬ御馳走であつた。
一山　如軒どのは醉はれたゆゑ、泊つて歸らるゝさうな。
齋宮　左やうさうにござる。
むつ　申し、酒の後へ、薄茶を一つ上げませうと、お家が申します。
はつ　マア〱、ようござりますわいなア。
飼庵　イヤ、先刻も申す通り、遅なつては盜賊の用心。

齋宮　剝がれては叶ひませぬ。
ト　云ふうち、淸吉、箱提灯を灯し、門口へ行て居る。
一山　これは淸吉どの、何時もながら御苦勞ぢやな。
淸吉　ハイ〱。
一山　十内主へ、よろしう賴み存ずる。
飼庵　サア〱、お越しなされ。
ト　淸吉、提灯持つて、三人橋がゝりへ入る。
りん　お上もお休みなされたさうな。
とく　おりんどん、表を閉さんせ。
りん　アイ〱。
むつ　わたしらも寐よう。サア、ござんせいなア。
ト　三人入る。おりん、表の戸を閉め、錠を下ろし、行燈の燈心をへして片隅へ直し、こなし。
りん　ア、今宵も一人寐をせうか。
ト　入る。内にて初夜の時太鼓、割り竹鳴る。この音する夜番、太鼓打つて出て向うへ入る。と向うより古田成部、黒の着付け、羽織大小、江戸頭巾にて、家來大勢、十手を腰に差し、隱して提灯を持ち、各々夜廻りの態にて出る。橋がゝりより仕出し、頰被りして、高聲にて淨瑠璃語り出て、成部を見て、ちよつと淨瑠璃

を止め、花道にて摺れ違ふ。後なる家來引ッ提へ、頬被りとる。成部、振り返り見る。

仕出　私しは四條へ醫者を呼びに參ります。

ト家來、成部を見る。成部、苦しうない去なせと顏にてする。

家來　胡亂な奴の。

ト突き飛ばす。仕出し、手拭を拾うて向うへ入る。成部、こなしあつて家來連れ、橋がゝりへ入る。と割り竹、時の太鼓止めて、忍び三重、蟲の音夜の更けし態なり。と向うより小鮒源五郎、半纏黑股引、脚袢、ほくそ頭巾、大刀を差し、盜賊の拵らへにて、火繩を振り出る。窺ひながら本舞臺へ來て、火繩を振り、戸口の表札を見て、それより戸をしやくり、明かぬゆゑ、見廻し、高塀の駒寄せのかきを引き拔き、用水桶を足場にして上がり、枝垂れ櫻をたぐりて櫻の木を傳ひ、内へ忍び込む。家内、奧口を窺ひ、それより行燈を提げ、下舞臺の眞中に胡座かいて座り、燈心を大分にして灯し、火をかき立て、胴亂より大きな煙管を出し、火繩にて煙草吸ひつけ、のんで、金の在所は何處ぢやと、ヂロ／＼見廻して居る。と常の合ひ方になる。と

奧より、お瀧、寢卷の形にて、手燭を持ち出て、源五郎方へ氣のつかぬこなし。門口の際へ行き、こなしあつて

たき　お律さまは、もう去なしやんしたか。神ならぬ身は深い樣子を御存じなう、さぞわしを恨んでござるであらう。そればつかりが氣にかゝつて、わたしや夜の目も合ひませぬわいなア。

ト一人云ふ。源五郎、お瀧をヂロリと見て、構はず煙草のんで居る。お瀧、こなしあつて

思ふ事、叶はねばこそ浮世なれ。この身につまされ、おいとしい事ではある。

ト物思ひの體なり。うか／＼とこちらへ來る。行燈の側に人が居るゆゑ吻りして

たき　アレエ、、、、。

ト飛び退いて慄ふ。源五郎ズッと立つて

源五　顱骨立てるな。

ト側へ來る。

たき　アレ、盜人ぢやわいなア。

ト聲立てる。源五郎、大刀を拔いて目先へ見せる。

アレエ、、、、。

ト身を縮め慄ふ。

源五　分限者と見て來たのぢや。金の置き所を吐かせ。

ト抜身を見せる。

たき　アレエ。

ト慄ふ。

源五　隱骨立てるか。

たき　アイ。

ト身を縮める。

源五　サア、金は何處にある。

たき　サア。

源五　吐かせやい。

たき　サア。

源五　吐かさぬか。

附人　サア／＼。

ト附け廻して、お瀧が胸倉を取り、仰のけに引きこかし、抜身を胸に差しつける。

源五　サア、吐かせ。

ト引きつけながら、お瀧が顔をヂッと見る。とお瀧も下より、源五郎が顔見つめる。

どうやら見たやうた顔ぢやが。

たき　お前もどうやら。

ト源五郎、抜身を捨てゝ引き起し、よく／＼見て

ほんにさうぢや。何時ぞや八幡で、コレ。

ト頭巾を取る。

たき　源五郎さまか。

源五　瀧川どの。

たき　逢ひたかつたわいなア。

ト抱きつき、嬉し泣きに泣く。

源五　聞きや爰は、浪人の妾宅と聞いたが、思ひも寄らぬ、その時の女中。ハテ、變つた所で。

トお瀧を退けて

逢ひましたなう。

トこなし。

たき　成る程、疑はしやんすも道理でござんす。去年の春、八幡で馴れ染め、二世を契りし甲斐もなう、本意ない別れ。近江の瀬田と聞いたばかりに、尋ねても在所は知れず、思ひ暮らし泣き暮らし、死なうと覺悟は極めたれども、この世でま一度巡り逢ふ事もあらうかと、輪廻つたなう長らへて居たればこそ、不思議に今宵巡り逢うたは、結ぶの神の拵へ給。この家に居るもこの姿も、話

せば長い身の入り譯。源五郎さま、疑ひ晴らして下さん
せいなア。
ト思ひ入れにて云ふ。源五郎、こなしあつて
源五　去年逢つたその時は、小間物賣りの源五郎。今夜は盜賊。よからぬ身すぎと、蔑むも恥かしいが、樣子あつて身に過ぎた、大分の金子を溜めねばならぬ身の上。大佛の妾宅は、爰らで名うての豪家と聞いて、なんでも一廉の働らきをと、入つて見れば、思ひがけない去年の女中。それも今は浪人のてかけ。どう思うても、この家には居られぬ。
ト振り切り、拔身を納め、表の方に行かうとする。お瀧、とめて
たき　コレ、まだ疑ひが晴れぬかいなア。
源五　盜人の詮議より、間男の詮議に合うては、互ひの身の上。無駄骨折つて去ぬるのが、今宵の情ぢや。
ト突き退け、又行かうとするを、よろしく留め
たき　イヤ／＼、なんぼうでも去なさぬ／＼。去なしやせぬ。
トしがみつく。
源五　ハテサテ
トいろ／＼あつて引き退ける。お瀧、源五郎が脇差を持つて脇へ退く。
源五　コレ、それは。
ト寄るを、ちやつと隱して
たき　欲しいかえ。
ト源五郎、拜み、此方へくれとあせる。
それ程欲しくば上げやう程に、幸ひ密かな、あの小座敷。ちよつとござんせいなア。
ト源五郎、奧を指さし亭主が見たら惡い、イヤ／＼と云ふこなしして又拜み、脇差くれいと、あせる。お瀧、源五郎を見い／＼、後すさりして圍ひの側へ行き、後ろ手にて障子を明け、内に寢所してあるなり。お瀧、蒲團の上に上がり、源五郎を招く。源五郎、矢張り仕方にて、脇差をくれとあせる。お瀧、脇差を見せる。源五郎、手を請ける。お瀧、差出す。源五郎、取りに行く、その手を取り無理に寢所へ上げ、ひつたりと抱きつく。源五郎術ながる。
源五　これは又迷惑な。
たき　大事ないわいなア。
ト抱きつきながら屛風を引き廻す。と唄になり、橋が

かりより、三二五郎兵衛出て、門の戸をしやくり、明かぬゆゑ、あたりを見て、源五郎が忍び込みしやうにして、櫻の木を傳うて内へ入る。と後より、成部、附いて出て窺うて居る。三二五郎兵衛、あたりを見て、戸口の錠を捻ぢ切り、内より戸を明け、橋がかりを招く。と加藤嘉十郎、代官にて、捕り手大勢つれて出る。成部、脇へ隠れる。と三二五郎兵衛、表へ出て

五郎　お代官様。

嘉十　先刻注進せし通り、相違ないか。

五郎　左やうでござります。この家の浪人、辻浦十内と申すは、お尋ねなさるゝ、石川五右衛門。娘に去り状を取らしたれば、私しとは赤の他人。訴人の褒美を、ずつしりと頂きたう存じまする。

嘉十　その儀は召捕つた上の事。併し、手だれの五右衛門、迂濶にはかゝられまい。

五郎　力量と云ひ、殊に忍術を得て居りますれば、取逃がしては一大事。

嘉十　如何にも。其方は、コリヤ。

ト囁く。

五郎　心得ました。御家來を一人遣はされませ。

ト此うち、嘉十郎、家來一人に囁き

嘉十　我れ／＼は同勢を以て出口を固め、取逃がさぬ用心。五郎兵衛、ぬかるな。

五郎　合點でござります。

ト嘉十郎、捕り手一人殘し、橋がゝりへ入る。二人、内へ入る。三二五郎兵衛、庭の植込みを押し分け、忍べと云ふこなし。捕り手、柴垣より床の下へ入る。三二五郎兵衛、表の戸をさし寄り、ちよつと思案をして頷き、唄になり、ツイと眞中の切り戸へ入る。成部、右の始終にこなしあつて、表の戸を明けて入る。また戸をさし寄せ、奥を見込むこなしあつて、圍ひの襖を明け、忍び込む。右唄のうちなり。直ぐに合ひ方になり、奥より、森如軒、前帯にて、髪に枕紙を當て、寝ぼけし體にて出て、障子を指さし、お瀧が寝所は爰ぢやと云ふこなしにて、夜這ひに行くこなしにて、紙を出して懐ろへ入れ、行燈を片隅へやり、障子屋體の側へ行て

如軒　お瀧さん／＼。もう寝てかえ。

ト耳寄せ、味な顔して。

ハテ、味な音ぢやが、聞えた。おそはれておやさうな。

コレ、そこへ行くぞえ。
ト障子明ける。屏風引き廻しある。
お瀧さん、醉うた顔で泊つたも、お前に逢ひたい下心。今夜と云ふ今夜、日頃の思ひを叶へておくれ。
ト屏風を引き退ける。お瀧、ちやつと起きて行燈を消す。源五郎、蒲團を引つかむろ。如軒、こなしあつて
ヤア、灯を消したか。さては否でもないさうな。ドレドレ。
ト寢所へ入らうとする。お瀧、外へ突き出し、我れも出て
たき　ア丶コレ、惡い／＼、惡いわいなア。
ト源五郎を隱す心。如軒、お瀧が手を持つて連れ出て
如軒　惡い／＼とは、何が惡いぞいなア。
たき　サア、惡いと云うたのは。
トこなしあつて
如軒さま、わたしには十内どのと云ふ旦那どのがあるぞえ。そのわたしを捉へて、なんの彼のと仰しやるは、お前の爲に惡からうと、云ふのぢやわいなア。
如軒　愚かな事の仰せぢやわいなア。斯うなるからは、顯はるゝは覺悟の前。まさかの時は、頭の身の上。ナ、表向きは十内と云ふ浪人。本名は盜賊の張本、石川五右衞門。
ト大きな聲して云ふを
たき　ア丶コレ。
ト源五郎へ氣兼れのこなし。如軒、小聲になり
サア、その手下を働らく堅田の小雀。お前は元、眞柴家の腰元。去年八幡で、小田彈正どのが、お前を騙して引ッ擔げて、退いてくれいと頼まれた、その時から、眞實惚れ込んだに依つて、首尾ようやつたら、なんの彈正へ渡さう。おれが女房にもと、フト舌打ちして居たわいな。所にお前は大内の官女。こいつしまひぢやと思ふ矢先、頭の云はるゝには、瀧川と云ふ官女は、えら美しい首ぢやげな。盜み出して下齒にせうと思ふ。わいらは斯う斯うせいと、三上や、足柄やおれへの云ひつけ。頭の下知なれば否とも云はれず、たうとう引ッかたげで、高ぶけりもする事か、この大佛前で妾宅とは、餘ッぽどパッとした穿鑿。おれも森如軒と名を替へて、晝は藪醫者、夜は盜賊。なりや頭なり、お前なり、わたしなり、あやの拔けた者は一人もない。瀧川どの、お瀧さん、どうぞ叶へておくれいなア。

ト脊中を叩く。お瀧、逃げようとするを、ちやつと捉へ

どつこい〳〵。この上は命づくぢや。頭の身の上。おれぐるめ、首を先へ投げ出すか。胴から下を受取つておくれなか。どうぢやぞいなア〳〵。

トいろ〳〵こなし

たき　わたしや知らぬわいなア。

ト逃げようとするを、向うに立ち塞がり

如軒　否と云や、ばれて出ようか。

トきつと云ふ。

たき　サア、それはなア。

如軒　どうぢやぞいなア〳〵。

ト和らかに云ふ。

たき　サア。

如軒　ばれ出そうか。

たき　サア。

二人　サア〳〵〳〵。

如軒　こりやもういつそ。

ト無理に手を取らうとする。この時、源五郎、奥より出て、如軒を投げ退ける。

如軒　ヤア、われは。

源五　八幡で逢うた堅田の小雀。

如軒　鮒賣りの源五郎。

源五　ハテ、變つた所で

両人　出合つたなア。

如軒　その源五郎が、あの

ト一間を指さし、お瀧と寢て居たかと云ふこなし。

エヽ、忌々しい。

源五　瀧川どの、この家の浪人、十内と云ふは。

トお瀧、云ひ兼ねるこなし。

如軒　オヽ、五右衛門と云ふ盗賊の張本。

源五　ハテナア。

トこなし。

如軒　斯うなつたら、もう自暴ぢや。瀧川、われをかたげて高ぶけりする。サア來い。

トお瀧を捕へる。

源五　さうはさすまい。

如軒　何を猪口才な。

ト武者ぶりつく。この時奥より、五右衛門、一腰差し出かけ、如軒を引き退け、取つて投げる。源五郎、五

右衛門を見て思ひ入れある。
ヤア、頭か。
五右　堅田の小雀、わりや、五右衛門が身の上、訴人するか。
如軒　イヽヤ、なんのマア。
五右　凡そ手下は千人餘り、他言せぬ誓紙を、破る氣ならば勝手にせい。
如軒　コレ〳〵、頭、何を云はるゝぞいの。今のはツイ口が辷つて、てんごうと云ふものぢや。日頃おれが正直な氣質は、よう知つて居やんすぢやないかいの。
五右　すりや、瀧川にざれ言を云うたも。
如軒　色は心の外ぢや。コレ、料簡さんせ〳〵。ハヽヽ。イヤ頭、おりや山科の宿屋へ行て、三上や足柄に、昨夜の符牒をしやんせう。
五右　そりや、大儀ぢや。早う行け。
如軒　オイ〳〵。
　ト源五郎を恨めしさうに見て
源五郎、巧い事したなア。お瀧さん。
　ト源五郎を顔にて敎へ、また五右衛門を顔にて敎へ
云はぬぞえ。なんにも云はぬけれど、エヽ、思へば。
　トお瀧の方へ行かうとして、五右衛門を見て氣を替へ
ドリヤ、宿屋へ行かうか。
　ト思ひ入れあつて、橋がゝりへ入る。合ひ方になり、此うち、源五郎、手を組み、思案してゐる。お瀧、五右衛門を見たり、源五郎を見たり、心遣ひあり、源五郎、思案を極めし體にて、五右衛門が前を、のさ〳〵と通り、表の方へ行かうとする。
五右　盜賊待て。
　トきつと云ふ。お瀧、ハッと思ふこなし。源五郎、立ちとまり、思ひ入れあつて後へ戻り、五右衛門が側に立ちはだかり
源五　石川五右衛門と云ふ盜賊の張本、その隠れ家へ盜賊に入つたも因縁。張本と聞いたら、ちつと此方に詮議もあれど。
　トお瀧が方へこなしあつて
何を云つても今宵の仕儀。無事に歸つて又、改めて近づきにならう。
　トまた行かうとする。
五右　イヤ、其方は歸つても、この方から歸さぬ。性根を据ゑてそれへ出い。

ト源五郎、思ひ入れあつて

源五　妾と不義のお定まり、重ねて置いて四つにせうと、男の意地を立てるのか。

五右　イヤ、盗賊の手下にする。

源五　なんと。

五右　魂ひの据りやう、まんざら素人でもなささうな。石川五右衛門、頭に取つて不足もあるまい。

源五　面白い。盗賊の手下にならう。

五右　得心か。

源五　違はぬ血判。この場の金打。

ト抜きかけ、切らうとする。五右衛門、留めて

五右　コリヤ、何する。

源五　今日向、源五郎が頭と頼めば、手練の程も見ねばならぬ。

ト切つてかゝる。五右衛門、かい潜り、立廻り、源五郎、わざと抜身をとり落す。五右衛門、刀を抜いて切りかける。お瀧とめるを引き退けて、源五郎へ切つて行く。よろしく立廻りて、源五郎へ五右衛門が切り込む刀を留めながらキツと見る。兩人、見得にて

ムウ。鍔はかんとう。身は關打。

ト立廻り。とくと見て

目貫の細工は後藤が龍、疑ひもなく禁庭より、伊勢大神宮へ奉納の一腰。

五右　なんと。

ト源五郎、五右衛門が顔をキツと見て

源五　さては、その節、造營金千兩を盗み取つたも、石川五右衛門、其方であつたか、逢はう／＼と思うて居つたに、ハテ

ト左右へ別れ、五右衛門、刀を構へる。源五郎、落ちたる抜き身を手早く取つて

好い所で逢つたなア。

五右　さては四年以前、伊勢路に於て盗み取つたる、千兩の持ち主は、源五郎、其方であつたよな。

源五　如何にも。元町人の身なれども、武の道を志し、岩木東馬之丞と名乘つて、禁裏、瀧口の武士を勤め、その頃伊勢の御造營奉行となつて赴くところ、道中水口に於て、金子千兩、奉納の太刀諸とも、其方に盗まれ、この詮議を糺さん爲、商人となり盜賊ともなり、種々に心を碎きし年月。今宵思はず巡り合せしは、優曇華の花、盲龜の浮木。御用金は破却すとも、汝が首に刀を添へ、

先知に歸る岩木東馬。遁がれぬ所ぢや、石川五右衞門、尋常に覺悟せい。

トきつと身構へして云ふ。五右衞門、こなしあつて

五右　健氣の若者。望みの如く、我が命をくれたけれども、大望あれば今は叶はぬ。無事に歸らば命は助ける。手向ひせば命がないぞ。

源五　オヽ、討たるゝは互ひの運。引くな五右衞門。

五右　小癪な奴の。

ト源五郎、切つて行く。五右衞門と切り結ぶ。

たき　コレ、待つて下さんせ。

ト支へる。

兩人　面倒な。

ト引き退けて切り結ぶ所へ、奥より、お律、五郎市を連れて出て、この體を見て驚ろき留めて

りつ　こりやマア、何事ぢやぞいなア。

五郎　父樣、待つて下されいなう。

トお律、五右衞門を留める。お瀧、源五郎を留める。二人、左右へ引退ける。と又入り替つて、お瀧も五右衞門を留める。お律、源五郎を留める。その時、顏見合せ、悃り。

源五　ヤア、姉者人か。

りつ　弟ぢやないか。

たき　源五郎さまの

りつ　連れ添ふ女房。

五右　廻り廻つて

たき　夫婦兄弟。

源五　繫がる一家。

りつ　弟。

五右　女房。

たき　源五郎さま。

源五　姉者人。

りつ　思ひも依らぬ

五右　一家の緣で

四人　あつたよなア。

ト各々こなし。五右衞門、拔身を納める。お瀧は見て、落ちつくこなし。お律も落ちつく。

りつ　源五郎、五右衞門どの、心は濟んだ。こなたの刃物も納めたがよいわいなう。

源五　イヽヤ、姉者人の緣あらば、猶以て猶豫はならぬ。

たき　そんなら、どうでも。

源五　町人の源五郎ならば、一家のよしみ、見遁がす事もあるべきが、岩木東馬之丞と云ふ武士の名は、削られぬ。一家は內證、表は盜賊、敵味方。サア、五右衞門、猶豫するは、後れたか。拔き合して勝負〱。

五右　ヤレ、早まるな。云ひ開かす仔細あり。先づ〱。

ト源五郎、おこづくを、お律、留める。此うち五右衞門、縁の根太をあげ、下より千兩箱を取り出し、眞中に置いて、帶せし一腰を取り直し、袖にて拭き清め、右の金箱の上に置いて

伊勢路に於て盜み取りし、千兩は手下へ配分。この金子は兼ねての貯へ。差料の一腰諸とも、岩木東馬が歸參の種。

源五　ヤア、金子を償ひ、この場を助からんとは、卑怯卑怯。

五右　イヤ。卑怯でない。我が本心を語つて聞かさう。

ト合ひ方になり、五右衞門、お瀧が手を取つて上座へやり、眞中へ座り、源五郎、我身を構へ、油斷せぬこなしにて下に居る。お律、心を配りながら、五郎市を連れ座る。五右衞門、こなしあつて

これにましますお瀧どのこそ、先年山崎の戰ひに、無念の最期を遂げ給ふ、惟任日向守光秀どのゝ息女、皐月さま。

源五　ヤア。

ト悄り。

五右　この五右衞門は、加州石川の土民の伜と、思ひ暮らせしこの年月。去春、山崎の麓にて、不思議に手に入る遺書に依つて、初めて知つたるこの身の俗性。五作は養父、實父と云ふは、明智どのゝ家臣、四王天但馬守。石田の局は實の母人。主人の恨みを晴らさんと、これなる皐月さまを娘と呼び、伏見の御所へ入込んで、種々に心を碎かれしが、運命拙なく、久次澄町が手段に依つて、敢へなき自殺と、聞きたる時の我が心外……まだも頼みは皐月さま。澄町が計らひにて、大內の官女となし、寵深き御身の上。しや屈竟の事と思ふより、父が讓りし忍びの極意、葉隱の術を以て、大內へ忍び入る。頃しも彌生櫻花の節會。廊下を歩む數多の官女。それかこれかと尋ねるうち、肌の守り觀世音、さてこそと奪ひ、その場を立退き、手下の者にも實意を語らず、わざと都に住居して、表は盜賊、實は主人のお忘れ形見。最前開けば、源五郎とも譯ある樣子。お律が父は千の利休。これも明

智に恩義の身の上。源五郎、この上は、この五右衞門に合體して、主君の恨みを晴らしてくりやれサ。

ト源五郎、こなしあつて、拔身を納め

源五　誠に、鳩に三枝の禮あらば、烏に反哺の孝あり。忠孝全き本心を開く上は、東馬之丞、武士を捨てゝ元の町人。

五右　むさぼり集めし金銀は、大義を謀る軍用金。運は天なり、なすは人なり。

源五　父、利休どのが恩義を着る、光秀どのゝ家來筋、義理にしがらむ、五右衞門どの。今日より心を一致にして、石川が手下の盜賊、小鮒の源五郎。

五右　善ならば善、惡ならば惡。

瀧律　わたしらとても、それに隨ふ女の操。

源五　ともに繫がる心の金鐵。

五右　出かした〳〵。

トこの時、柴垣の間より、以前の捕り手出て

捕手　さてこそ、光秀が娘。五右衞門も殘黨。先づ、この女を。

トお瀧へかかる。奥より、成部、ズツと出て、捕り手を拔打ちにポンと切る。橋がかりより家來出て扣へる。

瀧律　これは。

源五　ヤア、貴殿は古傍輩、古田成部どの。

成部　岩木東馬之丞、健固で居られたか。

ト五右衞門に向ひ

辻浦十內どの、貴殿と拙者は茶道の朋友。それは內證。先達て紛失なる、伊勢造營の金子千兩。奉納の一腰、預かり主東馬之丞は、その場を立退き、行くへ知れず。改めてこの成部、詮議の役を蒙むるところ、石川五右衞門と云ふ盜賊の張本、都を徘徊。もしや彼れが手筋ならんと忍び〳〵に窺ふところ、存じ寄らざる貴殿の實名。殊には明智の

トこなしあつて

イヤサ、他家の吟味は、この方の構はぬ事。東馬どの。して、紛失の品は手に入つてござるか。

源五　如何にも。やう〳〵手に入り、即ちそれに。

ト成部、立ち寄り、改める事あつて

成部　二品調進の上は、禁裏表の首尾萬端、古田成部に任されてよからう。

源五　役目の越度、償ふ上は、何卒お暇の儀を。

ト成部、こなしあつて

成部　聞き屆けた。勝手に召され。

源五　有り難う存じます。

成部　家來。二品を持參いたせ。

家來　ハア、。

ト一人に一腰渡し、一人に金箱持たせ、抑へさせ、成部、表の方へ行く。

五右　また盜賊の張本たる、身共を見遁がす、役目の越度は如何召さる、。

成部　ハアテ、盜賊の詮議は、それ／＼に役目がある。この成部は役目が違ふ。奉納の一腰、千兩の金子を、受けて歸るが身が役目の表。

律瀧　段々のお情。

成部　イ、ヤ、恩には着せぬ、茶道の懇意。この方は構はねども、果ては遁がれぬ天の網。サア、これも要らざる他門の沙汰……辻浦どの、お別れ申す。供せい。

ト唄になり、成部、こなしあつて、家來に二品を持たせ、向うへ入る。この時早太鼓になる。皆々驚ろく。

と三二五郎兵衞、奥より出て

五郎　五右衞門、われを訴人したは、この三二五郎兵衞。盜人よりは大きな謀叛人の餘類。引ッ縛つて褒美にする。腕廻せ。

ト五右衞門へかゝるを、下へ引き廻す。直ぐに源五郎、三二五郎兵衞と立廻つて當てる。この間に、五右衞門、床の掛け物の內より、千鳥の香爐を出し懷中し、刀掛けの大小を手挾む。バタ／＼にて、如軒、走り出て

如軒　頭々、えらい事ぢやわいの。こなさんの身の上、何もかも顯はれて、捕り手の大勢が、大佛門前に雲霞の如く這つて居る。どし込まぬうち、ふけらんせ／＼。

源五　すりや、八方を圍んだとな。

ト三二五郎兵衞を投げる。お律、五郎市を圍ひ、どうせうとうろたへる。お瀧も、うろ／＼する。

五右　源五郎、皐月さまは其方に預けた。身は忍術を以て闇みを拔ける。時節を待つて桃山へ切つて入る。兩人、ぬかるな。

源五　瀧川どのは、しつかりと預かつた。

りつ　五郎市が事案じずと、怪我せぬやうに。

たき　落ち延びて下さんせいなア。

五郎　申し、父様。

ト取りつく。ちよつとこなしあつて、突き退け

五右　さらば。

ト奥へツイと駈け込む。右の間に、三二五郎兵衞、ソッと起きて、切り戸の内へ逃げ込む。早太鼓忙しく打つ。大勢の足音する。

如軒　あの同勢は。

ト源五郎、顔にて皆々奥へと教へる。お律、五郎市を連れ、お瀧に引き添ひ奥へ入る。如軒も續いて入る。源五郎殘り、身拵らへする。と橋がゝりより桂官藏、加茂嘉十郎、凛々しき捕り手の形にて、組子大勢連れて出て

官嘉　ソリヤ、踏ん込め。

ト込み入らんとする。源五郎、隔てゝ

源五　待つた何れも。拙者は小鮒の源五郎と申す者。五右衞門は聞ゆる大兵。騙し寄つて召捕りませう。何卒捕り方の儀を、御免下されう。

嘉十　イヽヤ、五右衞門は大切の科人。我れ〱が召捕つて手柄にする。

官藏　加勢なさば勝手に致せ。者ども。ソリヤ。

捕手　ハアヽ。

ト込み入るを、源五郎、一々取つて投げ

源五　承知なくば、手向ひ仕るぞ。

嘉官　小癪な奴の。怪しき彼の者。縛し上げい。

ト皆々、源五郎にかゝる。源五郎、拔いて切り捲る。皆々逃げるを追うて入る。如終早太鼓。如軒、お瀧を引ッ立て出て

たき　コレ、どうするのぢやぞいなア。

如軒　斯うなつたら、頭とも仲切りぢや。連れて行て女房にする。サアうせい。

ト引立て、いろ〱ある。源五郎、引返し出て、如軒を取つて投げる。

たき　ヤア、源五郎さま。

如軒　うぬ。

トかゝる。源五郎、切り捲る。お瀧を連れ、如軒を追うて入る。と三二五郎兵衞、五郎市をひん抱へ、出る。お律、附いて出て留め

りつ　コレ、五郎市をどうするのぢや。

五郎　知れた事。五右衞門が人質、桃山の館へ渡すのぢや。

ト行かうとする。

りつ　その子を取られて、五右衞門どのへ、なんと云ひ譯があらうぞいなア。なんぼうでも、渡さぬ〱。

五郎　エヽ、面倒な。

ト立廻る所へ、官藏、嘉十郎、捕り手連れ出て

官藏　三二五郎兵衛。手筈はどうぢや。

五郎　五右衛門は裏道から、大佛山へふけりました。ソレ、子倅ぢや。

ト五郎市を渡す。お律、寄るを、三二五郎兵衛とめる。

嘉十　此奴は人質。五右衛門の大佛山へ。者ども、參れ。

ト五郎市を引抱へ、捕り手を連れ走り入る。お律、其處にある刀を拔いて、切らんとする。よろしく留め

五郎　何ひろぐのぢや。

りつ　おのれがやうな惡人が、ようも／＼あつた事ぢやなア。五右衛門どのへの云ひ譯。おのれを。

五郎　何を猪小才な。

トかい潜り、薪雑把を取つて拔き身を叩き落し、お律を手詰く打ち据ゑる。お律、こける。

これから、五右衛門めぢや。

ト橋がゝりへ走り入る。お律、起きて

りつ　なんぼうでも、五郎市は渡さぬ。何處までも。さうぢや。

ト拔身を構へ、後を慕うて入る。とチヨン／＼返し。

右の道具、東西へ引くと、一面の大佛山の景色。上より櫻の枝、見事に下りろ。と樹木を小楯に、源五郎、お瀧を伴れ、拔身を構へ居る。嘉十郎、捕り手大勢。如軒、三二五郎兵衛、加勢の體にて取卷き居る。始終早太鼓。

源五　寄りやがつたら命がないぞ。

嘉十　光秀が餘類の女、召捕つて、主人小田彈正さまの手柄にする。

如軒　戀の叶はぬ意趣晴らし、何もかも、彈正さまへ注進して、おれが命を助かるのぢや。

五郎　五郎市は人質に渡して、お律はぶちのめして置いたが、大方くたばつたであらう。

如軒　うぬが息の根も止めてしまふ。

皆々　覺悟せい。

源五　預かつた瀧川どの、指でもさすと手は見せぬ。切つて切つて切り捲るぞ。

嘉十　面倒な。ソリヤ。

ト云ふうち、お瀧を木蔭へやり、これより大タテになる。烈しき事段々あつて、如軒、三二五郎兵衛、手を

負ひ、嘉十郎、捕り手、皆々腕を落され、胴切り、梨割りなど、さま〴〵あつて、皆々を切り倒す。木蔭より、お瀧、走り出て

たき　怪我はなかつたかえ。

ト源五郎へしがみつく。死骸を見て慄へ出す。内にて

捕手　五右衛門も大佛門前へ付け出した。麓の方を圍へ圍へ。

大勢　ハア、。

ト聲する。

源五　忍術あらば凶事はあるまい。一先づこの場を。

トお瀧を伴れ、行かうとする。如軒、三二五郎兵衛、起きて

源五　うぬ。

ト三二五郎兵衛は、お瀧を引立てる。如軒は源五郎へかゝる。立廻つて兩人をポン〳〵と切り倒す。

源五　瀧川どの、ござれ。

トお瀧を伴れ、向うへ走り入る。とチョン〳〵返し。この道具引分ける。と淺黄幕、切り落す。と造り物奥深に大佛門前の體。好き所へ耳塚出る。眞中に五右衛門、手を組み、立つて居る。捕り手四人、左右より十手を構へ、また四人、弓張り提灯を持ち、取卷いて居る。始終早太皷。この見得にて、皆々向うへ出て

捕一　南無三、五右衛門を取逃がした。

捕二　たつた今、爰へ付け出した五右衛門が、早風を喰うたさうな。

捕三　イヤ〳〵、忍術を以て晦ましたと見えます。

捕四　このあたりに居るに相違ない。何れも、油斷召さるな。

皆々　合點ぢや〳〵。

ト各々十手を構へ、思はず、五右衛門に行き當る。五右衛門、取つて投げる。殘りの人數、十手を構へる。

皆々　さてこそ。

トこれより皆々、虚空を打つて廻る。五右衛門、一々取つて投げ、いろ〳〵悶むこなし。トゞ拔いて振り廻す。この白刃ばかり見える心にて、皆々、ナ、〳〵と云うて逃げて入る。と五右衛門、一卷を出し、術を戻すこなしあつて、橋がゝりを見やり

五右　ハ、、、、、。

ト嘲笑ふ。木釣り鐘にて七ツを打つ。数を数へて、
ありや大佛の七ツ。
トばた／＼にて橋がゝりより、お律、走り出て、五右衛門を見て

りつ　ヤア、五右衛門どの。コレ、お前に預かつた五郎市を、桃山の館へ、人質に取られましたわいなア。

五右　なんと。

りつ　お前への云ひ譯。

ト死なうとする。

五右　待て。犬死にして功になるか。なぜ桃山の館へ入込み、五郎市を取返さぬ。

りつ　でも、わたしは女子の手業。

ト五右衛門、一卷を出し

五右　それをくれう。

ト拋る。お律、取上げ

りつ　この一卷は。

五右　伊賀流忍術の一卷。

りつ　エヽ。

五右　その秘書を空んじ、忍術を以て桃山へ入込み、五郎市を取返せ。

りつ　すりや、これが忍術の。

五右　必らずぬかるな。

トお律、こなしあつて

りつ　仕負ふせて見せませう。

五右　早う行け。

りつ　アイ。

ト思ひ入れあつて、一卷を持ち、ツイと向うへ走り入る。この時、以前の捕り手、その外大勢出かけ窺ひて、この時、五右衛門が體見えるこなし。

捕手　さてこそ、五右衛門。

トばた／＼と圍ふ。

皆々　動くな。

ト取卷く。五右衛門、こなしあつて、眞中に立つて

五右　なにを。

トきつと見得。よろしく　　幕

五つ目　堺濱邊の場

役名――早川高景。足柄金藏。二見瀬平。富士の

九郎次。魚賣り、權八。宿老、太郎兵衞。三上百助。魚賣り、四郎兵衞。同、團六。髮結ひ、和助。寶萊屋おとく。仲居、おゆき。同、おみき。同、おさき。利休娘、早枝。小餅の源五郎。

造り物、高さ三尺ばかりの石垣、一面に、右は堺、波濤の體。石垣の後ろに浪幕、霞にて浪を見切り、この後、打ちぬきにて麒麟の小屋、見世物の小屋に賣り茶店、商人店、いづれも小さき書割り、小さき提灯、大分吊り、小さき幟り大分立て、すべて波崎砂持ちの景色。奥深く見ゆる體。右前の石垣のよき所に、葭簀圍ひして簾かけ、髮結ひ床あり、この見得にて、輕業の太鼓、淸搔、三味線ちやろめらなど入れ、賑やかな體にて幕明く。

と橋がかりより、宿老五人組、その外町人三人、外に仕出し四五人出る。

五人　なんとお宿老、波濤の砂持ち、賑やかな事ぢやないかいの。

宿老　ソレイナウ、この堺浦へお船が着く、その船入りの勝手のよい、殊に波止めを拵らへさつしやる當所の殿樣。早川高景さまは、三枝の禮儀を敬ふ人ぢやわいの。

皆々　そりや、なぜでござります。

宿老　ハテ、波濤に三枝の禮儀と云ふぢやないか。

皆々　何を云はつしやるやら。

ト云ふうち、髮結ひ床より、和助出て

和助　ホウ、これはお宿老樣。

宿老　和助か。精が出るの。

和助　イヤ、今日は役にさゝれて、爰に店出して居ります。

宿老　そりや、どうして。

和助　今日は爰でお仕置者がござります。また叩き拂ひがござります。その月代を剃るので、店を出して居ります る。

五人　このマア賑かな所で、お仕置者とは、替つた事ぢやの。

宿老　その仕置者は何者ぢやぞ。

和助　ソレ、先度から噂のある、石川五右衞門が手下の、源五郎たら云ふ奴。京の大佛前で捕まつて、爰の殿樣がお預かりで、堺の牢へ入つてあるを、今日爰で、お仕置とやら。また助けるとやら、まち／＼の噂でござります。

宿老　そんなら皆の衆、今日は屋敷へ行ても埒が明かぬ。いつそ爰に待つてゐて、殿様へお願ひ申さうかい。

皆々　オヽ、さうさつしやりませ。

和助　申し。なんのお願ひでござります。

宿老　ハテ、われも知つて居る、瀧川が事ぢや。あれは元、その石川五右衛門が妻で、大佛前で捕まへられたが、女子の事なり、仕置の代り、この乳守の廓へ流し者。

五人　時に、勤めさす事はならず、そこで廓中がお願ひ申して廉敷き子。

宿老　ところに、さるお方が身請けしたいと仰しやるゆゑ、その事を殿様へお伺ひ申すのぢや。

和助　そんならマア、住吉へでも参つて、お出でなされませ。まだ大抵遠い事ぢやござりませぬ。

宿老　イヤ〳〵、今から住吉へ行かれまい。なんと皆の衆、向うの軽業を見て来うかい。

皆々　それがようござりませう。

宿老　和助、後に逢はう。

和助　見てお出でなされませ。

宿老　サア〳〵、皆ござれ〳〵。

ト軽業の囃子になり、宿老、五人組、皆々臆病口へ入る。和助、床へ入ると、向うより貴来屋おとく、結びにて揚屋娘の體。おゆき、おみき、おさき、仲居にて出て来る。後より百助、四郎兵衛、團六、堺縞の襦袢、手甲、脚袢、魚賣りの拵らへにて出て来る。遙か後より權八、同じく堺縞の襦袢、手甲、脚袢、魚賣りの形にて出て見て居る。

百助　コレ、おとくさん、マア待たんせいな。

とく　魚屋の百助どん。ちつと氣の急く程に、用があるなら、内へ来て下さんせ。サア、皆ござんせ。

ト皆々本舞臺へ行く。

團四　ハテマア、待たんせいの〳〵。

ト後より附いて来る。權八も後より来て、ちやつと橋がかりの方へ行き、立つて居る。百助、團六、四郎兵衛、おとくの向うに立つて

百助　イヽヤ、おれが頼んだ事、返事聞かにや爰は通さぬ。

團四　オヽ、おいらがやらぬぞ。

ゆき　申し、おとくさん、返事せにや通さぬと云はしやんすが、お前、なんぞ、頼まれなさんした事があるかいなア。

とく　サイナウ。此方の遣り手おむらに、あの肴屋の百助

さまが、なんの彼のと云はしやんしても、おむらが得心しやらぬに依つて、わしに取持つてくれいと、無理な事ばつかり云はしやんすのぢやわいの。

四郎　オヽ、さうぢや〳〵。額に毛抜きもあてる男が、おむらと云ひ、こなさんにまで、嫌はれては立たぬ〳〵。

百助　おむらが代りに、こなさんを引ッ張つて行て、存分に云はにやならぬ。サア、ごんせ。

ゆき　コレ、百助どん、今日は此方へ抱へた新造さんが、住吉へ詣らしやんした、その迎ひに行く道。悪い事さしやんしたら、きかぬぞえ。

みき　旦那様にさう云うて、此方への出入りを

皆々　留めさすぞえ。

百助　大事ごんせぬ。其方の内へお供した、平の平々さまと云ふお大盡様。おれが引きつけ居りや、滅多に出入りを留める事はならぬ。コリヤ、わいら、邪魔する和郎達を、一人づゝ引ッ張れ〳〵。

四國　オヽ、合點ぢや。

ト三人、皆々へかゝるを、權八、見かねし體にて、ツカ〳〵と行き、三人を毆り飛ばし、眞中に立つ。

百助　ヤイ、新參の二才め、こりやなんぢや。

三人　邪魔さらすのぢやな。

權八　イヤ、邪魔はせぬ。如何にも、おりや新參の魚賣りぢや。今日は魚賣り仲間が云ひ合せて、波止の砂持。わいらはこりや女中を捉へ、ほでてんごう。よしにせい、よしにせい。

百助　イヤ、よしにせまい。かけも構はぬ左平次。

四國　ヤア、それからよしにせい。

權八　イヽヤ、よしにせまい。無法な事さらすが最後、砂持ちの代りに、女中の尻持ち。コレ、お前方は構はずと、行かんせ。

とく　アイ〳〵。そんならこの間に、サア皆、おぢや。

皆々　アイ、忝なうござんすぞえ。

トおとく、皆々橋がゝりへ走り入る。

三人　おのれ、待ち居れ。

ト三人、行かうとするを、權八、引ッ捉へ、ポン〳〵と投げる。

權八　叶ひもせぬ事、さらすなやい。

ト輕業の鳴り物になり、權八、橋がゝりへ入る。後に三人、顔見合せ

團六　なんとマア、あの新參めは、えらい腕前ぢや。

百助　彼奴が堺のほこと云ふのか。
四郎　何を阿房らしい。
ト橋がゝりより、二見、瀬平、飛脚にて出て來る。
瀬平　三上百助どの。
百助　これは小田彈正さまの御家來。二見瀬平どの。
瀬平　主人彈正さまより、この御狀と金子。
ト狀箱と金財布を渡す。
百助　すりや、お金と御狀。コリヤ、そこらあたり頭張れ。
四郎　合點ぢや。
トあたりを見廻すうち、百助、狀を披き
百助　先達て送り越したる朱印。卽ちこの金子は當座の褒美。猶、大望成就の上は、武士に取立て遣はす間、追つての吉左右相待ち申さるべく候ふ……巧いワ〳〵。當座の褒美、慥かに受取りましてござります。
瀬平　然らば拙者はお暇申す。
百助　御苦勞でござります。
瀬平　おさらば。
ト橋がゝりへ入る。この時、權八、摺れ違ひ出る。
四郎　コレ、今の朱印とは、なんでごんす。
ト權八、朱印と聞いてこなしある。

百助　あの朱印と云ふは、久吉の娘、お通姫の化粧料。伏見の乘り場で手まいて、直ぐに小田將監さまと云ふお人に手渡しして、褒美をせしめたのぢや。
ト財布を懷へ入れる。
二人　エヽ、巧い事したなア。
百助　又この狀が樂しみぢやて。
ト云ふうち權八、後より、百助が持ちたる狀を引ッたくる。
權八　朱印の手がゝり。忝ない。
百助　ムウ。朱印を知つたうぬは。
三人　何者ぢや。
權八　うぬらに本名明かさうか。朱印の盜賊、腕廻せ。
三人　さう吐かしや、うぬを。
ト三人、權八にかゝる。これよりまた輕業の鳴り物になり、タテよろしくあつて、トヾ百助、四郎兵衞、團六、橋がゝりへ逃げて入る。權八、實は千石權平、追ひかけ行かうとして、件の一通を出して
權八　彈正が直筆。朱印の手がゝり。忝ない。
ト一通を戴き
さうぢや。

ト向うへ走り入る。臆病口から、五人組、宿老、町人出て來る。と合ひ方になり、橋がゝりより、置き土の九郎次、剃下げ頭の百日鬘を藁にて括り、髭を伸ばし、ひし繩にかけ、牢入りの拵らへ。後より警固侍ひ、黒股引、大小、十手を腰に差し、九郎次が繩を持ち附き出る。後より家來二人、莚と割り竹を持ち附き出る。九郎次を好き所に引据ゑ、早川高景床几にかゝる。家來よき所に莚を敷き。侍ひ、立たうと、九郎次を引立て、莚の上へ座らす。

高景　ヤイ、堂七、おのれ先達て、伏見船場に於て、馬士どもを語らひ、淀堤に待ち伏せ、お通姫を奪ひ取らんとせしゆゑ、この高景、計略を以て、お通姫は恙なく取返し、家來に申しつけ、其方を召捕り、即ち某當所を預かり支配いたすに依つて、身がかゝりの入牢の者引き連れ、當所の獄屋へ入れ置き、糺明いたすところに、この度大領久吉公、肥前名護屋より御凱陣に、この堺の津へお入り。さるに依つてお船を、やす〳〵着岸なさしめんが爲、新たに波止を突き、堺の町家へ申しつけ、砂持ちの賑はひ。殊に、久吉公、船中御安全の御祈禱とあつて入牢の者ども死罪を赦し、助けよと、淀町さまの御上意なれば、おのれ安からぬ科人なれども、命を助け、五十杖打つて叩き拂ひ。ソレ、者ども。

ト侍ひ、繩をほどく。二人の家來、九郎次を俯向けに寢させ、首筋と兩足を押へる。侍ひ、二人、割り竹を持ち、兩方より

侍一　一ツ。

侍二　二ツ。

侍一　三ツ。

侍二　四ツ。

侍一　五ツ。

ト兩方より叩きかけ、五十杖打ち据ゑて

侍二　ハツ、仰せの通り五十杖。

侍一　打ち据ゑまして

兩人　ござります。

高景　ソレ、ぼッ拂へ。

兩人　ハツ。立たう。

ト兩人、九郎次が首筋と兩腕取り、引立てる。

九郎　アイタ、、、。ア、、マア待つて下さりませ。三月も、牢へ入つて、その上に五十喰うた事ぢやもの、足も腰も立たぬ筈ぢや。アイタ、、、。

ト兩人を振り放し、また横にこける。

侍一 ヤア、憎い奴の。おのれがやうな悪黨者ゆゑ、一家一門見限つて、一人も迎ひに參らぬぢやないか。

侍二 サア、キリ〳〵立て。おのれ、達て意地張ると、この莚諸とも、濱邊へ捨てさうか。

侍一 サア、早く

兩人 立ち居らう。

九郎 エヽ、喧しう云はしやりますな。なんぼう悪黨者でも、みんごと町の衆が、迎ひに來て居ますわいの。

兩人 そりや、何處に。

九郎 ツイ其處に。コレ〳〵、宿老の太郎兵衛、見ぬ顔さつしやるないの。

宿老 オヽ、コレ〳〵、滅多な事云うてもらふまい。こちらはついぞ科人に、近附きは持たぬ。ナウ、組の衆。

五人 さうとも〳〵、貴様達に物云うてもらふと、風の神に逢つたやうなもので、ぞつ〳〵とするわいの。

宿老 なんぼう其方から物云うても

五人 とんと、こちらは

宿五 知らぬぞ〳〵。

九郎 エヽ、物覺えの悪い和郎達ぢや。コレ、置土の九郎次を忘れたかいの。

宿老 なんの忘れうぞいやい。われがやうな悪黨者は、見ぬ顔するがよいと思うて、組の衆と目引き袖引き、わざと物云はぬのぢやわいやい。

九郎 さう云ふ根性ぢや。よい〳〵。さう吐かしや、意地ぢや。爰に寢て居て、わいらが町へ持ちつけさしてこまさう。

トまた横に寢る。

宿老 エヽ、百日も牢へ入つても、まだ根性が直らぬな。ハイ〳〵、殿様へ申し上げます。彼奴は置土の九郎次と申しまして、私しが町内に、寶來屋權右衛門と申す者の甥でござります。

五人 生れついての悪黨者ゆゑ、一家一門勘當いたして、寄せつけませぬ。

宿老 あのやうな悪黨者を、お助けなさるゝと、人が難儀いたします。首をお切りなされまするが、結句御祈禱になりませう。

五人 お仕置になされて下さりませうものならば

宿五 有り難う存じます。

高景 ムウ。本名は置土の九郎次、伏見に於て、がらんの

堂七、一つ身に二つ名と云ひ、異名のある奴。ハテ、胡亂者ぢやよなア。

九郎　なんのいの。前の名は興津の九郎次。伏見にて馬士して居た時の名は、がらんの堂七。何も胡亂な者ぢやござりませぬ。

高景　年寄り五人組。この者を其方達に預け置くぞ。

宅五　エイ。

高景　其方が町内に、伯父たる者があるでないか。今一應この方が吟味あるまで、われ達に預けるぞ。

宿五　ハイ。これは又、迷惑な事ぢやぞ。

九郎　なんの迷惑。なんぼ久離切つても、伯父は伯父。貴様達も親からのよしみに遁がれぬわいの。サア、連れ立つて去なうとは思へども、足も腰も立たぬ。コレ、町の衆、駕籠舁いて來て、乘せて去なさつしやれ。

宿老　エヽ、厚かましい事を云ふわい。おいらは、また殿樣へお顏ひ申さねばならぬ事があるわい。

五人　マア、それをしまふまで、爰に待つて居い。

九郎　よいワ。それまでそこで寢て待つて居よう。ドレ／＼、この莚は先づ貰ひぢや。

ト件の莚を取つて、ちが／＼して片脇へ行き、莚を身體にひん巻き來る。宿老、五人組と顏見合せ

宿老　ひよんな預かり者ではあるぞ。

高景　次に、金藏をこれへ。手錠の打ち置いた者。

家來　ハツ。

ト家來、橋がゝりより博奕打ち金藏、手錠を打たれ居るを引き出す。

下に居らう。

金藏　ハイ／＼。

ト下に居る。

申し、私しはさのみ首の落ちるやうな科でもないかと存じて居ります。ハテ、高で素人を勸め、くらざいにかゝつた小博奕。それを科と云うて。

高景　ヤイ／＼、おのれ、御法度の博奕いたし、科でないとは野太い奴の。キツと仕置申しつける奴なれども、久吉公御凱陣のおめでたに依つて、お助けなさるる。ソレ、手錠を赦し遣はせい。

侍一　ハツ。

ト鍵を持つて、金藏が手錠を外す。

金藏　エヽ、有り難うござります。

侍一　キリ／＼うせい。

金藏　ハイ〳〵。
　ト手を、いろ〳〵伸ばし
ア、嬉しや。これで晩から、めくり打たうと儘ぢや。
　ト云はうとして、高景を見て、小氣味惡さうにして走り入る。
高景　次に、源五郎を引き出だせ。
家來　ハッ。
　ト家來二人、橋がゝりに走り入る。直ぐに、源五郎、これも牢入りの拵らへにて、橋がゝりより出て來る。家來二人附き出て、よき所にて下に居らう。
　ト源五郎、下に居る。
高景　小鰌の源五郎、其方ことは京都大佛にて、盜賊の張本、石川五右衛門を立退かせ、剩さへ數多の組子を切り捨てし大罪遁がれず、直ぐにその場に於て其方を召捕り、嚴しく吟味せしところ、盜賊五右衛門が手下なりと、白身に白狀するに依つて、五右衛門が落ち行きし在所、白狀いたさぬ丈夫の魂ひ。それゆゑお上にもお憎しみあつて、重き刑罰にも行ふ者なれども、お慈悲を以て打ち首に仰せつけらるゝ間、有り難う存じませい。

　ト源五郎、ハッと俯向く。
先達て呼び寄せ置いたる身寄りの者。呼び出し、對面させい。
侍一　ハッ。
　ト橋がゝりに向ひ
ヤア、源五郎が身寄り、和泉の者、これへ參れ。
　ト早枝、振り袖、やつしにて、風呂敷包を持ち
早枝　アイ〳〵。
　ト抱へ走り出て、源五郎を見て
ヤア、源五郎さま、お懐かしうござんしたわいなア。
　ト取りつき泣く。
源五　早枝どの、親仁樣が蟄居なされてござるは、和泉と先達て聞いたゆゑ、お上へお願ひ申して、今日までで ちよつとお暇乞ひに。イヤサ、一旦御不興受けたこの身、ちよつとなりとお目にかゝり、親仁樣の御無事なお顏が拜みたいばかり。して、親仁樣は、どれにござるぞ。
早枝　サイナア。惡事千里とやらで、お前が京の大佛前で、石川五右衛門が手下となり、大勢を切らしやんした噂を聞きなされて、明けても暮れても、きつい案じ。どうぞ命を助からしやんすやうにと、毎日々々私しも、和泉か

ら住吉樣の日參。この間の樣子を聞けば、爰の殿樣がお預かりなされ、堺の牢に居やしやんすと聞きました。ところに昨夜庄屋樣から、明日堺の七銅が濱にて、源五郎をお助けなさるゝ、迎ひに出よとの仰せぢやと、お聞きなさるゝまでは、利休さま、一旦親の詞を用ひず家を出で、まだその上、盜賊の手下にまでなり下がつた源五郎に、對面する心はないと、涙ながら、コレこの風呂敷に入れてあるは、何時でも親の詞につき、戻つたら着せると仰しやつて、お前の定紋の小袖、羽織、襦袢帶まで取揃へ、早枝、其方が持つて行て、この小袖を見て、親に對面すると思ひ、眞の人間になつたら、その時逢はうと、くれ〴〵とのお詞でござりましたわいなア。

源五　親仁樣のお志しのお小袖、有り難うござります。

早枝　其うちの一包みも、伯父樣のお志し。

源五　すりや、金子まで……エヽ、冥加ない。

ト少し泣く。こなしあつて

イヤ、早枝どの、この小袖も金子も、持つて去んで下され。

早枝　そりや、なぜにえ。

源五　ハテ、斯う云ふ身になつて、源五郎、分不相應に小袖羽織、殊に金子まで持つて居ては、また何處ぞで盜んで來たかと、人の疑ひかけては、親仁樣のお情も却つて仇。こりや矢ッ張り、持つて去んで下され。

高景　イヤ、源五郎、そりや料簡が違うたぞ。

源五　なんと仰せられます。

高景　ソレ、繩解け。

侍ひ　ハツ。

ト源五郎が繩を解く。

高景　親の志しを無足に致すと云ひ、老少不定の世の中、明日にでも其方、相果てまいものでもないぞよ。その時その形では、乞食非人同然。なぜ髮月代、衣類もさつぱりと、流石は利休が悴ほどあつてと、死恥を思はぬか。

ト源五郎、ぎつくりとこなしあつて

源五　お心添への御一言、有り難う存じまする。

高景　ソレ、者ども、源五郎が支度、申しつけて取らせ。

侍ひ　ハツ……ヤア、床の者、出ませい。

和助　ハイ〳〵。

ト髮結ひの形にて、床より飛んで出て、辭儀する。

高景　コリヤ、この者の髮月代を致せ。

和助　ハイ〳〵、畏まりましてござります。サア、床へご

ざりませい。
源五　コレ、早枝どの、こなたは去んで親仁様に、お志し、慥かに申し請けました。
トこなしあつて、唾を吞み込み
随分親仁様を大切にして下され。頼みましたぞや。
ト早枝、源五郎が顔をヂッと見て
早枝　アイ。
トこなしあつて泣く。源五郎、氣を替へて
源五　左やうなら、御免下さりませ。
ト高景へ辭儀する。
和田　サア〱、ござりませ。
ト源五郎、風呂敷包持つて、和助と連れ立ち、床へ入る、と橋がゝりより、おとく、おゆき、おみき、おさき出て
とく　お娘御樣、お前の願ひは
皆々　叶うたかえ。
早枝　皆様、いかいお世話でござりました。どうやら斯うやら、殿様のお情で。
とく　出かさしやんした。お前の貞女、ほんに羨やましうござんす。
皆々　サア、そんなら連れ立つて去なうかいなア。
宿老　コレ〱、寶樂屋のおとく、仲居ども、わが身達は、その娘御と近附きか。
さき　近附きの段かいなア。
みき　これからわたしども、贔屓でござんす。
ゆき　このお子は、此方へ抱へた新造さまで。
とく　ア、コレ、それを爰で云ふ事かいなア。
皆々　ほんになア。
早枝　伯父様にも深う隠した、わたしが身の上。必らず聞かして下さりますなえ。
ト床の内へこなしあつて
皆々　合點でござんす。
宿老　殿様の前で、マア〱、下に居や〱。
ト皆々を下に置く。
ハイ〱、私しどもの願ひと申しまするは、先達て大佛前にて、召捕られました瀧川、盗人の妻とあつて、乳守の廓へ流し者、併し、勤めをさす事はならぬと、仰せ下さりましたゆゑ、廓中がお願ひ申して、座敷藝子。ところに彼の瀧川、明けても暮れても泣いてばつかり居りまして、なか〱お客の機嫌を取る段か、一向座敷の興に

はなりませぬ。

五人　ところに、さる田舍のお侍ひ、平の平々さまと云ふお大藝が、身請けがしたいと仰しやります。あの方へ遣はしますれば、廓の厄介は拂ふと申すもの。

宿老　何卒、身請けの儀、御免下さりませうならば

皆々　有り難う存じまする。

高景　その瀧川ことは、大罪人の五右衞門が餘類。命を取るべき者なれども、女の事とて御宥免あつて、命代りの流し者。われ達が難儀を思し召され、座敷藝子をお許しなされたは、廓の者どもへの御憐愍。身請けとあらば彼れが身の納まり。その平の平々とやらの國所書き認め、明日役所へ持つて參れ。この方より沙汰いたしくれう。

宿五　ハイ／＼。

高景　最早落着いたせば、者ども、これより濱手を檢分いたし、立歸らう。

侍ひ　ハツ、皆の者、立ちませい。

皆々　ハイ／＼。

侍ひ　イザ、お立ちあられませう。

高景　供せい。

ト唄になり、高景、警固侍ひ二人、家來連れ臆病口へ入る。皆々、立ち上がり

宿老　コレ、寶來屋のおとく。わが身の所へ預け置いた藝子の瀧川、田舍のお客が身請けせうと云ふは、幸ひ廓の預かり者を、拂ふと思うてのお願ひ。

五人　イヤ、その預かつた次手に　あの九郎次めも連れて去なずばなるまい。

宿老　ほんに、さま／＼の厄介ぢや。コリヤ九郎次。

皆々　サア、起きい。

九郎　エヽ、喧ましい。何もかも聞いて居るわい。

ト起きろ。おとく、早枝拵々、九郎次を見て

皆々　オヽ怖。

ト逃げ退く。

九郎　コリヤ／＼、衒妻ども、何も怖がる事はない。作り物や似せ物とは違ふ。生のものを生で見せるのぢや。コリヤ、寶來屋のおとく。さては其方は伯父貴の娘であつたか。おれとはコレ從兄弟同志。いつそ夫婦になつて、伯父貴の後式を納めやうではあるまいか。

トおとくが側へ行く。おとく逃げる。

なんの　逃げる事はないわいの。おれも長々牢に居て、餘ツぽど徒然な。マア、爰へおぢやいの。

トまた側へ寄る。おとく逃げて皆の後へ入る。
よいワ。それ程否なら、この娘にせうかい。
ト早枝が側へ行く。これも逃げ退く。
そんなら、いつそ仲居どもを廻つてこまさう。
ト三人を引ッ捉まへにかゝるを、宿老、五人組、九郎次を突き退け

宿老　エヽ、たつた今牢から出ると、もうてんごうをかはくがな。

五人　此奴は、こちらが連れて去ぬる。こなた衆は先へ、先へ。

皆々　アイ／＼。

トおとく、早枝皆々花道へ行く。

九郎　コリヤ、待ち居れやい／＼。

ト後より追ひ駈けて入る。宿老、五人組、起き上がり

宿五　ヤイ、おのれを。

ト同じく後より皆々追ひ駈け入る。と合ひ方になり、源五郎、紋付きの着物、羽織、着替へ、髮、月代さつぱりとして、床暖簾を上げ、向うをキッと見て、ツカツカと花道際まで行き、こなし。

源五　すりや、大佛前で大勢の捕り手に囲まれ、見失うた瀧川も、その時一緒に召捕られたりとは知らず、牢の内でも、どうなつたぞと、案じて居たが、いま聞けば乳守の廓へ流し者。

ト手に持ちたる金財布に心附き

合點のゆかぬは、この金。親仁樣の志しと云うたが、こりや餘程の金。

ト財布より百兩包みと一通を出し

こりや百兩なり。

トまた狀の上書を見て

源五郎さまへ、早枝より。

ト狀の封じを切る。この時、金藏、後へ出かけ居る。

ナニ／＼、お前こと、今日お命お助かりなさるゝと承り、伯父樣と申し、わたしが嬉しさ、これと申すも住吉樣、方々の神々樣へ願かけ申し候ふお庇と喜び入り參らせ候ふ、その上、この方より噂を聞き參らせ候へば、お前樣と云ひ交しなされし、瀧川さまとやら云ふお方も乳守の廓にて、藝子とやらのお勤め、どうぞ廓の苦患をお助け申し、お前樣と御夫婦に致し申したう存じ候へども、利休さまは物堅いお心ゆゑ、伯父樣にも隱し、人を頼み、わたしが身を乳守へ勤め奉公に參り。

ト讀み、少々驚ろくこなしにて、向うを見て、また狀を讀み

その金を瀧川さまの身の代とは存じ候へども、なか〳〵この位の金では、身請けもなるまじくと存じ候へども、わたしが身を一生賣り渡し、その金にて、瀧川さまを請け出し、どうぞ御夫婦になつて、お年の上の伯父樣へ御孝行なされ、朝夕の御介抱、賴み上げ參らせ候ふ……ヤア〳〵、すりや、この金は、早枝が身の代であつたか。ホヽホイ。

ト金持つたなりに當惑の體。

金藏　その金を。

ト取りにかゝるを、突き退けて

源五　うぬは、何奴ぢや。

金藏　オヽ、おりや、五右衞門の手下、足柄金藏と云ふ者ぢや。アヽ、盜人も命がけ。野暮な商買ぢやと思うて、此方からお頭をまいて、今では、ましろと博奕仲間で渡世。すりや、一簾の胴金にせにやならぬ。その百兩、おこしあがれやい。

トまた取りにかゝるを、取つて投げろ。この時、臆病口より高景、警固侍ひ一人連れ出ろ。金藏また源五郎へかゝるを、高景、ツカ〳〵と行き、金藏を拔打ちにポンと切る。源五郎、愕くり。この時、和助、床の內より飛んで出て、臆病口へ逃げて入る。

高景　源五郎、其方が孝心の願ひを感じ、死罪を暫らく猶豫いたしくれたが、最早遁がれぬ。刑罰の時刻延引。サア、早くそれへ直れ。

ト拔身を構へる。源五郎、こなしあつて座り、羽織を脫ぎ、手を突き

源五　死罪極まる小鮒の源五郎、何卒命のうち、親利休に暇乞ひのお願ひ、お聞き屆け下され、休息のうち、利休お召し寄せ、暇乞ひ致させんとのお情。併し、流石は親利休、死罪の樣子を覺り、顏出し致さぬも、禪家に交はる心の諦らめ。不便なは姪の早枝、我が身を乳守へ勤め奉公、その身の代を以て、瀧川を請け出し、利休どのゝ介抱を賴むとのこの一通。いま相果てる源五郎とも知らず、賴みに思ふいぢらしさ。私しは相果てまする。姪の早枝は勤め奉公。さぞ親仁樣のお身の上、お力もあるまいと思へば、この胸が……近頃未練なお願ひながら、何卒この上のお情に、今日一日命の御容赦下されなば、コレこの金を持つて、早枝を取り戻し、親利休どのへ手渡

し致し、その上で相果てたうござりまする。何卒このお願ひ、お聞き届け下さりませうならば、有り難う存じまする。

高景　ムウ。仔細聞き届けた。併し、科ある者を其まゝに遣はしては……オヽ、幸ひ。コリヤ、最前の手錠これへ。

侍ひ　ハツ。

ト南肌脱ぎ、襦袢になる。高景、襦袢越しに、源五郎に手錠を打つ。

源五　すりや、手錠をお打ちなされ。

高景　其方が孝心に愛で、宥免なり難き科人なれど、手錠打ちしは某が情の締しめなれば、此まゝ逃げは逃げ次第。六十餘州は籠の鳥同然と、兼ねて久吉公の大言……今宵夜中までは放し飼ひ。

源五　エヽ、忝ない。私しも源五郎、卑怯未練な仕業も致すまい。ハテ、死んでの後の名こそ惜しけれ。

高景　出かした。

ト源五郎が肩を入れ、羽織を着せ、紐を結び、形を繕ろひ、財布を懐中に入れ

それで手錠と見えぬでないか。

源五　段々のお志し。

高景　ハテ、無益の挨拶、一時も早う……參れ。

侍ひ　ハアヽ。

ト矢張り彈き流しの合ひ方にて、高景、侍ひ二人を連れ、橋がゝりへ入る。と源五郎、後見送り

源五　なんにも申しませぬ、有り難うござります。

ト高景の方へ頭を下げ

これから乳守へ行て

トつか〳〵と花道へ行き、立ちとまり

この金を親方へ斷わり云うて戻し、早枝を親仁樣の手へ渡して置かば、例へおれが死んだ後でも、御介抱に氣遣ひないが、瀧川が身の上、五右衞門どのに預かつた甲斐もなう、やみ〳〵と大傳前で召捕られ、剩さへ瀧川まで捕縛となり、乳守への流し者。あの儘置いては、どうも五右衞門どのへ云ひ譯がない。と云うて、この金で瀧川が身請けもならず、殊に苦界は三年、廓を出さねば流し者の掟。さうとは知らず、この金で足らずば、一生その身を賣つてなりとも、瀧川を請け出して、女夫にしたいと早枝が淺切。從妹同志で、女夫にせうと、親仁樣が呼び取つて置かつしやつたあの早枝。重ね〳〵の義理と云ひ、なんとこの金が遣はれう。と云うて瀧川を、何時ま

でも廓に置いては、五右衛門どのへ頼まれた義理も立たず。廓を連れて逃げやうにも、天の網のかゝつたおれが身の上。高景さまの情で、夜半まで手放して置かつしやるも、義理をかけて、五右衛門どのゝ在所を、白狀さささうと云ふ御思案。例へ、この身は、ずた〳〵になつても、姉貴に附いた縁ぢやと云ひ、一旦合點したこの源五郎。五右衛門どの、代りに殺さるゝが本望。さりながら、一方の義理を立つても、瀧川を取返さねば、頼まれた義理が立たず。元より侍ひを止めさせ、元の町人にして、早枝と娶合せ、老後を樂しまうと思うてござる、親仁樣のお心を、思ひ廻せば。

トこなしあつて

ア、どうぞ親仁樣のお心も休め、瀧川を取返し、五右衛門どのへ義理の立つ、思案がありさうなものぢやが。

ト手錠の事を忘れ、思はず手を組まうとして、兩手の痛むこなしにて、手錠を見て、投げ首すると、チヨンチヨン拍子木入る。と一時に本釣り鐘ゴンと暮れ六ツ撞き出す。

ありや暮れ六ツ……さうぢや。

ト心でこなしあつて、向うへ入る。よろしく　幕

切　幕

乳守寶來屋の場
桃山御殿の場

役名——眞柴久次。小田彈正。早川高景。福島左衛門正則。筒井順慶。石津瀬吾。小坂部九郎。蜂坂嘉六。奴、岩内。同、瀧平。同、峯六。同、谷助。寶來屋福右衛門。同娘分、おとく。仲居、おみき。同、おゆき。同、おさき。遣り手おやら實ハ法八。同、卯吉。同、平吉。同、竹六。同、魚吉。高景妹、むらじ。小餅の源五郎。千石檣平。幇間、同、鶴吉。平の平平實ハ筒井熊太郎。曽士の九郎次。宿老、太郎兵衞。千の利休。同娘、早枝。眞柴お通姫。禿子、瀧川。五右衛門女房、お律。同一子、五郎市。石川五右衛門。

造り物、平舞臺、向う長暖簾、臆病口折り廻り、障子屋體。橋がかり格子、門口に寶來屋と云ふ掛け行燈に灯ともし、騷ぎ唄にて幕明く。

ト橋がかりより宿老、五人組、町人三人、九郎次を連

れ出て來て
宿老　サア〳〵、ござれ〳〵。福右衞門、内にか。
皆々　お宿老の、お出でぢやぞや〳〵。
福右　オイ〳〵。ヤレ〳〵、忙しやの〳〵。
　ト福右衞門、奥より出る。
宿老　ホウ、福右衞門どの、定めし先へ戻つた、おとく女郎に、斯う〳〵聞かしやつたであらう。聟の九郎次を殿樣から預かつて戻りました。
五人　聟のうちは形が見苦しいゆゑ、夜に入つて連れて來ました。
福右　それは大きにお世話でござりました。
皆々　コレ町の衆、九郎次を内へ入れて下され。
町人　サア九郎次、入りや。ハテ、入りやいの。
　ト皆々九郎次を内へ連れ込む。
福右　九郎次か。
九郎　伯父樣、逢ひたかつたわいなう。
　ト取りつき泣く。
福右　オヽ、親は泣き寄り、おのれを生んだ姉貴も、疾に死なれた。今ではおのれが親にも伯父にもおれ一人、心を入れ替へて孝行するかよ。
九郎　アイ〳〵。
福右　イヤモウ、性根さへ直つたら、娘のおとくは外へ嫁入りさせ、われは内の跡取り、
九郎　アイ〳〵。
福右　マア、風呂へも入り、髮月代もさつぱりと。ほんに、どなたも、いかいお世話でござりました。
皆々　なんの〳〵、マア、めでたうござる〳〵。
福右　時にマア、祝うて杯を出しませう。
　ト杯銚子を並べる。
皆々　イヤ〳〵、心遣ひ、御無用〳〵。
福右　ハテサテ、平に一つ〳〵。コリヤ、なんぞ肴を持つて來いよ。
　ト手を叩く。中にてアイ……と云ふと、踊り三味線になり、向うより、瀧川、藝子の拵らへ、平平、田舍染の拵らへ、おむら、遣り手。後よりおとく、おゆき、おみき、おさき、附き出る。
平平　コレサ瀧川、なぜ其やうに浮かぬ顏つき。そさまの機嫌を直さうと思うて、皆々引き連れ、揚屋々々を立て廻るも、につこりと笑ひ顏を見ようばかり。ちと浮き浮きとしてたもいなう。

ト瀧川が手を取る。瀧川、素氣無う突き放す。

むら　イヤ申し、平さん、瀧川さまは、ちと氣むづかしいさうにござんす。内へ連れて去んで、放させまして下さんせいなア。

平平　それをなんの遠慮する事がある。マア、一時も早う去んで休まさう。サア皆、來い〳〵。

ト また踊り三味線にて、皆々本舞臺へ來る。

亭主、戻つたぞよ。

ト皆々、中へ入る。宿老、五人組、町人、酒呑んで居る。この時片寄る。

福右　これは平さま、お歸りなされましたか。サア〳〵、これへ〳〵。瀧川、矢ツ張り浮かぬ顏ぢやの。

とく　イエ〳〵、父樣、瀧川さまは氣分が惡いといなア。それで平さまに、お斷わり申して置きました。奧へやりまして下さんせ。

福右　ハテ、平さまさへ御得心の事ならば、どうなりとどうなりと。

ト此うち九郎次、瀧川に見惚れて居る。

九郎　アヽ、あれは噂の瀧川ぢやなア。さても美しいものぢやなア。氣むづかしいが、あの顏なら、につこりと笑うたら、一向こたへられまい。

ト瀧川が側へズツと行く。瀧川怖がり、ちやつと退く。皆々氣味惡がる。平平、亭主、瀧川を圍ふ。

平平　むさい態をして、亭主、此奴は何者ぢや。

福右　イヤ、此奴は私しが甥でござります。ヤイ、わりやお客樣の側へ、滅相かいな。こちらへ來やれやい。

ト手を引ツ張るを突き退け

九郎　否ぢやわい、彼奴が客なら、おりや揚屋の跡取りぢや。あの瀧川に、えらう惚れた。いつそあれを女房に持たうわい。

ト瀧川が方へ行かうとする。福右衛門、引退け

福右　てもさても情ない。おのりや、まだ性根が直らぬな。コレお宿老、町の衆、此奴を抛り出して下さりませ。

皆々　オヽ、合點ぢや。

ト皆々、九郎次を引立て、門口へ突き出さうとする。

九郎　馬鹿つくしさらせ。

ト皆々を毆り倒し

おれが體は、お上より、わいらがお預かりなされたぞよ。

皆々　ヤア。

九郎　すりや、この廓のお客分ぢや。拋り出して見され、わいらに咎めが行くぞよ。

皆々　ほんになア。

九郎　ぢやに依つて、したい事するのぢや。さう心得てけつかれ。

皆々　これは又、迷惑なものぢや。

平平　いよ〳〵、瀧川を身請けさへすりや、外の邪魔はならぬ。コリヤ、町の者、して、身請けの事を願うたか。

宿老　ハイ、伺ひましたれば、身請けなさるゝお客のお名と、國ところと書いて差上げい。その上でお上から御免なさるとの事でござります。

平平　よし〳〵。なんと瀧川、身請けして國元へ連れ歸るが、嬉しいか〳〵。

ト瀧川、ズツと奥へ行かうとする。平平、止めて

瀧川、待て。

瀧川　わたしや氣色が惡いに依つて、奥へ行て寐るわいなア。

平平　身共も一緒に行て、擦つてやらう。

ト瀧川が手を取る。

瀧川　否ぢやわいなア。

ト突き放す。

九郎　おれが擦つてやらう。

ト取りつく。

瀧川　オ、汚な。

ト突き飛ばす。騷ぎ唄になり、瀧川ツイと入る。九郎次、追ひかけて行かうとする。平平、引き退けて行かうとする。おむら、おとく皆々、平平の邪魔する。此うち九郎次、行かうとするを福右衛門、宿老五人組、町人皆々、九郎次を止める。平平、皆々を引き退け奥へ入る。おむらおとく後より走り入る。九郎次、福右衛門、宿老、五人組を蹴倒し、踏みのめす。皆々踏まれながら、宿老皆々橋がかりへ逃げて入る。九郎次、奥へ走り入る。福右衛門、後より追ひかけ入る。右騷ぎのうちに直ぐに踊り三味線になると、向うより小鯛源五郎、五つ目の形にて、懷手にて出て來て、門口にて、

源五　賴まうぞよ〳〵。

福右　ハイ〳〵。

ト「アレ御案内があるぞよ、誰れも居ぬかいやい」と云ひ〳〵門口へ行く。

どなたでござります。
源五　ムウ。其方が亭主、寶來屋福右衛門か。
福右　左やうでござりまする。
源五　ヤレ、久しや〳〵。
ト懐手にて大盡のこなし。
福右　お近附きのやうに仰しやれど、私しは根つからあなたを、
源五　見知らぬとは福右衛門、ア、、めつきりと寄つたぞや寄つたぞや。ソレ、いつぞや住吉の三文字屋で、座敷を一つにして呑んだを、忘れやつたか。
福右　そんな事もござりましたかいなア。
源五　ござりましたどころか。その時、わが身の云やる事には、ちと此方へもお出で下されと云やつたに依つて、どうぞちよつとなりと來てやらうと思へども、何が藏屋敷の御用は多し、店は爲替で忙がしく、とんと來る隙がなかつた。今日は住吉へ參つたゆゑ、手代どもを先へ歸し、一人來たも、今夜は其方の所で、呑み明かさうと思うて。
福右　それは千萬有り難うござります。マア〳〵、お通り下さりませ。コリヤ、女子ども、幇間衆、お大盡樣のお入りぢや。ちやつとおぢや〳〵。
ト叫く。
とく　アイ〳〵。
ト龜吉、鶴吉、幇間にて、その外女、皆々出て
龜吉　お大盡樣とは有り難い。
福右　ソレ、お杯、お銚子〳〵。
女達　アイ〳〵。
福右　時に旦那、お望みの太夫さんは、どなたでござります。
龜吉　定めしお馴染がござりませうなア。
源五　イヤ〳〵、この乳守は初めてなれば、馴染はないが瀧川と云ふ藝子が呼びたい。
福右　したり、この里初めてと仰しやるお大盡樣が、
龜吉　瀧川さんの名を指いて仰しやるからは
鶴吉　こりや大抵のお客ではないわいの。
とく　二人ながら油斷して
女皆　手を取らしやんすなえ。
龜吉　申し、あなたは瀧川さまと、お近づきでござりまするか。
源五　イヤ、近付きではなけれども、噂を聞いて。

女皆　お出でなされましたかえ。
源五　オイ〳〵、
福右　ア、美しいものでござります。また美くしい筈でもござります。元は禁裏さまの官女でござりましたといな。
源五　ハテナウ。
　トこなしある。
亀吉　それからお聞きなされませ。石川五右衛門と云ふ大盗人が、禁裏さまへ入りまして、官女の瀧川さまを盗んで去にましたといなア。
　ト源五郎、こなしあつて、頷づく。
鶴吉　それから、京の大佛前で妾宅を構へ、えらくわんわんでござりましたといな。
福右　なんとマア、五右衛門と云ふ奴は、魂ひの丈夫な、恐ろしい盗人ぢやござりませぬか。
とく　イエ〳〵、五右衛門ばかりぢやござんせんげな、その手下のうちにも、大抵怖い衆が。たんとあるといなア。
さき　その中で、小緋の源五郎と云ふ手下は、好い男ぢやといなア。
みき　好い男の筈ぢや。それも元は、禁裏の侍ひぢやといなう。
ゆき　五右衛門が妾と云ふは表向き、誠はあの瀧川さまは、源五郎が女房ぢやといの。
とく　なんとマア、其やうな好い男で居ながら、盗人せにやならぬかいなア。
福右　イヤ、得て器量の好い男程、大盗人ぢやてなア。申し。
　ト源五郎、こなしあつて頷づく。
亀吉　その上、大佛前で凄まじく人を切つて、捕まへられたげな。
鶴吉　今日この堺の濱で、命助かつたげな。福右衛門さん、申しひよつと、瀧川さんに源五郎が逢ひに来うも知れませぬぞえ。
亀吉　根が盗人ぢやに依つて、瀧川さんをちよろまかさうも知れませぬ。源五郎らしい奴がうせたら、叩き出さつしやれませ。ナア、お大盡様。
源五　オヽ、さうぢや〳〵。
　トこなし。
とく　いとしぼさうに、素性と云ひ器量と云ひ、どうぞ瀧川さまと、その源五郎と、女夫にしてやりたいなア。

福右　まに益體もない事を云ふわい。盗人の女房にやつて堪るものか。ナア、申し、
源五　オヽ、さうぢや。いつそ瀧川は、おれより身上げしよう。
皆々　エヽ。
源五　開けば開く程、あんまり笑止な身の上なれば、身請けしてやらう〳〵。
福右　イヤ、瀧川はこちらに、先約がござりまする。
源五　ハテ、千でも萬でも、身請けは金次第。後へは寄らぬ。なんぼでも出すわいの。
福右　サア〳〵、けうとい大盡さんの、お入りぢや〳〵。
亀吉　マア、瀧川さんを、早う〳〵。
福右　コレ、遣り手のおむら、瀧川さんを連れましておちやれなう。
むら　アイ〳〵。
　ト奥より新造の早枝を連れ出す。
瀧川さまは氣色が惡いに依つて、もそつとお隙が入りまする。その間、この新造さまで、酒のお相手には、どうでござんせうぞ。
福右　こりや、おむらが出かした。直ぐにお大盡樣へお引合せ〳〵。
むら　アイ〳〵。申し、お大盡樣、このお子は、今夜からの突き出しでござります。マア、お近附きの爲、あなたお側へ。
　ト源五郎が側へ早枝を出す。顔見合す。
早枝　ヤア、お前は。
源五　コレ〳〵、何も云ふまい。今日の仕儀な。それで來た程に、何にも云はずと、マア、おれが側に、チツとして居やいの。
　ト額にて押へる。
早枝　アイ。
　ト源五郎が側へ座る。
むら　サア〳〵、皆樣、こりや大抵の事ぢやないわいな。今夜突き出しの新造さまと、どうやら樣子のありさうなお詞。
福右　なんでも具合ひの目つき顔つき。
鶴吉　下地からのお馴染みか。
亀吉　サア眞直に
皆々　白狀々々。
源五　イヤ〳〵、下地からの馴染みぢやない。今日住吉で、

ちよつと見たに依つて。

龜吉　でござりまするか。

源五　オイヤイ。

龜吉　エ、、茲な新造さまの

皆々　あやかり者め、

源五　時に亭主、この新造も、瀧川と一緒に身請けしよう。

早枝　エイ。

源五　ハテ、大事ない。イヤサ、金はある程に、何にも氣遣ひせずと、マア、おれ次第になつて、身請けしられたがよいてや。

ト呑み込ますこなし。此うち福右衛門、鶴吉、龜吉、ぞく〳〵する。

福右　一人ならず二人まで、身請けなさるゝとは

龜吉　さつてもえらい大盡樣。

鶴吉　本粹の骨頂さまぢや。

むら　旦那樣の、きつい福の神さま。

ゆき　今夜突出しの新造さま。

みき　直ぐに身請けの相談とは

さき　お前も此方も福の神。

とく　なんとマア、此やうなめでたい事はないわいなア。

福右　オ、、めでたい〳〵が、あつたらお大盡樣に、惡い癖がござりますぞえ。

源五　何が〳〵。

福右　先刻にお出でなされてから、とんとお手をお出しになられませぬ。

皆々　ほんになア。

鶴吉　なんとマア、如何にしても見苦しいぢやないか。

龜吉　イカサマ、大事のお大盡樣に、手がないやうで、どうやら氣がかり。

鶴吉　お二人ともに、身請けのおめでた。

福右　祝うて一つ。

三人　打ちませう。

ト手を打たうとする。

源五　ア、、待て〳〵。

三人　なぜお止めになります。

源五　ハテ、打てよ囃せよ太鼓間、わが身達の役ぢやないか。誠の大盡と云ふ者が、ひろ〳〵と手を出して、これ見よがしに、ア、、至らぬ〳〵。身請けも濟んで廓を出ると云ふ所で、めでたいと云うて打たねばならぬ大事の手打ち。事はさて措いて、ちよつとでも出す事は、ならぬな

らぬ。
三人　こりや御尤もぢや。
源五　わが身達も知らぬさうなが、いま京大坂の粋仲間で、手を出す者は野暮ぢやと云うて、刎ねのけるてや。
皆々　ハテナア。
源五　おれは大事ないが、外の客に、必らず手の事を云やんなや。
福右　ハイ〳〵、畏まりました。
源五　コレ、わが身達も、お客に手の事云ふまいぞ。
女達　アイ〳〵、合點でござんす。
福右　申し、あなたも御用があつて、女子どもをお呼びなさるゝなら、手の代りに足をお叩きなされませ。
龜吉　旦那、お酒は銚子から。
鶴吉　お茶も土瓶から、どぶ〳〵〳〵と。
兩人　おやりなされませう。
源五　さうぢや〳〵。大分わいらは氣持ちが聞くわい。アアコレ、爰でカッと紙花と云ふ所なれど、手は出されず。コリヤ、この花紙、皆々手を突ッ込んで、取れ〳〵。
ト懐を突きつける。
龜吉　ヤア、有り難いと云ふまゝに
福右　我れらも花のお相伴。
女達　わたしらもあやかつて
皆々　ヤア、頂け〳〵。
ト源五郎が花紙を奪ひとりがちにする。福右衞門、この途端、源五郎が懐の金財布を引き出し、財布より百兩包み落ちろ、皆々恟り。
皆々　ヤア、お金が。
福右　これは粗相千萬な。
源五　イヤ、大事ない。その百兩は、身請けの手付けぢや。
福右　オッと受取り山の花盛り。
龜吉　ヤレ〳〵、結構えら結構。
むら　これから瀧川さんを連れまして
龜吉　奥でわつさり大騷ぎ。
女達　サア〳〵、お出でなされませ。
ト騷ぎ唄になり、源五郎に附き皆々奥へ入る。おむら、一人殘り
むら　ヤレ〳〵、今日程忙しい事はない。ドレ〳〵、ちやつと足を休めう。
ト合ひ方になり、煙草盆取つて來てのむと、奥より九郎次、風呂へ入りたる體にて、浴衣がけ、髮月代して

出る。
九郎　おむら、爰に居るか。
むら　オヽ、誰れさんぢやと思うたら跡取りさん。でも、さつぱりとならしやんしたなア。
九郎　オヽ、月代剃つて、髮結うて風呂に入つた。
むら　とんと見替つた、好い男にならしやんしたわいなア。
九郎　なんと、斯うすつぱりと出立つた所では、瀧川が得心してくれうかな。
むら　されば、どうござんせうぞ。
九郎　おむら、どうござんせうとは、どうしたものぢやぞい。
むら　何がいなア。
九郎　ハテ、おれは爰な跡取り、わが身は遣り手なりや。おれと其方は主と家來。その主のおれが惚れた瀧川、わたしが取持ちませうと云うて出ねばならぬ所を、素知らぬ顔は胴慾ぢや。どうぞ取持ちしてくれいやい。
むら　サイナア、わたしもどうぞ取持つて上げようとは思へども、所詮、瀧川さまは
九郎　應と云はぬか。
むら　短かい帶ぢやと思はんせ。
九郎　結び憎いと云ふ事か。
むら　アイナア。
九郎　ア、緣なき衆生は度し難しぢやなア。
むら　それ〳〵、とんと思ひ切つたがようござんす。ドレ、わたしもマア奥へ行て。
ト立たうとするを捉へて
九郎　どつこい。奥へはやらぬ。瀧川が代り、われなと聞いてくれい。
むら　エヽ、いろ〳〵の事を云はしやんすわいなア。
九郎　サヽ、その色々の事がしたいわいやい。
ト抱きつくを振り離し
むら　エヽ、否ぢやわいなア。
九郎　否でも應でも、一てふへがしてくれい。
むら　何を阿房らしい。
九郎　そんなら瀧川を取持つか。
むら　そりや、ならぬわいなア。
九郎　ならざ、われをへがすか。
むら　否でござんす。
九郎　否と云へば無理に押さうか。

むら　ア、コレ。
九郎　尋常にへがすか、
むら　サア。
九郎　サア。
むら　サア／＼／＼。
　ト抱きつき、押しこかさうとする。
サア／＼、得心ぢやわいなア。
九郎　得心なら、今爰で／＼。
むら　それでも、ひよつと奥から呼ぶと惡いわいなア。マ
アちよつと、奥へ行て來てから。
九郎　どつこい。さう云うて拔けさせはせぬ。
むら　オヽ、氣の惡い。そんなら、マア、爰にある蒲團を
爰へ斯うして。
　ト好き所へ蒲團敷く。
九郎　そんなら、嘘ぢやないか。
むら　嘘か誠か、寐て知れるわいなア。
九郎　こりや有り難い。
むら　お前はマア、この蒲團の上へ。
　ト九郎次を蒲團の上へ座らす。
この蒲團を、斯う後から斯う着せかけて、この屏風を斯
う立てて。
　ト六枚屏風を立てる。と奥より、
平平　おむら／＼、
　ト呼ぶ。
むら　アイ／＼、コレ、人が來る。ちやつと隱れて下さん
せ。
九郎　オツと合點ぢや。
　ト蒲團すつぼりかぶり寢る。
平平　おむら／＼、
　ト平平、呼びながら出て來る。おむら、屏風を引き廻
し、九郎次を隱すうち
おむら／＼、コリヤおむら。
　ト大きに喚く。
むら　オヽ、愕りしたわいなア。
平平　どうぢや。われを賴んで置いた瀧川が返事は。
むら　コレ、大きな聲なさんすな……よいわいなア。
平平　よいとは
むら　瀧川さまが得心して。
平平　ヤア。
むら　待つてぢやわいなア。

平平　そりや、何處に。

むら　彼處に。

　ト屏風を教へる。

平平　すりや、アノ、

むら　コレ、何にも云はずと、早う行かんせ。

平平　おむら、段々のお世話。

むら　嬉しいかえ。

平平　エ、、有り難い。

むら　エ、、慈な、あやかり者め。

　ト平平が脊中を叩く。平平、指啣へる。唄になり、おむら奥へツイと入る。後に平平、こなしあつて屏風の側へ行く、平平は瀧川と思ひ、屏風をソツと明ける。九郎次はおむらと思ひ、蒲團をソツと取る。兩方一時に顏見合す。恟り。

九郎　平平さま。

平平　九郎次。

九郎　そんなら、おむらめが。

　ト奧を見て

　ても、ようやり居つたなア。

　ト二人こなしある。

平平　コリヤ九郎次、われが人相天晴れ。事を仕損じまじき面魂ひ。そこを見込んで一つの頼み。なんと聞いてくれまいか。

九郎　イヤモウ、何でも金になる事なら、頼まれませう。

平平　オ、、首尾よく行かば一廉の褒美、

九郎　して、その樣子は、

平平　コリヤ、

　ト囁く。

九郎　すりや、五右衛門の隱れ家を。

平平　コリヤ。萬事は奧で。

九郎　呑み込みました。

平平　九郎次、來やれ、

九郎　アイ。

　ト唄になり、二人、奧へ入ると、橋がかりより立派な看板着た駕籠の者、あんだ駕籠舁き出る。この駕籠のぐるりを取まはして竹六、平吉、卯吉、徳八、幇間の形にて附き出て、門口にて

四人　サア／＼、お大盡樣の、お出でぢやぞや／＼。

福右　ハイ／＼。アレ、お大盡樣のお出でぢやといやい。

　ト云ひ／＼出て

お大盡様とは、お前方かな。

竹六　イヤ、こちらは大阪の藝者でござりまする。

平吉　さる御隱居さまが、老後の思ひ出に、京大阪の廓廻り。

徳八　今宵はこの乳守へお供申しました。

平吉　この里で名うての寳來屋。

四人　えら大盡様を持ち込んだぞ。

福右　それは有り難う存じます。マア〳〵、これへお通り下されませう。

竹六　イヤ申し旦那、寳來屋の亭主、お出迎ひ申しましてござります。

平吉　サア〳〵、あれへお通りなされませ。

ト駕籠の戸明ける。千の利休、焙烙頭巾、着附け十徳にて、合口差し、懐手にて出て、中へ通り上座へ座る。幇間四人、次に座る。福右衞門、手を突き

福右　ハイ、私しは寳來屋福右衞門でござります。お見知り置かれ下さりませう。

利休　ムウ、お身はこの家の主か。愚老は若年の砌りより、ついに傾國の味ひを存ぜぬが、フトこの末社達の勸めにより、京大阪の遊所廻り。老後の樂しみに、當所へ推參申した。不案内の事なれば、萬事指圖を受け申したい。この里へ入込む大盡の式作法、何卒御傳授頼みまする。

福右　その儀ならば、お氣遣ひなされますな。恐らくこの里で、大盡様の秘術秘傳、御傳授と申しまするは、當世粹大盡と申しまするは、第一、手を出さぬが肝心關門。兎角手を出すと、至らぬと申して、大盡仲間を刎ねのけまする。酒呑むにも銚子鍋から直ぐに口へつぎかけ、ワッと云うて手を打つも、足で打ちまするが、この里の行儀作法でござりまする。

利休　成る程、兎角所の作法に致すがよい。手前どもも、この通り手を出さぬが、よいか。

福右　左やうでござります。それが誠の大盡風と申すのでござります。時に、旦那のお好みがござりまするか。

竹六　あるとも〳〵、今宵旦那をお供いたしましたは、お望みの方があつて。

福右　お待ちなされや。あなたのやうな御隱居様には、大方振り袖の新造さまがお定まりぢやが、外にお望みがござりまするかな。

平吉　イヤ、あなたは、とか〳〵わつと云つて騷ぐのがお好きぢや。

德八　この里で瀧川と云ふ藝子、きびしい者ぢやげな。この噂をお聞きなされ、見ぬ戀に、あこがれてのお出でぢや。
福右　これはしたり、
卯吉　殊に依つたら、直ぐに今宵身請けの御相談。
四人　なんと、きついか〳〵。
福右　イヤ、あんまりきつ過ぎて、迷惑でござります。
四人　そりや、なぜ。
福右　その瀧川は、この里で三年が間の流し者。こちらにさる田舍のお客が、身請けの御相談がござりまする所へ、大阪の分限者の旦那が、金せきの御相談。その後へあなたの御相談は出來ますまい。あちらもこちらも寶の山へ入つた、寶來屋の福右衞門。咽喉をかわかすばかりでござります。
利休　ハテ、それは氣の毒。と云うて外の者に望みはない。然らば、その瀧川に、ちよと近附きになりたいが。
福右　そりや、お心安い事でござります。
　ト云ふうち九郎次、瀧川、おとく、その外皆々附き、ワヤ〳〵云うて出て來る。
瀧川　なんとマア、あんまりぢやないかいなア。
皆々　そりや道理でござんすわいなア。
　ト云ひ〳〵出て來る。
福右　オヽ、好い所へ瀧川、皆ザワ〳〵と何事ぢや。
とく　意地惡の平平さまが、拗て居やしやんす瀧川さんを捉へてなア。
福右　又こぢつけ口說きか。抛つて置きや〳〵。
　ト瀧川を利休の側へ連れ行き
ハイ、お大盡樣、これが彼の御注文の、瀧川でござります。
利休　ドレ〳〵。サヽ、、これへ〳〵。
　ト瀧川を側へ寄せ
ハテ、しほらしい。なんと、好い目元ではないかいの。
竹六　左やうでござります。京大阪の遊所を探しても、此やうな藝子さんはござりませぬ。
三人　天晴れの上首さま。
利休　大盡は太夫の藝者に、物を遣るものと聞き及ぶ。初めての對面。ア、何ぞ遣りたいなア。オヽ、この提げて居る巾着は、そとした裂れなれども、手前が志し。縫ひ直して守に召され。外してやりたいが、手を出すとこの里では笑ふげな。コレ末社達、これ外してやつて下

されれ。

源六　心得たりと云ふまゝに。やがて巾着奉る。

ト利休が提げて居る糸入れの袋を取つて瀧川にやる。

瀧川　ついしかお目にかゝりませぬわたし。お尋ねなされて下さりまする、御深切の上に、綾錦にも勝つたお志し、忝ならうござります。

ト頂き、懐へ入れる。

利休　なんと末社達。これから瀧川諸とも、奥でわつさり酒宴に致さうか。

四人　そりや、よろしうござりませう。

源六　サア、瀧川さんも、奥へお出で。

瀧川　アイ、それへ參じませう。

皆々　サア〳〵、申し、お大盡様。

利休　イザ、末社達。

卯吉　オツと、これから奥で一騒ぎ。

平吉　呑めや唄へや、一寸先は闇の夜。

福右　わい〳〵のわいとさ。

ト踊り三味線になる。この一件、皆々奥へ入る。後に瀧川殘る。合ひ方になり、瀧川こなしあつて

瀧川　ア、。イカサマ、水の流れと人の身の上とは、よく云うたものぢやなア。大佛前で捕はれとなつた時、この源五郎さまは、どうさしやんした、例へ死ぬるとも二人一緒にと思ふゆゑ、惜しからぬ命を助かり、この里へ流し者。今日は尋ねてござんすか、明日は來て下んすかと、待てど暮らせど便りもなし、噂を聞けば源五郎さんも、矢ツ張りその時、共に捕はれてならんしたと、聞いた時の悲しさ。いつそ死なうと幾度か、剃刀に手はかけながら、まー度顔が見たさ、輪廻に迷うて、今日までも、憂き命を存らへて居るわいなア。先刻に奥で皆さんの話しには、今日堺の濱で、源五郎と云ふ者が、命助かつたとの事。もし命助からしやんしたが、眞實やら僞はりやら。ほんに何が何やら心も心ならず、寐るも寐られず現にも、逢ひたい見たいが積の種。心の内の苦しみを、人前作る紅白粉。この身の爲には苛責の責。胸は張裂く血の涙。泣かぬ日とてもあらばこそ。涙に絞る袖袂、身の苦しさも悲しさも、誰れに語らふ人はなし。どうぞまー度逢ひたうござんす、お顔が見たうござんすわいなア〳〵。

ト大泣き。この時奥より、源五郎、ソツと出て、あたりを見廻し

源五　瀧川どの。

ト云ふ聲に瀧川、源五郎を見て

瀧川　ヤア、源五郎さんか。よう來て下さんした。逢ひたかつたわいなア／＼。

ト抱きつき泣く。

源五　オヽ、道理ぢや／＼。

ト背中擦られぬこなし。

瀧川　大佛前でこなたを見失ひ、大勢に取卷かれ、搦め捕られた時の口惜しさ。こなたも共に捕はれたとも知らず、牢の內でも案じてばつかり。ところに今日、不思議と命助かり、樣子を聞けば、この乳守へ流し者。惕りせまいか、驚ろくまいか。マア、無事で嬉しうござる。

瀧川　ようお前も顏見せて下さんした。わしや今、死んでも本望でござんすわいなア。

源五　イヤ、瀧川どの、早速ながら賴みがあるが、聞いて下さるか。

瀧川　オヽ、改まつた賴みとは、マア、なんでござんすぞいなア。

源五　イヤ、外の事でもござらぬ。その賴みと云ふは。

瀧川　なんでござんすえ。

源五　思ひ切つて下され。

瀧川　エイ。

源五　この源五郎が事は、フツツリ思ひ切つて下され。

瀧川　そりやマア、なぜでござんすぞいなア／＼。

源五　サヽ、譯を聞かねば尤もぢや。元おれが親利休どのは、お前の父上、明智さまの大恩を受け、御家來も同然の身の上。なりや、この源五郎が爲にお主筋。知らぬ先は是非もなし、知つてなんと夫婦になられませうぞ。先達て大佛前にて、五右衞門どの、物語り。明智樣の御息女と聞いて、その時からこの源五郎は、フツツリと思ひ切つて居りまする程に。これまでの緣と思ひ諦らめ、思ひ切つて下さりませ、瀧川さま。

ト瀧川、源五郎が顏をヂツと見詰めて居て

瀧川　成る程、事を分けたお賴み。得心いたしました。

ト泣く。

源五　そんなら、聞き屆けて下さりましたか。エヽ、忝ない。

瀧川　アイ、聞き屆けましたに依つて、さらばでござんす。

ト剃刀にて、自害せうとする。

源五　これ待つた。

ト剃刀の手を膝にて押へる。
瀧川　イヽエ、お前に別れて何樂しみ。留めずと殺して下さんせ。
ト突き退け死なうとする。
源五　待つた〳〵。
ト兩手の叶はぬこなしあつて、いろ〳〵留める。
瀧川　イヽエ、死ぬる〳〵。
ト突き退け幾度も死なうとするを、源五郎、いろ〳〵焦り、トゞ肱にて剃刀を刎ね退ける。瀧川、剃刀取落す。源五郎、剃刀の上へトンと座る。瀧川、剃刀取らうとする。
源五　サヽヽ、女夫ぢや〳〵〳〵わいなう。
ト瀧川、キツとなる。
瀧川　源五郎さん、そりや眞實でござりまするかえ。
源五　なんの僞はり云はうぞいの。
瀧川　エヽ、嬉しうござんす。
源五　時に、お前の身の上は、亭主に相對して、さらりと身請け濟んだ程に、幸ひ親仁樣は、和泉の今市に侘び住居。マア、お前は利休どのゝ方へお出でなされませ。私しは亭主に金を渡し、後から追ひ付きませう。サア、一時も早う、申し〳〵、瀧川さま。
ト氣を急いて云ふ。
瀧川　イヽエ、嫌でござんす。女夫になると云うて置きながら、お前樣の、イヤ瀧川さまのと、わしやその主あしらひが嫌でござんす。明智の娘が嫌ぢやわいなア。逢て主あしらひさしやんすと、わしや矢ッ張り死にまする。
ト剃刀を取らうとするを押へ
源五　サア〳〵、そんなら瀧川。
瀧川　アイ〳〵。
ト嬉しがる。
源五　今云うた通り、わが身は先へ、親仁樣の所まで行て、待つて居や。おれは後から追ひつく。サア、ちやつと行きや。
ト急き立つ。
瀧川　そんなら、どうでもわたし一人、先へ行かねばならぬかいなア。
源五　ハテ、一緒に行ては目立つ。殊におれは後に、まだ用がある。マア、わが身は先へ行きや〳〵。
ト瀧川を表の方へ突き出すこなし。瀧川は思案しながら、門口へ行かうとして

瀧川　イヽエ、まだ行かれぬわいなア。

源五　なぜ〳〵。

瀧川　なんぼ女夫ぢや〳〵と、口ではつかり云うて下さんしては、わたしやどうやら心が濟まぬわいなア。殊に和泉とやらへ夜道と云ひ、わたし一人行く事は嫌でござんす。お前も一緒に來て下さんすか。同じ事なら今夜は爰で、二人寐て、明日の事にさしやんせいなア。

源五　ハテ滅相な。其やうな怨せな事ぢやない。夜半の鐘が鳴ると、この源五郎が……並や大抵、用のある事ぢやない。お前が爰にござつては……イヤ、わが身が爰に居ては、おれが氣が堪らぬ程に、どうぞちつとなりと早う廓を出したい。ハテ、この堺の出外れまで行くうちに、後から追ひつく程にな。サ、早う。

瀧川　サア、そんなら先へ行くわいなア。行くは行くければど、どうやら心にかゝつて。

源五　心にかゝらいで、なんとせう。これがこの世の。

瀧川　エヽ。

源五　イヤサ、この夜の更けぬうちに、行てたも〳〵。

瀧川　イヱ〳〵、どう思うても心細うござんす。此やうな時には、いつそ酒なと呑んで。

トここにある銚子杯を見て

ムウ。幸ひ爰にあるわいな。

ト取つて來て

ドレ〳〵、一つ呑んで、風邪を丈夫にして行かうわいなア。

源五　それがよからう。早う呑みや〳〵。

瀧川　アイ〳〵。

ト云ひ〳〵酒を注ぎ、呑んで

ア、嬉しや。どうやら心がはつきりとしたわいなア。イヤ申し、源五郎さま、とてもなら、わたしの心の落つくやうに、祝言して下さんせぬか。

源五　ヤ。

瀧川　そも八幡で見染めてから、本意ならぬ引別れ、大佛前で初めて枕交した時のその嬉しさ。喜ぶ間もなう、その場の騒動。今宵たまさかに顏見ると、直ぐに別れねばならぬ、夫婦の縁の果敢なき。せめてわたしが心ゆかしでござんす。祝言の杯は、姫御前から呑んで殿御にさすといな。わたしがこの杯。サア、一つ呑んで下さんせ。

ト杯を差出す。源五郎手の出されぬ術なきこなしある。

瀧川　エヽ、ちやつと杯を取らしやんせんかいなア。
源五　サア、今は酒機嫌がない。祝言の杯は今爰でせいでも、親仁様の所へ行たら、打揃うて杯するわいなう。
瀧川　イエ〱、いま杯せにや、心が濟まぬわいなア。どうあつてもお前、祝言の杯は否かえ。
源五　イヤサ、否ではないけれど、とつとモウ、何やかや心がもだしうて。
瀧川　イエ〱、否でござんせう。わたしと祝言の杯さしやんしては、云ひ號けの早枝さまへ、立ちませぬかえ。
源五　ハテ、さう云ふ事では。
瀧川　そんなら杯取らしやんせ。
源五　サア。
瀧川　否かえ。
源五　サア、
瀧川　早枝さまへ立たぬかえ。
源五　なんのマア。
瀧川　サア、そんなら。
ト杯さしつける。
源五　サア。
瀧川　サア〱〱。
ト杯を瀧川捨て
エヽ、お前はなア。
ト胸倉を取りにかゝる。源五郎、手錠を見せまいと懐手にて振り放す。瀧川、又かゝるを振り放す。この模樣二三度あつて、途端に源五郎が懐手より五つ目の早枝が狀落ちる。瀧川、取る。
瀧川　源五郎さま參る、早枝より。
ト源五郎、それはと寄るを、瀧川、源五郎にしがみつき
エヽ、聞えませぬ〱〱わいなア。
ト源五郎に武者振りつく。この模樣にて源五郎が上着兩肌脱げ、襦袢の上に手錠打ちあるを瀧川、見て
ヤア、これは。
ト大恟り。
源五　コレ、人が聞く。密かに〱。
瀧川　それでもお前。
源五　サア、これには樣子のある事ぢやわいなう。
トこなしあつて、源五郎どつかと座り、この模樣のうち瀧川、最前の茶入れの袋落ちてある。瀧川、源五郎

に取りついて。
瀧川　ちやつと様子を、聞かして下さんせいなア〳〵。
トおろ〳〵泣いて云ふ。
源五　今日命助かつたと云ふは僞はり、誠は五右衞門が手下の源五郎、捕り手を殺めた科遁がれず、死罪に極まりしゆゑ、せめて親仁様に暇乞ひを願ひしところ、親仁様はお出でなく、早枝よりこの小袖羽織に金子百兩添へ、この金で瀧川さまの身請けして、夫婦になつて下されと、我れと我が身を百兩に勤め奉公。今宵突き出しの新造と云ふは、早枝が事ぢやわいなう。
瀧川　エヽ。
源五　それもその一通に、詳しう書いてある。それを見るより南無三、早枝を勤めさせては、親仁様へ義理立たず、元よりこなたを廓に置いては、預かつた五右衞門さまへ猶義理が立たぬといひ、親仁様の爲にも大切なお主の御息女。それゆゑ高景さまへ親孝行を申し上げ、暫時の猶豫を願うてこの手段。今宵夜中が源五郎が命の終り。それまでにこなたを親仁様へ手渡しせうと、最前からの心遣ひ。所詮源五郎は助からぬ命。一時も早う利休さまの方へ落ちのび、せめて死んだ後でも、五右衞門さまへ義理を立てさせて下さりませ。
瀧川　イヽエ、早枝さまの志しと云ひ、お前の義理を捨てさせまするは、悲しうござんすけれど、お前を先立て、後へ殘れとは、そりや胴慾でござんす。わたしも一緒に死にたうござんすわいなア〳〵。
ト取りつき泣く。
源五　ヤア、これ程に云ふに聞分けのない。達て聞入れさつしやらぬと、未來永々夫婦でないぞ。
瀧川　エヽ。
源五　聞分けて立ち退いて下さるか。
瀧川　サアそれは。
源五　縁を切らうか。
瀧川　サア。
二人　サア〳〵〳〵。
源五　所詮天の網のかゝつた、源五郎が身の上ぢやわいなう。
瀧川　ハアヽ。
ト大泣きに源五郎、前に落ちたる茶入れ袋に目をつける。
源五　この茶入れの袋は。

ト　きつと見て

こりや正しう本能寺裂れ。

瀧川　エヽ。

源五　元この裂れは春永公より、明智光秀さまへ御拜領あつて後、また親利休へ下されしとの兼ねての話し。

瀧川　そんなら、これが本能寺裂れ。

ト取上げる。

源五　どうして、この茶入れの袋が。

瀧川　そりや先刻に、お客様に貰ひましたわいなア。

源五　ムウ……その中改めて見さつしやれ。

瀧川　エヽ。

ト袋の中より小さき鍵出る。

此やうな鍵がござんした。

ト見せる。源五郎、少しこなしあつて

源五　ドレ。その鍵を、この手錠へ。

瀧川　アイ。

ト右の鍵を手錠に合す。ぱつちりと手錠外れる。兩人恟り。

源五　ヤア、手錠が。

ト兩人顏見合す。

ハテナア。

トこなし。この時奥より平平、ズッと出て、茶入れ袋を取りにかゝるを、源五郎、平平を突き退ける。

平平　コリヤ、何するのぢや。小田家の重寳本能寺裂れ、わいらがやうな小盜人が持つて、何の益ないものぢや。身共が手に入ると、直ぐに小田彈正どのへ差上げ、手がかりにする。早く此方へ渡せ。

源五　ムウ。すりや其方が、

平平　オヽ、平の平平と云ふ馬鹿者に見せ、入込みし某は、筒井順慶が忰熊太郎。元來親順慶、千鳥の香爐を奪ひ取り、その科を久次に塗らんと、蜀紅の錦の陣羽織を、寳藏に殘し置き、折角奪ひ取りたる香爐を、また五右衛門が盜み、この在所を詮議せん爲、瀧川に執心して爰に逗留するも、五右衛門が隱れ家を聞き出さんと思ふばかりぢやわい。

源五　五右衛門どのの詮議とは、こりや、うぬも命が寐腐つたわい。

平平　さう吐かしや、うぬから。

ト切つてかゝる。立廻りよろしくあつて、平平が刀を

叩き落し、直ぐに取つて引寄せる。と奥より高景ズッ
と出て、
高景　源五郎、出かした。
源五　高景さま。
高景　ソレ。
ト捕り繩投る。源五郎、手早う取つて平平を縛る。
源五　手がかりは手がかり、科は科。イザ、源五郎も、繩
をおかけ下さりませう。
高景　イヤ、其方に科なき證據は、ソレその手錠の赦りし
に心が附かぬか。
源五　誠にこの鍵にて。
瀧川　先刻のお客と云ふは。
利休　今際の際の名殘り、せめて親子の暇乞ひ、
ト中より障子サッと明き、利休出る。と西の方より取
りつき泣く。と奥より竹六、平吉、德八、卯吉、幇間出
を引替へ、四人とも捕り手の形にて利休が後に附き出
る。
源五　すりや、源五郎が代りに。
高景　利休、イザ、封印改めう。
利休　ハッ。

ト下に居る。高景、利休が上着の兩肌脫がす。利休、
手錠打ちあり、源五郎、瀧川恟り。
源五　ヤア、このお姿は。
ト利休、瀧川と源五郎が顏をチッと見て、ホロリと泣
く。この時、高景始め四人の捕り方、下に座る。後に
並び、繩附きの平平を引据ゑる。
利休　ア、、誠に、移り變るは世上の習ひ。明智光秀さま
の御息女が、なされもつかぬ廓の住居。定めて樣とは云
ひながら、御家來同然の利休が悴と云ひ替し、さまぐ\
の御艱難。せめて父御光秀さまへ御恩送り、あなたのお
身に凶事ないやうにと、悴源五郎が代りに、この利休が
命をお取り下さりませと、願ひ叶うたこの手錠。
源五　エ、。
利休　最前除所事になぞらへ、お渡し申したその茶入れの
袋は、光秀さまが拜領の本能寺裂れ。父御のお形見も同
然。二つには悴が手錠の御免の鍵。其方が命を助かり、
二人睦まじう添はさうと、心を碎いた今宵の仕儀。如何
なればこの利休、罪と云ひ悴まで、盗賊のゆかりを引き、
人並ならぬ非道の働らき。それに引替へこの利休、久吉
公より度々茶道にお招きあれども、古主光秀公への義心

を立て、これを辭退は致したれば、今と云ふ今、久吉公のお側へ命を差上げるお目見得奉公。これまで持ち傳へたる數多の茶器、殘らず差上げる、その中に、光秀さまより拜領の本能寺裂れ、敵の手へは渡すまいと、あなたにお渡し申すその一品。隨分大切にお持ち下さりませ。云ひ置く事はこればかり。源五郎、瀧川さまを大切に賴んだぞよ。

源五　勿體ない。身に科ある源五郎が代りに、親を殺しましては、天罰の程は思し召して下さりませぬか。

利休　たわけ者め。天罰を思へばこそ、明智さまの御息女、瀧川さまのお身を全うさせますぢやないか。

源五　ぢやと云うて。

利休　但し、おのれを仕置させ、瀧川さまもお果てなされ、この利休が生き殘り、不忠者と業曝して、諸人に笑はすかい。

源五　サアそれは。

利休　サア。

源五　サア。

兩人　サア／＼／＼。

利休　コリヤ、老さらぼうたこの利休、二人が命には好い代へもの。達て得心せずば、七生まで親子でないぞ。

源五　そんなら、どうでも。

利休　穢さじと思ふみのりをともすれば、世渡る橋となるぞ悲しき。

ト瀧川、源五郎、顏見合はす。

瀧川　ハア、。

ト泣き落す。

高景　ヤア、妹、早枝をこれへ。

むら　畏まりました。

ト奥より早枝を連れ出る。

早枝　叔父さん、悲しうござんすわいなア。

ト利休に取りつき泣く。

瀧川　そんなら、あなたは、

むら　兄樣の仰せを受け、遣り手になつて附き添ふも、瀧川さまの隱し目附け、

高景　一旦乳守へ流されしは、天下の政道。瀧川が身に凶事なきやう、妹を附け置きしも、淀町さまの御指圖。

瀧川　エ、、忝なうござります。

利休　早枝、其方が貞心、嬉しいぞよ。源五郎、利休が死んだ後でも、必らず／＼見捨てゝやつてくれなよ。

ト此うち源五郎、こなしあつて

源五　さうぢや。

ト平平が拔身にて腹切らんとする。瀧川、止め

瀧川　コレマア、待つて下さんせいなア。

ト無理に拔身を取る。源五郎、直ぐに利休が合口を取り、瀧川取りつくを突き退け、合口を拔くと、柄と鍔諸共ぬけて合口の鞘より茶杓出る。源五郎、取つて

源五　こりや茶柄杓。

利休　利休が自作のその茶柄杓。亡き後の形見にせい。

源五　すりや、私しに。

利休　これが誠に涙の茶柄杓。

ト源五郎、利休こなしあつて泣く。

高景　利休が一命を以て、源五郎が命まで聞き届けの上は、源五郎、其方にお構ひはない。まつた、これなる筒井熊太郎、親順慶が企みにて、千鳥の香爐を奪ひ、久次公を罪に落さんと謀りし大罪。生捕りしは源五郎が働らき。この功に依り、瀧川が咎罪も、只今御赦免なさるるぞ。

むら　また最前源五郎どのより、亭主に渡されし金子は、直ぐに早枝どのの身の代。

高景　源五郎は瀧川を伴ひ、この場を早く。まつた早枝は利休に引き添ひ、末期の介錯。この上云ふのは未練の至り。

利休　重々厚き御厚恩。

トすつと立つ。

源五　コレ。

ト源五郎、瀧川、兩方より取りつくと、本釣り鐘にて夜半の鐘撞き出す。

高景　最早子の刻。

トきつと云ふ。

さらば。

捕手　立たう。

トしめやかな合ひ方になり、利休、向うへ行く。後より早枝、おむら、次に高景、後より縄附きの平平、後より捕り手四人附き添ひ、皆々向うへ入る。と源五郎、瀧川、利休が影見ゆるまで見送り／＼、こなしあつて

瀧川　ハア。

ト泣き落す。

源五　親仁樣のお志しを無にせまいと、一旦高景どのへ渡したれども、どうも此まゝには差置かれぬ。こなたを五右衞門どのに預け置き、忍び入つて親仁樣を取返す。

瀧川　そんなら、五右衞門どのの隱れ家は。

源五　醍醐の山奥。

ト九郎次、飛び出て、

九郎　してやつた。五右衛門が隠れ家は醍醐の山奥。マア、この瀧川を、

ト瀧川にかゝるを、源五郎、九郎次を取つて投げる。九郎次、切つてかゝる。立廻りにて抜身を奪ひ取り、一桛切る。瀧川、怖がる。九郎次、源五郎にしがみつくを、直ぐに脇腹へ突ッ込み抉る。瀧川慄ふ。九郎次苦しむ。源五郎キッと見得。チョン／＼にて、廻り返し。

造り物、一面の御殿、左右後へ寄りて續きの御簾、屋臺見付け、金襖、燭臺數多灯しあり、舞臺先、兩方に本松の木あるべし。平舞臺の眞中、高景、衣裳野袴、陣笠にて、筒井順慶、衣裳長袴。上の方に左衛門、嘉六、九郎、銘々陣羽織、大口鬘、鉢巻き、右の人數床几にかかり居る。橋がかりの方に千石權平、衣裳上下にて控へ居る。この後に軍兵、金の千成瓢簞の大指し物を持ち、同じ、軍兵、五三の桐の旗を二流し押し立て、その外軍兵大勢立つて提灯を持ち、左右に並ぶ。中にてエイ／＼オウと鬨の聲上がる。遠攻め打ちかゝる。道具納まると遠攻め掠めて打つ。

順慶　名古屋在陣のいづれも、遠路の疲れ、案じ入りましてござる。

左衛　我が君久吉公には異國征伐、斯く申す福島左衛門を始め、肥前名護屋に四ヶ年の在陣。賊の輩、悉く切り靡け、毛唐人の耳を剝いで、日本へ送り給ひ、大佛前の土中に埋み、耳塚とこれを申す。

嘉六　その後加藤、小西が軍功に依つて、我が神國の武威を示し

九郎　勝鬨つくつて日本國へ、めでたく着岸。

高景　夜前堺の濱にて、御目見得申し上げ、御歸陣の行粧美々しく、この高景は路次の警護。桃山の御殿に於て、備へを立てる凱歌の壽。

權平　朝鮮攻めは終ると云へども、未だ四海は穩やかならぬ、折を窺ふ明智が殘黨。

左衛　我れ／＼どもが、太刀の燃めきの覺めぬうち

嘉六　一々に切り從がへ

九郎　四海を治むる

三人　朝敵追討。

順慶　我が君御入朝の政道始め、不義者のお通姫、成敗いたされてよからう。

高景　お通姫さまを不義者とは。

順慶　安藝の領主、毛利元春へ云ひ號けの身を以て、伴作に忍び逢ひ、國遠ありしは科でないか。

高景　聟君たる元春どのは、先月早世あつて、親父元盛どのより、緣組み違變の書簡到來。

順慶　ムウ。すりや、元春は死去召されて。

高景　藝州より離緣の一書。御緣組みは破れても、不義者の科になるか。

順慶　サア、その儀は。

高景　順慶どの、何とでござる。

慶順　イヽヤ、緣組みは破れても、化粧料の朱印を失うた、この云ひ譯は、あるまい〳〵。

ト高景、狀を出して、

高景　先達て盗ませ置きし化粧料の朱印、慥かに落手仕る。三上百助どのへ、小田彈正。

權平　昨日堺の濱に於て、思はず手に入るその密書。朱印のある所は彈正どの。

順慶　すりや、その密書を。

高景　サア、この手跡から詮議いたさば、何處の者へ飛ばしりが、かゝらうやら知れぬ。順慶老、なんと左樣ではござらぬか。

順慶　ムウ……ハテ、好い手番ひでござるなア。

ト向うバタ〳〵にて、軍兵一人走りで、これに附き、お律、着附け、抱へ帶、一腰にて、忍術の卷き物を廣げかけし見得にて出て、軍兵の後に立つて居る。

軍兵　申し上げまする。只今御殿の廻りを、胡亂なる女一人徘徊仕りますゆゑ、召捕らんと存ずるところ、かいくれ行くへ知れず。もしや變化の所爲ならんかと、御注進申し上げまする。

ト云ふうちお律、卷き物を頂いて懷中する。

權平　久吉公御歸館の折から、女とて油斷はならぬ。詮議して引立て召され。早く〳〵

軍兵　畏まりましてござりまする。

トお律と摺れ違ひ走り入る。お律、本舞臺へ來て、皆皆を見て眞中に座り、五郎市は何處に居ると思案のこなし。皆々これを知らず

左衞　承はれば、石川五右衞門と云ふ稀代の盜賊、徘徊

いたすとの風聞。

嘉六　西國にても噂とり〴〵。

順慶　して、五右衞門を

九郎　召捕つてござるかな。

高景　その五右衞門こそ、明智光秀が殘黨。當春大佛前に住居すると上聞に達し、早速討手を差向けしところ、早風を喰うて行くへ知れず。それゆゑ五郎市と云ふ悴を人質に召捕り、この館に牢屋をしつらひ、番人を嚴しく附け置きしが、親子は一體、五郎市は卽ち五右衞門、明朝七條河原へ引出し、釜入りの刑罪にかけよとある評議。

ト　お律、驚ろく。

高景　五郎市を刑罪にかけなば、剛勇不敵の五右衞門なれども、おのれと名乘つて出ねばならぬ。仕置の奉行は順慶老。

順慶　如何にも。五右衞門には意趣もあれば、厄病神で敵とやら。ナニ源吾、其方はこの牢屋の鍵を持つて、五郎市を引出し、七條河原へ引立て參れ。

ト　鍵を渡す。

源吾　畏まつてござります。

ト　鍵を受取り懷中する。お律こなし。

高景　凱陣の上は戰功に依つて、恩賞の御沙汰あらん。軍の供へを納められてよからう、

權平　いづれも勝鬨。

皆々　エイ〳〵オウ〳〵。

ト　遠攻め打ち上げる。

高景　權平は我が君の御旅館、宿直の御番。

權平　承知仕つてござります。

左衞　我れ〳〵は久吉公の御前へ。

高景　順慶老。

順慶　高景どの。

高景　イザ。

皆々　御同道仕らう。

ト　序の舞になり、高景、順慶、左衞門、嘉六、九郎、奥へ入る。お律、奥を見送り思案する。その時御簾一面に下がる。源吾、右の鍵を出して

源吾　なんでもこの鍵で、牢屋の錠をピンと明けて、五郎市が首筋つまんで、釜入りの油責め。五右衞門を釣り出すには、近道の早算用。ドレ、五郎市めを。

ト　行かうとする。お律、鍵を引ッたくる。源吾、恟りして

南無三鍵を、
ト　お律、源吾が額を叩く。
アイタ丶丶。何奴ぢや。
ト　あたりを見て
何奴も居らぬが、ハテ、面妖な。
ト　云ひ〳〵臆病口へ入る。お律、こなしあつて
りつ　五郎市が命の切端。折よう來合せ、釜入りの評議を聞き取り、牢屋の鍵まで手に入れたは、この忍術の卷物の徳。エ丶、忝ない。
ト　一卷を出し頂き
この上は五郎市が身の上。牢屋の案内は今の侍ひ。
ト　奥を見やり、こなしあつて
さうぢや。
ト　ついと臆病口へ入る、と序の舞止めて合ひ方になり、向うより黒着付け、野袴、大小、百日鬘にて、五右衛門、のさ〳〵と出て、花道に立ちとまり
五右　久吉が對陣、今月今日大願成就。ハテ、心地よなア。
ト　こなしあつて本舞臺へ來ると、谷助、粂六、瀧平、岩内、各々奴にて東西より出て
谷助　さてこそ五右衛門。
粂六　ソリヤ。
四人　捕つた。
ト　兩方よりかゝる。二人を取つて投げる。
岩内　うぬ。
ト　又かゝるを同じく投げる。十手にて圍ふ。
四人　動くな。
ト　取卷く。この時、橋がかりより黒裝束、兜頭巾、龕燈提灯を持ち、小田彈正、出かけ
彈正　者ども、待て。
四人　ハツ。
ト　引く。彈正、龕燈にて五右衛門を見て
彈正　聞きしに勝る丈夫の魂ひ。去年山崎に於て盜ませし千鳥の香爐、忍術を以て奪ひ取りしは、正しくさす敵の明智光秀が餘類。討ち捨てんとは思へども、一器量ある骨柄を感じ、命は助ける。この彈正に身方いたせ。
五右　なんと。
彈正　久吉を討つて六十餘州を掌握せんと、我が大望に身方して、國郡の主となるが、其方の活計。五右衛門、なんと。

五右　さ云ふ彈正、この五右衛門に血判せい。
彈正　身に血判とは、
五右　日本は愚か、外國まで切り從がへ、天竺韃靼三國に跨がる盜賊の張本。六十餘州の大名は、一人も殘さず手下にする。其方も血判せい。
四人　その廣言を、
　　ト きつとする。
彈正　イヤ待て。
　　ト留め、こなしあつて
流石の五右衛門、天晴れの魂ひ、事に依らば合體いたさう。身方に附くとも附かぬとも、先づ久吉を討つての事。
五右　して、久吉が寢所は。
彈正　松の間の廊下を傳ひ、新たに營む新殿こそ、久吉が寢所。併し宿直の武士數多あれば、早まつて仕損じなきやう。
五右　すりや、奧殿の。ムウ。よし／＼。
　　ト此うち奴四人、銘々種ケ島を取り出し
米六　我れ／＼はこの種ケ嶋を持つて
谷助　警護の奴ばら、たつた一討ち。
彈正　必らずぬかるな。
四人　畏まつてござります。
彈正　行け。
四人　ハツ。
　　ト東西へ別れ入る。
彈正　この彈正は、久次が居間へ忍び、騙し寄つて打ち放さう。
五右　身は猿冠者を討ち取つて、日頃の本望。
彈正　五右衛門ぬかるな。さうぢや。
　　ト奧を窺ひ、ツッと御簾館へ入る。と順慶、鎗を構へ、橋がかりより權平、股立ちにて鎗を構へ、左右よりツカツカと出て、
權平　曲者、動くな
五右　コリヤ、何する。
順慶　御座の間近く怪しき曲者、
權平　面體骨柄、紛れもなき石川五右衛門。
順慶　御前へ引きつけ、罪の段々白狀さする。
權平　道に迷つて眼が見えずば、權平が道しるべしてくれふ。
兩人　サア、歩め。

ト鎗を構へる。

五右　コリヤ、蝗めが味をやるな。如何にも、うぬらが推量の通り、盜賊のお頭、石川五右衞門とは、おれが事ぢや。

兩人　さてこそな。

五右　斯う名乘つてあるからは、歸れと云うても滅多には歸らぬ。うぬらが主人と賴む久吉も、また久次も、この五右衞門が手下にして、盜賊の仲間へ入れる。久吉が爲には大切なお客樣ぢや。大名どもに云ひつけて、馳走たつぱいひろげと云へ。

順慶　その馳走には、大身鎗の作り身、

權平　ひいやりとしたこの生物。

兩人　賞翫いたせ。

ト槍をしごく。

五右　こりやア御馳走だ。大身鎗でも太刀の魚でも、五右衞門が咽喉は鎌倉海道。はぶしにかけて、ばり〱だぞ。

順慶　細言云はずと

權平　我が君の御前へ

兩人　サア、歩め。

五右　ドリヤ、行かうか。

ト合ひ方になり、槍にて左右より突き廻す。五右衞門、懷中にて、ノサ〱と、この見得にて臆病口へ入る。と序の舞になり、バタ〱にて橋がかりより、小鮒源五郎、茶屋場の形にて拔身を持ち、侍ひ大勢を切りまくり出る。少しタテあつて、皆々橋がかりへ逃げ込む。

源五郎、こなしあつて

源五　我れに代つて親人の紀明を、餘所に見放すは不孝の第一。密かに奪ひ立退かんと入込みしが、この館に親人のある所知れぬは、迂濶にも切り込まれず、ハテ、何としたものであらう。

ト思案してこなし。と向う戸屋の内にて、

内方　ヤア〱、警護の衆。千の利休を廣庭へ引据ゑ、縛り首を打たつしやれ。

ト聲する。源五郎キッと見て

源五　ナニ、親人を成敗とな。あれなる廣庭。さうぢや。

ト拔身を構へ、本花道へ行かうとする。と本舞臺、御簾の中より

利休　ヤア〱源五郎。敵地へ入込み、狩人の餌にかゝるか。千の利休はこれにある。早まるな。マア〱、待て。

源五　ト呼び止むる。源五郎、振り返り、こなしあつて
正しく親人のお聲。さては。
ト正面の御簾、一面に上がると、御殿の中央に利休の
木像飾りあり、序の辨にて、合ひ方になり、源五郎、
木像を見て驚ろき
源五　こりや、コレ親人の木像。今お止めなされしと云ひ
無心の木像、詞をかけしも不思議の一つ。爰に在すが如
く飾り置きしも、これも不思議。
トこなしあつて、刀を納め、木像の前にある扇を取上
げ見て
こりや、親人のお好み。利休形の扇子。
トちよつと思案して扇を開く。とこれに書きつけあ
る。源五郎讀む。
子ゆゑに逢ふ夜の鶴、雉子の塒に迷ひ、老の命を果さん
と爰に來る。然るに大領、異國凱陣の喜び、非常の大赦
とあつて、我れも助命の御沙汰に及ぶ。
ト讀みさし
すりや、御安泰なるか。エヽ、忝ない。
トまた讀む、
元來我れは閑居の願ひ、武將の懇望に依つて、手づから
木像を彫刻して爰に殘し、功成り名遂げて身退く者な
り。
ト讀み終り、こなしあつて
源五　さては親人の心魂籠りし木像ゆゑ、いま源五郎が危
ふきを留め給ふ、御慈愛深き父の面影。エヽ有り難い、
ト木像を拜み、右の扇を懷中して、下へ下り、奥の方
を見やり、
斯程深き武道の仁心、五右衛門どのへ荷擔人、久吉公へ
恩を仇、恩を思へば義に背く。恩と義理とに一つの命、
捨てるより外はない。
ト木像に向ひ
親人樣、先立つ不孝はお免し下され。さうぢや、
ト切腹しようとする。と臆病口よりお律、五郎市を連
れ、出かけ居て、この時、左右より止めて
りつ　コレ源五郎、早まるまいぞ。
五郎　叔父樣、死んで下さるないなう。
源五　ヤア、姉者人、五郎市。どうして爰に。
りつ　サア、入込みし申妻あつて、虜となりし五郎市に巡
り合ひ、奪ひ返して來たのぢやわいなう。
源五　隱れ家に殘した瀧川さまを、五右衛門どのへお渡し

申して下され。おさらば。
ト死なうとする。
りつ　コレ、待ちや。
源五　放さつしやれ。
ト二人を引き退け、死なうとする。と奥より五右衛門、ズッと出て
五右　源五郎、早まるな。待て。
りつ　ヤア、五右衛門どの。
五郎　父様かいなう。
五右　久吉を討たんと、忍び入つて窺ふところ、寝所を替へしは運強き久吉。討ち洩らして残念なわいやい。
りつ　何は格別五郎市、あの子の命助つたは、この忍びの術の一巻の徳。
ト巻き物を出し、五右衛門に渡す。
源五　五右衛門どの、拙者が切腹、何ゆゑ、止めさつしやる。
五右　子ゆゑに迷ふ父の恩愛。コレ、この利休どのの目の前、命を果して孝になるか。
源五　サ、、その儀は。
五右　死は易く生は難し。元来武道を捨てたる其方。存らへて父の先途を見届けるが、その身の肝心。
源五　尤も。この上は命全う、親人の先途を見届けませう。
りつ　さうして、お前は。
五右　忍術を以て御殿の隅々探し求め、是非猿冠者を討つて捨てる。女房、其方は五郎市を誘ひ、城山の絶頂に隠し置きたる千鳥の香爐。打ち割るが調伏同然。必らずぬかるな。
りつ　すりや、千鳥の香爐は城山の絶頂。
五右　源五郎は利休どのの後を慕ひ、暫時も早く。
源五　でも、お前の一大事。
りつ　此まゝ捨てゝ
兩人　どうも。
五右　當座の義理に孝を捨てるか。
源五　サア、その儀は。
五右　落ちずば夫婦の緣を切らうか。
りつ　サア、それはな。
五右　エ、、この場を立退け〳〵。
ト兩人、思案を極め、こなしあつて
りつ　是非に及ばぬ。立退きませう。

源五　詞に從ひ、落ち延びませう。

兩人　さうぢや。

ト お律、五郎市を連れ、源五郎も一時に立ち上がる。

五右　兩人待て。我が類族を討ち取らんと、館の四方は數多の同勢。切り拔ける手段があるか。

ト 兩人、キッとこなしあつて、

りつ　わたしも利休が娘。五郎市を大事に思ふ女の念力。

源五　百萬騎の固めでも、切り拔けるに仔細はござらぬ。

五右　イヽヤ、心は剛でも元が町人。お律は元より女の手業、多勢に遭つては、イヤ、心元ない。

ト お律、源五郎にこなしあつて、東西の松の立ち木をキッと見、お律は西、源五郎は東へ、ツカ〳〵と行く。刀の胸にて松の枝を切り、その枝を折つて、ツカツカと戻り、五右衛門にさしつける。

源五　これではなんと、

ト 五右衛門、兩方を見て

五右　見事。

りつ　五右衛門さま。

五右　早う行け。

源五　おさらば。

りつ　おちや。

ト 五郎市を連れ、お律は向うへ、源五郎は橋がかりへ別れ、走り入る。五右衛門、スッと花道の際まで行て、向うを見送り、空をキッと見て

五右　今宵の分野は。

ト 指を繰り

淸きしい、べきは南方の宿星。せい、きりう、せい、ちやう、よく、しん、は、北にたんだす。

ト 指を繰り、靜々廻り

火星金星を剋するは、ムウ。すりや、身方のうちより禍ひを生ぜしか。ハテ、忌はしき前兆ぢやなア。

ト どろ〳〵にて星、井の中へ落ちろ。掛け煙硝立つ。

キッと見て、

白星は火中に沒し、猛虫とともに消え失せしは、ムウ、さては。

ト 忍術の一卷を出し、慶げ驚ろくこなし。

大領が居間に飾りし瓢の旗は、八百萬神。これを守り、我が忍術を挫きしか。

ト 一卷を捨て、こなしあつて

ハテ、小賢くも謀つたよなア。

ト静かな遠攻めになる。五右衛門ぎつくりして

五右　あの遠攻めは。

トあたりを見廻し、思ひ入れあつて、袖を返し、着込みの紐をする。それより花道へ行つて向うを見やり、腰當出して紐を結ぶ。此うち戸屋の内より組子出て、十手を構へる。五右衛門呪む。組子逃げ込むと、こなしあつて立ち上がると、戸屋の内より組子二人、橋がかりより二人、ツカ〳〵と花道へ行て

組子　動くな。

ト十手構へる。五右衛門、圍まれながら、のさ〳〵と本舞臺へ戻り

五右　からくためら。寄りあがるな。

組子　捕つた。

トかゝる。五右衛門、一々取つて投げ、刀を抜く。皆逃げ、橋がかりへ追うて入ると、奥より彈正出る。臆病口より順慶出て

彈正　順慶、手筈はどうぢや。

順慶　されば、今宵久吉が油斷を窺ひ、押寄せる術計。それとも知らず五右衛門を召捕らんと、アレあの遠攻め。

彈正　如何にも。五右衛門を殿中に切り込ませ、その中を捕る身共が計略。身方の者は藤の森に埋伏。順慶は彼處へ參つて萬事の駈引き。

ト朱印を出して

先達て手に入れ置いた化粧料の朱印。身方を集むる手筈の合ひ印。

ト渡す。

順慶　然らば身共は藤の森へ。

彈正　早く行きやれ。

順慶　合點ぢや。

ト橋がかりへ走り入る。彈正こなしあつて

彈正　館の騒動。この擧に乘じて。さうぢや。

ト奥を目がけ行かうとする。むらじ、スツと立ち塞がり、彈正引退け行くを、臆病口よりお通姫、橋がかりより早枝、ツカ〳〵と出て三人、彈正を取卷く。

むら　彈正さま。

彈正　女郎ども、何ひろぐのぢや。

早枝　其方を、

ト懐劍構へて寄るを、むらじ留めて

むら　アヽ、コレ〳〵、戀ぢやわいなア。

お通　なんと。

むら　サア、あなたの戀は伴作さま、その伴作さまの行くへは知れず、早川高景が、妹風情、所詮及ばぬ望みなれど
お通　この通も夫婦になりたさ。
早枝　今日お館へお目見得の腰元早枝。
むら　彈正さまの閨の添臥し、お宮仕へ。
三人　致したさに。
彈正　すりや、三人とも。
三人　アイ。
彈正　ハヽヽ、有り難い戀の罠。その手で參る彈正でない。出直せ〳〵。
むら　疑ひ深い。眞實誓文。
　ト刀を拔かうとする。彈正引き廻す。早枝、お通姬、懷劍拔いてかゝる。立廻りあつて、兩人を左右にトントンと蹴飛ばす。むらじ、かゝるを取つて引据ゑ、拔身を捥ぎ取り切らうとする。この時高景、短刀載せし三方を持ち、ズッと出て、彈正を引き廻し、
高景　戀の取持ち、高景がしませう。
彈正　高景。其方が。
高景　如何にも。聟引手はこの短刀、貴殿の脇腹、左へ突ツ込み右へ廻し、首尾よく納まる、三三九度、すつぱりと遊ばせ。
　ト三方を差しつける。
彈正　默れ高景、彈正は何ゆゑ切腹、血迷うて馬鹿つくすな。
　ト三方を叩き落す。
高景　さうは云はさぬ。叛逆人の小田彈正。
彈正　何がなんと。
高景　夜前乳守の廓に於て、召捕りし順慶が忰熊太郎、拷問の上一々白狀。殊に只今順慶へ渡した朱印。千石權平、早く〳〵。
權平　ハア、。
　トどんちやんにて權平、朱印を持ち、峯六、瀧平、谷助、岩内、拔身の形にて、皆々種ケ島を持ち出て、
伴作どのと申し合せ、順慶を途中に待ち受け、ぶち殺して御朱印は伴作どの、この權平は熊太郎を始め一件の者ども、殘らず討ち取り、いづれも、ソリヤ。
　ト奴四人、彈正を取卷いて筒先を向け
四人　動くな。
　ト圍ふ。

弾正　さては、うぬらも裏返つたな。
高景　ヤア、愚か／＼。汝が野心を見出さん爲、犬に入れ置く力者の面々。
米六　それとも知らず一大事を、
濡平　明かしたは汝が天命。
谷助　自業自滅。
岩内　遁がれはあるまい。
高景　斯く露顕の上は、尋常に切腹するか。
權平　但し押へて掻き首にせうか。
米六　火蓋を切らうか。
濡平　返答が生死の境。
皆々　サア／＼、なんとぢや。
　ト詰めかけて云ふ。弾正こなしあつて
弾正　謀る／＼と思ひしに、うぬら如きの手段に乘つたか。この上は死者狂ひ。高景、うぬ。
　ト高景へ切つてかゝる。よろしく引き廻す。奴四人程ケ鵜な構へる。
高景　疵つかぬやうに搦め捕れ。
四人　動くな。
弾正　何を小癪な。

　ト抜身を構へ、奴四人突き廻して橋がかりへ入る。バタバタにて軍兵走り出て、
軍兵　申し上げます。石川五右衛門、築山へ切り込み、手痛く働らき、なか／＼手に餘り見えまする。御加勢御加勢。
　ト云ひ捨て入る。
高景　軍神の御旗に依つて、忍術を行はん事思ひも依らず。權平、召捕つて手柄にしやれ。早う／＼。
權平　心得ました。
　ト橋がかりへ走り入る。
高景　いづれも、ござれ。
　ト女形皆々奥へ入る。とドンチャンきびしく、中にてアリヤ／＼の聲する。トこの道具一面に引く。
　向う一面、奥深に躑躅山の景色、提燈、松明照らし、眞中に五右衛門。荒れの形にて抜身を構へ、組子大勢、取卷き、見得して居る。大タテいろ／＼あつて組子逃げると、奴四人入れ代つて梯子タテになる。切つてかゝるを一々切りまくり、皆々逃げる。五右衛門キッと見得。と臆病口より久次、金の采配

を持ち、高景、三方に千鳥の香爐を載せて持ち出る。女形皆々付き添ひ、軍兵、瓢箪の旗を押し立て出る。橋がかりより權平、四人の奴、各々提灯を持ち出る。五右衛門を取卷く。

久次　ヤア〳〵石川五右衛門、眞柴久次が、見參々々。

五右　さては久次。

ト寄らうとする。

皆々　動くな。

ト圍む

久次　父大領は大内へ參内とも知らず、切り入りしは汝が不覺、萬神守護の御旗を持つて、忍術を挫き、最早遁がれぬ其方が天命。

高景　汝が女房、千鳥の香爐を差上げ、訴人の褒美。夫の一命助けくれよと、女の貞節。

久次　この上は心を改め、降參するか。

皆々　五右衛門、なんとぢや。

五右　ヤア、降參とは穢らはしい。惡く寄つたら御殿の内に、死人の山をつくるぞ。

久次　申し附けし組子の者、早く參つて五右衛門を召捕れ。

五郎　ハア、。

ト橋がかりより五郎市、半纏胸當、捕り手の形にて、十手を持ち、ズッと出る。

五右　ヤア、其方は五郎市。

五郎　コレ〳〵父樣、今日からは久吉さまの御家來。忠義ゆゑには親をも捨てる。父樣やらぬ。

久次　五右衛門が節義と云ひ、千の利休は風雅の道、手づから刻む木像は、北山の大德寺の山門に納め置き、長く茶道の譽れを殘さん。不破伴作は御朱印手に入れし、功に依つてお通さまと婚禮、瀧川は源五郎に娶合せ、また早枝は嬖。

お通　エ、、忝ない。

久次　早枝を以て明智の先祖、土岐伯耆守が家名相續、源五郎は四王天の家を繼ぎ、長く眞柴の家臣となさん。

トお律、出かけて

りつ　エ、有り難い。斯程正しき御政道に、刃向ふ刃はござんすまいぞえ。

五右　石川五右衛門、只今切腹。

ト腹へ突ッ込む。

りつ　未來の道連れ。

ト自害する。

久次　敵は滅びた。めでたうこの場は、お立ち〳〵。

ト幕。打出し。

艶競石川染（終り）

木下蔭狹間合戰

このしたかげはざまかつせん



市川小團次の石川五右衛門

木下蔭狹間合戰

序幕　芥川の場

役名――奧女中、しがらみ。壬生村次左衞門

本舞臺、三間の間、一面の藪疊。後ろ杉の木立ち生ひ茂り、日覆より同じく杉の吊り枝、好き所に芥川と記したる傍示杭。雨車、大雷鳴り、時の鐘にて、幕明く。

ト淨瑠璃になる。

〽降る雨は、風に吹かせて横しぶく、柳も散れば芥川、水の音さへ物凄く、しかも空には鳴神の、合羽も通す吹降りに、凌ぎ兼ねたる一人旅、柳が下に夜の道。

ト此うち、向うより、壬生村の次左衞門、百姓の拵らへにて、合羽を着て、うそ〳〵出て來り、思ひ入れあつて

次左　でも、時ならぬゴロ〳〵で、氣味の惡さに急いだら、ほつとりと草臥れた。ヤ、幸ひのこの柳。ドレ、足休めしませうか。

ト淨瑠璃。

〽どれ足休めと立寄りて、賴む木の下雨に身を、置き所さへなく〳〵も、走り躓きばつたりと、こける女子に驚ろく旅人、木蔭を出でゝ。

ト此うち向うより、しがらみ、屋敷風の拵らへにて、出て來り、よき所にてこける。次左衞門、思ひ入れあつて

これはさて、今の雷鳴に驚いて、こりや、氣を取失なうたさうな。ヤレ、いとしや〳〵。

ト耳に口を寄せて

コレ、旅の女中いなう。氣が附いたか〳〵。心を慥かに持たつしやれ〳〵。

ト淨瑠璃。

〽心を慥かに〳〵と、餘所の哀れを捨て置かず、掬うて飮ます見ず知らず。

ト次左衞門、あたりを見て、流れの水を手に汲んで來り、しがらみに飮ませ、いろ〳〵介抱する。しがらみ、

心附き、思ひ入れあつて

しが　ア、、どなた樣かは知らねども、忝ない御介抱。私しは西國方のお館に、宮仕への者なるが、お主の胤を身に宿し、それゆゑに奧樣の、恐ろしい妬み事。やう〳〵遁がれ津の國の、知るべの方へと思へども、持病の癪がさし込んで

ト淨瑠璃。

〽云ふも苦しき息使ひ。

ト次左衞門、思ひ入れあつて

次左　それはマア、氣の毒な事なれど、むざと女中の懷へ、手を入れるも無作法千萬。と云うて見ても居られず。許さつしやりませ。

ト淨瑠璃。

〽襟くつろげ、胸より腹へ撫で下ろせば、因果か觸る金財布、見るよりフッと惡心の、起るを我れと取り直し、立つては坐り、退いては寄り、傍に繫がれし野狐の、わな〳〵慄ひ引き出す、手先を其まゝしつかと取り。

ト次左衞門、しがらみを介抱して、脊中を撫でたり、いろ〳〵して、懷へ手を入れ、金財布を探り見て、恟りしたる思ひ入れにて、また擦りなど、いろ〳〵して、トヾ、財布を引き出す。その手にしがらみ縋つて

しが　情と見せて路用の金を、奪はんとするは、さては、こなたは盜賊ぢやの。

次左　サア〳〵〳〵、尤もぢや〳〵。道理でござる、面目ない。人樣の金に手を掛けるからは、盜人とも騙りとも、怖ろしう見えませうが、さら〳〵さうした者ぢやござらぬ。ア、、兎に角、情ないものは浮世の義理引き。今夜中に無ければならぬ手詰めの金。親類はおろか、少しの知るべも、さま〴〵賴み歩けども、如何な事、才覺の手は盡きたれど、ア、、どうがなと思ふ最中、こなた樣のその金を、見るより心がうろたへて、道ならぬ事せうとしました。堪へて下され、免して下され。いま云ふ通りの難儀ぢや程に、暫しが間その金を、どうぞわしに貸して下され。よく〳〵切ない事なりやこそ、一日も知らぬお前樣に、これがマア、云はれう事か。推量して貸して下され。後生になる、大恩になりますぞや。

ト淨瑠璃。

〽大恩ぞやと手を合せ、賴むはさぞと察しながら、いらへ淚に暮れ果てゝ、胸もどきつくばかりなり。

トしがらみ、いろ〳〵思ひ入れ。

ムウ。此やうに事を分けて頼みまするに、聞入れのないと云ふは、エヽ、胴慾ぢやわいの。と云ふも無理ぢや。みな非道ぢや。無理と思へど是非がない。否とも貸して下さりませ。

ト淨瑠璃。

〽差し込む腕を拂ひ退け、逃げんとすれど氣ものぼり、立つてはまろび起きてはこけ。

トしがらみ、思ひ入れあつて、逃げる。次左衛門、捨ぜりふにて、これを頼み〳〵追ひ廻し、トゞ捕へて、無理に金財布を取らんとするゆゑ

しが　アレエ〳〵。

ト聲を立てる。淨瑠璃。

〽あれえ〳〵と叫ぶ聲、もうこの上はと拔き放し、肩より脾腹切り下ぐれば、うんとのつけに反りながら、起き返つてしがみつき。

ト逃げ廻るを、次左衛門、もうこれまでと、しがらみが差してゐたる懷劍を拔いて、切り下げる。しがらみ、これにて、アツと云うて、倒れて、其まゝ次左衛門にしがみつき、苦しき思ひ入れにて

しが　エヽ、口惜しい。斯うした事なら最前に、氣を失なうたその時に、いつそ死んだら此やうな、淺ましい死はせまいもの。よしそれとても因縁と、我が身一つは諦らめうが、お腹の嬰兒は日の光り、月の影をも見せずして、共に殺すがいぢらしや。エヽ、心强や恨めしや。遲かれ疾かれこの恨み、思ひ知らさで、置くべきか。

ト淨瑠璃。

〽睨む目許も血の涙、草葉を浸し染めなせり。共に悲歎に暮れけるが。

トしがらみ、いろ〳〵口惜しき思ひ入れ。次左衛門も、しいをりとこなしあつて、氣を變へ

次左　オヽ、さうぢや。とても惡事の罪科は、遁がれはせぬ。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト淨瑠璃。

〽止めの刃、劍難に、かゝる非業のいとしやと、泣く泣く金を取り納め、心ならずも行き惱む。

ト次左衛門、思ひ入れあつて、しがらみに止めを刺し、金財布を取り、また懷より、袱紗に包みし系圖の卷き物をも取り出し、思ひ入れあつて、そろ〳〵花道の方へ行きかゝる。淨瑠璃。

〽無慘や死骸の疵口より、生れ出でたる産聲に。

ト赤兒、しきりに泣く。これにて次左衛門、思ひ入れ。
淨瑠璃。
〽はつと驚ろき立戻り、取上げ見れば逞ましき、産兒にいとゞ氣も弱り。
トこれにて次左衛門、ツカ／＼と舞臺へ立戻り、しがらみの死骸の疵口より、赤兒を引き出す。これにて思ひ入れあつて、涙を拭ひ
次左　エヽ、不便な事をしてのけた。可哀や／＼。
ト赤兒を懐へ入れ、思ひ入れあつて、死骸に向ひ
コレ、亡者どの、よう聞いて下され。この後如何なる出世をし、例へ實子が出來やうとまゝ、跡式はこの子が物。キツと育てゝ見せませう。必らず迷うてばし下さるなや。南無阿彌陀佛々々々々々々。
ト手を合はせ、いろ／＼こなしある。淨瑠璃。
〽涙の袖に引き包む、血汐の産兒紅いの、袱紗包みは形見ぞと、肌身に着けて幾度か、見返る目にも雨やさめ、哀れ殘して。
ト三重にかぶせて、大ドロ／＼になり、上の藪疊の蔭より、しがらみ、幽靈にて現はれ、次左衛門、連理引きに引き戻され、舞臺へ戻り、これを見て、思ひ入れあつて、悔りして
南無阿彌陀佛々々々々々々。
トこれにて大ドロ／＼にて、しがらみ、消える。次左衛門、ホツと思ひ入れ。ゴンと時の鐘。所々にて鷄の聲する。次左衛門、これにて、悔りして、キツと思ひ入れあつて、尻を掲げる。チヨンと木の頭。次左衛門、さうだと云ふこなし、ドロ／＼、赤子の笛にて、よろしく、　ひやうし幕
直ぐに時の鐘にてツナギ、この幕を引返す。

二幕目　矢矧の橋の場

役名＝友市。猿之助。齋藤息女、花形姫。庄屋、德太夫。宿無し、似七。玉淵利金太。岸ケ崎來作。

本舞臺、三間の間、上の方に大きな木橋を見せ、下の番小屋もしまひし體。柳の吊り枝、見事に、すべて夜更けの模樣。爰に友市、居眠り、猿之助、友市

に寄りかゝり寢てゐる體。この見得、時の鐘にて、
幕明く。
ト淨瑠璃。
〽新たに掘りし川波も、淸洲へ通ふ往還に、先つ頃より架け渡す、橋を枕に子供同士、重なり伏して高鼾、斯くても人は咎はせや、身を吹き通す川風に、夢破られてつつぼりと、起きるも一時、顔見合せ。
ト時の鐘になる。兩人心附き、思ひ入れあつて
猿之　わりや、何處の子ぢや。
友市　オヽ、われも何處の子ぢや。人の寢てゐる上へもたれて、よう寢たな。
猿之　オヽ、通りがけに見たら、あんまりよう寢てゐるけなりさに、一緒に相伴したらうちに、面白い夢を見たわい。
友市　イヤ、おれも夢を見たが、なんでも日本國の金が、すつぼらぽんと、おれが懐へ、入つた夢ぢや。
猿之　イヤ、おれが夢とて、その位な段ぢやない。唐も日本も、たつた一呑みにしたと思うたりや、つい目が覺めた。
ト互ひに思ひ入れ。淨瑠璃。

〽胸中は、廣き湖水を巾著に、比叡を緒締めに富士山を、根付けに附けても如何な事、提げかねまじき生立ちなり。砂踏み蹴立て逃げ吠えに、牙磨ぐ犬の吠えそぼえ。褞袍の袖喰ひちぎられ、きかぬ〳〵と乞食の、相手は庄屋の兄息子。
トこの淨瑠璃のうち、向うより德太夫、庄屋の形、宿無し飯七、乞食にて、爭ひながら出て來る。若い者大勢、これに附いて出て來り
德太　ヤイ、どう乞食め、牛より大事にかけてゐる、可愛い犬を打ち殺すと、なんで吐かした。
飯七　オヽ、云はいでは。おれが田甫の際で、虱見てゐたを、あの犬めが飛びついて、此やうに袖を喰ひ裂いたゆゑ、ぶち殺すのぢや。
德太　オヽ、犬を敲き殺し居つたら、おのれはおれがぶち殺す。
飯七　こりや面白い。サア、殺して見ろ。サア、殺せ〳〵。
ト淨瑠璃。
〽聞き捨てられず村中が、とりさへる程目だれする、犬から起る喧嘩とて、人そばへ寄るうたてさよ。
ト若い者、皆々捨ぜりふにて、取りさへるを、構はず

喚き〳〵、皆々舞臺へ來る。友市、猿之助、これを聞
き居て、思ひ入れあつて
猿之　ワァイ、その喧嘩には損得があるのに
友市　阿房な衆達ぢや。
兩人　ワァイ〳〵。
ト淨瑠璃。
〽阿房な衆ぢやと手を叩き、笑へば皆々聞きとがめ。
德太　ヤイ、子悴、この喧嘩に損得あるとは
皆々　どう云ふ譯ぢや。
猿之　サレバイノ、犬を殺せばその報いで、乞食は庄屋ど
のに殺される。又その科で庄屋どのは、殿樣に殺される。
そこではどちらも五分々々のやうなれど、庄屋と犬とは
二つの命。乞食が一つの命に代へりや、そちらは損なり、
こちらは得。阿房な喧嘩ぢやないかいの。
ト淨瑠璃。
〽恥しめられて力味も拔け。
ト銘々こなしあつて
德太　斯う世智辛い世の中に、損するやうな出入りなら
若者　よしに庄屋の德太夫どの
德太　サア、行きませう。

ト淨瑠璃。
〽智惠の淺瀨を敎へられ、銘々うなづき負うた子に、小
腰かゞめて立歸る。
ト皆々よろしくこなしあつて、下座へ入る。友市、猿
之助、思ひ入れあつて
猿之　あれ見やれ。うまい奴等ぢやないかいの。
友市　サイヤイ、阿房めらが、もや〳〵するうち、腰提げ
も錢入れも、殘らず取つてこましたけれど、一つも碌な
はない。エヽ、いま〳〵しい。
ト投げ捨てる。淨瑠璃。
〽始終の樣子松蔭より、見る目も霞む遙かなる、遠國武
士と覺しくて、數多の從者引き連れて。
トこの淨瑠璃のうち、よき程に犀が崖の來作、野袴、
ぶツ裂き羽織にて、大小差し、供人大勢引連れ、出て
來り
家來　コリヤ〳〵、腕白ども、お召しなさるゝ。これへ參
れ。これへ參れ。
兩人　アイ、こちらが事でごんすか。
〽目通り近く畏まる。
トよき所に出て座る。來作、思ひ入れあつて

來作　コリヤ、其方達は何處の者、年は幾つ、名はなんと云ふ。
猿之　アイ、年は十二、名は猿之助、愛知郡中村の者でごんす。
友市　おれは河内の石川村、年は十三、友市と云ひます。
來作　ムウ。兩人とも、なか〳〵見所ある人相。なんと二人の者。奉公の望みにてもあらば、身が抱へてくれうが、なんと〳〵。
猿之　サア、奉公はする氣ぢやけれど、マア、殿樣の知行は、どれ程ぢやえ。
來作　オヽ、身共が知行は九百石。
猿之　ハヽヽヽ、友市、聞いてか。伊勢參りが柄杓振つても、それ程は貰つて居らう。
友市　オヽ、猿之助が云ふ通り、大きな所の糊米にする程の知行。その位の高では、おいらも否ぢや。
來作　ハテ、逞ましい者どもぢやなア。然らば祿に拘らず、いま天が下に名を得たる、稀代の者あつて、召抱へようと云ふならば。
兩人　アイ、行きます。

來作　すりや、盜賊にでも奉公するか。
友市　そりや、いつその事、面白い。
猿之　ハア、そんならお前は、盜人の大將ぢやな。
來作　オヽ、サ、その通り。得心ならば、直さま召連れ歸りたけれど、見る通り田舍武士に拵らへ、まぶな仕事に行かねばならぬ。われ達が勝手に何時なりとも、三州の犀ケ崖、來作と尋ねて參れ。家來ども、必らず仕事先で、つかれぬやうに仕れ。
ト淨瑠璃。
〽心許さぬお頭の、腰の強さはそれ〴〵の、道を早めて別れ行く。
ト來作、先に、皆々向うへ入る。直ぐに淨瑠璃。
〽二人の子供は後影、見やる後へ走り來る、まだうら若き花形姬、胸撫で下ろし撫でさすり。
ト時の鐘、バタ〳〵になり、向うより花形姬、走り出て來り、直ぐに本舞臺へ來て、兩人を見て、思ひ入れあつて
花形　自らは樣子あつて、淸洲の館へ志す者。後より追手のかゝる難儀、どうぞ救うて下されいの。
ト淨瑠璃。

〽急な賴みを否とも云はず。

ト兩人、思ひ入れあつて

猿之　オヽ、吞み込んだ〳〵。氣遣ひさんすな。

友市　追手の奴等を騙す仕樣は。

兩人　その着物を脫がつしやれ。

ト淨瑠璃。

〽二人が手早に紅の、衣脫がして。

ト兩人して花形姬の裲襠を脫がせ

猿之　サア、これでよいか。清洲はこの道、靜かに行かんせ。

ト淨瑠璃。

〽云へど心も急きのぼし、裾もはら〳〵急ぎ行く。

ト花形姬、思ひ入れあつて、下座へ入る。

友市　コリヤ、猿之助よ。わりやその着物を、どうせうと思ふ。

猿之　ハテ、斯うするわい。

ト淨瑠璃。

〽傍への石を上衣に包み、川中へ共まゝに。

ト側にある石を裲襠に包み、前の流れへ打ち込む。時の鐘。淨瑠璃。

〽投げる間もなく數多の人聲、齋藤の家の子、玉淵利金太、家來引連れ、うろ〳〵眼。

ト向うより、玉淵利金太、半纏股引、大小にて、捕り手の家來、大勢附いて、出て來り

利金　コリヤ〳〵、子倅ども、ちつと尋ねたい事がある。小父が主人のお姬樣、まだぼつちりとも開かない、花形御寮とて大美人。春永に戀慕れゝつの御駈落ち。見當りはせなんだか。如何に〳〵。

友市　イヤ、そのお姬樣なら、もう尋ねさんすな。まちつと先に、あの橋の上から、ナウ、猿之助。

猿之　オヽ、それ〳〵、南無阿彌陀佛と飛び込ましやつたわいの。

ト利金太、恟りして

利金　ヤア〳〵。さては身を投げ給ひしか。南無三方。

ト淨瑠璃。

〽と駈け登り、橋の上より見下ろせど、黃昏時なり近眼なり。

ト利金太、橋の上へ駈け登り、いろ〳〵と川の中を透し見て

利金　なんにも見えぬ。家來ども、わいらは見えるか。
家來　見えます〳〵。お姫樣のお小袖が、水にちら〳〵見えまする。
利金　ハテ、是非もなし。この上は、其方達、川へ飛び込んで、死骸なりとも擔ぎ上げよ。早く〳〵。
ト淨瑠璃。
〽早く〳〵に奴ども、すつぽり裸水上に、廻れど宇治川先陣を、進め〳〵と欄干に、腰打掛けて利金太が。
ト家來皆々、丸裸になつて、舞臺前の流れへ飛び込む。利金太は欄干に腰を掛け、いろ〳〵捨ぜりふにて、家來に指圖して、思ひ入れあつて、これよりノりになる。
利金　コリヤ〳〵、ものども、その水の渦巻く所には、鼈ありと心得よ。流れん者には綱を投げ、互ひに力を合すべし。
ト夢中になり、指圖をする。淨瑠璃。
〽只一人の下知に依り、殘らず飛び込むその隙に、後へ廻り利金太を、突き落したる水煙り。
ト兩人、思ひ入れあつて、利金太を川の中へ突き落し、友市、皆々が脱ぎ捨てし着物を、一つに括つて、引ッ擔げ、思ひ入れあつて
友市　サア、これでよいか。
猿之　友市。
友市　猿之助。
猿之　來い。
ト淨瑠璃。
〽犀ケ崖へと。
ト時の鐘になり、兩人、思ひ入れ、よろしく、向うへ入る。右の三重にて、チヨン〳〵
ト山颪しにてツナギ、直ぐにこの幕を引繼ぐ。　ひやうし幕

三幕目　犀ケ崖來作住家の場

役名━蓮葉與六。拏、べか七。友市。猿之助。子分、源太郎。同、民藏。同、小雀。來作娘、おそま。犀ケ崖の來作。

本舞臺、向う一面の中足の巖窟の二重舞臺。上の方反古貼りの障子屋體。いつもの所に門口。門口の

外、丸太橋、切り穴あり。舞臺前、一面の山の梢を見せたる通しの土手板。下の方、松の立ち木、すべて山中の飾りつけよろしく、好き所に机の上に位牌を直し、徳利に花を入れ、爰に源太郎、民藏、堅田の小雀、いつれも盜人の拵らへにて、叩き鉦を叩きながら、踊つてゐる。この見得、踊り地にて、幕明く。

皆々　なまいだ〳〵、なまいだアのだつとこせの、ハハ、、、。

源太　ハ、、、、、イヤモウ、しつけもせぬ導師とやらで、えらい目に遭はせ居つた。

小雀　コリヤ〳〵、源太郎よ。もうしまひか。えらう面白かつた。

民藏　さうだ〳〵。もつとやれ〳〵。

源太　オヽ、民藏が挨拶ぢや、やつてこませ。

皆々　なアまいだア〳〵、なんまいだアのおしまひぢやおしまひぢや。

ト また踊り地にて、三人、無性に踊つてゐると、奧より、來作、盜人の頭の拵らへ。おそま、振り袖、娘の形にて、出て來り、來作、これを見て、思ひ入れあつて

來作　ヤイ〳〵、もう措け〳〵。根太も疊も堪まるものか。嗜なめ〳〵。

小雀　コレ頭、今日の馳走は精進料理で、いけなんだが、後の念佛で色を直した。

民藏　それ〳〵、みな後生を願ふ筈ぢや、えらう面白いなア。

源太　それ〳〵、てまへ達が云ふ通りぢや。シタガ、頭、見れば備前徳利に、花が立てゝあるが、花差しがなくばなぜわしらに云はんせぬぞいの。どんなでも盜んで來るわいの。

ト 來作、こなしあつて

來作　イヤ〳〵、花立て位盜むに、わいらを頼むにや及ばぬ。此方の猿之助や友市めに、云ひつけてもよけれども、あれで濟んである事ぢや。

民藏　ほんに、さうぢやの。猿めや友市は。小さいだてら、えらい奴等ぢやないかいの。

小雀　頭、こなさんが仕込んでやらんしたら、好い代物になるであらうぞや。

源太　イヤ、また此方の丹波めは、不器用な奴の。この間

稽古ささうと思うて、空家の矢尻切らして見たが、長屋中が目を覺まして、おれが仕掛けた仕事まで、しくじらし居つた。
小雀　シタガ、今日申した念佛の功德で、晩にはえらう盜みばかが行くぢやあらう。
源太　ほんに腹は大きし、これから内へ去んで一寢入り。
民藏　それ〳〵、晩の元手の仕込みせうかい。
源太　サア〳〵、皆ござれ〳〵。
ト淨瑠璃。
〽世界滅法腹念佛、打連れてぞ歸りける。主來作機嫌よく。
ト山蔭しになり、皆々捨ぜりふ云ひながら向うへ入る。跡打眺め、來作、思ひ入れあつて
來作　若い奴等と云ふものは、さりとは病ひ氣のないもの。酒さへ呑まして置けば、夏冬なしに年忘れのやうに思うてゐをる。アヽ、氣散じな奴等ぢやないかい。
トおそま、思ひ入れあつて
そま　サレバイナア、遠慮氣のない仲間の樂。父さんもさぞお疲れ。コレ、友市、お枕取つておぢや。
ト奥にて
友市　アイ〳〵。
ト友市、枕を持つて出て來り、好き所に住ふ。
そま　お腰でも打ちませうかいなア。
ト淨瑠璃。
〽いたはる娘に余念なく。
ト來作、思ひ入れあつて
來作　イヤ〳〵、これも矢ッ張り其方が可愛さ。この山蔭に住んでゐれば、往來の人を見ると云ふ事もなし、氣が詰まつて煩らひでもしやうかと思ふから、法事ぢやの心祝ひぢやのと、折々彼奴等を呼び集めるのも、其方が氣を慰ませう爲ばかり、一つには又あの中に、氣に入つた男でもあらば、養子にして娶合さうと思へども、惚れた男もない樣子。さしてそんな體も見えず。アノ、街道筋のひよんころや、安兵衞と云ふ餅屋は、素人盜人の入込む所。養子の事を頼んだりや、此方の註文に合ふ代物は、幾人でもあるげな。中で好い者吟味して、明日か明後日連れて來る筈。來たらば直ぐに祝言させ、その晩から抱かせて寢さす。嬉しいか〳〵。早う初孫の顏、見せてたもれや。
ト淨瑠璃。

〽娘に甘い父親の、常とは云へど男氣な、荒い世渡りする人が、殊更なりし恩愛なり。

　トおそま、いろ〳〵思ひ入れあつて

そま　アノ父さんのつがもない。今から早い殿御の沙汰、マア、四五年も

來作　イヤ〳〵、其方も今年もう十七。例へ山が家に住めばこそ。市中にあれば今頃は色事の最中。アレ、あの山を見や。峯には躑躅、卯の花の、今を盛りと時めくに、山蔭には又去年の雪、消え殘る見苦しさ。時分を知らねばすたりもの。若い時は二度とない。さうぢやないか、ナア、友市。

友市　ハイ、左樣でござります。こちらも早う大人になつて、をやまを貰うて寢て見たいと、樂しんで居ります る。

來作　ハヽヽヽ、ませた奴ぢや。

　ト淨瑠璃。

〽主從親子三人が、話しも時の憂晴らし。東路なれや雁が嶽、麓と云へど幾行か、道なき道の岩角を、いとふましらの猿之助。

　ト山颪になり、向うより猿之助、酒樽を一荷になひ、出て來り、丸木橋へさしかゝる。薄ドロ〳〵。トヒヨになり鳶一羽舞ひ下がり、谷の底へパッタリ落ちる。猿之助、これを見て、思ひ入れあつて、直ぐに舞臺へ來る。來作は奥へ入る。

猿之　ハイ、只今歸りました。

　トよき所へ酒樽を置き、こなしあつて

コリヤ、友市、おれが戻りの遲いと云うて、内で譏つてゐたであらうな。

友市　イヤ〳〵、譏りはせんだが、行き戻り五里余り、六里には足らぬ道、二時の上かゝつては、あんまり褒め手もゐまいかい。

　ト淨瑠璃。

〽常から仲の惡い同志、一つ違ひは一つだけ、脊は劣れども逞ましき、賢こさ勝る猿之助、懷中より大黑取出し。

　ト猿之助、懷より三面の大黑を出して

猿之　こんな物を拾うて來ました。おそまさま、これを見て下さりませ。

　ト出す。おそま、取つて

そま　オヽ、これは好い物を拾やつた。いづれも愚かはな

けれども、取分けてこの三面の大黒さまは、出世すると云ふ事。随分と信心しや

友市　その大黒、出世とあれば耳寄りな。おれにくりやれ、おれが貰つた。

そま　これはしたり、猿之助が拾うたれば、あの子に附いた果報。大事にかけて随分願や。その三面の大黒さまは、三千人の頭に立つとの御誓願。あやかり者ぢやなう。

猿之　ヤア、申し、おそまさま、この大黒を信ずれば、その御利生で、アノ、たつた三千人の頭になるのかえ。

そま　オイナウ。

猿之　友市、われに遣るぞ。

ト友市の方へ、投げて遣る。

友市　こりや有り難い。シタが、例へ三面にもせよ、高が人の作つた物。おれも否ぢや。

ト投げ返す。おそま、こなしあつて

そま　そんなら、わしが貰うた。

猿之　が、おそまさま、お前が貰うて、どうなされますなア。

そま　サイノ、わしは又この大黒さまを、繩で括つて井戸へ吊り、三千世界に又とない、可愛い男をわたしに持たして下さんすりや、この繩解いてあげるわいなう。

ト思ひ入れ。淨瑠璃。

〽いそ〳〵奥へ入りにける。

トおそま、大黒を持つて、奥へ入る、トてんつゝになり、向うより、べか七、着流しにて、樽を提げ、後より、蓮葉の與六、麻上下、丸腰にて、捨ぜりふ云ひながら、出て來て

べか　コレ〳〵、仲人が上下を着て、肝心のこの聟様が、ぞろりとしてはおかしなもの。なんと、この上下を、かりほの施とはどうだの。

與六　成る程、それもさうだ。サア〳〵、そんなら上下を貸さうが、コレ、損料はいくら程寄越す積りぢや。

べか　コレ、いくらのかくらのと、おれが聟にきまりさへすりや、望み次第よ。

與六　サア〳〵、さう値じめがきまつたら、貸しませう、貸しませう。

ト上下を脱ぐ。直ぐにべか七、これを着る事、捨ぜりふにて、よろしくある。始終、此うち、てんつゝにて

與六　サア／＼、ちつとも早くござりませ。

ト兩人、よろしく舞臺へ來て

ちと、お頼み申しまする。來作さまと申しまするは、内方でござりまするか。ひよんころ屋の安兵衞どのから、教へられて參りました。

ト奥にて

來作　オヽ、その安兵衞、待ち兼ねた／＼。

ト合ひ方になり、來作、出て來り

サア／＼、此方へ入らつしやれ／＼。

與六　左樣なら御免下さりませ。

ト内へ入る。

來作　ひよんころ屋からの使ひとあれば、定めて養子の事であらう。こなたが聟どのか。

與六　イエ／＼、左樣ではござりませぬ。私しは與六と申しまして、安兵衞どのとは、きついねんごろでござります。幸ひあなたの御注文通り、へか七と申しまする聟どのがござりまして、即ち私しが、仲人でござりまする。

來作　それはマア、いかい御苦勞。その聟どの の 出生はな。

與六　ハイ、讃岐ぢやとやら土佐ぢやとやら申しましたが只今では、マア、宿無しでござります。

來作　それはマア、面倒がなうてよいワ。して又、氣質の鹽梅は。

與六　イヤモウ、氣質は一向緩體で、第一、人を怖れず、野太い事がいつものべられぬ事でござりまする。どんな山中野中でも、、夜道いとはぬ一人旅、猪狼は犬ころ同然、締め殺して泥棒漬け、豚のつけ燒狸汁、天狗の杉燒、鼻柱を、つぶ切りにして櫻煮とは、はなに緣ある印でがなでござりませう。

來作　ハヽ、もうよい／＼。奥閒からより口聞いても、大概知れた好い聟どの。さりながら、緣づくの事なれば、見ぬ商ひは出來にくい。マア、ちよつと見られまいか。

與六　イヤ、即ち、あれまで同道いたしました。

來作　それは幸ひ。コリヤ、友市よ。娘をこれへ呼んで來い。

友市　ハイ／＼、合點でござります。

ト友市、奥へ入ろ。與六、門口へ出て

與六　サア／＼、入らつしやれ／＼。

べか　アイ／＼。

ト呼び入れられて入る聟は、借り着の袖のたぶやかに、

裄丈長く身は低く、四つ身小口の綻びを、糊で固めし上下も、垢浸み込みしよぼけ顔、橫へすゝりし花聟なり。來作娘を呼ひ出し。

トべか七、いろ／＼思ひ入れあつて、內へ入る。此うち奧より、おそま出て來る。來作、思ひ入れあつて

來作　コリヤ、おそま、其方に添はす聟どのが、今ござつた。氣に入つたら、今爰で祝言さす。どうぢや／＼。

そま　アノ、わたしと祝言するお方は、どなたぢやえ。

來作　ハテ、知れた事、あの上下を着てござるのが、聟どのぢや。

そま　オヽ、おかし。わたしや又、あちらのお方かと思うて嬉しかつたに、オヽ、辛氣。

ト淨瑠璃。

〽辛氣な事やとしどけなう、戀の思ひの峯高き、山の奧でも梅は梅、娘は娘なりけらし。

トおそま、よろしく思ひ入れある。

來作　これはしたり、默つてゐては濟まぬわい。杯をするにしても、仲人どのにも禮を云や。早う／＼。

〽早う／＼についと立ち、ぴんしやんとして入りにけり。

トおそま、思ひ入れあつて、奧へ入る。來作もこなしあつて

來作　アヽ、娘としたことが、人樣に挨拶もなく、取りしめもない奴ぢや。話しで聞いた氣質な聟どの、定めてこなたの氣には入るまい。

べか　イエ／＼、あの位が今度は、好い加減になります。總體女の發明なは、憎てらしうて餘り好いものぢやでござりませぬ。あのやうな幼なが、えらう好きでござります。ハヽヽヽヽ。

來作　そりやマア、聟どのの氣に入つて安堵いたした。娘も喜んで居やうけれど、親の前では云ひにくかろ。コリヤ、猿よ、われ奧へ行て、娘にどうぢや、返事聞いて來い。

猿之　アイ／＼、心得ました。

トついと奧へ入る。

來作　サア／＼、忙しうなつて來た／＼。コリヤ友市よ、友市よ。

友市　アイ／＼。

ト出て來る。

來作　コリヤ、肴の用意せよ。祝うて雜煮もせずばなるま

い。おれが居間に吊つてある鏡の餅、下ろして來い。

友市　アイ〳〵、合點でござります。

ト又ツイと奥へ入る。淨瑠璃。

〽一人喜ぶ一間より、突き出だされし猿之助、べか七が前に膝を突き。

ト猿之助、出て來り、べか七が前に座り、思ひ入れあつて

猿之　申し〳〵、おそさまから聟様へ、言傳がござります。今日は折角お出でなされましたなれど、よんどころない用事がござります程に、今日はマア、お歸りなされて下さりませ。

べか　ヘエ、、左様なら明日でも、また明後日でも參じませうかな。

猿之　イエ〳〵、お前のやうな聟様は、明日や明後日は愚か、おそさまは一生、よんどころない用事がござります。

ト與六の方へ來り

これからは又、仲人様へ云はねばならぬ事がござります。今日はマア、段々のお世話。あのやうな穢ない者をよう連れて來て下さりました。この腹立ちの妄念で、お前様を取り殺さいで置かうかと、今は祈りの最中でござります。

與六　エ、、これは又迷惑な。旦那様の御注文は、男の好し惡しに構はず、商賣の勝手をよく覺えたのが專一と存じ、仲人を致しました。私しが心得違ひでござります。どうぞ御料簡なされて下さりませ。

猿之　其やうに云はつしやるなら、わしが又思案がある。マア、斯うぢや。あの聟どのを去なしてしまひ、お前様が聟になつて、おそさまを可愛がつてやらつしやる心なら、この恨みはさつぱりと晴れます。それが否なら咽喉笛へかぶりつく。

ト與六にしがみつく。

與六　ア、、申し〳〵、これは私しが不調法。この儀を御免下されうならば、私しが聟様になりませう程に、よろしくお執成し下さりませ。

ト淨瑠璃。

〽額を疊に摺りつける、仕濟ましたりと途に乘つて。

猿之　その詞に違ひなく、キッと承知いたしたな。

ト與六、思ひ入れ

與六　ハイ〳〵。致さいで、なんと致しませう。

猿之　その祝言した後で、抱かれて寢ねばならぬが、合點か。
與六　ハイ〳〵、寢ますとも〳〵、抱かれて寢ませいで、なんと致しませう。
猿之　それは滿足。その通りおそさまに申し上げん。
　ト立つを、べか七、引留め
べか　コレ申し、それなれば私しは、お氣に入りませぬか。
猿之　左樣々々。
べか　それでは此方の工面が違ふ。總體、人と馬とには、添うて見よ乘つて見よと云ふ事がございます。今一思案なされて、ちよつと添うて御覽じませぬか。
猿之　イヤ〳〵、思案して見るまでもない。ちよつと見ても知れてある。臭いもの身知らずと云ふ譬へ。こなさんも人並のやうに思うてゐやしやろけれど、その面が、いける面か。
べか　エヽ。
猿之　頰骨荒れて色は黑し、蓮切り鼻に片目はがんち。片鬢かけての向う疵。余ツぽど荒いみつちやもあれど、顏に道具が多いゆえ、目に立たぬへんば面。おそさまが最前御覽じて、出たおくびが今に止まぬ。早う去なしてくれと仰しやつてでございます。
べか　ヘエヽ。
猿之　申し、旦那樣、お聞きなされます通り、あの仲人樣をおそさまが、聟になると仰しやつてございます。
〽聞いて來作ほや〳〵笑顏。
　ト來作、思ひ入れあつて
來作　娘が得心、聟どのが承知とあれば、マア嬉しいが、笑止なは初手にござつた聟どの。酒でも呑んで、去んで下され。
べか　そんなら私しは、いよ〳〵氣に入らいで、あの人が聟になられまするか。エヽ、こりやマアどうせう。なんとせうぞいなう。
　ト泣く
來作　サヽ、おしつけ業にならぬはこの道。詮なき衆生は親ぢやとて、せう事がない。
　ト淨瑠璃。
〽云はれてべか七面目涙、口惜し涙、腹立ち涙、憂き涙、一つの目には保ち兼ね、むせびほころび居たりけり。來作も氣の毒顏。

來作　ト無性に泣く。來作、思ひ入れあつて
思うてござつたところが、右の仕合せ。こなたも折角聟にならうと
たうけれど、コレ、よう聞かしやれや。最前からつくづ
く見るところが、とても貴殿は大盜人になられぬ人相。
せいぜい履物や金盥、鍋釜を拔く晝鳶でと、おれが睨ん
だ眼は違はぬ。すりやコレ、娘が好いても、此方の勝手
に合はぬ。又ちよび〳〵した事なら、よしにさつしや
れ。ハテ、布一尺盜んでも、取らるゝ首は、たつた一
つ。掛替へのない大事の首を、端下錢で切り賣りとは、
命の相場が安すぎるわいの。

ト淨瑠璃。

〽手箱引き寄せ抽出しより、金子の包み取出だし。

ト誂らへの手箱より、包み金を出して

コレ、爰に金が四五兩ある。この金を進ぜる程に、これ
を元手に小商ひ、隨分精出し、世渡りさつしやれ。盜み
せいでも女房子を、立派に養うて通る者も、世間には、
たんとある。なんと合點が行たか。コレ、性根を直さつ
しやれや。

ト金を抛つてやる。べか七、取つて

べか　先程から段々の御意見、ほんにヤレ〳〵、胴身に浸
み込みまして、エヽ、有り難うござります。馴染みよし
みもない私し、お金を下され情のお詞、涙がこぼれて嬉
しうごんす。氣兼ねの代りにお金とは、入り聟よりは有
り難い。左樣なら、もうお暇申しませう。イヤ、申し與
六どの、後でよろしうお執成し

ト淨瑠璃。

〽と云ふもそこ〳〵とつかはと、喜び勇み立歸る。

トべか七、思ひ入れあつて、山颪しになり、向うへ入
る。

來作　コリヤ、猿よ。聟どのを勝手へ伴ひ、この間取つて
來た上下着類、駄荷にあらう、出して着せよ。されば我
れらも奥座敷、取片附けて祝儀の儀式。ヤレ、忙しや
忙しや。

〽やれ忙しやと氣も浮き〳〵、奥の一間へ入りにけり。

ト與六先に、猿之助附いて奥へ入る。來作、いろ〳〵
嬉しきこなしにて、同じく後より入る。ト時の鐘、鳴
る。

〽や、時移り納戸より、出づる與六が衣紋付き、優に優
しき男振り、あたり見廻し〳〵て。

ト與六、出て來り、思ひ入れあつて
與六　世に定めなきものは、水の流れと人の身の上。寄るべ定めぬ浮草の、思ひもよらぬ花聟とは、開くる運の時來りしか。エヽ、忝ない。
〽獨り喜ぶ後にて、おそまはなんと云ひ寄らん、言の葉とても夏木立。
トおそま、出て來り、いろ〳〵と思ひ入れ。與六もこなしあつて
與六　これはしたり、誰れかと思へば女房ども。
そま　アイ、こちの人。
與六　オツと、さう云ひ初めたりや祝言は濟んだ。これからが女夫事。此方へ寄りや。
〽と手を取れば、心惚れ〳〵膝摺り寄せ。
トおそま、恥かしき思ひ入れにて、與六の側へ寄る。
與六　ハテ、斯うはしたものゝ、あんまり早き女房ども。なんにも話す事がない。內證の濟んである、女夫事でさへ、その夜は氣が改まり、拍子の違ふものぢやげな。ましてや俄かの新枕、どうやら堅いぢやないかいの。
〽問はれて娘、恥かしながら。
トおそま、思ひ入れあつて
そま　ほんに思へば今朝までも、こんな縁があらうとは、知らぬお前を、ついちよつと。
〽見染めた今日の初通路、胸の思ひは幾世ぞや。
例へお內に奥樣が、あらうとまゝよ、物云うて
〽雨の日雪の夜もすがら、せめては文を樂しみと、果敢ない事を思うたが。
もう斯うなつた上からは、外の女子に移り氣は、必らず止めて下さんせ。
〽ぢつと寄り添ひ、抱きつき。
ト與六に抱きつくを、振り放し
與六　ア、嘘々。なんのわしらがやうなものに、誰れがさう思うてくれるものぞ。それはお前の大きな嘘。
そま　サア、嘘なら嘘にしてやろが、そのお前とは誰れか事ぢやえ。
與六　ハテ、知れた事、お前とは、お前の事。
そま　それ〳〵、それがお前の大きな嘘。そんならわたしに、女房ども、こちの人と、なぜ云はさしやんした。
與六　サア、それは。
そま　サア、ほんの女夫ぢやないかいなア。
〽もつれしなだれ面白う、ふりかゝりたる一間の內。

ト奥にて

來作　娘々、おそま〳〵。

そま　アイ〳〵、いま其處へ參りますわいなア。

〽後に〳〵と云ひつゝも、心殘して入りにける。後に與六は接穗なく。

トおそま、思ひ入れあつて、奥へ入る。與六、こなしあつて

與六　あはたゞしい男どの。ハテ、何事ぢややら。

ト思ひ入れ。淨瑠璃。

〽見やる襖の內よりも、一つの箱を携へて、主の來作ゆるぎ出で。

ト來作、誂らへの箱を携へ出て來り

來作　聟どの、それに居召さるか。早速某が、尋ね問ふべき仔細あり。

〽と押し直り。

トよき所に住ふ。與六、思ひ入れ。

最前よりつく〴〵見れば、こなたの人柄、望みあつて、この內へ來りしものと思はるゝ。サア、如何なる望みあるやらん。聞かまほし。

〽と尋ぬれば。

ト與六、思ひ入れあつて

與六　イヤモ、高が町人の、分に過ぎたる身の放埓。親類一門に見限られたる天竺浪人、運に叶うて、こなた樣に引立てられ、大きな出世、この上の望みは

來作　イヤサ、無いとは僞り。盜賊なれどもこの來作、國所をも聞き定めず、秘藏の娘に添はさうか。糺さば天晴れ來作づれが、聟がねには釣合はぬ。娘が果報と、わざと素性も檢めず、望みがなけりや叶はぬこなた。親子となれば遠慮はない。サア、包まず云うて聞かされよ。

ト與六、默つてゐるゆゑ、思ひ入れあつて

ムウ。斯ほどに問へど一定無いか。無くば歸れ、氣に入らぬ。側へ一言、一つ肴の附合ひにも、人の心は知れるもの。來作が腸を、あばいて見せれど見合ぬ盲目。暫時も叶はぬ、出てうせい。

〽はつたと睨んで入らんとす。

ト來作、奥へ行かうとするを、與六、思ひ入れあつて

與六　先づ〳〵お待ち下さるべし。ハヽア、誠に掌を指す如く、見るが如き御一言に、肝を開かれ途方に暮れ、云ひそゝくれし今の仕儀。成る程、申し上げたき一儀あり。その仔細と申すは、足利の義稙公、同じく義晴公、

御仲不和とならせ給ひ、義輝公は淡路へ蟄居の砌り、雌龍雄龍と云へる二振りの劍、我が父刑部密かに預かり奉る。然るところ、三好長慶が計らひにて、劍を渡せと數度の催促。承引なきを憤り、數百人にて館を圍み、切つて入る非常の切尖。屈せぬ達人、難なくその場は切り拔けしが、無念や雌龍の劍を奪ひ取られし武名の恥辱。日數を經るとも取返し、雌雄を揃へ立歸らんと、一通を書き殘し、身退く某。父の後を追ひ尋ぬれども、今に知れず。樣々心を苦しむるうち、世の取沙汰に承りしは、犀ケ嶽の來作こそ、忍びの術に妙ありと、人の噂。しや、これに縋つて忍術を授かり、再び家を引起さんと、思ふ折柄養子の噂。最前來りし入り聟は、某しが家來の七藏。この年月の艱苦の世渡り、切取り强盜をして我れをはぐゝみ、この業を云ひ立てに、入り聟せしが計らずも、今日の仕合せ。親子となるも宿世の緣。身の上哀れと思し召し、忍術授け賜はらば、廣大の御高恩、偏へに願ひ奉る。

〽思ひ込んでぞ見えにける。始終の樣子物蔭より、聞いて友市、ズッと出で。

ト友市、出て來り

友市　ハイ〳〵、お願ひがござります。その雌龍の劍とやら云ふもの、長慶が所にあるとの事。それを盜んで來る事は、私しに云ひつけて下さりませ。

來作　ハテ、猪口才な。うぬらが知つた事ではない。すッ込んで居らう。

ト この時、猿之助、ツカ〳〵と出て

猿之　申し〳〵、旦那樣、この役は私しに、云ひつけて下さりませ。

友市　イヤ〳〵、おれが先ぢや。

猿之　イヤ、先でも萬でも構やせぬ。おれが行く。

友市　イヤ、おれぢや。

來作　ヤイ〳〵〳〵、喧ましい子倅ども。所詮うぬらが分際で、この仕事仕負ふせて歸らうとは思はねども、流石來作が祿を食む蠅虫めら、志しが面白い。この役目は願ひに任せ、兩人に云ひつけてやる。其まゝ急げ。早く行け。

友市　サア、してやつた。

〽と驅け出す道の丸木橋、渡りかけしが。

友之　コリヤ、猿之助、ソレ、親方が呼ばつしやる。

猿之　イヤ〳〵、そんな騙しを食ふのぢやない。まそつと

靜かに行かうぢやないか。

友市　イヤ、さう云うて走らうと思つて。さうはさゝぬ。

ト兩人、互ひに橋の上にて迫り合ふ。山颪し。

〽僅かに狹き橋の上、組んず轉んず猿之助、足踏みはづし谷底へ、落ちて姿は見えざれば、友市いそいそ勇み立ち。

ト猿之助、前の切り穴へ落ちる。友市、思ひ入れあつて

友市　よい氣味しよ。

〽よい氣味、唐黍、南蠻黍、足を早めて急き行く。

ト山颪しにて、友市、凛々しく向うへ走り入る。矢張り淨瑠璃。

〽來作輩が身の上を、こまごま聞いて心も解け。

ト來作、箱を與六の前へ直し

來作　その中で、こなたの差し料、氣に入つたを聟引出に。

〽差出す箱の蓋取り除け、どれかこれかと見るうちに、目貫鮫鞘柄頭、鍔は元より覺えの信晴、父の刑部が秘藏の一腰、これは如何にと轉倒し、騒ぐ心を押し鎮め。

ト箱の蓋を取り、與六、一腰を見て、いろいろ思ひ入れあつて

與六　御意に任せてこの一腰、苦しからずば頂戴いたす。天晴れのお拵らへ、定めて舅どののお物好き。

來作　イヤイヤ、これまでは數多盜み取り、賣り拂ひしその中に、目に入つたを身が差し料。いづれもこの來作が命と釣替へ。取分けその一腰は、二三年以前霜月下旬、降り積む雪に道を失ひ、難儀に及ぶ夜の旅、一夜の宿と所望する、浪人ながら路用の貯へ、しつかりとした進退なれば、心よくもてなして、夜陰に及びひそひそと、忍び足して窺ひ寄り、心掛けよき侍ひにて、何者なればと起き上がり、すらりと拔いて斬りつける。心得たりと拔き合せ、一太刀合はせば手ごたへして、並々ならぬ手練の切尖、眞劍づくでは叶はじと、後れし振りにて逃げ出せば、遁がさじものと追ひかゝる。程よき所へ誘き寄せ二太刀三太刀打ち合せど、流石の手利きも不知案内、木の根に躓き岩根に辷り、たるむ所を附け入つて、難なく旅人を切り倒し、懷中搜せば僅かな路銀。南無三方、無益な殺生なしけるぞと、思へど何と詮方なく、死骸を谷へ打込みしが、跡に殘りしその刀、見れば天晴れ稀代の業物。我が差し料にと秘藏して、殘し置いたるその一

腰。

與六　ムウ。すりや、この刀を帶せし旅人を

來作　オヽサ、身が手に掛けて討ち放した。

與六　さてこそ、知れし親の敵。觀念なせ。

〽ずばと拔いて切りかゝる。飛びしさつて拔き合せ、はつしと受けとめ。

ト與六、怒つて、切りかゝるを、來作も拔き合せて、受けとめ

來作　さては、只今物語りし、浪人者の悴よな。

與六　おんでもない事。

來作　さもあれ、勝負と名を名乘れ。

與六　ヤア、おのれら如き盜賊匹夫、云ひ聞かすには及ぼねども、我れこそ足利譜代の忠臣、仁木刑部左衞門國安が悴、同苗太郎國定。斯く下賤と姿をやつし、入込みしは、汝に近寄り忍術を授かり、雌龍の劍奪ひ返さんと、計らずこの家へ便りしは、敵を討つて手向けよと、父尊靈の導き給ふか。ハアヽ、嬉しや〳〵。父が帶せし刀にて、不倶戴天の仇を討つ、盲龜の浮木にまさりし喜び。サヽ、立ち上がつて勝負〳〵。

〽と詰めかくれは、來作ちつともひるまばこそ。

ト來作、思ひ入れあつて

來作　ハヽヽヽヽ、侍ひらしくほざけども、假にも盜賊の聟となつたるおのれなれば、武士道は廢つてあるわい。敵討ちとは、しやらくさし。及ばぬ事を。叶はぬ事だワ。

與六　ヤア、人おどしのその大言。息の根を留めん、覺悟なせ。

〽打ち合ふ白刃の音に驚ろく娘のおそま、あはてふためき分け入つて。

ト兩人、立廻り。おそま、奧より出て來り、この中へ入り、分けながら

そま　譯は知らぬが、マア〳〵、待つて下さんせ。

〽あなたへ縋り、こなたへ分け、命惜しまぬ刃の中。

來作　ヤア、面倒な。

〽只一討ちと來作が、振り上ぐる刀の柄、取りついて、娘の手を持ち添へ左の脇腹、我が手に突ッ込めば、血は瀧津瀨、娘ははつと縋り付き。

トおそま縋る。その手を持ち添へ、來作、我が腹へグッと突ッ込む。與六、思ひ入れ。おそま、恟りして、思ひ入れ。笛入りの合ひ方。

そま　こりや父さん、何ゆゑの切腹。

與六　ヤア、遁がれぬ命と思ふなら、潔く手にかゝり、我れに本意を遂げさせぬ。武門の法を知らざるか。

來作　愚か／＼、汝等如きのへろ／＼侍ひ、眞ッ二つと思みしところ、思ひも寄らぬ横合ひから、父樣とても容赦はない、舅の敵遁がさぬと、コレ、この通り只一突き。十七年の今日まで、遂に一度も親の氣を、背かぬ娘がよく／＼に、夫大事と思へばこそ、舅の敵遁がさぬとは、オヽ、よう云うた、出かしたなァ。それを功に末永う、必らず見捨てゝ下さるなとサア、云はずとても其方が手柄、よもや去られはせまいぞや。

〽我を立て抜きし片親に、娘はあるにもあられぬ思ひ。

そよ　世上の親の慣ひとて、子を思はぬはなけれども、命を捨てゝ子を惜む、親は世界にありやせまい。免して下され、父樣。

〽かつぱと伏して正體も、泣き口說くこそいぢらしき。

ト取りついて泣く。來作、苦しき思ひ入れにて

來作　ヤア、めろ／＼と見苦しい。おのれも盜賊の娘とばし思ふなよ。もと某は、甲州武田に仕へたる、加藤淸證と云ひし者。我れ忍術に妙得せしゆゑ、行く末如何なる器量をかなさん、生け置かれずと主人信虎、我れを招きて抜き打ちと、振り上げ給ふ刃の下、折よく向うの蓮池へ飛ぶぞと見せて形を消し、それを卽ち異名に呼ばれ、飛び加藤とも蓮葉とも、人に知られしこの來作。まつた忍術の一卷は、娘が聟とならん者に、これを傳へて規模にせんと、最前箱を開き見れば、一卷紛失。ハテ、しなしたり殘念や、察するところ二人の童めと、推量はしたれども、猶も實否を糺さん爲め、願ひを許して心よく、三好が館へ遣はせしは、雌龍の劍を奪ひ返し、盜んだ一卷取返して、聟どのの、家の秘藏に致されよ。

〽聞いて與六は勇み立ち。

トのりになる。

與六　ハヽ、忝なし／＼。舅どの義心により、敵討ちの面も立ち、忍術の一卷も、我が手に入るが身の大慶。雌龍の劍は三好が手に、雄は卽ちこの谷底。父の體は土ともなれ、御劍は谷間にあり。有り難や。これも偏へに舅どの、御恩を廣く心にて、異名を直ぐに我が苗字、雌龍の劍揃ふまで、暫しの假の名を實名に、蓮葉與六と改めて末來まで變らぬ夫婦。心殘さず舅どの。九品の臺に安坐して、末の榮えを御覽ぜよ。

〽喜び勇むを見る嬉しさ。
　ト來作、思ひ入れあつて
來作　最早この世に思ひ殘す事少しもなし。早々首を打たれよや。
〽云へども流石ためらへば。
　ト與六、思ひ入れ
ヤア、云ひ甲斐なし。彥どの、さらば、娘よ、さらば。
〽刀を右へ引き廻し、拔くより早く、俯伏せに、かつぱと伏して息絶ゆれば、二人は死骸に取りついて、一度にわつと泣く涙、落ちて流れて谷川の、水嵩増さるばかりなり。
　ト來作、落入る。兩人、思ひ入れ。この時、向うにて
捕手　ヤレ、來いやい。
　トどん／＼になり、捕り手大勢、出て來り
ヤア／＼、來作。
　トのり地になる。
今日捕らへし盜賊ども、來作と云ふ張本こそ、この岩窟にありとの白狀。遁がれぬ所ぢや、尋常に
皆々　腕廻せ。
〽腕廻せとひしめいたり。

與六　ヤア、幸ひなるかな、舅が追善。生けては置かぬ、覺悟なせ。
捕手　面倒な。ソリヤ。
　トどん／＼になり、皆々を相手に立廻りあつて、捕り手の人數を門口の外の丸木橋の上に追ひ出す。この時、下より猿之助、雄龍の劍の袋入りを腰に差し、上がりながら、丸木橋を切り落す。これにて捕り手の人數、皆々切り穴へ落ちる。
そま　オヽ、猿之助。
與六　其方は谷から。
捕手　うぬ。
　ト與六にかゝるを、見事に切り倒す。
そま　モシ。
　ト與六の側へ寄るを、上手へ引き廻し、血刀を差出す。猿之助、手早く、手拭にて、血を拭ふ。チヨンと木の頭。皆々見得よく、山颪し、カケリにて、よろしく
　　ひやうし幕

四幕目

壬生村の場
千本松原の場

役名 ── 此下藤吉久吉。壬生村の次左衛門。同娘小冬。道具屋太次郎兵衛。手代、九介。判人、半八。手下、見柄金藏。同、三上百介。同、堅山小雀。石川五右衛門。

本舞臺、三間の間、一面の二重舞臺、向う赤壁、納戸、暖簾。上の方、佛壇、一間の障子屋體。いつもの所、門口、下の方、葦簀、竈、鍋、釜、膳、椀、その外勝手道具よろしく、雛の道具を並べて、小冬娘の形にて、これを弄び居る。この見得、在郷唄にて幕明く。

ト直ぐに淨瑠璃。

〽非の字簾漏る笛の音は、怪しの賤が軒に咲く、桃のやう〳〵生ひ立ちし、土百姓の小娘に、はたけの跡も顏になき、好い器量とて村中が、可愛がるので親は猶、子に目の見えぬばかりかは、昔日の庭の內障病、さぞや迷ひも深からん。明けなば節句、昨日から、飾る雛の道具でも、見倒し屋の太次郎兵衛、空財布肩に、掛取り二三人。

トてんつゝになり、向うより道具屋太次郎兵衛、若い衆二三人、いづれも掛取りの拵らへにて出て來り、直ぐに舞臺へ來て

太次　內に居さつしやるか。近所へ掛けに來た次手に

皆々　ちよつと尋ねに寄りました。

小冬　アレ、父さん、掛取り衆が來てぢやぞえ。

ト奧にて

次左　オイ〳〵、いま其處へ行きませう。

〽おゝようこそと次左衛門、出づる足元。

ト次左衛門、盲目にて、探り〳〵出て來る。

小冬　オヽ、危ない。怪我さしやんすなえ。

次左　イヤ、氣遣ひするな。爰にも早七八年も暮らした所なれば、なんぼ俄盲目でも、滅多に躓きもする事ぢやない。おれが事は構はずと、皆樣に茶でも酌んで進ぜませい。

小冬　アイ〳〵。

ト小冬、銘々に茶を酌んで出す。

太次　時に、次左衛門どの、こなたは河內の石川村で、兎

も角も暮らした身代であつたげなに、この壬生村へござつてから、引續いての不仕合せ。さりとては氣の毒。世に機縁と云ふ事もある習ひ。また所でも

皆々　變へて見さつしやれ。

次左　イヤモ、貧富は銘々のかたづゝ、所には依らぬもの。ハテ、兩替町に居て錢金に不自由な者も多し、長者町に住んで代々貧乏する和郎もあり、皆運が來ぬのぢやてや。

太次　サア、その運と云ふものは天にあるげな。それが手近にあるものなら、また買ひ占め居つて、運の値が騰るであらう。

皆々　ハヽヽヽ。

太次　さすればこなたも、塞がつてある雪隱ぢや。運を待つたがよいわいの。

ト皆々立つて行かうとする。

次左　マア／＼、待つて下されい。いつの節季でも／＼、借錢乞うて下されぬ程、百倍術ない。なんと、物は談合ぢやが、內中の物、なんなりとも、分け取りにして消す事とはなりますまいか。

若一　サア、こちとらもどうなりとして

若二　後の商ひもして進ぜたい。

若三　お前もさうであらうの。

太次　オイノ、併し、斯う見たところが、これが無うてもよいと云ふ物も見えぬ身代。いつち役に立つのは、ソレ、その雛道具。それで分散したがよいわいの。

次左　先づは忝ない。さりながら、死んだ嬶が、あれへの讓り。小冬よ、わりや惜しからうなア。

小冬　イエ／＼、どうでわしや、今の所へ、行かねばならぬぢやないかな。それなりや、なんの要らぬ物、皆進ぜまして下さんせ。

次左　オヽ、大人しい。よう云うた。その代り金儲けしたら、これより好いのを父が買うてやらうぞよ。大次郎兵衞どの、そこへよろしう頼みまする。

太次　オツとよし／＼。おれが競り分けてやりませう。

ト雛の道具をいろ／＼見て

サア／＼、こんな紙雛二女夫。澁墨塗りの紫宸殿、サアサア、なんぼ／＼。

若一　紫宸殿なら、四百ぢや／＼。

太次　もつと見直したり。振り直して、御殿ぢや／＼。

若二　御殿なら、五百ぢや／＼。

太次　オツと五百で御殿が五介よ。
　トこれより捨ぜりふにて、いろ〳〵市をする事銘々あ
　つて
　締め高丁度、三貫三百三十三文、三人へ分散。
皆々　慥かに受取りました。
太次　ホイ、いつち好いものを見落した。一つ箇に赤金
　釜。ア、、まゝよ。これはお娘へ、進上に殘してさつぱ
　りと
皆々　帳面消してやりませう。
次左　これは皆樣、段々有り難うございます。
太次　サア、そんならこれから、また外を廻りませう。
皆々　さうしませう〳〵。
太次　そんなら次左衛門どの。
次左　靜かにござりませ。
〽綱の分散いたしきに、北野の方へ急ぎ行く。
　ト皆々、捨ぜりふタヤ〳〵と云うて、向うへ入ろ。
〽見かけから眞黑な、面構惡い錢屋の手代、鋭い眼光ら
　して。
　トばた〳〵にて、手代九介、息急き〳〵出て來り、直
　ぐに舞臺へ來り

九介　コレ〳〵、次左衛門どの、かた〴〵今日は濟まさう
　とある五十兩、違ひ屈んでも持つて來る筈と、親方の腹
　立ち、無理ぢやあるまいがの。
次左　ハイ、イヤモ、お道理でござりまする。十一年後に
　悴めが、取つて走つた五十兩。料簡強い旦那なりやこ
　そ、私しが證文で、これまでの御宥免。それも去年の極
　月で、十年の年の切れ。又その上に今日まで、御容赦に
　あづかつた御恩のお金。コレ、知れてある事でござりま
　する。
九介　それなら長々云はさずと、手短かに金を渡したがよ
　いわいの。
次左　ハイ〳〵、左樣ならば御苦勞ながら、島原の桔梗屋
　まで、お歩みなされて下さりませ。
九介　オヽ、行つてどうするのぢや。
次左　サア、娘を勤め奉公にやりまする筈で、目見得もさ
　せて置きましたれば、呑み込んでもらひ、先借りして、
　お渡し申しませう。
九介　オヽ、それに違ひない事ならば、行きませう。
次左　それは御苦勞。小冬よ、必らず頼んだやうにしてく
　れいよ。

小冬　アイ〳〵。
次左　そんなら、行て來るぞよ。
小冬　アイ〳〵。
九介　ハテ、埒の明かぬ。早うござれ。
〽忙しなう、せがみ立てられ盲人の、杖柱より頼りなる、子を傾城に島原の、廓をさして出でゝ行く。
ト九助、次左衞門を急き立て、向うへ入る。小冬、こなしあつて、跡見送る。淨瑠璃。
〽年は行かねど孝行を、守り袋は形見ぞと、肌身に添へて亡き母に、相見る思ひ、獨り言。
ト小冬、守り袋を襟へ掛け、いろ〳〵思ひ入れあつて
小冬　コレ、母樣。怪我にてもわしが身に疵つけたら、矢ツ張り親の體に疵つけるも、同じ事と云はしやんしたけれどな、ひよんな事はお山になつたら、澤山に指でも切らにやならぬげな。それが定ならなんとせう。又その上に親方が、抓つたり叩いたりするといなア。わたしや怖うてならねども、否と云うたら父さんの爲になるまいと、それが悲しさに、賣られて行くは行くけれど、必らず案じてばし下さんすなえ。
〽云ひつゝ袖のひた濡るゝ、涙流れの里は只、地獄のやうに思ひ取る、子供心ぞ道理なる。
ト小冬、守り袋を額に當てゝ、大泣きに泣く。淨瑠璃。
〽されば三界に宿り定めず、樹下に木の實を甘んずる、木食上人、科藪行脚と志し、布施の門に立ち休らひ。
ト五右衞門、鼠衣に鼠の頭巾を冠りて、頭陀袋を首に懸けて、鉦を敲きながら、舞臺へ來り、門口にて、思ひ入れ。淨瑠璃。
〽打ち鳴らす鉦の聲、小冬はふつと心附き。
小冬　ほんに月の二日々々は、大切な命日と、佛壇の前で父さんが、笛を吹いて手向けなさんす。分けてこの二日は祥月命日ぢやげな。ドレ、入れませう。
〽とかい立てど、屆かぬ棚の端下錢、やうやく取つて庭に下り。
進ぜませう。
ト棚より錢を出し、門口へ來り、出す。
〽差出すその手を、外よりむづと取り。
ト五右衞門、小冬の手を捕へる。
小冬　怖いわいなう。
ト慄へて、思ひ入れ
五右　われが名は、小冬と云ふか。

小冬　アイ、さうはさうぢやけれど、こちや根から見知らぬ坊さん、手を放して下されいなう。
五右　オヽ、二つの年別れたれば、見知らぬも理り。おりや、われが兄の友市ぢやわやい。
小冬　ヤア、そんならお前は兄さんか。少さい時ぢやあつたゆゑ、わしや知らずに居たけれど、われには兄があるぞよと、父さんや、母さんが、毎日々々云ひ出して、大抵や大方の案じではなかつたに、ようマア、戻つて下さんした。嬉しいわいなア／＼。
ト思ひ入れ。浄瑠璃。
〽立ちつ居つ、手の舞ひ足の脛巾取り、撫でゝやるやら擦るやら、如才なき寄る親身と親身、あたりおろ／＼見廻して
ト小冬、五右衛門の草鞋を解き、いろ／＼嬉しきこなし。五右衛門、内へ入り、思ひ入れ。
五右　こりや、故郷の石川村に居られた時より、猶さんすいな暮らしと見えるが、親者母者は達者なか。
小冬　アイ、母さんは去年死なしやんして、それから父さんが、目が見えぬわいなア。
五右　ムウ、内障でもしられたか。

小冬　イヽエ、お前があんまり戻らしやんせぬゆゑ、それを苦に病んでぢやわいなア。
五右　ムウ。それで死なれたか。親仁の眼病も、そこらあたりであらうかい。して、どつちへぞ行かれたか。
小冬　アイ、留守でござんす。
五右　ムウ。それなりや戻らるゝまで、斯うしても居られまい。ドレ、ゆつくりと寝て待たう。
小冬　そんなら、これを。
〽と差出すは、油浸みたる切りかぶた。
ト小冬、ひつきりの枕を出すを、五右衛門、取つて
五右　オヽ、この枕も馴染みぢやなア。
〽仕馴れし業か押入れへ、隠す菅笠檜木笠、提げて一間へ入りにけり。
ト佛壇の下の押入れへ、簑笠入れて、思ひ入れあつて、納戸口へ入る。小冬、門口へ来りて、表を見やり、こなしあつて
小冬　この父さんは何してぞ。早う戻つてくれたがよい。遅い事ではあるわいなう。
〽遅い事ぢやと待つ子より、待たるゝ親は憂き事を、目には見ねども心には、溜る涙を押し隠し、悄れ我が家へ

立歸る。

ト次左衞門、しつぽりとして出て來り、門口へ來る。小冬、見て

小冬　オヽ、戻らさんしたか、嬉しい事があるわいなア。

次左　なんの嬉しからう。みす〳〵奈落へ沈む勤めを、いそいそとして見せる心根が、いぢらしいわいやい。いぢらしいわいやい。

ト泣いてこなし。

小冬　イヽエイナア、兄さんが戻つてござんしたに依つて嬉しいのぢやわいなア。

次左　ヤア〳〵、なんぢや。兄めが戻つて來たか。そりや、どのやうな形で。

小冬　アイ、衣を着て、鉦を叩いて。

次左　ヤア、坊主になつて戻つたか。アノ、坊主になつてかいやい。

ト奥より、五右衞門、出て來る。

五右　オヽ、親仁どの、戻らしやりましたか。

〽聲をしるべに摺り寄つて。

ト次左衞門、五右衞門の側へ來て

次左　ヤレ、友市かいやい。兄かいやい。懷かしかつた、逢ひたかつたわいやい〳〵。よう戻つてたもつたなう。

五右　マア〳〵、何よりは息災で、こなさんも達者で、久しぶりにて逢ひますなう。

次左　イヤモ、久しぶりの段かいやい。十一年がその間、長の年月を夜も晝も、よう案じさしたなア。その代りには、これから片時も、側を離しやせぬぞ。モウ、どつちへも行てくれたなよ。ほんに、よう得道しやつたなう。イヤモ、小さい時は、きつい手習ひ嫌ひであつたが、出家になる程の事なれば、手もよう書くやうになつたであらう。四角な字も讀めるか。寺持ちにでもなつたのか。ドレ、どのやうな形ぢや、撫でゝ見よう。

〽と體中、探り廻して

ト次左衞門、五右衞門の體中撫で廻し見て、思ひ入れあつて

次左　こりや、どうぢや。三衣は身に纏ひながら、頭巾の下は坊主どころか、月代さへ剃つてないぞや。

五右　ハテ、優婆塞なれば、髮はある筈でごんすわいの。

次左　ムウ。行者さまのやうなものぢやの。コレマア、此やうに親子兄妹揃ふにつけても、思ひ出すは婆が事。いま息引取る際までも、其方の事を云ひ死に、去年の秋死

にやつたぞや。

五右　ハテ、さうぢやげにごんす。それからおれも此やうに、

次左　オヽ、さうぢやわいの。

生れもつかぬ明き盲目。

五右　それはさぞ、不自由にごんせうな。

次左　サア、何か鋤鍬の働らきはならず、有りもせぬ物を貰食ひにしてゐるが今でのすぎわひ。ソレ、見や、行燈蹴破つたやうな、内になつたであらうがの。オヽ、それで氣が附いた。小冬よ、兄はひだるからうぞよ。

小冬　サア、さう思うたに依つて、雛樣のこの釜で

次左　オヽ、湯立て飯にしたがよい。ドレ、手傳ひませう。

ト小冬、以前の竈を好き所へ直す。次左衛門もこれを手傳ふ。淨瑠璃。

〽どれ手傳はうと云ひ柴の、つま木とく〳〵折柄に、駕籠の棒鼻門口へ、ぬつと入れさす傾城屋。

トてんつゝになり、向うより島原の判人半八、後より駕籠舁き、手駕籠を舁き、息せきと出て來り、半八、門口より

半八　次左衛門どの、先程は逢ひました。約束なれば迎ひに來ました。奉公人を連れて行きませう。

小冬　父さん、もう、行かねばならぬのかいなア。

次左　金は受取る、證文には判をする。遣りとむなうても遣らざなるまい。

小冬　サア、行きは行くけれど、あんまり急なで恟りして、どうやら腹が痛いわいなア。

半八　オッとお娘、案じまい。腹が痛くば吉野太夫が、禿にして、まだ一二年は痛い目をさせまい程に、ナア次左衛門どの、ハヽヽヽヽ。

ト五右衛門、思ひ入れあつて

五右　イヤ、コレ、親仁どの、おれが戻つたからは、小冬を賣るには及びませぬ。

半八　アヽ、コレ〳〵、そこな坊樣、異な事を云はつしやる。及ぼうが及ぶまいが、金渡して、コレ、この通り證文があるからは、及ぶ所及はして見せるぞや。例へ又、金立てうと云やつても、元金ではもうゆかぬ。ならぬ事ぢやならぬ事ぢや。

五右　ドレ、その證文寄越せ、請出さう。

ト淨瑠璃。

〽くわらりと投げ出す二百兩。

ト五右衛門、懐より二百兩の包み金を出し、半八の前

へ抛り出す。半八、愕りして

半八　エヽ、こりや五十兩の所へ二百兩とは、さつてもきびしい御出家樣。お寺の金なら正眞に違ひはあるまい。此まゝお貰ひ申しませう。

ト證文を五右衞門へ渡し、金を取つて

ほんに、次左衞門どの、これは大きにお喧ましう。あなたこれに。へ、、、、。サア、駕籠の衆、ござれ。

〽空駕籠に、乘せた小判の耳朶も、さつても厚いと親子とも、呆れて詞なかりけり。

ト半八、駕籠は向うへ入る。

〽次左衞門は居直つて。

ト次左衞門、思ひ入れあつて

次左　コレ、兄や、其方はたんと金を持つてゐやるなう。

五右　イヤモ、日本國中の金は、みんなおれが物でござんすわいの。

次左　コリヤ、娘、今朝われに預けて置いた物は、何處にある。

小冬　アイ、そりや爰にござんす。

〽取り出し開く人相書。

ト小冬、佛壇より人相書を取出して來り

年の頃、二十二三、脊の高さは五尺六七寸。

ト讀む。

次左　その次に、なんと書いてある。讀んで見い。

小冬　アイ。色白にして鼻筋通り、

次左　オヽ、さうぢや。

ト思ひ入れ。

小冬　苦味ある面體。左の耳際に鎗疵あり。

次左　この盜賊の張本、石川五右衞門と云ふは

五右　オヽ、おれが事だ。

兩人　エヽ。

ト愕り、思ひ入れ。

〽魂消る釜の、湯に取落したる繪姿の、爛れ煎りつく大焦熱、熱湯の淚、胸につきかけ、膝つきかけ。

ト次左衞門、思ひ入れ。小冬、愕り驚ろく拍子、繪姿を取落す。この繪姿、前の釜の中へ入り、煮える仕組み。次左衞門、五右衞門の側へにぢり寄り、いろ〳〵思ひ入れあつて

次左　エヽ、おのれは〳〵情ない、たうとう大盜人になり居つたなア。三つで付いた癖は八十までとやら。六つ七つの時分から、只人の物を欲しがる性分。その時分は相

應に暮らしたゆゑ、召使ふ男女もあつたれど、兎角坊様が手が長うて、勤めにくい事の、ヤレ、用心の惡い内方ぢやのと、後には奉公人もえゝ勤めず、折檻すれど聞かばこそ、人中見せたら心も直らうかと、十二の年、奉公にやると其まゝ取りぶけり、今日娘を賣つた五十兩も、おのれが首代ぢやわやい。それになんぢや、勿體ない、大枚の金を、土砂のやうに、持ち憐む罰中りめ。配符の廻る程なれば、大外れた事仕出したに違ひない。すりや千萬陀羅悔んだとて、返らぬ事ではあらうけれど、そのマア、屈強な體を、後手に縛り上げられ、淺ましい跛馬に乘せられ、京洛中を引き廻され、親や妹に恥かゝすのが本望か。コリヤ、ヤイ、わりや命一つ捨てりや、それでよいと思うてゐやうけれどな、その捨てるまでの苦しみが、並や大抵の事かいやい。今でも性根直すなら、氣遣ひするな、その罪はこの親が引受けて、名乘つて出て見事助けて見せう。子の爲に捨てる命、獄門磔刑いとひはせぬ。眞人間になつてくれ。アレ、心ない草や木も、矯めれば直るものぢやぞよ。親ほどに子が親の事を思ふものなら、なんのこんな事にはなりやせまい。さりとは根性を直してくれ。これぢや〳〵。

〽と手を合せ、泣きあせれども如何な事、土太い煙管横に銜へ、空嘯煙吐くばかり。

ト次左衛門、いろ〳〵思ひ入れあつて云ふ。五右衛門、これに構はず、煙草のんでゐる。次左衛門、呆れたる思ひ入れにて

ムウ、グツともスツとも云はぬのは、聞入れぬのぢやな。よいワ。この上は、どうなりと勝手にし居れ。

〽破れ行李の底打ふるひ小匕首、すらりと拔く手に取りつく小冬。

ト次左衛門、押入れより、探り〳〵、古い誂らへの葛籠を出して來り、中より匕首を出して、拔き、自害せうとする。小冬、その手に縋りて、思ひ入れ。

ヤア、留めな〳〵。これから一日でも生きてゐるほど、彼奴が成敗に遭ふのを待つやうなものぢや。

小冬　イエ〳〵、それでも死なしやせぬ。兄さん、留めて下されいなう。

五右　親仁様、こりや何をさつしやる。

次左　オヽ、留める氣は、根性直すか。

五右　ハテ、役にも立たぬ世迷言。

次左　さう云や、死ぬる。

五右　そりやさゝぬ。

次左　エイ、放せいやい。

五右　イヽヤ、放さぬ。

次左　イヤ、放せ。

ト三人、刃物をせり合ふ。

〽引き合ひ捻ぢ合ひ面倒なと、捥ぎ取り捨てる劍先きに、當る娘が因果の樣、南無三方と五右衞門が、抱きしめれば。

ト三人爭ひ、トゞ次左衞門、匕首を引き取る。この拍子に、匕首、小冬の咽喉へ當り、アツと苦しむ。五右衞門、思ひ入れ。次左衞門、こなしあつて

次左　兄よ〱、娘はどうした、なんとした。

〽撫で廻る、手先に觸る匕首は、無慘や小冬が胸先に、たちまち親は半狂亂。

ト次左衞門、あちこち撫で廻し、小冬が體に、匕首の立ちたるを見て、恟り仰天

ヤア〱〱、こりやマア、なんたる怪我災難に會うた事ぢやぞいやい〱。此やうな事のないやうにと、願ひ祈るぢやないかいの。神や佛も胴慾な、聞えませぬわいの聞えませぬわいの。

トいろ〱思ひ入れ。

五右　親仁樣、こりやもう所詮、助かりませぬわいの。

次左　エヽ、其やうな事云はずと、どうぞ助けてくれいやい。こんな非業で殺したら、死んだ婆への云ひ譯は、なんとせう、どうせうぞいなう〱。

〽正體更に泣き入りて、稍伏し沈み居たりしが

ト小冬を抱きかゝへ、いろ〱と思ひ入れあつて

〽何思ひけん立ち上がり、涙ながらに佛壇の、內に供へし寒竹の、笛と一軸取り出して。

ト次左衞門、佛壇より、笛と系圖の一卷を出し、持ち來り

次左　さても〱、恐ろしいは人の恨み。まツこの通り報はねば、ならぬ因緣因果經。これ見てたもれ。

ト二品を五右衞門へ渡し

ア、昨日今日のやうに思へども、はや二十三年後の今月今夜。丁度此やうな、しと〱雨が降つての、物淋しい夜道を、芥川へかゝる所で、癪に苦しむ旅の女。行きかゝつて見捨てられず、擦る肌には金財布、見るよりフツと惡念の、起つたも何ゆゑぞ。大恩受けた親方の、困窮が救ひたさ。どうぞ貸して下されと、やツつ返しつす

るうちにも、見咎められてはなるまいと、胴慾にも切り殺し、逃げうとしたれば疵口から、おぎやア〳〵と赤子の泣き聲。取り上げ見れば月も延びたる、逞ましい男の子。ヤレ不便やと、その場で直ぐに發起心、ひよんな事しました、堪へて下さりませ、その代り、この子はわしが子にして、天晴れ成人させませう。と、亡者にキッと誓ひを立て、守り育てたは、われぢやわやい。甘やかせば手に餘るわやく者、叱れば拗つておれを睨む、その顔は、母御が息を引き取る時、おれを睨んだその顔に、似たとこそ云へ〳〵、その怖さも可愛さも、紛れ〳〵てそれ程までに育てたれば、最早罪障消滅し、母御の恨みもあるまいと、思ひ暮らせど恐ろしや、天道樣の憎しみにて、月も變らず日も變らず、遂に讎が身に報ふ。因果の懺悔、調べる筈とその一軸、母御の形見でござるぞや。サア、斯う打明かせば、この親仁は、其方の爲には仇敵、切るなりと突くなりと殺して下され。コリヤ娘、必らずわれは死ぬなよ。

〽身も浮くばかり歎くにぞ、小冬は苦しさ紛らして。

ト次左衛門、いろ〳〵思ひ入れにて云ふ。小冬、苦しきこなしにて

小冬　父さん。

次左　ヤ、。

ト思ひ入れ。

小冬　氣遣ひさしやんすな、死にやせぬ〳〵、死にやせぬけれどな、ひよつとわたしが死んだなら、母さんと一つ所へ埋めて欲しい。コレ、兄さん、父さんともせり合はずと、仲ようして下さんせ、頼みまする。わしや父さんがいとしい、大事にかけて下さんせえ。

〽と云ふ聲も、次第〳〵に色變り、手足を縮め四苦八苦。

ト小冬、苦しきこなし、次左衛門もいろ〳〵思ひ入れあつて

次左　コリヤ、娘、小冬やい〳〵。

〽呼べども聲の立ちかぬる、惜しや莟の散らせしは、花盗人とも壬生寺の、鐘や哀れを添へぬならん。

ト小冬、苦しみ、落入る。次左衛門、ヘアアと大泣きに泣き落す。此うち五右衛門は、系圖の一卷を一心に見てゐる。淨瑠璃。

〽一心不亂五右衛門は、一卷とくと讀み終り。

トよろしく思ひ入れあつて

五右　こりやコレ、大內の系圖書。すりや、おれは百姓の

子ではなく、九州大内の落胤か。ムウ。さすれば先祖は琳聖太子。こりや、これまでの望みや變へにやならぬわえ。元より大名小さい奴、武將の望みもよしにして、これから望むは……ムウ……。ならずば一生盜人暮らし。一日暫時の恩もない、誠の親より大切な、こなたを仇と討たれうか。

次左　ヤア／＼、なんと云ふぞ。矢ッ張りおれを眞實の、親と思うてくれる氣か。

五右　盜人ほど義理引きを、苦に病むものはござりませぬ。

次左　オヽ／＼、よう云うてくれた。忝ない／＼。

〽忘れはせぬと縋りつき、肉身分けた嬉し泣き、理りせめて殊勝なり。

ト兩人、思ひ入れ。時の鐘、鳴る。

〽晝は疵持つ足柄金藏。

ト足柄金藏、盜人の拵らへにて出て、門口へ來て

金藏　頭、頭。

ト呼ぶ。五右衞門、見て

五右　オヽ、足柄か。遠慮はない、これへ入れ／＼。

金藏　アイ／＼。

ト花道の方を招く。

〽招けば後から三上の百介、堅田の小雀、數多の同類、くらをなんに似せ商人、くろめる贓物かたげ込み。

ト三上の百介、堅田の小雀、その外手下大勢、荷物を擔げ、出て、直ぐに舞臺へ來る。

〽五右衞門手下を見廻して。

ト五右衞門、皆々を見て

五右　コリヤ、堅田よ、この中に小鮒の源五郎めが居らぬが、どうし居つた。

小雀　さればいの。こなさんの配符が廻つたに依つて、お頭の代りになつて、縛られに行くと、昨日名乘つて出居つたからは、頭の身の上、氣遣ひない。なんと、出かしたおやごんせぬか。

五右　ムウ。彼奴ならさうであらう。ハテ、愛い奴だなア。

百介　イヤ／＼、あればかりぢやない、まさかの時は仲間の者どもは、皆こなさんの命に替る氣ぢや。コレ、見さつしやれ。

ト銘々上衣を脫ぐ。いづれも五分月代、五右衞門を一對の鬘。

〽中にも金藏一端だち。

ト金藏、こなしあつて

金藏　頭、昨夜からの働きは、晝のうちから頑張つて、十七八の振り袖は、姉が小路、立花屋と云ふ三味線屋へ、とてちんなしに跳り込み、娘押へて取つて來た。小袖の襟數三十八、黒塗り手箱に流れる程、壹分の數は千五百、褒めて下んせ。

ト そこへ出す。

〽頷きじろりと見たはかり。

ト 五右衞門、思ひ入れ。

五右　コリヤ、雀も百も踊つたか。

小雀　イヤ、忘れてもこの後、公家の所へ入るなよ。

百介　成る程、雀が云ふ通り、位と暮らしがお揃ひなさらぬ香冠り。こんな裝束白丁烏帽子、冠つた代物、お頭の氣には入るまいなア。

五右　して、その外に何にもなかつたか。

百介　ほんに、それよ。此やうな結構な箱の中に、むづかしい字の書いた、汚ない紙が入れてごんすわいの。

ト 銘々、いろ〳〵の代物を出し、蒔繪の綸旨の箱を出す。

五右　オヽ、そりや一束一本、綸旨であらう。爰へ寄越せ。

ト 取つて、開き見て

ハテ、好いものが手に入つたなア。こりやコレ足利家へ大内から預け置かれた、太政官の御正印を返せとある勅書。ムウ、吳羽中納言氏定承る、コレ、爰が仕事だ。この中納言氏定におれがなつて、足利家へ入込み、太政官の印を受取らうと云ふと、それが無いワ。無い筈だ。その印は疾より紛失してある噂。そこで、云ひ譯がないから迷惑するワ。そこを附け込んで大金にするか、但し義輝に切腹させるか。どちらでも巧い代物。また次が先へ廻つて、行き損ならてからが元々ぢや。ドレ、お公家樣になつて見よう。ソレ、仕丁が三人。

三人　アイ、ようごんす。

五右　諸太夫。

三人　アイ、よし。

五右　雜掌。

三人　アイ、ようごんす。

五右　挾み箱、よしか。

三人　アイ、よし〳〵。

五右　ドレ、裝束を着けようか。

〽聞くに堪らず次左衞門、歎きを忘れ、齒を咬み鳴らし。

ト 五右衞門、裝束を着ける。次左衞門、思ひ入れあつ

て

次左　エヽ、恐ろしい企み事。ならぬ、さゝぬ。

ト彼方此方と這ひ廻る。これより鳴り物になり、皆々、捨ぜりふにて、舞臺にて、白丁、上下、いろ／＼着けろうち、次左衞門、あちこちと縋り、留めて、這ひ廻る事よろしく、トヾ、皆々、裝束を着ける。次左衞門、五右衞門に縋りついて、いろ／＼こなしあつて、

次左　コリヤヤイ、其やうな横道な事して、それが眞直に行かうかいやい。此やうに云うても用ひぬのは、おれに愛想を書かされうとするのであらうけれど、如何な事、なんぼでも愛想が盡きてよいものか。コリヤ、この位牌の亡者に請合うた事ぢやもの、火に入るならば、共に火の中までも連れて行け。とても聞入れぬものならば、モウ、おれは留めまいが、コレ、この形見の笛の音を、せめて丹御の詞と思ひ、どうぞとまつて、くれいやい。

〽心を籠めて吹く笛は、凄涼として冴え渡る。聲に感ぜし水龍の、鳴くか忽ち帶びたる太刀、はためき渡ればあたりの小川、水勢激して朦朧と、打烟るこそ怪しけれ。

ト次左衞門、笛を吹くと、薄ドロ／＼になり、五右衞門の佩いたる太刀、おのれと動き、舞臺前より、水氣立ち昇る。五右衞門、キッと見て

五右　笛は龍の吟ずる聲。帶びたる太刀の閃くは、さてはいよ／＼雌龍の劍。ハテ、爭はれぬか。

ト次左衞門、笛を止める。これにてドロ／＼止み、水氣消える。

皆々　頭、今の不思議は。

五右　なんぞの荒れであらう。サア、打ッちやつて、來い。

皆々　ハア、。

ト思ひ入れ。下がり葉。行列、三重になる。次左衞門、こなしあつて

〽留むるを闇雲、霞の當、うんとのつけに反り返る。

ト次左衞門を當てる。これにて次左衞門、トントントンと二重へ倒れる。これを見て、皆々、これを運ぶ見得。チョン／＼にて、道具廻る。

本舞臺、向う淺黄幕一面の板松。尤もこの道具、三方廻しにて、下の方の門口、上の方に殘る。この道具に納まる。

トこれに構はず、向うより、徒步、持ち槍、挾み箱、乘り物の行列、凛々しく出て來る。五右衞門を見て、

ツカ〳〵と舞臺下の方へ、乘り物を下ろし、内より此下藤吉、上下衣裳にて出る。此うちに五右衞門始め皆皆、花道の方へかゝり

皆々　下馬緩怠。

ト皆々、五右衞門に傘さしかけ、思ひ入れ。これにて藤吉はじめ皆々、平伏する思ひ入れ。矢張り鳴り物にて、五右衞門、向うへ入る。ト下がり葉打ち上げ、行列三重ばかり殘る。ト藤吉、跡見送り、いろ〳〵思ひ入れの所へ、次左衞門、片手に笛を持ち、上の門口より、探り〳〵出て、藤吉に行き當る。探り見て

次左　兄やい〳〵。無事に戻つてくれよ。

ト取りつくを、藤吉、思ひ入れあつて、次左衞門の持ちたる笛を引き取る。次左衞門、それト來るを、こちらへ引き廻す。チョンと木の頭。藤吉、笛を見て、

藤吉　ハテナア。

トこなし。よろしく、　ひやうし幕

大詰　　志賀別業の場

役名＝＝足利義輝。此下藤吉久吉。三好修理太夫長慶。三好四郎國長。粂川但馬。田島主水。白須賀民部。天野刑部。星合兵部。足柄金藏實ハ蓮葉與六。三上百介。御臺、綾の臺。傾城、芙蓉。石川五右衞門。

本舞臺、三間の間、眞中に大門、潜りを取り附け、上下も一面の筋塀、すべて義輝館門先。爰に三好四郎國長は長上下、粂川但馬、田島主水、白須賀民部、天野刑部、星合兵部、いづれも素袍、烏帽子、大名の形にて、立ちかゝり居る。この見得、舞ひの鳴り物にて、鷹揚に幕明く。

ト皆々、思ひ入れあつて

國長　日毎の出仕御苦勞千萬。各々方も存じの通り、父長慶が計らひにて、當所山王權現を、この別業に勸請なし、國家安全の萬燈會を行はるるも、深き計略。我れ〳〵親子に荷擔の方々、この上ながら親どもが、指圖に萬事從はれよ。

但馬　仰せまでも候はず、管領職たる三好どの。

民部　兼ねての大義に組みする我れ〳〵。

主水　聊か異變のあるべきやうはござらぬ。

刑部　殊には三好公の娘として、突きつけられた傾城芙蓉。
兵部　それに現を拔かしたる、義輝の馬鹿大將、禁庭守護もなげやり三方。
但馬　放埒者に仕立て上げる、細工の花籠。
皆々　早々これへ。
侍ひ　ハア、。
ト誂らへの花籠を持ち、出て、好き所へ置いて、控へる。國長見て
國長　ハテ、見事、阿房の武將に相應な、花の獻上。ソレ、奧庭へ。
侍ひ　ハア、。
ト持つて、門の内へ入る。とバタ〳〵になり、向うより菖蒲革の足輕一人、走り出て來り
足輕　ハツ、申し上げまする。武將の御機嫌伺ひとして、小田春永が名代、此下藤吉、只今參上いたしてござりまする。
ト引返して入る。皆々、思ひ入れあつて
國長　ヤア、緩怠なる小田春永。大名の分として自身にも來らず、成上がり者の猿面にて、名代呼はり、しやらくさい。これへ來たらば面恥かゝせて、ぼッ返さうではござらぬか。
但馬　こりや、國長どのゝ仰せの通り、何がな慰み。ナウ、いづれも。
皆々　イカサマ、左樣。
ト淨瑠璃。
〽齊より楚國へ使ひせし、安平仲が勵しに、劣らぬ才智、此下藤吉。
ト序の舞になり、藤吉、上下にて、供人召連れ、出て來る。
〽供人僅か引連れて、御門前に立ち休らひ。
ト舞臺へ來て、こなしあつて、家來に向ひ
藤吉　コリヤ〳〵、者ども、途中で手に入る彼の一品、乘り物諸とも腰掛けに、控へて居よ。早う〳〵。
供侍　ハア、。
ト引返して、向うへ入る。藤吉、皆々へ思ひ入れして
藤吉　ハツ、小田春永が使者、此下藤吉、參上仕つてござりまする。
國長　ヤア、お初穗ほどな國郡、切り取り自慢の小田春永
但馬　人に事缺き、素性も知れざる此下藤吉。
民部　諸大名の座席も憚らず

主水　のさばり返つて、緩怠至極。
刑部　名代なぞとは無禮の振舞ひ。
兵部　手早く歸つて直々に、伺候せよと云ひ聞かせよ。
國長　身の程知らぬ使者呼はり、片腹痛い。
皆々　ハヽヽヽヽ。
　ト笑ふ。
〽ちつともひるまず詞を正し。
　ト藤吉、思ひ入れあつて
藤吉　これは〳〵、方々のお詞とも覺えぬ。いま四海足利に一統とは申しながら、列國蜂の如くに起る亂世。春永上洛と漏れ聞かば、君に叛く東八ヶ國の大小名、追ひ追ひ都へ攻め登らば、遂には國家の大事とならんと、防禦に暇あらさる春永。腰拔け大名同然に思し召すか。武將の御機嫌伺ひは、某に相應な役目。漢の高祖は沛縣の士民、素性呼はり事おかしや。サヽ、これにも否や、御返答がござるかな。
皆々　サ、そりやア。
〽云ひ廻されて國長始め、皆々ぎつくりぐわつたりと、あたりの小門押し開き。
　ト皆々、思ひ入れあつて、門の潜りを開き

國長　小倅に似合ふやうに、ナウ、いづれも。
但馬　左樣々々。この小門から小庭へズッと
皆々　サア、通りやれ。
藤吉　足利御所と思ひの外、犬を潜らす小門より通れとある方々。さては志賀の別業は、犬の住家か。四つ足の宿か。列國に覇たる春永が使者、犬の門には入り申さぬワ。御身達如きのいのころ武士、膝組み交すも穢らはしい。
〽一句に挫がれ。
　ト皆々、いろ〳〵こなしあつて
但馬　ア、コレ〳〵、こりや我れ〳〵が出損なひ。
皆々　イザ〳〵、これから
〽と押し開く、御所の大門輝やかす、けんきよに彫りし菊桐の、當座の面目、此下は、館へこそは。
　ト藤吉、思ひ入れ、よろしく、門の内へ入る。皆々、思ひ入れあつて
但馬　憎くき彼れが立ち居振舞ひ。
兵部　して、國長どの。
皆々　御所存はな。
國長　コレ。
　ト皆々に囁く。皆々、段々に囁き合ひて

皆々　天晴れ妙計。
國長　コレ。
ト押へろ。中の舞ひになり、此まゝ道具をぶん廻す。本舞臺、通しの高二重、高欄附き。正面瓦燈口、御簾を掛け、竹の節の欄間。上下網代塀、すべて御殿の道具よろしく、爰に足利義輝、傾城芙蓉の膝を枕にして居る。新造卷葉、腰元。たより、禿にて、附き添ひ居る。側に酒肴取散らしあり。この見得、道具半頃より琴唄にて、道具納まる。
ト以前の花籠、よき所へ直しある。芙蓉、思ひ入れあつて
芙蓉　長慶さまの計らひにて、この間から御殿へ上がり、晝夜お側を離れぬ嬉しさ。我が身の果報を思ふにつけ、お痛はしいは御臺樣。どうぞ御機嫌直されて
義輝　又かいやい。一體あの綾の臺は、關白家の娘で居ながら、歌書は取措き軍學好き。女の際にひけもせぬ劍術柔術、武家めかすが面倒さに、目通りは叶はぬと、遠ざけ置いたも君への心中。なんと憎うはあるまいかの。
ト思ひ入れ。向うより、楓、腰元の形にて出て來り
楓　御臺綾の臺さま、只今これへお出でゞござります
る。
義輝　ヤア、予が許すと云ふ詞も出さぬに、推參千萬。推して來らば詰め所の者ども、遠慮に及ばぬ、引ッ立てよ。
ト向うにて
侍ひ　ハア、。
トばた／＼、中の舞になり、向うより綾の臺、奥方の形。侍ひ二人、これを支へ、出て來り
侍ひ　御前へは叶ひませぬ。お下がりなされませ／＼。
綾の　其方達が存ぜぬ事、控へて居よ／＼。
侍一　イヤサ、御臺樣にもせよ、御前の御意が重うござる。
侍二　平にこの座を
兩人　お下がりなされ／＼。
トいろ／＼留めるを、振り切り、舞臺へ來る。義輝、思ひ入れあつて
義輝　ヤア、許しもせぬに、奇ッ怪なる女め、早く立て。
綾の　ハッ。
義輝　立つて行かずば、義輝が手を下ろさうか。
ト刀を持つて立ち上がる。芙蓉、見て

芙蓉　如何に仰せと云ひながら、餘りと云へば勿體ない。ママア、お鎮まりなされませ。

　ト義輝を宥め、思ひ入れあつて

賤しいこの身を殿樣の御寵愛、嬉しい中にも悲しいは、あなたをお側へ召されぬも、皆傾城めが業ゆゑと、お下げすみが恥かしい。

綾の　イヤナウ、そもじが業ならず。皆自らが心得違ひ。この上は我が君の御機嫌に入るやうに、聞き及んだ廓の詞。指南してたべ、芙蓉どの。

芙蓉　オヽ、あられもない事御意遊ばす。そんなさもしい廓の物云ひ、お免しなされて下さりませ。

綾の　イヤ〳〵、お心だに叶ひなば、詞は愚か傾城の、諸譯とやらも殘りなう、御傳授の程頼みまする。

義輝　オヽ、こりやよからう。常の堅身を取措いて、傾城の眞似とは、氣が變つて面白い。とてもの事に御臺と芙蓉、兩方衣裳を取換へよ。この趣向が承知なら、目通り許す。

芙蓉　サア、お許しが出たからは、お心措きなう御臺樣、シタガ、賤しい妾が小袖。

綾の　なんの〳〵、御意背かぬが女子の常。互ひに衣服を取換へて、お宮仕へも又一興。

　ト互ひに裲襠を取換へ着る。義輝、思ひ入れあつて

義輝　出かした〳〵。御臺の芙蓉、傾城の綾の臺、その形で、とてもの事に、揚屋入りが見たいが、先づその前に、廓の臺詞が、どうか〳〵。

綾の　ハイヽ。

　トこなし。禿たより、そこへ出て

禿　申し、御臺樣、太夫さん、そんな事、オヽ、好かん、わしや否いな、とツイ云ひなませいなア。

綾の　ア、コレ、畏れ多い事を。

義輝　また我が詞を背くのか。

綾の　イエ、左樣なら、オヽ、好かん、わたしや否いな。慮外の段、幾重にもお免しなされて下さりませ。

　トこの時、向うにて

呼び　勅使。

　ト呼ぶ。皆々、思ひ入れ。

義輝　ヤア、遊興の爲、築かせしこの別業へ、心得ぬ勅使の入來。逢ふもむづかし。幸ひ〳〵、御臺姿の傾城芙蓉、其方出迎うて相手になれ。それを肴に一献酌まん。サヽ、皆々、參れ〳〵。

腰元　先づ入らせられませう。
皆々　ト唄になる。一件皆々、奥に入る。ト淨瑠璃。

〽斯くと聞くより三好修理太夫長慶、續いて嫡子四郎國長、出で迎ふ。

ト下座より、長慶、國長、出て來り、よろしく仕ふ。

ト又、向うにて

呼び　勅使。

ト呼び、下がり葉になり、五右衞門、以前の人數附き添ひ、出て來る。直ぐに舞臺二重へ通り、供の皆々は下へ入る。長慶、こなしあつて

長慶　お勅使樣には、遠路の所、御苦勞千萬。さりながら、存じ依らざる不時のお勅使。斯く申すは管領三好長慶。
國長　同じく嫡子、四郎國長。
長慶　宣旨の趣き、我れ〳〵へ
兩人　仰せ聞けられ下さりませう。

ト思ひ入れ。五右衞門もこなしあつて

五右　勅諚。
兩人　ハア、。

ト思ひ入れ。管絃になる。

五右　武將義輝、先つ頃より、この志賀の別業に引籠り、晝夜の遊蕩、剰さへ、參內を怠り、禁廷を輕んずる條、逆鱗もつての外なるゆゑ、預け置かれたる太政官の御正印、氏定受取り歸るべし、との即ち勅諚。

〽聞くより長慶、怪訝顏。

ト長慶、思ひ入れあつて

長慶　こは、存じ依らざる勅諚。義輝、何がゆゑに禁廷を輕んじ奉るべき。察するところ、佞邪の讒言。また御正印を預かり奉るは、日本總追服の規模、この儀は暫らく御猶豫を願ひ奉る。
五右　ヤア、綸言は汗の如し、出でゝ再び返らぬ繰り言。

〽早く〳〵に三好が當惑。

ト長慶、思ひ入れ。この時、奥にて

芙蓉　その勅答は綾の臺、申し上げるでござりませう。

ト合ひ方になり、芙蓉、出て來り、五右衞門を見て

これはお勅使さんかいなア。自らは義輝が御臺、綾の臺お見知りなされて下さりませ。

〽云ふ顏見惚れてうつとりと、威儀も崩るゝ勅使の目遣ひ。

ト五右衛門、芙蓉に見惚れたるこなしにて

五右　ハテ、あでやかな。して、勅答は。

芙蓉　ハイ、その御正印は、紛失いたしましたわいなア。

五右　なんと。

芙蓉　ハイ、失せました。

五右　ヤア、大切なる御正印、失せたとばかりで相済まうか。長慶、なんと心得て居るぞ。

長慶　ハッ。

〽はつとばかりに口籠る。詞無ければ四郎國長。

ト長慶、思ひ入れある。國長、こなしあつて

國長　露顯の上は隱すに及ばず。如何にも何者の仕業にや、紛失いたし、在所知れず。これと申すも武將の身持ち、放埓惰弱の行跡ゆゑ。

長慶　コリヤ〱、忰、默り居らう。誠に隱すより顯はるるはなしと、ハテ、是非に及ばぬ。

〽余所目につくる忠臣顏。勅使はなんのいらへなく、座を立ち出づる裝束の、袖を抑へて止むる芙蓉。

ト五右衛門、座を立つて、行かうとする。芙蓉、袖を捕へて

芙蓉　お勅使樣、何處へお出でなされまする。

五右　オヽ、預かりの御正印紛失の上、我れを輕んずる義輝が振舞ひ。立歸つて後日の奏聞。

芙蓉　サヽ、お腹立ちは道理ながら、有りのまゝに奏聞あつては、我が君のお身の大事。どうぞよしなに賴み上げます。

〽餘儀なき詞に面を和らげ。

ト思ひ入れあつて

五右　餘人は格別、御臺の賴み、否むにはあらねども、漁る網に心あらば、千尋の底の魚鱗も、心なしとは云はれまじ。

〽籠る詞に露持つ芙蓉。

芙蓉　仰せに心ありそ海、深き賴みの自らが、胸さへ休め給はらば。

五右　さすれば網に、引かるゝ心か。

芙蓉　花ならで、薫る一木を君聞はゞ、焦るゝ胸の程も知らせん。

五右　ハテ、面白き口吟み、氏定殊に感じたり。この上は御正印詮議の間、百日の日延べ得させん。

〽聞くより長慶しや〱り出で

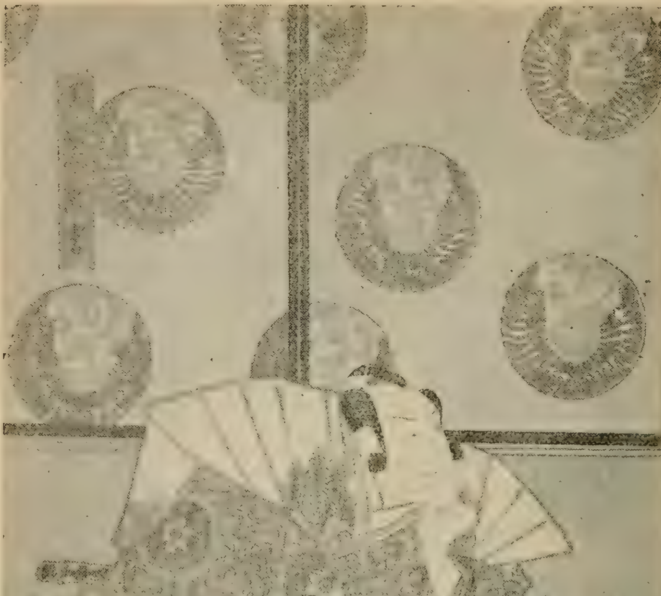
ト長慶、思ひ入れあつて

長慶　イヽヤ、日延べはなりますまい。百日や二百日で、容易く知れやうがござらぬ。
五右　ムウ、重き越度も、輕く取計らふが、公の仁政。武將被官の其方が、主の非を擧げるは何事。御臺の切なる心に免じ、日延べを執成し申しくれんと、承知を打消す三好長慶。
長慶　イヤ、執奏お頼み申さぬ。例へ紛失したればとて、足利の權威を以て、後とも云はずたつた今、捜し出してお渡し申さん。
ト五右衞門へ思ひ入れ。
芙蓉　そんなら其方が
長慶　ハテ、御臺樣、お氣遣ひあられまするな。萬事は拙者が胸にござる。
芙蓉　それぢやと云うて
長慶　ハテ、ようござる。和田の原、漕ぎ出でゝ見れば久方の、雲井にまがふ沖津白浪。
五右　ヤ、なんと。
長慶　その白浪の立たぬやう、お勅使樣には暫時の御容赦。誰ぞある、饗應の用意いたせ。後刻對顏いたすでござりませう。

〽國長引き連れ長慶芙蓉、奧と次とへ別れ行く。
ト長慶、國長、芙蓉へ目配せして、五右衞門へ思ひ入れして、皆々下座へ入る。五右衞門、あたり見廻し、思ひ入れあつて
五右　ムウ。御臺の底意、長慶が詞の端。ハテナア。
〽はて心得ずと眉に皺、熨斗目立派に近習の武士、大判三千、世界の寶、積み重ねたる廣蓋を、勅使の前へ直し置く。
ト侍ひ二人、白木の臺に大判を載せたるを持ち、出で來り、右の品を五右衞門の前へ直して、下の方に扣へる。淨瑠璃。
〽下がる座敷へ入り來る。此下藤吉久吉、望んで勤める饗應役、遙か此方に頭を下げ。
ト藤吉、出て來り、下の方へ來り、思ひ入れあつて
藤吉　臨時の設け、不束なおもてなし、お納めなし下さらば、有り難う存じ奉りまする。
五右　雲井に交はる氏定へ　瓦石と卑しきこの饗應。持つて立て〳〵。
藤吉　ハテ、御意、畏れ入り奉りまする。併しながら、管領三好が心を籠めたるこの御馳走、是非ともお受け下さ



市川小團次の石川五右衛門



坂東彥三郎の此下藤吉

るべし。

〽にぢり寄つて顏眺め。

ト藤吉、いろ〳〵こなしあつて、五右衛門の側へにぢり寄り、顏を見て、思ひ入れあつて

コリヤ〳〵、其方達は、用事あらば呼び出さん。次へ立て〳〵。

侍ひ　ハツ。

〽あたりを見廻し、人を除け

ト侍ひ、下座へ入る。藤吉、こなしあつて

藤吉　コリヤ、友市よ〳〵。見ぬ顏すない〳〵。

五右　ムウ、さう云ふ其方は。

藤吉　コリヤ、見忘れたか。猿ぢや〳〵。

ト思ひ入れ。五右衛門、見て

五右　オ、、猿之助か。

藤吉　オイヤイ。

五右　三州の雁ケ搦で、丁稚の時分、足もたせけつた猿之助。

藤吉　オ、、奉公先の朋輩同志、あがき合つた竹馬の友市。

五右　われも達者で

藤吉　お主も無事で

兩人　これはしたり。

〽こりや珍しいと双方が、一度に横手打ち寛ろぎ。

ト兩人、思ひ入れあつて、二重へ上がり、互ひに胡座をかいて、思ひ入れ。

藤吉　さてマア、わりや、どうしたぞい。

五右　イヤモ、どうと云つたら、巧い事もないものだ。われと競り合うて、太刀を卷き上げようとしたところが、もくが割れて野暮な事。やう〳〵ふけつても親方へは戻られず、習はうよりは馴れた仕事、寄覗きから巾着切り夜盜かッさき矢尻切り、出拔けた所が盜賊のお頭。手下ばかりが五六千もあらうかい。そりやさうと、わりや谷へ落ちて死んだと思つたが、見りやア立派な形かたち。どうした譯か、話して聞かせろ〳〵。

藤吉　イヤモウ、おれも難行苦行、轉けては起き〳〵、命から〳〵谷から上がり、さて中村の親の内へは賴られず。飯焚きにも行たり、小僧にもなつたり、とくれこくれて十年余り、傳手を求めて、どうやら斯うやら仲間奉公、爰にも例の居据らず、黄金六兩取り逃げして、身のまはりを拵らへ、小田どのへありついた、今の名は此下

藤吉。

五右　すりや、われが此下藤吉か。えらい立身したなア。

藤吉　ハ、、、何を云ふぞい。日本を丸取りにしてからが六十余州、高の知れた、この位を立身とは、嬲るな嬲るな。さうして今の、われが名は。

五右　おれか。盜賊の張本、石川五右衞門。

藤吉　すりや、アノ、われが石川五右衞門か。ムウ、そんなら壬生村で行き合うた

五右　不知案內の武骨の侍ひ。

藤吉　下馬緩怠と留めたのは

五右　お使者の猿冠者。

藤吉　勅使のお頭。

ト兩人、思ひ入れあつて

兩人　こりや、話せるわい。

ト誂らへの合ひ方になり、兩人寢腹這ひ、いろ〳〵思ひ入れあつて

藤吉　時にわれも、折角仕込んで來た仕事ぢやが、黄金三千枚なら好い酒代、四の五の云はずと、早う持つて去なぬかい。

五右　イ、ヤ、歸られない。

藤吉　なぜ〳〵。

五右　ハテ、斯う元手を入れて來たからは、もつと大きな仕事にしたい。

藤吉　さりとは丈夫に手厚い根性。不足ならその金で、われに賣る物があるが、買はぬかい。

五右　オ、、代物に依つて買ひもせう。

藤吉　ドリヤ、賣らうか。

〽と起き直り

ト藤吉、思ひ入れあつて

藤吉　ヤア〳〵、藤吉が家來ども、乘り物に用意の一品、持參いたせ。

侍ひ　ハア。

〽はつと答へて白洲より、舁いて出でたる藤葛籠、緣側に差置けば

ト侍ひ、誂らへの葛籠を持つて、出て來り、好き所へ置いて、入る。

サテ、これぢや。不相應な古着なれど、氣に入つたら賣らうかい。

〽樣子ありげな一言に。

五右　ドレ、改めて見ようかい。

〽蓋引き明ければ衣類にあらで、差出す白髪の親の顏。
ト五右衞門、葛籠を明ける。次左衞門の吹替へ顏を出すゆゑ
〽見るより手早く蓋しつくり。
ト手早く、ちやつと蓋をする。
藤吉　なんと、三千枚には廉い物であらうがな。
五右　オヽ、賣り買ひにならぬ古着、破れぬうちに、買つて置かう。
〽裝束の袖まくり手に、太き心を細引も、義理の連尺流石の石川、いせきとせごす此下が、捕れ詞の羽掻締め。
ト五右衞門、葛籠を背負ひ、平舞臺へ下りる。と正面の御簾を下ろす。こなしあつて
藤吉　お勅使御苦勞。
五右　種々のもてなし、後日の對面。
藤吉　おさらば。
五右　さらば。
〽姿は雲の上見ぬ鷲、御簾の隙洩る笛の音に、連れて聞ゆる樂器の調べ。
ト笛のひしぎ、音樂になる。と薄ドロ〴〵、淨瑠璃。
〽時に怪しや兩人が、帶せる太刀に響あつて、とうとうとして鳴り響く。
トどろ〴〵にて、花籠より水氣立ち昇る。兩人キツと見て、音樂きつぱりとなる。
五右　ハテ、心得ぬ。いま聞えたるあの笛に、帶せし劍の音を出すは
藤吉　笛は龍の吟ずる聲、勅使の帶びたる劍まで、共に音をなす同氣の合體。すりや疑ひもなき雌龍丸、其方が奪ひ取り所持せしよな。
五右　ホヽ、流石の此下、よく知つたり。汝が帶せしその刀も、共に音をなす今の奇特、さては雄龍の劍なるか。
藤吉　ホヽ、云ふにや及ぶ。足利累代雌雄の名劍、合體するは今この時。雌龍丸を受取らう。
五右　イヽヤ、汝が雄龍丸、渡せ。
藤吉　何を小癪な。
〽詰め寄り〳〵、双方一時に拔き放せば、咲き亂れたる木草の花形、朝日に霜と散り失せたり。
ト双方、拔いて打ち合す。仕掛けにて花籠の花、殘らず散つてしまふ。笛、止み、薄ドロ〴〵。この時闇に長袴、捕り手大勢連れて出て來り

國長　劍の盜賊、石川五右衛門、ソレ、召捕れ。

大勢　ハア。

ト五右衛門へ立ちかゝる。其まゝ、五右衛門よき所にて、印を結ぶ。ドロ／＼になり、砧にて消す。

皆々　こりや、どうだ。

ト思ひ入れ。この時、正面の御簾を上げて、綾の臺、藤吉より渡したる笛を持ち、立ち出る。藤吉、思ひ入れあつて

藤吉　壬生村に於いて、非人が所持の寒竹、我が手に入りしを幸ひと、御臺樣のお開きに達し、詞べに顯はす劍の盜賊。忍術を以て諸人の目を晦ますとも、藤吉が眼は明鏡。

綾の　オヽ、萬里を見拔く其方の明察。指圖の通り計らうたれど、國長は四門を固め、取逃がさぬやう、用心しや。

國長　ハツ。者ども續け。

皆々　ハア、。

〽組子引連れ、駈り行く。

ト國長、捕り手、向うへ入る。

綾の　頃も黄昏、我が君の神拜の刻限ならん。萬事は、藤吉。

藤吉　先づ入らせられませう。

〽引別れてぞ。

ト兩人、奧と下座へ入る。直ぐに淨瑠璃。

〽入相の、時分はよしと窺ふ長慶、こなたへ出で來る五人の大名。あたりに人も長廊下、小庭傳ひに寄り集まり。

ト長慶、五人の大名、あたり窺ひ／＼出て來たり

長慶　某大望あるに依つて、義輝をそゝり上げ、家國安全の祈りと號し、萬燈は禁廷調伏の、それを越度に足利家を、滅亡させんず我が計略。

但馬　ホヽウ、三好どのゝ仰せの通り、貴殿の大義に組みする我れ／＼。

兵部　二心なき證據の血判。イザ、お受取り下されよ。

ト連判を出す。長慶、開き見て

長慶　オヽ、桑川どのを始めとして、各々無二のこの一卷。ホヽウ、滿足々々。慥かに落手いたしてござる。

ト懷へ入れる。

部了　幸ひ今宵、闇夜の神拜。

主水　折を見合せ、義輝を

刑部　我れ〳〵五人、手を下ろし
但馬　有無を云はせず
兵部　たつた一討ち
長慶　事成就のその上は、大國を宛て行ふ某が墨付き、イザ。
ト懐より墨付きを出して、渡す。
兵部　エヽ、忝ない。
但馬　何かの手筈は
皆々　奧殿にて
長慶　コリヤ。
ト思ひ入れ。
皆々　長慶どの。
長慶　いづれも、お來やれ。
〽打連れてこそ入りにける。
ト皆々、下座へ入る。
〽間毎々々に敷き並べ、花と見紛ふ菊燈臺、甍を欺くばかりにて、あたりも輝く金殿を、恐れぬ大膽不敵の五右衞門。習ひ覺えし忍術にて、姿見えねば誰れあつて、咎むる人も長廊下。
ト五右衞門、奧より出て來り、思ひ入れあつて、印を結ぶ。ドロ〳〵、砧、五右衞門の前へ下りる。
〽椽の下より仕丁の足柄、これも窺ふ座敷先、それと見るより
ト足柄金藏、椽の下より出て、あたりを窺ふ。思ひ入れ。五右衞門、砧の内より
五右　足柄々々、金藏々々。
ト呼ぶ。金藏、五右衞門の見えぬ思ひ入れにて
金藏　ヤア、慥か今のは頭の聲だが。
〽あたりきよろ〳〵胡散顏。
五右　オヽ、見えぬ筈、爰に居る。
ト印を解く。ドロ〳〵にて、砧を引き上げると、金藏こなしあつて
金藏　オヽ、頭、先刻から腰掛けに、待つてゐても音はせず、もくは割れはしやせぬかと、中の口からこの下家へ。サア、ふけらうぢやあるまいか。
五右　イヤ、ふけられぬ。
金藏　とは、なぜな。
五右　オヽ、なぜとは、纐だ〳〵。
金藏　ヘエ、やられるな。
五右　イヤサ、おれがこれまで念掛けた事、なんでも逃が

した事がない。根輪際やりつけにや、この館は動かぬ性根。邪魔になるこの葛籠。大事の贓物、これ持つて、先へ歸れ。

金藏　オヽ、呑み込んだ。

〽肩から肩へ、しつかり掛けたるれんじやくの、紐引き締めて引きかたげ

ト金藏、五右衛門の背負つたる葛籠を引きしよひ

〽行かんとせしが

ト花道の方へ行かうとして、こなしあつて

金藏　イヤ、行かれぬ〳〵。この館の四方八方は、こなさんを逃がさぬ用意の手配り。これ脊負つては一寸も

五右　よいワ。鐵の網を張つても、何時歸らうと儘な五右衛門。われを落すは、コリヤ。

ト懷中より、忍びの一卷を出し

これが卽ち伊賀流の、忍びの傳書、これさへ見れば數萬の中でも、芥子ほども目にかゝらぬ大事の物。しつかりと預けたぞ。

ト一卷を金藏に渡す。金藏、取つて

金藏　そんなら、頭。

五右　早くふけろ。

金藏　合點だ。

〽飛ぶが如くに出でゝ行く。

ト金藏、其まゝ向うへ、走り入る。

五右　サア、これからは一本立ち。

〽見やる彼所の緣傳ひ、以前の連判引ッ銜へ、走り寄つたる手飼ひの狆。五右衛門、見るより

ト薄ドロ〳〵にて、狆、一卷を銜へて出る。五右衛門見て

五右　オヽ、百介、大儀〳〵。

〽口のうち、何か唱へる間もなく、元の姿と三上の百介。

ト五右衛門、呪文を唱へる。ドロ〳〵にて、狆、切り穴へ消へ、百介になりし見得にて、百介、一卷を手に持ち

百介　コレ、頭、こなさんに習つた忍術で、形を變へ、長慶が持つてゐた連判を

五右　シイ、聲が高い。ドレ、爰へ〳〵。

ト取つて

三好を始め一味の奴原、味方に附けん好い手がゝり。コリヤ、百よ、われは足柄めが、忍んで來た緣の下から、

先へふけろ。

百介　合點だ。

ト緣の下へ入る。

〽入る拔け道忍び込む、御臺の寢所は何處ぞと、氣配り目配り春風に、つれて漏れ來る蘭奢の香り。

ト五右衛門、いろ〳〵思ひ入れあつて

五右　ムウ、えならぬ匂ひは、聞き及んだる蘭奢待か。ムウ。

ト思ひ入れ。

〽頷き〳〵名香の、香を栞に忍び込む。

ト五右衛門、思ひ入れあつて、下座へ入る。ト引き違へて、長慶、窺ひ〳〵、出る。と奥にて

藤吉　エイ。

ト太刀音する。テン〳〵と舞になる。藤吉、國長の切り首を持ち、出て來る。長慶、見て、愕り。

長慶　ヤア、久吉、何科あつて悴國長を手にかけた。仔細を聞かん。

藤吉　ヤア、まざ〳〵しくも咎めたり。我が君を害せんと忍び入りたる四郎國長、武將を守護するこの久吉、討ち取つたる上からは、云はねど知れし親子が惡事。汝に一味の大小名、殘らず搦め置いたれば、謀叛の張本三好長慶、盜み取つたる御正印、渡して置いて切腹なせ。

長慶　ヤア、樣々のたわ言。悴は格別、忠心無二の某、御正印を盜みしとは、何を證據に。

藤吉　證據と云ふは一味の輩へ、汝が渡したこの墨付き。

ト墨付きを出して見せる。

長慶　エヽ、口惜しやなア。義輝を亡き者にし、四海を握らん我が計略も、斯くなれば論も無益、我が手に入りし御正印、大海は干潟となるとも、渡さぬ〳〵。

藤吉　ヤア、この期に臨んで未練にも、渡さぬだては腹の皮、物な云はせそ、討つて捕れ。

捕手　ハア、。

ト捕り手、大勢、出て來り

動くな。

ト取卷く。

長慶　何を小癪な。

ト早舞ひになり、皆々、立廻りよろしくあつて、眞中に長慶、キッと見得。藤吉、詰め寄り、捕り手の人數皆々、これを取卷き、矢張り早舞ひドン〳〵にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、眞中九尺の亭屋體、伊豫簾を懸け、上下網代塀、石燈籠、下草のあしらひ、この道具、納まる。

ト道具半頭より、誂らへの獨吟になる、但し琴入る。

唄〽逢はぬ筈なら夜毎の夢に、ほんになまなか見えぬがよいに、いとゞ思ひの増す穗の薄。

ト唄、切れる。直ぐに床の淨瑠璃。

〽釣り殿、廊下、渡り殿、幾間を越えし石川五右衛門、爰ぞ寢所と忍び足。

ト五右衛門、出て來り、あたりを窺ふ。ト簾の内にて

芙蓉　花ならで、薫る下木を君問はゞ

ト合ひ方になり、簾、上がる。芙蓉、思ひ入れあつて

中納言さま、いつの間に。

五右　その下の句は、焦るゝ胸のほども知らせん。その下紐も、一度は解いてもらひたい。宿直が見る目もいとはばこそ。

芙蓉　イエ／＼、浮氣な色は殿御の常。

五右　イヤ、浮氣とは戯れ深い、君が詠歌と名香に、引かれ引かれて、つい爰へ。

ト又、獨吟の唄

唄〽うつらうか／＼人目の關よ、余所に匂ひの梅の花。

ト兩人、思ひ入れあつて

芙蓉　女子たらしの移り氣より、眞實ならば自らも、操を捨てゝしつぽりと。

五右　抱いて寐る氣か、靡く氣か。

芙蓉　サア、寐まいものぢやないけれどな。わしやお公家さんは否いなア。

五右　公家は否か。否ならば、この裝束も取つて退け

芙蓉　あつかましいその指貫。

五右　サア、お脫がせなされ／＼。

芙蓉　閨の上衣もいらぬものいなア。

五右　サア、どうなりと／＼。

ト芙蓉、裝束を解いて、いろ／＼するとて、五右衛門の懐より連判狀を引き出す。五右衛門、その手を押へて

五右　コリヤ、女め、なんとする。

芙蓉　オヽ、これこそ謀叛の連判狀。忝ない。

ト引き取り、一散に奥へ入る。五右衛門、續いて行か

うとする時、捕り手の人數、バラ／＼と出て

捕手　動くな。

ト取卷く。早舞ひにて、道具廻る。

本舞臺、元の翠簾屋體へ戻る。

トどん／＼にて、捕り手一人々々、返つて出る。五右衞門、拔身にて出て來り、皆々を相手に、よろしくあつて、どつこいと見得。大太鼓入りになり、よろしく立廻りあつて、皆々を向うへ追ひ込み、キツと見得、この時、下座にて

藤吉　ヤア／＼、盜賊の張本、石川五右衞門。

義輝　足利義輝。

兩人　見參々々。

トつツかけになり、兩人、出て來る。

五右　只一人の强盜を召捕らんとて、あの貝鉦は事おかしや。

藤吉　ヤア／＼、石川五右衞門、傾城芙蓉に申しつけ、色に事寄せ奪ひ取つたる、三好が黨の連判狀、これを以て佞人原を、手下に附けん汝が胸中。

義輝　誠に長慶が隱し置いたる太政官の御正印、これも汝が奪ひ取らんとの企みであらうがな。

五右　イヽヤ、一本立ちのこの五右衞門、外になんにも望みはないワ。

藤吉　この上は、汝に見する、一品あり。

ト花道へ向ひ

ヤア／＼、蜂須賀與六、早參れ。

ト向うにて

與六　ハア、。

ト與六、凜々しき形にて、長慶の切り首を持ち、出て來り

謀反の棟領三好長慶を、某討ち取つて候ふ。

ト首をよき所へ出し

殊には彼れが、所持なす所の御正印、イザ。

ト出す。ト五右衞門、見て

五右　ヤア、わりやア足柄、裏返つたか。頼まれたか。

與六　勇來作が家に傳はる忍びの傳書、盜み取つたる石川五右衞門、奪ひ返さんその爲に、姿をやつし附き添ひしは、蜂須賀與六と知らざるか。

五右　ヤア、小賢しくも計りしよな。この上は片ツ端から、死人の山だ。觀念なせ。

三人　何を小癪な。

トちよつと立廻りに、五右衛門、持ちたる劍を、藤吉へ手裏劍に打つ。

藤吉　ホヽウ、神妙々々、今ぞ手に入る雌雄の御劍、盜賊ながら孝心に免じ、親が一命、助け置かるゝ御仁政。

五右　すりや、親が一命助けるとは、情に刃向ふ刃はなし。この場は此まゝ立別れん。

藤吉　又重ねての再會には

五右　大望企つこの五右衛門、足利の世はこの手の內。

義輝　まづそれまでは、

三人　石川五右衛門。

五右　方々

皆々　さらば。

ト吉例の和歌になり、よろしく立廻つて、これより二番目始まり左樣。

ト打ち込みにて　　　　めでたく幕

木下蔭狹間合戰（終り）

解説

渥美清太郎

世話物の盗賊は、鼠小僧を初めとして隨分澤山あるが、時代物としては袴垂保輔と石川五右衞門と、殆んど相場がきまつてゐる。袴垂の方は少し時代が遠いので、江戸の顔見世狂言ぐらゐにしか使はれないが、五右衞門は丁度花やかな桃山期で、時代にも世話にも融通が出來るところから、非常に重寶がられ可愛がられ、その脚本の種類も數十に及んでゐる。義太夫にも歌舞伎にも現はれてゐる。その初めは、山本治太夫節に現はれた「石川五右衞門」であらうか。それが轉じて近松の「傾城吉岡染」になり、宗輔の「釜淵双級巴」になり、歌舞伎へ入るや俄然寵兒となつて活躍を始めたもので、歌舞伎の方に種類が多い。京坂の方が多くこれを扱つたが、江戸にも相當種類がある。比べて見ると、京坂の方は多く二の替り狂言に出した結果、五右衞門は多く天下を望む謀叛人で、稍夢幻的な人物に出來てゐるが、江戸では多少世話がかり、それに稍人間としての五右衞門として描いてある場合が多い。本集には、その代表的な脚本を四種收めた。義太夫と歌舞伎、京坂と江戸、五右衞門の扱ひ方の違ふところを御考察願ひたいと思ふ。

金門五山桐（きんもんごさんのきり）

近頃は「樓門五三桐」と賦すやうであるが、初演はこの名題である、安永七年四月八日初日、大坂角の芝居初演で、五瓶がまだ並木五兵衞と云つた時代の、云はゞ出世作である。金璧燦爛たる南禪寺の山門に、石川五右衞門を點出した、あの夢幻的雄大な構想が大いに歡迎されて、この一幕だけは今日猶廢らない。內容は二の替り狂言だけに、非常に持つて廻つた趣向で、余り有難いとも思へないが、山門の件だけは、歌舞伎の特徴を遺憾なく發揮してゐて感服する。それと、五右衞門が桃山御殿に忍び込んで、久吉を罵倒する點が、多少階級爭鬪の匂ひがして面白い。それに地下坑道の場なぞ使つたのは、海外の空氣を吸ふ事の出來た大坂人に向く、新らしい趣向である。

五瓶にして猶この事あるかと訝かしく思はれるのは、序幕の廓の場面である、あれは並木正三の「惟喬親王魔術冠」といふ脚本を其まゝ借りて來たものである。これから見ると五瓶の作にも、斯うした借り物が往々あるのかも知れぬ。

初演の役割は左の通りである。

此村大炊之助 實ハ大明の宋蘇卿、眞柴久吉（初世尾上菊五郎）岸田民部、奴八田平 實ハ加藤虎之助政淸（前川八藏）五右衛門女房お律、久吉奥方蘭生の方（花桐豐松）傾城花橘（藤川山吾）妹政木、奥方岩浪（嵐雛治）蛇骨婆、火の車小次兵衛、筒井順慶、筒井熊太郎（桐山紋次）傾城九重（嵐松次郎）お通姫（小川千菊）黒崎彌藤二、名和内記（山中平十郎）奥方唐織、大炊女房呉竹（榊山四郎太郎）眞柴久秋、松田勇助（中村重次郎）大佛餅惣右衛門 實ハ海田新吾、眞柴久次（柴崎林左衛門）早川高景、惣右衛門女房お幸（尾上新七）石川五右衛門（嵐雛助）瀬川采女（小川吉太郎）

この狂言が江戸へ入つたのは、寛政十二年二月の市村座が初めで、この時から既に「樓門五三桐」の名題になつてゐる。初演の雛助の子の雛助が久次と五右衛門を勤め、坂東彥三郎の大炊之助と久吉、荻野伊三郎の高景と釆女、小佐川常世のお律、岩井粂三郎の花橘、瀨川菊之丞の九重、嵐三八の八田平で、大當りを取つて以來、江戸でも度々上演され、五右衛門は市川家と中村家の役になり、今日まで及んだのである。

艶競石川染（はでくらべいしかはぞめ）

寛政八年四月、大坂角の芝居初演の狂言で、作者は辰岡萬作である。これでは五右衛門を唐土の遺子といふやうな事はよして、四王天但馬の一子と改め、忍術を使はせる事にした。五右衛門よりも寧ろ石田の局の方が働いてゐる。これは「金門五山桐」の大炊之助を女に書き直したので、石田といふのは石田三成の當込みなのである。秀次の遊興や、多勢の愛妾の一件を利かせたのも面白い。だからこの狂言は、石田の局の一幕だけが後世に殘つたので、近頃でも吉右衛門が市村座で演じた事がある。五右衛門の「葛籠背負つたがおかしいか」のセリフは、この狂言が初めのやうに思はれるが、實は「釜淵双級巴」から借用した形なのである。

小餠の瀬五郎 實ハ岩木東間之丞、眞柴久次（中山文七）不破伴作（嵐雛助）千石權平（藤川八藏）早川高景（中山文藏）小田彈正、置土の九郎次（山村友右衛門）三二五郎兵衛、世尊寺中納言、筒井熊太郎（中山文五郎）三上の百助、筒井順慶、家主太郎兵衛（嵐傳五郎）堅田の小雀（三枡松五郎）娘瀧川（芳澤いろは）お通姫、妾小蝶（榊山雛松）賓來屋おと

く、奕京雲（嵐若松）高景妹むらじ、娘早瀨（淺尾仙之助）娘早枝、奕浮舟（花桐富松）奕蓬、仲居おゆき（荻野仙治郎）淀町御前、五右衞門女房お律（澤村國太郎）三浦常陸之助、古田成部（山村儀右衞門）石山五右衞門、石田の局、千の利休（嵐小六）

右のやうな役割であつたが、總ざらひの日、石田の局の役で「熊野」を舞ひながら、小六が突然死去してしまつたので、舞臺では悴の雛助が五右衞門と石田の局、儀右衞門が利休を代役したのであるが、若い雛助の五右衞門が非常な出來で大當りを占め、來栞盛んに上演された。江戸では石田の局の件だけが輸入されてゐる。初めて演じたのは天保二年三月の中村座で、名題は「櫻貸砂白浪」といひ、いろ〳〵の變つた五右衞門狂言を集めて大入を取つたが、この時は三桝源之助の久次、中村芝鶴の早瀨、嵐珉子の瀧川中村歌六の淀町御前、中村芝翫の石田の局であつた。その後、七代目團十郎がこの役を得意とし、坂東彥三郎、九代目團十郎に傳はつて今に至つたものである。

高麗大和皇白浪

文化五年九月、江戸市村座初演の狂言で、作者は例の鶴屋南北である。同じ五右衞門でも、春の世界だとグッと花やかにするのであるが、秋狂言だけに全體が沸しく出來てゐる。五右衞門よりも、女房の瀧川の方が多く働らいてゐる程で、大詰で葛籠を瀧川に脊負はせたのも、女五右衞門を見せようといふ趣向なのである。名題に「高麗大和」と幸四郎半四郎の屋號を入れたほど、二人が中心の芝居であつた。興味のあるのは、是齋宅の筑紫の權六の件で、これは巧く書き直すと今でも上演の出來る材料である。併し、種は大坂の「けいせい宮傳授」といふ狂言から來てゐるらしい。

筑紫の權六 實ハ瀧川釆女（澤村源之助）是齋娘綾女 實ハ渓羅皇女（二世澤村田之助）筒井惡五郎圖景（松本小次郎）天狗武者官八（坂東鶴十郎）兵部妻濱町（芳澤いろは）三上佐渡助、是輪道慶、三二五郎兵衞（澤村四郎五郎）兵部娘數馬（岩井粂之助）小西是齋（市川宗三郎）佐竹左五郎（花井才三郎）早野彌藤次（市川門三郎）鈴木田隼人照光（七世市川團十郎）小猿の源五郎 實ハ岩木當馬之丞（尾上榮三郎）岩木兵部（尾上松助）奥女中瀧川 實ハ五右衞門女房おりつ（五世岩井半四郎）石川五右衞門（五世松本幸四郎）

この脚本を最初「大南北全集」へ收錄した時は、一番目四建目、大津追分の場の脚本の、最初が四五丁缺けてゐた

ので、其まゝに記載して置いたが、今度計らず完本を得たので、爰に全部を收容する事が出來た。

木下蔭狹間合戰（このしたかげはざまかつせん）

これは淨瑠璃で、寛政六年二月、大坂北堀江座の手摺にかゝつたのが初演。作者は若竹笛躬と並木千柳で、石川五右衞門を中心に、竹中半兵衞の一件を取交ぜた作爲である半兵衞を官兵衞として、その寨の場は今でも折々一幕物として上場されるが、五右衞門の件は更に流行つて、樓門と數を競ふ位である。本集に收錄したのは文政七年六月、河原崎座に上演した時の臺本で、この時の役割は左の通りであつた。

壬生村次左衞門（嵐冠十郎）早ケ崖の來作（淺尾友藏）侍女しがらみ（瀨川路之助）三上の百助、玉淵利金太（坂東善次）三好國長（市川染五郎）三好長慶（松本小次郎）足利義輝（嵐冠之助）來作娘おそま、綾の室（尾上菊次郎）蒲華與六、此下藤吉（澤村源之助）傾城芙蓉（五世瀨川菊之丞）石川五右衞門（五世松本幸四郎）

嘉永四年正月の中村座で、瀨川如皐が、この狂言の大結までを夢にし、「釜淵双級巴」をつけて二番目を作り、七條河原釜入の件までを見せたが、小團次の葛籠拔けの宙乘りと、釜入の凄慘さが當つて百余日の大入を占めた。扉の寫眞はその時の錦繪であるが、以來この行き方が流行り出して、「狹間合戰」だけを上演する事は滅多にない。

責任校訂
渥美清太郎

日本戯曲全集。第三卷
石川五右衛門狂言集。第廿八回配本

編纂者検印

昭和六年五月廿五日印刷
昭和六年五月廿八日發行
（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　木呂子斗鬼次
製本者　高崎幸三郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一
三七八八
振替東京一六一七

製版所　新倉東文堂

神田區松下町七番地　（明治印刷株式會社・印刷）

